けいおん！　放課後の仲間たち

流流雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！　放課後の仲間たち

【Ｎコード】
Ｎ５１６９Ｓ

【作者名】
流流雨

【あらすじ】
世界最高峰のベーシストの一人と謳われる黒人ベーシストがいる。そんな彼を大黒柱とする大音楽一家。スループ・ファミリーを業界で知らぬ者はいない。
そんなスループの一員として育った立花夏音は十七という年でプロ・ベーシストとして世界に名を馳せていた。ある日、同じくミュージシャンである両親が唐突に日本に住処を移すと言い出すと、それに着いて行くことになった夏音は人生初の日本の高校生活に胸を高鳴らせる。

だがしかし。

日本古来のヤンキーという生物に目をつけられた彼は、たちまちボロボロにされてしまう。不登校・引きこもりの道をエスカレーターで下がってしまった彼は一年のヒッキー期を乗り越え、比較的男子が少ない元女子高に入学することになった。

※Ａｒｃａｄｉａ、フォレスト共に連載している作品です。より多くの方に感想を頂きたく、こちらにも投稿いたしました。忌憚なき意見をお聞きしたいです。批評など、文章上の指摘などもいただければ幸いです。作者に遠慮はいらないです。

つまり、感想をいただけると嬉しいのです。

プロローグ（前書き）

本作品は二次小説です。原作至上主義の方や、二次創作自体に嫌悪感を抱く方は読まないことをおすすめします。

プロローグ

桜舞う季節。花冷えると言われるこの時期の清々しさ、それに騒がしさを密かに孕んだ朝の静寂な空気。

それらを胸いっぱいに吸い込んで歩く一人の少年がいた。

鮮やかな桜並木の通りの中、黙々と歩みを進める少年は、そんな世界の有り様など気にもかけていないかのように視線を下げている。

ひたすら俯きながら、足下の虫の一匹でさえも踏むまいかとしているかのように。

少年は美しかった。

日本の学校に用いられる制服と判る装いをしているが、この国では彼のような容姿の者が日本の制服を着ていると目立つ。現に彼とすれ違う中には「おや？」と首を傾げる者が大勢いた。

肩より伸びた光沢のある髪の色は漆黒が燃えているかのよう。形の良い腰からまっすぐに伸びる細い脚。すらりとモデルのようなスタイルで颯爽と歩く姿はその場の風景を一枚の絵画のように彩っている。

やがて少年はうつむいた顔をようやくあげる。

そこには西洋的な彫りの深い、端整な顔があった。肌は陶器のように白く、職人が磨き上げたような滑らかさが光る。すっとした鼻梁、ぱっちりとした二重まぶたの瞳はサファイヤの青。

花もあざむくばかりの美女――ではないところが彼を見た者の疑問の種だ。何故、このような少女が男物とはっきり分かる制服を着ているのか、と。

周りの怪訝な視線がどうだろうと、彼は男性である。

そのように彼を呆然と見つめる人々の中には、彼が着ている物とデザインが似通った制服を纏う少女たちが何人もいた。

その大方の者が一様に彼に視線を奪われて、陶然と洩らす息にか

すかに憧憬がまじる。

「……今の人、見た？」

「見た。外国の娘……だよね？」

そんな会話が端々でなされている事など知らず、いまだ彼は歩みを止めない。目的地へ向かうまでに彼が周りを気にかけるそぶりは一切見られない。

それからしばらく歩き、やがて彼は目的の場所へ辿り着いた。

「桜ヶ丘高等学校」

東京にごく近い、いわゆる郊外と呼ばれる地域に門戸を構える由緒正しき私立の高校である。真新しい制服を着た生徒たちが、チラホラと広く構えられた校門を通り抜けていく光景が目の前にある。

校門の前に佇む少年の顔はどこか憂いを帯びていた。さらりとこぼれる髪を一房さらい、これから足を踏み入れる校舎を見上げた。

そして少年の喉から外見にそぐう鈴を転がしたような佳音がこぼれる。

「ヤンキー……いないかなあ」

深い深い溜め息と共にぽつりと漏らした。

この少年の名は立花夏音。彼は人と少し異なる人生を送ってきた。

彼には才能がある。素晴らしい音楽を紡ぎ出す天賦の才。常人には持ち合わせない感性をもって、それを生業として生きる類の人間である。わずか五歳の時から現在十七歳に至るまでに、世界最高峰のベーシストの一人と言われる黒人ベーシスト、クリストファー・スループの音楽一家の一員として、プロの音楽家として世界に名高い功績を挙げている。

彼は一年前まで、確かな栄光を背負って輝かしいステージの中に生きていた。アメリカ全土にその名を轟かせただけでなく、世界にまで広く存在を刻んだはずだった。

そんな彼がどうしてこの場所に立っているのか。
原因はあまりにも多く、深い。
どこを原因と呼べばよいのか。どこからが始まりであるかは実に定めがたい問題であったのだが……あえてここで言うとすれば一つ。
ヤンキーであった。

夏音の父親は、世界をまたにかけるプロのドラマーである。その昔、渡米したばかりの彼はアメリカ人の母と電撃婚を決め、夏音が生まれてからはずっとアメリカを拠点に活動してきた。
しかし、ある日を境に彼の故郷である日本に帰りたいと言い出したのである。突如たる心変わりに当然のごとく周囲は揺れ動く。
結果として、既にプロとして経験が長かった夏音も、とあるメーカーとの契約更新に待ったをかけることになった。
これは決して転勤の多いお父さんに迷惑を強いられてきた子供の物語……などではない。

ある日、父は気軽な態度で息子に問う。
「夏音……日本、行かなーい？」
息子、答える。
「いーよー」
という具合に、周囲のパニックも何のその。一家そろって放たれた矢のごとくアメリカを飛び出してきたのだ。

見た目はまるっきり白人の夏音であるが、日本とアメリカのダブル。両親、特に父親の教育方針によりしっかりとした日本語を身に付けていたおかげで会話に苦労することはなかった。これといった問題もなく日本の高校に転入することができたのである。
未だ経験したことのなかった日本の高校生活がいかなるものか。

胸をドキドキいざ踏み出そうとしていた矢先のこと。
手を抜いて、投げやりな基準で選んだ転入先の学校は、地元では有名な不良校。
時代錯誤も甚だしい古今東西のヤンキーの巣窟であった。
とはいえ。いつの時代も女子というのはミーハー根性上等の生き物である。お人形のような容姿の転校生は瞬く間に女生徒から人気が出る。
ちやほやされて悪い気分がするはずもない。ビスクドールのような容姿の少年からぺらぺら飛び出てくる日本語に少女達は大いに喜んだりした。夏音はこれですんなり日本の学生生活に溶け込めたと意気揚々としていたのだが。
そこにヤンキー。
不幸なことにヤンキー集団の頭に目をつけられてしまった。その頭がゾッコン夢中だった女子生徒が夏音を可愛がるようになったからだ。もちろん、彼女も男女間の感情を持っていた訳ではない。それは女の子がお気に入りの人形やペットを愛でるような感情だったのだが、そんな事は関係なかった。
頭の勘に障った。その時点で、夏音はアウトだった。
短い期間で、夏音は地獄を見るハメに。
日本では古よりヤンキーと呼ばれるギャングがいるという噂が本当だったのだと痛感した夏音は、入学して一ヶ月も経たないうちに登校拒否を決め込んだ。
こうして眉目秀麗なダブルの少年は、日本で生活を始めた早々にひきこもり生活を余儀なくされるのであった。

ひきこもりの上に、どこをどう間違えたのか。彼は日本のサブカルチャーに広く深く触れてしまい、世間でｏ．ｔ．ｋと呼ばれる人種へと昇華してしまった。
基本的に放任主義で楽天的な立花夫妻も、さすがに一転してプロのミュージシャンから、不登校オタクへと変化した息子を放置して

おくのはまずいかもしれない、と考えた。
ちなみに、この夫妻がその考えに至るまでに一年の時間を要した。

説得には夏音の母であるアルヴィが行った。
「夏音ちゃーん。ちょっといいかしら～？」
「何だい、母さん？」
「あなたもそろそろ学校生活を再開してみる気はないの？」
「……母さん」
「ママ、夏音に何があったかはわかるわ。でもねずっとこのままの状態も良くないと思うの。だから別の高校に行ってはどうかしらって思うの」
「……俺もそろそろかなと思っていたんだ。日本は素晴らしい。俺だってやれるに違いないんだ。とら〇らとか、ハ〇ヒとか、らき〇すたみたいな高校生活を送れるはずなんだ。リア充ってやつになれる可能性は俺にもあるんだよね！？」
「もうあなたが話してる事が理解できないけど、そんなことはいいの……わかってくれたのね夏音！！！」
「イェー、マム！！」
母と子は、かたく抱き締めあった。
思えば、親子がこうして抱き合うのも久しぶりのことであった。
少し放っておいた内に我が子の脳内に巣くい始めた新たな知識など母は知るはずもなかった。
一年という歳月により、さらに日本のサブカルチャーによって頭が毒されてしまった夏音少年であったが、こうして心機一転して十七歳という年齢で高校一年生をやり直すことになったのである。

夏音は数分間のうちに、ここに至るまでの回想を終えた。
今日、ここ私立・桜ヶ丘高等学校では入学式が行われる。

「女の子ばかり……どうやら、本当にヤンキーはいないんだね」

このことは、まさに話に聞いていた通りで夏音は胸を撫で下ろした。

母の話では、去年までこの高校は女子校だったらしいのだが、昨今の生徒数の減少。古い木造の校舎にかかる補修費等の問題で、今年度から共学に変わったのだそうだ。

その際には、学校側によってあらゆる水面下での活動努力があったらしいがその甲斐むなしく、目標数の男子生徒の入学は得られなかったらしい。

そのような事情のもと、上の二学年はまだ女子生徒しかいないし、男子生徒は少ないという両親が見つけた最高の学校の環境は、トラウマを抱える夏音でも安心なものとなっていた。

再度、周りを見渡しても男子生徒の姿は確認できない。

「いける……今度こそ、俺はリア充になれるんだ」

この“リア充”という単語は、彼がこの一年で覚えた日本語の一つである。

「今度こそ」と言っているが、一年前の彼は純粋に日本の高校生活を楽しもうという希みを抱いていた一般人の思考を持っていた。日本の文化、恐ろしや。

「それにしても、早く来すぎちゃったかな」

校舎の側面に付いている時計の時刻を見て、苦笑した。

かといって、することもない。

入学のしおりには、入学式当日で新入生はまず教室で待機ということだ。教室へ向かおう、と決めた夏音は自分の所属クラスを確認して上履きに履き替えて教室に向かった。

夏音は静かに開けた教室のドアをくぐってそろりと教室に足を踏

み入れた。
一人きりの教室。
窓明かりに浮かぶ教室。
整頓された机。微かに埃っぽさ。
夏音には、それがとても新鮮に感じられた。
これが日本の学校、教室。

早朝のこの独特な雰囲気はなんだろうか。何か、味わったことのない感覚に胸がきゅっとなる。
（以前はゆっくり味わう暇なんかなかったしな……ううっ）
思わず夏音の頭に暗黒の歴史が思い浮かび、ブルリと寒気が走った。
すぐに頭をふってそれを打ち消す。足を進めて大きく教室を横切り、窓際に近付いてみた。窓から見下ろすと、チラホラと登校する女子生徒たちの姿。
夏音は窓を開けて、窓際に腰をかけてその光景を眺めた。
爽やかな風がふわりと入り込んできて、頬がゆるむ。
あの人たちの中に、自分と仲良くしてくれる人がいるかもしれない。
はたまた、この中の誰がいつフラグとやらを立ててくるのか……
……夏音はぶるりと武者ぶるいをした。

日本人形のように長い髪を揺らしながら、一人の女子生徒が歩いていた。
少女はこつこつと音を鳴らしながら、真新しいローファーでアスファルトを踏み歩く。
少女の胸には、期待と緊張を胸の中で跳ね回っていた。目の前には、入試の時以来の校門。

すぅ。深呼吸。深く息を吸ってから桜高の校門をくぐった。いつも一緒にいたはずの幼なじみが今日という大事な日に寝坊をかましたので、一人のみの登校となる。

（私もいよいよ高校生……高校生……コーコーセーコワイ……いや、でも何か大事なものを見つけたいな。見つけられるかな……その前に人見知りな私に新しい友達とかできるのかな？）

校舎までの道をそわそわと歩きながら複雑な表情をしたり、はたまた笑みを浮かべたりと忙しない彼女であったが、ふと、どこからか視線を感じた。

顔をあげると、二階の教室からこちらを見つめてくる人物がいた。

少女は自分の足が止まっていることにしばし気付かなかった。

（綺麗な人……）

一も二もなく心の中でそう漏らした。実際には、小さく吐息が漏れた。

二階のどこかの教室の窓からこちらを見下ろす人。

風に梳かせている髪は遠目にもさらさらとツヤのある絹のようなさわり心地を想起させる。職人が丹精込めて造り上げた人形にそのまま生命が宿ってしまったようであった。

今までの人生でお目にかかったことのないくらいの美人。

（瞳の色が……青、なのかな？）

少女は気付かずにその人のことをまじまじと見つめ返してしていた。

それからすぐに自分を取り戻す。

（け、けど何でこんなに見られてるんだーー！？）

視線そのものが熱を帯びているようだ。彼の瞳に入る光を全て反射してくるような質量が確かにあった。

目力に押される、ということは今までもあったが少女は桁違いの圧力にすっかり立ち竦んでしまった。

一方、夏音は自分の視線の先にいる黒髪の長い少女を見つめながら感激していた。

「すげー。ジャパニーズ人形みたいだね」

今まで固まっていた少女は顔を真っ赤にして、つんのめるようにして校舎に入っていった。

日本の学校の独特のベルが鳴り響く。

日本における夏音の人生二度目の入学式が終わり、下校の時刻となった。

慣れない行事を終え、どっと疲労が襲ってきた。凝り固まった肩をほぐしながら校舎の玄関を出たところ、やけに活気がある声が行く先を阻んでいた。

見ると校舎から門までの空間に人がひしめき合っていた。

桜高では毎年恒例の、部活勧誘の光景だ。一斉にビラを配る彼女たちの熱気が新入生を圧倒している。

「茶道部に興味はありませんか～？」

「柔道部ーー」

「見学やってまーす」

「そこのあなた、演劇に興味は！？」

あちこちで勧誘を呼びかける大声がひしと飛び交っている。

「部活……部活か」

夏音は部活には入ったことがない。変わった部活に入ってみるのも一興かもしれない。そう考えたところで、彼には録画していた深

夜アニメの事を思い出した。
「いけない。忘れていた」
上級生たちによる下級生めがけての押すな押すなの勧誘の中をきびきび走り抜けた夏音はさっさと帰路についた。
通学路を歩いていると、早くも新入生同士で帰っている生徒がちらほら。
自分に一緒に帰ろうと話しかけてくれる人はいなかった。
「あの外国人キャラで通してもいいのかな。掴みとしては最高だと思ったんだけどなー。そういう作品だと大抵……うーん、おかしいなあ」

夏音に日本人形のようだ、と内心で評されていた少女――秋山澪は学校からの帰り道を幼なじみと共にぼーっと歩いていた。部活勧誘を迂回して通り抜け、両親と写真などを撮ったりしていたらどっと疲れてしまったらしい。
ふと、疲労の原因が思い当たった。
今朝、窓際から目があった美女――これが驚くことに男であった――と同じクラスになったのである。
脱兎のごとく校舎に飛び込んだ彼女は、息を整えながら自分の教室へ向かっていた。
教室へ近づくほどに、もしかして先ほどの美人さんがいた教室に近づいているのではないか。あげく同じクラスではないだろうかという考えがわき起こってくる。
具体的に何かしでかした訳ではないが、何だか恥ずかしいところを見られてしまったような気がしたのだ。顔を合わせるのが恥ずかしいくらいには。
歩いているうちにそんな妄想が止まらず、心臓がどきどきと鼓動を増してくる。

いざ教室の扉を開けると、数人の女子生徒たちが離れて机に座っていただけで、その姿は見当たらなかった。
（もしかして、隣の教室だったのかな）
まだ校舎の地理や位置関係を把握していないだけに、勘違いをしていたのかもしれない。
（な、何を焦ってたんだろうな）
ガッカリしたような、ほっとしたような心持だった。何となく、映画の中でしかお目にかかれないような美少女と知り合いになる未来が頭をよぎったのだった。あんな美貌の主と一緒にいれば、何か絵になる青春が送れるかもしれない。
その前に人見知りの自分がお近づきになれる日は遠いのだろうけど。
と思っていたのも束の間。
初めて顔を見る担任が時間より早く教室に入ってきたところで、生徒もほとんど揃っていた。
その頃、社交性のある生徒などは初対面であるにも関わらず、すぐにも後ろや隣にいる生徒とおしゃべりを始めていた。
ざわざわと騒がしい中で、澪も小学校のころから一緒の親友・田井中律との他愛もない話に興じていた。
ふと律が教室の入り口の方に顔をやってから、興奮して澪の肩を叩いてくる。
「なあ！　今入って来たヤツ見たか澪ー？　外人だよ外人！」
呼吸が止まりそうになった。
「うわーあの顔で男なのか……ほんとにいるんだなーああいう人」
「あ、あ、あああああの人……！！」
今朝の美人、来襲。
実際に襲ってきた訳ではないが、その人物の登場はよほどの衝撃を澪にもたらした。
「ん、なに知り合い？」
澪の過剰な反応を見た律は、澪のくせにめずらしーなとがっつし

興味を惹かれたように目を丸くする。
「い、いや！　外国の方かなぁーと」
「本当の外人がこの学校に入学するわけねーだろ」
「そ、それもそうか。ダブルなのかな」
「むぅー？　そんな気になって……も・し・か・し・て？」
「違う！　バカ律！！」
決してそんなつもりではない。澪は全力で否定したつもりだが、そんな態度が逆効果になって。
「ムキになるところがあーやしーなー」
額に青筋を浮かべた澪は、すみやかにその口を黙らせた。
こんなやり取りも、この目の前の幼馴染とは慣れたものだ。不本意ながら、彼への意識はそんなやり取りに埋もれてしまった。

入学式を終えてＨＲの時――。

どの時代、どこの学校でも必ずといってあるお決まりの自己紹介の時間があった。
１・名前
２・出身
３・趣味
などをその場で立って発表するというものだ。
澪は自分の自己紹介を終え、他のクラスメートが順繰り自己紹介をするのを緊張して聞いていた。彼の番が近づいてきた。
「カノン・タチバナ、デス。アー……アッメリカからやってキマスタ。ヨロシクオネガイシュマ……あっ……ス」
（片言！！？）
（外国人……）
（やっぱり帰国子女とかかな！）
（きれい……）

その容貌から目立ちまくっていた彼が喋り終えると教室中の人間がいっせいにどよめいた。

澪も例に洩れず、唖然としてしまった。

そんな生徒たちの反応を見て、担任がすかさずフォローをいれた。

「あぁー、立花君はいわゆる帰国子女ってやつだ……が、こんなに日本語できなかったっけな……まあ、日本についてまだ不自由な点が多いだろう。みんなで助けてやってくれ」

それで皆も納得したようで、その場の空気は流れかけようとしていた。

彼が自己紹介を終えて、座ろうとしたところで担任が彼に声をかけた。

「あ、趣味を言うのを忘れとるぞ。あー……テル・アス・ユア趣味～……しゅみ……あっホッビー！」

担任のぼろぼろの英語に反応した彼は、「ｈｏｂｂｙ？」と呟いてしばらく考えた後。

「Ｍｕｓｉｃ，ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

と言って座ってしまった。その後、まばらな拍手。

最後の一言に澪はどうしようもなく反応してしまった。

趣味が音楽、ということは楽器をやっているともとれるし、聴く方専門ともとれる。

どちらにしろ、アメリカで育った彼の音楽の嗜好はどんなものなのか。

いつか、そんな話ができるかなと澪は思った。

「立花夏音……か」

「澪～？　ちゃんと聞いてんのかー？」

「あ、あー聞いてるよ。苗字にゲイって入っている外人の悲愴な人生についてだろ？」

「ちげーよ！！　それ、さっき話したやつ！」

第一話

夏音は自分がアメリカの土を最後に踏んだのはいつだったかと思い返す。彼が日本にやって来てから既に一年以上が経つ。随分と遠い国に来たものである。人生の九割以上を過ごした場所から遙か遠くに位置する小さな島国。些細な事からその生活に不安を感じることもある。

習慣、文化間のギャップ。人によっては異国間の些細な違いが時には多大なストレスになることもあるという。

しかし、彼にとっては些末ごとに過ぎない。そんなことはどうでもいいのだ。

彼が日本で暮らす中で悩ましい事と言えば、今でもこちらの時差を考えずに電話を入れてくるエージェントに他ならない。

あまりにしつこいので辟易としてしまい、電話がかかる度にぺらぺらと言葉をまくしたてて、煙に巻かなくてはならない。口ばかりが上手くなってどうするのだろうか。

さらに新生活とか節目の時期には多くの変化が巻き起こる。夏音が私立・桜ケ丘高等学校に入学してから一週間と数日が経ったところである問題が発生した。

まず、両親が出て行った。

別に家庭崩壊という危ういキーワードはここでは出てこないので安心して欲しい。

ある日、珍しく全員がそろった夕食の席での事だ。

「夏音も日本にはだいぶ慣れたよなー。ということで、またちょくちょくいなくなるから」
から揚げを頬張っていた夏音の父、譲二がふと真剣な表情で箸を置いてそう切り出すと、母のアルヴィがにこやかにこう添えた。
「うふふーママもパパについていくのよー」
夫大好き人間の彼女のことだ。
「そりゃ、そうだろうね。俺は心配ないからどーぞいってらっしゃい」
夏音は別に両親がいつ出て行こうが大して慌てる必要もないので、冷静に切り返した。そもそも、日本に来て家族で一緒に過ごした時間も多いとは言えない。もともと仕事の関係上、一般の家庭比べて家族団らんの時間は限られる。わざわざ今さら断るような話でもない。
家族の暗黙の了解なので、二人にとってもこれはただの報告でしかないのだ。
夏音に流れる血の本家大本の両親が音楽無しに生きていけるはずがない。自分にも言えることだが、彼らの場合は次元が違う。
彼らは仕事としてではない、いわば趣味の域などでおさまるような類の人間ではない。趣味の範囲で出会えるような人々では満足たり得ないのだ。
やはりあのステージに。限られた者がのぼることのできるあのステージにいなくてはならない。
だから、ここで彼らを引き留めるという行為ほど無駄なことはないのだ。
加えるなら夏音はいつでも一人暮らしを開始できておつりがくる程度の家事を叩き込まれているので、衣食住にいたっての心配も皆無だった。
それでも唯一の気がかりといえば。
「じゃあさ。あのドラムとか持っていったりするかな？」
「いーや、あれはお前が好きに使っていいよ」

なら、問題はなかった。夏音は家族共有のスタジオに設置されてあるドラムセットがお気に入りだった。

翌朝、夫婦は文字通り飛び立っていった。

「アディオス、息子よ！」

「元気でねー！　電話するからねー」

よく晴れた爽やかな早朝に、いつもエネルギー全開の両親の声が閑静な住宅街に響いた。

寝巻き姿で、寝ぼけ眼のままそれを見送る夏音。

「アーーチュ！！」

くしゃみをしても一人。

何より問題は二つ目だ。友達ができない。

夏音は人間、第一印象が大事なのだということを誰よりも深く肝に銘じていたはずだった。過去の痛い経験も新しい未来へ進むための定石となれば良い。

頑張って、友達をつくるぞ。

そんな決意を新たに踏み入れた高校生活アゲイン。

入学式の自己紹介を終えて以降、日本語があまり話せない帰国子女という位置に落ち着いてしまった夏音は、クラスでも浮いた存在になってしまった。孤立ともいう。

「俺って奴は……また、やっちゃったのか」

クラスメートはこちらが挨拶をすれば、しっかり同じように返してくれる。最初の方は好奇心もあってか、数人で夏音を取り囲むこともあった。

しかし、夏音がしょっちゅう言葉に詰まったり、すぐ英語で問い返したりするようになると、相手はきまって「あわわわわ……」と

狼狽えてから、おぼつかない英語で「パードン」か「ソーリー」ばかりだ。すごくバツの悪そうな表情で言うものだから、夏音の方こそ罪悪感マックスである。

しかし、夏音には何よりも不可思議な点がある。会話する時、じーっと相手の目を見詰めると大抵の相手は顔をそらす。夏音は皆が何で自分と目を合わせてくれないのか不思議だった。

前の学校でも。道行く人でさえも。会話する相手に対して失礼な話である。

もちろん中には非常に気立てがよく、いわゆるノリがよい者もいてむちゃくちゃな英単語の羅列を駆使して会話を成り立たせてくれる者もいた。

加えて大方の教師陣は授業中に夏音を指名するのを避けているようなのだ。「あ、その問題わかるぞ」と夏音の瞳がきらりと光ると、存在を無視される。揃いも揃ってそれが暗黙の了解のように。

それだけなら、まだいい。

そんな孤立した学校生活のなかでも、際立ってランチタイムが厳しい。

日本の生徒は、与えられた自分たちの教室内で机をくっつけ合い、グループを形成して弁当を食べる習慣があるようだ。

もちろん夏音はその輪の中に入ることができず、かといってぽつんと教室の隅で一人さびしく弁当をつっつくしかない。はっと思い立ち、アニメなどで必ず出てくる憧れの屋上はどうだと向かうと、施錠されており立入禁止であった。屋上は孤立した生徒の味方ではなかったと現実を知った。

そんな馬鹿な。こんなの予想外である。自分は何一つ悪い事はしていないはずなのに。

「友達作る才能がないのかな……」

その前に根本的な部分に気付くべきなのだが、彼がそこに気付くことはなかった。

人はそれを悪目立ちという。

アニメや漫画のようにはいかない現実の難しさを身に染みて痛感した夏音であった。

そんな中、夏音は周りの生徒たちの多くが部活動という単語を話題に出しているのを耳に挟んだ。そういえば、と思い出す。

スポ根ものに代表されるように、日本の学生生活では部活動が割と重要な部分を占めるらしい。どこの学校も強制ではないが、生徒に何らかの部活をやることを勧めており、学校によっては強制的に部活に入らなければならない所もあるそうだ。

「ねえ、姫ちゃんどの部活はいったー？」

「一応ソフト部に仮入部した」

「えーマッジー？　きつそー！」

などという会話が端々で発生している。夏音は耳をダンボにしてそれらの会話をとらえた。

部活動。そこでは、クラスとは別の集団が形成されている。

つまり、また一から自分を出していける機会がそこにはあるということだ。

「部活か……。やっぱり入ってみようかな」

そういえば、夏音は入学式に大量に配られたプリントの中に小冊子になって文科系、体育会系の全部活動の紹介が載ってあるものがあったのを思い出した。そして、いらないプリントと一緒に燃えるごみの日に出してしまったことも。

「ちゃんと確認しないで捨てちゃったからな。職員室にいけば、くれないかな」

善は急げという。夏音は職員室に出向くことにした。決して狭くはないが、全教員が一つの部屋に詰まっているという職員室。くさい。コーヒーの匂いが充満している室内に入ってクラスの担任の姿を探す。

夏音がきょろきょろしていると、メガネをかけた女性の教師が話

しかけてきた。
「あら、誰かに用事かしら？」
こちらを警戒させない柔らかい笑みを向けられ、夏音はこの人でも良いかと用件を話した。
「部活紹介の冊子が欲しくて」
「なくしちゃったの？」
「……捨てちゃいました。あ、きちんと資源ゴミですよ」
決まりが悪そうに言うと、その女性はくすりと笑ってすぐにプリントを探してくれた。
「よかったわー余っていたみたい。はい、これでいい？」
「あ、それです。ありがとうございます。あ～、Ｍｓ．名前は？」
「山中さわ子よ。主に音楽を教えているの。ちなみに吹奏楽部の顧問をやっているから、興味があったら見学に来てちょうだいね？」
「ええ、ぜひ」
夏音は笑顔で冊子を受け取ると、さわ子が「あら？」と夏音の手をじっと見て口を開いた。
「もしかして、あなた楽器とかやってる？」
「はい？　やっていますよ。わかりますか？」
「まあ、手を見ればねぇ……ハッキリしてるしあなたの場合。ね、ひょっとしてベースとか？」
夏音は面食らった。手を見ただけで、楽器まで見抜かれてしまうとは。確かに分かる人にはその人の手を見ただけで察してしまう人もいるかもしれない。
「ご名答です。山中先生も何か楽器を？」
「え、ええまあ。それじゃ、私は仕事があるから」
「お時間とらせました。失礼します」
やけに焦った様子の彼女を不思議に思いながら職員室を出ようとした時、ちょうど職員室に入ってきた生徒が目に入った。同じクラスの女子である。
夏音は思わぬところで遭遇したことに目を丸くした。向こうも同

じように目を丸くして瞬かせた。
双方が黙ったまま、しばらく見つめ合う。
「ハイ」
夏音はとりあえず挨拶した。
「ハ、ハイーーッ!!?」
「オイ澪、テンパりすぎだ」
髪が長い方の泡を食ったような反応に片方がつっこむ。夏音は面白い人たちだ、と笑みを零しそうになった。
「失礼」
夏音はどうせ会話もないだろうとそのまま二人の間を横切って職員室を後にした。

「あのハーフくん。何の用だったんだろうなー」
「さあな……あ、律。今はダブルって言った方がいいんだぞ」
「ふーん」
少女達はまだ話したこともないクラスメートの後ろ姿を目で追っていたが、彼が扉の向こうに姿を消すと本来の用事を済ますことにした。

「え……廃部……した?」
カチューシャをつけた利発そうな少女――田井中律はたった今告げられた事実に愕然とした。
「正確には、廃部寸前ね。昨年度までいた部員はみんな卒業しちゃって。今月中に五人入部しないと廃部になっちゃうの」
おっとりとした雰囲気を崩さず、さわ子は気の毒そうに言った。
「だから誰もいなかったんだ、音楽室～」
ひどく落胆した様子の律の悲痛な声が地面に落ちる。さわ子は彼女にかけるべき言葉を口に出しかけたところで、自分を呼びにきた生徒に気付いて時計を見た。

「ごめんね。次、音楽の授業あるから……」
そう言って席をたつと、最後に思い出したように二人の方を振り返った。
「そういえばさっき話していた綺麗な子、知り合いかしら？」
「え。あのダブルの人ですか？」
先ほどから興味なさそうに後ろで立っていた長髪の生徒――秋山澪――が咄嗟に反応した。
「そう。彼、楽器をやってるみたいよ。校内で見かけたら誘ってみればいいんじゃないかしら。それじゃあ頑張ってね、軽音部！」
残された二人は思わず顔を見合わせた。

職員室を出た後、興奮した口調で律が澪の肩を揺する。
「あの人も楽器やってるんだってさー。何の楽器やってるんだろうな」
「でも、数にいれても二人足りないだろ……よし、やっぱり廃部ならしかたないな。私は文芸部に入ると――」
澪がほっと胸を撫で下ろした様子で親友を置いていこうとした瞬間、律が澪の首に強引に手をかけた。
「な、なあ澪。いま部員が一人もいないってことは、私が部長……？　澪は副部長かなー？」
澪は「悪くないわねーふふ」などと調子に乗っている友人に悪い予感がした。大抵、こういう目をした彼女の側にいると良い結果にならない。主に自分が。
「だ、だから私はまだ入ると言っていないぞ！」
そして、えいやと律の手を外して逃げた。

その日、授業がすべて終わってからすぐに帰宅した夏音は、自宅の居間のソファでくつろぎながら受け取った小冊子のページをめくっていた。

どうやら文科系、体育会系と様々な部活動、同好会が桜高にはあるようだ。
漫画研究会、オカルト研究会、ミステリー研究会。
茶道部、華道部。
テニス部、ソフトボール部。
合唱部、アコースティック同好会、ジャズ研究会、軽音部……。
「ん……けいおんぶ…？　なんだろこれ」

軽い音楽……。

「ｌｉｇｈｔ　ｍｕｓｉｃのことか？」
中でも、引っかかった見慣れない言葉。
ジャズ研と分けられているくらいだ。ロックテイストなバンドをやるなら、ここなのだろうか。
「バンドか」
夏音はまったく同年代の子供たちとバンドをやるのはどうなのだろうと想像をめぐらした。学校の友達同士で気軽に楽しく音楽に興じるのも面白いかもしれない。少し惹かれた。
けれど、少しばかり罪悪感が生まれる。色々なものを振り切ってプロとしての活動を自粛している自分が暢気に軽音部に所属してもよいのだろうか。
俺は何をやっているのだと、向こうで共に育った友人に怒られないだろうか。これでベースの腕がなまった等とブチギレられると目も当てられない。
夏音はいかなる状況にあってもベースを弾かなかった日はない。ひきこもり最中も。むしろテクニックには磨きがかかったくらいだからその心配はないと思うが。
万が一メディアに露出してしまった時の事を考えると、尻込みしてしまう悩みである。
「でも、気になる」

ぱたりと小冊子を閉じる。
「週があけたら見学にでも行ってみるかな」

そのころ、軽音部。
軽音部を復活させようと活動していた二人は新たな仲間を獲得していた。合唱部に入ろうとふらっと音楽室へ迷い込んだ琴吹紬をくわえ込む事に成功したのだ。
「あと二人集めれば……いよーーし、やったるぞーー！！」
「律……でも、あと二週間で集まるかな」
「この際、楽器経験者でなくてもよいのでは？　ボーカル、という形でもいいですし」
「まー、とりあえず部員はそろってないけど部としての活動はやってもいいよな！」
久々にまともな発言をした友人に、澪もうなずいた。
「そうだな！　そうとなると、月曜日までに機材を持ってこようか」
にこにこと会話を聞いていた琴吹紬――通称ムギ――が疑問を呈した。
「あ、でも二人ともそんな重いもの学校まで運んでこれる？」
「あー……台車とかに積めば……でも学校まではきついかー」
「あ、私もアンプも持ってくるとなれば少しな……」
「あの～。もしよろしかったら明日、私の家の方で車を出しましょうか？」
「い、いいのですか紬さま!?」
翌日、それぞれの自宅に迎えにきた長い長い車を見た二人があおざめたことは別の話。

夏音は少し憂鬱気味であった。

週があけた。相も変わらず仲の良い友達はできない。

「立花君、あーー……この問題、解けるかなー？　いや、解けるよな、うん。じゃぁ、田井中ーこの問題解いてみろー」

代わりに、夏音の横にいる女子生徒が当てられた。

（かわいそうに、田井中さんとやら）

授業中は大抵このような流れがパターン化してきた。

夏音がまともに当てられるのは、英文朗読ぐらいである。

ちなみに、今の授業は数学である。

数学なんてものに言葉の壁はないだろうにと夏音はさすがに呆れたが、ままならないようだ。この教師はそのへんのことも考慮してくれないらしい。

「えーー！？　何で私が？！」

そう言って、理不尽に当てられた彼女が夏音をにらむ。

（違う……田井中さんや。俺のせいじゃない。にらまれても困る）

恨みがこもった眼差しはかなり居心地が悪く、夏音はすっくと立ち上がる。そのままクラスが見守る中、黒板に書かれた問題をすらすら解き、そのまま黙って席に戻った。

「せ、正解だ……正解だぞ立花！！！」

数学教師は丁寧に拍手までつけてきた。

（俺は、猿か何かとでも思われてんのかな）

憮然とした顔で席に戻った夏音は自分を睨んでいた律の様子を窺った。彼女は少し意外そうな顔で夏音を見つめてきた。　夏音は名前を知ったばかりの彼女にふっ、と微笑む。

（しゃーねー教師だよね。だからおねがいゆるして）

という意だったのだが、彼女の頬にかっと朱が挿したかと思うと、むっとした表情をつくられ、ぷいっと顔をそらされた。

（な、何で！？　何ソレ！　日本人わかんない！）

夏音には、いったいぜんたいどうして彼女が気を悪くしたのか理解不能であった。

そこには、きっと誤解があるはずだ。後で聞いてみようと夏音は思った。

「はい、次この問題解いてみろー田井中ー」

「って結局当たるのかよっ！？」

彼女の解答は不正解だった。

夏音は肩を落として廊下を歩いていた。

結局、その後も田井中という少女に話しかけるタイミングはなかった。近寄ると肉食動物のような鋭い威嚇の目線を浴びせられるので、話しかけることはおろか近づくこともできなかった。

「またあんな流れになっちゃうのかな……」

悪い予感しかしない。

それでも気を取り直して放課後は気になった部活を訪ねてみたりしたのだが、どうもピンとくるものがなかった。話が合うかもと訪れたジャズ研究会も今日は活動を行っていないという始末。

夏音は残された一つ。軽音部の部室へと足を向けていた。

軽音部の活動の場は音楽室横の準備室らしい。校舎の最上階にあるらしく、一番階段を上らなくてはならない移動教室の一つだ。夏音は階段の手すりにある亀やウサギのレリーフを撫でながら、こつこつと階段を上っていた。

「おや？」

階段の途中で、音が聞こえた。

誰かが演奏している。

夏音は急いで階段をのぼりきり、扉の向こうから聞こえてくる音楽に耳を傾けてみた。

どこかで聞き覚えのある旋律。キーボードのぎこちないメロディラインとちぐはぐに絡み合ったベースとドラム。

「……硬い」

全てが。でも、悪くはない。胸の奥をくすぐられているような気持ちになる。夏音が目を閉じて聞き入っていると、音が止んだ。演奏が終わったのを見計らって、扉を開けた。

「失礼しまーす」

すると突然入ってきた夏音に視線が集まる。

「あーーー！！　お前は！　うちのクラスのたかびー外人！」

そこに待ち構えていた人物に、夏音は息をのんだ。

先程まで夏音の悩みの種そのものであった田井中がそこにいたのである。

見るとドラムセットの椅子の上坐していた。今の怪しさ抜群のドラムは彼女が叩いていたようだ。

「が、外人じゃないです！　偉くしたつもりもないです」

涙がこぼれそうになった。夏音は彼女が今も敵意の視線でこちらを睨んでいるように思えた。しかし、実際には戸惑いや驚きの入り交じった表情を浮かべて夏音をしげしげと見ていた。

「おい、律！　いきなりそれは失礼だろ！」

ベースを肩から提げた少女がいさめる。夏音は黒い長髪に切りそろえた前髪を揺らしている方にも見覚えがあった。

（お、この子は日本人形の子だ……）

レフティのフェンダージャズベースを構えているその子は、クラスメートでもあり、入学式の時に窓から顔を出していた夏音と目が合った瞬間、とても機敏な動きで校舎に消えていった子であった。

改めてよく見ると、少し釣り目気味だが整った顔はなかなか美少女というに足るルックスではないか。

「だってだってーこいつのせいで私がーっ。しかもこんなんで男だってっ！　女の敵っ！　エネミーオブアメリカなんだよ！」

「何でアメリカの敵だよ」

ぎゃーぎゃーと騒ぎ出した二人の横から、そろりと近づいてきた少女がいた。

「あの～。見学の方でしょうか？」
続けてキーボードの前に立った柔和な雰囲気を持った少女が夏音に話しかけてくる。夏音は彼女の外見を見て、目を瞠った。自分に似た色素の瞳、薄い髪の毛。どこか親近感が湧くような容姿をしているではないか。
「ハイ……あー、ここは軽音部で合ってますか？」
「おい、ムギ！　こいつあんまり言葉が……」
夏音は「はぁ……」と溜め息を漏らした。
ばりばり日本語を喋っていることに気が付かないのだろうか。外人キャラという先入観は人の認識まで障害してしまうのか。夏音の目が虚ろになりかけたところで、田井中が咳払いをこぼす。
「多少いざこざはあった奴ではあるが、入部希望者かもしれない、と。とりあえず……」
三人は顔を見合わせた。
「う、ウェルカム！！！　ティーオアコーヒー？」
「……は？」
（お茶かコーヒー？）
「とにかく、見学に来たんだよな！？　ムギ、お茶の準備だ！」
「は、はいっ！」

いきなり、お茶を振舞われてしまった。

夏音はお茶でよかったと胸を撫で下ろす。とりあえず、彼はコーヒーは苦くて嫌いだった。

『じーーーー』
そんな擬音が目に見えそうなくらい凝視されていた。変な汗をかいた。顔に穴があくのではないか。
彼の目の前には高級そうな白磁のティーカップ、その中になみな

みと紅茶が注がれていた。
とりあえず、彼は出されたケーキに目をやる。自然とフォークを持つ手がぷるぷる震えてしまう。
異性に一挙動を注目されながら食べるケーキ、初めて。
何とかしてケーキを口に運んだところ。
「ｗｏｗ・・・・・Ｉ　ｌｏｖｅ　ｉｔ！！」
あまりの美味しさに素で驚いてしまった。小指をたてないように気を配り、紅茶の方も一口する。これが、渋みが強くて見事にケーキに合うのであった。
「オイシイ……デス」
夏音がそう呟くと、お茶を淹れてくれた柔らかい雰囲気の少女が目を細めた。
しかし、視線をずらすと田井中は夏音をじっと瞬ぎもせずに眺めている。夏音の胃に穴があくまで見詰める作戦だろうかと夏音の背中をつぃ、と冷や汗が伝った。
「あの、さ……立花さん！」
そんな空気の中、長髪の少女が夏音の名を呼ぶ。
「立花さんは何か楽器とか……あの、その……ご、ごめんなさーーーーい！！」
そのままテーブルを割らん勢いで頭を下げた。

（あ、謝られた！！？）
何もしていないのに謝られた。
流石に、もうこれ以上は無理だろうと夏音は思った。
腹を括った。
「夏音でいいですよ……日本語は支障ない程度には話せますから、そんなに緊張しないでください」
「しゃべれんのかよ！！？」
先ほどから夏音を睨めつけていた田井中が目を剥いた。
「何で、片言だったり！？」

「いや、なんといいますか……なんとなく？」
夏音は詰め寄ってきた田井中の剣幕にたじろぎ、おたおたと言葉を絞りだした。
彼女はふらふらと下がってから、カッと目を開いた。
「アホの子か！？」
「すいません……」
夏音は初対面のようなもので、アホと言われたのも初めてだった。その場の張りつめていた空気は針をさしたように、一気に抜けていった。
「なんだよ……無駄に緊張した私らが馬鹿じゃんかよー」
律がぐったりと椅子に座って深いため息をついた。
「で、でもうちのクラスではあまり話さないような……」
「それは……ただの誤解で、しゃべることはできます。誤解が誤解を生んだというか、目論んだ失敗というか……ははは？」
「ははは、じゃねー」
「すいません」
「はー。よくわかんないけど、改めるしかないし。とりあえず自己紹介しとくか。私、田井中律。軽音部の部長！」
「ど、どうも」
それに倣うように、黒髪美少女の子も気恥ずかしそうに口を開いた。
「私も知ってる……かも、しれないけど……秋山澪。パートはベースなんかをやっている…です」
「はい……存じております」
最後に先ほどから紅茶やケーキをかいがいしく振る舞ってくれていた少女がお辞儀をする。
「琴吹紬と申します。キーボードをやっています」
「は、はい」
三人の自己紹介が終わると、何かを促す空気になった。「あ、俺もか」と立ち上がった夏音は気恥ずかしそうに頭を下げた。

「立花夏音です。ずっとアメリカにいましたが、日本語はある程度できます。楽器は色々やってます」

淀みない日本語で夏音が改めて自己紹介をすると、小さく拍手が起こった。

ここに来て、やっと認められた気がした。先ほどまで敵意すら感じた律でさえも小さく笑って手を叩いている。

「ありがとうございます……」

うっすら目尻に浮かんだ涙を拭って彼女たちの歓迎に頭を下げた。

「そういえば私たちの演奏終わってすぐ入ってきたけど、もしかして聞いてたり？」

「はい。演奏途中に入るのも悪いと思ったので」

「そうかー。で、感想は？」

期待の眼差しを向けてくる律には悪いが、彼女を喜ばせるような言葉を送ることはできない。

「ああ、下手ですよね」

「……ハッキリいうな」

ずばり本音を返された事に落ち込んだ律をよそに、夏音はふとひっかかっていた事を澪に尋ねた。

「ところで、澪はレフティなんですね！」

「えっ！？　み、澪って……」

真っ赤になって狼狽した澪に、夏音は首をかしげた。

「ど、どうかしました？」

律は訳が分からないといった表情の夏音へ呆れた声を出す。

「あーあ。いきなり名前なんかで呼んじゃうから……特に、うちの澪は極度の恥ずかしがり屋なんだよ」

「え？　名前で呼んだくらいでダメなんですか？」

「あ、立花さんは向こうの習慣が当たり前になっているからではないかしら？」

「向こうの習慣て……あぁ、そうか。アメリカ暮らしが長いんだったなー。なるほどなるほど」

夏音はぽんと手をついた。
「うーん。あまり同い年で敬称をつけたり、ラストネームでは呼んだりしないです。かなり目上の人だったり、よっぽど親しくない人でない限りは。
あ、そういえば日本では最初から名前で呼ぶことはないんですよね。すいません、秋山さん？」
自分はどうやら失礼な事をしてしまったらしい、と夏音に頭を下げられた彼女はどぎまぎと目を泳がせた。
「い、いや……澪で、いい。いきなりだったから、つい」
「おやおや、この子はー。顔、真っ赤ですぜ？」
「律！」
先ほどから見ていて、彼女は律にだけは強気になれるようだった。既に何らかの絆が結ばれているようで、そういうやり取りは見ていると周りを笑顔にさせる。拳骨を震わせる澪は夏音にじっと見られていることに気付いて、すごすごと拳を納めた。拳の脅威を逃れた律は彼女から距離をとってから、夏音に言った。
「私のことも下の名前で呼んでいいから！」
「あ、はい。律ですね」
「わ、私もぜひお願いします！」
「あ、はい。紬ですね」
「ムギと！」
「む……ムギ！」
名前の呼び方一つでこんなやり取りが発生する事がおかしかった。それでも呼び方一つで一気に距離が近づいたようなように思えるのは気のせいだろうか。
「そういえば、夏音は何か弾ける楽器があるって？」
「あぁ、楽器ですか。ベースを主に。それ以外だとギターにドラム、サックス、ピアノは母の影響で人並みには」
小さい頃から何でもやらされた覚えがあるが、人前で披露できる程に定着したのはそれくらいだった。

「す、すげぇ……」
「何でも屋……」
「器用なんですねー」
三者三様のコメントに気恥ずかしくなった夏音は慌てて手をぶんぶんと振った。
「いや、そんな大したものじゃなくて！　ベース以外は、本格的にやっているわけではないし！」
「なっ。それより歌はイケる方？」
「まぁ、人に聞かせる程度には」
「十分十分！　それなら、ギターヴォーカルとかもイケる！？」
「ヴォーカルとギター……やれますけど」
そもそも、夏音はもはや自分が入部することを前提で話が進んでいないだろうかと焦った。あくまで見学に来ただけだというのに。
しかしそんな内心など知れず、彼の言葉を聞いた途端、三人の顔がぱっとほころんだ。
あ、それと――と律が切り出す。
「この部活、五人いないと廃部することになっているんだけど、誰か一人くらい心あたりはない？」
現存メンバーが三人。あと一人欲しいということは、自分はすでに数に折り込み済みのご様子。
そのことは後々触れるとして、律の無自覚な問いかけは夏音の心を抉った。
「心あたり……今の僕にそんなものはないデス」
突如、夏音の頭上にぶあつい暗雲がたちこめた。その反応を見て律がぱちくりと目を瞬かせると、おそるおそる尋ねた。
「……友達、いないの？」
「お、おい律そんなストレートに！」
夏音は顔をあげる。その表情を見て、全員が言葉を失った。
律は、嗚呼――と目をつぶり、そっと夏音の肩に手を置いた。
部室が優しい空気に包まれた。

気をとりなおしたように律が話題を変えた。
「ところでさ……そのしゃべり方なんとかならないの？」
「しゃべり方……だめですか？」
うっかり沈んでいた夏音であったが、思わぬ指摘にきょとんとした。
「そう。敬語、使わなくていいよ。ほら、もう私達って名前で呼び合ってるんだしさ！」
それに同意と澪がうなずく。
「そうだな。あまり堅苦しくなるのもよくないと私も思う。これから仲間になるんだし」
「そっか……わかったよ。俺もどちらかというとフランクな日本語の方が得意だしね」
最後の言葉がまたもやひっかかる。しかし、自分が入部するか云々の前にはっきりさせておかねばならない事がもう一つあった。
ねえ律。ずっと気に病んでいたことがあるのだけど」
「ん？　なんだ？」
「何でさっきまで俺に怒ってたの？」
今の今まで忘れていたらしく、「あぁっ」と思い出した律が憤慨した。
「私のこと馬鹿にしたように笑ったからだろ！？　ふん、あなたはこんなのも解けないのかしら、お馬鹿さん？　って」
「Ｎｏ　ｗａｙ！！　馬鹿になんてしていない！　誤解だ！　そして、何で女言葉なのかな？　とにかく、俺の扱いのせいで迷惑かけてごめんって目配せしたんだよ」
「え、そうだったのか？」
「そうだよ！」
ぽかんと瞠目した彼女は、ぷっと噴き出して頭をかいた。
「アハハ！　私の勘違いかよ！　悪い悪い！」
すぐに間違いを認めた律に夏音の肩の力が抜ける。
「はぁ。誤解が解けたようでうれしいよお嬢さん」

「なんかたかびーな美少女って感じで鼻についたんだよなー。外見で損してるねー」
「そうかー美少女って……やめてもらえますか」
早々に打ち解けている。じゃれあう二人のやりとりに澪が口を挟んだ。
「で、でもずっと誤解されたままでいいの？」
「ありがと。いつかは、どうにかしないとね」
「そう」
今はどうするつもりもない、とも取れる発言に澪は納得しかねる様子であったが、今この場にある状況は夏音にとって大きな前進であった。
リア充の道も、一歩から。

「あ、ところで一番大事な事を確認してなかったんだけど」
大分打ち解けた雰囲気の中、夏音が笑顔で手をあげる。
「おーなんだー？　何でも聞いていいわよー」

「俺、軽音部に入らないとだめかな？」

夏音は自分の発言によって茫然自失となった三人の魂が帰るまで数分ほど待った。

瞳に光が戻ってきた途端、律が口を開く。
「い、いや……ていうか……入らないの？」
先ほどから入る体で話を進めてきた一同はここで流れを断ち切るどんでん返し発言にすっかりパニック一色だ。
「てっきり入るものだとばっかり！」
「仲良くなれたと思いましたのに……」

眉尻を下げ、震える瞳で夏音を見詰めてくる彼女たちの姿は罪悪

感を覚えさせるほどの威力があった。「うっ」とたじろいだ夏音は何でか自分が悪い事をした気分に陥った。
「ま、待って。入らないとは言ってないだろ？」
「じゃあ、入るの？」
「待って。そうじゃない」
「そうじゃないって？」
「か、考えるモーメント！　ください！」
夏音は今ここで答えを出さないと、と焦った。しかし、シンキングタイムを貰って呻吟したところで、すぐに答えは出ない。
「ほ、保留でっ！」
日本人が得意な保留。とりあえず帰ってからじっくり考えよう、と思って絶妙な答えを出したつもりだった。
「……じゅーきゅーはーちーなーな」
「そ、そのカウントダウンは？」
目を眇めた律が数え始めた数字はゼロまで間近。
「さーんにーいーち」
「入ります！！」
その瞬間、歓声が沸く。
夏音があっと口を押さえたが、もう遅いようだ。
「前にテレビで見た心理学のやつ本当に使えるんだなー」
見事に夏音の首を縦に振らせた律がぽつりと呟いたのを聞いて、夏音は頭を抱えた。
「いいのかなー。大丈夫かなー」

「とりあえず入部記念に記念撮影―っと」
ぶつぶつと後ろ向きな言葉を呟き続ける夏音を無視して、律が嬉しそうに笑う。彼女は澪からカメラを奪うと、全員の肩を寄せ合うように指示した。
「大丈夫かなーいいのか……うっ」
セルフタイマーがないのか、律は自撮りの要領でカメラのレンズ

側をこちらに向けて四人を枠に入れようとする。その際、腕にあたった感触によって、物理的に黙らされた夏音は「これもまた役得」と密かに思った。

後日、できあがった写真には夕陽のせいかわからないが顔が赤い澪と太陽のような笑顔の律、満足気に微笑むムギに口許がにやける夏音が映っていた。

何十年経っても、写真が色褪せても消えない鮮やかな色をしていた。

第二話

肩を揺すられるような近くて遠い感覚。夏音はその感覚を遠ざけていたかった。

このぬるま湯に浸かったみたいな心地よさが消えてしまいそうだから。

半ば意識が浮上したところで、誰かが自分の肩をゆすっているらしいが、いかんせん自分は眠っていたいのだ。

「Ｈｅｙ！　Ｗｈａｔ、ｓ　ｕｐ　ｍｏｍ？　Ｉ、ｍ　ｆｕｃｋｉｎｇ　ｓｌｅｅｐｙ　ｎｏｗ.」

「こら、マムって。誰がお前の母親だ！」

「Ｈｕｈ？　……あれ？」

目の前にはカチューシャをつけた少女がいる。

「まみたん……？」

「オイ、お前いい加減にしろよ」

夏音は数度目を瞬かせた。夏音がアニメにハマるきっかけになった作品の準ヒロイン、まみたん。カチューシャをこよなく愛し、決して離さない彼女はいない。

目をこすると、そこには田井中律が呆れたような顔つきで夏音を見下ろしていた。

「律がなんでここに？」

途端に、夏音は額をぺちんとはたかれた。

「こ・こ・は部室だ！　部活をやる場所であって、ガチ寝する所じゃないぞー！」

「部室？」

上体を起こして周りを見渡すと、たしかに音楽室兼軽音部の部室

である。いまだ惚けている頭をひねって夏音はとりあえず伸びをした。

「寝ちゃったのか」

先週、晴れて軽音部に入部した夏音は早速放課後から部室に顔を出すことにした。尻込みしていたものの、入ってしまったものは仕方がない。よく考えれば周りが女の子のみの環境でバンドをやるのも悪くないな、と思い弾む気持ちで部室へ向かったのだ。

ところが、どうだろう。彼女たちは一向に練習を始めるそぶりを見せるどころか、音楽の「お」の字も見えてこないではないか。

はて、ここは何をする部活だったかと首をかしげたところで、大変美味なお菓子とお茶に文字通りお茶を濁されてしまったのであった。

しかし、紅茶を何杯もおかわりできるくらい時間が過ぎても練習をする雰囲気が欠片も生まれることはなかった。

何もしないなら仕方ない、と襲いくる睡魔に白旗を振ることにした夏音は部室のふかふかソファー（折りたたみ式・夏音、自主持ち込み品）に体を横たえたのであった。

そこで意識が途絶えた。ここまで、思い出すのに二秒ほど。

目をすっと眇めてこちらをじっと見る律に再度あくびを向けた夏音は、ぽりぽりと頬をかいた。

「すいませんでした」

とりあえず、夏音は謝った。

「うむ、殊勝な態度でよろしい！」

胸を張ってうなずく律は傲岸不遜な態度で身を反らす。あまりに尊大な態度だが、反らしすぎて逆にこっけいだ。

「お前も、何様だ！」

しかし、そんな彼女も背後から迫る澪に頭を小突かれた。

律は頭をさすって澪に口をとがらせた。

「なんだよー。澪だって一緒にただお茶飲んでただけじゃんかー！」

「そ、それとこれとは別に……」
返す刀に思わず顔を赤くした澪であったが、じっと夏音に見詰められていることに気がついた。
「な、なに？」
「練習しないの？」
痛い沈黙がその場に流れた。
「そもそも、あと一人部員を集めなくちゃならないのを忘れたのかな？」
容赦ない、歯に衣を着せぬ夏音の意見に他メンバーは頭を抱えた。
「お、仰る通りで……ごぜーやす」
バツが悪そうに言うのは軽音部の部長だった。
「とりあえず、必要なのはもう一人だけなんだろう？　今足りないパートはギター、ヴォーカルだね。俺はどこのパートでも大丈夫だし、こないだはその二つとも引き受けると言っちゃったけどさ。新しく入ってくれる人が初心者だった時のことを考慮すると、まだ俺のパートは確定しない方がいいんじゃないかな」
あまりに淀みない日本語がすらすらと流れる。外人顔の帰国子女に正鵠を射た意見を矢継ぎ早に放たれた彼女たちは、ただ口をぽかんと開けていた。
返す言葉がないとはこのことである。
「に、日本語上手よねー夏音くんたら」
「そ、そうだな！　堅苦しさもなくなったし」
「その年でバイリンガルだなんて素敵ですね♪」
夏音はにこりと微笑む。
「お褒めにあずかりまして、ありがとう。俺は別に楽しくやれればいいんだけど……ただ、楽しく……楽しく、何するんだっけ？」
「う……と、とにかく作戦会議だ！！」
しかし、もう下校時刻だった。

部室として割り当てられている音楽準備室だが、いつまでも使っていられる訳ではないので、会議は始まってもいないのに延長戦へもつれこむ。
結局、四人はファーストフード店で話し合いをすることになった。

マックスバーガー。ローカル規模のチェーン店である。
「Ａｍａｚｉｎｇ……この照り焼きバーガー……最高にクール！！」
「向こうに照り焼きなかったのか？」
「俺、初めて食べた！」
日本に来てからハンバーガーを食べたのは初めてだった夏音からしてみれば、何てもったいない事をしたのだと悔やむほどの事態。
最後にプレートを抱えてやってきたムギはやけにニコニコしながら席についた。
「うふふー」
頬をおさえて随分とご機嫌な様子のムギに律が何事かと眉をあげた。
「私、ファーストフードのお店初めてで……！」
「え、マジで！？」
そんな人種に会ったことない、と律はぎょっとした。
「ええ。『ご一緒にポテトもいかがですか？』って聞かれるのに憧れていたんです……はぁ～。あ、すみません！　始めてください」
「あー、うん。よし！　作戦会議を開始します」
「いいぞー」
夏音が合いの手を入れる。
「今月中にあと一人部員を獲得するために！」
「いったい何を？」
「それをこれから考えるのさー」
律が何気なくポテトをプレートにどばっと広げるのを見てムギが

きらきらーとした瞳を彼女に向ける。
すぐに真似するムギを見ていて夏音はなんだか幼い子供が大人の真似をしえいるみたいだと頬をゆるめた。
「今、入部したらなんかすんごい特典がもらえるとかー」
「車とか、別荘とか……ですか？」
ムギの何の気なしの発言が周囲の人間を凍りつかせた。
ぶっ飛んでんなこの娘、と夏音は目の前のぽやぽやした少女の認識を改めた。
どん引きしつつ、かろうじて律は腹案を出していく。
「すごいけど、それ無理。アイスおごるとか。宿題手伝うとか……あ、英語の予習は全部夏音がやるとか！！」
「めんどい」
肘をつきながらコーラをすする夏音はばっさり切る。
「外国にいた奴が、めんどいって言うなよー」
「まんどい」
中身がすかすかな会議は煮詰まり、何度か意見を交わしたところで、とうとう律が議論をぶん投げて逃避行動に出る始末であった。
部長の耐久力のなさが如実に表れた瞬間である。
最終的にはポスターを作って掲示板に貼る、という至極まっとうな意見が採用されたのであった。
延長戦まで話した意味なくない？　と誰もが思った。

翌日。
四人が書いてきたポスターがいっせいに顔をつき合わせる。夏音は自分で絵心あふれる人間だと自負してきたが、「なに描いてるかわからん」という一言に膝をついた。『漫画を描いてみよう』の創刊号で絵の練習をしたはずだったのに。
神は二物を与えない。
根っから器用らしいムギが用意してきた物が一番見栄えが良いと

のことで、さっそく掲示板に貼った。
あとは、これを見た者が部を訪ねてくれるのを待つだけであった。

「ごめん遅くなっちゃった」
「あぁー、いいよ別に。今ちょうどお茶してたとこだし」
夏音は運悪くゴミ捨ての当番になってしまった。つくづく掃除は生徒が担当するという日本の習慣が恨めしいと思った。
しかし、こうして遅れて部室に向かったものの、部室には気怠そうに菓子を頬張る律とかいがいしくお茶の振る舞いに勤しむムギの姿しかなかった。
「あれ、澪はまだ来ていないの？」
「澪は、校舎裏の掃除ー」
「そうなんだ」
彼女も災難だな、と思ったところで慣れた様子で席につく夏音の前に早速とばかりに紅茶とケーキが現れる。
「はぁ、最高ー」
ほっぺたが落ちそうなくらいに甘い至福の味が口に広がる。そのまま体中に幸福が染み渡るような感覚。
まったりとした雰囲気が流れる。もうこれがメインの部活でいいんじゃないかという考えが夏音の脳裏をよぎった。
「ところで、夏音はちゃんと楽器持ってきたかー？」
すっかりリラックスモードで気の抜けた口調で律が夏音に訊いた。
「はいよー。今朝、部室の奥に置いておいたよ」
夏音はうなずいて立ち上がると、部室の物置の扉を開けて中に入っていく。今朝、置いておいた物を抱えて戻ってくると、肩にギターケースをかついでいた。
「んー、それベースじゃないか？」
律が怪訝な顔をした。ギターを持ってこい、と言っていたはずだ

った。別の楽器とはいえ、自分の幼なじみのおかげでケースの中身がギターかベースかくらいの判断はつく。
「あ、ごめん。ギター持ってこいって言ってたんだっけ？」
「おいおい。とりあえずギターを入れて合わせようって話だっただろー？」
「すっかり忘れてた！　ソーリーだよソーリー」
アハ、と悪びれるそぶりは一切見せずに夏音が謝る。ウインクつき謝罪。
「このハーフむかつくな……」
ウインクが似合う所など、非常に腹立たしい。
「持ってきたのが別のだったらなー。シンセとVベースでギターの音やれたんだけど……」
「ん、何が何だって？」
律は夏音が語った事がよく理解できなかった。聞き直そうとしたが、夏音は再び物置に姿を消すとハードケースくらいの大きさがある長方形のケースを二つ抱えてきた。
「よいせっと。エフェクターもね。持ってきたんだ。軽音部で楽器を弾く機会が増えるだろうからねー」
運ぶの超大変だったー、と軽く汗をふく夏音。律は目をまん丸にして夏音を眺めた。
「それ……全部エフェクター？」
「ん？　そうだけど？」
「……開けていい？」
「どうぞー」
律は恐る恐るエフェクターケースを開けて中をのぞいた。中には見たこともない大小のエフェクターがぎっしりと窮屈そうに詰まっていた。
「へ、へ、へ……へへへ……」
律の口元がくっとゆがんだ。夏音が異常な様子の律を訝しげに見詰めた。

「頭、大丈夫？」
「お前は何者だ立花夏音！？」
「その言い様はなんだよー」
びしっと指をさされてムッとした夏音。
「まあー、すごい数ですねー」
傍らにかがみ込んでケースをのぞきこんでいたムギも驚きを隠せない様子で漏らした。
「これでもメインで使っているやつは避けてきたんだよ。まあ十分気に入っているセッティングだけど。同じの家にあるし。とりあえずどんな曲をやるか分からないから、これだけあれば対応できるかねー」
これが当然ですが何か、と言わんばかりに淡々と語る夏音にいよいよ言葉を失くした二人であった。
「ひ、弾いて！　今すぐ弾いてみて！」
まるでプロのような機材の充実。律はその実力はいかに、と食いついた。
「あぁ、そうだね。アンプは流石に持って来られなかったから澪のを借りるとするかな」
夏音はケースのファスナーを開けてベースを取り出した。弦がこすれてかすかな金属音が鳴る。
「それ、なんてベース？」
律がじっとベースを見て聞いた。
「これはフォデラのエンペラーシリーズだよ。よくサブで使ってるんだ」
幾何学的な模様の木目が広がるボディ。高級感漂う堂々とした迫力を持つベースだった。五弦使用となっており、そのヘッドには蝶のロゴ。
「ベースのことはよくわかんないけど、なんかすごい威圧感だな……」
「まー無駄に年季も入ってるから」

夏音はケースのポケットからシールドを取り出すと、ストラップの内側に通してジャックに挿しこんだ。そのまま澪の私物であるフェンダーのベースアンプに挿しこみ、音を出せる状態のまま、チューニングをする。

調弦が済むと夏音は遊ぶようにハーモニクスを鳴らした。

「さー。なんか適当に弾きまーす」

律とムギは固唾をのんでうなずいた。

風を切るような音と共に夏音の手が振り下ろされる。

澪は音楽室へと急いでいた。運悪く自分の班が、やたらと長引くという噂の校舎裏の掃除にまわされてしまったのだ。

皆はもう集まっているはずである。今日は初めて全員で演奏を合わせる日だった。澪もその事を楽しみにしていたし、抑えられないわくわくが彼女を急がせていた。小走りで階段に足をかけて、のぼる。

ふと、音が聞こえた。音の力が伝わってきた。

一瞬、澪の足が床に張り付く。

「な……なんだコレ……」

音というより、何らかの力が放たれている感じである。それは強力な磁力で澪を引き込む。

ブラックホールみたいな吸引力の源は音楽室から発生しているようだ。

澪は二段飛ばしで階段をかけ上がった。

（この音……ベースの音……？）

澪は躊躇なく音楽室の扉を蹴り開けた。

（やっぱり……）

予感はしていた。澪はその予感と今目の前にある現実がぴったりと重なる瞬間に衝撃を覚えた。音が聞こえた瞬間、どんな人物がこ

のベースを弾いているのか頭にくっきりと浮かんでしまったのだから。

自分の足が細かく震えていることにも気付かず、澪はその場を支配している夏音から体の自由を完全に奪われ続けた。

かろうじて視線をずらせば、同じように硬直している律とムギが確認できた。

（上手い……上手いなんて言葉を超えている。そんな言葉で語れる場所にいない。彼が、立花夏音という存在がベースを通じてこんなにも私を……私たちを磔にしている）

うねるグルーヴが宇宙を見せる。音の力が無数の光となり、襲ってくる。あらゆる色彩の洪水が口から、目から、耳から、皮膚の毛穴にまで流れ込んでくる。

どこまでも広がる存在。

澪は、ベースがこれだけ多彩な音を奏でる楽器だということに、驚かされた。次々と足下のエフェクターを踏み換え、どこをどう弾いているかわからないようなフレーズが飛び出してくる。ループを重ねては、ダイナミックな旋律を踊らせている。

澪は自分も同じベーシストとして。こんな風な音を出せたことは一度としてない。

彼女たちはそれから彼が音を吸い込むようにして演奏を止めるまで、彼の音以外の一切を耳に入れることを許されなかった。

「……律、ムギ？」

演奏を終えて二人を見れば、何故だか放心状態で発見された。

「だ、大丈夫？」

反応なし。不安になった夏音は律の顔の前で手をぱしんっと叩いてみた。

「うおっ」

律の目の焦点が元に戻った。意識を取り戻した彼女の眼の中には今まで夏音に見せたことのない感情が宿っていた。

驚愕、興奮、羨望。

「すっっげーーーー！！　死ぬほどうま、うますぎるっ！！」

律が絶叫した。つられてムギも正気を取り戻すと、がむしゃらに拍手をしながら夏音を褒めちぎった。

「すぐにでもプロになれるんじゃないですか！？」

その一言に夏音の胸がどきっとなる。

「は、はは……だったらうれしいな」

まさか、既にプロですとは言えない。

「あ、澪！　澪もいたのか。今の聴いたか、なあ！？」

律が夏音の背後に向かって声をかける。

振り返るとベースを担いだ澪が瞠目したまま立ち竦んでいた。

明らかに様子がおかしい。

（震えているのか……？）

「あ、澪ごめんね。勝手にアンプ借りちゃったよ」

「……ズルイ」

「え？」

何かを呟いた澪に夏音が聞き返すと、彼女は慌てて取り繕うように声をたてて笑った。その頬は不自然に引き攣っている。

「いや、何でもない！　ハハ、驚いたよ！　すごく上手だな……私より、上手い」

「お、おい澪―。そんなの比べる必要ないだろー？」

不穏な空気をいち早く察した律が明るい調子で澪に声をかけた。

「そ、そうです！　私、澪ちゃんのベース好きだよ？」

そこにムギも重ねて澪に言う。しかし、澪の表情は相変わらず浮かない。長い髪をかきあげて、夏音を向く。

「もう、夏音がベースでいいんじゃないか？」

「はぁー！？」

澪のとんでも発言に律が詰め寄った。

「なら、澪は何をやるんだよ？」

「私は……私は何を……」
「なーに言ってるんだよ、みーお。少しおかしいぞ？　校舎裏の掃除で精神がまいっちゃったかのかなー！　ほら、ムギが持ってきたいつものケーキだぞー」
暗い目で律を一瞥した澪は顔をそらした。
「ごめん。今日はちょっと体調が悪いから……」
そして踵を返して部室から出て行った。残された三人は顔を見合わせた。
「澪……」
夏音はすぐに澪を追って部室を飛び出した。

階段を駆け下りて澪の姿を探したが、澪の姿はすでに遠くにあった。
部室を出た途端、走ったのだろう。全力で。
夏音も全力で走って追う。
しかし、思いのほか足が鈍かった彼女は十秒で捕まった。
夏音が澪の手首をつかむ。
「ヘイ澪！？　いったいどうしたっていうんだ？」
つかまれた腕を躍起になって離そうとする澪。外見に反した握力の前に、やがて抵抗することを諦める。振り向いた澪の顔を見て、夏音は息を呑んだ。
澪の瞳に浮かんだ涙。震える唇。
「澪……俺のせいなの？」
「ちがう……」
「ちがわないだろ？　俺のベースを聴いたから？」
そっと問い詰めても、澪はうつむくばかりであった。放課後とはいえ、廊下には生徒の姿がちらほらとあった。ただならぬ様子を見てとった生徒がひそひそとざわめきだした。
「ここだと、目立つな。人のいない場所へ行こう」

夏音は澪の手を引っ張って人気のない中庭に向かった。

澪は相変わらず黙ったまま。両者が沈黙を守ったまま、向き合う。

夏音は内心で焦っていた。先ほどから背中には冷や汗が滝のごとく流れ落ちている。

あまりこういう事態に慣れていないのもある。

しかし、何より彼女を泣かせた原因が見当たらない……見当たらないのだが、自分が原因らしい事だけはハッキリしているという。

自分の演奏が澪の気に障ったのだろうか。夏音には、澪の気持ちがつかめなかった。

夏音が八方手詰まりの中、どうにか沈黙を破ったのは澪であった。

「子供みたいだって呆れるかもしれないけど……私は夏音のベースを聴いて、絶望のようなものを抱いたんだ」

「絶望……だって？」

「私なんか比べるまでもなく、夏音より下手だ……けど、それだけじゃなくて。私がこれからどれだけ努力したとしてもたどり着けない……突き放すようなあの音……あんなの聴いた後でベースなんか弾けなくなるよ……！」

最後の方は、言葉が震えてまともに話せない。彼女の口から語られる気持ちは夏音の心を抉った。

「そんな……」

夏音にはまるで青天の霹靂であった。

今まで夏音の周りにいたのはプロのミュージシャンばかりだった。彼らは自分のスタイル、音や世界を確立している者たち。

実力を認められることもあれば、嫉妬を向けられることもあった。中には、あなたみたいに弾きたいと言ってくる者もいた。

目の前の少女は、自分のように弾けない事が涙するほど悔しいのだという。

こんな気持ちを抱く人間に直に触れることはなかったのだ。

尊い、向上心の裏返し。自分のせいで一人のミュージシャンが消

えるなど、あってはならない。

「関係ない」

「え？」

「そんな風に自分に線引きをしたらダメだ！　澪は自分の音を憎んじゃいけない！　澪より上手い人なんて世界に幾らでもいるんだ。幾らでもじゃないけど、俺より凄いベース弾く人だってたくさんいる」

そこで言葉を切り、夏音は澪の肩を寄せた。

「けどね。同じ音を奏でる人なんて一人だっていやしない。その音を奏でられるのはその人以外にいるはずないんだ」

他人の音を真似ることはできる。だが全く寸部の狂いもなく同じ音はない。僅かばかりの差でも、やはり「同じ」ではないのだ。

問題は、その音に振り向いてくれる者がどれだけいるかという事だけで。

自分の目をストレートに貫いてくる真摯な瞳。堂々とした空の色に、澪は引きこまれそうになった。

「これから話すことは、誰かに自分から教えるつもりはなかった。いや、なかったのかな……どっちでも良かったかも」

「ま、待って。話が見えない……！」

彼女は途轍もない重大性を潜めた瞳とぶつかった。話が見えなくても、今からなんかとんでもない事を打ち明けられる予感がした。

この強制的な……強引に判らされる感覚、いやだと思った。

「実は俺――――――」

時間にして、一分。

物事を語るのに、その時間は長いか短いかはその人次第である。

しかし、この場合は少女にとって十分だった。

「……は……えーーーーー！！？？？」
澪の悲鳴が放課後の中庭に木霊した。それを聞いた人が思わず何事かとパニックになる程のものだったという。

「お待たせーー！！」
夏音は部室の扉を開けて、声を張り上げた。
ムギと律は心配して二人の帰りを待っていたので、ほっとした表情で駆け寄った。
夏音の横には、恐ろしく顔を引き攣らせた澪が突っ立っていた。
「澪！　心配させんなよ……ん、なんか夏音にされたか？」
よく見れば、出て行く前より顔が強張っていないだろうか。
「人聞きが悪いことを言うなよ」
自分をからかう律にむっとした表情で夏音が返す。
「澪ちゃん大丈夫？　何だか顔色がすぐれないような……」
心配そうに顔をのぞき込んだムギの言葉に澪はあわてて首を横にふった。
「い、いや！　そんなことないよ！　気のせい！」
「なんか怪しい……おい夏音、本当に何かしたんじゃないだろうな」
ほのかに真剣味を帯びた疑りの目を送られた夏音だったが、涼しい顔で部室のソファーに腰掛けた。
「別に。本当に何もなかったよ？」
「そ、そうだ。何も夏音が実はプ――」
じろり。
と夏音にねめつけられた澪は涙を浮かべて「ひっ」と慌てて言葉をつぐんだ。
「ん……夏音がなんだって？」
「プ……プライドなんて糞喰らえだぜおめーっ！　て言ってくれたんだ！」

「な……なんつーことを言うんだお前！！」
律は夏音に詰めよると拳をにぎった。
「う、ウェイウェイッ！！　澪が納得したんだから、それでいいだろ！」
かたく握られた拳をみて、夏音が戦慄する。
割と本気な親友にぎょっとした澪は急いで律を取り押さえた。
「そうだ！　私はそれで納得した！　ふっきれた！　私のちっぽけなプライドなんて守るに値しない些細なものだって！　さあ、練習するぞー」
「そうだ練習するぞー」
そのまま、てきぱきと機材の準備をする澪に、それを手伝う夏音。
そんな二人の様子を目の当たりにした律がぽかんと間の抜けた顔をつくる。自分の幼なじみはこんなにこざっぱりした性格だったろうか。変な方向に羽化した気がしてならない。
「なんだか、お二人とも急に仲が良くなっていませんか？」
ムギの冷静なツッコミが入ると「あぁ、言われてみたら」と律もうなずく。すると二人の様子がよけい白々しく見えてきた。
あくまで疑りの目を向ける律に夏音はばふっと両肩に手を乗っけた。
「ふ、ふふ……秘密を共有することで友となることもあるのだよ」
顔を近づけて、フランクにウインク一つ。どうにも腑に落ちないといった表情の律であったが、少し顔が赤くなったのをごまかすように顔をそらした。
「夏音くん……良い素材……」
「ムギさん？」
「いえ、なんでもありませんー」
「律、なんか顔赤くないか。風邪？」
「う、うるせー！」
「何だよ……」
「無自覚なところがまた……」

「ムギさん？」

何だかんだと騒々しくも最初の修羅場をのりこえた軽音部であった。

第三話

「いやいや、そこはそう訳さないでしょう。日本じゃ英語はこうやって習うの？」
「んー、私は特に教えられた通りに訳したつもりだけど」
「間違ってはないんだけど……ただニュアンスがちぐはぐな感じかなー。海外に住む時がきたら、こういう些細な違いが大恥につながるんじゃないかな」
「将来、か……使うことになるのかな」
「それは澪の進む道次第だけど、小さなことでも正しく覚えておいて損はないよ」

音楽準備室――――またの名を軽音部部室――――では、恒例となったティータイムのお時間となっていた。
今はこうして机の上には菓子とお茶の他に勉強道具が広げられている。というのも、律と澪が本日出された英語の宿題の手伝いを夏音に頼んだのだ。自他共にバイリンガルと豪語している夏音にとってはお安い御用で、快く引き受けた。
ちなみに律は早々に離脱して、勉強とはまったく関係のない話題でムギと会話に華を咲かせている。
唯一、真剣に夏音の話を聞いているのは澪のみであった。
「ふん……ん、んーｄｏｎ、ｔ　ｄｅｓｐａｉｒ？　なんかこの教科書、ブリティッシュとアメリカンがごちゃ混ぜだな。俺なら普通ｄｏｎ、ｔ　ｗｏｒｒｙって言うね、つまり――」
「あーなるほど！」
そんな夏音と澪を横目に律は頬に手をあてて二人を茶化す。
「ずいぶんと仲がよろしおすことねー！」
その瞬間、俊敏なガゼルのようなしなやかさで律に肉薄した澪の

拳固が律の頭蓋に抉り込まれる。
「お前もちゃんと聞いとけ！　どうせ後で泣きついてくるだろうが！」
「い、いたひ……最近ひねりが入ってきてヤバイ……ま、終わった後に全部見せてもらおうと……じょ、冗談だよ！」
怒髪天をついている澪による二発目を回避すべく律は椅子からのけぞった。
夏音は「仲睦まじいねー」と笑った。このコンビのどつき漫才も早くも恒例と化したやりとりであった。そんなぎゃーぎゃーと騒々しい部室を訪ねてきた人がいた。
「こんにちはー」
ニコニコと部室に入ってきたのは音楽の担任の山中さわ子であった。
この女性教師は夏音や他の部員とも面識のある人物であった。軽音部の四人も元気よく彼女に挨拶を返す。譜面代を借りに来たと言ったさわ子はふと夏音に視線を向けて微笑んだ。
「あら、あなたやっぱり軽音部に入ったのね」
以前、夏音が楽器経験者であることを的中させた彼女は、実は澪や律に彼のことを紹介して、軽音部の部員獲得に一役買っていた影の立役者であった。
「はい、とっても楽しいですよ」
「そう、よかったわ。じゃ、そんなあなた達に朗報よ」
優雅にほほ笑んでテーブルの上に一枚の紙を置き、一言。
「入部希望者がいたわよー」
なんと、待望の新入部員。果報を寝て待つ訳ではないが、ただお茶をしていただけで訪れた良い報せに一同はわっと沸き立った。
「よかったねー」
夏音も軽音部の部員として、安堵した。これで廃部を逃れることができる訳である。
「それと、素敵なティーセットだけど飲み終わったらちゃんと片付

けてね」
　最後に教師の顔で優しく注意すると、山中先生は部室を出て行った。

「よっしゃーー！！　廃部じゃなくなるーー！」
　律が入部届を手に椅子の上で跳ねる。その際にがたりとテーブルが揺れて紅茶がこぼれたので、澪が非難の目線を送ったが当人は気にもしない。
　一同は、そろりと椅子に座った律を囲んで顔を寄せ合ってその紙を覗き込んだ。
「どれどれ……平沢唯……なんか名前からすごそうだぞ。なんだろこのデジャヴ」
「やっぱギターだよな」
「ギターかねー」
「どんな方が来るか楽しみですねー」
　ただ、皆浮き足だっていた。
　無理もない。夏音自身も新しい部員が来るということに胸が高鳴っている。
　それは新しい友達、仲間が増えるということなのだから。
　ああもうこれでリア充への道は近いやったぜと密かに胸を高鳴らせる夏音であった。

　最近の夏音は放課後を楽しみに学校に来ているようなものだ。つまり、その放課後の時間が削られるのは、如何ともし難く耐えがたいことなのだ。
　だというのに度々自分をつけ狙ってくる英語の先生につかまってしまった。この教師に捕まると、何故か英語で世間話をするハメになる。

ひどい発音でぺらぺらと喋る先生にいつも辟易させられてしまう。
廊下でばったり会ってしまい、「Ｓｈｉｔ」と小さく漏らしたが、相手は明らかに迷惑そうな夏音の表情などお構いなしに駆け寄ってきた。
自分を発見した際のその教師の顔といえば、大好きなご主人さまの姿を視界に捉えた犬のよう。こんな可愛くない犬はいらん、と思った。
十数分のぐだぐだな会話を終え、何とか解放されたところで急ぎ足で部室へ向かう。
「おや？」
廊下を歩く途中からどこからか楽器の演奏の音が漂ってきた。もしや、と階段にさしかかると、明らかに上の階から聞こえるようだった。
階段を上りつつ耳をすませていると、曲が止まる。何だか少し前にも似たような経験をした覚えがあった。
「珍しく練習しているのか？」
雨か槍でも降るかな、と三段飛ばしで残る階段をすいすいのぼっていった。

「お疲れ様です！」
夏音は抜けの良い透き通った声を共に入室した。
そこに軽音部のいつもの反応はなく。
ぽかんと固まる見覚えのない少女がいた。
「……知らない子」
夏音は物珍しそうにその少女に近づいた。
その少女も、突然謎の大声をあげて部室に入ってきた人物に驚いた様子で目を丸くしていた。
これといって特徴はないが、ムギとは違う意味でほわーんと独特の丸い雰囲気を醸し出している少女であった。
「遅かったな」

澪が遅れてやってきた夏音に目を軽く目を尖らせた。
「いや、英語の先生に捕まってたんだ察して。それより、そちらさんは？」
夏音は新入部員の人ではないかと、半ば確信的に尋ねた。
「ああ、この人が平沢唯さんだよ。たったいま軽音部に残ってくれることになったんだ！」
「ん？　残るってどういう事？」
「平沢さん、本当は楽器の経験がなくてやめようと思ってここに来たらしいんだ」
澪が苦笑を浮かべながらそう説明した。
「そうだったのかい？」
目を丸くした夏音に問われると、彼女はびくりと肩を揺らして赤くなった。
「お、お恥ずかしながら……でも、今演奏を聴いてみて、とっても楽しそうだなって。だから、軽音部続けてみることにしたんです！」
そう言った彼女の口調は力強かった。
「楽しそうだよね。俺もそう思うよ」
うんうんと頷きながら夏音は平沢の肩に手を置いた。
「軽音部へようこそ！！」
「……っはい！！」
「はーい！　それなら、軽音部活動記念にーー！！」
律が澪のカメラを勝手に取り出してきた。夏音は「またか」と苦笑した。
もちろん大歓迎だ。

「もっと寄って寄ってー」
流石に、自分撮りで五人はきつかった。
「いっくよーん！」
隣で上気する呼吸音とシャッター音が過ぎ去った。
後日、できあがった写真は律のおでこから上までしか写っていな

かった。それを見た夏音に大爆笑された腹いせに見事なボディーブローが決まったという。

人間の基本は挨拶、自己紹介から始まる。

「唯でいいよー」

「よろしく、唯」

「実は私、学校で夏音君のこと見かけた時、本物の外人さんだって思ったんだー。何で男子の制服着てんのこの人って！」

「ははははー！　やっぱり……やっぱりそうなんだ……」

言葉がナイフのように心を刻むこともある。

という感じに唯を五人目に据えた軽音部はこれにて廃部を回避することと相成った。

今のところ唯は何一つ楽器の経験がないそうなので、この機会にギターを始めることにするらしい。初心者が一番とっつきやすいという理由もあった。

「ところで、結局夏音は何をやるつもりなの？」

律が保留していた夏音のパートの件を指摘する。

「そうだな。ギターは二本あっていいだろうから、ギターかな」

それに対して、まあそうだろうと意見が一致した。しかし、夏音がそこでぽつりと言い添えた。

「でも、ベースもやりたいんだなあ」

夏音の言葉に澪がぎくりとした。律は「まあ、あれだけ弾けるんだし」と納得したが、同時に首をひねった。

「曲によってベースを変えるのもアリ、かな？　Ｆｕｌｌａｒｍｏｒみたいにツインベースとかやっちゃう！？」

「ツインベースか……できないことはないけど……いや、面白いか

も」
（そうなると、六弦フレットレスの出番かな）
するとおずおずと澪が口を開いた。
「夏音がベースをやりたいなら、そういうのもいいと私は思う」
「ま、いきなりツインベースはやり過ぎだとしても。例えば俺がベースをやる時は澪がヴォーカルとか」
「ヴォーカルっ！？」
夏音がそう提案すると、澪が例の如く顔がゆでダコ状態になった。
「そう。何か問題ある？」
「は、恥ずかしい……っ」
「じゃあ、澪がヴォーカルで」
「え、やだ！！」
恥ずかしがる澪をついからかいたくなってしまう夏音であったが、あまりに拒否反応を起こすので何がそんなにいやなのだろうかと真面目に首をかしげた。
「別にそこまで嫌がることかなー。歌に自信ない？」
「人前で歌ったりしなきゃいけないだろ！？」
「それは、これからのことだからよく分からないけど」
「これからライブとかあるだろうし……たくさん人の前で歌うなんて私にはとても……男の人もいっぱいいるだろうし」
「俺も男だ」
延々と続きそうなやりとりにしびれを切らしたのか、ムギが澪に助け舟を出す形となった。
「まあまあ。無理に歌って貰う事もないんじゃないかしら？　とりあえず夏音くんはギターを弾けばいいと思います。それに、せっかくだから平沢さんに教えてあげたらどうかしら？」
もっともな意見だと皆うなずいた。
「ああ、そうだね。俺でよければギター教えようか？」
「ほんとー！？　ありがとう！」
「じゃあ、まずギター買わないとね」

「え、レンタルとかしてくれないの？」
と、彼女は目をパチクリさせた。
「貸せるギターはもちろんあるけど、それは唯のためにならないよ。自分で選んだ楽器を使わないとね」
「そういうもの？」
「そういうもの！」
そういうものなのであった。

唯はまだ両手で数えられるくらいしか足を向けた事がない階段をゆっくり、一段ずつ上がっていた。
人生十余年と生きてきた中で部活動などに所属した経験がない彼女であったが、高校生になってついに部活動に籍を置くことになった。しかも、自分が関わることはないだろうなと思っていたバンド。人生、何があるか分からないものだ。
部活も、音楽をやるのもすべて初めての経験。
これから踏み入れるのは真っ白な世界だ。
どんなものが自分を待っているのか。そう考えた時の浮き立つ気持ちを、抑えることができなくなる事がある。
授業中や、ふと夜に部屋でごろごろしている時など。新しくできた仲間の顔が浮かんできたり、あれやこれやと想像しているだけで足がじたばた動いてしまう。
そう。今までの人生とは、違う。
幼稚園の時も、小学生の時も。中学生になっても、ずっとぼーっと生きてきた。
でも、今の唯には確かに新たな世界の扉が開かれたのだ。

「今日のお菓子はなんだろうなーっ」
わくわくが止まらない。胸とか胃とか。

「こんにちはー」
唯が部室の扉を開けて中に入ると、もう唯以外の全員が揃っていた。座席をくっつけて座っている三人、とお茶を立ち振舞っている一人。
この四人が唯の軽音部の仲間である。
唯が近づいていくと、長い黒髪の少女が片手をあげて片笑んできた。
ベース担当の秋山澪。
唯の中では背が高くて、格好いい大人の女性という印象の子であった。それと同時に唯が一番かわいらしいな、思う人だ。彼女は見た目のクールさとは裏腹に意外な一面も持ち合わせている。
ふと唯が、何故ギターではなくベースを始めてのかという質問をすると。
「だ、だってギターは……は、恥ずかしいっ」
ぽっと顔を赤らめて言うのであった。
「は、恥ずかしいの？」
何が恥ずかしいのだろうと唯は驚いて聞き返したのだが、
「ギターってバンドの中心って感じでさ。先頭に立って演奏しなきゃいけないし……観客の目も自然に集まるだろ？　自分がその立場になるって考えただけで……」
そこまで言うと、彼女の頭から見えないはずの蒸気が噴き出る。まるでピナッツヴォ火山みたいに。
「うおぅ！？」
エネルギーが抜けたようにしおれる澪の肩を抱いて介抱するのはキーボード担当の琴吹紬。本人曰く、「ムギって呼んでね」とのこと。彼女を表す言葉としてはおっとりポヤポヤ。これまた可愛らし

い人である。
「ムギちゃんはキーボードうまいよね。キーボード歴長いの？」
「私、四歳のころからピアノを習っていて。コンクールで賞を貰ったこともあるのよ？」
微笑みながらしれっと言ったムギに、唯は何故軽音部にいるのだろうと疑問を抱いた。
彼女に関しては疑問が深まるばかりだった。
「最近の高校ってこんな感じなのかなー」
とやけに物が揃っている部室を一望して唯が感心していると、
「あぁー、それは私の家から持ってきたのよー」
と微笑むムギは何者なのだろう。どこかのご令嬢という線が深い。
唯には初めて接するタイプであることは間違いなかった。

感心しながら、唯はお茶を一口すする。
そしてふと隣に目を向けた。
唯の隣に座るドラム担当の田井中律。軽音部の現部長で元気いっぱいの明るい女の子という感じが全身にあふれ出ている。
「律っちゃんはドラム～っって感じだよね！」
「なぁっ！？　わ、私にもれっきとした理由が！　そう。聞けば誰もが感動する理由があるんだぞ！」
「へー、どんな？」
「……か、かっこいいカラ……」
「そ、そこ！？」
「だ、だって！　ギターとかベースとかキーボードとか！　ぬぁーー」
すると彼女は突然、頭を抱えて悶絶しだした。
「ど、どしたの？」
「チマチマチマっチマ！　指でそんな動き想像するだけで……ぬがぁーっ！　って……なる！！」
強引な理由だ。

「そ、そうなんだー」
深くは踏み込むまいと思った。さらに、唯は視線を横にずらす。
窓から差す斜陽に照らされながら優雅にお茶を飲むのは、結局楽器は何をやっているのかはっきりしない立花夏音。
彼は軽音部でただ一人の男の子で、ずっとアメリカに住んでいたいわゆる帰国子女というやつである。
母親がアメリカ人で、夏音はダブルなのだそうだ。
現実にお目にかかった事がないくらい綺麗な男の子で、唯は初めて彼を目撃した時には本当にこんな美人がいるものだと感動した。
物語のお姫様がそのまま飛び出てきたみたいな容姿で、硝子細工みたいに繊細な印象の彼はまるっきり女の子に見えてしまう。堂々と女みたい、って言うと彼は変な顔をする。だから、唯はあまり言わないように気をつけることにした。
何より彼は音楽に関してはすごい一面を持っているらしい。
「夏音君はどんな楽器でも弾けるんだよね？」
唯が尋ねると彼はカチャリとお茶を置き、唯の目をじっと見た。
誰かと話す時に、真っ直ぐに相手の目を見詰める彼は本当に綺麗な青い目をしていて、おまけに目力が凄くて慣れないとつらい。ムギもよく見れば瞳の色素が薄いけど、夏音の場合はハッキリと青く見える。
「何でも、はできないよ。ギターにベース、ドラムにサックスに……あとピアノとか」
さらっとウインクをまじえて語ってしまうのも凄い。流石アメリカ育ち。こんなに全てがアメリカンな彼だが、びっくりするくらいに日本語がぺらぺらなのだ。
本当は日本語もしっかりできるのに、その顔が原因であまり周囲のクラスメートと馴染めないのだと夏音は悲しそうに言っていた。
「それでもすごいよーー！！　いつから楽器を弾いているの？」
「そりゃあ、小さい頃からだよ」
「え、一歳くらい？」

唯が聞き返そうとしたら、ムギがおかわりをすすめてくれたので話が中断された。

「そういえば平沢さん、もうギターは買ったの？」

澪が唯の名を呼ぶ。

「唯、でいいよ！　私もすでに澪ちゃんのこと、澪ちゃんってもう呼んじゃっているし！」

ぜひ、フランクに呼び合いたいものであった。唯がそう言うと、澪は気恥ずかしそうに逡巡してから上目遣いにこちらを見て――、

「ゆ……ゆいっ」

「はぅあーっ！！」

おそらく天然だろう、こういう子がモテるんだろうなと思った。唯のハートにメガヒットした。

「で、唯～。ギターは？」

律が話題を戻す。

「ギター？　あ、そーだった！　私、ギターやるんだっけ！？」

完全に唯は忘れていた。毎日のようにお茶をする部活だと思いかけていたくらいである。

他の四人はそんな唯に苦笑するしかなかった。

「軽音部は喫茶店じゃないぞー？」

澪が少しきつい口調で唯を叱る。

「ごめんねー。ギターってどれくらいするの？」

これは楽器初心者の唯には見当もつかない話であった。すると面倒見が良いのか、澪は顎に手をあててすぐに首肯する。

「安いのは一万円台からあるけど、あんまり安すぎるのは良くないからなー……五万円くらいがいいかも！」

「ご、五万円かー。私のお小遣い十か月分……っ！！」

そこにすかさず、澪が補足した。

「高いのは十万円以上するのもあるよ」

「千万円以上するのもあるよー」

そこに夏音がのんびりとした口調で補足した。

「せ、せんっ……それはもう考えられないです……でも五万かぁー。ほい律っちゃん！」
「なに？」
「うふふ、部費で落ちませんか？」
「アハハー落・ち・ま・せ・ん」
おとといきやがれ、と言うことか。唯はがっくりと肩を落とした。
「どっちにしろ楽器がないと何も始まらないぞ？」
夏音が大皿からブルーベリータルトを一つ取りながら言う。
「よーし！」
律が立ち上がり注目を集める。
「今度の休みにギター見に行こうぜ！！」
唯は楽しみが増えたと喜ぶ内心で、貯金箱の中身を想像して胃が重たくなったのであった。

まわりまわって夏音である。
だだっ広いバスルーム、両足を伸ばして裕に余る浴槽に浸かっていた。髪を頭上でまとめて濡らさないようにして、ふんふんと鼻歌を歌う。
翌日に控えた予定に興奮を収められなかった。時折、バシャバシャーと子供のように足を跳ねさせる。
風呂場に備え付けた防水仕様のスピーカーから流れるＢＧＭに身を委ねながら、うきうきと頭を揺らす。メガデスのＨｏｌｙ Ｗａｒｓ。
明日は軽音部の皆と初めてショッピングに行くことになっている。これでは、まるで本当にリア充そのものではないか。
いいのだろうか。自分が、いいのだろうかと何度も反芻した。
「うー……ビバノンノンってかーーーっ！！！」
心は半分、日本人。

当日。このように女の子とお出掛けというのは初めての経験であった夏音は何を着ていくか非常に迷った。
小さい頃から夏音の洋服をトータルプロデュースしてきた母は不在。服装について聞ける兄弟もいないので、自分だけが頼りだった。おそらく歩くだろうし、カジュアルな格好が好ましいかと考えたが生憎洗濯をため込みすぎて着ることはできない。
仕方なくタンクトップを二枚重ねた上に、襟が広くて肩出しに近いニットのセーター。ピタッとしたパンツという組み合わせになった。
集合の場所に着くと律、澪、ムギの三人が集まっており何やら歓談していた。
「お待たせ！」
夏音が声をかけると、彼女たちはじっと夏音を見詰めてきた。上から下まで視線が這って居心地が悪い。
「ほ、ほら！　やっぱりちゃんとした格好だろう」
「これ、ちゃんとしてるか？　どう見ても女物まじってないか？」
「Ｙシャツメガネが……」
自分の服装についての話題だったようだ。
「……なかなか気分を悪くする話をされているぞ」
しっかり三人のひそひそ話が漏れていたのを聞きとっていた夏音。全然声が潜まってないもの。
するとバツの悪そうな顔をして律が笑った。
「いやー。夏音がどんな格好してくるか予想してみようって盛り上がっちゃってさー」
「別に気にしてないケドさ。この格好って変？」
「いえ、とっても似合ってますよー」
「よかったー。俺、あまり自分で服装決めないから悩んじゃったよ」
「じゃ、いつもは誰が決めてるんだよ？」

「母さんが俺の服選ぶの好きなんだ。今までは母さんが寄越してくるやつを言われた通りに着てました」
「ま、マザコンかよ……」
律が「うっ」と身を引いた。幸いにもそれが夏音の耳にとまることはなく、むしろ上機嫌で笑っていた。
「そっかー。俺のセンスでも案外イケるんだなー。気分がいいからみんなに冷たいものでもオゴっちゃおうかなー」
「素敵よ夏音ちゃまーん……おっ唯だ」
態度を１８０度ほど急変させた律が尻尾を振っていると、横断歩道の先に唯の姿を発見した。
自分以外が既にお揃いであることに気がついた唯は急いで横断歩道を渡ってくる。はずだった。
通行人とぶつかる。
犬と戯れる。
百円を見つける。
「あと数メートルなのに……なぜ辿りつかない！？」
全員の心が一致した。

五人集まったところで、さっそく商店街の中を歩いて楽器屋へ向かうことになった。
聞くところによると、唯は母親にお小遣いの前借りをしてもらって、何とか五万円を用意する事ができたそうだ。
「これからは計画的に使わなきゃ！」
それは厳しい戦いになるだろう。それでも唯はうきうきしながらむん、と意気込んだ。
これから使えるお金が少なくなるとしても、もうすぐギターが買えるのだ。
まさに前途洋々の気分なのだろう。
「……使わなきゃ……いけないんだけどさ……今ならこれ買えるっ

……」

唯は商店街の洋服屋のウィンドウの中の服の目の前に張り付いた。

「これじゃ前途多難ってやつだね」

夏音はふっと溜息をついた。律がこーらとたしなめるも「少し見るだけだからっ」と言い置いて唯は店内へ走っていってしまった。

その後を律が仕方なく追う。

夏音は肩をすくめて、澪と視線を合わせた。夏音が先にいこうか、と言いかけたところで。

「しょうがないな……私たちも入るか」

「そうねー」

「え、そうなの？」

当然のように澪が言うもので度肝を抜かれた。

（俺が、この店に？）

見るからに女の子の洋服屋さん。ファンシーな外装。

澪たちはさっさと入店していった。独りで残されるのも嫌だったので、夏音もしぶしぶ店へ入ることになった。ふりっふりできゃぴきゃぴな世界の中を迷子になりかけた中で、自分が普段着ているような物がレディースとして売っている事に瞠目した。

「へー。女の子も着るんだー」

新作のワンピースを本気で店員に勧められた時は、涙しそうになった。

精神をがっつり削られて、やっと店から出たと思いきや、次は雑貨屋。デパートの地下と寄り道は続く。

途中に寄ったゲームセンターで夏音のテンションが上がったせいで、長く時間を潰した後、一同は喫茶店でひと息ついていた。

「ひひー買っちったー」

律も買い物をして満足。あー楽しかったまた来ようね、とその場に共通の充足感が満ちた時。

「でも、何か忘れているような……」

唯がそう言った瞬間、夏音はついに叫んだ。

「楽器屋だよっ！！！」
「あっ、しまった！！」
一同は当初の目的をすっかり忘れていたことに震撼して、ばっと席を立ち上がった。
ちなみに、そこのお茶代は夏音がすべて出した。颯爽と伝票をもって会計をすませてきた夏音に四人の女子の評価がぐんと上がる。

「１０ＧＩＡ」

ここのビルの地下に目当ての楽器屋があるという。一行はエスカレーターで下の階におりて楽器屋に入った。
店内に入ると、静かなＢＧＭやギターが試奏されている音が耳に入った。
唯には壁一面にかけてあるギターやベース、弦やシールドにエフェクターなどの光景が真新しく映っているようだ。
「すごーい！　ギターいっぱい！」
新鮮な反応に夏音の頬もゆるんだ。
「ねえねえ夏音君。このギターって……」
「それはヤメトキナ。ジミー・ペイジになりたいの？」
初心者にはまずおすすめできるものではない。
夏音もビリー・シーンを真似てツインネックベースをオーダーメイドさせた過去があるのであったが……今ではあまり使わない。
「唯ー何買うか決めたー？」
律が急かすように唯に問うが、ぱっと決められるものでもないだろうと夏音は呆れた。
「うーん……なんか選ぶ基準とかあるのかなぁ？」
当然の疑問である。
「まあ音色はもちろん。ネックの太さや重さ、フォルムなんかもたくさんあるからね。ただ、その予算で決めるのであれば見た目を重視した方がよいかもしれない。あとはフィーリングで」

すらすらと説明した夏音をよそに、唯は思いがけない代物に目をつけてそちらに気を取られていた。
「聞いてないですね唯さん」
顔をひきつらせた夏音であったが、唯が夢中になっているギターを見て、目を軽く見開いた。
「へえ。レスポールか……またすごいのに目をつけたねえ。その予算じゃ到底買えないよ」
「このギターかわいい～」
「あくまで聞かないねえー唯さん」
さすがに肩を落とした夏音であった。
「そのギター２５万もするぞ？」
律が値札を見てたまげた。
「ほ、本当だーっ。これはさすがに手が出ないや～」
（やっと気づいてくれたか唯よ……）
律が別の場所に安価なギターがあると指摘したが、唯はそこを頑なに離れようとしなかった。
よっぽどそのレスポールに惚れてしまったのだろう。
ただ、夏音は初心者がいきなりギブソンというのもどうだろうと思った。はじめから良すぎるギターを使うのもどうかと思うし、良いギターでいえばストラトの方が扱いやすい。それにレスポールは折れやすいし曲がりやすい。やはり、初心者が扱うのには少し難儀する代物なのである。
「唯、このギターはもう少し唯がギターを続けてからにしない？」
「え、なんで？」
「まあ、いろいろと難しいギターなんだよ。丁寧に扱わないといけないし、いきなりこんな高いギターを買わなくてもいいと思うんだ」
「ええー、でもこれが気に入ったんだモン……」
あくまで引き下がらない唯に夏音も微妙な表情になる。
（フィーリングが大事なのもわかるけど……金銭的になぁ）
そんな唯を見て何か思うところがあったのか、澪が「そういえば

……」と自分が今のベースを買った時の話をした。澪も今のベースを買った時に悩みに悩んだそうだ。レフティは数が少なく、種類も多く選べない。ピンからキリまで値段があるとしても、ちょうど良い価格帯で探すことは難しいのだ。

ちなみに律がＹＡＭＡＨＡのヒップギグを買った「値切り」話はいっそ感心するくらいであった。それを唯に求めるのは無理な話だが。

「とりあえず、試奏でもしてみたら？」

夏音がそう提案すると、唯はきょとんとした。

「しそー、って何するの？」

思わずこけそうになった夏音。何とか踏ん張って、目の前のほんわか娘に説明した。

「実際にこのギターを弾かせてもらうんだよ。実際に弾いてみないと分からない事もたくさんあるだろう？」

「で、でも私ギターまだ弾けないし……」

「あ、そうだったよね……なら、俺がちょっと試しに弾くよ。確認したいこともあるし」

と夏音は店員を呼んで試奏をさせてもらうことにした。防犯用のタグを外した店員がレスポールを片手に夏音に聞いた。

「アンプはどれ使いたいとかありますか？」

「あ、ならそのマーシャルで」

店員はアンプのところまで夏音を案内した。そのまま近くにあった椅子を引き寄せてセッティングをしようとしたが、あとは自分でやるので、と断った。

夏音を囲むように軽音部のメンバーが立ち、てきぱきとセッティングする夏音を眺めていた。近くにあったシールドをジャックに差し、アンプの電源を入れてつまみをすべてフラットにする。チューニングを手早く済ませてアンプをいじった。

唯はその一挙動を頬を赤く上気させて見守っている。

セッティングが整い、夏音はピックを振り下ろした。純正なレスポール・スタンダードの音色が響く。
「おおーーっ！！」
唯が歓声をあげる。
そのまま夏音は試奏を続ける。
「イントロ当てゲーム！」
ふふふ、と笑ってブルージーな曲調に変えた。
「あ、この曲は……クラプトン！」
横にいた澪が驚いた声を出す。
「次は……天国への階段、だろ！　ツェッペリンかぁ」
律が弾んだ声をあげた。
「あと、……これはわからないな」
腕を組んで悩む澪に演奏を止めた夏音はにやりと笑って「スティーヴ・ヴァイのソロでしたー」と意地悪く答えた。
「せめてホワイトスネイクの曲にしろ！」
と律が文句を言った。夏音は店員を呼んでギターを渡した。
「で、試奏してみてどうだったの？」
唯が拳をにぎりしめて夏音に聞いた。
「弾いてみた限り、特になんの変哲のないレスポールだった。小まめに調整しているみたいだし、あれなら大丈夫だと思うよ」
にっこり笑って太鼓判を押した。
（それに、ちゃんとしたクラフトマンもいるみたいだし、渡す時に整備してくれるだろうしね）
「それより唯はギターの音聴いていてどうだった？」
「可愛い奴でも割とやる子って感じ！」
「そ、そう……」
唯の感性はなかなか面白いと思った。
「ていうか！　値段の問題じゃね？」
律が思い出したように二人の間に割って入った。
「あ、そうだった……」

再びしょぼんとなる唯であったが、律が思わぬ提案を出した。
「よぉーーしっ！　皆でバイトしよう！」
「ば、いと？」
夏音が耳慣れぬ言葉にぽかんとして首をかしげる。
「うん！　唯の楽器を買うために！」
「えぇーっ！？　そんな悪いよっ！」
律の発言に誰しもが面食らったが、唯が一番色を失っていた。
「これも軽音部の活動の一環だって！」
「り、りっちゃん……っ」
「私やってみたいです！」
ムギは拳をにぎって顔を輝かせた。
「そうか！　うっしゃーーっ！！　やぁーるぞーおーーっ！」
律が拳を振り上げると、ノリノリで従うムギ。
「ばいとって何？」
「仕事のことだよ……私、どうしよ」
横で呆れたような目をしていた澪が補足してくれた。
「仕事……か」
彼女たちは、唯のために労働しようと言っているらしい。
「俺、そういう仕事って初めてかも……やってみようかな」
「えぇー夏音も！？」
全員、澪が浮かない顔をしていたのは見ないふりをした。

その夜のこと。
リビングで独り夕食をとっていると、電話が鳴った。
「Ｈｉ？　あ、じゃなかった。もしもし立花です」
『俺だよ夏音！！』
「その声は父さん？」
『元気にしていたか？』
「まあね。そっちはどう？」

『何も変わらず、最高さ！　俺にはアルヴィとお前と音楽と……この手羽先があればいい！』
「てばさ…？　まあ元気そうでよかったよ」
『夏音。何か変わったことはあったか？』
「……俺、軽音部に入ったんだ」
『ほう……軽音部になー』
「楽しいよ。でも、まだ始まったばかり……俺は自分のフィーリングが間違っていないと信じているし。心配しないで」
『そうか。なら、安心したよ……夏音。そろそろジョンの奴が可哀想になってきたから、たまには奴の要望にも応えてやれよ。俺の方にうるさくてかなわない』
「まあ、向こうが時間を合わせてくれるなら……」
『まあ、お前にはお前の時間がある。大切にするんだよ』
「うん、あ……そういえば俺アルバイトってやつをすることになった！」
『アルバイト？　また、何で？』
「うん、いろいろとね！　想像つかないだろ!?　とにかく楽しくやっているよ」
『……そうか。母さんにも代わってやりたかったんだが、あいにく今は外してな。俺もそろそろ行かないといけない。とにかく元気にしているようで安心したよ夏音』
「うん。母さんにもそう伝えておいて。忙しいならもう切るよ。じゃあね、父さんおやすみ！」
『ああ、誕生日やイースターの時に帰れなくてすまなかったな。愛しているよ、おやすみ』
「俺もだよ。プレゼントは最高だったし、何も気にしていないよ。バイ」
電話を切った夏音はまた食卓についてからあることを父親に言いそびれたことを思い出した。
「こっちでも友達ができたんだ」

それが全員異性だとは言えなかった。

第四話

「なんのバイトがいいかな～」
放課後。軽音部の一同は仲良く肩を寄せて何かの雑誌を熱心に眺めていた。溜め息とページをめくる音が先ほどから連続している。
「やっぱりフリーペーパーじゃあまり良い求人ないなー」
肘をついて肩を落とす律は「ネットも使うかー」と溜め息をついた。
彼女たちが真剣な眼差しを向けているのはアルバイト情報が載ったフリーペーパーである。変なところで金をけちったのが災いしてしまったと一同は肩を落とした。
何故こんな事をしているかというと、先日の話合いで唯のギターを買うために全員でアルバイトをすることになったのだ。
夏音は他人の楽器を買うのに働いてあげようだなんてどこまでもお人好しな子達なのだろうと呆れていた。しかし、それは自身にも言えることだ。夏音としても、アルバイトというのも初めての体験である。なかなか面白そうだと自身も興に乗っていた。

「ティッシュ配りとかはー？」
「あれも結構きついらしいぜー」
「ファーストフードなんかどうですか？」
（なるほど、アルバイトにも色々あるんだね）
夏音はそれらの会話を真剣な表情で何度も頷きながら聞いていた。アルバイト情報誌なんていうものがあること自体、初めて知ったくらいである。
意外にも働き先を決めることは難儀を極めた。良い条件を見つけたとして、どんな提案が出たとしても、接客を避けられないバイトなどは極度の恥ずかしがり屋の澪にとってハードルが高くなってしまう。無理をすると精神的に多大な苦痛をもたらして屍と化してし

まうくらいに重症だということが判明した。
行く末を心配された澪だが、一同は彼女が屍となるのを防ぐため、遠回りでも他の線で探しているのであった。
「どっこも高校生不可だってさー」
「せちがれぇ世の中だねりっちゃん……」
そんな会話がしばしば挟まれる。その都度、澪が申し訳なさそうに体を揺するのをムギが慰めるということの繰り返し。エンドレスにループしそうな流れにしびれを切らした夏音が口を開いた。
「この際、少しくらいきつい仕事でも我慢しようよ。世の中きつくない仕事なんてあまりないでしょう？」
全員が押し黙って夏音の言葉に目を丸くした。
見るからに「箸より重いものは持ったことありませんわオホホ」な深窓のお嬢様然とした人間から飛び出た全うな言葉が意外だったのだ。
「まあ……夏音の言う通りだよな。私ら全員を雇ってくれるところなんて単発で力仕事ばかりだし……」
「そもそも全員で同じ場所で働く必要あるのかな？」
「それはそうなんだけど。ほら、うちの澪を単独働かせに出すのは心許ないっていうかさ……わかるだろ？」
「なっ！　余計なお世話だ！」
完全に保護者の視点から悩む律の言葉を聞いた澪が屈辱に赤く顔を染めた。
「それもそうだな」
夏音がさもありなん、と頷くのを見てとうとうショックを受けた彼女は気付かれないように隅でいじけた。
放課後をかけて各自で携帯サイトや情報誌とにらめっこしたおかげで、澪にもできる交通量の調査という名前からして楽そうなアルバイトを探す事に成功した。
ひたすら通りを走る車を数えるアルバイトだという。たったそれだけでお金が貰えるのか、と驚いた夏音は後に少しだけ後悔するこ

とになる。

アルバイト当日。

時刻は早朝の六時。一同が揃って集合場所に向かうと、帽子をかぶった中年の男女が一組待っていた。

「よろしくお願いします！」

高校生らしく、朝から精一杯のやる気をこめて威勢の良い挨拶をする少年少女に人好きのする笑みを浮かべて彼らは自己紹介をする。女性の方は有坂さん。男性の方は片平さんと名乗った。

「はい、今日は日中気温が上がるそうなので、水分補給だけは小まめにしてくださいねー。それでは、現場に向かいましょうか」

現場へ向かうにあたって二人一組に分けられ、ひたすら流れてくる車を数える業務につく。難しい業務ではないし、ずっと座っているだけなので尻のしびれとの戦いといっても過言ではないと思った。

「あの……他のみんなはどこに？」

夏音が任された地区は軽音部の仲間達とは別で、彼女達とは二つほど区画を挟んだ道路であった。

「ごめんねー。お友達と一緒の所にしてあげたかったんだけど、人数の都合でしょうがないんだ」

と派遣員の片平さんは言う。人が善さそうだが、気弱そうな人である。遙かに年配の者が自分に頭を下げてくるのもバツが悪い。

「そうなんですか。わがまま言ってすいません」

軽く頭を下げると、夏音は支給されていたくっと帽子をかぶった。自分はここに仕事に来ているのであって遊びではないのだ。気を引き締めていかないとならない、という覚悟の表れである。

（しかし立花夏音、なかなかどうして寂しいものだ）

実は寂しがり屋さんの夏音も時間が経つにつれ、仕事に慣れた。というか孤独に慣れた。作業は本当に車を数えているだけで、もう一生分の車を見ているのではないかと思われた。

むしろ睡魔をやっつける方がよっぽど難儀したくらいである。

このバイトは一区域につき派遣員を含めて三人体制でまわっている。実際に調査するのは二人なので、交替で一人が休憩といったシステムである。ところが、休憩といっても軽音部のメンバーとかぶる時は少ない。用意されたワゴンの中に見知った顔を見つけた瞬間の夏音は尻尾をぶんぶんと振っていたように見えただろう。

夏音は隣に座る相方の方に目を向けた。自分とペアを組んでいるのは都内にある某大学院で数学を研究しているという寡黙な青年だった。

ぼさぼさの長髪にメガネ。洗いざらしのブルージーンズにシャツ、という地味な格好。一昔前の日本のフォークシンガーさながらという出で立ちである。彼とは初めの挨拶以来、口をきいた記憶がない。

向こうが話す気がないのだろうか。それとも体調が優れないようにも見える。この青年、風が吹けば倒れそうというか、夏音が一発はたいただけでＫＯできそうなくらいゲッソリしている。そう思って見ると、だんだん顔色が青ざめているような気もする。この人ヤバいんじゃ……と不安にかられた夏音はたまらず口を開いた。あまりに暇だったのもある。

「暑いですね」

「そうだね」

「あれも車に含めていいんですか」

「あれはヤクルトのおばちゃんだから……どうだろう」

「ヤクルト……好きですか？」

「毎日のおやつがジョアさ」

「僕も好きですよ、ジョア」
夏音は奇妙な高揚感を得ていた。意外にも、会話がつながっている。夏音が思わず手元のカウンターをすごい勢いで回していると、今度は青年の方から話しかけてきた。
「君はどうしてこのバイトに？」
「お金を稼ぐためです。そう言うあなたは？」
「数字が好きなんだ……ひたすら数を数えていられる最高のバイトだから」
ああ、変態なんですねという言葉をかろうじて飲み込んだ夏音はそれらしく「なるほど」と頷いて曖昧に濁した。
「君、どこの子？」
「桜高です」
「あぁ。あの女子校か……女子校って憧れだったなあ」
「いや、今年から共学になったんですよ？　そういう僕は桜高共学化初年度の男子生徒なんです」
夏音がそう言った途端、青年は一分くらい押し黙る。心配になって青年の顔をのぞき込むと、半分くらい前髪に覆われた顔は限界まで驚愕に固まっていた。まるでサンタクロースの衣装をクローゼットから発見した少年みたいな表情だった。意外に表情豊かだ。
フリーズから解けた彼はくいっとメガネを押し上げて、怖々と口を開いた。
「そいつは君……実に驚愕の事実だよ……君のこと僕っ娘だとばかり……」
「……僕っ娘は女の子限定の属性ですよ？」
性別を誤解されることなど、今さらである。しかし、夏音は彼と口をきくのをやめた。
「ところで、君のことどこかで見た気がするんだけどなあ……」
「気のせいです」
その後、やたらと饒舌になった青年が数学的セックスについて語り出した時も、うんざりと道路の車に意識を集中させていた。

時間はじっとりと過ぎていく。

太陽も昇りきったところで、休憩の時間になった。

向こうの配慮により、お昼の時間を合わせてもらったので、夏音は急いで他の皆の場所へ向かった。

一刻も早くムギのお茶が飲みたかったのである。

夏音が厳かに瞳をとじて、茶の一滴までも渋い顔で味わうのを不思議な顔つきで見守る軽音部一同の姿があった。それから休憩時間が終わると共に、哀愁を漂わせて帰る夏音の背中をそろって見送った。

残りの時間、夏音はずっと憮然とした表情で過ごした。隣の青年の変態性が自分に感染らないかと不安になった。

二日目は中だるみが激しく、大分いい加減なカウントになってしまった。天気だけは良く、爽やかな風が時折吹くのに気分は暗鬱。

隣で数学の深遠な世界について語る青年の声もお経のように聞き流すことができるようになった。これも仲間のためと思い、今すぐにでも帰りたい欲求を我慢して夏音は乗り切った。

とはいうものの、我慢もしてみるものだ。過ぎたる毒は、案外気持ちよくなることもある。

夏音は隣の青年とうっかり会話が弾んでしまったのだ。

どんな会話が切り口だったかは定かではないが、とにかく音楽の話になった。すると後は超自然的に音楽談義に花を咲かせることになり、実は彼がインディーズシーンにおけるマスメタルバンドの先駆的存在として羨望を集めているらしい事が判明したのだ。

「マスロックじゃなくて？」

「マスメタル、だよ。これでも割と名が知られていると思うのだけどね」

正直、かなりアングラじゃないかと思ったが、彼が日本において

お馴染みの野外フェスに出場した話もあって、それなりに認められているのだと理解した。
その後はヘビーすぎる音楽の話を堪能して、「いつか観にきてよ」とライブに誘われるくらい仲が良くなってしまった。
まったく人は見かけによらない。
重々承知していたのに、改めて思い知らされた。今回、アルバイトをして良かったと夏音は熱く噛みしめた。
こうして二日間のアルバイトは終了した。

「二日間、お疲れ様―」
ねぎらいの言葉と一緒に給料袋が手渡される。初めての肉体労働。その報酬に感極まった夏音が思わず涙をこぼし、それにつられたムギと涙をふきあう微笑ましい場面も見られた。
本来の目的は唯のギター代を稼ぐことだったので、皆が一斉に受け取ったばかりの給料袋を全額まるごと唯に渡したのだ。
全員分の袋を受け取った唯の表情が曇っていることに夏音は気がついた。だが、律たちはそれに気付かず他のバイトをやることを検討し始めていた。
そんな唯の様子を何となく観察していた夏音であったが、唯が吹っ切れたような表情で顔をあげたのを見てなんだろうと首をかしげた。
「やっぱりこれいーよ！」
バイト代は自分のために使って――そう言って、唯は給料袋を全員の手に返す。
「私、自分で買えるギターを買う。一日でも早く練習して、皆と一緒に演奏したいもん！　また楽器屋さんに付き合ってもらっていい？」
全員が唯の決断に呆気にとられていたが、ふと顔がほころんだ。
首を横に振る者などいなかった。

夏音は小さくなっていく唯の姿を再度振り返って眺めた。
「いい子だな、唯は」
ぽつりと呟いた夏音は、そんなに欲しいのならレスポールくらい手に入れてあげようかと考えた。
（すぐにでも……）
思考が段取りを踏もうとしたところで、首を横に振った。
「やっぱりやめた。唯が決めたことだもんね」
「おーい、夏音！　置いてくぞー！」
「あぁ、ごめん今いく！」
もう一度だけ唯の姿を視界におさめ、夏音は足踏みして待っている律たちの方へ駆けだした。

そして、ついに唯のギターを決める日がやってきた。
実のところ、夏音は内緒でまたあの楽器屋へ通ってちょうど良い価格で良さげなギターを見繕っていたりした。けれども、結局選ぶのは唯なので意味がない。そこは巧みな話術で唯を操って……と思い、ふらふらーと浮き足立つ唯に話しかける。
「あ、あのさー唯ちゃんや？　ここらへんのギターのー……このへんの……これとかいいと思うんだけどなー……って唯？」
さりげない態度で誘導商法を試みた夏音であったが、じっとしゃがみ込んだ唯の視線の先を追って眉を落とした。
言うまでもなく熱い視線の先にはレスポールが光沢めいた光を放っている。同じように唯の様子に気付いた律と澪も仕方ないなー、といった表情で苦笑する。
「唯？　よかったら買わなくても、弾くだけ弾いてみる？」
「うーん……それはいいや。あとちょっとだけ見させてー」
まるで買って欲しい玩具をねだる子供そのものだ。
夏音は肩をすくめて「見るだけって言っても……」と戸惑った。
他の者に困惑した視線を向けると、澪と律が苦笑まじりだが、確実

に嬉しそうに笑っていた。
二人には唯の気持ちが十分に共感できるものだったし、仕方ないなと言った心持ちであった。
「ちょっと……ちょっと待っててください！」
突然声を荒げたムギに「おや？」とした顔を見合わせた一同だったが、ムギが敏捷な動きで店員の方へ駆けていく様子を見守った。
何やらムギが熱く語っている。しかし、相手をしている店員の顔が青ざめて見えるのは気のせいだろうか。
「ひ、ひぃっ」
という悲鳴らしき者が遠くに聞こえた気がした。
「あの店員やけに焦ってないか？」
律の指摘に、全員がうなずいた。そして、るんるんと上機嫌で戻ってきたムギが放った一言に度肝を抜かされた。

「このギター、五万円でいいって！」
「えぇーーー！！？」
「Ｊｅｓｕｓ…！！！」
「な、なになに！？　ムギちゃん何やったの！？」
どう考えても怪しすぎる展開に唯が青くなってムギに詰め寄った。
するとムギは照れくさそうに説明する。
「このお店、実はうちの系列のお店で……」
「そうなんだぁー。ありがとう、ムギちゃん！　残りはちゃんと返すから！！」
唯は深く考える事をやめて、素直にムギへの感謝を述べた。そんな唯とは裏腹に、何という無茶苦茶な展開だろうと夏音は唖然としていた。琴吹家の財力や事業内容も気になるところだが、実家の権力を躊躇なく使ったムギも疑いなく二十万の値引きを受け入れた唯も思考回路が一般と画されている。
二十万といったら新卒の初任給に相当する。新卒の給料一ヶ月カットするのと同義であるのに。

「ま、使えるものは使えばいいかな」
幸福の絶頂かのように喜び跳ねる唯を見ていたら力が抜けてくる。
やれやれ、と息をついた夏音は改めて彼女の表情を見やった。
瞬間、胸がズキンと痛んで何とも言えない切なさを覚えた。
（ギターが手に入るのがそんなに嬉しいんだ……）
夏音にもあっただろうか。
こんな感覚。
ずっと昔、初めて楽器を手にした時にもこんな風に打ち震えるような喜びを抱いただろうか。
彼女の純粋無垢な喜びに触れたせいか、胸がどきどきとする。
悲しいせいか、嬉しいせいか。どっちつかずの感情はすぐに皆の歓声に紛れた。
「おめでとう唯！！！」

数日後、メンテナンスや最終チェックを終えて、ついに唯の手元に渡ってきたギターのお披露目が行われた。繊細な硝子細工を扱うようにそっとハードケースの中からギターをとりだした彼女は、ぎこちない様子でストラップを肩に下げた。そして、じゃーんとギターを構える唯の姿に軽音部の一同から拍手が起こった。
「ギター持つとそれらしく見えるね！」
澪がいつになく興奮した口調で言った。
「なんか弾いてみて！！」
律も同じように唯に声をかけたのだが、そこで唯が弾いたのはなんとも間抜けなメロディー。
「チャルメラかよ……」
律がげんなりと言う。
（チャルメラってなんだろう）
日本ではお馴染みの曲だが、夏音にはよく分からずに曖昧に笑っていた。

すると話はギターのフィルムについての話題へと移行する。未だにギターのフィルムを剥がしていない事を律が目敏く発見したのだ。理由を尋ねると、唯がよくわからないギターの可愛がり方をして過ごしているということが判明した。

「添い寝はやめなさい。下手したら折れちゃうよ」

それだけは釘をさしておかねばならない。折れやすい、レスポールちゃんは弾く時は悪魔のように大胆に。触れる時は赤子に触れるように繊細に。

その後、律がフィルムを勝手に剥がして唯を泣かしたが、結果的に唯を練習へ向かわせたので結果オーライ、と夏音は満足だった。

「ライブみたいな音出すにはどうしたらいいのかな？」

と唯が言い出したので、部室の倉庫にあった古いマーシャルのギターアンプにつないでやった。

「よし、これで音が出るよ」

サムズアップをして、唯に弾くように指示する。

そして緊張した表情で唯がギターのネックを支える。

右手が振り上げられ、下ろされる。

響くレスポール、ハムバッカーが拾う弦の振動。

ただの開放弦だ。音色とも言えない、微かなノイズまじりの音。

そしてサスティーンが伸びきって、じょじょに消えていく。

夏音は全身に鳥肌が立った。脳に電極をぶっさして雷でも落とされたかのようだ。

何の予兆もなく、襲いかかってきたこの震え。遅れて、自分がこんな感覚を全身に迸らせていることに震撼した。

（何だよ…こんな……ギターを鳴らしただけじゃないか）

夏音は唯の表情を見て、この間自分が覚えた感覚の正体が何か分かったような気がした。

これは産声である。自分が初めて出した音が彼女の胸を魂を深く震わせている。喜びの歌声だ。

――これどうやっておとだすのー？　――

――ハハ、ここをこうおさえて弦を弾いてごらん――

――す、すごいっ！　おとがでたよっ――

――ほぅほぅ、大したもんじゃないか――

（俺は……こんな感覚、とうの昔になくしていた）

彼女を見ていて、脳裏をよぎる遠い記憶。

唯の向こう側に幼いころの自分の姿が見えたような気がした。

（うらやましいな）

「やっとスタートだな」

自分には、二度と取り戻せない感覚。夏音が深い思いに耽っていると、澪が神妙な口調で言った。万感の思いを織り込んだような声だった。

「私たちの軽音部」

律が続ける。

「ええ！」

ムギが静かに、力強くうなずいた。

「俺たちの、軽音部……俺たちの、軽音部か」

夏音の胸に目が覚めるような爽快な風が吹いた。ドクドク、と皮膚の裏を走るナニカが夏音を突き動かす。

自分もまた新しい音楽を。

改めてこの場所で、一から音楽に触れていき、育む。

（俺、ここに来て良かったのかも）

夏音は軽音部に入る事を決めた（やや強制だった）自分のフィーリングは間違っていなかった。

「目指すは武道館ライブーー！！」

律が声高らかに叫ぶ。あまりに大きく出た律の言葉に驚きの声があがるが、夏音はいっそ清々しかった。未来の事はわからない。もしかすると、このメンバーで武道館にあがる未来が来る日があるのかもしれない。現実的に考えると叶わない夢である。

けれども、それがただの夢物語だとしても、本当に実現できたら。夏音は自分は夢想家ではないと思っているが、そんな未来がやってきたら大層面白いことだなと笑った。

「卒業までに！！」

「それは無理だろ」

おまけにチャルメラとかいう謎のメロディーを加える唯に、盛り上がった空気が完全に抜けてしまった。

「ご、ごめん。まだこれしか弾けないやー。アンプで音を鳴らすのはもう少ししてからだねー」

すると唯はアンプに近づき、つまみに手をかけずそのままジャックに手をかけ――、

「って、唯っ！　危ないっ！！」

澪が叫ぶが、間に合わなかった。そして大抵の初心者が一度は聞くハメになる爆発音が部室に響いた。

もう、辛抱できなかった。それを見て、夏音は盛大に笑い転げた。唯を注意していた澪だが、過呼吸気味に陥るほど腹を抱える夏音に若干顔をひきつらせた。

「ひどい！　そんなに笑わなくても～！」

唯は頬をふくらませる。

「い、今の……そんなにツボる所あったかー……？」

律は、儚げな美少女が床に転げるほど笑いまくる様子に目を背けたくなった。

「あー楽しいじゃないか軽音部！」

これから、もっと楽しいことが起こるに違いない。

その後。

「よし、唯にギターを叩きこむかー」

先ほどの醜態から一転して、俄然やる気の闘志を燃やす夏音であった。

「あ、そうそう夏音くんや」

「何かな？」

「私、夏音くんがこの間弾いたの聴いてすっごい感動した！　私も早くあれだけ弾けるようになりたいので、よろしくお願いします先生！」

（あ、せん……先生……先生……甘美な響き）

「俺の特訓はきびしいぜ？　やれるかい嬢ちゃん」

「覚悟しております！　サー！」

「その意気やよし。まずはコードをおさえてみようか」

「サー！　コードってなんですサー？」

「あれ、どこから教えればいいんだ……」

思えば、夏音は一から楽器を教えるのは初めてであった。夏音が頭を抱えるのを見て、唯もつられて難しい顔をした。

むぅ、と二人がうなった。

幕間1

一般にひきこもり生活というのは、文字通り自分の部屋に一日中こもって出てこない状態を指し示すはずだ。

引きこもった人間は、徹底的に他人と接触するのを拒み、それは家族とて例外ではない。

日中は家族と顔を合わせることを避け、食事は部屋の前に置いてもらう。家族と出会うリスクを回避するため、小用などはペットボトルに。

清潔な者は家族不在の間隙を縫うようにシャワーを浴びる。これらの行為には、殊更家族のスケジュールを把握している必要があるが、うっかり母親と鉢合わせしてしまうことも。

「〇ちゃん……！」

「くっ！」

息子は母親を押しのけて自分の城へケツまくって逃げ帰る。

夜中に耳をすませば、ふとドアの向こうに聞こえる家族の嗚咽。

とにかく。これが引きこもりのステレオタイプだ。

しかし、立花夏音においてはその全てが当てはまらない。

彼の場合、ひきこもると言っても学校に行かないという点以外は、実にのびのびとしていた。まさに毎日が休日、という生活。

もっぱら楽器を触るか、作曲。もしくは引きこもり生活中盤からは漫画やアニメ作品を漁るように鑑賞するという循環で一日が過ぎていった。

彼は外に出るのが怖くなかったのだろうか。

もちろん、初めは外に出ることもままならなかった。初めはまさに自宅引きこもり状態だったのが、徐々に表に出るようになったのは、もともと夏音が通った高校が遠く離れていた事が大きい。学校

から自宅まで、電車で言うと八区間ほどの距離があったのである。
彼を外に出す要因の一つとして、彼は自らの容姿を隠したことも大きい。
日本ではやたら目立つブロンド色に輝く髪。母親譲りの髪を彼は気に入っていたが、身の安全のために一時的に捨てることにした。どう足掻いても日本人には見えない顔だけはどうにもならないが、眉毛と睫毛の色も日本人にまぎれる黒色にしたのだ。ちなみに、彼が体のどこまでを染めたのかは明らかにされていない。
ぱっと見て元の彼を知る者が目撃しても、一瞬で彼とは分からないくらいに変化することに成功した。息子の変化をそっと見守っていた立花夫妻もその徹底ぶりに感心するくらいだった。
「黒いのも素敵よー」
と母のアルヴィは喜んだのも束の間。「ママとお揃いだったのに……」と悲しみに打ちひしがれた母親を慰めるのに息子は苦心したという。
一方、父である譲二は純正日本人として黒い頭髪を持っていたため、やっと息子が自分とお揃いになったと喜んだことは秘密であった。言葉にすると、妻の逆鱗に触れてしまうからだ。
このように外出することに徐々に躊躇いがなくなってからは、良くドライブなどに出かけることもあった。
というのも夏音はアメリカにいた頃、十五歳でパーミットを受け、日本に来る二ヶ月前に自動車運転免許を取得していた。
免許を取得して一年が経っていたので、日本の学科試験を受けて日本でも公式に車に乗ることを認められた訳である。
夏音の現在の年齢は十七歳。日本では十八歳からの取得になるのだが、驚きの国際ルールである。
ちなみに彼は、自分が軽音部の皆より年上だという事は打ち明けていない。
秘密ばかり抱えている、と夏音は悩む。

いつかこの肩に背負う荷物を下ろせる日を考えねばならないと思った。

両親が自宅に帰っていた時は、親子でよくセッションをして過ごした。

夏音の自宅、高級住宅街にそびえ立つ三階建ての家には広大な地下室が備わっている。あらゆる機材が揃っており、完全防音のスタジオである。夏音の部屋も所狭しと機材が置かれてあり、またこの部屋も防音仕様という充実。

ロハス一家、ここに極まる。

いつまで、この生活を終えようかと考えることもあった。それでも煮え切らない自分は考えを先延ばしにしてばかり。

このまま、アメリカの親友が自分をぶん殴りにくるまでのんびりしていようか。それとも、とっとと元いた場所へ帰ってしまうのもいい。

夏音は考えるばかりで、引きこもり生活を続けていた。

今、夏音はひきこもり生活をやめた。

新しい世界に飛び込むことにしたのだ。

新しい仲間。

軽音部。

「一人で作業はしんどいなあ」

夏音は汗をぬぐってガレージにしまってある大型ワゴン車にせっせと機材を積んでいた。

ギターアンプにベースアンプ。見るからに重そうな機材を車に運び入れる作業は骨が折れる。この場にあるのは小型アンプではない。ヘッドとキャビネットに分かれた高出力アンプである。さらに、5

００Ｗのモニターを二つ。小型のチャンネル数の少ないアナログミキサー。その他もろもろ。

結論から言うと、軽音部には最低限のまともな設備が整っていなかった。先々代、いや先々々々々々代くらいの先輩方が遺していった過去の遺物が物置に放置されてあったものの、その機材設備のあまりの悪さに耐えきれなくなった夏音は、自宅から機材を運び入れようと奮起したのである。

唯も澪も、あんな小さなアンプでやるより出力が大きいアンプでやった方が楽しいに違いない。夏音としても、自分が慣れたアンプの方がいい。

ちなみに今運びこんでいるものだけで、総額百万を超える。

こんな高いものを揃えて盗難の心配がないのだろうか。そんな心配も無用であった。

それらのアンプは本命が壊れた時に使用するサブとんでサブであったのだから。

夏音はたっぷり一時間半を費やして積み込みが終わると、へとへとになりながら車を走らせた。

日本の住宅街の狭い道をゆっくり走り、大きな通りに出てからはものの十分ほどで学校に着いた。桜ヶ丘高等学校では、生徒が免許を取得すること、ましてや生徒が学校に車で来ることは原則的に禁じられているので、車は近くの路上に止めた。そもそも、向こうで取ったものは仕方がない。

夏音は併せて持ってきていた業務用の台車を下ろすろと、苦労してそこに機材を乗せた。動いて落ちたら困るので、紐で固定することも忘れなく。

今日は日曜日なので、学校には部活動に来る生徒しかいなかったが、それでもすれ違う生徒から注目を浴びてしまう。

傍目には、重量級の機材を載せた戦車のような台車を押す美少女。

なかなかシュールな光景である。
「しまった……階段、ムリ」
うっかり夏音。今さら頭を抱えても遅い。自らの浅慮な行動を悔いたところで、フォースを使えるようになる訳でもないのだ。
夏音ががっくり膝をついて途方にくれていると、ぶっとい胴間声を響かせて走ってくる集団が廊下の向こうに現れた。胴着を着た少女達の気合いがこちらまで伝わってくる。
（柔道部、かな）
柔道部という事は、それなりに力があるはずだ。少なくとも、自分なんかよりは。

「ま、待って！　そこ行くお嬢さん！！！」

凄いスピードで通り過ぎようとする集団に、声をかける。
良く抜ける声は、無視する事を許さない。真っ直ぐに鼓膜を揺らして、相手に届く。
すると、先頭の主将らしき少女（二の腕だけで夏音の腹より二回り大きい）がその顔面に大量の汗と戸惑いを浮かべて立ち止まった。ぐったりした様子で床に女の子座りしている美少女が突然声をかけてきたのだ。困惑するのも無理はない。
ほとんどのエネルギーここまで来るのに使い果たした疲労紺倍の夏音はまるで薄倖の美女のように映り、物語に出てきそうな少女の様子に顔を赤らめる者もいた。
しかし、視線をずらせばとんでもねー量の重量機材。果たして、この組み合わせは何だろうと首を傾げるのも無理はなかった。
「なんだっ！　この柔道部主将・範馬魔亜娑にいかなる用向きだというのだ……む……ウハッかわええ子」
黒帯をぐいっと締めて主将らしき少女が夏音を見下ろした。言葉の最後に危険な単語が潜んでいた気がした。
あえて突っ込むのはよそう、と本来の要件を思い出した。

「すいません……助けてください」
「な……っ！」
かろうじて細腕で体を支える夏音。もはや女の子座りから浜辺の人魚のような姿勢になっていたが、その実、乳酸がたまった腕が痙攣を起こし始めていた。立ち上がろうとして手を使ったのはいいものの、全然体を支えられない。
すると、生まれたての仔牛のようにプルプルと立ち上がろうとする夏音をがっしりつかむ腕があった。
「む？」
ふいに自分の腕を支えるように手を伸ばしてきた魔亜娑の顔を不思議そうに見詰める。
「私達にできることがあるのならば……何でも言うがいい」
彼女の瞳には熱く濡れるものがきらめいていた。それだけでなく、鼻から二筋垂れる赤い線が目に付く。鼻血だ。彼女は自分をじっと見詰めて何度もうなずいている。
「何か顔から色々噴き出てますよ」
「今にも折れてしまいそうな美少女が震える体に鞭打って何かを訴える……これで心動かされずにいられるだろうか！」
「はぁ、そう……」
変態である。最近、変態によく遭遇するなと思った。
気にくわない単語が幾つか飛び出たが、その前に魔亜娑が掴んでくる腕の力が気になった。それ以上力をこめられたら折れそう。
「何でも言ってくれ美少女！」
「そ、そう。ならお言葉に甘えて……えーと、この機材を音楽準備室に運ばなければいけないんだけど、頼めますか？　あと美少女じゃなくて……」
「おう一年コラ！」
「押忍！！！！！」
とんでもない音圧ある声が響く。思わず、夏音の肩がびくっと跳ね上がった。

「これも練習の内と心得よ！　この今にも根本から折れそうな美少女を手伝ってさしあげるのだ！」
「押忍！！！！！」
「いや、根本から折れるって……だから俺は女じゃなくて……」
「可愛いあの娘は」「えんやこら！」「美女のためなら」「えんやーこら！」
生まれてくる性別を間違えているのではないか、と夏音はゲンナリと機材を運び出す彼女たちを見て思った。
「あの……ありがたいけど、慎重に扱ってください……」
夏音は音楽室に全ての機材を運んでくれた柔道部の面々に礼を言った。深々と頭を下げると、そんな礼とかはいいから連絡先を書いて寄越せと言われた。完全に下心じゃねーかと、丁重にお断りした。
機材を配置する。懸念していた電源の位置や数の関係も、特殊なケーブル、トランスをもちこんだので問題なかった。
しばらく作業をして、楽器を演奏する部活らしい部屋になったと夏音は満足気に部室を見渡した。
「明日、みんな驚くかなー」
うくくっと笑みをこぼして部室に施錠をして帰宅したのであった。

後日。
週明け。
放課後。
軽音部の部室にて。
「ぎゃ、ギャーーっ！　な、な、何じゃこりゃー！？」
わくわくしながら一番乗りで部室にスタンバイしていた夏音は最初に訪れた律の反応を見て、悪戯が成功した少年みたいに笑った。
「昨日、持ってきたんだ！」
「これを、一人でか！？」
「そのとおり！」
開いた口が塞がらないといった様子でわななく律を見て、ますま

す夏音は踏ん反りがえった。
「軽音部の設備があまりにひどいもんでね。家から持ってきちゃったんだよ」
「これ、これだけでいくらだよ……」
律はふらふらと椅子にへたりこんだ。
「他の皆が来るのが楽しみだなー」
その後、ムギは一人でこれだけ揃えた夏音を手放しにねぎらい、澪はあまりの光景に気絶しかけ、唯はよく分からなかった様子で「すごいすごーい」とはしゃいだ。

機材投資は、夏音にお任せ。

第五話

立花夏音は生まれてこの方、ずっとアメリカで育った。そんな彼は帰国子女と紹介されることが多いが「帰国」したのかと問われると首をかしげてしまう。ちなみに夏音の父親は何を思ったのか、夏音に二つの国籍を持って育つように措置をとったので、厳密に夏音は二つの国籍を持っていることになる。どちらにせよ、ずっと向こうの教育を受けて過ごしてきた彼を見て誰もが日本の高校教育についてこられるのだろうかと疑問を持っても不思議ではない。

しかし、答えは否。

ネイティブ並の日本語能力を持った夏音は、自らが入手した新たな趣味、日本の漫画や小説をこよなく愛したおかげで一般の日本人以上に達者な日本語を身につけていた。

つまり、何も問題はなかったのである。

「やっとテストから解放された～」

律は部室の中央で、天へと腕をかかげて自由への喜びを叫んだ。テスト勉強から解放された喜びを十二分に噛み締めている学生のよくある姿である。

「高校になって急に難しくなって大変だったわ」

お茶の支度を進めながらそう呟いたのはムギである。口ではそう言うものの、何でもそつなくこなしてしまうような雰囲気を漂わせる彼女が勉強に苦労するようには見えなかった。しかし、世の高校生は中学時代との勉強の難易度の差に困惑する時期である。中学でそれなりの成績を収めていても、おごってしまったばかりに一気に成績下位に転落する者も多い。いかに優秀な人物でも油断はできないという事かもしれない。

「そうだなー。私も今回ちょっとヤバかったかも……ていうか、も

っとヤバそうなのがそこにいるんだけど」
澪が開放感に満ちあふれた部室でただ一人、暗雲を背負ってうなだれる少女を指さした。
彼女のとった成績がいかなるものだったか、火を見るより明らかだ。
「唯……そんなにテスト悪かったのか？」
頬をひくつかせて不気味な笑いを浮かべている唯は、ギギギと不可思議な音をたてて澪の方を向いた。
「ふ、ふ、ふふ……クラスでただ一人……追試だそうです」
そうして、ふらふらと立ち上がった唯が見せた答案をのぞきこんだ全員が青ざめた。
「よく……こんな点数をとれたな」
夏音は驚愕に目を見開き、思わず手を頬にあてた。これだけの点数だと逆に感心してしまう。
「だ、大丈夫よ。今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」
「そうそう！　ちょっと頑張れば、追試なんてヨユーヨユー！！」
顔をひきつらせながらもムギと律がフォローをいれた。きっとそうに違いない。見事な優しさを目にして夏音もうんうんと首を振る。
「勉強は全くしてなかったけど」
唯はけろりとして言い放った。
「は、励ましの言葉返せこのやろう！！」
律が怒るのも無理はない。自業自得、因果応報。彼女にぴったりな四字熟語は幾らでもある。
何故、勉強をしなかったのかと聞かれると唯は勉強もそっちのけでギターの練習をしていたのだと答えた。
「おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ！！」
Ｖサインで勝ち誇る唯。
「その集中力を勉強にまわせよ……」
完全に馬鹿にした態度をとる律にむっとした唯がじゃあ、と問い返す。

「そういうりっちゃんはどうったのさー？」
「私はホレ、この通りー！！」
そうして律が差し出した答案を見た唯が「うそっ……」と絶望した表情になる。
「こんなの、りっちゃんのキャラじゃないよ……」
「私くらいになると、何でもそつなくこなしちゃうのよーん？」
「そんな～りっちゃんは私の仲間だと信じていたのに」
さらに高笑いをしつつ、胸を張る律。
「テストの前日に泣きついてきたのはどこの誰だっけな？」
澪の氷点下を下回る冷たい眼差しが律に向けられた。自信にあふれた態度はただの虚勢だったらしい。
「はっ！　そういえば夏音くんはどうだったの！？」
矛先がこちらに来たな、と夏音は自信をもって答案を差し出した。
「ほぉ～」
「どれどれ……」
それを唯と律が熱心に眺める。
「英語が百点っていうのは分かるけど、全科目高得点って何！？」
馬鹿は自分だけだと思い知らされた唯はさめざめと泣いた。
「ココの出来が違うんじゃないかなー」
自らの頭を指さして夏音が笑う。
「夏音くん……なんて嫌な子でしょう！」
唯が頬を膨らませて怒る。全然迫力がないので、夏音は肩をすくめて受け流した。
「そういえば、今更だけど夏音はやけに日本語が達者だよな」
澪がナポレオンパイを崩すまいと真剣な面持ちの夏音を見て言った。
「確かにそうですよね。夏音くんってずっと向こうにいたのよね？」
ムギがお茶のおかわりを律のカップに注ぎながら、会話に参加した。
「生まれてこの方、ずっとアメリカにいたよ。でも俺の場合、向こ

うのスクールに　通わされていたし、我が家では『日本語の日』っていうのがあったんだ。父さんが俺にしっかり日本語を身につけてほしかったみたいだよ」

「へぇ～～～」

一同、感嘆する。

「なんか夏音のお母さんってすっごく綺麗そうだなー」

すると律が唐突に切り出した。

「何で母さんの話なんだ？　今、父さんの話を……」

「夏音は母親似だろう？」

澪が間髪いれずに聞いてくる。夏音は何故か全員が急に突っ込んできた事にたじたじした。

「いや、まあ似てるとは言われるけど」

「お母様の写真とかってありますかー？」

ついにはムギがきらきらとした表情で夏音をじっと見つめてくる。

「い、家にはね。今は、ない」

夏音は居心地が悪そうに体を震わせ、お茶を一気に飲み干した。普段なら家族の事を聞かれると嬉しくなるものだが、何だか不埒な好奇心を向けられている気がしてならなかった。まだ何か聞きたそうにうずうずする視線を向けられたので「さーて」と立ち上がった。

「ベース弾こーっと」

そう言ってテーブルから離れてベースを取り出す。以前に持ってきていたフォデラではなく、別のベースである。定期的に色んなベースを弾く事も機材管理には必要な事なのだ。

「あれ！　そういえば、私夏音くんがベース弾くの初めて見るかも！」

「そうだったっけ？」

「うん！　ギター弾く所は何回も見たことあるけどベースは初めてだよ」

「ふーんそうかそうか」

ならばこの腕、見せつけてくれようと密かに意気込んだ夏音は足

下の機材をいじり始める。すると、ふと天啓的な頭に閃きが浮かんだ。

「あ、そうだ律。暇してるならセッションでもしない？」

まったりと紅茶をすすっている律に声をかけた。思えば軽音部に入ってから、まだ一度もそういう”らしい”事をした覚えがない。この機会だからいいかな、と軽い気持ちで誘ってみたのだが。

「え、あ、私っ！？　いやいやいや！　今回などは、ちょいと遠慮するかな！」

「何でさ。遠慮しなくていいよ」

「やーだー」

全く予想外の拒否反応が返ってきた。

「何でだよ」

人が誘ったセッションを頑なに拒むとは失礼な、とすっかり機嫌を損ねた声で夏音は律を睨んだ。

すると、律は目をそらして指をもじもじし始めた。

「だ、だって～私セッションとかあまりしたことないしー」

「私とたまにやってたじゃない」

「澪は黙りんしゃい！」

澪情報によって夏音の機嫌はますます降下する。

「嘘ついてまでやりたくないのかー？」

「そうじゃないけど……夏音のベースについていけないと思うんすよ」

「何それ！？　ついていくも何もないじゃん！　楽しく音を合わせればいいだろ？」

夏音ダダダッと律に詰め寄って肩をつかんだ。肩をつかまれじっと視線をロックされた律はしどろもどろになる。

「そ、それでも……う～ん……そ、そこまで言うならやってみようか……かな」

ついに律は夏音の目力に負けてしまった。

「よし、きた！」

夏音は手を叩いて喜び、急いでセッティングを再開した。
しぶしぶと立ち上がった律に早くセットするよう促し、律がスネアやバスドラを鳴らすのを待った。
「ふんふん……律、少し気になったんだけど。律のスネア低すぎない？」
「え？　私は思いっきり叩いてダーンって音出る方が好きなんだけど」
「そうかぁ……別に、律の好みだからいいんだけど。今はもうちょっと硬い音が欲しいかなーって。もっとタイトな感じにできないかな」
「うーん、別にいいけど……」
「ま、面倒ならいいや」
すごく面倒くさそうな律の顔を見たら強制はできなかった。
しばらくしてスティックをつかんで軽くストレッチしていた律は、最後に首をこきっと鳴らして８ビートを刻み始めた。お手本的なプレイである。三点から徐々にライドを絡めて、跳ね気味のドラミングを続けた。普段はほんわかとした空気に満ちる部室だが、誰かが楽器を鳴らした瞬間にそれは軽音部としての空気へと様変わりする。というより、ドラムの場合だとうるさすぎて会話がままならない。
夏音は律の音をじっと聴きながら、自身の音作りを終わらせた。

「うん、私は準備オッケー！」
律の準備が整ったらしい。
「こっちもいつでも！」
夏音はひょこひょこと律に近づいた。
「テンポはどうする？」
律がスティックを叩いてテンポを示した。
「ＢＰＭ１１０だね」
「え、わかるの！？」
夏音がすんなりＢＰＭを当てたので「絶対拍だ……」と律が瞠目

した。自分でさえ分からなかったというのに。
「そうだなぁ……フリーセッションということで！　特に決めごとなしでやろう。Ｐｌａｙ　ｉｔ　ｂｙ　ｅａｒでね！　じゃあ、律頼んだ！」
「え、え、いきなり！？」
いきなり指さされた律は焦ってなかなか演奏を始められない。たじたじと、どう始めたものかと焦っていた。
「Ｈｅｙ，　ｌｏｏｋ！」
いきなり英語を使われ、律が夏音を見る。
「Ｏｎｅ，　ｔｗｏ，　ｏｎｅ，　ｔｗｏ，　ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｒｉｔｓｕ！！」
陽気なノリの夏音につられて、律が咄嗟にフィルインからドラムを叩き始めた。律が四小節ほど叩いたところで、夏音もリズムを合わせていく。
律は夏音の顔を見て、びくりと頬をあげた。夏音は彼女が緊張しているのかなと思った。音が硬いというか、体に力が入ってリズムがよれてしまっている。どちらかというと、夏音のベースに必死に食らいつき、合わせようとしているようだ。
違うのに、と夏音は首を横に振った。こちらの音をうかがいつつ叩くのでは、まったくノリが生まれてこない。お互いの音を探りつつ、徐々に合わせていくのがセッションの醍醐味の一つであるというのに。夏音は彼女が今まで澪と行ってきたというセッションでは何をしてきたのだろうと不思議に思った。
しかし、このままで終わらせないのが立花夏音であった。
ふと夏音が演奏の手を弱めた。ほとんど聞こえないくらいに音が小さくなり、律の刻むビートが宙に放り出される事になる。
音は何よりその人の心境を伝える。夏音の音を見失ったことで、律のドラムに不安が折り混じる。顔をあげた律が困惑した瞳で夏音に訴えかけた。食い入るように見詰められた夏音は苦笑を漏らした。普段は飄々としている律が「まって、まってよ―」と健気な少女に

見えてしまうのだ。まるで保護者からはぐれてしまった子供のように。

だから夏音はその宙にさまよう手をしっかりとつないであげなければならない。

（こっちにおーいで、っと）

足下のエフェクターを踏み込んだ夏音のベースが爆発する。

大気圏から地表まで一気に駆け下りるようなグリッサンドの下降音。とんでもない熱量で軽音部の狭い部室に墜落した。

それは彼女の反射であった。次の瞬間、律はかっちりと夏音のベースにリズムをはめていた。

隕石が秒速五一キロメートルで天を下る先に人は何を見るだろうか。脳裏によぎる光景は強制的に大爆発を浮かび上がらせるだろう。それくらい当然の結果として、律は自分が叩くべき場所に逃げ込んだのだ。

さらに巧妙にシンコペーションを入れられた後には、先ほどまで既にその場になかった物が存在していた。

グルーヴ。

二つの楽器のビートが融合してうねるような音の波が誕生していた。

律の演奏は憑きものがとれたように変化した。肩に入っていた余計な力はどこかへ消えている。

夏音が挑発するようにオカズを入れると、律も笑ってそれに対抗する。時折、ベースが少しドラムとずれても律が焦ることはない。そうすることで生まれる新たなノリを感じることができるのだ。

離れるように見えて離れない。曲が崩れそうになっても、夏音がそれをすぐに修正して戻す。

しばらくセッションは続き、夏音が最後の一音を止ませた瞬間、

唯、澪、ムギは二人に盛大な拍手を送った。
夏音はベースを置くと、スティックを握りしめたまま放心している律に近寄った。
「いやー楽しかった！　ありがとう律！」
笑顔で片手を差し出した。律はぼーっと差し出された手を眺めていたが、顔を赤くして「あ、ハイこちらこそ」と言って弱弱しく夏音の手を握り返した。
「すっごいすっごーーーい！！　二人ともカッコいいーー！！！セッションって初めて見たよ！！」
唯はぱちぱちと手を鳴らして大はしゃぎであった。
「や、やっぱりスゴイ……」
呆然と呟いたのは澪である。拍手する事も忘れて棒立ちになって演奏の余韻に意識を持って行かれたままになっていた。
「夏音くん何でそんなにすごいのさ！」
「え、何故と言われても……。練習したからじゃない？」
「私もギターいっぱい練習したらあんな風に弾けるかなー。私も夏音くんとセッションしたいなぁ～」
「そうだな。早くそうなれることを祈ってるよ」

その後の律といえば、セッションが終わったところでそそくさとお茶に戻ってしまった。「ふっ、いい仕事したぜー」とでもいわんばかりの、爽やかな笑顔であった。それからずっと唯やムギと女三人で姦しいお茶会に没頭している。

（お茶が基本の部活かい……）
さすがに夏音も半眼になってそれを横目に見ていた。今の感動の余韻はどこにいったのだろう。
あれ、澪がいないと思っていたら足下にいた。
「うおっ！」

彼女は夏音が苦労して運んできた自前のアンプの前でじっと見詰めていた。
「どうかしたのか？」
「このアンプ……畏れ多くて使えなかったんだけど、私も使ってみてもいいかな？」
それが今世紀最大のお願いと言わんばかりに澪は両手を合わせた。
「何言っているんだよ！　最初から使っていいって言ったじゃない？　これは澪のために持ってきたような物なんだよ？」
「え……私のため！？」
「澪も、ちゃんとしたアンプで音を出した方がいいと思ってさ。俺も使うからってのもあるんだけど……って澪？　おーい？　澪さーん？」
心なしか顔を赤くして遠い目をしていた澪を現実に引き戻す。
それからしばらく澪の音づくりに付き合った夏音であったがふと時計を見て、慌てて自分のベースをケースにしまった。
急に帰り支度を始めた夏音に注目が集まると、夏音は部室の扉に手をかけて振り向いた。
「ごめん！　俺もう帰らないと！」
「用事か何かあるのか？」
夏音がエフェクターで嬉々として遊んでいた澪が尋ねた。
「ちょっとね。エフェクターは自由に使っていいから、最後にしまっておいてね！　アディオス！」
一同はぽかんとしながら別れの言葉を告げるが、既に扉の向こうへ消え去った後だった。

夏音は学校を出てから、すぐに目的の場所へ急いだ。今夜、とある知人と会う約束をしていたのだ。学校を出て全力で走ったおかげか、約束の時間を十分ほど過ぎ、待ち合わせ場所の喫茶店の前に着いた。

そこに見知った人物の姿を見つけて、笑顔で走り寄った。
「Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｊｏｈｎ！！」
夏音にジョンと呼ばれてニコっと笑みを浮かべたのは、ブロンドの髪を後ろに撫でつけスーツを着込んでいる背の高い白人であった。がっしりとした肉体をスーツの中に隠し、肩はがっしりとしていて、屈強なアメフト選手を思い浮かばせる。
夏音の姿を確認したジョンも喜色満面で夏音とハグをした。
「会うのは久しぶり、だな。まったく驚いた……まさか本当に日本のハイスクールに通っているなんて！」
ジョンは夏音が日本の高校の制服を着ているのを見て、大袈裟にのけぞった。
「真面目に学生やってるよ」
「まあ、元気そうでなによりだ」
ジョンが夏音の顔をしみじみと眺めながら感慨深く嘆息した。
「最後に会った時より、少し大人になったみたいだ。背がのびたのかな……いやしかし、ますますアルヴィに似てきたな」
「本当!?　実はちょっとだけ背が伸びたんだ！　０・５センチくらい！」
お世辞だったのに、とジョンは心に浮かべた。
「立ち話もなんだから腰を落ち着けようよ」
夏音は今自分たちが目の前にいる喫茶店を差し、笑った。
「ここジョンの好きなバニララテが美味しいんだ」

店に入り、注文が来るのを待ってから二人は話を再開した。
ジョンはひとまずバニララテを一口飲んで驚いた声を出した。
「こいつは……まさしく、バニラビーンズの味を完全に再現している。まいったな」
「だろう？」
夏音も相好を崩して、同じものを口にした。ジョンはカップをテ

ーブルに置くと、すぐに真剣な表情でさて、と話を切り出した。
「さて。これからは、君をカノン・マクレーンという一人のアーティストとして話をする」
「そうだろうね」
夏音の表情が真剣味を帯びた。
「そのことだが、まず何回も電話ですまなかった。うっかり時差のことを考えに入れていなかったんだ」
ジョンは話を始める前に、今までの自分がしてきた非礼を詫びた。
「気にしてないよ。ジョン、あんたは売れっ子敏腕で通してるエージェントだ。俺が勝手に契約待ってーって言ったせいで皺寄せをくらっているんよね。こちらこそ、申し訳ないよ」
「いや、いいんだ。僕はその小っ恥ずかしい形容詞がつくエージェントの前に、いち君のファンだからね。迷惑なんて思っちゃいない――だが、」
ジョンは言葉を切り、バニララテを一口含む。
「問題は君がいつまでそこにいるつもりかってことさ」
「それについては……前にも話したはずだよ」
「僕は君の才能が人々の前から一時期でも隠されるべきではない、と考えている。一瞬でもマクレーンから離れてしまう人がいてはならない、とね」
「そいつは随分大きく買われてるね」
嘆息まじりに夏音は笑う。
しかし、ジョンは夏音から視線を外さずに続けた。
「冗談でもなんでもない。このまま取り残された君のファンはどうなるんだ!?」
「サイトにもライブでも告知はしただろ？　しばらく俺は――」
「普通の男の子になる?」
「まずかった?」
「ひどいなんてものじゃない。なんたって君は普通じゃないのだから」

「おいおい、ハリウッドでも天才子役とよばれる子供は思春期の頃くらいは役者業をやめた方がいいって言われているだろ？」
「役者とは話が違うだろう！」
「へイ、そう熱くならないでよ」
ただでさえ外見によって目立つ二人である。注目を浴びてきていることもあり、夏音は鼻息を荒くしているジョンにバニラテの二杯目をすすめた。
すると、ジョンはぶるぶる震えたと思うと、とたんに肩を落としてうつむいた。
「夏音は……あの世界に戻らなくても平気だというのか？」
はじまった――と夏音は思わず天井を仰いだ。
（勘弁してくれー……このアメコミのヒールみたいなナリしてる奴が小鹿みたいに縮こまってんなよー）
目の前でしょんぼりとしている男は、今この瞬間までこの男の体を覆っていた屈強なオーラの鎧をすっぽり脱いでしまったようだ。
これをやられた人間は思わず、母性本能らしき感情をくすぐられるという七不思議の一つだ。さすが末っ子。さすが「泣き落としのジョン」。
「だがそれは通用しないよジョニー坊や！」
「そんな！　頼むよー！」
純真無垢な少年の瞳で詰め寄ってくるジョン。
夏音はただちに帰りたくなった。
夏音は上を向いて視線を彷徨わせた後、びしっとジョンに人差し指を突きつけた。
「なら、これだけははっきりしておこうか」
ジョンは姿勢を正して夏音に向き合う。
「こっちの高校を出るまでは以前のようには活動する気はない」
きっぱり言い放った夏音の言葉にジョンはずどんと顎からテーブルに沈んだ。
「待ってジョン！　そのタイタニックでも沈められそうなご自慢の

アゴでテーブルを割る気!?　だから、まったく活動をしないという訳ではないんだって!」
「え、それは本当!?」
ジョン、蘇生。
「ああ。スケジュールさえ合えば、レコーディングとかなら受けてもいいよ。それとカノン・マクレーンとして公に活動するのは無理!　それと学校がある日は夜じゃないと無理!」
夏音が挙げた活動内容をゆっくり頭の中で咀嚼したジョンは、しばし巨大に割れたアゴに手をあてたが、瞬時に手帳を取り出した。
「なら、早速このアーティストのレコーディングがあるんだけど、どうだろう!?」
「早いな!?」
そうと決まればすぐに動き出すジョンに苦笑しながら、夏音はしばらく二人で予定を合わせた。

しばらくして話もまとまったところで、ジョンは小腹が空いたと料理を頼んだ。
ジョンはステーキ定食。ポテト。牛丼。ナポリタン。マルゲリータ。それだけでは飽きたらず、食後にジャンボパフェを持ってくるようオーダーした。
「日本のお店は一品の量が少ないね」
「向こうとはいろいろ規格が違うんだよ」
そんな会話をしながら、二人は料理を楽しむ。
夏音はこれでも序の口、というジョンの相変わらずの食の量に呆れたが、同時に懐かしさが沸き起こって頬をゆるめた。
「こんな光景も、久し振りだね……」
「ん、何か言ったかい?」
「何でもないよ」
食後にパフェとコーヒーを楽しんでいたジョンはふと夏音に質問をした。

「ところで、クリスとは連絡を？」
夏音の表情がその瞬間、固くなる。
「たまに、ね」
「そうか。彼も寂しがっているんじゃないか？」
「まぁ、立花家の奇行は今に始まったことじゃないし。初めの方に……そうだね、去年の夏に一度遊びに来たよ。それからも二ヶ月に一度くらいは電話をしている」
夏音の語ったそれは全くの嘘である。日本に来てからアメリカから自分を訪ねてきた知人はいない。誰にも居場所を教えていないのだから。
「うん、ならよかった。この間、クリスとマダム・ナーシャがコラボレーションしたシングルが出たが、もう聞いたかい？」
「もちろん。相変わらず、といったところで……」
「ところで、マークは未だに夏音がいなくなったことで騒いでいるらしいけど」
「そうらしいね……最初のうちは一日に三回は熱烈な電話が携帯に来たよ。すぐに解約したけど」
その時のことを思い出し、夏音はつい青くなった。
「仲が良かったからね」
「……そうだな」
ジョンとの会話は楽しい。心の芯がぽかぽかしてくる。
しかし、夏音はこれ以上話しているとあまりに向こうにいた頃のことを思い出してしまう。
すぐに今を捨てて戻りたくなるくらいな……。
「どうしようもないな……」
夏音が目を押さえて突然そう漏らすと、ジョンは口をぬぐって夏音にこう言った。
「君が後悔してはいけないよ」
「Ｉ　ｋｎｏｗ．．．．．．」
「君がどう生きようと、僕は――僕らは君のことを好きであり続け

るし、君の生き方が好きだよ。君らファミリーはどこかぶっとびすぎている感は否めないがね」
「さっきはあんなに喚いていたクセに大人ぶって」
夏音は拗ねるように口をとがらせた。
「僕は君のことをずっと妹のように思っているからね」
「ほう……俺にそんな冗談を叩いたらどうなるか忘れたのか？」
ジョンが最後に楽しみにとっておいたパフェのイチゴがまるごと夏音の口におさまった。

ジョンはこれから都内のホテルで人と会うらしい。
そろそろ時間だと言って、別れることにした。

「とにかく夏音。今日は君に会えてよかったよ。体には気をつけて」
「そっちこそ。日本にはまた来るだろう？　その時はもう少しゆっくり、ね。父さんと母さんもいる時に」
そう言ってもう一度ハグをしてジョンはタクシーに乗って去った。
それを見送ってから、夏音はすっかり日が暮れてしまった夜の道を歩き出した。
外は風が出てきて、少し寒い。
ふと浮かんだのは軽音部の皆の顔だった。
そのことに少し驚いてから、顔を少し赤くさせて夏音はポケットに手をつっこんで歩き続けた。

帰宅後、抜群のオーディオ環境がそろっているリビングで録画していたアニメを真剣な眼差しで鑑賞していた夏音。携帯のバイブが鳴り、それを一時停止せざるをえなくなったことに舌打ちをした。
「澪からだ」
【夏音、大変だ。唯が追試で合格しなかったら軽音部が廃部になってしまうらしい……】

「Ｈｏｌｙ　ｓｈｉｔ．．．．．．」
夏音は即座に返信した。
【唯は馬鹿だねー。けれど唯には頑張ってもらわないとね！　まあ、何とかなるさ！】
「送信……と」
夏音は無駄な時間をとった、と再びリモコンをいじってアニメを再生したが、またもや澪からのメール着信で中断させられた。
【そうだな……何とかなるはずだな！】
澪から返ってきた内容に、うんうんと頷いてからいざ、とリモコンを握ろうとしたが、メールの文章に続きがあることに気がついた。
【ところで、夏音さえ迷惑じゃなければ今度……私のベースをみてもらえないかな？】
思わず二度見してしまった。
「もしかして……こっちが本題か？」
まさか、唯の件がフェイントだとは思わなかった。彼女にとって唯と廃部の件は軽いジャブだったということだ。
夏音は、それとなくこの文章を作った人物について思い浮かべてみた。
あまり自分を出さない彼女のことだ。この文を打つのにどれだけの勇気が必要だったのだおる、と想像する。おそらく顔を震える手でおそるおそるメールを打つ澪の姿が想像できて、笑ってしまった。
「いいよー、と」
了解のメールを送信して一分も経たないうちに澪から着信があった。
「澪から……？」
夏音は首をかしげながら電話に出た。
「もしもし、澪？　どうしたんだ？」
『も、もしゅ……夏音ですか？』
「夏音ですよー」
『べ、ベースの件本当にいいのか！？』

「いいけどー」
『あ、あの……このことは他の人には内緒にしてもらいたいんだけど』
「何で？」
『恥ずかしいからに決まってる！』
堂々と言われても……と夏音は通話相手に苦笑した。
「ふむ……じゃあ、どこで見ればいいの？」
『あ、部室はだめだよな……どうしようか……』
「俺の家でもくる？」
「はぁーーっ！！」

ぶちり。
ツーツーという音が通話終了を教える。

「Ｗｈａｔ　ｔｈｅ　ｈｅｌｌ　ｈａｐｐｅｎｅｄ！？」

その夜、悶々と女心について悩んだ夏音であった。

第六話（挿絵あり）

アリとキリギリスという童話がある。この物語は実に教訓めいている。誰もが一度はこの物語に触れ、日頃から努力を惜しまない事の必要性を説かれただろう。それを踏まえた上で、ど真ん中で後者にあてはまる少女は友人の前で膝を折って咽び泣いていた。

「という訳で澪ちゃん助けでー！！！」

「えー、勉強してきたんじゃなかったの！？」

足下にしがみついてくる唯に仰け反った澪は驚嘆の声をあげる。それを横目で眺めていた夏音は大きな溜め息をついた。

「こうなると思った」

何とも間抜けな部の危機である。

事の始まりは唯が赤点をとった事が発端である。誰もが驚愕に顎を落としそうになる点数をたたき出した唯はもちろん追試を間逃れるはずもなかった。部員である前に一人の高校生である生徒は学業を疎かにした上で部活動に励むことなど許されない。文武両道を目指し、学を修める者として本末転倒にならないように、厳しいペナルティが用意されているのだ。

追試で合格しなかった場合、部活動停止。一人でも抜けてしまえば廃部一直線の軽音部としては、何としてでも唯に追試を乗り切ってもらうしかなかった。まさに、唯の双肩に部の命運がかかっていると言っても過言ではないのである。

「だーいじょうぶ！　今度はちゃんと勉強するもん」

と余裕風を吹かせていた唯に根拠不明の不安を抱きながら、この一週間を過ごしていた一同であったが、あろう事か唯が泣きついてきたこの瞬間こそ、追試の前日である。

今さら切羽詰まったのか、唯は泣きながら土下座した。その年にして、見事な土下座である。

誰もが暗澹たる表情で顔を見合わせた。
「どうするこの馬鹿？」
と視線を交わす。澪が夏音の方を見詰めてきたが、肩をすくめて首を横にふる反応にむっとした表情をした。
役に立たない唯一の男を振り切り、立派な男気を備えた彼女は仲間のために救いの手をのばす事にした。
「よし。今晩特訓だ！」
澪が救世主のごとく高らかにそう宣言した。

「つ・ま・り……勉強会……あるよねあるよね。学園ものには外せないよね！」
「何をぶつぶつ言っているんだ夏音？」
「何でもないよー。Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！！」
律曰く、澪は一夜漬けを教えこむエキスパートらしい。非常に頼れる澪を筆頭に学校が終わってから、時間が許す限り唯に勉強を叩き込むという力押しの作戦がたてられた。
ということで放課後、唯の家に集まって勉強会が催されることになった。

「今日はお父さんが出張でね、お母さんも付添いでいないから気兼ねしなくていーよ」
と唯は語る。
「あれ、妹がいるって言ってなかった？」
妹が一人いる。律はそんな話が前に出ていたような気がして尋ねた。
「うん！　妹は帰ってきていると思うー」
「それだとお邪魔にならないかしら？」
ムギはかえって遠慮して言ったのだが、唯は大丈夫と気楽な様子

で重ねた。唯が良くてもその妹が気にするのでは、という沈黙ができあがる。

黙々と前を歩く夏音は、背後の三人の会話を聞きながら、じっと思案に耽っていた。

（思えば、日本で年が近い人の家に呼ばれるのは初めてだ）

一年以上も日本に滞在しているくせに、一度たりともない。

（律やムギはやたらと唯の両親のことを気にしているようだ。友達の家に行く際に何か作法みたいなものがあるのだろうか）

少なくとも、自分の観てきた作品にそんな描写はなかった。日本人としては当たり前すぎて、丁寧に描かれていなかったのか。もしくは自分が見落としてしまったのか。

謎が深まるばかりだったので、その横を歩いていた澪に声をかけた。

「ねえ。日本では友達の家にあがる時に何かしなくちゃだめなの？」

あまり大っぴらに聞かれるのも恥ずかしかったので、顔を寄せて澪に耳打ちした夏音であったが。

「ひぃっ！」

「え？」

今、悲鳴らしきものが飛び出たのはこの目の前の娘からだろうかと夏音は澪を凝視した。

「……」

「……」

耳を押さえて夏音から距離をとった澪。ぷるぷる、と震えている……いや、わなわな、だ。

「い、いきなり耳元で息を吹きかけるなんて……っ」

澪は自分を守るように腕を抱える。見事に顔が紅葉していた。

「あ、ごめんなさい。くすぐったかった？」

夏音はすぐに頭を下げた。確かに耳元で言葉を発すると息がかかってしまう。しかし、そんなにも反応するほど厭だったのだろうかと夏音は内心で傷ついた。

数日前の電話の件といい、最近の澪の様子はなんだかおかしかった。なんだか避けられているような……しかも、そんな反応は自分限定のようなのだ。なんとか気を落ち着かせた様子の澪は夏音が訊きたいことがあるのだと思いだしたようだ。

「あ、私こそごめん。何か訊きたいのか？」

「いや……そのことはもういいや。それより、ベースの件なんだけど。俺の家はいつでも空いているし、澪が暇な時は俺の家に来て話そうかなと」

「そ、そのことなんだけど！」

驚いたことに、今度は澪の方から夏音に顔を寄せてきた。若干表情が固い、というより怖い。少しの時間で驚くほど表情がころころと変わって面白いと夏音は感じた。

「その話は今度にしよう。私から頼んでおいて悪いんだけど、今はみんながいるから」

「別にいいけど……そんなにみんなには知られたくないの？」

「そりゃ、そうだよ！」

「わかった。この話は今はやめにする。それより、もう着きそうだしね」

「あ、案外歩いてすぐだったな」

澪とやりとりをいくらか交わしているうちに、唯の家に着いてしまった。

「さーみんなあがってあがって！」

唯がごく自然な動作で玄関で靴を脱ぎ、皆に声をかけた。

「お邪魔しまーーす！！！」

澪、ムギ、律の声が重なる。遅れて、夏音も「おじゃましまーーす！！！」と従う。声がひっくり返った。

すると、すぐに奥から可愛らしい声が聞こえてきた。

「お姉ちゃんおかえりー」

ぱたぱたと奥手から現れたのは、まさに唯に瓜二つの少女であった。少女と唯の相違点といえば髪型くらいで、後は見分けがつかない程そっくりである。夏音は「妹って双子だったのか」と瞠目していた。髪型を変えれば見分けがつきそうもない。

「あら、お友達？　はじめまして！　妹の憂です。姉がお世話になってます！」

彼女はしっかりと頭を下げて夏音らに挨拶をしてから、人数分のスリッパを用意し始めた。

「スリッパをどうぞ」

初っ端の挨拶から、その所作や気配りに至るまでの完璧さを呆気にとられて見守っていた四人であったが、全員が同時に同じ感想を浮かべた。

（できた子……！）

そして夏音は靴を脱いで家にあがる三人の一挙手一投足を鷹のような眼で見詰め、それに倣ってささっと唯の家にあがった。唯の部屋は二階にあるそうで、何故か夏音は律に小突かれて、先に階段を上らされた。意外に急な階段だ。そのまま唯の部屋へ案内され、腰を下ろした。

とたんに落ち着く他のメンバーだったが、一人、夏音はきょろきょろと唯の部屋を見回した。

（これが、日本の女の子の部屋か……いいにおいが充満している……俺、ここに居てもいいのかしら）

気付かれないように鼻を動かす。ずぼらそうな唯であったが、意外に部屋の中は整理されていて、部屋の色彩も女の子っぽい彩りに満ちている。おまけにどこか甘い匂いがする。

「おいおい、夏音～。何をそんなにキョロキョロしてるんだ～？下着なら、たぶんそこの――」

律がそわそわと落ち着かない様子の夏音にちょっかいを出そうとしたが、笑顔の澪に沈められた。それに全員が苦笑していると、できた妹ちゃん――名は憂――が人数分のお茶と茶請けを携えて現れ

た。

もはや、皆彼女に喝采を与えたいところであった。

しばらく憂は普段の姉の話や自らの志望校の話などをすると「ゆっくりして言ってくださいね」と言い残して下に降りていった。律が「嫁にしたい……」と小さく呟いていた。

さて、とさっそく澪が唯の勉強を見始め、ムギもそれに付き合う。

夏音は煎餅をばりばりと食べ続けながら、それを見守っていたが――、

（超、気まずい）

何もすることがない。何かに縛られたようにその場を動くことができないでいた男の子、夏音・十七歳であった。

同じように勉強を教えるのは澪とムギ任せの律も退屈を持てあました様子で落ち着きなく部屋をうろうろしていた。しまいには棚にある漫画を勝手に漁り、ベッドに寝転がって大声で笑う始末であった。

よって澪の拳固が彼女の頭に突き刺さった。

部屋の片隅に人形よろしく置かれた律は自分と同じように手持ちぶさたで大人しくしている夏音に目を向けた。

（律が見てる……知らんぷり）

かまってオーラ全開の律に巻き添えをくらって怒られたくない。だが夏音の心境など知らない律はぐいっと身を乗り出してきた

「おやおや、夏音くんたら緊張してるのかなー？　女の子の部屋は初めてー？」

（調子にのりだしたなこいつ）

「そんなことはない」

夏音は面倒くさそうに律に視線を向けずに答えた。

「まーまー、まるで借りてきた猫のようですわよん。あ、一度借りてきた猫のようだって言ってみたかったんだよなー」

「知るかっ！！」
好き勝手言ってくる律にたまらず声を荒げた夏音であったが、バタンと参考書を机にたたきつけた澪に睨まれた。冷たい目線である。
「夏音……今、勉強中してるんだ。ちょっと静かにしてくれないか」
「っっぐ……Ｄａｍｎ！！」
夏音は何故、自分だけが睨まれなければならないのか、という理不尽さに震えた。澪に怒られた夏音を見て、律はにやにやしていた。それも盛大に。思わず律を睨みつけたが、これ以上関わったら自分が損だと考えた。「はぁ」と溜め息をつき、力が抜けたように夏音は唯のベッドに頭を乗っけた。
（律はあまり相手にしない方がいい……）
この短い付き合いの中で、しっかりとそれだけは学んだ夏音であった。
（そういえば……）
夏音は先ほど、憂と皆との間で交わされた会話を思い出す。

「憂ちゃんは何年生？」
「中三です」
「へー、てことは十四歳かな。唯の一つ下なんだね」
（と、いうことは……）
誕生日の関係もあるだろうが十四歳。
（三つ下なんだ）
それ以前に、夏音は今まで年の差など気にしていなかったのだが、軽音部の皆とも年齢が違うことをその時初めて意識した。
律が現在十五歳ということは、二つ違い。まだ誕生日がきていない限り、全員二つ下。
（い、今思えば一人だけオッサンじゃん！）
問題はこのことを軽音部の誰にも言っていないということだ。澪も年齢に関しては気付いていないというのは間違いない。
（このことはみんなに言った方がいいのだろうか……）

言うにしても、どんなタイミングで切り出せばよいものか。

例えば、今この瞬間にカミングアウトしてみたら――

「Ｈａｙ，　Ｌａｄｉｅｓ！！　勉強中に悪いが、実は俺って夢見るセブンティーン」

「ふーん」

と唯。

「あら、どうりで」

ムギさん……。

「すまない、今勉強教えているから」

澪は見向きもしない。律は寝ている。

――という未来映像が浮かぶ。

（ま、いいか。いずれ知られる時が来るだろうし）

年の事を考えると、急に自分が大人になった気分であった。大人かそうでないか、それは周りの環境がそうさせるものなのだとこの短時間に悟った夏音・十七歳であった。などと考えているうちに、彼の思考は白く溶けていった。

「なんだよ、夏音寝てんじゃんー」

「おい、律！　いい加減にしないと……！！」

夏音がぼんやりと眼を開けると、みしりと首の筋がきしんだ。

「首が痛い……」

寝ぼけ眼のまま体を起こすと、軽音部の皆と見知らぬ少女がテーブルを囲んで雑談していた。

「Ｏｏｐｓ．．．．．．．いつの間にか眠ってしまったのか」

唯は夏音が起きたことに気付くと、声をあげた。

「あ、夏音くん起きたんだね！　ごめんね、あんまり気持ち良さそうに寝ていたから起こさなかったんだー」
「いや、俺こそ寝ちゃってごめんよ」
頭をかきながら姿勢を正した夏音は、いつの間にか先ほどまで勉強道具が広げられていたテーブルに美味そうなサンドイッチが広げられているのを見た。
「あなたが立花さんね。はじめまして、真鍋和です」
珍しいアンダーリムの眼鏡をかけた理知的な雰囲気の少女が夏音に話しかけてきた。
「夏音でいいよ。こちらこそ、よろしく」
「サンドイッチ作ってきたから、よかったらどうぞ」
夏音は目の前の美味しそうなサンドイッチを差し入れてくれた少女を目を輝かせて見つめた。
「ありがとう！　お腹空いてたんだ！」
それから、ひとときの間サンドイッチをつまみながら和が唯の小学校時代のエピソードなどを語った。どうやら、唯とは幼稚園以来の幼馴染らしい。
幼馴染といえば、澪と律も小学校から一緒で、掘ってみればいろんなエピソードがあるもので、皆で笑いながら楽しい時間を過ごした。
しばらくして和はあまり邪魔したら悪いから、とすぐに帰った。

唯の勉強はその後すぐに再開された。仲間を巻き込んでいるという自覚によって集中を増した唯は次々と問題を解きこなしていき、夜が更けて数時間が経ったところで澪の及第点が出て終了となった。
「よし！　これだけ解けたら大丈夫だろー！」
「これで追試もばっちりね！」
長い時間、自分の勉強に付き合ってくれた澪とムギに唯は深々と頭を下げて拝んだ。

「本当に言葉もありません……うぅ」
「今度きちんと返してもらうからな！」
流石に何時間も勉強につき合っていた澪の顔に疲れが浮かんでいる。それでも仲間のため、と頑張った甲斐がありそうだった。
「あれ、そういえば律はどこに行ったんだ？」
途中からやけに静かになったと思ったら、部屋の中に姿がない。澪としては好都合なのだが、もしかして帰宅したのかと疑いかけたところで、もう一人の人物が頭に浮かんだ。
「夏音は？」
「ふふ、そこにいるじゃない」
ムギが忍び笑いを浮かべて一方を指さす。
「……」
「寝てるねー夏音くん」
「他人の家でよくこれだけ眠れるな……」
唯のベッドを占領どころか布団にくるまって安らかに寝息を立てている夏音を見て、澪は逆に感心の声をあげた。すやすやと自宅のベッドかというくらい気持ち良さそうに寝ている。澪はにやっと笑っておもむろにカメラを取り出した。
「ふふ、協力しないで寝ているからだ……」
後で写真を使ってからかってやろーくらいの軽い気持ちで夏音を写真に収めようとする。こういう手段はいつも自分がやられる側なので、こういう機会は滅多にない。やる側へまわった事への妙な高揚感を得ながら「ふふふ」と不気味な笑みを漏らした。
「睫毛長いな……」
ファインダー越しに夏音を撮ろうとしたら、その顔の造形に目が行ってしまう。おかしなことに、カメラを向けるとだんだんと角度やポーズにこだわりが出てきた。
何というか、気軽に撮ることのできない被写体なのだ。こうしてじっくりと写真に収めようとすると半端な形でシャッターを押す訳にはいかない。澪はモデルを撮影するカメラマンになったような気

分で、様々な角度を試し続ける。
「澪ちゃん、ここをこうした方がいいんじゃない？」
澪の思惑を察知したムギがそっと夏音の手を動かした。すると、誰もが「この寝姿！」と唸りそうな優雅な形になる。
「おおっ。これで画面の対比もばっちりだ！」
いつの間にか高度な部分にまで気を回していた澪は満足気に頬をゆるめた。
「髪はこんな感じでどう？」
「あー、いいな。そう、そんな感じ……あ、まさにそれ！　ムギ天才！」
「ここで顎をあとちょっとだけ……くいっと」
「くいっと！　そう！」
「唯ちゃん、これ点けるね？」
「うん！　あ、これ白い画用紙だけど役に立つかな？」
「ああ、頼む」
ムギがベッド上の照明を点け、唯がレフ板代わりに画用紙を支えた。
「まるでお姫様みたいねー」
ムギが恍惚とする中で、絶え間なくシャッター音が響いた。
「お前ら……何やってんの？」
部屋に戻ってきた律が理解できない光景に呆然と呟いた。

勉強会から数日。あの日、夏音を収めた写真がどうなったかは不明であるが、とっくに唯の勉強の成果が問われる日は過ぎていた。
今日は唯が受けた追試の答案が返却されてくる予定である。
部室ではいつものように茶菓子とお茶が振る舞われていたが、ふわふわとした雰囲気はない。むしろ全員が同様にそわそわとしてい

る。
　そんな中、夏音は部室のベンチで横になりながら持ち込んだ漫画を読んでいた。
「今日返却だよね……合格点とれてるかなー唯は」
　重たい空気に耐えきれなくなったのか、澪はあえて明るいトーンでそう切り出した。
「あ、あれだけ勉強したから大丈夫なはず！」
　ムギもはっとして、ひきつった笑顔で返した。夏音は何を大袈裟な、と楽観していたのだが、彼女たちの不安が伝染したのか、少し落ち着かなくなった。夏音とて、入ったばかりでこれから、という部活がなくなるのは避けたい。
　そうこうしていると、唯がふらふらと部室に入ってきた。その足取りはどこか覚束ない。本試験のテスト返却日の様子を彷彿させる雰囲気である。誰もが息を呑んで唯の答案をのぞき込んだ。
「ま、満点！？」
　皆、平沢唯の底力を見誤っていた。
　しかし、彼女がその満点を取るために犠牲にしたものは大きかった。
「ねえ……CだよC。嘘だろ？　あれだけ教えたよね！　コード覚えたじゃん！　何で忘れられるの！？　スーファミ並な危うさあふれるスペックじゃん！」
　夏音は滅多に声を荒げないと自負していたが、この時ばかりは混乱のあまり自分を抑えていられなかった。
　唯はせっかく覚えたコードを数学の神に捧げたらしい。唯は完全に今までのギター経験すべてを忘却の彼方にぶっ飛ばしていた。完膚なきまでに。
「コード覚えるところからやり直し……だな」
　先が思い遣られ過ぎて、唯をのぞく軽音部一同はがっくりと肩を落とした。

「だ、大丈夫だよ！　一度覚えたんだしすぐに覚えるから！　私、できるから！」

全員から諦念の目線を送られた少女も大概不遜だった。

ひとまず唯・追試事件がひと段落したところで。夏音は今、生まれて初めてカラオケボックスという所に来ていた。ただでさえ不安定な軽音部の先行きをますます不安にさせた唯であるが、それでも追試を頑張ったということでお祝いと打ち上げを兼ねてカラオケに行こうと律が提案した。澪はもちろん反対したが、よくよく考えれば自分も唯に苦労して協力したのだし、その苦労がこうして報われたお祝いと考えれば、特に行くことにはやぶさかではなかった。

一つの苦労が報われたが、また別の苦労が待ち受けている事はあえて考えないようにした。

「俺、カラオケって行ったことない！！」

と目を限界まで開いて興奮する夏音もいて、一気にカラオケムードとなったのであった。

うきうきと弾む気持ちでカラオケについていった夏音は、店内に入ってから子供のようにぎゃーぎゃーと叫んだ。

「わーわー！　狭い！　くさい！　ドリンクが飲み放題なの！？」

あはは うふふー、と子供のようにはしゃぐ夏音。軽音部のメンバーは仏のような目でそれを見つめていた。

「おっしゃー、トップバッターいきまーすー！」

「えー、りっちゃん最初に歌うのは私だよー？」

一部では早速、マイクの奪い合いが始まっていた。夏音は小部屋に案内されてから、そわそわと室内を観察していた。小さい部屋にディスプレイ画面とマイクがあり、歌本から歌いたい曲を選んで記載されているコードを機械に転送すると曲が流れるという仕組みらしい。画面に歌詞が表示されて、曲中の詩の進行などもわかるよう

になっている。
　結局、二人で歌うことにしたらしい唯と律が夏音の知らないＪ－ＰＯＰの曲を歌い始めた。
「ん……なんか……」
　夏音は流れてくるオケを聴いて違和感を覚えた。キーがちぐはぐな気がするのだ。聴いていて、音が気持ち悪い部分もたまにある。
「考えたら負け、か」
　どうせ素人が作っている音源なのだろう。こういう場合は気にしていたら楽しめないだろうと思い、何故かテレビの下にあったタンバリンやマラカスを打ち鳴らして大いに騒いだ。はっちゃけたら、もう何も気にならなくなった。
「最近のカラオケはずいぶん曲も増えて、マイナーなのも結構あるんだぞ」
　と夏音に語る澪はなかなか曲を入れる様子が見られない。一歩引いた様子で二人の歌を聴いているといった塩梅である。
「想像してたよりひどいね、伴奏が」
「んー……これでも昔よりはよくなったと思うけど。あ、でも私も音楽始めてから『この音違う』とかわかるようになったな」
「ふーん。ところで澪は歌わないの？」
　夏音は慣れない機械に苦戦しながらも曲を選んで、やっと機械に転送した後で澪に訊ねた。
「い、いや！　私はあとでいいよ」
　急に歯切れが悪くなった澪であるが、事情は言わずもがなであった。仲間内で歌う事すら恥ずかしいのだろうか。
「あ、澪ー。さっき澪がいつも歌うやつ入れといたからー」
　そこにマイクを通した声で律がぽつりと言った。
「え、えー！？　何勝手にやってるんだよ！」
　一気にうろたえた澪であったが、次の曲のイントロが流れだした瞬間、びくりと固まった。律がマイクを澪に手渡し、肩に手をおいた。

「初めての人ばかりだからって緊張するなよー」
意地の悪い笑顔でこういった律を盛大に睨んだ澪であったが、歌いだしの部分まで曲が進むと観念したように立った。
澪は、ふっと息を吸い込み、目を閉じた。
「Ｌｙｉｎｇ ｉｎ ｍｙ ｂｅｄ Ｉ ｈｅａｒ ｔｈｅ ｃｌｏｃｋ ｔｉｃｋ ａｎｄ ｔｈｉｎｋ ｏｆ ｙｏｕ．．．」
「Ｗｏｗ！」
イントロが始まった瞬間からそれが何の曲かわかった。夏音のテンションは最高潮に高まった。
マイクの当て方が悪いのか、声の調子が悪いのかわからないが、声量が大きいとは言えない。だが発音はいささか怪しい部分はあるものの、歌い方のニュアンスは本家に近いものがあって歌い慣れているといった印象を受ける。
夏音がゆらゆら揺れながら聴いていると、律が夏音にマイクを手渡した。顎で何かを促される。
歌え、ということなのだろうか。たしかに一緒に歌える歌であるが、他人の歌に割り込んで良いものか迷った。
サビに近づくあたりで、マイクをもった夏音に気がついた澪は夏音を見て恥ずかしそうにうなずいた。ＯＫということらしい。夏音は頷き返すと、緊張しながら澪に声を重ねた。
「Ｉｆ ｙｏｕ、ｒｅ ｌｏｓｔ，ｙｏｕ ｃａｎ ｌｏｏｋ．Ａｎｄ ｙｏｕ ｗｉｌｌ ｆｉｎｄ ｍｅ Ｔｉｍｅ ａｆｔｅｒ ｔｉｍｅ．．．」
夏音の歌声は、澪の声にかっちりとはまった。二つの伸びやかな歌声が混ざり合い、心地よいハーモニーを奏でた。澪はこの歌詞の内容を理解しているのだろうか。この年頃の少女が歌うにはやや早熟な内容であるが、澪はたっぷり情感をこめて歌いこなしていた。
「Ｔｉｍｅ ａｆｔｅｒ ｔｉｍｅ．．．Ｔｉｍｅ ａｆｔｅｒ ｔｉｍｅ．．．」
最後に澪が囁くように、詩の尾をそっと撫でるように、曲が終わ

った。
二人がマイクを置くと、拍手が起こった。
「二人とも、すごく素敵でした！」
ムギが顔を暗がりにも分かるほど顔を上気させ、タンバリンを叩いた。唯も、二人とも上手だねーと手を叩いて喜んだ。
夏音は初めて歌ったカラオケに達成感があったが、一方の澪は完全に力尽きていた。続けて、夏音が入れた曲が始まった。
「お、次は俺だ」
本家には程遠いストリングスの音を伴奏に夏音が歌い始めると、肩を落としていた澪をはじめ俯いて曲を選んでいた律までもが顔をあげた。先ほどの控えめのコーラスとは違い、ソロで歌う夏音は別次元だった。
日本人離れした声質、発声。また声量がとんでもなく力強く、そしてどこまでも伸びていくのではないかと感じさせる高音域まで出せる喉……かと思いきや、中音域に独特の粘りがあり、聴くものをとらえて魅せる。
何を隠そう、夏音はベースばかり弾いていたわけではない。自らのアルバム内でヴォーカルとして歌う事も稀ではなかったのだ。
歌に感情がこもる。これはなかなかどうしてできないことである。けれども、夏音はそれをやってのけてしまっている。
耳にそっと入る歌声は聴く者の感性を刺激して、うっとり惹き付ける。今、夏音の歌がこの小さな部屋に満ちて確実にその場を支配していた。夏音という存在が空間を震わせ、埋めていた。
やがて曲が終わると、ぼーっとしたメンバーに自分の歌はおかしかったかと訊くと、急いで首を横に振るのであった。
「上手いというか、凄まじいというか……」
律はぽかんと放心したような顔をしていた。
「私、少し泣きそうになっちゃった」
「わ、わだしも……」
「唯、すでに泣いてる……」

涙ぐむムギに、すでにいろいろ漏れている唯。身近な聴衆の反応に、夏音は顔を赤くした。

「いや、なんというか恥ずかしいな……」

まんざらでもない様子で頭をかいた。カラオケも悪くない、と夏音は考えを改めた。曲は次々と予約されているので、その場の空気はすぐに流れていった。

その後、はっちゃけたように「Ｔｈｅ　Ｗｈｏ」を歌いきった澪、「Ｈａｉｌ　Ｈｏｌｙ　Ｑｕｅｅｎ」を器用にも一人で歌いのけてしまったムギ、「レティクル座行超特急」でぶっ壊れた律、「日曜日よりの使者」で涙を浮かべて喉を枯らした唯。それに対抗して夏音も「スリラー」を踊りつきで熱唱して、軽音部一同は大いに沸いた。

軽音部のメンバーは全員歌がうまかったという意外な事実を発見して、その日は皆喉を枯らすほど歌って解散した。

解散したと思いきや、しばらくしてから夏音はメールである人物を呼び出した。ある人物とは、もちろん澪のことだ。呼び出した場所は夏音の自宅である。家の前でのんびり待っていると、とてとて歩いてくる澪が姿を現した。

「やあ、澪。ようこそ！」

夏音は緊張した面持ちの澪に両手を広げて歓待の意を示した。

「で、でかい！」

澪は夏音の家の規模に驚いた様子。震えながら、開いた口が塞がらない様子であった。夏音の家は、高級住宅街のど真ん中に位置しており、それでも周りの家より迫力があった。

「そうかな？」

と一言だけ返し、夏音はいつまでも驚いている澪を家の中に案内した。

「お、おじゃまします」

夏音は澪が靴を脱いで家に上がるのを見てとりあえずリビングに案内した。
「お茶淹れるね。座っててよ」
澪に楽にするように言って夏音は台所へ消えていった。澪は身を強張らせながらリビングを見回し、中央にでっかと置かれているソファーに座った。そして再びきょろきょろと室内を見渡した。白を基調としたモダンな空間を目指して設計されたらしいリビングも、また広い。
二階と吹き抜けになっている部分があり、開放感がある。何よりテレビのサイズが自分の家の物より二回りはでかい。異性の家に単身であがるのが初めてで、緊張をゆるめる瞬間がなかった。あんな外見でも異性に違いない。
澪が借りてきた猫のようになっていると、クッキーと紅茶を淹れてきた夏音が向かい合って座った。
「さぁさぁどうぞ。買い置きのお菓子なんですがー」
先日の憂と言っていることがまったく一緒であった。それをしっかり覚えていた澪は思わず噴き出してしまった。
「いやー、あれだよね。買い置きのお菓子で申し訳ないって……謙虚な日本人らしい言葉だね」
確信犯的ににやりと笑った夏音は一口クッキーを頬張った。
「ところで、だ。もう周りを気にする必要もないでしょ？」
どかっとソファの背もたれに寄りかかりながらリラックスした様子で夏音が澪に話を促した。
澪は少し沈黙の後にこくんと頷き、ぽつぽつと口を開いた。
「私は既に夏音の正体……カノン・マクレーンだって知ってる」
夏音は静かに話し始めた澪の言葉に頷いた。
「そうだね。澪がどこまで俺の事を知っているのはわかんないけど」
「もちろん私だって全部は知らないけど。もともと聞いたことがあった名前だったし、音楽雑誌とかでも名前が出ているのを見た事があったから、そのくらいしか知らないんだ」

澪は「気を悪くしたらごめん」と続けた。
「きちんと曲を聴いた事もあまりない」
「あ、そうなの」
それは流石にショックだった。夏音は気を紛らすように紅茶をすすった。
「クリストファー・スループの弟子みたいなものだっていう認識かな。けど、私と変わらない年の男の子がすでにプロの世界で売れているって事は衝撃だったよ」
再び口を開いた澪は、それから今まで自分が夏音に抱いていた感情や認識していることをほとんど打ち明けた。
夏音はそれを黙って聞き、時折うなずいたり眉をひそめたりした。
「ということで……私は、夏音に今の私のベースを聴いてもらいたいんだ。そして評価してほしい。本物の、プロの意見で」
話をすべて聞き終わった夏音は、澪が自分に最初抱いたという感情も含めてすんなりと受け入れた。確かに、自分と同世代の人間がそんな成功を収めているとなれば、等身大の人間として自分と比較するなんてことはしない。まったくの別世界の人間と思って納得する他ないのである。
ただ、そんな人物が目の前の現実となって現れた時、人はどんな反応を起こしてしまうのだろうか。
嫉妬。保身、排他。澪は、ごく当たり前に人間に起こりうる感情を何段階も経た後にこうして夏音に向かい合っている。
その上で彼女は、夏音に憧れていると言った。
そこまで言われると、流石に夏音も顔に血が集中しそうになるのを止められなかった。
「よーーーーく分かったよ、澪」
膝をぱんと叩いて、夏音は身を乗り出した。
「ぜひ、聴かせていただきましょう……澪のベースを」
その言葉を聞いた澪は、ふわっと花が開いたように笑った。
「よろしくお願いします」

夏音は澪を自宅のスタジオに案内した。
防音のドアをあけて中に入った澪は、一の句も紡ぎだせなかった。
「さ、さすが……というか、もう夏音のことでは驚いていられないな……」
心臓がいくつあっても足りないといわんばかりだが、自分はそこまで他人を驚かせるような人間ではないと夏音は心の中で反発した。
澪は自前のベースを取り出して、調律をすませてからスタジオのアンプにつないだ。
「うっ、つまみやスイッチがいろいろありすぎてよく分からないな……」
普段、自分が触れる機会のない高級なベースアンプ。澪はヘッドに存在する幾つものつまみに目眩がしそうになった。
「ゲインとマスターがコレ。エンハンサーは使わないで。コンプもいらん。これがベース、この二つがハイミッド、ロウミッド。これがトレブル、プリゼンスね……とりあえず今はフラット気味でいいよ」
初めて見るアンプに戸惑っている澪に、夏音はアンプのつまみを一つずつ説明した。セッティングが整うと、椅子を用意してお互いが向き合う形で座る。澪はしきりに髪をいじっている。彼女の緊張が高まっているのがはっきり伝わった。
「あ、あの……」
澪の顔は紅潮していた。
「なに？」
「笑わないで、ね」
上目遣いで夏音をちらっと見た澪に夏音の理性は吹き飛びそうになった。
（な、なんて高度な技を使うんだ……）
ベースを聴く前にＨＰをごっそり削られてしまった。
＞ｉ２５１５３―３０２９＜

澪の手がネックに触れる。左手が弦を撫でるように動き、ベースの低音が鳴り響く。フェンダーJのパッシヴベース特有の温かいふくよかな音。彼女が弾く曲はクリームの楽曲の一つにアレンジを加えたものだ。

よくコピーできていると夏音は感心した。楽曲をそのまま、という事ではなくて演奏者の手癖やニュアンスを表現しているという意味だ。もしかして、澪はジャック・ブルースに影響を受けたのかと思った。時折入るオカズを聴く限り、ジャズやブルースといった音楽の要素が今の澪にもいくつか引き継がれているように思えた。おそらく、彼女はそっち方面の音楽を学んだというより、コピーしているうちに身につけたのであろう。

それからしばらく続く彼女の演奏にじっと耳を傾けた。真剣な表情で音を紡ぐ彼女が全力で自分に訴えようとしているもの。彼女が築き上げてきた技術を感じとろうとする。

五分ほど弾いたところで、澪は演奏をやめた。演奏を終え、澪は恥ずかしそうに俯く。

「何から言っていいやら……」

そう口にした夏音に澪は背筋を伸ばしてごくりと生唾をのむ。

「まず、澪は上手いね！　うん、十分上手いと思うよ！」

「え？」

澪は夏音から飛び出た言葉が想像していたのと違ったのか、素っ頓狂な声を出した。

「で、でもこんな実力でプロからすれば下手っぴなものじゃないのか？」

「プロだから、とかそういうのはよく分からない。もちろん、言いたいことはたくさんあるよ」

そしてまずはねー、と思案してから夏音はいくつか彼女の演奏を聴いて思ったことを挙げた。

「良い音楽を聴いてるなぁ、って思ったよ。音については仕方がな

いけど、ピッキングが弱くて輪郭がぼやぼやだったかな。それにリズムキープ怪しくて、ところどころ崩れそうになる瞬間があるのとか……それぐらいかな」

ぽんぽんと出た夏音の言葉に素直に頷いていたが、澪はまだ何か物足りないような表情を隠せないでいた。

「ちなみに、だけどジャコを聴いたことは？」

夏音がふと尋ねた人物に澪が反応した。

「名前とかは知ってるけど……」

「ナルホド……」

それで彼は数回うなずくと「それくらいかな」と言った。

「……他には？」

「他？」

「何かないのか？　私のベースの感想っていうか、感じたこととか！」

「感じたこと……そうだな……上手いけど……上手いっていうか、下手ではないって感じ」

ぐっさりとどでかい言葉の杭を澪に突き立てた夏音であった。もちろん、澪は心に相当な深傷を負った。瞬く間に真っ白な灰になってこれから消え飛びそうになった澪に、夏音は泡を食う。

「ご、ごめん！　言葉が悪かった！　なんて言えばいいんだろう……澪がさっきからプロとしての意見を頼む、って言っていたのは自分がプロとして通用するかってことなんだろ？　そういう意味では、プロになることはできるとは言えるよ？　むしろ、あなたはプロになれませんよーって断言することなんてできないよ。技術をひたすら磨けばたいていプロと呼ばれる人種にはなれる。ただ……」

夏音が間を置いて澪と目を合わせる。澪は夏音の言葉の先を待った。

「ただ……？」

「上手いだけでは、通じないんだ……俺たちの世界ではね」

「……」

「要するに、簡単に言ってしまえばワンアンドオンリーがない」
「個性ってこと？」
「そう。個性」
「プロにも何種類もの人間がいるのさ。言ってしまえば、その分野でお金をもらって食っていく人間はみんあがプロだ。ただ、俺が立っていた場所は……周りの人間は個性をもっていたよ。その人の音をもっていた……俺も、その内の一人だった」
自慢でも過信や思い上がりではない。夏音はそのことだけは自信を持っている。夏音は続けて言う。
「だから、澪が今すぐプロに通じるなんて到底ムリ……残酷に聞こえるかもしれないけど」
はっきりと言われ、澪はあからさまに落ち込んだ様子であった。それでも納得したようにうなずき、いっそ清々しいような笑顔を浮かべた。
「そうか……はっきり言ってくれてありがとう。別に、プロ願望が一番にあるわけではないんだ……ただ、今はベースが私の中で大きな部分を占めているから。どこまで通用するのか、って気になったんだ」
「なるほどね。ただ、勘違いしないでね」
夏音は大事なことである、と一度切ってから話し始めた。
「澪がこの先もプロになれないとは言っていない」
「え？」
「もちろん、必ずなれるとも言えないけどな。今聴いた限りでは、澪は伸び代が十二分に余っていると思うよ」
「と、いうことは？」
「ということはも何もない。要はこれからってことさ……よし、決めた」
この後、澪にとっての衝撃発言を夏音はぶちかます。
「俺が澪を鍛えてあげる！　だから、これからは俺の家に来てレッスンだね！」

その言葉を聞いて、澪は思わずベースを落としそうになった。
「な、な、そんなこといいのか？　迷惑だろう！？」
その反応を見て、夏音はにやにや笑う。
「あのさ……最初から、そのつもりだっただろ？」
すると、澪の体がぎくっと跳ねて涙目になった。
「そ、そんなつもりじゃ！」
「ふふ、まあまあ！　澪の考えはよーく分かったから」
「ち、違う！　最初からそんなつもりなんかじゃ！」
にやにやを止めない夏音に羞恥心で頬を染めて慌てて訂正を入れる澪であったが、ふと夏音は表情を和らげて澪の頭に手を置いた。
「別に恥ずかしがることじゃないよ。澪もベーシストだから、そういう風に俺を見てしまうこともわかる」
澪は思わず、声を呑んだ。その声がわずかに震えていることに。
「ただ……俺を遠ざけないでくれ」
「と、遠ざけてなんかないよ！？」
澪は急いでそれを否定した。
「俺を、ただの夏音だと見てくれないか」
「そ、それは……うん、夏音は夏音だよ。他の何者でもない……んじゃないの？」
「なら、いいんだ。ただ、本当の事を知っているのは澪だけだし……澪は何だか最近様子がおかしいし……やっぱり打ち明けたことが原因だったのかなって」
澪はそれを聞いて、後悔した。自分の態度ははっきりと彼に伝わり、悩ませていたのだ。
ただ、才能をうらやみ、さらにあわよくばと彼を頼っている自分を恥じた。
「ごめん……夏音のことを見る眼が少し変わったのは事実だ……けど、私はこれから夏音の等身大の姿をもっと見ていこう思っている！」
「……っ」

澪にしては珍しい、かなり恥ずかしい発言である。澪も言ってしまった後に、それに気付き顔が真っ赤になった。
「あ、ありがとう……そう言ってくれると嬉しいよ」
「……ハイ」
少し気まずくなった。

二人はスタジオで様々な話をした。濃い、音楽の話。夏音の生い立ちやスループ一家との出会いなど。それに対し、澪は表情をころころと変えて驚き、笑い、共感した。中でも、夏音の両親も二人とも名の知れたミュージシャンだということは澪を大いに驚かせ、納得させた。ちなみに、カノン・マクレーンのマクレーンは母親の旧姓を使用しているのだという話も初めて知る事実であった。
話し込んでいるうちに、気がつけばもう一般家庭で言うところの夕食の時間をとうに過ぎている。
今日はもう遅いから、と澪は帰ると言った。夏音もそれに賛成して、もう遅いから送っていくと言った。
「別に送ってもらわなくて大丈夫だぞ？」
しかし澪の意見をはねのけて夏音は外で待っていてと言った。言われた通り、玄関先で待っていた澪だったが、ふとエンジン音が聞こえたと思ったら大型のワゴンがガレージから出てきた。
「……ん、んなっ！？」
運転していたのは夏音であった。
「Ｙｅａｈｈｈ！！！　ｈｕｈ！！！　乗んなな！」
運転席から顔を出し、カウボーイみたいなかけ声をあげ、白い歯を見せて陽気に乗れという夏音に澪は詰め寄った。
「な、何で夏音が車を！？」
「うんー、まあまあとりあえず乗りなさい」
それでも大人しく乗ってしまう澪であった。助手席に乗ってから、無免許運転、犯罪、警察といった恐ろしい単語が頭をめぐり激しく後悔した。

しかしながら遅かった。
やっぱ降ります、と言う前に車は発進してしまった。
「そんなに怯えないでいいよ。無免許じゃないから」
助手席でぶるぶる震えている小動物に夏音が苦笑しながらある物を差し出した。
「ん？　これは……免許？」
（何で夏音が免許を持っているんだ？）
頭の上に疑問符が何個も出ている澪は、どうやら本物らしい運転免許証を目を凝らして見た。
その生年月日を。
「え……夏音……お前……？」
澪がおそるおそる夏音の方を見る。すると、夏音は大口をあけて笑い出した。
「そうでーす！！　ボク実は十七歳でーす！！　向こうで免許とって一年経っていれば日本でもとれるんだよー！　まぁ、オートマ限定だけど」
アハハハと笑う夏音であった。もうやけくそだった。この際、カミングアウトしてしまえーと思ったが、これでどんな反応がくるか不安である。
夏音は横でしんとなっている澪をそっとうかがった。
もしかして、なんとか――
「えーーーーーーーっっ！！！！？？？」
――ならなかった。澪の限界であった。つんざくような澪の悲鳴をＢＧＭに大型ワゴンは夜の道を疾走する。
「あの、澪さん……何で僕はここまで怒られないといけなかったんでしょう」
夏音が実は年上だという事実を知らされ、度を失ったように錯乱して運転中の夏音の首を絞めて揺さぶった澪は現在、しゅんとなってうなだれている。
「ご、ごめん。つい弾みで……」

「別に年なんて大した問題じゃないでしょう」
「た、大したことなくない！　夏音は私たちより年上なんだぞ！？」
「うーん、そうだけど。まわりが全員年下っていうのはすごいなー」
夏音が間延びした口調でそう言うので、澪は溜息をついた。
そして真剣な口調で――
「夏音さん。それとも夏音先輩、の方がいいか？」
ハンドルを持つ手が滑り落ちそうになった。
「今、ゾワリと背中を何かが……頼むからやめてくれ……」
信号で止まったので、澪の方を向くとその信号機の照明にぼんやり照らされた横顔、頬が緩んでいるのがわかった。
「お前……からかっているな？」
「ばれたか」
夏音は少年のように笑う澪に肩の力が妙に抜けてしまった。
「そりゃびっくりしたけど。もう夏音のことでいちいち驚いていられないって思ったんだ」
落ち着いた声でそう言った澪に、澪はふぅと溜め息をついた。
「そうですか……でも、澪には何もかもバレてしまったな」
「なあ、みんなには言わないつもりなのか？」
澪は前から気になっていた、と夏音に訊ねた。だが、夏音は少し口をきかなくなり、やがてぽつぽつと喋りだした。
「そうだな……いずれ、必ず」
「まあ、夏音がそれでいいなら私は何も言わない」
「そうしてちょうだい」
それから無事に澪を送り届けた夏音は、早々に帰宅した。

第七話

「カノン、僕は日本の萌えとやらを見くびっていたようだ……」
「やっと理解したか。ようこそ、こちらへ。これからもっと見識を広めるといいよ」

夏音は日本の梅雨が大嫌いである。故に、自然と六月が嫌いという事になる。連日降り続く雨、雨、雨。息を吸うだけで水分補給できるのではないかというくらい湿気にまみれた外の外気、気が付けば肌がじっとりと濡れていることなど当たり前。お気に入りの服を着ても、じっとりと汗が滲んで気分が台無し。

肌寒い季節などとうに過ぎ、むしろ春の陽気すら懐かしく感じる程の熱気が幅をきかせている。善い人ほど早くいなくなる、というが心地良い季節も一瞬で通過してしまうのは悲しい。やっと自分達の元へ来てくれたんだね、と思ったらＦ１で言うとピットインしただけ。アーバヨ、と手をすり抜けていった。

ジョンとの再会以降、夏音の生活も徐々に変化を見せ始めた。普通の学校生活を送りながら、ジョンが持ってくる仕事をこなす日々は久しく感じていなかった修羅場の空気を思い出させてくれた。アメリカでばりばり仕事をこなしていた時は、まさに東奔西走。ばたばたと音楽に明け暮れていた。それでも、夏音はそんな生活を気に入っていたし、音楽の中に身を委ねる以外に他は必要なかった。

いかんせん不登校が続いたせいか、急激にめまぐるしくなった生活につい遅れを取るのは仕方がなかった。ジョンもその辺をしっか

り把握しているので、夏音にまわしてくる仕事量を絶妙にコントロールしてくれている。今まで苦労させていた分、早く慣れねばと意気込む夏音であった。

初めにまわってきたのは、某手数王と呼ばれる日本人ドラマーのアルバムへの参加。夏音は二曲だけ参加する事になっており、事前に渡された譜面を移動中に読んでスタジオへ向かう。こちらにはローディーがいないので、機材を運ぶのはジョンが手配した信頼できる人材が手伝ってくれた。何あれ、スタジオに着くと過去に共演したミュージシャンが数人いた。

何を隠そう、夏音の父である譲二にドラムを教えて事がある、という人物こそが中心人物であったのだから。

「お久しー。あンさァ送った譜面なんだけどー」

というような言葉から始まり、「アレンジなんだけどー」と言って九割以上の変更を申しつけてきた。まさか急にベース枠にすっぽり入る事になったのが夏音だとは思っていなかったらしくて、よもや今ある譜面を破り捨ててもよいのでは、と思ったくらい別の曲になってしまった。父に劣らず、クレイジーなドラマーだとは聞き及んでいた夏音だが、身をもって知ることになった。

とはいえ、久々にプロのミュージシャン達とアンサンブルを考えていく作業は懐かしい風を夏音に吹き込むことになった。

そんな感じで昼は学校、真夜中にはレコーディングに参加、時には母親つながりのジャズヴォーカリストの公演のトラとして呼ばれたりする日々を送っていた。

楽しい、が忙しい。睡眠が足りなくて苛々とする事もしばしばあった。しかし、軽音部の皆の前ではおくびにも出さないように気をつけていた夏音だが、ついに抑えきれない衝動に大声を張り上げてしまった。

「外で洗濯物干せんやん！！！」

沈黙が部室を覆った。軽音部の女子一同は目を丸くしてぽかんとたった今怒鳴り上げた人物に視線を注いだ。怒鳴った際、バンッと机を叩いたせいで少し紅茶がこぼれている。

「い、意外に家庭的な悩みだな」

かろうじて律が言い返す言葉を絞り出した。

軽音部の部室。いつものごとく夏音たちがお茶をしていると、誰かが湿気に対する文句を言い始めた。すると誰かが口火を切るのを待っていたかのように、全員が次々に不平を漏らす梅雨悪口大会に突入した。

くせ毛がまとまらない。外で遊べない。楽器を持ってくるのが大変。つい傘をなくす。夏音は、次から次へと出てくるものは低次元の悩みだと思い切り鼻で嘲笑った。

「へぇー。そんなに言うならお前の悩みはさぞかしすごいんだろうなー？」

と律がふっかけた事によって夏音が爆発するハメとなった。

「そんな専業主婦みたいな悩みを抱える高校生ってのもなんだかなー」

外の天気とは対照的にからっと笑いながら律は気楽な意見を口走ったが、瞬時に夏音に目線で射殺されそうになった。

「そいつぁ、お前さん……自分で毎日洗濯をする身分になってから言ってみやがれってんだ」

「わ、分からなくはないけどさぁ……」

自分もたまに家事を担う者として共感はできるものの、律は夏音のあまりの過剰な反応に怯えて少し後ろに退いた。

夏音はこの一週間ほど、この雨と湿気に悩まされた。普段は乾燥機を使って梅雨を乗り切れるはずだったのだが、そんな乾燥機は一昨日壊れた。修理した結果、数日かかるそうだ。そもそも、夏音は干せるのであれば外で干したい派である。日光にあたって干された洗濯物の手触り、においは室内だと再現できない。これは夏音の密かな、しかし強いこだわりであった。

「え、もしかして夏音くん一人暮らしなの！？」

唯がわっと驚いた顔で夏音に訊ねた。

「そうだよ。言ってなかったっけ？」

そうだっけな、と夏音が記憶を探っているうちに、律が大変なことを聞いたと騒ぎ出す。

「えー！　夏音一人暮らしなのか！　そいつは知らなかったなー！　それは是非とも遊びにいかないと！」

「Ｎｏｔ　ｔａｌｋｉｎｇ！！」

すかさず夏音からは拒否反応が返った。

「えー、夏音くんのお家行ってみたいなー」

唯が口を尖らせて抗議をするが、夏音は露骨に嫌そうな表情で断固首を縦に振らなかった。

「なんだよ、家に来られて困ることでもあんのかー」

律がしつこく食い下がり、それを見かねた澪は夏音をフォローする。

「まあ夏音がいやだって言っているんだからあまりしつこくするなよ」

自分は既に何回もお邪魔してます、とは口が裂けても言えない澪としては何となく都合が悪い。しかし、その発言は二人を引き下がらせるどころか律の耳に大きくひっかかってしまった。

「おい、澪。やけにすんなり夏音の肩をもったわねー」

その瞬間、律のその瞳に好奇の光が宿ったのを見て、澪はぎくりと体を硬直させた。そして、その実直すぎる反応が律の格好の餌となる――そんな未来が克明になろうとした瞬間、ムギが口を開いた。

「どうして夏音くんは一人暮らしなの？」
「あぁ、うん。別にたいした理由じゃないよ」
もっともな疑問を忘れるところだったと唯が夏音に説明を求めた。
そこで律も澪に対する意識がそれて「そういえば何でだ？」と首をかしげた。
「両親が頻繁に仕事で家を空けるんだよ。今回はかなり長くなりそうというか、よっぽどでないと戻ってこないかもね」
だから実質、一人暮らしなんだと淡々と語った夏音であった。はい、これでおしまいと会話を終焉に導こうとしたが、甘かった。
「そ、それは夏音くんが死んじゃう！」
「……はい？」
唯がそれは一大事だとふるふると肩を震わす。言っている意味が全くもって理解できなかった夏音は思わず素っ頓狂な声で返してしまった。不思議な生物を見るような目で唯を見詰めると、彼女は真剣に語り始めた。
「夏音くん。人はね……人は独りぼっちでいると死んでしまう生き物なんだよ！」
「それは兎ちゃんでは？」
ムギから冷静なツッコミが入るが、どこか変なスイッチが入ってしまった唯はどこ吹く風である。
「そうだ唯！　唯がいいこと言った！」
そして唯の発言に乗った律が高らかに訴えた。それからトーンを落として夏音に悲痛をこらえたような表情で向き合う。
「ごめんな夏音……私たち、同じ部活の仲間なのにお前がずっと寂しい思いをしていたことなんて気がつかないで……」
完全に悪ノリ状態の律は役者のように瞳を震わせた。
「今まで何を見てきたんだろうな私たちは……」
夏音はそれに対して、完全にしらけた表情で沈黙を守る。
「でも、大丈夫！　今夜は私たちがずっと一緒にいてあげるから！」
「お前の魂胆はお見通しだけど、挙句の果てに泊まるつもりなのか

！」

流石に黙っていられなかった夏音はこれ以上エスカレートしてしまう前に釘を打とうと思った。

遅かった。

「ということで放課後は夏音の家で遊びまーつ！！」

「おーー！！　お菓子いっぱい持ってこー！」

結局、そこに落としたかった律の明言に、素で同調している唯が叫んだ。

「これが穏やかな心で激しい怒りに目覚めるという感覚なのか……」

新感覚を覚えた夏音であった。

やっていられない、と律たちを相手にしないことに決めた夏音であったが、ニコニコとこちらを向いているムギに気付いて表情がぴしりと固まった。

「夏音くんのお家、楽しみです」

まさかのユダがいた。そして、より複雑な表情をしている澪がいた。

元来、男は女の押しに弱いとはいうが、それがまさか自分にも当てはまるとは思いもしなかった。その事を身をもって痛感した夏音は流れに身を任せる、否、流されている真っ最中であった。鉄砲水に巻き込まれる勢いで流されている。

決まってしまったモノは仕方がない。どうにもならない事への諦めの良さは自分の持つ美徳の一つと思って夏音は沸き起こる不満を飲み下した。よくよく考えてみれば、自宅に友達を呼ぶのは悪い事ではないし、むしろ良い事かもしれない。別に家の中にやましい事を抱えている訳ではない。

いや、それは嘘だ。やましい所ばかりであった。

いつの間にか軽音部の面々をあますところなく引き連れて自宅へと向かう道の途中、夏音はふいに頭に浮かんだ未来にはっとした。

（このまま、何の用意もなく女の子を家に入れるだなんて……）

すぐに問題点を洗いざらい頭の中に浮かべた。まず家の中は部屋干し中の洗濯物ばかり。部屋干しに臭いはつきものだ。いや、待てよと思い直す。洗濯剤はアレを使っている。エ○エールで良かった。夏音は基本的に綺麗好きに部類される人間であるので、他所様に見せて恥ずかしいと思われるほど汚くすることはない。それでもここ二日間の洗濯物をまだ取り込んでいない。恥ずかしい。家に入ったら即行で片付けねばならない。

一番見られたらまずいと思われるスタジオへと続く扉はしっかり封印すれば完璧ではないか。万が一のために鎖などを使おうと心に決めた。

あと、何があるだろう。家の中の臭いは平気だろうか。洗濯モノを別として、自分で生活していて気付かない立花家オンリースメルが充満していたら事である。玄関入った瞬間にUターンされ、影で「あいつん家、玄関入った瞬間トイレの臭いしたけど」とか言われたら目も当てられない。

そういえば滅多に使わないが、ド○キで買ったアメファブがあったと思い出す。家中にぶっかけよう。

夏音は家に帰ってから自分がすべき事をシミュレートし、あらゆる問題点を脳内で解決しながら、自宅へと続く最後の坂道へと曲がり角を折れた。

「しがない我が家ですが」

夏音の家に着き、澪ともちろん本人をのぞいて一同はその高級住宅街に並んでいても遜色ない建物を見て呆然とした。

「ちっ、やっぱボンボンか」

部室に運んできた機材とか、思い当たる節はいくでもあった。律が舌を打ち鳴らしてぼそりと呟いたが、幸い夏音の耳へは届かなかった。ムギは家の広さに、というより庭の花壇で美しい均整を保って咲き誇る花に嘆息していた。

「まあ綺麗……夏音くんが世話してるの？」
「世話は俺がしてるよ。枯らすと母さんに泣かれるからね」
「おおきーい」と口をあけっぱなしで騒ぐ唯を横目に見ながら「実質、趣味になりかけてるけど」と心で呟いた。
それから夏音は家の玄関扉の前で振り返った。
「しばしお待ちを……この扉を開けてはなりませぬ」
眉をきゅっと引き締め、それだけ言い残すとさっとドアに身を滑り込ませた。玄関先に取り残された軽音部の女子たちは顔を見合わせてきょとんとして「鶴の恩返し？」と思ったが、大人しく何もせずに待つことにした。待っている間中、ずっと家の中からドッタンバッタンと恐ろしい音が鳴り響いていた。
数分してから夏音が笑顔で扉を開けて言った。
「どうぞー。散らかっているけど、あがって？」
そういう夏音は、この数分でどれだけ動いたんだと思う程、服が乱れていた。一同は、第六感に従って、見ないふりをして玄関にあがった。
夏音は前回、唯の家を訪問した際にスリッパを出すという日本の習慣に感銘を受けており、早速それを取り入れていたりした。玄関には、すでに人数分のスリッパが綺麗に並べられており、夏音は誇らしげに彼女達がスリッパを履くのを見守った。
「んー。なんか良い匂いがするね」
そう唯が一言、それにムギが確かに、とうなずいた。
「これは……お花、かしら」
そんな話を広げる二人に、律が鼻をくんくんとさせて言った。
「これ、ファ○リーズじゃないか？　それにしては匂い、きつすぎないか？」
「う、うちは母さんが家中で香水ふりまくから……」
律の一言にぎくりとした夏音だったが、余裕を見せるつもりで笑いながら言った。アメファブの威力を甘く見ていた。
「まぁ、私もよく使うけどなー」

何も気にしない様子で律は言ったが、若干頬をぷるぷると震わせていた。この数分間の夏音の動きが手に取るようにわかってしまうのだ。

夏音はひとまず彼女達をリビングに案内した。開放感あふれるリビングの広さに唯と律は「おー」と驚嘆の声を漏らし、それとは対照的にすでに何度も夏音の家に上がっている澪は家の内装には知らん顔を通していた。少しだけ自分は何回も来たけどな、と先輩風を吹かしたい気持ちもあった。

夏音が勧める間もなく、どかっとソファに腰を下ろした唯と律はこれまたソファのふかふか加減にはしゃぎだす。その様子を苦笑しながら眺めていた夏音はお茶の用意に台所へ消えた。

そんな中、ムギはきょろきょろと部屋を見渡してから、ふと収納棚の上に飾ってある写真立てに目を止めた。ムギはささっと立ち上がると写真立てに近づいて興味津津な様子で眺める。

「やっぱり夏音くんのお母様、すごい美人……」

ムギがそう漏らすのを聞くと、澪はそういえば自分はリビングに飾ってある写真に触れたことがなかったなと思い、ムギの肩越しからそれらを覗いた。

「あ、本当だ。夏音そっくり……ていうか瓜二つ？」

気がつけば唯と律もやって来て、飾ってある写真を次々に眺めていった。

「うおー。この人夏音の父ちゃん、かな？」

「チョイ悪っ！　て感じだね！」

「でも、何か最近のしかないみたいだな」

確かに、と全員が唸った。リビング中に写真があるが、どれも最近撮られたような物ばかりである。普通、幼少期からの写真とかも飾っているものではと頭をひねった。彼女たちが盛り上がっている中、紅茶とケーキを運んできた夏音が声をかける。

「写真がそんなに物珍しいのか？」

ソファの間のテーブルにティーセットを用意すると、彼女たちは

そろそろと集まった。
「夏音は良好に育ったんだなー」
「良好ってどういうことだよ？」
「生まれ持ったものを損なわないでよかったな！」
「……馬鹿にされているのか」
律がにやにやそう言うもので、夏音はむっとしてよいものか分からずに軽く眉をひそめた。
「でも、夏音くんはお母様にそっくりなのね。よく言われないの？」
「うん、母さんとはたまに姉妹みたいだってね……喜んでいいやら」
「贅沢な悩みだなー、おい。敵はあまり作るなよー」
夏音も自分の顔が男らしいものだとは思っていないが、それでいて個人的に得をしたことはなかった。むしろ大損ばかり。美人だ、私より綺麗、女の子みたいー、じゅるり……という言葉は聞き飽きるくらい言われた。格好良い、と言われると嬉しいのだが、皆もっと男らしい特徴を褒めてくれてもよいのではないだろうかと思う。
「ねえ、夏音の両親は何やっている人たちなの？」
唯が好奇の目で訊ねた。
「う、おっおー……芸術家、かな？」
「芸術家！？　なんかすごーい！　格好いいね！」
夏音は目を輝かせて反応した唯に罪悪感を覚えた。つい口を出てしまったが、芸術家といってもすべて間違いというわけではないような気がするので、問題無いと言えば無い。案の定、人を疑わない軽音部の面々が夏音の言葉を信じ込む姿を見て、肩の力が抜けた。
ふと、このままいくと家族のことやらを根掘り葉掘り話さないといけなくなる気がして、夏音は話題をそらした。
「そ、そうだ。とりあえず家に来たのはいいが……何をすればいいんだろう？」
「何をって……遊べばいいだろう？」
「その、遊ぶってどうすれば？」
「普通に遊べばいいだろ」

「普通の遊び方が分からないんだ。今まで学校の友達、っていなくてさ」
「……」
沈黙が下りた。夏音は似たような空気を以前も味わった記憶がある。気の毒なものを見るような目で夏音を見る視線が痛かった。
「あ、あの……夏音くんのお部屋とか見てみたいなー」
おずおずと唯がそう提案すると、一斉に賛成の声があがった。
「……」

結局、部屋に彼女たちを案内した夏音であったが、部屋に入れた途端にさらに絶句した空気を放つ彼女達に首をかしげた。
「どうしたの？」
広さは一人部屋にしてはかなり余裕のある十畳分くらいかそれ以上。ベッドがあり、机があり、クローゼットがある。しかし、普通の男の子の部屋というには無理があった。その部屋の半分ほどのスペースを占めるのは楽器、機材であったのだから。
何種類もの楽器、機材。ベースやギターが何本も立てかけられ、中には壁にかけられているのもある。
キーボード、電子ドラムにミキサー、マイク、スタンド、スピーカー、それらとつながっているケーブルが七、八本。ごっちゃごちゃとケーブルが絡み合っていて、近寄りがたい空気を放っている。
「これぱっかりは片付けられなかったしなぁ」
ぼそりと呟いたが、呆気にとられている彼女達の前ではそんな言い訳は通用しない。だから、夏音はあえて無視した。
「き、汚くてごめんね！」
勇気を出して後ろを振り返って、表情を見ないようにして声をかけた。
「夏音くん……何者！！？」
唯が切実にそう叫ぶのも無理はなかった。金持ちの息子だ、と胸

を張ると納得された。

「ていうか、そのことにも突っ込みはあるけど！　なんなんだこの部屋の！　ソレとか！　コレとか！　アレとか！」

わななく律がびしびし指さした場所には、天井付近までの高さの巨大な本棚にびしっと詰め込まれている漫画、ライトノベル、画集やアニメのＤＶＤがあった。他にも、ベッドの天井に貼られている美少女アニメに登場するキャラクタのポスター。

片や、プロ顔負けの機材設備を誇り、片や二次元に侵略されている領域。玉石混合の部屋に一同は騒然とした。

「それが何かおかしいの？」

心の底から何を指摘されているのかわかりませんという顔の夏音に、律は思わず口をつぐんだ。あまりに純粋そうに首をかしげられた。

「夏音がオタクだとは思わなかったっていうか……意外すぎっていうか」

気まずげに視線を合わせない律に、夏音は「あぁ！」と頷く。

「オタク……クールだよね」

「どこがっ！？」

「日本の文化は本当に尊敬できるよね！」

「うわーっ！　なんかコイツ本当に外人って感じなんだけど！」

ぎゃーぎゃーと律と夏音との攻防が続いた。「クールジャパン！」「ファンタスティックカルチャー」などの単語が飛び交う中、唯はさして気にしていない様子でギタースタンドに立てかけてあったギターに目を奪われていた。

一方でムギはこの部屋のすべてに対して純粋に感心した様子。彼女にとっては真新しく見えて面白いのだろう。

澪は……どん引きしていた。実は彼女が夏音の私室に入るのは初めてであった。いつもはリビングか、スタジオにしか用がなくて私室に上がる理由もなかったのだ。

隠された夏音の趣味は、彼女にとって衝撃的であった。
（オ、オタク……オタクってアニメとか見て萌えーゲフフとか言っちゃうんだろ！？）
深夜、何故か暗い室内でアニメを鑑賞する夏音。その顔は情けなく緩みきって「ゲヘヘ……○○たん萌えー」と言ってしまう夏音。
（い、いやいやいや！　ないだろ！　それは、流石にない！）
現実から目を背けようとしても、至る所に現実が貼ってある。そもそも、ポスターの取り揃え方が半端ない。飾ろうと思えば幾らでもスペースがあるのに、何という無駄なスペースであろう。
唯一、澪が目線を置ける場所は楽器コーナーしかなかった。そちらに目をやると、既に唯がちょこまかとうろついている。なんだかんだと、彼女ももう楽器を見たら興味がそそられてしまう人種になったのだ、と澪は頬をゆるめた。
「ねぇ、このギターはなんていうの？」
唯が律と言い争っていた夏音に訊ねた。
「ジャズマスター」
「これはー？」
「ジュニア。Wカッタウェイモデル」
「この太っちょのとこれは？」
「リッケンバッカーとストラトだよ」
次々とギターを持ち出して質問する唯。律やムギなども置いてあるドラムやキーボードに釘付けになった。律などは、「コレ、ドラムにパッドて……」とげんなりしていた。
「ここで演奏できるんじゃないか？」
律が冗談交じりにそう言う。
「やる？」
「謹んで遠慮します！」
もちろん軽音部の一同が夏音の部屋で楽器を演奏することはなかった。その日は大画面でテレビゲームをやったり、莫大な量のＣＤやレコードの試聴会。お菓子を食べながら、わいわいと談笑をして

いた。

どこにいても軽音部のすることは変わらない。夏音はこんな風に友達と過ごすのは初めてで、何とも新鮮な気持ちだった。同い年の友達よりか、遙かに年上の人間に囲まれ、音楽に携わっていた。学校内に友達はいたが、誰かを家に招いたことも招かれたこともない。

ふと自分の家でくつろぐ彼女達の姿をじっと眺める。心からリラックスしていて、彼女達は今までもこうして誰かの家で遊んできたのだろう。それは夏音の知らない経験。自分に与えられなかった時間だ。

こうして遊んでいると、時間が経つのが早く感じられる。そろそろ夕飯の時間だろうということで澪がそろそろお暇しようと言い出した。斜陽が窓から射し込んできて、もうすぐ日暮れだという事を教えてくれる。一同は少し残念そうな声を出したが、すんなりと澪に賛同した。簡単に片付けをしてから、玄関先までおりたところで律が何の気なしに夏音に尋ねた。

「そういやぁ、夏音は自炊もするのか？」

「もちろん。ご飯を作らなきゃ生きていけないもの」

「ほほう……」

「律……またよからぬことを考えているんじゃないだろーな」

親友の企みをいち早く察した澪が律の制服の襟をひっぱった。

「ま、まだ何も言ってないだろー」

思わず苦笑する面々であったが、ふと夏音が思わぬ一言をその場に零した。

「夕飯、食べてく？」

数十分後には、夏音たちは近所のスーパーに買い物に出掛けていた。全員それぞれの家に電話を入れて、夕飯を外で済ますことの了承を頂いたようだ。全員で並んで歩き、それなりに栄えているスーパーへ向かう。夕飯時で駐車場は満車御礼。がやがやと買い物客で

賑わっていた。店内は冷房をガンガンとかけており、従業員は皆外で過ごすより厚着をしている。まるっきり薄手でやってきた一同は「長くいると風邪ひきそう」と、さっさと買い物を済ませてしまおうと店内を練り泳いだ。

「大人数だし、今日は焼き肉にしようか」

と夏音が提案し、皆それに目を輝かせて賛成した。カートを押して肉コーナーへ向かうと、ついてきているのは澪とムギだけだった。

「あれ、唯と律は？」

後ろを振り返ってそう問うた夏音に澪は目を閉じてくいっとある方向を促した。

「……お菓子売り場」

「何歳だよ……」

目的の精肉売り場へ着いたが、どうにも人が多い。主婦とみられる女性たちの群れが妙に殺気だちながらあたりをうろうろとしているのだ。まるで肉食獣のように互いを牽制するような視線……それは傍目にとても緊張感のあるフィールド。

「何かあるのかしら？」

ムギも尋常ならぬ様子に疑問を抱いたのか、頬に手をあて首をかしげた。

夏音たちがその場で立ち尽くしていると、店の裏方から壮年の男が颯爽と出てきた。この店の制服を着ているので、店長かもしれないと夏音はあたりをつけた。

ところが、その男が登場したことであたりの殺気がぐんと増した。

奥様たちの雰囲気がただならぬものへ変化して、夏音は緊張のあまり唾をごくりと飲んだ。

「お待たせしました！！　只今から、こちらの牛肉、豚肉、鶏肉のお値段をお下げしまーーーーす！！！」

『きゃーーーーー』

ぞくり。
生物としての本能が何かを告げた。
「え、どういう……」
「邪魔よ！！」
唐突の事態にうろたえていたムギを一閃、はねのけた奥様の一人が人の波に突進していった。
「いったい、これはなにー？」
澪が数歩後退しながら涙目で言った。
「おぉー、タイムセールじゃん！」
いつの間にか背後にやってきていた律が興奮した口調で声をあげた。
「律！　この場合、どうすればいいんだ！？」
夏音は事態を打開する人物として近年稀にみる珍しいケースとして、律を頼った。
「つまり、ここはもう戦場ということだよ夏音くん！」
気がつけば唯もが横にやってきていた。いつもの彼女の雰囲気とは違い、その様子は時代が時代であればどこぞの武将のように厳格な佇まいであった。
「男を見せろ、ってことさ」
律がぽんと夏音の肩に手をやって、叫び声をあげながら戦場に突進していった。
それに続く唯。
「お、おぉ……Ｕｎｂｅｌｉｅｖｅａｂｌｅ！！」
先に向かった唯と律に負けていられなかった。
「お、俺……男・夏音いきます！！」

主婦の力をその身をもって思い知らされた夏音はぼろぼろになってスーパーを出た。
「あなどれないな大和魂……」

全身ぼさぼさになった夏音がげんなりとそう呟くのを笑って唯と律はご機嫌に歩いていた。

（あの二人が何であんなにぴんぴんしているのか理解できない）

買った食材を全員で分けて持ち、夏音の家へと歩く。外はすっかりと暮れかかっていたが、西の空に落ちかかっている太陽が世界をオレンジ色に染めている。川沿いの土手が残光に浮かんでいて、まるっきり違う場所に来たみたいだ。会話はない。それでも言葉にない充足感が夏音の心を満たしていた。

その晩は、せっかく立派な芝生があるのだからと夏音の家の広い庭でバーベキューとなった。作業があるからと髪をアップにして作業にあたり、たくさん肉を焼いた。

女の子といえど高校生の食欲は恐ろしいもので、小一時間をすぎたところで食材のほとんどを食べつくしてしまった。

「唯は肉食い過ぎなんだよー」

「夏音くんは野菜ばかりよね」

「バランスよく食べないと……」

肉が無くなっても他愛ない話は止まらない。

夜が更けてから大分経ち、制服のままで遅くまで帰さないのはまずいと思ったので、お開きにしようと夏音は言った。

そのことに反対する者もいなく、全員で協力しあって後片付けをした。さて帰るか、と全員が帰り支度を終えようとしたところで、一人夏音だけは思いつめた顔をしていた。

その様子に気づき、しばらく地面を見つめて喋らない夏音に軽音部の面々も沈黙を守らざるをえなかった。

そして、夏音は何かを決心したように勢いよく顔をあげた。

「皆、聞いて欲しいんだけど。俺、実は――――」

幕間2

タン、タタン、タタタン。

乾いたシンコペーションが響く。

途轍もない深海に迷い込んだようにペダルを踏む足がうまく動かない。

溺れそう……こんなに乾いているのに。

「ストーーーップ！！！」

また、だ。

透んでよく通る声、繊細だが力がたくさんこもっている声、私のビートに割り込んだ。

シンバルのサスティーンが気だるく伸びて、すぐ消えた。

「律、また水分足りてないでしょう」

私がぼうっと顔をあげると、たった今私のドラムを強制終了させた声の持ち主が髪をかきあげながら私を心配そうな顔で見つめている。そんな動作がいちいち艶めかしく感じる男のくせに。でも私、現在そんなことにいちいち反応している余裕はないんでした。もう死活的にね。

立花夏音が演奏を途中で止めるのはこれで三回目。

もう慣れたもので、私は水分を補給しにのろのろとベンチの上に

置いてあるペットボトルの元までたどり着いた。
それを一気に呷る。げっ。

「ぬっりー」

これまた、当然なんだけど。
溜め息が止まらない。

ハイこちら、音楽準備室（またの名を軽音部部室）はやっとこさ梅雨が明けたと思いきや、どうやら雨雲が隠していたらしい夏の日差しのせいで、ひたすら熱気がこもる温室と化しちゃっています。
窓を開けても涼しい風が入ることはなく、がんがんと遠慮なく射し込んでくる太陽光線のヤツが木造の校舎の床さえも鉄板のごとく熱している。焼き肉ができそうなくらい。ますます熱気は増すばかり。焼けんじゃねーか……？　焼いてみてー。
さあ、季節は順調すぎるくらい夏に近づいていたのでした。
この目の前の女男（非常に侮辱の意）――夏音は不思議なことに、私の叩くドラムを耳にしただけで、私の状態がすぐに把握できてしまうらしい。それは包み隠しようのないくらい正確に空気を伝わってしまうみたい。
それで今みたいに明らかに集中力が切れていたり、私の意識がどっか白いもやがかかった世界に突入しかけた時なんか、一発。

薄い刃で斬りつけるようなストップの声が容赦なくかかる。

まあ、それでずいぶん助かっているのは事実で、ましてや無理して脱水症状なんか起こしてしまうなんてとんでもないことだし。
感謝しているというか、まあ……ご迷惑おかけしておりますって感じ。

ていうか、夏音と二人きりで合奏しているわけだけど、どうしてこうなったんだろ。

この土曜の日中に部室に人がいるなんてこと、軽音部ではごくごく稀にも起こらない珍事。うん、椿事。

かくいう私も忘れ物をとりに来ただけで、部室の鍵を警備員さんから受け取ろうとした時に、先客がいるってことに驚かされた。

何で夏音がそんな土曜の日中に部室へ足を運んだかというと、あまりにこの部室が冷房や湿度管理が行き届いていないので、機材のメンテナンスをやっていたらしい。

ご苦労なこってす。

小一時間以上もこのむしむしとしたサウナのような部室で機材をいじくっていたと言った彼は、全然そんなことは苦じゃないって涼しい顔をしていた。

そもそも、この男。立花夏音。

軽音部唯一の男子メンバーという割にその外見のせいもあって、むしろ女子だらけの軽音部にさらに華を添えるという不思議な一役を買っているという……にくたらしいことに。

日本人には見えない顔で、美人な……男っ。男っ！　ふざけている。

生まれ持ったパーツが違いすぎて、万が一にも自分と比べる気にならない。にっくきは人種の壁という事で気持ちを落ち着ける。

お姫様みたいな容姿は一度は憧れるけど、現実に出てこられたらまいってしまう。中身と外見が一致していたらもっとよかったのに。こう見えてこの男、超絶オタク。そして割とヘタレっぽい。それは何というか、気安さとも言えるのだけど。　そのおかげで外見で萎縮するって事はない。

ほんと無駄に麗しいな。こんな暑い日和には、和傘なんかをもたせてみると意外にも涼がとれるかもしれないなんて考えてみた。けっ。

思い返せば、この男がなよーんとへばる場面なんて見たことがな

かった。

今もこうして、私が滝のような汗をかいてへばっているというのに、バテた様子はみじんも感じさせない。ぴしゃっと背筋をのばしている。

そして、この男に関してはまだまだ「とくひつすべきこと」ってのがあったりする。

それはこの間、軽音部の面々で夏音の自宅に遊びにいった（押しかけたともいう）時に本人の口から出たことなのだけど。

思い詰めた表情で、私たちにとある告白をした彼。

それを聞いて私は驚くと共に、少しだけ呆れてしまった。

その告白というのは、夏音の年齢が私たちより一つ上だということ。実際には二つ。日本で言うと昭和生まれスレスレ。

もちろん私たちはぶったまげた。でも、そこまで思い詰めた表情で語ることだろうかとも思った。

すると続けて夏音が語った内容は予想の斜め上を超えていた。

夏音は一年前に別の高校に入学した。私でも知っている遠くの学区にある不良高。そこで壮絶ないじめに遭い、学校に行かなくなったらしい。それからこの学校に入学するまで、不登校の日々。

再び学校へ通う際には、両親が見つけてきた男子生徒が少ないであろう桜高に再度一年生から入学する事になったのだという。

終いには照れくさそうに首をかきながら事実をつらつらと述べる彼を見ていると、そんな衝撃の事実があったということが嘘のようだと思った。

ひきこもりのオーラが全く……まぁ、なくはないけど。たびたび、私たちがそろって居た堪れなくなるような発言をするし。

それにしても、信じられなかった。こいつのどこにいじめられる要素があるのだろうか。むしろ、優遇されて然るべきじゃないか？

疑問は大量にあったけど、掘り下げる事は躊躇われた。

とにかく。結論からいえば私たちはそれを受け入れた。すんなりと。

色々慰めるような事も言ったけど、唯なんかは「あーた、辛かったでしょう……」と涙を浮かべて徳光さん状態だった。ムギはショックに打ち震えた様子で、夏音の肩にぽんと手を置くと何か言った。聞こえなかったけど。しかし、面白かったのは澪だ。「何で言わなかったんだよー！」と完全にブチギレた上に号泣するという行為で周囲をどん引きさせた。流石の私も、あの澪をフォローするのは至難の業だった。

とりあえず、軽音部に変化なし。今日も仲良くやっています。

まぁ、だから今もこうしてセッションなんかをしているんだけどさ。

ちなみに、運転免許をもっているのには流石に度肝を抜かれた。

驚きの国際ルール。

ちなみに、ばっちし帰りは家まで乗っけてもらいました。

「いやぁー、待たせた！　わりーわりー」

水飲み場まで行って、蛇口から水を飲もうとしたんだけど、ぬるい液体しか出なかった。

結局自販機で貴重な財布の重みを減らしてしまった。そっと目許をぬぐう。暑いからよく汗をかくしね……っ。

「いいよ、こうして残って付き合ってもらっているんだから」

流石に夏音もこの温度の中、制服を着ているわけにはいかなかったらしく、タンクトップ姿で髪を結っていた。そりゃぁ、思わずじっと見つめてしまうものである。

認めるのもしゃくだが、がんぷくがんぷく。ほそいなー、こいつ。

私の視線に気づかないで、再度チューニングをしている夏音はまだまだやる気の様子。

私はどかっと椅子に座り、愛用のオークのスティックを握る。

「そういえば、ヘッドを変えたんだね」

夏音がチューニングをしながらこちらを見ずに、話しかけてきた。

「あー、この間割れちゃったからなー」
予想外の出費に泣いたものだ。ああ、泣きましたとも。
「抜けがよくなった」
「そう？　ちょっといつもより張ってるからじゃないか。本当はこのクラッシュもそろそろだめなんだけどなー」
「あぁそれね。もうエッジがぼろぼろっていうか、ぎりぎりアウト？」
「アウトかよ……」
「もー、アウト。律があと数倍もうまかったならもう少しマシなんだろうけど、ひどい音だよ」
ぐっさり。こいつは、このように鋭い刃物のような言葉で簡単に人の心をぶっ刺してくるやつだ。
こと音楽に関して。初めはぐさぐさと歯に衣着せぬ物言いに、文化のちがい？　とか思っていたが、ただの性格だという事が短い付き合いの中で把握できた。
「うっ……そらぁ、悪ぅござんしたねっ！！」
素直に負けは認められない。すっごい子供みたいだって分かってるんだけどさ。
「さー、いくよ！」
夏音がこちらに視線を合わせる。目が合う。
もう捉えられそうになる。強すぎる。その青い瞳は飛び道具ですか。
そうすると、突然夏音の姿が何倍も大きくなったように感じた。それで、私は心の準備をするのにいっぱいいっぱいになる。どうしよう、とあせってしまう。
これからとんでもなく恐ろしいものを投げられるかもしれない。
そんなプレッシャーを肌に感じながら、それでも負けたくないと汗で滑りそうになるスティックを握りなおす。

夏音が腕を振り上げる。

カミナリが落ちた。

（あ……っ！？）

またもや私は敗北を味わった。

自分の音で、叩いてやろうじゃねーか。そのつもりでいたのに、無駄だった。

夏音の音に体が勝手に動いてしまう。否、動かされてしまう。バスドラを踏む足。スティックがスネアを叩きつける、この手。夏音という指揮者によっていいように動かされている感覚。

一番初めの音で、ぐいっとつかまれてしまう。もう、主導権とかの次元じゃない。

ブラックホールかというくらいの吸引力で私の音を手繰り寄せて、もう、それは自在に……。あぁ、何で。そこにそう来るの！？

あれ、何でだろう。三拍目にブレイク……こんなこと分かってやるもんじゃない。けど、そう来るんだってわかってた。分からされてしまった。

いきなり変拍子。頭がおかしいのか！　今まで、四拍でイケイケだったじゃん！　あぁ、何でついていくの私。ついていけるの。

これからずーっとコレについていくの！？

しんどすぎるわっ！！

もうがむしゃらになって、リムショットをぶちこむ。もう分かっていた。終わりの音だ。

音が止む。

静寂の中に、私の息を吸って吐く音が生々しく浮き上がっている状態。

ぜぇぜぇ、って……。
精神から体力を使い果たしてしまったようだ。
私、田井中が申し上げます。これは……これはセッションなんかじゃない。

「マラソン走ったみたいになってるよ律」
へらへら笑いながらそう言ってくる小奇麗な顔をした奴。綺麗にまとまりやがって、ベースをもって佇んでいるだけでどれだけ絵になるか。一葉に映しておきたくなる。
中身がこれだけ化け物だと、その表面とのギャップに笑えてくる。
「もう、こんなのマラソン以外のなんだっつーの！！」
私はうらめしい視線をおくってやる。肩をすくめられた。その動作が似合う。外人め。
「もう今日はこんなところにしておくか」
「うぅーーあー」
驚いた。私、人間の言葉が発せなかった。へばりすぎにもほどがある。
「帰りに冷たいものでもご馳走しようか」
「マジかっ！？」
復活。単純、それが私の美徳だと思う。ささっと後片付けをして撤収しようということになった。アイスのことしか頭に……だが、ここで帰ることに脳みそのどこかがブレーキをかけた。
こういうのもいい機会だと思う。楽器を広げているうちに聞いておきたい。
「なあ、私のドラムって実際どうよ？」
こんな事を平然と聞いているような顔して、内心では心臓ばくばくです。
「どうって……また『どう思う』、か……」
夏音はよく分からないことを呟いて、コマッタコマッターと頭をかいた。聞き方が悪かったみたい。

「合わせづらい、とか変な手癖とか目立たないかなぁってさ」
澪には、お前のドラムは走りがちだと言われるけど。私はその方が勢いがあった方がいいと思うんだけどなー。ていうか、信条として曲をもたらせるくらいなら走ってた方がいいって思う。
だから、そこら辺で澪とは意見の衝突が絶えない。澪だってもう少し私と合わせてノリ出せるようになれっての。話がずれた。
私は黙って返答を待つ。
夏音は数分も考えこんだまま喋らない。よく考えてくれてのかわからんけど、流石に私も少しじれるぞ。まあ、果報は寝て待て、というしな。寝るか。
「そういえば、律って好きなドラマーは誰？」
数分悩んでから、質問で返すな！
「キース・ムーンとか」
私が眉をひそめながらもそう答えると、夏音は鷹揚にうなずいて、やっぱりなと笑った。
「Ｔｈｅ　Ｗｈｏが好きだって言ってたからさ。きっとそうだろうなって思ったんだ」
そうか、そんな会話をした覚えがばっちりある。
「なら、とりあえずドラム壊そっか！」
「あぁ、なるほどまずドラムを……って、何でだよっ！？」
ぱぁっと花が咲いたように微笑みながら、言葉の暴力。会話の暴力ともいう。
「でも、やっぱり彼の真骨頂を知るにはいろいろ真似てみないと……」
「いや、たしかに好きだけどな！　全部リスペクトしているわけじゃないし！！」
「そうかー。ま、あまり影響を受けているように思えないけどなー」
「そ、そりゃぁあんな風には叩けないけどさ……」
「あ、これいいなっていうフィルとかをどんどんマネすればいいと思うよ。それ　で、できるなら全ての曲をコピーするのだ！」

「げ……そ、れ、は……それぐらいやらないとだめか？」
「やって損することはないさ」
夏音の言うことはもちろん正しい。けど、肝心のドラムの感想は？
「まぁードラムの感想というかなぁ。とりあえず今はリズムだけ頑張っていただければ、と」
「リズムか……最近メトロノーム使ってないなー。電池きれて」
「使いなさい」
「うぃー」
「リズムが命だからね！　あと、好きな尊敬するドラマーがいるならその人のプレイスタイルも真似てみなよ。バンドで叩いている律を見たことないから、何とも言えないけど」
ふむふむ……。私に暴れながら叩けというのか。考えておこう。
「ま、こんな感じ」
それから夏音はベースを丁寧に拭いてから、ささっと機材を片づけ始めた。まだ話を続けていたかったけど、私も暑さに耐えきれなくなってきたし。十分聞きたいことは聞けたと思う。
たまには休日に部室に来るのも悪くないかなって思った。
そこには誰かがいるかもしれないし。

ただ、夏音さ。
お前、もっと何か隠しているだろ？
普通の男の子だって云い張られる方が嘘くさいし。
何であんなに機材をそろえているか。こんなに凄まじいベースを弾くのか。
そのことを聞けるのはもう少し先かな、と思う。
けど、なんだか気長に待てる気がした。

「鍵かけるぞー」
「よっしゃー、アイス～アイス～！！」

「へいへい」

とりあえず、目の前のアイスが待っているのでそんなことは後回しでぽい、だ。

幕間3

目覚めると、甘い草木の匂い。そっと肌を撫でる風を優しく吸い込むと一つ伸びをする。

誰かが窓を開けたみたい。

そっと目を開けてみると、眩しさに見慣れた天井が浮かんでいる。私はちょっとだけ頬をゆるめた。

朝涼に目覚めがよくなる不思議。また深い緑の季節がやってきたのだと、そっとささやかな幸福に包まれる。愛しいひと時。

「お嬢様、朝でございますよ」

「窓を開けてくれたの？」

「はい。少し風を入れようと思いまして」

私はメイド頭の唐沢さんに微笑むと、軽やかにベッドから起き上がった。こんな朝はベッドが簡単に私を手放してくれる。ベッドから降りてもこもこのスリッパに足を通す。それからゆったりと歩幅で窓に近づいた。

そこからもこもこと積み重なった夏雲が遠くに見える。

芳しい薫風が髪をさらっていく。

「何かいいことがありそう！」

私はぐっと腕を伸ばした。

私立桜ヶ丘高等学校の衣替えもとうに終わり、薄手の装いの生徒が肩を並べて登校している風景も見慣れてきた。駅から少し歩いて大通りを抜ける。見慣れた風景に違った匂いが混じるだけで嬉しく

なる。たぶん、同じ気持ちを抱える人はたくさんいる。あそこの人も、そっちの人も。

これから日照りが強くて厳しい季節になるのだけど、それでも気持ち良い風が「ファイトだよー」と言ってくれているみたいでご機嫌なのです。

通学途中、クラスの子達と挨拶を交わしながら一人で歩く。いつも必ず、と言う訳ではないけど、この時私はある事を待っている。それは大抵、後ろからやってくる。

「おーっすムギ！」

ほら、きた。期待に待ち焦がれていたつもりはないけど、抑えていた気持ちが一気に弾んでしまう。

振り向けば、りっちゃんと澪ちゃんが仲良く並んでいた。二人は幼馴染で仲が良くて家も近いからよくこうして一緒に登校しているみたい。私にはそういう習慣がなかったから、それがうらやましくてたまらなくなる。それでも、どちらも私の大切なお友達。

中学校までは家からの送り迎えに車を出してもらうのが習わしになっていて、学校のお友達と一緒に帰るということはなかった。お友達と一緒に帰りたいなんて我が侭は運転手さんに悪いから、こんな日が来る事が夢の一つだったりする。近くて遠かった、憧れの風景。

家が遠いから仕方のないことなんだけど……。それでも高校生になったのだから、とお父さんや周囲の人たちを説得して電車通学をさせてもらっているだけ進歩したのかも。

「おはよう律っちゃん、澪ちゃん！」

こうして大好きなお友達に気軽に声をかけられて一緒に学校へ行くことができる。駅から学校までのちょっとの距離だけど、その間の道のりは私が求めていた大切なものだった。

だから、いいことなんて毎日起こっている。次から次へと新しい経験が舞い込んできて、一生分の運を使いこんでいるみたいで不安になるけど。

合流した私達は他愛無いお喋りをしながら学校まで歩き続ける。
その途中で、そろそろだと私は気付いた。
つい笑いがこみ上げそうになるのを止められない。
あと、少しかな……。このあたりで。この角で。
「あ、夏音だ」
「相変わらず眠そうだな……前見えてるのか」
私たちの視線の先には、ふらりふらりと足元がおぼつかないまま歩く男の子がいた。見事な低血圧っぷりは予想を裏切らない。まわりの視線を大いに浴びながら、それに気付くこともなくぼーっと歩いてくる。
男の子。あぁ……男の子にしておくの、なんてもったいないの！！
セットする時間もなかったのかしら。頭上で一本に結われている髪は、それが解かれた姿を想像してみたくなるくらい綺麗。いつか彼の髪を弄ってみたい、とうのが今の私の密かな野望。
あなた制服間違えていませんか、と尋ねたくなるくらいの外見なんだけど、本人はあんまりそう言われたくないみたい。
夏音くんとはクラスが別だけど、あんまりお友達がいないみたいだし。これは澪ちゃんから聞いた話だけど、クラスから完全に浮いているのだとか。その原因は夏音くんが阿呆だからとか、皆が無駄に麗しい外見にだまされているから、とか熱く語っていた。結局、クラスでかろうじて話せるのは澪ちゃんとりっちゃんだけ。せっかく共学化したのに、男の子と仲良くできないなんて可哀想。けど、一番の問題は女の子のグループにいて「まったく違和感がない」ことかも。これは幸か不幸か。
そんな夏音くんだけど、見事なくらいぼーっとしている。あまりにぼーっとしているので、そのまま私たちのことを視界に入れないで通りすぎようとした彼を律っちゃんが首をつかんで引きとめた。
フライングニー。
いただきました、今朝一番のフライングニー。でも、女の子が朝から公衆の面前で飛び蹴りはどうかと思うの。それが律っちゃんら

しいといえばそうなのかも……。とにかく、死角から思わぬ襲撃をうけた夏音くんは空を飛びました。

顔だけは傷をつけないで欲しいのだけど……あっ。すぐに立ち上がった夏音くんはものすごい勢いで襲撃者の姿をとらえ……その首を締めあげた。

立ち直りが早い。毎朝これで血圧を上げたらすっきりして一時限目を受けられると思う。そんな朝から賑やかな軽音部が大好き。

あぁ、放課後が待ち遠しい。授業はきちんと真面目に受けているけど、たまに意識がいつもの部活の風景にとんでしまう。

皆とのティータイム。私の時間。今日のお菓子はババロア。

実はこの間、あまりに評判が良かったから、今回は貰い物なんかじゃなくて家の人に用意して貰ったりしたのだけど……もちろん、みんなには内緒。きっと遠慮されてしまうから。時間がもっと早く経ってくれたらいいのに。そんな風にやきもきしていたら、授業の内容なんてまるで頭に入らなかった。

それでも、がんばりました。やっと慣れた掃除も終わって、急いで部室へ向かった。

もうみんないるかな。ついつい階段をのぼる足もだんだんと早くなってしまう。

でも、扉を開けようとしたら鍵がかかっていた。

「え……」

扉に鍵がかかっているということは、まだ誰も来ていないということ。私の教室は部室から離れているから。普段は先に部室を開けて待っている人がいるのだ。

たぶん今の私、すごく眉尻が下がっていると思う。そのまま意気

悄然としながら鍵をとりにいこうと音楽室を後にしようと思ったら、階段を上ってくる足音が聞こえた。
「やあ、こんにちはームギ。今日はみんな遅いんだね」
夏音くんだ。その手には部室の鍵が握られている。
「うん、みんなお掃除が長引いているのかしら？」
あぁ、と何かを思い出すように目線をあげて夏音くんが言った。
「たしか資料室の掃除だったような気がするなあ。ほら、あすこはたまに資料整理とかさせられることあるから」
なるほど、資料室のお掃除。あそこの先生、気まぐれだから早く終わる時との差が大きいという話。
夏音くんは鍵穴になかなか鍵がささらないようで、ぼそりと口では言えないスラングを吐くと、手間取りながらも部室の扉を開けた。彼はそのまま慣れた様子で鞄をベンチの上に置く。私もその横に鞄を並べて、お茶の準備に取りかかった。
こんな流れも自然と板について、今では軽音部の恒例の風景になっている。
私はこうしてお茶の用意をする時間が気に入っている。振舞う、というのは大変気をつかうことだけれど、誰かのために幸いな時間を提供することは美しいことだと思う。
（それに……）
茶葉をよく蒸らすところまで作業を終えて、袋から保冷剤で保存してあるお菓子を取り出す。私がこの役割を放棄しちゃったら、誰もやる人がいないもの。
「なんだか嬉しそうだね。いいことでもあったの？」
夏音くんが目を細めながらそう言ってきた。作業に没頭している間に、私は知らず微笑んでいたみたい。
「ううん、何でもないわ」
十分に蒸らし終えたところで、私はティーカップに紅茶をそそいで、お菓子と共に夏音くんの前に置いた。本日のお菓子を目の前に手を打って喜ぶ彼を見て、頬がゆるむのを感じる。

「あー、最高だね。軽音部に入ってよかった」
太陽のような笑顔でそう言い放つ夏音くん。まあこのティータイムも軽音部の美点の「一つ」だけど……それだけじゃないはず。きっと。
「それにしてもさ」
紅茶をすすって夏音くんの眼は私をしっかりと捉えた。青い瞳。私と同じ、けど同じじゃないくっきりとした青。
「掃除とか。部活とか。こうしてお菓子をひろげてティータイムとか。なんだか最近は初めてが一気に押し寄せてきて大変だよ」
その言葉にすぐ返事をすることができないで、思わず黙ってしまった。
どきっとした。まるで私のことを突然言われた気がして。
「そうね。向こうでは掃除なんかしないものね」
「部活も初めてだし、部活の度にこんな風にお茶をするのも新鮮だよなー」
それは私もそう。ここで起こることはどれも真新しくて、胸を鳴らしてばかりいる。
もしかして、お前もそうだろう？　と言外に言われたのかも。
それは考えすぎかしら。
でも一つ腑に落ちたことがある。どこか自分に似ているなと思っていた目の前の男の子は、存外自分と似たような境遇だったのかもしれない。
毎日が楽しくて仕方がないんだ。彼もきっとそう。知らなかった日常の葉を次々にとらえて、一枚一枚わくわくしながらめくっていく。
「きっと私たち似たもの同士なのね……」
「え？」
「え？」
「ム？」
「あ……ら…？」

声に……声に出ていた！？

「……」

「……ッ」

沈黙は金なり、誰かが言い残した言葉。あれは要するに、お金を稼ぐことは楽ではないということなのね。今、私とっても苦しい。

「そう言われてもなぁ、ムギ……」

「ひゃっ、はい！」

「俺はムギみたいにお上品でもないし、可愛くもないんだけど」

「……はぁ」

彼のこういうところは、いつか直してもらわないと。私は紅茶のおかわりをすすめて、笑顔でその場の空気をしれっと流した。

いつか彼が一部の女性から殺されないように願うばかりだ。それから私たちは他の人たちが来るのをゆっくりと待った。

暫くして、私がキーボードの練習をしようとアンプをセッティングしていたら夏音くんが近寄ってきた。

「ムギのそれ、ちょっと弾かせて！」

目を輝かせてそう言われたら断れるはずもない。

「うわぁー。全然タッチが違うやっ！　なんていうんだろ、こんなしっかりとしたアナログな音も出るんだな」

しきりにぶつぶつと呟く彼は新しいおもちゃに触れる少年のような表情をしていた。

「どうせなら、もっと機材増やしたいよねー」

え、何を言うの夏音くんたら。

「わ、私は今のままで十分かな」

「えー、せっかく良いキーボード持ってるのに！？　もっと鍵盤屋はもっと音に貪欲にならないと！　あと三つくらいは増やしちゃおうよ！」

そんなに身を乗り出して力説しなくても……。

「そ、それは……たぶん、今の私の実力には見合わないのではないかしらー……」

「そうかなー。こう、こいつどんな頭してんだって聴いた人を吐かせてしまうくらいな変態的な音とか、あればいいのになー」
「は、吐かせちゃうの？　それはちょっと……」
そこまで言うと彼も諦めたようで、そっと鍵盤から手を離した。
「まあ、ムギがそれでいいなら……」
「うん、ごめんなさい」
あまりに彼がしょぼんとするので、何か悪いことをした気分になる。彼なりに私のことを考えてくれているのかしら？
「夏音くんは、どうしてそんなに機材にこだわるの？」
「そりゃぁ、表現のためさ」
「表現？」
「自分の出したい音、世界、全部に必要なことだよ」
「だからあんなに機材をもっているの？」
「そう。俺が持っているすべての機材をここに揃えたとしたらぶったまげるよ？」
そう言って彼はにやにやといたずらっ子ぽく笑った。前から思っていたのだけど。
夏音くんって何者かしら。
もし、どこかでプロをやっていましたーと言われても驚かないわね。むしろ、納得。けれど彼が話さないということは、触れてほしくない部分なんだろう。
私は時折弾く彼のベースを聴いたり、軽音部のみんなとお茶をしていられたら満足なのだし。
だから、彼の真実についてはおあずけ。とりあえず今の私には必要がないものだから。
「ねぇ、こんなフレーズとかが浮かんだのだけど聴いてくれるかしら？」
「もちろん！　聴かせて！」
こうしているだけで、楽しい。
もうすぐみんな来るかな。

幕間4

音楽ってなんだろう。今までの私はそんなのこれっぽっちも深く考えたことはなかったけど、最近はちょっとだけ考えるようになった。

私の中にある音楽なんて子供用プールくらいの浅さしかないと思う。その浅いプールにはぷかぷかと間隔を置いてレコード達が浮かぶ。本当にそんなの見ちゃったらきっと悲しくなる。私の音楽ってこれだけなの？　って

小学校の時はまずお姉ちゃんだから、と私にお父さんのラジカセが下がってきた。別に特別ねだったわけじゃないんだけど、とにかく一人で音楽を楽しむ環境は整った。カセットを入れて、ボタンを一つ。それだけで音楽が流れる不思議な機械。

ラジカセを貰ってからは、よく妹と一緒に家にあるカセットを聴いていた。どちらかっていうと妹の憂の方が音楽に興味津々って感じで、よく一緒に寝転んで流れてくる川本真琴の曲とかを口ずさんでいたり。

そのうち、私のより遙かに立派なＭＤコンポが憂の部屋に置かれてからはそっちで音楽を聴くようになったけど。

でも、すごいよね。私がぼーっとしている間にＭＤなんてものができていて、そのうち気が付けば何万の音楽が手のひらに収まるようになった時代になったんだよ。この若いみそらの台詞じゃないけど、「昔は～」って言いたくなる。

ふと周りを見渡してみて、皆さんよく音楽を聴いてらっしゃる。世の中の人間がこんなに音楽好きだたとは知らなかった。私なんて同級生が新しいプレーヤーに手をつける中で、それをぼーっと眺めていただけ。

中学校の時はテレビに出てくるＪ－ＰＯＰばかり耳にしていたし、後は和ちゃんが紹介してくれるＣＤとかをぽつぽつと聴いていただけ。だからクラスの音楽好きの男の子がマニアックなバンドの話とかしていたり、そういう子が放送部にリクエストした曲がお昼に流れたら、何とも言えない気分になった。

何て言うか。

広すぎる世界に足を踏み入れるのが怖かったのかも。求めれば際限がなさそうだから。他の人が音楽を熱心に聴くんなら、そっちに任せちゃえばいいやって。

そんな私も、このままじゃいられない場所に来てしまった。昔の自分が知ったら絶対びっくりする。

私、軽音部に入りました。音楽をやる部活。

音楽。音を楽しむと書きまする。ただの音じゃなくて、人間が組織づけた音。

生まれた時から、うんや、それこそ生まれる前から耳に入ってきて、受け入れて、馴染んで。たまに口ずさんで。けど、それは真っ正面から向き合っているのとは違って。

音楽はいろんな角度から私に触れてくるのに、こっちから応えることができるなんて思ってもいなかった。

近頃、そういうことが少しずつわかってきたかなーと思うわけです。

アンプからずっと変な音が流れている。私がギターを弾いていない時、かすかにジャーって感じになるのが面白い。弦に触れたらぴたっと止まる。

おもろい。

夏音くんがこれはホワイトノイズっていうんだって教えてくれたんだけど、そこから先の「たいいき」がどうとかはよくわかんなかったけど。ノイズにも色があるのかな。ピンクとか、ブルーとか？

「唯、ぼーっとしてないで言われたコードをおさえてよ。プリーィズ」

凛とした声に私はハゥっとなる。目の前には色白の女の子……ごめんなさい。みたいな男の子がギターを構えて座っている。どうやらまたやってしまったみたい。集中力が続かないで、すぐに他の事に気が散ってしまう私のいけない癖。面目ないです。

夏音くんが困ったように眉を下げてこっちを見ているのであわてて頭を下げた。

「ご、ごめんですー！」

「ヤレヤレ。唯ちゃん、いいですかー？　もう少し集中力をつけようねー」

「はーい！」

「まったく……一度集中したらすごいのに……」

夏音くんは溜め息まじりに俯いた。こめかみを揉んで瞳を閉じている。だいぶお疲れの様子。私のせいなので、何も言えない。

へへへ、と頬をかいて誤魔化し笑う。出来の悪い生徒でさーせんね。ひとまず教えてもらったコードを押さえて右手を振り下ろす。

ジャーー。あれ、何か違う。絶対チガウ。

「一音ずれてるよー……薬指はここ！　ひとつズレただけで、その

音じゃなくなるんだから。唯は音感しっかりしてるんだから、わかるでしょ？」

「せ、先生。薬指が動きませんー！」

「そりゃぁね。一番神経が少ないから、薬指は頑張らないと動いてくれないんだよ。練習あるのみさ」

最後の一言でばっさりと完結されるのも困る。その一言に尽きるのだとしても。

「これがＧＭ７…Ａ７…Ｂｍ７…えっとＤ…」

「そこはＤｏｎＡ。こう動くの」

「あ、そっか！　それで、そこからＧａｄｄ９。Ｇに９ｔｈのこの音を加えているの」

「あ、指つる……あぁ～～」

もう指の限界だった。弦を押さえる指が痛いし、ずっとコードを押さえているうちに指がつった。

「ま、最初のうちは仕方ないよね。休憩にしようか」

夏音くんは私の醜態にも頬をぴくりとさせずに静かに言い放った。そのままギタースタンドにギターを置いた夏音くんが皆のテーブルの方に向かう。置いてかれた私は今おさえていたコードの形を手で再現してみる、けど急に虚しくなった。

ふぅ、と溜め息一つ。幸せ三つ逃げていった。滅多に溜め息はつかないけど、教えてくれる夏音くんに申し訳なくて、自分が不甲斐なくて。

夏音くんに何回も言われている、肩の力を抜くってことがなかなかできない。普段の唯をそのまま出せばいいって言うけど……普段の私ってどんなの。最近はこのせいで肩凝りがひどかったりして急に何歳か老けたみたいに感じる。

「うぅ～、ごめんねー。せっかく教えてもらってるのに……」

「気にしないで。だんだん余計な力を入れないで押さえられるようになるから」

そして椅子に腰掛けた夏音くんがお菓子を貰っているのを見て、

私もギターを置いて立ち上がった。

「お疲れサン。唯の上達の程はどう？」

ドラム雑誌を読みながら茶菓子をつまんでいたりっちゃんが隣に座った夏音くんに訊ねた。

「んー、まずまず？」

ぎくってするよね。こうやって目の前で下された評価にどう反応したらいいのでしょう。絶対に褒められる要素なんかないし、聞かなかったフリでもすればいいかな。私は椅子に座ると会話に参加しないで、そっとその会話に耳を傾ばせてみた。

あ、今日のお菓子は大福餅。わーい。

「だって一度は覚えていたものなんだよー？」

夏音くんは湯のみをまわしながら、お手上げーって感じで肩をすくめた。

「だよなー」

それに肩を揺らして同意するりっちゃん。二人とも、本人を目の前にしてひどいよ。そこまで言われると、いくら私だって何か言わなきゃと思って重い口を開くよ。

がっと椅子を引いて立ちあがった。

「私はやればできる子だと……」

あれ。部室から音がなくなっちゃったよ。

「和ちゃんが以前に言っておられまし……た……」

澪ちゃんの方を向くと、音速で目をそらされた。やっぱり、夏音くんの反応が気になるよね。勇気がいるけど。えい。

青い青い双眸を限界まで見開いてこっちを見上げる夏音くん。ふいにその表情が崩れて笑顔になった。

「まぁ、唯だからなー」

「あぁー、そっかー唯だもんなー」
「そ、そうだなー唯だからな！」
急にほわーんと空気が崩れて、嬉しそうに同意するりっちゃんと澪ちゃん。これは馬鹿にされている気がする。
「まぁ、座りなさい」
夏音くんが促すと、すかさずムギちゃんがお茶のおかわりを注いでくれた。それで私は大人しく椅子に落ち着く訳ですが。あれ、今の空気はなんだったんだろうと。納得がいかない。ああ大福が美味しい。
「あと十分くらいしたら再開するよー」
間延びした夏音くんのもの言い。リラックスしきっている。腑に落ちないよ。

「さて、再開しますよー」
「はい」
改めてギターを構えてアンプの前に座った夏音くんのレッスンが再開された。
「ギターをやっていくうえで唯が覚えることは山のようにあるんだけど、まずコードを押さえられないと話になりません」
「はい」
「ただ、曲としてやってみるのも上達の道でしょう」
「はい」
「ということで、二つしかコードを使わない曲があるんでそれをやってもらうね」
そう言って夏音くんは「C」と「G7」だけ使って例を見せてくれた。
「ね、簡単でしょ？　アップテンポな曲で、弾いていて楽しくなるよ」
さぁー、やってみてと言われて私はギターを構える。流石に押さ

えるのが簡単なコードだし、詰まらずに弾けた。コードチェンジも初歩中の初歩のもの（かつて完璧に覚えていたのだから）。

たどたどしいリズムで曲になっているか怪しいけど、何回も同じコード進行を繰り返す。すると夏音くんが足踏みで私のリズムを整えてくれる。あ、曲に入る前はまず足でテンポを作ってからって教えてもらったのを忘れていた。

それでも助け舟（足？）を出してくれた夏音くんの足に合わせてだんだんと私もノッてきた。

でも、ここからがすごかった。夏音くんのギターがそれに参加してきた瞬間、もうそれは魔法みたいに変身した。ギターが縦横無尽に歌い、高鳴る旋律を部室に響かせている。

顔を上げたら目が合った。そして気づいちゃった。彼のメロディーを支えているのは、今の私が弾いているギター。私がズレたらいけないんだ。こんな簡単なコードでこんなに素敵な演奏に立派に加わっている。

すごいよ。私、今音楽やっているよ。

夏音くんの音が甲高く伸びていく。表情で、もう終わりって示されているのがわかる。大げさにギターを掲げた夏音くんに合わせてジャカジャカーンと適当なストロークをかき鳴らして曲が終わった。

「すごいすごーい！！　夏音くん、私すごいよ！」

「うん、きちんと形になってたね！」

私が興奮冷めやらぬ勢いでいると、夏音くんも満足そうに微笑んでいた。

「ちょっとはつかめたでしょ？」

「うんっ！　私、こうやってもっといっぱい曲弾きたいと思ったよ！」

「そう？　なら、次はあの有名な曲にしよう。カントリーロードっていって、使うコードは今より増えるけど、ポジションチェンジが

割と簡単だから……」

ああ、楽しい。うん、楽しい。こんな風に音楽をやっている瞬間は楽しくて仕方がない。

軽音部に入らなかったら、こんな感覚知る事はなかったと思う。

だから私は今日も明日も、どれくらい指を痛めたって楽しいに違いないんだ。

幕間5

ふくよかな残響が消える。

一瞬前には少し低音がブーミーな音がアンプから漏れていた。サスティーンがゆっくり消えていく時、呼吸と似ている。

ゆっくり息を吐き出すような感覚。

私は演奏を終えて指板を手のひらでおさえて目の前の人の言葉を待った。

夏音は腕を組んだ姿勢で目を閉じている。目を閉じると目許に影が作られるくらい長い睫毛は微塵も動かない。白雪の妖精みたいな容姿をしているくせに、何故かその纏う雰囲気は戦国武将のように厳めしい。

あ、そうだ。眉だ。

すごく眉間が寄っている。苦悶しているようにも見えるし、激しい怒りを湛えているようにも見える。

何にせよ、この沈黙は早くなくなってほしい。

「チューニングがズレてる」

やっと開かれた口から思わぬ言葉が飛び出てきた。

「え？」

よりによってそこ？　と思わなくはないけど、まず言われた言葉に反応してみよう。おかしいな。これを弾く前に合わせたばかりなのでチューニングがズレたとは思えない。弾いていても気にならなかったし。

「ちょっと貸して」

私が目を丸くして愛器を見詰めていると、夏音がベースを寄越せと身を乗り出した。素直に渡すと、彼は色んな場所でハーモニクスを鳴らしてペグをいじりだした。ネックを横から見たり縦から見たり。指板のあらゆるところで音を鳴らしてみたり。

「んー、うん。若干だけどネックが反ってるね。ここのところ湿気がすごかったからね」

「反ってるの！？」

それは大変な事だ。いや、一大事だ。

夏音の言葉にどうしようもなく焦ってしまう。それより、何て不甲斐ないんだと落ち込んだ。ネックが曲がっている事に気が付かなかったなんて！！　それでもベーシストか！

そんな風に内心で自分に檄を飛ばしている私を見た夏音がくふふ、と肩を揺らして笑った。

「言っても少しだよ。ほら、オクターブが狂ってるでしょ？」

ほら、って聴いてもわからないけど。

「どうしよう」

「どうしようといっても、どうしようもないよ。テンション緩めたまましばらく放っておこう。たったこれだけでロッドをまわしたくないし」

その言葉にほっとする。何だ、大事にとってしまったと胸を撫で下ろした。実はネックというものは案外簡単に反ってしまうものだ。季節によって湿度の影響を受けてしまう。乾いたり、潤ったり。日本、忙しないから。とにかく楽器は生き物。　すごく繊細で、持ち主の管理がかなり重要だ。愛しの楽器が悲鳴をあげているのにも気が付かないような人間にはなりたくないものだ。

意図せずネックが反ってしまえば、チューニングが揃わなかったりしてしまう。さらに言えば、弦がフレットに当たりすぎてしまったりすると演奏していられない。弦をビビらせる事も手だけど、そこは程度の問題。夏音が言ったように、ちょっと反ったくらいだとテンションの駆け具合で修正できてしまう。

それにしても、夏音の耳はどんな造りをしているのだろう。私は音のズレがわからなかった。少しの音のずれが気になる、というより気にすることができる耳というのはうらやましい。

「澪はもともとロウを出し過ぎて何の音かはっきりしない時があるからな。力入りすぎて音上がってる時あるし」

音感はしっかりつけた方がいいでしょう、と夏音は語る。しかしながら、コルグの安物のチューナーでは計測できないくらいのズレであったことは私の名誉のために言っておきたい。それでも他人に指摘されるのはやっぱりいたたまれなくなる。

夏音の自宅で行うベースのレッスンは毎週の恒例行事になっている。頭を下げて夏音に見て貰う事になって、しばらくは私の方が萎縮してしまって身が入らなかったりした。二つのベースが向き合っていると、普段の彼の面影がすっとどこかに行ってしまう感じがしたのだ。同級生、部活仲間、という枠組みから外れたプロのベーシストとしての夏音を前に圧倒してしまった。

それでも何回か続けていると人間、慣れるもの。すっかりこの環境に順応してしまった今ではこのプロ御用達スタジオ、みたいな自宅スタジオに居ても余裕しゃくしゃくで過ごせる。幸い、夏音以外の家族に遭遇する事もないし。

ただ、多少の不満は何点かある。夏音という男はとかく自室か地下のスタジオにこもって大きな音に埋もれていることが多い。だからチャイムの音が届かないで三十分も玄関で待たされた事もしばしば。金持ちの豪邸の玄関先でじっと動かない少女を近所の主婦が怪しげに睨んできた事もあって、大変居心地が悪い気分を味わったりしたから。

その辺についてつぶさに文句を言うこともできない。所詮、時間を削ってもらっている身だから。どうせ不平を漏らしても「あーごめんごめん」って簡単に謝るだけだし。それでも、それはそれで憎

たらしい気持ちが湧かないっていうのはズルイ。それが立花夏音という人間で、幸か不幸か私はこの短期間ですっかり立花夏音という人間に慣れてしまった。

もちろん慣れないことも確かにあるけど。主にカノン・マクレーンというアーティストについて。

目の前にいるのは確かに夏音だけど、カノン・マクレーンでもある。ベースを弾いている時の彼を同級生として意識することはなかなかどうして難しい。

桁が違い過ぎる。毎回、彼が走らせるグルーヴに圧倒されるし、打って変った幽玄な調べに心が揺れてしまう。フレーズが歌うのに合わせてこっちの心が揺り動かされる。なんといっても、毎度彼のベーシストのコンサートの特等席に座っているようなものだから。

まだ両手で数えるほどしか行われていないレッスンだけど、たったそれだけで私はだいぶ成長したと個人的に思う。まだまだって笑われるかもしれないけど。自分の成長は自分が一番分かっているつもり。だから、胸を張って私は言う。少しだけ上手くなりました、って。

「澪は教えがいがあるよ。教えたことをすいすい覚えてしまうんだもの」

夏音は前にそう言ってくれたことがあった……あったんだ。そのあと、頭が真っ白になった私がどう返したか記憶にないんだけど。彼は本当に真剣に教えてくれる。細かい所まで相手の立場になって疑問に答えてくれたり。ただ、真摯に教えてくれるのはいいけど。これまた頭が痛い問題が。

「ハハハッ！　ヨレてるヨレてるー。何それ三連符になった時の澪のリズム気持ち悪い……あーキモイ！」

「はっはぁー、シャッフルつっても適当ってことじゃないんだよ。頭の中がシャッフルするんじゃないよ？」

「今のは、裏なの表なの？」

「ごめん、いまの曲だったの？」

等々の手厳しい言葉が飛び出る。なんというか、音楽に関しては鬼のように厳しくなるのだ。それも、レッスンが始まって最初のうちはまだいいんだ。

興がのりだすと、だんだんと笑顔を顔面に張り付けたまま心は鬼軍曹と化す。

あまりの言葉に気絶しそうになったことも……。気のせいではないと思うんだけど、メンタル面の耐久力も徐々についてきている気がする。

とにもかくにも。色々あるにせよ、この時間はとてもタメになるし大切なものだって事は間違いない。

「俺のベース貸すよ。弦が激死にだけど」

どうにもこれ以上、私のベースの音を聴きたくないそうだ。ひどい。けど仕方ない。そう言って、彼はスタジオの奥に置いてあったベースの一つを貸してくれた。現れたベースを見て、腰を抜かしそうになった。

リッケンバッカー……到底、私には手が出せない代物だ。万が一でも壊したらどうしようとベースを持つ手が少し震えてしまう。

「何でレフティーのがあるんだ……？」

「これ、知り合いのなんだ。前に何でかプレゼントされた。レフティーのだからいらなかったけど、役に立つ日がくるとは嬉しいね」

おそるおそるベースを受け取ってから、早速チューニングをすませてアンプで音を鳴らしてみた。

「あ、すごい」

弦が死にかけといったが、良い感じに抜ける。綺麗に抜ける、というより重低音がイブシ銀に駆ける感じ。

でも、想像していたのより優しい音だ。私の知るリッケン使いは

たいていがブリッブリでゴリゴリなサウンドだったから。
「案外丸い音も出るだろ？　ホローボディだしフロントのピックアップも特注、プリアンもこだわり抜いて造ったものらしいから。つまりオール特注だからスケールも澪のベースと違和感ないと思うよ」
何だその至れり尽くせり。これ、正規の値段なんかじゃ図れない程のスペックじゃないか。
「うん……弾きやすい……弾きやすいけど、おそろしい」
「そー？　よかったよかった！」
夏音は私の呟きをガン無視してきた。庶民はこんな楽器をほいほい弁償できないというのに、理解していないのか。
それでも、私は磨かれた青白のボディをたくましく感じた。滅多にこんな良いベースを弾ける機会はないのも事実だから、嬉しい。
それから指ならしのスケールを適当に弾きながら、うなずく。弦が死んでいるからあまり高い部分が出ない。イコライザーをいじりながら一弦でプルしたりしてそれを確認していると、ふと頭に浮かんだ事があった。
でも、言うのが躊躇われる。

チラ、と彼の方を見る。そらす。見る。

を繰り返していたら、彼の方が「なに？」と訊いてきた。
「あ、あの。私、きちんと教えてほしいことがあるんだケド……」
「なに？」
「スラップを……ね」
スラップ。ベースを始めたものなら、誰しもがやってみたいはず。そのはず。スラップとは、と訊かれてどう答えるかは人によると思う。大元を説明すると、ベースで打楽器の代わりをする、というのが正しいかもしれない。
先代の偉大なミュージシャンがスラップの道を切り拓いてきて、今ではその奏法もバリュエーションが豊かになった。要するに、な

んだろう。とてもファンキーなグルーヴを作りだすことができて、弾けると格好良い。何を隠そう、この奏法で有名なベーシストの一人に目の前の彼がいたりする。

「そうか……スラップねぇ」

すると夏音は自分のアンプのつまみをちょいちょいといじってから、四弦に親指を叩きつけた。うねるようなグリッサンドから、バキバキとファンキーなリフが繰り広げられる。

私の苦手な三連のシャッフルが盛り込まれ（私へのあてつけ的な）、夏音の両手がめまぐるしく動く。というよりプルの連符……四つ音が聞こえた気がしたけど、幻聴だろうか。

本当に、魔法みたいな手だと思う。見とれる。そして圧倒され。遠くなる。

こんな人に追いつけるだろうかって。

すぐに手を止めた夏音は私の顔を真っ直ぐに見詰めて口を開いた。

「スラップは……まだ、澪には早いと思う」

「そ、そうかな？」

そう言われるとは思っていなくて、ショック。

「うん。まあ、見なさいな」

そして夏音は親指を四弦に叩きつける。

「これがサムピング」

次に、三弦を人差し指で引っ張って指板に叩きつけた。ベキッと音が鳴る。

「それでプル。この二つがスラップの基本です。けど、これを組み合わせてこういう音が鳴っていたらスラップって言うのかな」

夏音は単純なサムとプルを使ったオクターブフレーズを弾く。

「ずっとこれじゃあ、つまんないね。澪が想像するスラップは、もっとこうファンキーな感じじゃない？」

「うん」

「それには、実はいろんな技術が必要だし澪は普段弾いていてもゴーストが下手。ミュートができないとそれっぽい事しかできないよ」

「うっ……！！」
遠慮はなし。夏音の言葉は鋭い。
「だからスラップはもっと後でいい。サムやプルなんかの動きに慣れておく事はいいと思うけどね。今は他にやることがいっぱいあるからね！」
「うぅ、ハイ……」
私は返す言葉もなく、うなだれてしまった。
「まあ、そんなに落ち込まないでよ。いつか、必ず教えるから。俺は澪にはきちんとベースを教えて、上手くなって欲しいんだ。澪なら、できると思うから」
顔をあげると、真剣な表情で私の目をのぞく夏音。青い瞳は、嘘を含まない。たしかにボロクソ言われるけど、夏音は最後には必ず「澪ならできる」って言ってくれる。
そう言われると、今がどんなに未熟でも必ず上手くなれるっていう自信がつくんだ。
間違いない、って信じることができる。
「あぁ、確かに他ができていないのにスラップなんておこがましいよな……」
「うわぁ、おこがましいなんて日本語……澪ったらネガティブな子だね」
「こ、これは謙虚っていうんだ！」
「ハハハ！　冗談だよ。それに、そんなに遠くないうちに澪には教えることができると思うから安心して、な？」
な、って言われてニッコリほほ笑まれると言葉が出ない。心なしか顔が熱い。だめだ……やっぱりこいつには勝てない。
「なんていうか……よろしくお願いします」
顔は上げていられないから、頭を下げる。
「いいえー、こちらこそ」

幕間5（後書き）

幕間、とりあえず終了です。一つ一つが超絶短くてすみません。

第八話（挿絵あり）

バンッ。

それは夏の暑い放課後。うだるような暑さに口数も少なくなり、黙々とムギ提供の冷茶をすすっていた軽音部一同であったが、急に部室の入口からバンと大きな音にびくっと反応した。音の発生源に目を向けると、どうやら行儀の良さで知られていたはずの澪が部室の扉を蹴破る音だったらしい。

彼女は注目を集めながら部室の中央へとずんずん進んでいく。肩で風を切りながら颯爽と部室を横切ってくる彼女に唖然としながら見詰めた。

澪は口を閉ざしてぽかんとしている一同を見据えて、びしっと指を突きつけた。

「合宿をします！！！」

夏音はハッと眼を見開いた。

合宿。それは学園ものには必ず登場するお決まりのイベント。彼はこの青春の香りをぷんぷんと彷彿させるキーワードがいつ飛び出てくるかと待ち望んでいた。いつ、誰が言ってくれるのだろう。自分の我慢もそろそろ限界。誰も言わないなら自分が提案していたところだ、と疼いていた心に溶け込む言葉が今、澪の口から飛び出た。

「合宿……ああ合宿！　その妙なる響きや、よし……ふふふ」

ぼそぼそと危ない目をしながら呟く夏音に気付かず、他の者は疑問を浮かべていたが、次第にその顔が晴れやかに輝く。

「合宿って……海！？　山とか！？」

ウキウキと自分の思い浮かべる合宿のイメージに浮かれる律に、澪の眉がぴくりとハネあがった。

「遊びにいくんじゃありません！　バンドの強化合宿！　朝から晩

までみっちり練習するの！！」
「えー、何でー？」
律と同じく楽しい楽しい合宿風景を妄想していた唯が心からの疑問を放った。
「せっかくの合宿なのに」
楽しいはず、合宿。なのに、澪の語る内容はどうも暑苦しい体育会系の匂いがぷんぷんする。
「まあまあ。合宿、いいじゃないか」
すっと立ち上がり、真剣な表情で前に歩み出た夏音に視線が集まる。涼やかな微笑を湛えながら夏音は彼女達をしっかりと見据えて、口を開いた。
「青春に必要不可欠なものといえばなんだろうか。ここ最近『これだ！』というイベントがなかったよね。こんなはずじゃない。こんなのほほんと青春を無駄にしていいはずがない。合宿……あぁ甘美な響き。そう合宿！　海でも山でもいい！　若い男女が人里離れた場所で寝泊まりしてバーベキューに海水浴！　はたまた川遊びにキャンプファイヤー。夜は温泉に入って風呂上がりの花火でしんみりと夏の終わりに寂寞を募らせる……決まりだ、合宿。行こうぜ、合宿……ぷくくっ」
語っていく端から空気が冷えていく感触を肌で感じることができなかった夏音は背後に迫る凄まじい怒気に気が付かなかった。
部室中に小気味のいい音が響いた。

「ごめんなさい遅れちゃって……ってあら？　夏音くん頭どうしたの？」
遅れて部室へやってきたムギが、頭にタンコブを作って正座をしている夏音に目をとめた。
「気にしないでクダサイ」
正座は日本の反省の証だそうだ。
今しがた制裁を加えたダブルに冷たい一瞥をくらわせると、澪は

もう一度自分の主張を再開した。
「来週には夏休みが始まります。そして夏休みが終わったらすぐ学校祭でしょ？」
「学校祭？」
「そう！　桜高祭での軽音部のライブといえば、昔はけっこう有名だったんだぞ？」
「そんな事より高校の学校祭ってスゴイんでしょ！？」
「おー、たこ焼きにお化け屋敷に喫茶店！　中学とは次元が違うって聞くな！」
そんな事扱いされた挙げ句に話を脱線させてゆく二名にぴくりと澪の瞼がひくついた。こめかみに青筋を浮かべて、脱線魔達の脱線トークが過熱していくにつれ、うずく拳を止める事ができなかった。
部室に頭をさする者が二名に増えた。
「高校の学校祭のすごさなんてどうでもいい！　メイド喫茶も死んでもやらない！　私たちは軽音部でしょ？　ライブやるのー！！」
爆発しそうな勢いで怒りに顔を染める澪に律と唯が「うっ」と黙る。普段大人しい人物が怒るとより恐ろしいのだ。いついかなる時も彼女の鉄拳の恐怖にさらされている者どもは何も言えず、唯一その鉄拳制裁の射程範囲の外に位置するムギが場を収める事になった。
太い眉毛をきゅっと引き締めたムギが魔法の一言を紡ぐ。
「まあまあ落ち着いて澪ちゃん。マドレーヌ食べよ？」
怒れる澪もしょせん女の子。あっさりとお菓子に陥落した。とりあえず必殺のお菓子作戦で澪の気を和らげることに成功したムギはほっと胸を撫で下ろしてお茶の準備を始めた。
これぞ軽音部クオリティ。

小休止を挟んでほっと一息。だいぶ柔らかい表情になった澪がムギに向かって食い入るような視線を向けた。
「ムギはどう思う？　いくら慌てずやっていこうといっても、もう

三か月にもなるのに一度も合わせたことがないなんて……軽音部なのに！」

それに対してムギは困ったように苦笑を浮かべるばかりで答えられない。答えようもない、といったところか。三か月という月日は長いようで短いものだったりする。とりあえずは新しい学校生活に慣れるのに精一杯で、夏休みが訪れるのがあっという間なのだ。その間の軽音部が個々人で音楽に触れ合っていたとはいえ、バンドとして演奏する事がなかったのは異常事態ともいえよう。ムギ自身もこんな現状に疑問を挟む機会は幾らでもあったが、行動を起こさなかった内の一人である。部を慮る澪に堂々と正論を述べるには躊躇ってしまうのだ。

澪が熱く語る中、夏音は未だダメージを引き摺る頭をさすりながら、静かな瞳で思案にくれていた。

誰も言わなかったのだから仕方がないのではないだろうか、と夏音は現状を受け止めている。彼は軽音部に入る事に決めて以降、自ら積極的に動かないように傍観の姿勢をとっていた。ギター初心者の唯にギターを教えるという作業のかたわら時折ベースに触れる事はある。機材の前で数時間も何もしないのは時間の無駄だからだ。そして夏音のベースをＢＧＭとして陽気にティータイムを繰り広げていた中には、ちゃっかり澪もいるのだ。

部としての音楽的方向性の欠片すら見えてこない状況。部活としての方針も未定。

それでも夏音自信は、まあ楽しければいいんじゃないかなーと軽く構えていたのも事実だ。自分が悪くないとは思わないが、怠慢が過ぎたかもしれないと省みた。そもそも、そのように悩んでいるのであれば澪もベースのレッスン中に言ってくれればよかったのだ。

「バンド、やらないの？」

切実な心の叫びが一同の心に突き刺さった。つい口を閉ざす面々の中、ムギがぱっと顔をあげる。

「ぜひ、行きましょう！」

ムギがぽんと手を打って澪に賛同の言葉を贈る。力強く、だが楚々たる笑みを向けられた澪の表情に明るさが戻った。
「ムギ……」
分かってくれたのか、と頼もしい表情でムギを見詰める澪。そんな彼女に大きく頷いたムギは続けざまに言った。
「みんなでお泊り行くの夢だったの！」
「え？」
無垢な笑顔を真正面から受けた澪がぽかんと間の抜けた表情になる。
「あ、それじゃあ海にする？　山にする！？」
「山でも川で遊べる所がいいと思います！」
彼女の言葉に端緒が開けたのか、今までの重苦しい雰囲気が嘘だったみたいに霧散した。合宿に行く事に反対意見はないとして、遊ぶ気マックスのテンションに持ち上がった一同に澪の涙まじりの叫びが響いた。
「だーかーらバンドの強化合宿だと何度言わせるんだ！！」

その後、喧々諤々の議論（？）がヒートアップしたところで、夏音は「そういえば」と皆を見回した。
「合宿ってたくさんお金かかるんじゃないのかな？　俺は大丈夫だけど、みんなは大変じゃない？」
ここ数ヶ月で女子高生の懐事情を把握しつつある夏音。ここで金銭の配慮をするというたまにしか見せない年の功を見せた男の発言に何名かの肩がずんと落ちこんだ。
「そ、それは……幾らくらいかかるんだろう」
なんと言い出しっぺの澪は、何の段取りもとっていなかったらしい。
「まったく。煮詰めろとまでは言わないけど、言い出したんだから大雑把な予算くらいは見積もっておかないと」

夏音の全うな言い分にさらに肩を落とした澪。先ほどまでの勢いは見る影なく、しょんぼりと縮こまってしまった。
「しっかし海に行くにも山に行くにもそれなりにお金かかるよなー」
律が肘をついた両手に顎を乗っけた姿勢で深刻な表情になる。
「な、なあムギ？」
意気消沈していた澪がギギギ、と首を軋ませると一縷の望みをかけてムギの方を向いた。
「はい？」
「そ、その……別荘とか……持ってたりしないかなー」
そんな馬鹿な。流石にそれはないだろう、と律が呆れたように鼻を鳴らした。
「ありますよ？」
すっと一直線に返された言葉に律の頭が机に突き刺さって鈍い音を立てた。
「え、ほんと？」
「ありますよ、別荘」
宿泊場所、確保。

お嬢様然としたムギが本当にお嬢様だったと明るみになったところで、宿泊代が浮くという事実は大変喜ばしい。めでたやめでたや、と一同はうきうきとした雰囲気でお茶を再開した。そのまま和やかに合宿の予定が話し合われていく。
「いひゅならなふやふみでけっへーだろー？」
とマドレーヌを頬張りながら言う律に澪が眉をひそめた。
「口にものを詰めて話すな行儀悪い」
すかさずそれを注意する澪はまるで――――、
「お母さん？」
「何か言ったか夏音？」
「なんも」

やぶ蛇になりかねない、と夏音は慌てて口をつぐんだ。
「日程は一泊二日とか、かしら？」
ムギが心なしかわくわくした様子でノートに決定案を書き込んでいくが、澪はその提案に曖昧な反応を示した。
「どうせなら三泊くらいはしたいところだなー」
そこに夏音が難色を示す。
「三泊は長すぎるんじゃないか？　機材も持っていくし、着替えとかも結構かさばっちゃうよ」
「そうか……律は持っていくもの多くなっちゃうよな」
澪がそれもそうか、と頷いて律に振った。
「ん？　スティックだけ持ってくつもりだけど？」
「オイ……」
ムギの話によると、父親が別荘に知り合いのバンドを呼ぶので機材一式が揃っているそうだ。ドラムセットから各アンプまで。楽器屋を傘下に収める琴吹家ならではの至れりつくせりである。どちらにしろ、重い機材と1セットの移動は厳しいものがあるので助かる話だ。機材車なんてないのだ。

結局、合宿は二泊三日。夏休み第一週、つまり来週の金曜日から三日間となった。目先に決まった楽しげなイベントに「くくっくくっ」と笑いが止まらない夏音は帰り道で通りすがる人々に気味悪がられた。
そもそも二泊三日も男女混合のお泊りが許されるのかという疑問が浮かんだ。浮かぶものと思っていたが、誰も触れないので考えないことにした。だから、いいのだ。もしかして異性として意識されていないのかもという考えは思考の外にぶん投げた。おそらく信頼されているのだ。そうなのだ。
そのへんの繊細な問題については曖昧な笑みで濁しつつ、夏音は

肝心の合宿内容について考える。
先ほどの話合いで出された宿題。バンドで合わせるといってもオリジナルの曲も用意していない状態だとコピーしかない。何よりコピーの方が色々手っ取り早いという事で、コピーする曲を決める事になったのだ。これについては各自でやりたい曲を持ってこようという話に落ち着き、明日までの宿題となった。

（五人で、キーボードが入った編成のバンド……。もしもの時はアレンジしてやるのもいいか。迷うなあ）

夏音はその日、自分の持っているＣＤやデータを漁って今の軽音部にぴったりな曲探しに明け暮れた。バンドで合わせた事はないものの、軽音部のメンバー全員とは一対一で音楽で触れているのだ。各自の実力も大体把握したつもりである。問題は唯である。唯を基準に曲を決めねばならない。

あれもこれもと出てくるが、絞らないといけないとなると、どうも難しい。

結局、その日は深夜までかかって何百と曲を聴いていた途中で眠気に負けてしまった。

電気を点けたまま寝入ってしまい、そのまま朝をむかえた夏音は放課後になって曲を絞りきれなかった事に焦っていたのだが。いらぬ心配であったようだ。

「結局絞れませんでした」

という意見が見事に出揃った放課後。皆、同じような悩みを持ったのだと思われる。これは好きな曲をベスト３で挙げてみて、と言われた時の境遇と同じようなものだ。

「そもそも、だよ！」

夏音はここで曲を決めかねた理由を言った。

「このバンドの編成ってどうなの？　きちんと決定した覚えはない

んだよね」
　最も重要なことを忘れていたことに、お互い目を反らした。同じ穴のムジナ。それが軽音部。
「といってもドラムは律。キーボードはムギ。唯はギター。だから残るのは……」
「ベースが澪か俺か、だろう？」
　夏音は問題となっていた部分に触れた。そして続けざまに「澪でいいだろう」と言った。
「俺がヴォーカル。必要ならギターも弾くよ」
「でも、夏音はそれでいいのか？」
　澪が複雑な心中を表しながら夏音に尋ねた。
「全然かまわないよ。むしろ、一番それがすっきりするだろう？」
「夏音がそれでいいなら」
　未だ納得していない様子の澪を無視して「これで編成も決まった事だし！」と夏音が議題を進めた。
「どうする？　俺が全部の曲のヴォーカルということで決めていくの？」
「どうせなら、そうして欲しいな」
　澪は万が一でも自分が歌うことになったら大変、と夏音に歌を一任するように頼んだ。そもそも、唯が入る前にこの話は出ていたのだが、結局きちんと決定せずにここまできてしまっていたのだ。ここで夏音が歌うことに誰も異議はなかったので、ようやく話はまとまりつつあった。
「それでは、俺がヴォーカルということで曲を決めていきましょう！　そしてバンドが演奏可能な曲を！　お互いを思いやって曲を選んでください！」
「はーい」
　四人分の良い返事が返ってきた。夏音はそれに満足そうに頷いた。
　しかし、後日メンバーが選んできた曲はことごとく却下された。

結局、今から合宿までの期間を考えると、三曲が限界だという事に。夏音は「そんなものか」と不承不承ながら納得して曲決めを進めることにした。ただ「好きだから」という理由で曲を選んだ彼女達の向こうみずっぷりを見かねて、結局のところ夏音主導での曲選びとなった。

何と言っても、それぞれの技巧を顧みない選曲ばかりだったのだ。それでも何とか曲が決まった。採用されたのは、律と唯、夏音の曲である。

それぞれに音源が渡され、練習に打ち込むように言いつけられた。これで軽音部もその名にふさわしい部活になってくれるだろうか。一抹の不安は拭いきれないが、あとは皆が練習してくるのを信じて合宿までの日数を消化していくしかない。

帰宅後、夏音がリビングのソファでうとうとしていると、滅多にならない家の電話がけたたましく響いた。のろのろとした動作で電話の子機をとりあげると、そこからは聞き慣れた声が聞こえた。

『Ｈｅｌｌｏ！！』

鈴を振ったような声。受話器越しにも鼓膜を通り抜けてくる独特な存在感を持った声の持ち主は他にはいない。

「Ｍｏｍ？」

夏音は思わず声をあげた。

『そうよー元気にしてた？』

電話をかけてきた主は、夏音の母・アルヴィであった。

「母さんこそ！　今どこにいるの？」

『北海道よー』

（相変わらず神出鬼没だな……）

『あのねー、もう少しで夏休みじゃない？』

「そうだよ。よく知ってるね」

あの両親が自分の予定を把握しているとは、珍しい。
『たまには家族で過ごすべきだと思うの』
「帰ってくるの？」
『八月の第一週よー』
「げっ」
『何かあるの？』
「三日間ほど軽音部の合宿があるんだ」
『まあ！　まぁまぁまぁ～……なんてことなの！』
「だから、三日間ほど家を空けることになるんだけど」
『ひどいわ夏音！　ママたちより新しいお友達を選ぶのね！』
「そういうわけじゃないよ。もう決まってることだし、急に言われても困るよ。だから、帰ってくるなら二週目にして」
『でも、次の週にはお仕事で九州に行かなければならないの』
「じゃ、四日間だけかまってあげるよ」
『もーつれない！』
電話の向こうでぷりぷり怒っている彼女の様子が目に浮かび、夏音はくすりと笑った。
「ママに会えるのを楽しみにしてるよ」
『夏音……あなた、やっとママって……っ！』
「じゃぁ、忙しいから」
『あ、夏音！　もしかして女の子と一緒にいるんじゃないでしょうね？』
ブツッ。
夏音は強制的に通話を終了した。
「やれやれ」
クスッと笑って夏音はふとカレンダーに目をやった。丸が付けられている三日間まであとわずか。
今はこちらの方が大切だから。申し訳ないけど、両親には我慢してもらう。

「はい、これ」
「Ｆ＃７」
「次」
「Ｃａｄｄ９！」
合宿前々日。夏休み初日とも言う日だが、夏音と唯は部室でギターを構えて向かい合っている。昼下がりの学校にいるのは、夏休み初日から気炎をあげて練習に打ち込む運動部。その他の文化系の部活動のみ。一般生徒の姿はほとんどない。
校内に響く管楽器の音は吹奏楽部である。桜高の吹奏楽部はかなり大所帯で競争が激しいと聞く。個人が鎬を削り合ってレギュラーに食い込むために個人練習に励む姿勢は、軽音部とは大違いと言いたい所だが、今回ばかりはそうとも言えない。
部室にいる二人の部員は練習のために休みの学校に来ているのだから。しかも、この練習は唯から言い出したものだ。初めてバンドで合わせる。本当の意味で軽音部の活動の第一歩を踏み出すのに、自分が足手まといになりたくないのだと唯は語った。
当然夏音は「この立花先生に任せな！」と二つ返事で受けた。
せっかくの休みという事で昼までたっぷり寝て、昼過ぎに部室に集まった。この三ヶ月間ほど、唯にギターを教えてきた夏音。初めは一から音楽知識がない唯に対して、どういったアプローチで教えようか悩んだ。ギターを弾くと言っても、ギターを弾く事だけ教えれば良い訳ではない。ギターよりも音楽を教える事が重要だと夏音は考えている。
音楽理論については、教えようとして即頓挫してしまった。三度、五度やコード理論。唯の頭から煙が燻り始めてしまうのだ。夏音が見た限りでは、明らかに唯は感覚的にギターを弾くタイプの人間である。むしろそういう人間に理詰めで理論を叩き込むのは効率が悪

い。いつか身につけるべき事であるが、時期尚早かもしれないと踏んだのだ。

そうした事柄を踏まえた上で夏音が唯に叩き込んでいる事。それは、指板上のどこにどの音があるのかを徹底的に把握するという作業である。指板の上をフレットで区切られているギターは、フレットごとに音が存在する。ドレミファソラシドの音階が幾つも存在するのだ。オクターブがどこにあるのか、これで把握する。さらにスケールを覚え込ませようとした。教えたスケールをどの場所からでも弾けるようにひたすら繰り返すように言った。

「はい、Aドリアン」

夏音は淡々とスケールを指定していく。夏音が言うスケールを唯が弾く。それでたまに間違う。

「違う！」

「え、えーと……これは……」

「それ、リディアン」

こんな感じにスパルタでやらせてきた。何も全てのスケールを覚えこませようとしている訳ではない。ペンタトニック等のよく使用するスケールを中心に教え、それが完璧にできるようになったところで、他のスケールや応用を教えているのであった。同時に覚えたせいか、スケールがごっちゃごちゃになっているようであった。

「例えば、ここで9thの音を足すとこういうフレーズになるんだけど。なんか聞き覚えない？」

「聞いた事あるような、ないような……」

「あれー。一昨日、こういう手癖を多用する人のCD貸したばかりなんだけどナー」

「あぁ、それで聞き覚えが！」

まぁ、そんなものかと苦笑した夏音であった。

「こういうフレーズの中にこうやってトリルを混ぜると、こんな感じに。よくソロで使っている人が多いです」

「ほぉー！　格好良い！」

瞳を輝かせる唯に夏音も嬉しくなる。彼女は今まで自分がぽやーっと聞き流していたギターのフレーズ、その作り方を学んでいるのだ。以前に唯が、いつかギターソロを弾いてみたいと話していたのだが、こういう作業が積み重なってできるようになるのだという事がおぼろげにも見えてきているのだ。

このような作業の中、唯は合宿に向けて曲の練習に励んでいる。幸いな事に、軽音部の面々は耳の力でフレーズをコピーする能力を持っていた。夏音としても、唯には市販のバンドスコアなどに触れて依存するようになって欲しくないので都合が良かった。

三曲、全てを夏音は唯に耳で覚えさせた。崩した言い方で言うと、耳コピである。音楽初心者はこれをできない者が圧倒的に多い。今まで唯には指板上の音を全て覚えさせた。スケールも覚束ないながら覚えさせた。

ここで嬉しい誤算が起こる。耳コピする中で、コードの構成音やらを感覚的に覚えつつあるのだ。何となく、の次元だがしっかりツボを押さえている。

唯は絶対音感を持っている。ひょっとして化けるのではないかと夏音は腹の底からわき上がる言いしれぬ感覚にドキドキした。

何としても、よく分からない身につけ方をされたりするので、教え甲斐はないかもしれない。向こうが納得しても、こちらが腑に落ちない、等がよくある。

唯は結果、三曲全てを耳でコピーしてしまった。

そんな風に合宿も前日に迫ったところで、夏音自身に重大なトラブルが起こってしまった。

「なんというタイミングで……」

夏音は自分の太ももにできた発疹を睨む。痛々しい、この……ジンマシン。

「サバなんて……サバなんて食わなければよかった！！」

膝をついて昼食で食べた青身の魚を呪った。近所のマダムに貰ったものだから。急遽かかった医者は「君は青身魚だめなんだねー。美味しいのに」と暢気に笑った。薬を飲んで安静にしていろと言われて帰された。

合宿の場所こそ秘密であったが、泳げる場所があるので水着を用意してきてねとムギに言われていた矢先の出来事。

しかし、どうだろう。こんな状況で泳げるはずもない。他の者が楽しそうに泳ぐのをただ指をくわえて見ているだけということだ。

「なんてこと……俺に残るのは、あいつらの水着鑑賞だけか……

……それもそれでよし、か」

それも間違っている。

合宿当日。

「I、ｍ　ａｌｏｎｅ．．．ａｌｏｎｅ．．．」

郷愁を感じさせる味のある表情で夏音は車を飛ばしていた。大型のワゴンには、運転席に座る夏音しかいない。後ろに積んだ機材や……唯のギター以外に同乗しているものはない。

「くそっ」

思わず汚い言葉を吐く。俄然アクセルは強め。メーターは頂上を振り切っている。ハイビームのごとく山道を疾走する夏音は損な役回りを務めている自分に自分で同情した。

「×××ジャーップ！！　唯のやつーーっ！！」

伏せ字は有名なＦワード。一人、孤独に車を走らせているのも、全てあの破天荒な天然娘のせいなのであった。

「唯……もしかしてまだ寝てるんじゃ……」

集合時間になっても一向に姿を現さない唯に不安を駆り立てられ

た澪が恐ろしい一言を吐いた。
「ま、まさかー。いくら唯でも、そんなはずは……」
フォローの言葉が見つからず、律は押し黙ってしまう。ありえなくないや。
夏音も足元のエフェクターケースに腰掛けたまま、焦れながら唯の到着を待っていた。普段からどこか抜けている少女を思い浮かべてさらに不安は増す一方である。
「よし。私、唯に電話してみる！」
とうとう澪がシビれをきらした。電車の到着時刻までに余裕をもって集合時間を定めたが、これ以上遅くなるのであれば電車に乗り遅れるという最悪の事態も起こり得るのだ。それこそ笑い事では済まされない。
一同は唯に電話をかける澪の様子を静かに見守った。きゅっと口を結んで相手が出るのを待つ澪であったが、その表情は見る見る青ざめていった。
彼女はゆっくりと口を開いた。
「……お、おはよう」
その一言を聞いた一同に戦慄が走ったという。
案の定、寝坊をかましたという唯は二十分後に合流した。
「ごめんなさーーーい！！！」
登場して早々、いきなり両手を地面について謝る彼女に、皆は山ほど言いたかった言葉を飲み込まざるをえなかった。何より、そんな時間の余裕はなかった。何と言っても発車時刻の五分前である。
一同は土下座する唯を引っ張って猛然と走り出した。
「ほら、急ぐぞ！　切符はもう買ってあるから！」
澪があらかじめ買っておいた切符を走りながら唯に手渡す。
「うん、本当にごめんね澪ちゃん！」
「まったくひやひやしたぞー」
走りながら唯を咎める律であったが、夏音に「それを言うのはまだ早い！」と指さされた先には電車がホームに入ってくる光景が。

そのまま息を切らしながら走る一同は、なんとかホームにたどり着いた。
「ふう～。なんとか間に合った……ていうか、五分くらい停車するんじゃんかよー」
アナウンスを聞いた律が汗を拭いつつ夏音を軽く睨んだ。
「そんなの知らなかったもの」
間に合った事で安堵したせいか、文句を言い合う二人にムギが笑いながら割って入った。
「まあまあ。とにかく間に合ってよかったじゃない……ってアラ…唯ちゃん……ギターは？」
「へ？」
後に唯は『これが夢であればとどれだけ思ったことか』と語った。
遅刻した少女は旅行鞄を一つ引っ提げて来た訳である。背中に背負っているべき重量がない事に気付かない程焦っていたという事だろうが、持ってきていないものはどうしようもない。そして、もうギターを取りに行く時間はなかった。集合した駅から出る電車から乗り換えを行わなくてはならないのだが、乗り換えるべき電車の本数が少ないのだ。調べてみると、次の電車は二時間後というお話。
青褪めて二の句もつげぬ様子の唯。同様に言葉を失った一同に残された最終手段を必死に探る。
その瞬間、四対の視線がちらりと夏音に向けられたのは偶然ではないと夏音は思い返した。

最終手段として、夏音が唯の自宅までギターを取りに行き、単独で車を走らせて合宿地まで向かうという措置がとられた。
自分に照射された視線に、ついに夏音は頭の隅に置いておいた対抗措置を引っ張ってきた。考えたくはない。これでは夏音がひく貧乏くじがあまりにも大きい。とはいえ、他の策を考える時間もなかった。おずおずと手を挙げて、自ら申告した。

「本当に大丈夫？　電車なら割とすぐなんだけど、車だと結構かかるのよ？」

自分もソレを期待していた一員だとしても、やはり人道的な観点から夏音に悪いと思ってしまうムギは最後まで心配そうに夏音を見詰めてきた。それこそ、全員が同じ気持ちであったが、自分が犠牲になってどうにかなるのならやってやろうと夏音は意気込んだ。

別荘の場所と住所を教えてもらい「男に二言はない！」とつっぱねた。

その間、唯は地面をおでこで割らん勢いで土下座をしていた。

夏音はすぐ切符の払い戻しをすると、車を取りに自宅まで走った。どうせならとアンプ類の機材を積み込んでから唯の家へ車を飛ばした。事前に連絡がいっていたらしく、唯の妹の憂がギターケースを抱えて家の前で待っていた。

真っ青になって姉に負けじと平謝りをする憂を宥めてから、目的地まで車を走らせる旅に出たのである。

比較的空いていた首都高を抜け、常盤道に入ってから一時間弱が経った。まっすぐにのびた道の先に陽炎が浮かんでいる。ＳＡで休憩していた夏音は、皆はそろそろ目的地へ到着しているころだろうかと想像した。自分に悪いと思って沈み込んでいるかもしれない。特に、唯がしゅんと元気がない様子はこちらの心境も悪くなる。軽いお仕置きをする事にして、許してやろうと思った。

ＳＡを出発する前にカーナビをチェックする。それによるとあと一時間弱で着くらしい。もうひと踏ん張りだ。

「チクチョーその半分で行ってやる！」

その頃、一方の女の子たちは。

「ははぁー、すっげぇー！！」

「海だーー！」
「泳ぐぞーー！！」
「だから、遊びにきたんじゃなくて！」
「うふふ」
仲間愛とは何であろう。

軽音部から夏音をひいた面子は別荘に到着した。それはもう滞りなく着いた。途中、お腹を下す者も電車の中に忘れ物をするという者もいなかった。彼女達が乗車した特急は罪悪感という物を振り切る速度で目的地まで突っ走ってくれたのだ。
やあ暑い。そうねえ、うふふと言った会話を挟みながらムギの案内で敷地内に案内された一同は揃って絶句した。絶句。出すべき言葉が脳みそから吹っ飛んでしまう程の衝撃。
目の前にでかでかと建つのは想像やテレビ越しにしかお目にかかれないような「金持ちの別荘！」を凝縮した建物。
やがて律が「でっけぇー」と呆けるように呟いた。
「本当はもっと広いところに泊まりたかったんだけど、一番小さいところしか借りられなかったの」
付け加えるムギの発言に誰もが耳を疑った。目の前の現実に出会い頭にパンチされたというのに、まだこの上があるという。
「一番小さい……これで？」
律が皆の心の内を代弁した。どうやら自分達はこの不思議な友人の底を見誤っていたらしい。中でも律は今度テレビの長者番組に琴吹という名がないかチェックしようと心に誓った。
早速施設の中に通されると、外観通り広い。家と称される屋内でこんなに歩くこともないだろう。木造の建物の中は、若干東南アジアや南の島のテイストが盛り込まれ、風通しの良い造りであった。避暑にはぴったり、というわけである。

自分達が三日間を過ごすことになる建物のあまりの豪奢な加減に興奮した律と唯は歓声をあげながら屋内をずんずんと進んでいった。居間のテーブルにはセレブのパーティーに登場しそうなフルーツ盛り、冷蔵庫を開けてみると霜降り牛肉。天蓋付きのベッドには花が散らされていた。一般女子高生にとっては未経験ゾーンの贅沢が出るわ出るわで、はしゃぎまくった。

「うぅ……ごめんなさい」

申し訳なさそうにさめざめと泣いているムギは、しゅんとうなだれて彼女の事情を話した

「いつもなるべく普通にしたいって言っているんだけど、なかなか理解ってもらえなくて……」

その話を聞いた澪は、よく分からないがお嬢様も大変なのだなーと同情した。同時に自分には縁遠い話だ、とやさぐれかけた。

肝心のスタジオに通されてから、機材をチェックし終えた澪は他の二人がいないことに気がついた。

「あれ、唯と律は？」

「途中でいなくなっちゃったけど……？」

「しょうがない奴らだ」

溜め息と共にそう漏らしてから、澪はおもむろに旅行バッグからラジカセを取り出した。

「それ、なぁに？」

「これね」

澪は言葉で説明するより、と再生ボタンを押した。攻撃的な高速ビートの曲が流れる。ずんずんと低音を響かせ、技巧を効かせたリフがうねっている。いわゆるメタルと呼ばれる音楽。

「昔の軽音部の学園祭でのライブ。この前部室で見つけたんだ」

「上手……」

ムギは耳に入る弦楽器隊の技巧の数々に驚かされた。背後に疾走するドラムに乗っかって自由に喧嘩し合うツインリード。音質は悪いが、実際にその場にいたら圧倒されていたのだろうと想像できる。

「私たちより相当上手いと思う」
澪は演奏が区切れたところで停止ボタンを押した。表情が曇ったまま。
「うん」
「なんか、これを聴いていたら負けたくないなって」
「それで合宿って言いだしたのね？」
それで納得した様子のムギは澪の負けず嫌いな一面を知り、微笑ましく思った。
「まあ、ね」
「負けないと思う」
その一言に澪ははっと顔をあげる。ムギは澪の顔をしっかりと見てから、力強く繰り返した。
「私たちなら」
「ムギ……」
ムギの瞳に広がる静謐な光。それは揺れることなく、まっすぐに信頼という感情を表していた。澪はまだ付き合いの浅いこの少女の言葉がすっと胸に入ってくるのを感じた。不思議と「その通りだな」と納得してしまう。
行き当たりばったりというより、全てに手探りで挑んでいる自分達には可能性がある。この音源の先輩方を凌駕できないはずがない。
その言葉を誰かに言ってもらえただけで澪は胸につっかえた物がいくらか取れたように感じた。
二人の間にさらなる友情の絆が結ばれようとしたその時。
「いよーーーしあっそぶぞーーいっ！！」
「オーイェーー！！！」
真剣な空気は二人の闖入者によって木端に破壊された。
「って早っ！　お、おい練習は！？」
既に戦闘準備万端の二人に面食らった澪であったが、既に二人は部屋の外に突っ走っていってしまった。
「先行ってるから、二人とも急いでねー」

遠くから唯の声が響いてくる。
「これでも……？」
地獄の底から響いてきそうな声が澪の喉元から響いてきた。じっと暗い眼差しをあてられたムギは苦笑いを浮かべた。
「え、ええ……まぁ」
ああいう流れがあった手前、若干気まずい。一気に不機嫌になった澪をちらっと見詰めたムギだったが遠くに響く歓声にふっと笑みを零した。
「澪ちゃん、いこ？」
ムギからまさかの提案に澪の体がびくりと跳ねた。
「え……ム、ムギ行くつもり？」
「せっかくだし、少しくらいなら……ね？」
ね、と悪戯っぽく笑うムギは心なしかうきうきとして見えた。今にも走り出しそうな、それでいて抑えているような。そんな彼女の様子に澪の心は揺れ動いた。
（ムギ、もしかしなくても遊びたいんじゃ……？）
澪は、合宿前に彼女が同年代の友達と遊ぶことがなかったと言っていたのを思い出した。
「で、でも私は……」
再び聞こえた律たちの催促の声に「はぁーい」と返したムギはついに「待ってるからー」と澪の元を去ってしまった。止める間もなかった。
澪は、中途半端に伸ばしかけた手を力なく落とした。
「そ、そもそも夏音にあんなことさせておいて……その夏音だってまだ到着していないのに……」
皆は何て冷たいんだろう、自分は決して行くもんかと背を向けた澪。そもそも唯は暢気に遊べるような心境に持って行けるのは逆にスゴイと思う。褒められたものではないが。
――キャハハー、いっくぞー！

――二人とも待ってー。
――ビーチボールふくらますのやってよー！

人のいない建物に響く楽しげな笑い声。澪の胸のあたりをぐっと這うような何かがこみ上げる。勝手に足がじたばたとなるのを抑える。

（でも、夏音が……）

揺れる良心。

――澪はまだこないのかー？
――先行ってるって言っといたからー。

（ごめん、夏音！！）

「私も行ぐーーー！！！」

割れる良心。

言葉で言い尽くせない様々な理由によって涙を流しながら、澪はバッグの中から水着を探した。

その結果がこうなる訳であった。

「もし、あなたがたに良心というものがあったなら――」

腕を組んで仁王立ちした夏音はそれ以上を続けることができなかった。

「――お”、お”れ”の”……どうぢゃぐをま”っでから……う”……う”ぅ”……！！」

「！？」

膝をついていた者たちは、鼻水と涙の滝が足元の砂に吸い込まれていくのをしっかりと目の当たりにした。

「申し訳ございませんでしたーー！！！」

四人そろって土下座をする女の子たち。唯は心の中で、今日はよく土下座をする日だと思った。唯的土下座記念日。

やっぱりこうなるよね、と澪は内省する。後の祭りだが。

夏音はＳＡを発ってからわずか三十分で別荘まで到着という快挙を勝手に成し遂げていた。やっと辿り着いた別荘の駐車場に車を停め、見上げる建物の外観に溜息を漏らす。

「良さげな雰囲気だなー」

そわりと吹いた潮風が髪をさらった。この時、既に夏音の気持ちも実に晴れやかで唯への怒りも鎮まりきっていた。

それもそのはず。運転中。別荘に近づくにつれ、ばっと開けた視界に海が飛び込むロケーション。窓を開けると爽やかな風に潮の香り。遠くには夏空に浮かぶ入道雲。その空と同じ色をした瞳に、どこまでも開放的な夏の景色が映り込んだ。こんな環境でいつまでも怒っているのも馬鹿らしいではないか。

それからは快適にここまでハンドルを握ってきた。

最高のロケーションで合宿を楽しめると胸を撫で下ろしたところで、機材をせっせと室内に運ぶことにした。

ところが。

建物をどれだけ探しても、人の気配はない。偶然スタジオにたどり着くと、そこには散らかった荷物がお留守番をしていた。

「なに……？」

事態をよく把握できなかった夏音は、遠くから聞こえる悲鳴を耳に捉えた。

海の方からだ。
このスタジオは、ガレージをスタジオ使いしているだけらしく、外に直結していた。
夏音は木造のデッキから外に出て、海へと下る道を歩いた。そして先ほどの悲鳴の主たちに気がつく。
「俺を……さしおいて……なんてこと……？」
浜辺に出ると、そこには水着姿で黄色い声をあげてはしゃぐ軽音部の仲間たちが。水着姿で。自分が到着するまでくつろでいるだろうと思っていたが、まさかスロットル全開で遊んでいるとは思いもしなかった。
あまりのショックに、ふらふらと足元もおぼつかないまま近付いてくる夏音に誰も気が付かない。
「あ、あ、あ、アンタラァーーー！！！」
その声が届いた彼女たちは、真夏なのに極寒にさ迷いこんだような感覚を覚えたという。

「ご、ごめんね夏音くん！！」
もはや、土下座というより身を投げ出している唯が許しを請う。
「そ、そんな泣かなくても……っ」
「お、おい律！」
そして、泣き濡れる夏音の顔を見上げた二人は「ギャーー」と叫びそうになるのを寸でこらえた。夏音はひたすら悲しそうな顔をしていたのだ。
それは雨の中震える子犬を彷彿とさせる。もう、誰も顔をあげられなかった。
天気は快晴なのに、どんよりと湿った空気が肌にはりついて離れない。こんなスタートの合宿嫌だ……と思っていた時。
「はぁ～あ……別にいいよ、もう！」

打って変わった明るい声に顔をあげた皆は、涙などございましたか？　とばかりにあっけらかんとした様子の夏音にずっこけた。
「切り換え、早っ！！？」
「ったく、連絡くらい入れてくれよなー」
ぶつぶつ文句を言う夏音は、砂浜に投げ出されていたビーチボールを手にした。その硬度を確かめ、ぽんぽんと手で遊ぶ。
それから、暗い視線を唯へと向けた。
「シカシ、唯サン」
たまらず嫌な予感がした唯。
「は、はひっ」
上擦る声は、次に起こる出来事を予感している。
「恩を仇で返すとは、このことだぁーっ！！」
夏音はおおきく振りかぶった。その後の出来事は割愛に処する。

「あれ、夏音は泳がないのか？」
ビニールシートの上で一休みしていた律は同じく横で座る夏音に訊いた。いったん着替えてくる、と別荘に戻った夏音は海辺にふさわしい装いに変わっていた。膝上までのパンツに、ノースリーブパーカー。髪を頭上で結んで、後ろの髪も折り返した所で留めて邪魔にならないようにしていた。
間違っても男には見えないなー、と律は感心した。
「今、何か思ったでしょ？」
「な、なんも思ってないっ！」
「本当かなー？」
律は、しっかりと心の内で「ナンパされても笑えねーなコイツ」と男数人にナンパされる夏音を妄想していた。男とは思えぬ容姿はもちろんのこと、陶器のように白くプルンプルンな肌はほんのり汗ばんでいて、どこか艶めかしい。丈の短いパンツからすらりと伸び

た形の絶妙な太ももなんて……。
そこまで考えたところで律は思考を停止させた。
（いやいや、私はオヤジかっ！　しかも、相手はただの野郎……野郎だろう！　あ、いま韻踏んだ）
「泳ぎたいさ」
夏音はすねたように口をとがらせ、海ではしゃぐ唯たちの方を向いた。それから、「ほれ」と言って律に向かって腿を見せた。裾をまくりあげて、見せる、魅せる……。
（う、ヤバイ）
律はうっかり鼻をおさえて、目をそらした。
「ジンマシンがさー……サバでさー……ということなの」
「え？」
鼻の奥から漏れる液体を根性で引っ込ませながら、律が聞き返した。
「だから、サバでジンマシンが出ちゃったの！　海に入れないんだよ」
「えー、大丈夫なのかそれ？」
「安静にしてれば、ね。海水に浸かっちゃだめなんだって」
すっかりしょぼくれている夏音の様子に律は慌ててフォローした。
「ま、まあ浅瀬で遊ぶには平気じゃないか？」
「ん……あ、そうか」
それは思いつかなかった、とガバッと立ちあがった夏音。
「お前……どこかズレてるよなー」
「そうだよね！　カバディやろう律！」
「何でよりによってカバディ！？」
それから数時間ほど軽音部の一行は照りつける太陽の下、海水浴を楽しんだ。
（俺、勝ち組！　勝ち組！）
間近にいる水着の女子高生たちの中、自分だけ男一人という状況に心の中でガッツポーズをとった夏音であった。

傍からみればただの「海水浴に訪れた女の子集団」にしか見えなかったのは本人は知らない。

一同は、日が暮れるまでたっぷりと遊んだ。すっかり本来の目的を忘れていた澪があわてて練習しようと騒ぎ出したところで海水浴は終了となった。それから交替でシャワーを浴びて海水でべたつく体をさっぱりしてから、スタジオへ向かうことに。

さあ楽しい練習のお時間のはじまりである。といったところで、問題児二人によって阻まれた。

「初日なんだし、いっぱい遊びたいよー」

「唯に同感ーっ」

遊び疲れてスタジオの床へ突っ伏す二人組を見下ろして夏音は深いため息をついた。

「どうしようもないねー。練習してから遊べばいいじゃないか」

「そうだぞお前ら。何しに来たと思っているんだ」

「……澪だって忘れてたクセに」

腰に手をあてて夏音にのっかった澪だったが、瞬時に飛んできたピッチャー返しに言葉が詰まってしまう。

「う、私はちゃんと練習するつもりで……っ！」

まあ、説得力はないけどと誰もが思った。

夏音は持参のスピーカーを配置するとミキサーとつないでマイクの音量調節を終えた。それから、セッティングのセの字もしていない二名に目をやってそっと溜め息をつく。

夏音と澪は自然に視線を交わした。何をすべきか心得た二人は頷き合う。

澪はドンとアンプを二人のそばに置き、最大音量でかき鳴らす。

鼓膜を揺るがす重低音に、二体の屍はたまらず身を起こした。死者をも呼び覚ます四弦使いを眼前に、怠惰は許されない。

そこに澪の怒気を孕んだ一声がつきささる。

「は・じ・め・る・ぞ！！」

それから二人は、ノロノロとした動きでセッティングにとりかかった。気怠そうにハイハットの位置やシンバルの角度を調整していた律は、作業を中断してタムタムの間に両手をかけてよりかかった。

「あー、だっりー」

すっかり気力を失い尽くしている様子に澪はイラっとしたが、何か思いついたように意地の悪い笑みを浮かべた。

「そういえば、さっき思ったんだけど律太ったんじゃないかなー。やっぱり最近ドラム叩いてないかなー。あ、独り言だから気にしないで欲しいんだけど」

宙に視線をさまよわせ、誰に言うでもなく、だが、しっかりと特定の人物に届く声で呟かれた言葉は、真っ直ぐに律の心に突き刺さった。

え、うそ。マジなの？　と自らの身体を見下ろして戦慄く律は救いをもとめて他の者に視線を向けた。その場にいた者は、ちらりと律の体に目を向けて、背ける。

「う、う、う、オリャーーーー！！！！」

一心不乱にドラムを鳴らす。苦手なはずの難解なタム回しも完璧で夏音は一瞬呆気にとられた。

「人間の底力を見た気がする」

そうしているうちに、唯もとっくにセッティングを終わらせていた。アンプ直結の唯がすることと言えば、チューニングくらいしかないので当然といえば当然である。

今回の合宿でやることになった三曲は「Ｂｏｎ　Ｊｏｖｉ」「Ｄｅｅｐ　Ｐｕｒｐｌｅ」「東京事変」の三バンドから、その中でも難易度を鑑みて曲が選ばれた。

「さぁ唯。この日のために特訓した成果を見せてもらおうではないか」
夏音は不敵に笑って唯を指さす。
「何から演る？」
全員のセッティングが終わったところで夏音が弾んだ声で、皆を見回す。
「そうだな、とりあえず簡単なものからがいいかな。スモーク・オン・ザ・ウォーターにしないか？」
澪がすぐにそれに答えて他の者に同意を求めた。
「ええ、私はどれからでもいいわよ」
「唯は？」
「えーと、それってジャッジャッジャーって始まるやつだよね？」
「唯から始まるやつだね」
ディープ・パープルのあまりに有名すぎる一曲だ。リッチー・ブラックモアのギターの3コードのリフから始まる誰もが聴いたことのある印象的なフレーズ。しかし、この曲は一般のイメージによる簡単な曲というほど一枚岩ではなく、『スモーク・オン・ザ・ウォーターを笑うものは、スモーク・オン・ザ・ウォーターに泣く』とまで言われているほど奥が深いものだ。今の唯にそこまで求める訳ではないが、絶対に通って欲しい曲だと夏音はこの曲を選んだ。
あと、律の事を思って手数を少なくアレンジできる点も。
「じゃ、演ろうか？」
夏音は自分の青色のストラトを構える。ふと顔を上げると、何かにがんじがらめになっているような皆の姿があった。これほどわかりやすく緊張しているのも面白い。だが、演奏にならない。
夏音はパンパンパンと手を叩いて注目を集めた。
「Ｌｅｔ、ｓ　ｅｎｊｏｙ　ｔｈｅ　ｍｕｓｉｃ！！　唯！　いったれ！」
唯の右手がぎこちなく振り下ろされ、3コードのリフで曲が始まる。唯のピッキングを素直に拾うハムバッカーの音が歪みと共にア

ンプから放たれた。
今、この場に響いているのは六本の弦の振動。
そこにムギのシンセから飛び出るオルガンの音色が控え目に跳ねる。すぐにフィルインからのドラムが参加して、ビートが生まれる。ここでこの曲のエンジンがかかる。すでに走り出したグルーヴにビートを刻む澪のベースが加わった。
夏音は、ふっと息を吸い上げる。
「Ｗｅ　ａｌｌ　ｃａｍｅ　ｏｕｔ　ｔｏ　Ｍｏｎｔｒｅｕｘ、――」
天高くまで届けとばかりに歌い上げる。
その瞬間の空気が爆ぜるような圧が皆を均等に圧倒する。夏音のギターはトリッキーにアンサンブルの中を動きまわり、時に自由にオカズを加え、かつ原曲を壊さずに参加していた。
バンドとしては、各楽器の音のズレがあちこちで発生しているというちょっとした惨事が進行中であった。
あえて表現するなら、カッチカチ。夏音はいつまでも堅苦しい演奏を続ける彼女たちの音に、内心で舌打ちをした。初めてなのだから仕方ない、とはいえ彼女たちは演奏を楽しんでいないではないか。そこが不満なのだ。
手元の楽器をただ鳴らすことだけに集中してしまい、他の楽器の音を聞いていない。
しかし、経験の差だろうか。律と澪だけはきちんと顔をあげ、時折互いをみやって上手く曲をコントロールしている。彼女たちはそれなりに楽しんでいるように見えた。その楽しさを唯やムギにも共有してやってくれ、と思う。
夏音は少しだけ苛立ちながら、このままで終わってたまるかと密かに決意を固めた。
（やってやろう）
かくして、彼はタイミングをはかる。
初めての合奏だからこんなものでも仕方ない？　違う。

初めてだからこそ、彼女たちには何かを得て欲しい。理屈じゃ語れない化学反応。音楽の奥深さ。そういったものの一片でも感じとってほしいと思った。

熱い想いはどんどん膨れ上がっていった。そして、夏音の待ち望んだ瞬間が、やってきた。

夏音は足元のエフェクターを踏み替えた。

空気が雷鳴に引き裂かれる。雷鳴と擬音できるほど、夏音が激しい光と音をもってその場に君臨した。

ギターソロのお時間だ。チョーキングをした左手をそのまま、オーバードライブという味方をつけた夏音は破壊的なサウンドを携えて中央に躍り出た。下を向いて演奏をしていた唯やムギの目はすでに夏音から照準を離すことができずにいた。

しかし、曲を壊すことはないものの、すでに原曲はぶち壊していることは言うまでもなかった。

例えば、ジェット機のエンジンの間近にいるとこんな感覚だろう。轟音に身が縮こまりそうになった彼女たちは、次第にそれが直接アンプから出ている音によるものではないと気が付いた。

今、全員の目線を釘付けにしている人物の発している音の力が、凄絶すぎるからゆえの圧力だと認識した。現実に測れないとして、確かに何かすごい物がこの場に発生している。

華奢で、女の子みたいだと思っていた夏音。その彼が偉大なロックスターのように腰をかがめて、ギターを歌わせていた。

どこまでも太く、存在感のある音を出す彼はこのスタジオを埋め尽くすほど巨大な姿となって映った。

アームを使ってマシンガンのように響くエロティックなヴィブラート、そこからどこをどう弾いているか可視不可能な早弾き。ピッキング・ハーモニクスによって甲高い悲鳴をあげるギター。どこまでも高く、それは次第に女性の悲鳴みたいに、喘ぎ声みたいに妖艶に響いた。

夏音は何小節も驀進し続けてから、すっと顔をあげた。

音色が変わる。相変わらずソロは続くが、音の雰囲気がはっきりと変化したことに全員が気付いた。今までとは打って変わったハイポジションのバッキング。夏音はニヤリと笑って澪の目を見る。

視線で射貫かれ、びくっとした澪であったが夏音の意図を正確にくみ取った。不幸な事に、気付かぬフリは通用しない。

「Ｍｉｏ，ｉｔ、ｓ　ｙｏｕｒ　ｔｕｒｎ！！」

マイクを通して夏音が言った発言に、他の三人は驚きの反応を見せた。表情だけで溜め息をつくという器用なジェスチャーをした澪は、小節の区切りでハイフレットの和音を伸ばした。

次の瞬間には、夏音はごく自然に自らのソロを収束させていき、小節をまたぐ際に澪につないだ。

一小節分、まるまると音を伸ばしてから、ブルージーなフレーズを生み出してく澪。まだまだ単純なスケールをなぞるだけのものであったが、夏音の影響で増やしたバリュエーションもあって、堂々とソロを弾ききった。

「お次は～～」

獲物を見定めるような目つきの夏音に誰もがいっせいに目をそらした。

「……やっぱ俺～！！」

夏音、空気読む。

エフェクターを踏んで元の音色に戻し、抑揚されたフレーズが続く。そのままいくらか時間がまわったところで、夏音の演奏も終盤に向けて走りだした。自分が暴走しすぎたので、周りの彼女たちが無事演奏を終われるか怪しかったが。

高速のトリルを続けながら、やりすぎちゃったかも、と舌をちろりと出して夏音は笑った。

唯は夏音のソロが始まってから、ずっと同じコードの繰り返しばかりで、弾いている場所を見失っていた。変な不協和音を奏でている訳ではないから、間違ってはいないだろうと思ったが、それでも収拾がつかなくなるのではと不安がちらりと渦巻いた。

しかし、同じところばかり繰り返しているだけなのに湧き上がってくるこの高揚感はなんだろうか。

曲が夏音によって頂点まで盛り上がる時には、もう何年もこのまま突っ走ってきたみたいに曲になじんでしまっている、信頼感。五回に一回はミスをしてしまうが、今の自分は確実に楽しんでいる。

自分が影で固めて行く道の上を夏音が自由に、堂々と走りまわる。楽しい。それだけしか、感じられない。

いつの間にか、夏音のギターが通常のバッキングに戻っており、彼の声が再び「湖上の煙」の歌詞を歌い上げていた。

（何だろう、この……なんか、長い旅から帰ってきたような感じ）

唯は、今自分が響かせている音すら、百八十度変わって聞こえた。隣のムギを見ると、しっかり顔をあげたまま、演奏が始まった時より堂々とした様子。自分と目が合うと、にっこり微笑んでくれる。それだけで自分のバッキングにノリが出るような気さえした。

演奏も終盤になると、音源通りの流れになった。夏音がわかるように指を四本立てた。あと四回、回すという合図。

腕はもう感覚がない。それでもきちんとコードを押さえていられる不思議。

ムギが最後にクラッシュを打つと、音が止んだ。

嵐の後の静けさ。そう表現するにぴったりの空気だった。

「こ……濃ゆっ！！」

律が椅子からずり落ちて、床にへばりこんだ。気がつけば、皆汗だくになって息を乱していた。

「一曲目なのに……これってどうよ？」

律は上半身だけ起こし、夏音に対して責めるような視線を向けた。

夏音は、５００ミリのペットボトルの水を一度に半分も空にして一言。

「楽しかったでしょ？」

そうやって夏音は片頬だけあげてニヤリと笑った。これより先、こんなのがずっと続くのかと、彼以外の全員の目に諦めに似た感情がこもったのを唯はしっかりと目撃した。

おそらく、自分もそんな目をしているに違いなかった。今日の晩御飯はさぞかし美味しく食べれることだろう。

一時間ほどスタジオにこもって練習を終えた者たちは、空腹の絶頂期をいくつ超えただろうと指折り数え、やっと夕飯にありつけることに滂沱の涙を流した。

さて、晩飯だといったところで何もないことを思い出したところで、一瞬垣間見た気がする天国は遥か彼方へすたこら逃げて行ったのだが。

「夕飯も自分たちで作るってことにしただろー？」

あらかじめ買っておいた食材と調味料などの確認をする夏音がもう言葉を失くしている彼女たちの方を呆れた声を出した。

「もーーーだれかやったってー」

生気のない声が床に突っ伏した唯から聞こえた。

「結局きちんと練習したのは最初の三十分だけだっただろう！！」

夏音は思わず、手元のキュウリを唯に投げつけた。

三曲を二回通したところで、唯律のコンビが駄々をこね始めた。

もームリ、と。

その瞬間、人のこめかみに青筋が浮くのを初めて目撃したという澪は夏音から一歩身を遠ざけた。

温和な笑みを顔にはりつけたままのムギ。

しまいには唯が「もうこのギターもてない……」と言い出す始末。

だからギブソンやめろと言ったのに、と数か月前の不安が現実になった瞬間であった。

なんともいえないプレッシャーが夏音を襲う。いくつもの視線が自分に訴えかける……休憩の一声をかけない訳にはいかなかった。
「ご飯にする？」
打つ手なしの有様にすっかり匙を投げてしまった夏音はさっさと機材を片づけて練習終了を宣言した。

「という訳で、味見要員の者ども。テーブルを拭いたり、食器を並べたりしていなさい」
「はぁーーい！！」
良い子の返事が返ってきた。結局、料理を作ることになったのは夏音、澪、ムギの三名に落ち着いた。既に動く余力がないと駄々をこねた律と唯はその他雑用を押しつけられた。
厨房で火を使う夏音、包丁を握るのは澪、ムギは野菜の皮を剥いたりサラダを作ったり、ご飯や味噌汁係を担った。
実に芳しい匂いが厨房を満たすと、その場の三人の腹がいっせいに鳴った。くすくす笑っている四人のもとへ唯がやってきた。
「すごく良いにおいー！！」
これまた腹がきゅるりと鳴り、唯は恥ずかしそうに笑うが目が本気だ。涎が出ていることなど、気にしてもいない。
その晩のメニューは白米、味噌汁、アボカドの肉餡かけにラーメンサラダ、から揚げという豪華な料理が食卓を彩った。
「シェフ、感激です！！！」
運ばれてきた料理を見た唯が尊敬の眼差しで夏音を見上げた。
「これくらいは当然。そろそろ涎を拭きなよ唯」
それから皿まで食いかねない勢いで全てを平らげた一同はデザートにスイカを切って、外のテラスで涼んだ。
辺りに満ちる潮の匂いが鼻をくすぐり、海からは穏やかな風が吹いてくる。澪と隣あって座っていた夏音はスイカの種を勢いよく飛ばしながら、先ほどからごそごそと忙しなく動く律たちをぼーっと

眺めていた。
「終わったら練習再開するからなー」
澪がスイカを口いっぱい頬張りながら、浮つく彼女たちにしっかり釘をさしていた。頬を膨らませるその姿はまるでハムスターのようだとは口が滑っても言えない。
「わかってるわかってるー。それに明日もあるんだからダーイジョーブだって！」
どこまでもポジティブな部長のお言葉にムギが力強く頷く。
「ありがたいね……」
夏音はぺっ、とスイカの種とともに吐き捨てた。相当荒んでいる。

律とムギが動きを止めて、頷きあったのを見て何が始まるんだと夏音は注目した。
「せーーの！」
光の波が瞳の奥に押し寄せた。吹き上げる閃光の中に躍り出たシルエットに夏音と澪は目を瞠った。
相棒・レスポールを武器に、眩いステージでギターをかき鳴らす唯はどこまでも自由だった。アンプラグドのはずが、実際にエレキの音が聞こえてくるような気さえしてくる。
澪と夏音、二人の網膜を支配した唯がさらに腕を大きく振り上げる。
光の花が夏の夜空を照らし、その足元には一人のミュージシャンが。横にいる澪の目には何が映っているのだろう。自分の瞳には何が映っている。一瞬だけ唯が目の眩む光の先で何万人もの観客の前で演奏している姿が浮かんでいた。
それは本当に刹那の幻覚にすぎなかったのだが、突如の出来事に夏音の心は突き動かされた。
吹き上げる花火は徐々にしぼんでいき、後に残るのはオーイェー！　とハシャぐ唯と火薬の硝煙のみ。
「え、もう終わり！？」

予想以上に花火が続かず、これからが良いところだったのに――、と唯は残念そうな声を出した。

「すまん、予算の問題で……」

律が申し訳なさそうに言うが、その表情はどこか満足気だった。

「でも、いつかまた……ね？」

「そうだな！　武道館公演でこう、もっと派手にババババァーッと！！」

夏音はそういえばそんな話が初めに挙がっていたのを思い出した。

「ぶどーかん？」

「おいおい、目標はそこだって決めただろー！？　なっ！？」

「へっ？」

と急に話をふられた夏音と澪は二人揃って素っ頓狂な声をあげてしまう。

『目指せ武道館』

このメンバーで。夏音はふと寂しさに似た感情がちくりと胸を突いたことに気付かないふりをした。彼女達がその夢を実現できたとして、その中に自分はいるのだろうか。

夏音はコツンと自分の頭を小突いた。せっかく盛り上がっている中で何を暗くなっているのだろう。

それでも胸がしくりと痛むのを留められなかった。大きなステージ。今はただのお遊びでしかない彼女達がそこに立つ日が来るのだろうか。

暗い思考から逃げられないでいると、ふいに聞き覚えのある曲が夏音の耳に入ってきた。

急にメタルなんか流してどういうつもりだ、と夏音はラジカセを手に持った澪を訝しげに見た。

「武道館目指すなら、まずこのくらいできるようにならなきゃなー」

澪がこの合宿に思い立った理由。彼女はこれを聴いて皆に軽音部としてのスタンスを一度考え直して欲しかった。

夏音は澪がメタルをやりたかったのだろうかと首を傾げた。

「へぇー、上手いなー」
律が素直に感心した声を出す。既にその曲を一度聴いていたムギは静かに耳を傾けている。
「これ、私達の先輩なんだぞ？」
「これ軽音部なのか！？」
「ここからソロなんだけど、本当に高校生が弾いてるのかって次元だからよく聴いておけよ」
かくしてギターソロが始まり、沈黙のまま誰もが聴き入っていた。
「あれ、この曲って……」
夏音は横で何かに反応した唯が気になったが、何も言わなかった。曲が終わるまでじっと待ち、少しどや顔をしている澪がふん、と鼻を鳴らした。
「どうだ？　これを超える演奏ができるようにならなくっちゃな！」
何でお前が自慢気なんだと皆が思う中、ふとラジカセからこの世の怨嗟をぶち込めたようなドス黒い声が唸りを上げた。
『死ネーーーーッッ！！』
テープから漏れる叫びにラジカセが宙を飛ぶ事になった。

一同は怯えきった澪を宥めてからスタジオへ戻った。澪の作戦も功を奏したのか、律や唯が練習に向かう姿勢を見せたのだ。
皆が再びアンプのセッティングを済ませていると、ムギが戸惑いの表情で唯を見つめていた。
「唯ちゃん、本当にさっきの曲……」
「うん！　見てて！」
そう言って唯は、ギターを構える。
「……うそ、だろ……？」
唯が弾き始めたフレーズは先程カセットで流れた曲のギターソロであった。もちろんつっかかる部分があるし、原曲よりテンポも遅いし音数も少なかったりする。

まさか、ここまでとは思っていなかった。夏音は一度聴いた曲はそのまま忘れないでいられる。初見ならぬ初聴でほぼ完璧に曲を再現できるし、それができないようであればプロとしてトップを走っていられない。

しかし、ギターを初めて三ヶ月の唯が同じような事をできるとは思っていなかった。合宿用の曲を覚えた時はやけにすんなり覚えたなぁと思っていたが、これには度肝を抜かされた。自分が教えてきた事がこんなに早く実を結ぶとは思ってもみなかった。

夏音は唯が絶対音感を持っている事を思い出し、さらにはそのセンスを侮っていた事を痛感させられた。

皆、同様に目を見開いている。

「はいっ、どう!?」

得意気に振りむく唯。

「すごいっ、完璧!」

ムギが拍手したが、他の律と澪は声が出なかった。

「へへへへっ、でもみょーんってところがわからなくて……」

頭をかきながら首をかしげる唯に、やっと言葉を取り戻した夏音が口を開いた。

「ベンディングだね」

夏音が口を開くと澪が首を傾げた。

「ベンディング……ってチョーキングのこと?」

「あ、日本ではそう言うんだっけ?」

「ちょーき……ぐへっ」

「これのこと?」

新出の単語に唯が聞き返そうとしたところに律がプロレス技をかけた。

「それ、チョーキング違い……いいから、やめ!」

夏音は貸してみぃ、と律から解放された唯からギターを受け取る。

「こうやってね」

夏音は適当なフレットを押さえて、音を鳴らし、それをぐいっと

指板に並行に引っ張った。
「音を出して、その弦を引っ張るんだ。それで音程を上げる奏法のことだよ。さっき俺も多用していただろ？」
そのまま、チョーキングを使ったフレーズをささっと弾く。
「適当に引っ張るわけでもないんだよ。音程を考えてやらないといけないから、奥が深い」
そういって、驚かされたお返しだとばかりに夏音はＣＤ音源通りのギターソロを弾いた。
「す、すっごー……」
夏音が唯にギターを返して「Ｔｒｙ　ｉｔ」と言ったので、早速唯は実践する。
「こ、これ何か変ーーーー！！！」
チョーキングがツボに入ったのか。弦を引っ張りながら大爆笑する唯に、彼女の頭の中の不可思議さについていけなくなった夏音であった。
それから各曲を一度通してから今日の練習は完全に終了とした。
シャワーで流したとして、やはり海水に浸かった体をしっかり洗いたい一同は風呂に入ることにした。ムギ曰く、大きい露天風呂がついているそうだ。しかし、男女で分かれていないので夏音は一人ぼっちである。
事もあろうにスタジオに軟禁状態。やれやれ、俺の雄の部分を警戒しちゃってまぁ……と嬉しくなった夏音であったが、ここまでするのはどうだろう。
「ぜーったい覗くなよーっ」
「し、信用しているからな夏音のこと」
「夏音くんなら大丈夫だよー」
「ふふふ、一緒に入ってもいいんですよ？」
三者三様、の反応。個室に閉じ込めておくにも鍵は内側から開く上、外から鍵をかけられる物置に閉じ込めるのは幾らなんでも不憫だという事で、お前はスタジオでずっと音を鳴らし続けておくのだ、

と命じられたのである。
この扱いは不憫ではないと言うのだろうか。
「あんまりだ……」
露天風呂に入っていると、スタジオから響く音は十分すぎるくらいだそう。
どうして彼女たちの風呂のＢＧＭまで担当しなければいけないのか。どれだけ憤ったところでどうしようもないので、夏音はどうせなら爆音でやってやろうとアンプをセッティングし始めた。
「ムギの別荘の設備に感謝しなきゃなー」
ハートキーの２０００Ｗのキャビネット・スピーカー×２が片隅にどーんと置いてあったのだ。ついでに持ってきたベースでセッティングをする。さらについでにギターのセッティングをする。
「そもそも、あいつらちゃんと聞いてるんだろーな」
（ループさせてこっそりのぞいてやろうか？）
しかし、それは決してやることはなかった。なんだかんだで弾いているうちに夢中になってしまったのである。

「お、ちゃんと弾いてるなー」
外の露天風呂につかっている女子組は、バカでかい音で小宇宙を繰り広げている唯一の男子メンバーを思い浮かべた。
「ちょっとかわいそうじゃないか？」
澪が眉を落として言ったが、「のぞかれたいのか～？」と律に茶化されて慌てて否定した。
「まぁー、当てつけのように激しいの弾いてるな」
空気を裂いて響いてくる音。伝わるのは、怒り。轟音がここまで届いてうるさいほど。
「怒っているな」
「怒っているねー」
「でも、しかたないよね」

「しかたない……かもしれない」
なんだかこの合宿で、夏音を怒らせてばかりな気がした一同。埋め合わせしなければならないと考えた。
「夏音一人だけなのに色んな音がきこえるなー」
「ええ、不思議……」
割とどうでもよさそうに恍惚の表情で落ち着く彼女達。ループを多用してギターとベースを同時に弾いているとは思いもしないだろう。
「まさか露天風呂まであるとはねー」
鼻歌をすさびながら、唯が星の瞬く夜空を見上げた。
「今日は本当に楽しかったー！」
ムギもルンルンと上機嫌で足をのばしていた。
「ムギの言ってた通り、そんなに慌てる必要はなかったのかもな」
今日、初めて音を合わせたバンド初心者の二人の様子を見た澪。もっと音楽とはこうあってもいいんだと再確認した一日でもあった。
「だったら明日はもっと遊ぶぞー！」
ふいに潜水していた誰かが浮上した。
「だ、誰だっ!?」
肝心の顔が前髪で隠れて、誰か判別できない
「私だ！」
「前髪長っ!?」
我らが部長、律であった。普段カチューシャでおさえている前髪を下ろすとこんな感じらしい。新事実。
「案外可愛い……」
「あんがいってどういうこったコラ」
そんなやりとりをしてから、二人の間に強引に並んだ律は絶えず聞こえてくる音に耳を向けた。
「ま、ゆっくりやろうが慌ててやろうが頼もしい奴がいるじゃん」
その言葉の後に、ふいに曲調が変わった。
夏の夜にふさわしい、涼やかだがどこか哀愁漂う情緒感。ひょっ

としたら、今の夏音の内面を表しているのではないだろうか。
「さびしいのかな？」
「まぁ……さびしいんじゃね」
ふと、澪は会話に加わらずに左手を奇妙に動かす唯に気付いて近づいた。
「それは、もしかしてこう？」
手の形から、なんとなくコードを推測してみた澪に瞠目した唯は「すごーい」と喜んだ。
「唯……手の皮、ずいぶん剥けたな」
「あ、コレ？　うん、今日一日でねー。ちょっと水ぶくれになっちゃった！　だいぶ硬くなったと思ってたんだけどね」
珍しく痛い話にかかわらず、自ら話題を振ってきた澪。自分も通ってきた道なので、案外それについては見ても平気だったりする。
「でも、やっぱり音楽っていいね。今日、初めてみんなと合わせてみて楽しかったなー」
「唯……まて、本当に楽しかったのか？」
「うん！　一番初めに合わせた時、すごく興奮したもん！　血が湧く、ってああいうかんじなんだね！」
「それはたぶん……夏音のおかげだろうな」
「そうなのかな？　すごかったよね、夏音くん。私も早くあんな風に弾けるようになりたいなー」
「うん……唯なら、できるよ！　今日、唯があれだけ弾けるようになっていてビックリしたよ。きちんとバンドでも合わせられたし！」
「澪ちゃんが合宿を計画してくれたおかげだね！　もし合宿がなかったらいつまで経っても、この気持ちを知らないままだったから……！！」
「そ、そう？」
「ありがとう、澪ちゃん」
両手をつかんで礼を言う唯にもはや沸騰状態の澪を、律が抜け目なくからかった。

「澪のやつ照れてるぞーっ」
「こ、これはのぼせただけで……っ！」
その場には、笑い声と……夏音が奏でる物悲しいメロディがあった。
「あ、そろそろ出ないと夏音くんが……」
「あぁ……泣きのメロディーに入ってるな……あ、むしろ狂気？」
「早く行ってやろ……」

「おやすみー」
と言って四人の女の子たちは別の部屋へ移っていった。夏音は別の部屋で眠る事になっていたが、何となく寝室に向かう気分にならなかった。ふうと息をついて居間のソファに横たわる。目を閉じると、様々な出来事が脳裏に浮かぶ。
慌ただしい一日だった。本当に色々なことがあった。これだけ濃い一日を過ごしたのは久しぶりである。昼間の熱をひきずっていまだに気温は高いが、開け放しの窓から抜ける風が心地よくてだんだんと瞼が落ちてきそうになる。
ふと横のテーブルを見ると、先ほどまで広げられていたトランプが綺麗にまとめられていた。記憶の残滓がまだそこに留まっているようで、夏音一人がここにいるという気がしなかった。
「楽しかったな」
ポツリと呟かれた言葉は見上げた天井に染みこんで消えた。夏音は自分が持て余している気持ちを歯痒く感じた。
（さびしい、だなんて）
これだけ楽しいのに、並行して寂しさが募っていく。どこまでも矛盾した生活をしていると思う。元いた場所への郷愁、尚今いる場所の心地よさ。どちらも手放したくないし、それが両立できたら悩むことなどないのに。
個性が強い軽音部の皆。自分の周りに集まる人は魅力的な人が多

いと思う。こんなに恵まれている自分は幸せだと感じた。
でも、いつかは戻らねばならない日が来るだろう。自分が、自らの立ち位置を曖昧模糊としている間に、周りが動いていた。カノン・マクレーンは求められていた。ジョンはやり手だ。夏音の意志を尊重しつつ、もしかしたらこれからどんどん仕事を持ってくるかもしれない。そして徐々に自分を誘導してこの生活から切り離されている、という未来が訪れる可能性は大いにある。
その前に向こうに放置してきた親友がやって来たとしたら。自分はあっさりと今ある環境を手放してしまうのだろうか。
「でも、まだみんなダメダメだしなー」
唇が震えて何か言葉を紡いだ気がしたが、いつの間にか意識は暗く溶けていった。

夏音は全くスッキリとしない頭のまま、目を覚ました。意識の膜が何重にも自分を眠りに閉じ込めようとしているようだ。しかし、周りが騒々しさが丁寧かつ乱暴にそれらを引っぺがしてくる。窓が全開になっているのか、潮風が強く吹き込んでくるのを感じた。
むくりと体を起こすと、体の節々が凝っていた。結局、ベッドに行かないで居間で寝てしまったらしい。ぼーっと半開きの目で朝食の準備に忙しなく動き回る彼女達の姿を見る。
「顔、洗ってこよ」
すっと腰を上げるとムギが声をかけてきた。
「夏音くん卵どうするー？」
「Ｓｃｒａｍｂｌｅｄでお願い」
洗面所に向かい冷水を顔に叩きつけて、口をゆすぐ。それでもいまいち脳が覚醒しない。
席に着くと朝食の準備が整っていた。マフィンやキッシュ、三種類のベーグルにお好みでトースト。ソーセージとスクランブルエッグに目玉焼き。グリーンサラダにスープとなんとも豪華なメニュー

が揃っていた。
いただきます、と一斉に食べ始める中、半覚醒状態の夏音はぼろぼろとパン屑をこぼしたり、牛乳を口のまわりに滴らせたりと隣の澪が世話を焼く始末だった。
「こいつ、こんなに朝ダメだったか？」
「毎朝、ゾンビみたいに歩いているのは見るけどね」
口に巻き込んだ髪をむしゃむしゃ咀嚼するあたり、「だめだコイツ」と律が呟いた。

「さて、諸君。今日の予定だが……ん、その顔はなんだい？」
食事も終わり、身支度を整えて全員が集合したので今日の予定を組むことになった。
仕切るのはきりっとした夏音。
「……いや、さっきまでぼろぼろ食べ物零していた奴と同じ人間かな、と」
「う……っ、朝は割とダメな方なんだよ！」
「堂々と言い切りましたね……」
夏音はうぉっほんと咳ばらいをして、話を戻した。
「今日は、午前中に練習をしたら午後は遊びつくそうと思います。だから午前中に集中しよう！」
「んー、まあ涼しいうちにやった方がいいよな」
もっともだと律がうなずく。
「それで、澪から提案があるそうだ」
といって話を振られた澪はうん、と頷いてと前に出た。
「オリジナル曲を作ろうと思うんだ」
「オリジナル！？」
唯が驚いた声を出す。コピーではないオリジナル。唯は、そういうのはもっと経験を積んでからやるものだと思っていた。
「せっかく軽音部として出るんだから、コピーだけだとつまらない

だろ？」
「で、でもオリジナルって私……っ」
「あぁ、唯は特に何もしなくていいよー。今回は基本的に俺が示すように弾いてくれれば」
「あ、それなら……なんとか」
なるのだろうか。

しかし、オリジナルの曲製作はさっそく壁にぶち当たった。やはり、まだ楽器初心者の域を出ない唯がなかなか作業の効率を下げてしまうのだ。昨日見せたプレイは幻覚だったのだろうかと誰もが嘆いた。
しかし、こればかりは仕方ないと誰もが寛容にならざるを得ない。それでも夏音は皆から出てきたアイディアをまとめ、唯に丁寧に教え続けた。
「うん、イントロとAメロはE、A、Bの三つのコードを繰り返してね」
「ブラッシングも前に教えたよね。こうやってミュートするんだよ。え、ミュートって何だと!?　まぁ、こんな音を出すようにやってみて……できてるじゃん。それで、ちょっと応用！　これがカッティング！」
「そうそ。左手もミュートして右手もね。どっちかだけできちんと音が止まれるくらいになろーね」
「逆にダウンだけになるとかなりヨレるねー。何で？　でもここはダウンで頑張ろうか。漢らしくあれ」
このように、夏音がつきっきりで教えることによって何とかサビまで通せるようになった。
「ふぅ～……まぁ、合宿中に完成させるのは無理だな」
「それでも前の私たちの状態からしたら十分な進歩だよ」
休憩中にそんな会話を澪としていた夏音であったが、休憩の合間ももくもくと曲の練習をする唯に視線を向けてふっと笑った。

（一度集中すると止まらない、か……）
「それにしても、こういう曲を作るのは初めてだなー。なんていうか、女の子っぽいポップな感じ」
「夏音からしたら、完成度としてはどうだ？」
「うーん……それを評価する段階ですらないな。骨格を組み立てている最中だし、気になるところは尽きないね」
「た、たとえば？」
「澪はもう少しシンコペーションを大切にしてくれ。そうだな、もう少しフレーズを歌わせてほしいな。せめて2コーラス目では、もう少しきちんと考えてんえ。律も手数増やして。もっと気の利いたフィルたのむよ。ムギは音符の長さをちゃんときっちり合わせてくれ。バンドの中ですごくもたついて聞こえちゃうからね」
　淡々とメンバーの演奏を講評する夏音。あまりに歯切れよく言われるものだから、言われた側は目を丸くしていた。澪は、心の中で「始まった……」と思った。　皆もついに自分と同じ目に合うのか、と。
　しかし、その心配は現実にならなかった。夏音はそれだけ言って一番のサビまでできた構成をチェックすると、「まあ、いいや」と練習を終わらせてしまった。

「いやー、なんかやけにあっさり終わったな」
　まだお昼にもなっていない。律が夏音に訊ねた。
「あれ以上は、効率悪くなるだけだから」
「どうせなら、もっと進んでもよかったんじゃないか？」
「今できている部分も、アレでいいとは思っていないよ。それに、夏休みはまだまだあるんだし、焦ってやらなくてもいいだろう？」
　気楽にやろうぜ、と笑顔で言われた律はわんなわなと震えた。
「しょ、初日のアレはなんだったんだ……っ！！」
　鬼気迫るものがアナタから感じられましたよ、とは死んでも言えない律であった。

「泳ぐぞーーー！！！」
はりきっていこー、と先陣切って飛び出そうとした夏音であったが。
「そういえば、今泳げないんじゃなかったか？」
じんましん、悪化。

＞ｉ２２５９０－３０２９＜

最終日は日中、海で遊びつくし、昼寝も挟んでから夜はバーベキュー大会に興じた。それから馬鹿野郎、金のことなんか気にすんじゃねえと昼間の内から夏音が車を飛ばして大量に買い込んできた打ち上げ花火やドラゴン花火で光の大輪を咲かせたりした。
花火セットの中に線香花火がない事にムギが文句を言っていたのが珍しかった。
「またいつでもできるだろ？」
頬を小さく膨らませるムギに言う律は、ぽんと膝を叩いて立ち上がり、夏音の方を向いた。
「さて、と。風呂に入るかな」
「はぁ……」
「風呂に、入ろうと思うんだ」
「つ、つまり……？」
二日間とも彼女達の風呂の時間にベースを弾くことになった夏音は新たな感性に目覚めるところだった。
（なあ、これって何ていうプレイだろ……あれ、なんだろこの感覚……）

合宿最終日の夜であったが、皆二日間体を動かし続けて疲労困憊の状態だったので早めの就寝となった。少しだけカードゲームを全員でやったが、あくびがあちこちで発生するようになったのでお開

きとなったのだ。
彼女たちは別室へ行き、夏音は一人。自分に割り当てられた部屋へと移動したが。
「……どうしよう。まったく眠くない」
困ったことにこれ以上ない！　というくらい冴えわたっている。
「ハイになっているのかな」
お酒でもあれば眠れるのかもしれないが、あいにく未成年である夏音が酒を買うことはできない。
あるのは料理用の酒だけ。却下。
「みんなの寝顔でも写真に収めようかな……いや、間違いなく変態の烙印を押されてしまう……」
悶々と悩む十七歳の少年は、スタジオの方へ向かった。
しんと静まりかえったスタジオに入り、電気を点けようとしたが月明かりが入り込んでいる。
それは自分を外へと誘い招くように蒼白い光。夏音は合宿中にあまり使うことのなかったアコースティックギターを手に取る。そのままスタスタとテラスの方へ出ると、皮を編んで作られた一人がけのソファに腰掛けた。
調弦をあっという間にすませて、月明りの下、弦をつま弾いた。
月が夜空を支配していて、星たちは主役の裏に控えている。
夏音は時折思う。人は月を見て美しいと思う。しかし、本当に美しいのは月が照らす空や雲、その下にあるすべての世界ではないか、と。誰も月は見ていない。月は見られていると思っていないので、気ままにすべてを照らしている。
海に浮かぶ満月、静かに寄せるさざ波。遠いところから走っては寄せる、優しい自然の音楽。
夏音はそっと目を閉じて、それらと調和していく。柔らかい音色のアルペジオが風に馴染んでいく。この瞬間にややこしい思考の入る隙間はなかった。
夏音は何も考えずに、ただそこにある世界と調和する。砂浜に小

さな蟹がじっと警戒を露わに歩くのを、少し沖合で群れをなして遊泳する魚の姿を感じた。曖昧な気温で漂う風すら夏音の一部と化していた。

気がつけば一時間くらいアコギを弾き続けていた。

二弦が切れなかったら、そのままずっと弾いていたかもしれない。

演奏が止まると、背後から拍手の音がした。

「へへー」

仰天して振り向くと、満面の笑顔を浮かべた唯が立っていた。

「唯、いつからそこにいたの？」

「んーとね、たぶん三十分くらい前！」

「声、かけてくれればよかったのに」

「えー、そんなのもったいないよ」

「もったいない？」

「夏音くんのギターを止めちゃうの、もったいないと思ったから」

また不思議な感性をもった唯のことだ。何の苦もなく、立ち通しで聴いていたのだろう。夏音は一人掛けのソファから、ベンチに移動すると、唯も横に腰を落ち着けた。

「眠れないの？」

「ううん、さっきまでお布団に入りながら少しだけみんなと話していたんだ。でもみんなすぐ寝ちゃったからトイレ行こうとしたら、ギターの音が聞こえたから」

「音がうるさかったかな？」

「ううん、たぶん夏音くんの音楽の力が強すぎたんだよ」

「なーるほど」

夏音は謙遜もせずに、素直にその言葉を受け取った。

「唯は、今回の合宿楽しかった？」

「とっても！」

「俺も。また、合宿したいね」

「うん！　私、もっと軽音部のみんなと色んなことしたいな！」

そうだな、とうなずいて夏音は立ちあがった。

「夏といっても、あまり潮風にあたるのはよくない。そろそろ入ろう？」
「はーい」
歩きだした自分に、そろそろと背後に唯がついてくる音がした。
夏音は、その時そんなことを言う予定ではなかった。しかし、何故かそれは出てしまった。
「なあ、唯……俺がどこから来たと思う？」
「えー？　どこから……アメリカ？」
「そうなんだけどさ。向こうで俺がどんなことしていたか、とか……話してないじゃないか？」
夏音は、口が自分の意思を離れてしまったような感覚に襲われた。そんな事を訊いてどうするのだ。
「向こうで？」
「そー。みんなにまだ話してない秘密の部分」
「……」
「もうそろそろ話しちゃおうかなって思うんだ」
秘密を抱えたままは疲れる。今回の合宿で感じた。この少女達とはこれから長い付き合いになるだろう。少なくとも三年は一緒になる。いつまでも誤魔化していたくない。壁を作って過ごしたくない。
「うーん……別にいーよ！」
「え？」
思わず背後を振り返る夏音。唯も立ち止まって夏音の顔をにっこり微笑みながら見ていた。
「夏音くん辛そうだよ。無理に言わないでいいよ。そんなの夏音くんが言いたくなったら言えばいいんだよ。別に秘密とか、気にしないでいいと思うけどな」
夏音は頭をかいて、気まずく目をそらした。
「そ、そうだよなー。秘密の一つくらい持ってもいいよなー」
「そうそう！」
「先週、唯の分のコーヒーゼリー食った犯人とかなー」

「そうそ……ってえぇー！？　誰、誰なのっ！？　それは許されざる秘密だよ！　大罪だよ！」
「誰にでも秘密はある。ただ、コーヒーゼリーも食い過ぎるとお腹に良くないんだよな……」
「おんしかーっ！」
ギャーギャーと騒ぎ出した唯を見て、夏音は声をたてて笑った。ちょっとだけ荷物が軽くなった気がする。ちなみに、エスカレートしていく唯の怒りを体感するうちに、夏音は予想以上に深い恨みだったことにたじろいだ。
口は災いのもと。うっかりご用心。とりあえず、今度同じものを買うことを約束してその場を諌めた。
こうして合宿最後の晩は過ぎ、世界は朝を迎える。人の気配がない浜辺の側には朝焼に輝く燦然とした大海原。しかし、そんな世にも美しい光景を完全に素通りして午後まで爆睡していた軽音部の一同は昼食を摂ってから夏音の車で帰宅した。
これにて三日間の合宿は無事終了とす。

第八話（挿絵あり）（後書き）

ＰＶ：１２，７６１
ユニーク：９３３

だそうです。こんなに多くの方に見ていただき、感謝です。そういえば投稿開始してから一週間が経ちました。

第九話

夏音は注ぎ口から湯気があがる白磁のティーポットをぼーっと眺めた。

「にっぽんのー、夏」

チリン、と風鈴の音が鳴った。本日も、晴天なり。

夏休み中の学校はあらゆる部活動がここぞと練習量を増やしているせいで、通常の学期中とほとんど変わらぬ賑わいと熱気を醸している。普段は使えない教室で各パートに分かれて練習する吹奏楽部の鳴らす金管楽器の音が廊下中にけたたましく響く。時折、楽器の響かない静寂の隙間には蝉の鳴き声。それをかき消す運動部の気合い。どうやら運動部もこの時期に重なる大会に力を入れているのか、掛け声の気合も二倍増しだ。

このように部活動に所属する生徒達が精を出す中、もちろんご多分に洩れずに軽音部の活動も精力的になってきた。それは一学期の頃とは較べようもない部活動としての姿。

合宿も終わり、目指すべき目標もできたところで、学園祭へ向けてオリジナル曲の作成が目下の課題だった。

二週間（土日休み）もの間、根を詰めて練習した成果は上々。

とは問屋がおろさねえのが、この部活。

「アイスティーが飲みたひ……」

くっつけ合った机、ちょうど夏音の向かい側へ座っていた、もと

いしがみついていた唯が蚊の鳴いたようなか細い声を出した。さっきより三割増しで溶けている。

「ごめんね。氷を持ってこようと思ったんだけど、うっかり忘れちゃって……」

かいがいしくお茶を淹れているムギが心から申し訳なさそうに詫びた。軽音部にそんな彼女を責めようとする者はいない。

唯はかろうじて片手をあげるとひらひらと振って再びぱたりと力無く下ろした。

気にするな、と言いたいのだがそれだけの言葉を発する気力も失せている。もう少しで溶けて無くなりそうである。

窓は全開。空気の通りをよくするために扉を開けているものの、風通りは芳しくない。まさに蒸し風呂状態の部室であった。心ばかり、とつけた風鈴の音が虚しく響く。

唯の言う通り、冷たい飲み物を欲していたが文句は言えない。ムギの用意する紅茶の味は最高で、夏摘みの茶の芳しい匂いはその茶葉が上等なものだと知ることができる。蒸らし加減もしっかり心得ているムギが演出するティータイムは文句のつけどころがなかった。

しかし暑いものは暑いのだ。

「こんなに暑いんじゃ、機材も長時間使えないな」

夏音はアンプヘッドを触って「アウッ！！」と外国人っぽい反応を見せた。彼も今年の猛暑には文句の一つや二つ言いたいところであった。天気予報では、今年の夏は猛暑を通り越して酷暑。どうでも良いが、ビールがよく売れるらしい。夏音は飲めないし飲みたいとも思わなかったが、何となくＣＭに出てくる俳優がごくごくと美味しそうに黄金の液体を飲み干す様子はそそるものがある。

冷蔵庫にしまいっぱなしの父親のビールを開けてしまおうかと画策中である。

「プールでも行こうよー」

唯が相変わらずの姿勢でそう言うと、長い髪を持ちあげて首元に風を送っていた澪が手を止めた。
「プールなら先週も行ったばかりだろ。毎日こうなんだから我慢するしかないだろ」
そして、再び手を動かす。手に持つ団扇は先々週の夏祭りで手に入れたものだ。
「それにしても連日こうだと流石にまいるな……」
暑いもんは暑いと、いつになく覇気のない声を出す澪も連日続くこの天気には弱っているようだ。
この環境では練習どころではなかった。西海岸育ちの夏音も日本の湿気を伴う暑さだけは慣れる事ができない。
自分でも暑さには強いと思っていた夏音でもへばりかけるくらいである。誰も彼もがへとへとだった。
このまま駄弁っていても何の実にもならないので、皆の頭の中にはそろそろ帰るかという話がちらほらとよぎっていた。
「ね、たまには外のスタジオでやってみないか？　クーラー完備のさ！」
そう言って袖を限界までまくり、生足を惜しげもなく晒しているのはこの部の部長。仮にも男の前でそれはどうだろうと夏音は思った。いまさらだが。
「外のスタジオか……それ、いいかもな！」
澪はクーラー完備、スタジオ、と聞いて夏音の方をちらりと見たが律の提案に賛成した。
「外のすたじお～？」
唯はそんなものあるのー、と机に向って呟いた。
「あぁ、スタジオにはクーラーがついているし機材だって……まぁ、ここに揃っているのよりは劣るかもだけどさ」
そういえば、いつの間にか高級機材に囲まれていることを思い出した律であった。一人の男による仕業である。
「それにたまには環境を変えてやるのもいいんじゃないか。すごく

集中できるかもしれないし」
すでに澪も外のスタジオへ行くことについて乗り気になっており、今にでも行こう！　とそわそわしている。律にしては良いこと言った！　と顔に書いてある。
「私、外のスタジオって行ってみたい！」
実は、この暑さの中ただ一人顔色すら変えていないムギもキラキラとした表情で手を叩いた。
「涼しいとこならどこでもいいよ～」
賛成に一票追加。澪はちらりと夏音の方を向いたが、「俺はどっちでもいいよ」と肩をすくめたのを見て立ちあがった。
「じゃ、決まりだな！」
決まったと同時に機材をさっさと片付けて部室を出た軽音部一同は、カマドのように熱気が渦巻く校舎から逃げるように飛び出した。太陽から身を遮ってくれる物がない校門前で立ち止まり、律に注目が集まった。
「行くといっても、どこに？」
今回の発言の責任者である律に質問が飛ぶが、彼女はまぁまぁまぁと余裕の笑みで携帯を取り出してどこかに電話をかけた。
「あ、もしもしー。今からすぐで空いてますかー？　あーー、二時間くらいで、五人です。ハイハイ、田井中です。番号は０９０－××××－〇〇〇〇」
皆、しんとなって通話をする律の様子を見守った。通話中も、自信に満ちた様子の律は最後に「とくにないです」と答えてから電話を切った。
「どこに電話したの？」
達成感に満ちた表情の律に、ムギが首をかしげた。
「ふふーん。私の行きつけのス・タ・ジ・オさ！」
「行きつけ！？」
ムギが瞠目して、口を押さえる。
「律っちゃんて、すごいのね！」

その一言にさらに気をよくしたのか、律はさっさと先を行ってしまう。一度振り向いてから、きらりと歯が輝く。
「ついてきな！！」
あくまで常識派と自負している夏音と澪は顔を合わせ、怪訝な表情を確認しあった。
「行きつけ……？」
「まぁ、律だから……付き合ってやってちょうだい」
大人しく着いて行く一行。学校から歩いて三十分ほど歩き、大通りに一度出た。そこから、街の中心部に向かってしばらく歩いた。国道を道なりに歩いて数分すると、雑居ビルがひしめき合う場所に差し掛かった。ごちゃごちゃとしたビルの隙間を縫うように歩いたところで律は立ち止まる。

「つ、着いたぞ……」

呟かれた一言はいっそう重々しく聞こえた。先ほどのテンションはどこ吹く風、今や汗だくになって元気を失っていた。
「さっきの元気はどこいった」
そんな律に一言つっこんでおいた夏音は、一見ただの雑居ビルの一つとしか見えない建物を見上げた。いや、どう見てもただの雑居ビルだろう。
「そこの入口から降りて地下に行くんだー」
むりやり足を交互に出して歩いている、といった様子の律はビルの横にぽつんと構える昇降口に進んでいった。
スタジオというからには、防音機能がしっかりしていないとならない。このように周りにテナントが集まる場所にスタジオを構えるには、地下というのは都合が良いのだろう。
店の看板らしきものには【ＯＮＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＮＩＧＨＴＳ】とある。
夏音はもしかして、イーグルスの「ＯＮＥ　ＯＦ　ＴＨＥＳＥ

ＮＩＧＨＴＳ」とかけているのかと思った。イーグルス直球世代のオーナーの顔が何となく思い浮かばれる。

階段を降り始めるとすぐ、ライブハウス独特のヤニ臭さが鼻につく。階段の途中には、壁一面を埋め尽くすようにありとあらゆるポスターが貼ってあった。どこのバンドの企画ライブ、フライヤー、落書きを通り過ぎると広いスペースに出た。

正面に受付がぽつんとあり、貸し出し用のコーナーにギターやベース、シールドなどがかけられてある。この広めにつくられているスペースは待合スペースとなっているらしく、ベンチやソファーがテーブルを挟んで並んでいた。自動販売機も三つも用意しているあたり、客入りは良い方なのだろう。

制服姿で現れた集団に気が付いた受付の男が「おはようございます」と頭を下げてきた。

「おはよう？」

「挨拶されちゃったよ！」

「返した方がいいのかしら？」

「そだね。おはようございます！」

スタジオ初心者の二人組が微笑ましいやり取りを繰り広げる中、律が受付に歩み寄り、「予約していた田井中ですけどー」と言って受付カウンターに寄りかかった。何となく馴れ馴れしい。本当に常連なのかもしれない、と夏音は思った。

その堂々とした様に、ほぅーという感嘆の声が背後からあがる。常連っぽさにハクが上がる訳でもなし。早くスタジオに入りたいと夏音は思った。

「はい、先ほどお電話いただいた田井中さま、でお間違いないですか？　当店のご利用は初めてでしょうか？」

「や、やだなー！　私ですよ、私！　いつも使ってるでしょ？」

「あ……そうでしたっけ、すんません」

店員の男は明らかに怪訝な表情をしたが、すぐにどうでもよさそ

うに律の主張に合わせた。
「お時間まで少しありますけど、もう入っても大丈夫です。Kスタでーす」
それだけ言うと、店員は下を向いて何かの作業に戻ってしまう。
律はそのまま振り向かない。自分の背中に受ける幾つもの視線に律はすっかり振り向けるはずがなかった。
「ねえ、こっち剥きなよ」
夏音の慈愛に満ちた声が律の背中にぶつかった。
「あれは、その……普段は別の人が、ねえ」
「皆まで言わなくていいよ」
「私ってあんまり濃い顔じゃないから」
「うんうん」
「ほ、ほんとに何回か入ったことあるんだぞ！？」
「うん、わかってる」
「あれは、私がまだドラムセット買えないころに……」
「律……」
耐えかねた夏音は、ぽんと律の肩に手を優しく乗せた。
「夏音……？」
目を開いて振り向いた律。爽やかな笑顔で夏音は口を開いた。
「死ぬ程どーでもいいや」
日本刀の鋭さで斬りつけた。
「あいつ……鬼だな」
後ろに控えていた三人は、律が不憫になってほんのり涙を目にためたとか。いないとか。

気を取り直した一同は、奥の扉をくぐってスタジオがいくつも並ぶ廊下に出た。入ってすぐの案内板を見て、Kスタジオの場所を確認した。
「お、ここだね」

少し進んだところで廊下が二又になっており、さらに進んだところで、鉤状に伸びた角の先にKスタジオはあった。夏音は厚い防音の扉を開けて中に入り、手探りで電気を点けた。

スタジオ内の広さは学校の教室の四分の一といったところで、各アンプからドラムセット、スピーカー、ミキサー、マイクスタンドにマイク……あと、壁の一面に巨大な鏡までがそろっていた。

暑がりの面々によってさっそくエアコンのスイッチがオンにされる。

「うわぁー、これがスタジオっ！！」

ひょこんと中に突入してきた唯が室内を見回して感動の声をあげる。まず巨大な鏡を見てテンションがあがるのを見て、それもどうだろうと苦笑する夏音は早々に機材を下ろした。

「なんかテンションあがるだろ？」

ドラムの椅子に腰かけた律が言う。

「私も昔、今のドラムセット買う前にたまに来てたんだよ。当時はスティックしか買えなかったし、本物のドラムを叩きたい！　って思ったからなー」

「なるほどね。あながち本当のことだったんだね」

夏音は素直に感心したように笑った。この部長にもそんなしおらしい一面があったのだ。

機材を確認すると、ギターアンプにはマーシャルのＪＣＭ９００－４１００の二段積みとローランドのＪＣ－１２０、通称・ジャズコ。さらに奥にはピーヴィーの５１５０もあった。さらにベースアンプにはアンペグのＳＶＴ－４ＰＲＯ。ドラムはパールのＭＡＳＴＥＲＳ　ＰＲＥＭＩＵＭであったが。何故かシンバルの一つがＴＡＭＡ。

傍では、澪は初めて使うアンプに「コレ、コレコレ使ってみたかったんだー！！」と声をあげていた。そうか、嬉しいんだねと微笑ましくなった。

「あら、キーボードアンプはどこかしら……？」

ムギがきょろきょろと自分の楽器に対応したアンプがないことに戸惑っていた。
「あぁー、コレ使いなよ」
夏音は、ジャズコを指さして言った。
「え、でもコレってギターのアンプじゃないの？」
「ううん、キーボードでも使えるんだよ。プロでも使っちゃう人はいるよ」
「へー！　初めて知ったー」
夏音は、唯にマーシャルを使うように言ってからセッティングを始めた。自分の機材のセッティングがひとまず終わってからは、マイクをいじって音量を調節させた。
未だにドラムの各配置を細かく決めている律の方を見る。ドラムを叩く上でも、自分のセッティングというものは存在する。むしろ、かなり重要である。ハイハットの高さ、シンバルの角度、距離。同じくタムの角度。
たいていのドラマーは、自分のセッティングをきちんと持っている。こだわりにこだわる者が多くを占めている理由もいくつかある。特にプロで活躍するドラマーにとっては、それが重大にかかわってくる。いちいち手元を見ながら叩くわけにもいかず、普段の練習で慣れている距離感などで感覚的に叩いている分があるのだ。極端に言えば、セッティングが1センチでもずれていれば、怪我などにもつながることがある。
もちろん、見た目も大事。　だから夏音は律のセッティングが遅れても文句を言わない。
早くドラムをくれないと音をくれ、と思っても言わない。そんなドラマーたちの中でも律は存外こだわり派だったのだから。
（悩め悩めー若人よ）
夏音は、そっと呟いた。もちろん心の中で。やっと金属を叩く音が連続して鳴った。
バンド初心者が多いこの軽音部で、夏音は音作り、それもバンド

としての音作りの重要性と奥深さを何度も説いている。それはもうしつこいくらいに。

個人で弾いている時だと、その楽器単体だけが鳴っているのでどこをどう弾いても音は聴こえる。それに、各々の音の好みもアンプのイコライザーをいじって自由にできる。

しかし、バンドだと互いに違う音を抱える。上から下までの広い帯域が存在することになる。例えば、一番上の帯域がシンバル類かスネアとくる。それからおおざっぱに上からギター、ベースとなる。バスドラとベースの音をかぶらせないようにする事が重要だ。

とはいっても、それらの楽器も同じ帯域を共有することになる。ぶつかり合って、それで互いの音を埋もれさせてしまうこともある。逆にそのマスキングを良い感じに使うことができれば音作りを分かってきた証拠でもある。

特にこのバンドはギターが二人いる。唯がハムバッカーというピックアップを搭載しているギターなので、サウンドのキャラクタを分かりやすく分けるために夏音はシングルコイル搭載のストラトキャスターを選んだ。

このようにして、二つのギターの音色にも区別をつけたりすることも一つの手である。特に、自分がベース弾きゆえにベースにこだわりがある夏音は、バンドにおけるベースの音作りは一番奥が深いと考えている。だから、澪に対しては若干厳しく構えることも多い。

そういうこともすべて把握した上で、実力のある者は自分の個性を出していくのだ。

音をぶつけ合うことも計算の内ならばよい。状況によってあえて抜けない感じにする場合もある。奥が深過ぎて、これを言葉で教えるのは困難であるのだが。

音作りに時間をかけて、ある程度整ったところで夏音は手を掲げて注目を集めた。

「なら、決まったところまで通してみよう」

「ワン、トゥ、ワンッットゥスリーフォー！！！」

曲の構成としては、イントロ→Aメロ→Bメロ→サビ→Aメロ→Bメロとくるのは別におかしくない。少し面白い展開を入れるのも一興だとも思う。今、そこに悩んでいるところであった。

「メロディーも単純だから、同じのが何回も続くなら短く終えていいと思う。二つ目のブリッジを終えたところでCメロ？　的なものでも入れたらどうだろう？　もしくは転調を工夫するとか」

「でも、もう少し単純でもいいと思うんだけどな。お前のギターソロでいいんじゃないか？」

このように曲に対する意見が練習の合間に出てくる。お互いの意見は頭ごなしに否定する事はしないで、とりあえず実践してみる。それでいまいちだったら別の案。というように曲作りは進んでいった。中でも曲の骨子を造ったムギに意見を問うてみると、それぞれの見せ場があると良いかも、だそうだ。

「それぞれの見せ場ねぇ。ソロ回しでもするか？」

「それでも一小節か、長くて二小節程度かな。ぐだぐだやるのには適さない」

このように次々へと曲が変わっていくのは面白い。こういう作業こそ軽音部らしくなってきたではないか、と皆目を輝かせながら意見をぶつけ合っている。皆……一人おかしいのがいた。

「おい、唯。何か死にそうなんだけどどうしたの？」

一度演奏を通した時から何だかおかしかった。音に覇気がないというか、切れが悪いというか。今は個々の演奏より曲自体をどうにかしないとならないと思って、あえて夏音は注意しなかったのだが。明らかに様子がおかしい。自らの身体を抱きかかえるようにしてぶるぶると震えているのだ。軽くヤバイ病気の人だ。もしくはゾンビに噛まれて豹変する前の人だ、と思った夏音は慌てて唯に近寄って

肩を掴んだ。
「お、おい平気か唯っ！？」
「……ムイ」
「なんだって？」
「しゃ、しゃむい……わだし……エアコン苦手だったんでした……」
それだけ言うと唯はへたり込んだ。床にギターのボディが当たり、ノイズが漏れる。
「そんなんどうすればいいんだよ！？」
唯の面倒臭いパラメータが3上がった。

暑いのは嫌なの、かといってエアコンも嫌なの。とのたまった唯はとりあえずスタジオから追い出された。何でも人工の風に当たっているとだんだん皮膚が粟だって身体が弱ってくるそうだ。そうなるとクリプトナイトをぶっさされたスーパーマンのごとくダメになってしまう。それでも団扇などは可、という良く分からない基準が彼女の中に存在しているらしく。夏は毎回それで乗り切るという。
超面倒くせぇ、と誰もが思った。どうすれうべきかと悩んだところで、エアコンで既に冷えている室内に後から入る分には問題ないそうだ。仕方がないので、冷房でキンキンに冷やした状態で唯を再びスタジオに入れることになった。結局、ダメージを喰らったのは唯以外の全員だった。
そんな風にトラブルもあったが、環境が変わったことで軽音部一同の集中力は格段に上がった。スタジオという狭い空間の中で大きな音を出すので、それによる解放感のようなものもあるのだろう。絶対ある。爆音で楽器を鳴らすのは大変気持ちの良いことである。耳がおかしくなる程の爆音で全員がハイになっていた。
二時間で予約していた時間はあっという間に過ぎ、気が付けば終了時刻に迫ってしまった。
「あ、もうこんな時間かっ！」
律がスタジオの時計を見て、驚いた声を出す。

「早く片付けなきゃっ！　五分前には片づけを始めた。夏音は右手の儀だ！」

その言葉を聞いた面々は、すぐに片づけを始めた。夏音は右手の一振りでツマミをすべて0にして、急いで機材をを片づけた。

時間ギリギリでスタジオを飛び出た五人は、ささっと受付で会計をすませて外に出た。

「ぷはぁーーっ！　なんか空気がおいしいなー！」

スタジオを出て間もなく、律が大きく伸びをした。

「たしかに……たばこ臭かったしな」

女の子たちはおタバコの臭いに敏感だった。

「でもスタジオは涼しかったし、音もいつもと違った感じだったよね。楽しかったー」

唯がにこやかにそう言って律の方を向いた。その場にいた全員が涼しかったのはお前だけで自分達はむしろ寒かった、という言葉を飲み込む。

おそらくエアコンが必要な季節の利用はこいつには向かない、と思いながらも律は得意気に頷いた。

「そうだな。今日は律にしてはまっとうな提案だったと思う」

「カチーン」

上から目線の澪が腕を組んでうんうん頷くのを見て、律がえらく表情を引き攣らせた。こそこそと澪に何か耳打ちをしたと思うと、

「イヤァァァァ」と耳を押さえてしゃがみこむ澪。

いつものことだ。夏音はもう何も気にしない。

「それにしても二時間集中したせいかお腹すいたなー」

夏音が切実に腹を押さえながら言うと、律がすかさず反応した。

「おっ、このままどこか飯食いに行くっ！？」

「わーい、ゴゴスいこーゴゴスー！！」

「でもお夕食には早いかしらね？」

「でも、お金がちょっと……」

「パフェくらいならおごってもいいケド」
「お供いたします」
「おい澪、今ダイエットしてるんじゃ……」
「あ、いや、でも、しかし！」
仲良し軽音部、学園祭まであと少し。

「今日は俺が一番乗りかー」
軽音部の部室には、夏音一人。荷物を置いてソファでぼーっとしていると誰かが扉をノックしてくる。
「はーいどうぞー」
夏音が返事をすると、入ってきたのは吹奏楽部の顧問・軽音部とも縁ある山中さわ子教諭であった。
「ごめんねー、譜面台借りていくわねー……ってこれまたずいぶん機材増えたわねー」
たまに部室を訪れる時にお茶をしていてもスルーな彼女だったが、久々に来た部室の様変わり具合が流石に目に止まったらしい。呆然と部室を見回すが、呆れているというより、どうやら興味津々で食い入るようにギターアンプを見詰めているような気がした。
「これ、え……うそ……何でこんなヴィンテージが……！？」
わなわなと震えながら、慄くさわ子。
「え、先生わかるんですか？」
夏音は若干目を大きくして、訊いてみた。
「え？　あ、いや……何もわからないわよ！？　何一つ！　なんか冷蔵庫みたいねこの機械……って、これも……渋い」
「……」
「私は何も言っていないわね？」
「……」
「し、失礼しましたっ！！」

夏音が返しあぐねていると、さわ子は逃げるように部室を出て行った。今のは何だったのだろう、と首をかしげた夏音と大量の疑問符だけが部室に取り残された。

「部として認められていないだって！？」

本日の部活は、そんな衝撃的な発表から始まった。部室であははうふふと殺気立ちながらインディアンポーカーで戯れていた律、澪、夏音の三名（敗者は労働奉仕）は遅れて部活へやってきた唯とムギが揃って持ってきた獲れたて衝撃情報にぶったまげた。

「ていうか……」

皆、夏音の言動の先に注目した。

「部として認められていないのに、部室をこんなに好き放題にしちゃってよかったのかな……フホーセンキョってやつじゃないか？」

「ふ、不法……」

何かよからぬ想像をしたのか、澪が怯え始める。夏休みが終了し、九月に入った現在の音楽準備室こと軽音部部室。

もし四月の時点の部室風景を収めた写真と、現在のものとを見比べたとしたら、衝撃のビフォーアフターに誰もが仰天することだろう。

戸棚に収納されたティーセット（高級）。部室の中央にでんと居座る冷蔵庫ほどの高さのベーアン含めたアンプ類（全アンプ合計で６つ）。ミキサーやスピーカーまで揃っている素敵な小スタジオと化している。

それに加えて、本来なら授業で使うこともあるのだろうホワイトボードは軽音部員によってあまねくホワイトの部分を埋め尽くされている。主に落書き、落書き、謎のチラシなど。要するに、あらゆる私物で埋め尽くされた軽音部の部室は、部であるからこそ教師たちの海より深い寛容の精神によって看過されてきたのである。

主犯各である二名の男女は落ち着き払っていたのにも関わらず、他の三人は狼狽しきってぎゃーぎゃー騒いでいる。
「ムギ、とりあえずお茶飲みたいよ」
「はぁい、ちょっと待っててね」
爽やかにそんな会話を交わす主犯各のお二人。この二人のまわりにだけさらっとした風がそよいで見える。
「部員が五人集まったら大丈夫じゃなかったのか！？」
「そのはずなんだけどなー」
「おかしいねー」
肩を寄せ合い、真剣に話し合う三人。
「あー、美味しい。今日はアッサム？　スコーンにあうね」
「ええ、ジャムも四種類あるのよ」
素敵なティータイムに勤しむ二人。
同じ部室なのに、まるで空間が隔絶されているように別世界を作り上げていた。
「って、ソコこら！　もっと真剣に考えろよ！　部の廃退の危機だぞ！？」
スルーしきれなかった優雅な空間を作っていた夏音とムギに律がキレた。
「部の……っていっても、部じゃないんでしょ？」
紅茶を片手に足を組んだ状態で振り返った夏音は、ガンを飛ばしてきた律に、その青い瞳に力を込めて律を見詰め返した。
「それは……そうですけども……」
「負けるの早いな」
一瞬で勝負に敗れた幼馴染にため息をついた澪だったが、きっと眉をひきしめて夏音に詰め寄った。
「これだけ練習頑張っているのに、学園祭に出られなくなるんだぞ？」
コトリ、と置かれる白磁のティーカップ。
「Ｍｏｒｅ　ｈａｓｔｅ，　ｌｅｓｓ　ｓｐｅｅｄ」

「な、なに？」
「急ぐならば、落ち着けってことだよ。まぁまぁ焦ったらいいことはないさ。とりあえずお茶、でしょ？」
軽音部の基本は「とりあえず、お茶」である。何があっても部室に来ても寝ても覚めてもお茶に始まりお茶に終わる精神を持つ者すなわち軽音部なり。
その軽音部の心得をこの五か月程で培ってきた（不本意）一同は、その言葉によってはっとして自分を取り戻した。
三十分後。ムギの持ってきたお菓子をこの世から胃の中へ押し込んだ者たちは、落ち着いた心持ちで話し合った。
「それより、どういう理由なのか聞きにいかないとな～」
先ほどまでの肩の力をどこへ消し去ったのか、軟体動物予備軍と化したぐにゃぐにゃ律は緊張感もなしにそんな提案をした。
「そりゃ、落ち着き過ぎだ」
流石の夏音もしっかりツッコまざるをえない。

その理由とやらを聞きにはるばる生徒会室まで向かうことにした一同。
「殴り込みじゃー」
「討ち入りじゃー」
と生徒会室へと近づくにつれ、そんな単語を連呼する夏音と律。時の赤穂浪士に失礼である。
彼らは完全に悪ノリの生き物である。主食は悪ノリ。ある教室の前で止まる。プレートには【生徒会室】と書かれてある。
前線の二人は顔を合わせ、うなずく。
「たのもーーー！！！」
「イェー、ファッキンジャ○プ！！」
ドアノブをまわした律、すかさず扉を蹴破った夏音の二名は、入った瞬間に突き刺さったいくつもの視線に凍りついた。

皺一つない制服をぴちっと着こなす優等生の集団・生徒会。彼らは、和を乱す存在が嫌いというきらいがある。何かの分厚い資料を広げて、迷惑な存在を見る「ような」視線で貫いてくる。くいっとメガネを上げる人間ばかりだ。

「あ、会議中でしたか……」

「こいつぁ、失礼！」

こてんと頭を打つ小芝居をいれておどけるが、場の空気は氷点下まで下がりつつあった。

「あれ、和ちゃん？」

前線に立ちながら、もじもじとうつむいていた夏音たちの背後から声を発したのは唯。あれ、と顔をあげるとしっかりと会議の司会進行を務めていた人物に気が付いた。

「あら、唯？」

アンダーリムの珍しい眼鏡をかけるその少女は、唯の幼馴染である真鍋和その人であった。

「へぇー、和ちゃんがここに！？」

「何でって、生徒会だからだけど？」

唯の親友が生徒会だったなど、聞いていない。夏音は唯を軽く睨んだが、全く悪びれた様子がない唯は「知らなかったー」と暢気だ。

「とりあえず、会議が終わってからまた来てくれるかしら？」

大人しく追ン出された。

廊下でしばらく待っていると、幾つもの椅子が引かれる音がしてから、生徒がぞろぞろと生徒会室から出てきた。先ほどの闖入者たちをしっかりと睨んで行く者もいた。退出する生徒の波が途切れると、夏音たちは生徒会室へ再び入室して用件を話した。

「うーん、やっぱりリストにはないわねー」

和は各部活動のリストを広げて確認してくれたが、どうしても軽音部の名前は見当たらないそうだ。つまり、これで軽音部が部活動として認められていないことが間違いないということになる。

「もしかして……」
律が顎に手をあてて緊張した声を出す。夏音はまた阿呆な発言が飛び出すに違いないと全力スルーの構えをとった。今は省エネの時代。
「何か心あたりが？」
だが、しっかりと乗っかる者もいた。唯だ。誰か乗っかってくれてよかったと内心安堵した律は、一度強く頷いてから和を鋭く見つめた。
「弱小部を廃部に追い込むための生徒会の陰謀！！」
（ほーら、やっぱり）
それも、恐ろしくとんでもない阿呆な発言であった。ハハハ、と乾いた笑みを浮かべた夏音であったが、まさか本気でそれを信じようとする者がいるとは夢にも思わない。
「和ちゃんは本当は心のきれいな子！　目を覚まして！」
ここにいた。
「何の話？　ていうか部活申請用紙が提出されていないんじゃないの？」
唯のこのような調子にも慣れっこなのか、和はさらっと流して事の原因を推察した。
「部活申請用紙？」
聞きなれない単語に首を傾げてムギが反芻する。
「な、何だそりゃー。そんな話は聞いてないぞーっ！！」
あくまで我に正義アリ、と言い放つ律であった。しかし、たらりと一筋の汗が額を流れた。
「田井中、うしろーっ！！」

結局、和がその場で部活申請用紙を埋めてくれることになった。それで判子さえ押せば、晴れて軽音部も部活動の仲間入りである。すらすらと和のペンによって空欄が埋まっていく。軽音部の面々

が息を呑んでそれを見守っていると、ふと彼女のペンが止まった。
恐ろしい台詞が待っている予感がした。
「で、顧問は？」
「コモン？」
「Ｃｏｍｍｏｎ？」
何故、初めからそこに疑問が行き着かなかったのか。答えは簡単。
全員、基本的に非常識の集まり。それが軽音部。

件の顧問問題について即座に緊急会議が開かれた。開始数秒で山中さわ子教諭に頼むのが良いのではないか、という意見が出た。
彼女は音楽教師であり、吹奏楽部の顧問を担っている。
容姿もさることながら、その物腰の良さで生徒から圧倒的人気を誇っている美人教師というオプション付き。数か月前、夏音がベーシストだということを一発で見抜いた慧眼の持ち主でもあった。
先日のこともあり、夏音もなんだかこの先生が適任である気がしてきた。アテが無くもないし、上手くいきそうな気しかしないのだ。

「ごめんなさい。なってあげたいのはヤマヤマだけど……私、吹奏楽部の顧問をやっているから、掛けもちはちょっと……」
ショックが皆を叩きのめす。私、付き合っている彼氏がいるからちょっと……と言われたようなものである。
「そんなぁ」
「本当、ごめんなさいね」
そう言ってさわ子は心から申し訳なさそうに目を伏せた。
「お時間はとらせません！」
「練習なら、自分たちでちゃんとしますから！」
「山中先生の損にはならないはずです！」
「ここに名前書いて、判子押すだけ！　ね、簡単でしょ！？」

どこの悪徳商法だとばかりに口先八丁で押す軽音部の面々だったが、相手は苦笑するばかり。
こうなったら。
（奥の手だ……）
一瞬だけ視線を交差させる。
（やるよ！）
唯がさわ子の顔をじっと覗き込んでにんまり微笑む。
「な、なぁに？」
「先生、ここの卒業生ですよね？」
できるだけ無邪気に。無垢な生徒の純粋な疑問を装うように唯をこの係に選んだのだ。上手くやれ、と皆の心が一つになった。
「え、えぇ」
「さっき、昔の軽音部のアルバム見てたんですけど……」
その瞬間、びくっと体が跳ねたさわ子。
「あ、アルバムはどこにあるの？」
「部室ですけど？」
「そう……」
ふらふらと後ろを向いたさわ子。その反応に夏音はにやっとした。ここで夏音は自分たちの予想が外れていなかったことを確信する。
「あれ、先生どうしたんですか？」
唯がそう尋ねた瞬間、さわ子の体が深く沈んだ。それは、まるでチーターが獲物へ襲い掛かる瞬間に体を沈める予備動作のごとく。
その体が跳ね上がると、瞬く間にさわ子の姿は廊下の遥か先へ消えていった。
「イエス！！」
夏音はガッツポーズをしてから、急いで彼女の後を追った。
「イエス言うけど、先生めっちゃ速いぞ！？」
「問題ない！」
「うおっ！　お前も足速いな！？」
速度を増し、廊下を全力疾走する夏音は軽音部の部室へと向かっ

た。スカートという事もあって、全力で走れない女子を置いて夏音は突っ走った。これでも一時期パシリとしてならしていた身である。一介の音楽教師に遅れをとる夏音ではない。「フハハハハー」と相手を追い詰める高揚感に高笑いしながら走り続けた。

後を追ってきた四人が部室へ辿り着く時には、薄暗い部室の中央で膝を着いて固まるさわ子と、その背後には両腕を膝について荒い息をして笑む夏音の姿があった。ニヒルな笑いを浮かべようと必死だが、割と全力疾走が堪えたらしく余裕がなかった。

「やっぱりアレは先生なんですね」

蒼褪めた顔でゆっくりとこちらを振り返るさわ子。その答えは聞かずとも、明白であった。

夏音達は、先ほど部室にて昔の軽音部のアルバムを覗いていた。いわゆる軽音部の黒歴史というアイテムを見つけたのだと思ったのだ。

嬉々としてアルバムをめくり、軽音部のＯＢが本当にメタルの住人だったんだと大いに笑ったところで、ふとアルバムの中の写真に既視感を覚えた。

長い髪を振り乱して観客をこき下ろしている女性。フライングＶを又に挟んで狂ったようにタッピングをする姿。

極めつけには、その人物のスナップ写真。

「この人ってどこかで見たような……」

という唯の一言から始まり「あ、やっぱ似てるよねー？」と夏音が頷き、もしや……と話が膨らんだ。

冗談半分で盛り上がっていただけなのだが、それはやがて確信めいたものへと変わり……今回の計画につながったのである。

「山中先生、あなたはかつて軽音部員だったんですね！！」

びしっと指を突きつけた律。どこぞの探偵さながらのキレである。

息が切れ切れの夏音から体よくその役を奪った律は活き活きとしている。

「よくわかったわね……そうよ、私……軽音部にいたの」

あっさり自供したさわ子。肩を落とし、乙女座りでうなだれた彼女は「あぁ……あれはうら若き高校時代のこと……」語り出した。

それから一同は彼女の重く、悲しい過去を知ることになる。自分でうら若きって言ったらダメだろうというツッコミはなかった。

省略。おおざっぱにまとめると。

当時、軽音部に所属していた山中さわ子。勉強は中の上、読書と音楽を愛するモラトリアムまっただ中の文化系少女だった。ただ、モラトリアム少女侮るべからず。当時、彼女が片思いをしていた彼がワイルドな女性が好みだと聞くや否や、さわ子は今までのアコースティック路線を瞬時に投げ捨ててしまう。あれが若さ、という勢いだと彼女は語った。

それから、どんどんメタルの奥地へと足を踏み込んで止まらなくなった日々。ラウドネスを信仰する事から始まり、海外メタルに触手を伸ばしていく毎日。スィープ？　タッピング？　電ドリとは何ぞや？　と純真そのものだった少女の姿はそこにはもうなかった。

最終的に、もちろんそんな彼女にどん引きした彼にはフラれてしまうのだった。めでたし。

なんとも痛快なストーリーだったな、と夏音は話が終わった瞬間に惜しみない拍手を送りそうになった。寸で察した澪に止められた。日本人は空気を読めないといけないそうだ。

自分の人生の恥部を生徒に曝け出した山中先生は、うっすら涙目だ。

そんな時に唯が「じゃぁ、今もギター弾けるんですか？」とギターを渡したものだから、山中先生のソロリサイタルが始まってしまった。

超絶的なテクニック、と表するにはとうが立っている気もしたが、彼女は確かな技術を持っていた。あのテープのリードギターをやっていた人物というのも納得できる程のレベル。

早弾き、タッピング、歯ギター。普段あまり生でお目にかかれないピロピロサウンドに女子高生は興奮しっぱなしだった。夏音はと言うと、歯ギターをガチでやる人を見て、どん引いた。

ギターを弾くと昔の荒々しさが出てしまうのだろう。よくある話だが、すっかり気が大きくなった彼女はそのままの勢いで軽音部一同をぎょろっと睨んだ。

「お前ら音楽室好きに使いすぎなんだよーーーー！！！！」

軽音部一同は、そのあまりの気魄に両腕をついた。脳髄を介さない行動だった。

しかし、土下座という行為が脳みそにプリセットされていない夏音は腕を組んでふんぞり返っていた。

にこやかと。

一斉に自分に向かって頭を下げる生徒の姿に正気になったさわ子はおろおろと崩れ落ちた。

「やってしまったわ……」

ヨヨヨと泣き崩れる先生に向かって夏音は歩き出した。その震える肩を抱き、優しく先生を見つめる。

「立花くん……」

夏音は潤んだ瞳で見つめてくる山中先生にざっくり一言。

「バラされたくなかったら、顧問やってください」

「あいつ、やっぱり悪魔だな」

企画・進行・結末までも一挙に成功させた彼についてそう評価するとともに、また彼の一撃をくらった不憫な山中先生を偲んで涙を流したとか。流していないとか。

「こんな感じのオリジナルなんですけど」
「快く」顧問の件を引き受けてくれる事になったさわ子に今作っているオリジナルの曲を聴いてもらうことになった。相変わらず唯のリズムのヨレ具合や、中盤に入るフィルからテンポアップする律のドラムは一向に直らないだけでなく、他のメンバーの演奏面に不満だらけであった。
「顧問として、どう思います？」
ベンチに腰掛け、じっと演奏を聴いていたさわ子先生がゆっくり口を開く。
「そうねー。『顧問』として、言わせてもらうわ。各自の演奏技術については他として、特に言うことはないかしら」
「いやー、顧問としてのご意見ありがとうございます！」
「いえいえー顧問として当然よー？　ただ、ひとつだけね。歌はないの？」

沈黙が何秒かその場を包む。パシン、と音がして夏音が自分の額を叩いていた。

「いっけないっ！　まだだった！」
舌を出して誤魔化す夏音に非難の視線が集中した。
（俺だけのせいじゃないのに……）
夏音とて色々忙しかったのだ。曲の構成を決めてから譜割などを決めようと思っていたし、曲の全体像を掴んでから、と思っていたのだ。
「じゃぁ、まさか歌詞もまだとか？」
「まぁ、そりゃあね」
「それでよく学園祭のステージに出ようと考えたわねー」
先生の様子が明らかに変化していく。具体的にいえば、眉がぴくぴくとし始め、眉間に血管が浮いて……。
「音楽室占領して今まで何やってたの！？　ここはお茶を飲む場所

じゃないのよ！？」

本気の怒声が五人につきささった。かつての軽音部員として、桜高の学園祭で名を馳せていた先生。方向性はともかく、真剣に音楽に取り組んでいたのだろう。むしろ、現役が異常である。

「言いたいことはわかります！　けど、今の演奏を聴いたでしょう？」

怒れる獅子の前にすっと立つ夏音。一同は、恐れを知らぬ勇者の姿に固唾を呑んで見守った。

「ここにいる唯はギター初心者。数か月前までコードすら知らなかったんです。ムギにいたっては、バンド初めてだし。澪は音量にバラつきがあるし、律は相変わらずダメダメで……」

後半、ただのダメ出し。

「それでも、演奏に関してはびしばしと練習してきました！　歌詞と歌は後からハメりゃあすむでしょう。そんなのすぐにできます！　何故なら、俺がヴォーカルやっちゃうからね！」

理論になっていないが、何故か強引に納得しかけてしまう説得力。

「そう、それでやれるというならば……けど、これはないしょ。これだけ音楽室を好き放題にしちゃダメでしょ。私らだってここまでやってなかったっつーのに。その前に高校生の分際でなしてこんな機材揃ってんのよー！！？　うらやましいアーーーッ！！！」

「ごめん俺には手がつけられない」

夏音、前線離脱。

「せ、先生！」

息が荒い獣の前にムギがそろりと出る。

「ケーキ……いかがですか？」

さわ子先生の人を殺せそうな目線がムギに向けられる。

「いただきます！！！」

教師ですら陥落させるムギのお菓子こそ、ある意味で軽音部最大

の武器かもしれない。

第九話（後書き）

感想をいただけたら、とても嬉しいです。

第十話（前書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。

第十話

少年は特に考え事をしていたわけではなかったが、電柱が鼻っ面ぎりぎりに迫るまで自分がまともに前を見て歩いていなかったことに気が付かなかった。

うおっと小さく悲鳴を漏らし、電柱から飛び退く。少年は高くも低くもない自分の鼻の無事より、こんな間の抜けた行動を誰かに見られていないかの方が気になった。

神経質にひょろ長い首を疑わしげに動かして、どこにも人影がないのが確認できるとほうっと安堵の息を漏らした。

（この現実世界でぼーっとしていて電柱にぶつかるなんてありえないよな）

それは天然キャラにのみ許される失敗だ。彼は自分みたいに何のキャラも立っていない人間がそんな粗相をしたら、ただの痛い人だということくらい解っている。

モブキャラなのだから。

モブキャラとはなんぞや、という者もいるだろう。いわゆる、漫画やアニメなどの背景キャラを示す言葉。

また、これは日々を目立たないながらも真面目に生きる日本人男子にとって悪魔のような悪口である。

それを面と向ってではないが、風の噂にも自分がモブキャラと評されたことを知った時のどん底感は筆舌に尽くしがたい。ただ二、三度死にたくなった。この時期の男子高校生がどれだけ自らの個性に悩み、煩悶としてその他様々な思春期特有のゴニョゴニョに煩わされていることか。

それを知ったうえでの、「なんてーか、モブキャラの一人ってい

うの？」とは何たる狼藉か。あまりに怒り心頭に発したので、よっぽど川原などで満腔の怒りをぶちまけようかと思った。できなかったが。それを言った張本人を見てみれば、出汁をとったら謎の油ばかりが浮かびあがってきそうな風体をしていた。それが救いだったかもしれない。

キャラが立つとか立たないとか。

この世の中はいつからそんな瑣末事を気にするようになってしまったのだろうかと嘆くのも飽きた。個性なんて、いくらでも個人に備わっているはずなのに、それを見極める目が備わっていない人が多いだけなのに。

よく人のことを知りもしないでそんな評価を下せる人間は信じがたい。少年はそっと溜息をついてから、今度はしっかりと前を見据えながら再び歩きだした。

この先、ずっと直線のまま住宅街の中を突っ切る。やや傾斜がついていて、緩い上り道となっている。

この土地のアップダウンの豊富さにはまいってしまう。こんな暑い日は特に。少年の息は自然と短くなっていく。

まっすぐな道路の遥か先には陽炎が揺らいでいた。陽が出てからまだ数時間しか経っていないのに、今日も太陽は自分たちを攻めに攻める。ぼーっとしていたのは、梅雨明けから一気に増した熱気のせいだろうか。これだけ暑ければ、意識もつい曖昧になってしまう。ワイシャツの下に来ているタンクトップはさぞ絞りがいがあるだろう。

歩きながらふと考える。少年は自分の名前が山田七海であることについて考える。

そもそも、自分の苗字は日本国内ファミリーネームシェアナンバー1、2を争う人気がある。奇跡的にうちのクラスには自分しかいないのだけど。名前にいたっては女の子みたーいと騒ぎ出す奴が必

ずいる。ところがどっこい、いざその時点で名前の持ち主の顔を眺めるや、こっそりと気まずい顔をするのが大半の反応だ。余計なお世話だ、と顔面を蹴りたくなる。

自分でも名前負けしているな、とは思う。父親が海底二万マイルのファンだから仕方ない。七つの海を制覇してくれ？　という現代にそぐわない祈りをこめたそうだ。そんなもの自分で勝手に制覇してくれればいいのだ。

自分は、いろいろ持て余していると思った。唯一の名前でさえも。キャラとかはどうでもいい、といったら嘘なのだけど。

などと、暗い思考が進んだところでそれをふっきるように首を振った。

いけない。

まるで自分がとても重たいものを抱えて生きているようだ。モブキャラが主人公みたいに。別に七海自身は自分を可哀想なんて思わないし、思わせない。

要するに、個性がちょっとだけ表に出にくい、思春期の男の子によくある、なんてことない悩みを持て余しているだけなのだ。

七海はまさに自分達をゆとり教育が助長した個性第一主義みたいな物の弊害を喰らっている世代だと思っている。

実際には自分より上の世代がそうなのかもしれないが、その余波は確実に大きくなって自分達を直撃している。そもそも個性とは何なのか、答えてくれる大人は近くにいない。改めて言うまでもない話だからだ。誰に決められるものでもなく、押しつけられるものでもないものの正体を探っても仕方がない話だろう。わざわざ教育に出す必要はないから学校の先生も口に出さない。指導要綱にもあるらしいが、鼻にもかけていない人が多い。

でも、確実にあるものが個性。授業中に腹が鳴っても温かい笑いを生み出す人間と、気まずげに無視される人間に分かれる事もそう。横に並ばせると身長も顔も違う。そんな当たり前のところから個性は始まっているのだろう。しかし、そんな些細な部分を個性に含ん

でくれない現実を知っていた。たぶん、皆が求める個性とはもっと強烈で、刺激的でとっておきのものだろう。そして自分に足りないものもそんな感じだ。

こんな事を考えていると、ふと自分のクラスのちょうど隣に座っている人物の顔が思い浮かんだ。

その人はまさしく個性の塊だった。外見も、中身も、すべて人が求めるものを持ち合わせていた。そういえば彼も自分みたいに女の子みたいな名前だけど、自分とは違う。彼は、彼なのに女の子みたいな名前を持った男の子でも許される容姿を持っているのだ。同じ人間だとは思えないくらい全てのパーツが違っていて、悔しさとかを感じるようなレベルじゃない。万が一にもこんな肌が欲しい、とか髪の質感がうらやましいとか思ったらアウトだ。自分が惨めになってしまう。

七海にとっては気になるけど、遠い場所にいる同級生だ。そしてこの時の七海はこれから先、自分がどれだけ立花夏音という男と深い関わり合いになるかなんて知る由もなかった。

ＨＲ前のざわめくクラスはいつもの喧噪を醸している。低血圧なのか、机に臥せっている者もいるし、一時間目の英語の予習を友人から必死に写させてもらっている者もいる。大半は自分の机になんか座っておらず、友人の席にグループで集まって姦しくおしゃべりだ。むしろ、合唱。輪唱。ソプラノからバスまで揃っている。が、低音は少しだけ弱い。それも不自然なことではない。このクラスひいては　学校の男女の比率は圧倒的に女子の方が大きいのだ。

もともと女子高だったというのもあるのかもしれないが、クラスに存在する男子は女子七に対して三といった具合で、学年中の男子は入学当初などそれはもう肩身のせまい思いを味わってばかりだった。

今はそんなことはない。

もちろん男女の壁は当然厚いものと昔から相場が決まってはいるものの、この学校の女子は総体的に優しい性格の者が多い。元ではあるが、女子高に入学するのだから男子に対して距離がある人が多いのかなという偏見も今では完全に溶け切った。

学校の校訓は自由自立を謳っている。お嬢様学校の気質を引き継いでいる部分が数年前まであったらしい。あった、と言われているが今もその影はひょんな所で現れることがある。

例えば、五教科の他に選択する選択教科の中に家庭科がある。一年の時は必修だが、二年からは任意選択。先輩によると、昔風に言えば淑女たる者としての嗜みとして裁縫を習うらしいのだが、最終的にはどんな服でも作れるくらいのレベルを求められるらしい。レース縫いなんか何に使うのだろうかと先輩は零していたので、絶対に家庭科は選ばないと決めた。他にもテーブルマナーなども叩き込まれるという。

学校としてのコンセプトがいまいち不透明だが、歴史ある学校という事で集まる生徒の質は悪くないのだ。昔から地域の住民には評判が良い。

だから、いじめの噂は今のところ耳に入っていない。加えて男女の中は良好といっていいだろう。特に男子は、同性同士のつながりやコミュニティーは少数派の団結力を見せている。クラス内でもそうだし、別のクラスの男子も皆仲が良い。自分も、すでに一年の半分が過ぎた今となっては同性で名前を知らない者はいない。

教室の風景に目を凝らしてみれば、ちらほらと固まって話す男子の姿がある。まぁ、結局は男も女も変わらないのかもしれない。

現在の七海はというと、そのような輪の中に加わらずに机の上に書類とにらめっこをしていた。別にハブにされているとか、友達がいないとかではない。

ただ単に空いた時間をおしゃべりに使うのも惜しいくらいに忙しいのだ。

去年の学級委員やなんやを決める時、自分は図らずもクラスの書記に任命されてしまった。字は綺麗な方だし、あまり書記の出番なんていうのも少ないからいいかと思って油断していたところ、ありがたいお言葉を頂戴してしまった。各クラスの書記から、生徒会の書記を選ぶのだと。

数多いる書記の中から、最終的にくじ運の悪さから選任されてしまったのが自分というわけだ。

生徒会の書記といっても、先輩方のしごきはとんでもなかった。何せ、男子が一人しかいない。

思えば、あれは七海の地獄のスタート地点だったに違いない。無茶ぶりと過剰労働を強いる優しい先輩に囲まれて可愛がられている日々である。

それもそのはず。今年から共学化された桜高は、当然ながら二、三年の上級生たちはすべて女子。そんな女の園もとい女の檻にぶちこまれた当然の帰結だった。当然なのかは疑問だが。

なかなかやりがいはあるし、今は学園祭のシーズン。生徒会は目がまわる忙しさで、こうして空いた時間を、まさに間隙を縫う勢いで各クラスから提出されたクラス出展の企画書の束に目を通さねばならないのである。

だから七海は「ああん、もうっ！」と心の中で叫びながら、血走った目でぎょろぎょろと企画書に目を通していたのだ。たまに指定年齢を敷かねばならぬ内容が出てきたり、思わず唾を吐きそうになる。ぺっ。

流石に目が疲れてきたので作業を切り上げて、ふと時計に目をやる。あと五分でＨＲが始まる。トイレにでも行っておこうかと思い、席を立った。

教室の引き戸を開けたところで、七海はあっと息をのんだ。

海のような青にぶつかったのだ。それが錯覚だとしても、そう言い表すしかない。ガツンと視界に飛び込んでくる青が全身にがつん

と衝撃を与えた。
それは、ちょうど自分が教室を出るのと入れ違いに教室に入ろうとした人物だった。
事もあろうに立花夏音その人だった。
いきなり朝一番でこの顔を直視するのはつらい。それも、こんな事故みたいな形で。
肩より伸びた真っ黒い髪は造りものみたいにしなやかで、ぱっちり二重まぶたは完璧なラインを見せつけ、そのすぐ下には透き通る蒼い瞳。どこまでも精緻に作られたフランス人形のような顔は、自分と同性なのだということを宇宙の彼方へぶっ飛ばしてしまう。
女もうらやむ花の如く匂う美貌を有している「男の子」は、七海と同様に急に目先に現れた人間と数センチの距離を保っていることに驚いたようだ。しかし、瞠目した蒼い瞳に映る自分の方がよっぽど猿のように驚いている。
「おぉ……」
数秒後に彼が呻く。実際に、彼は何気なく「あぁ」と呻いただけなのだが、七海の耳には「Ｏｈ．．．」と聞こえてしまう。
何せ、目の前の同級生はまるで日本人には見えないのだ。
「ご、ごめんよ！」
七海は舌をもつらせながら、何とか声を出して彼のために道を譲った。出る人優先、入る人優先。そんなものは知らない思いやりが大切。人一人分空いたスペースにそろりと体を潜り込ませた彼は、通りすがる時に七海に顔を向けた。
「ありがとう」
微笑みの爆弾投下。羽根が舞った幻覚が見えた気がした。
（奴は……野郎だ……！！）
七海は自分の顔がぽっと赤らんだ気がした、気のせいに違いない。横を通る時に、超良い匂いがしたとかそういうことは決して思っていない。
けど、逃げた。七海は脱兎の如く廊下を走りぬけ、トイレへと向

かった（男子のトイレは少し遠くにある）。
そこで素早く用を済ませ、手を洗う。この学校は昨今では珍しくトイレに鏡が設置されている。
ハンカチで手を拭きながら、何気なく鏡の中の自分をじっと眺めてみた。
頭髪に限らず、全体的に校則が超絶ユルい桜高だが、自分は中学校の時からほとんど変わらない髪型をキープしている。別にこだわりがあるわけではない、ただのスポーツ刈り。いや、実際にはスポーツ刈りよりはお洒落にキメているつもりである。その方がいいと言われ襟足を伸ばしてみたり、前髪眉毛にかかる程度だが、サイドは長めに残している。これらすべてはスポーツ刈りを基本として、派生した現在の髪型であった。
顔は、自分では悪くないと思っている。良くも悪くも平均的。顔のパーツがどこか極端に歪んでいたりとかはなし、彫の浅い日本人らしい顔ではないだろうか。
人より瞳の色が茶色いことが密かに自慢だが、それが役に立ったことは一度もない。睫毛は奥二重のせいでしょっちゅう逆さになる困りものである。自分の体に特に不満はない。ただ、もう少し身長が欲しいな、と思うくらいである。けれど、自分の間近にあれだけ綺麗な生き物がいると本当に同じ人類かと思う。
自信がなくなるという次元ではなく、自分と比べる気にもならない。強いて言うなら、美術品……の一種のようなものとして数えているのかもしれない。
七海はそういえば彼と会話をしたことがないことに気が付いた。
実はクラスの全員が、その顔や身振り手振りから彼のことを外国人そのものだと思い込んでいた時期がある。
彼は入学式の時に担任から帰国子女だと紹介された。さらにアメリカと日本のダブルだということを知り、そんな境遇の人間が身近にいることにささやかな好奇心をくすぐられたクラスメートたちはこぞって彼に話しかけた。

しかし、日本語はある程度できるものだと信じて声をかけると、ちぐはぐな日本語を返される。むしろ、英語を話される事が多かった。英語能力がないくせに、自尊心は何故か高い生徒たちは、自らの英語能力の低さを露呈することをおそれ、彼に話しかけないようになった。

別に彼が嫌われた訳でもないし、むしろアイツは何か違うよ、と一目を置かれるようになった。七海は席替えの後に隣になった彼の事を特別扱いすることはなかったが、これといって積極的に関わり合いになろうともしなかった。授業は真面目に受けているし、早弁や机にうつ伏せてＩ　Ｐｏｄを聴いているような素振りもなかったので、悪い人ではないんだろうなと思う程度。

そんな彼が、途中から一部の女子たちと行動を共にすることが多くなった。どうやら彼女たちは同じ部活の仲間――軽音部だったと思う――らしい。お昼の時に一緒に弁当を広げて談笑をするもので、クラスメートも「おや？」と首を傾げるのも時間の問題だった。

実は日本語が結構できることが判明して以来、彼はクラスの人気者に一気に君臨することになった。むしろ、マスコットだろうか。

夏が過ぎる頃には、誰もが気軽に話しかけることができるくらいクラスに馴染んでいた。七海は生粋の天の邪鬼気質と少々の卑屈さのせいで彼と話そうとしなかった。こうなってからじゃないと声をかけられなかったと思われたくなかったからだ。

そんな彼が先日、生徒会の会議の途中に殴り込みにきたらしい。らしい、というのも七海は用事があってその会議に出ることができなかったので人伝いに耳に挟んだだけなのだが。

そんな突飛な行動をとる人間なんだな、と意外に思った。この時までは、まだその程度の認識だった。

彼が放課後、再び生徒会室へ訪れるまでは。

「失礼します」

数回のノックの後に生徒会室の扉が開かれ、顔をのぞかせた人物に視線が集まった。誰かが息を呑む音が聞こえ、作業に没頭していた七海もついそちらに視線を向けた。

「軽音部のステージ発表についてなんですけど……あっ！」

用件を口にしながら部屋に入ってきた隣の美青年だった。彼は七海の姿を認めて驚いたように目を瞠った。

「ちょうどよかった。お隣の七海じゃないか」

くだけた笑顔を自分に向けてそばに寄ってきた美貌の同級生に七海はどぎまぎした。そして、今なんか下の名前を呼び捨てされた気がした。

「や、やあ。僕も一応生徒会だからね。軽音部の発表がなんだって？」

あくまで冷静な対応をとれたつもりである。七海は椅子を一つ用意し、彼の話を聞く態勢を整えた。「ありがと」と言って、大人しく椅子に座った彼はまっすぐに七海の目をのぞき込んで用件を話し始めた。

「軽音部の発表時間が二十分、ていうのは構わないんだ。オリジナルの曲も二曲しかないし、あとはコピーの曲を二つほどできたらいいなって思ってる。けど、この発表の枠がちょっとまずいんだ」

そう言って渋面をつくる夏音を眺めて、七海は美人はどんな表情でも美人に変わらないんだなと感心した。

「まずいっていうと？」

「体育館でやるから、アンプの生音だけでやるには限界があるんだ。聞けば、この学校の学園祭はまともなスピーカーも、ましてやＰＡも用意しないんだってね……ちょっと信じられなくて」

「はぁ……それが、どう問題なのかが僕にはわからないんだけどな」

事実、今までそうやってきたのだから問題はないはずだ。七海は、彼が何に不満を抱いているのか全く要領がつかめなかった。

すると彼は七海の返しに、大袈裟にはぁーっと肩をすくめた。そんな仕草がいちいち似合っていて、不思議と不快ではない。たとえ

それが馬鹿にされたのだとしても。
「いや、ごめんね。プロのライブっていうのがどうやって成り立っているかわかる？」
「ごめん、見当もつかない」
コンサートに行ったこともないから、わかるはずもない。七海は正直に首を横に振ると、そうだろうと鷹揚に頷いた夏音が神妙な表情で解説し始めた。
「プロミュージシャンは大きいステージで演奏をするだろう？　それこそ観客が何千、何万と入るくらいのステージでやる人もいる。彼らの演奏は全て機材をマイクで拾ったりラインで出力したものを巨大なスピーカーを通して観客に届けるんだ。そのステージ全部に音がしっかり行き届くようにね」
七海は彼の講釈を黙って聞いていた。そう言われると、確かにそうなんだろうなと思う。それくらいは、演奏について素人である七海も理解できる。
「だから……つまり、そういうことなんだ」
これからさらに展開されると予想された彼の理屈はそこでぶったぎられた。
「えぇっ！？　そういうことって、そこで終わっちゃうの？」
得意気にミニ講義を始めたのだから、殊更もっと深く入りこんだ説明があると思っていた七海はぶったまげて思わず声をあげた。
「理解できなかったの？」
「今ので何を理解しろと？　ねえ、はっきり言って何が不満なのかな」
七海の反応に、それは小さな首を傾げて心の底から「あなたがわからない意味がわからないの」とでも言うような仕草をされた。それがたまらなくめんこいとしても、そんなことは関係なく七海は冷静に訊き返した。
彼の本意が全く理解できなかったので、ざっくりと要望を教えて欲しかったのだ。しかし、その後に続いた沈黙に七海は「あれ？」

と焦った。何故、この男は何も答えないのだろうとだんだん空恐ろしくなった。例えるなら、嵐の前の静けさ、みたいな感覚。

七海がツバを呑んでじっと夏音を見詰めていると、彼はふいにその小さな肩を小刻みに震わせたかと思うと、がばっと七海に詰め寄った。

「音が小さいんじゃーっ！」

「え！？」

「こじんまりとした音でなんかしたくないの！　もっとどかーんと自分たちの演奏を体育館に鳴らしたい！　屋外にだだ漏れになるくらいの！　わかるかなーわかるよねー！？」

「揺れる揺れる！　脳みそ出る！」

ぐわんぐわんと肩を揺すられ、半分ほど脳震盪に近い状態の七海。

「ＰＡは自分でやります！　機材運びの人材はこっちで確保するし！　ステージ設営は最小限に抑えて、他の発表の迷惑にならないようにもするよ。なんなら、でかいスピーカーは学園祭中ずっと他の出し物でも使ってもいいよ？　だからいいでしょ、ねえ！？」

七海は人畜無害の草食動物に襲われた気分だった。可愛い兎ちゃんにがぶっとやられた感じ。

「わ、わかった！　前向きに検討して……」

「Ｓｈｕｔ　ｕｐ　Ｊａｐ！！　これだから日本人は……それはＮＯってことだろう！？」

「で、ではとりあえず生徒会で話しあってみるよ！　できるなら君の意見を通すよう善しょぐふっ……！！」

「検討、善処という言葉に注意しろと言われている」

「もー、なんとかすっから！　絶対！　だから、もう揺らさないで！！」

七海が息も絶え絶えそう言うと、ぴたりと夏音の手が止まり、我が意を得たりとにやりとした。

「本当？」

「が、がんばってみる」

「プロミス！」
夏音がいきなり小指をすっと七海の眼前に差しだして言ったので、七海は息を凝らしてその意を探った。もう背中に汗がびっしょりだ。
「……プロミス」
すると、再度夏音が七海の目をしっかりと見据えて呟いた。
「ぷ、ぷろみす！！」
約束ということか、と遅ればせながら理解した七海はしっかりとその小指に自分の小指を絡めた。そんな仕草は木村拓哉以外に許された行為だと思っていなかったのに。意外なことに、彼の全体像からは考えられないほど彼の手はがっしりとしていた。指も細いとは言えないし、なんともアンバランスな感じである。
「じゃあ、頼んだよ。ありがとうね！」
満足そうに笑って頷いてから、彼はささっと生徒会室から出ていった。夏音の姿が扉の向こうに消えたのを見て、七海は一気に脱力した。
わずかに残された気力でせいぜい椅子に座っていられるといった具合である。彼とほんのわずかやり取りを交わしただけで、どっと疲れてしまった。なんというエネルギーを持っている人間だろう。周りの人間は彼とまともに相手していたら、身がもたないのではないかと思う。
（でも、いやではなかった……かな）
ふと、彼と交わったばかりの自らの小指を見つめる。そこで初めて七海は妙なプレッシャーを感じた。そして自分が今まで室内の人間の注目を集めていたことに気が付いて顔を真っ赤にさせるのであった。

夏音は悠々と廊下を歩いていた。その歩みはどこかウキウキとして、快調に階段を数段飛ばしで軽音部の部室へ向かった。扉を開けると、いつものようにお茶をする彼女たちの姿――――はなく、楽器

の用意をする姿があった。
もう学園祭は間近。一同の気持ちがしっかりとライブに向いている表れである。
「ステージの件、どうたった？」
夏音の姿を認めた澪が開口一番にそう訊ねた。
「うん、何とかなりそう」
夏音もそれに笑顔で答えた。幸い、生徒会には知り合いが二人もいるし、先ほど十分にゴリ押ししてきたので良い方向へ向かってくれそうだという好感触をつかんで帰ってきた。
「それにしても、機材とかは本当に何とかなるのか？」
「それについては、大丈夫。心強い知り合いがいるし、あとは時間だけもらえらばなんとかなるよ」
大船に乗ったつもりでいて、と胸を張る夏音に何とも言えない笑みを漏らす一同だったが、とにかく全員が集まったところで練習を始めることにした。
他の者が各々の楽器を自由に鳴らしているなか、夏音は素早くギターのセッティングを済ませると、ふとギターをスタンドに立てかけた。
続けて、タタタと小走りで部室の奥に走っていき、そこからまた別のギターケースを担いで持ってくるとその中からベースを取り出した。
その様子を見ても、誰一人不思議がる者はいなかった。そういうことになっているからだ。
今回、軽音部は二曲のオリジナルを用意した。
一曲は、合宿で作ったもの。そして、もう一つは夏音がベースを弾くもの。夏音がベースを弾きたいという我が侭を叶えるための曲であり、かつ悪ふざけで澪にヴォーカルをさせようと考えた結果できたものである。
夏音がギターヴォーカルをやる曲の方は、澪作詞によって「ふわふわ時間」というタイトルに決まった。夏音は、歌詞の意味がよく

わからなかったが、この曲がとんだキワモノになったということだけは理解した。
夏音がベースの方のセッティングをしていると、律がドラムを叩く手を止めてじわりと額に滲んだ汗を拭く。ぬるくなったペットボトルの水をぐいっと呷ると辟易しながら胸元に手扇で風を送った。
「あっちー。そういえば、もういっこの曲の歌詞はできた？」
自分に対して訊いているのだと気づいた夏音はちらりと律の方に目をむけてこくんと頷いた。
「できたよ」
「本当っ！？　見せて見せて！」
それに対して大きく反応した唯は瞳を輝かせて手を振り回した。その際、手が弦に引っ掛かって不細工な音をたてる。夏音はケースから折りたたんだ一枚の紙を取り出し、それを広げてみせた。
わくわくと擬音が聞こえてきそうな唯をはじめ、他の者もそろそろ集まってその紙を覗きこんだ。
「Ｗａｌｋｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｆａｎｃｙ　Ｂｅａｒ……？」
澪は、その英語の題名を読み上げるとはうっと身もだえた。
「クマさん……っ」
彼女が何を想像したのか分からないが、苦笑を浮かべた夏音はすぐに訂正を入れた。
「気まぐれ熊の散歩、ってとこだよ」
「す、すっごくイイ！！」
唯は子供のように瞳を輝かせたが、歌詞を追っていくうちに一筋の汗が額を伝った。
「でも、夏音くんコレ何書いてるかわかんないよ」
というのも、歌詞はすべて英語であったのだ。英語の成績が芳しくない唯は困り顔でお手上げとばかりに歌詞から目を離した。英語の羅列が足にまできている様子だ。
「英語だけど、何か問題かな？」
まさか英語がまずかったとは夢にも思わなかった夏音は予想外の

反発に目をぱちくりとさせた。弱ったな、と律は頭をかいた。
「問題ではないけど……歌詞の内容がわかる人が少ないんじゃないか？」
「別に、わかんなくてもいいと思うんだけど」
「そこは、ちゃんと歌詞も聴いて欲しいところだろ？」
「そうかな。別にこの曲は歌ものじゃないし、かまわないと思うんだけどな？」
英語の歌詞である以上、大半の生徒がその内容を聞きとることができないだろう。しかし、夏音としてはその曲の特色によってそれは考え分けるべきだと思うし、今回自分が作った曲はけっこうえぐい。歌ものではないのだから、歌詞を聞き取ってくれなくても結構、と考える。
そもそも、日本人は英語を歌うバンドのライブとかにも結構行くではないか。
「ヴォーカルの譜割とかも考えちゃったし、今更変えるのもなぁ」
まさか反対意見が出るとは思わなかった夏音は、今から日本語の歌詞に変更することに難色を示した。
「これ歌うの、澪だろ？　澪の意見も聞いてみようか」
急に話を振られた澪は、えっと声をあげたがそっと顎に手をあてて思案してから口を開いた。
「私は、このままでもいいと思う。曲って歌詞も大事だけど、それ以上に重要なこともあると思う。夏音の言うとおり、歌詞をしっかり聞いてもらわなくてもいいんじゃないかな」
その言葉を聞いて、律がむぅと唸った。
意見としては、それも十分アリだと思う。しかし、せっかく自分たちで作る曲なのだから、歌詞も印象に残したいというのが彼女の考えであった。
「律」
考えこむ律に夏音の声がかかる。
「律は洋楽を聴いて、一発で好きになっちゃうことあるだろう？」

「まぁ、あるけど」
「その時、歌詞の内容に心を打たれるか？」
「あ……それはないな。何言っているかわかんないし」
「つまり、そういうことだよ。そこにこだわることも大事だけど、今回はこのままで行こう。時間がないんだからさ」
「むぅ……私は、別に……」
顔をそらして、頬を膨らませる律はこれではまるで自分一人がゴネているみたいじゃないかと思った。
「じゃ、決まりで！」
夏音はそんな彼女の反応を見て、にかっと笑った。見たものが肩の力を落としてしまうような無邪気な笑顔だった。

七海は先日に二つ返事で受けてしまった――正確には、受けさせられた――件について、まさに東奔西走の忙しさを絶賛体験中であった。責任感だけは人一倍強い七海は、一度受けてしまったことは必ず完遂してみせるという信念をもっており、まずは生徒会の内部でこの案件を通すことに始まり、放送部や運営委員会にまで根回しをした。
特に放送部を説得するにいたっては、だいぶ話が難航した。彼らは、そもそも素人の集まりでしかないし、自分たちの慣れている機材だけで必死なのである。
外部からの機械など、恐ろしくて手がつけられないと恐慌していた。
しかし、そこはやり手の七海（そう自負している）は上手いこと舌先で話をまとめて言いくるめた。それらの機械は、専門の人がやってくれるから君らはノータッチでいい、と。実際、夏音がそこまでの人員を用意してくるかは怪しかったが、そこは無茶を言いだした張本人なのだから、責任は負ってもらう。必ずや。
あれからもう一度夏音と会った際（隣の席なのだから、当然のこ

とだ）、メールアドレスを交換したので、詳しいやりとりはほとんどメールで済ませた。

彼の要求は、きちんとしたセッティングの中でステージをやりたいとのこと。

そのためには、スピーカーやマイクをつなぐミキサー卓が必要であり、そのセッティングはおいそれと数分でできるものではないこと。いっそ面倒だから卓を学園祭の間中ずっと固定しておいて、他のイベントやステージ発表の時のマイクでも使用してしまおうという提案がなされた。

しかし、その提案には頷きがたい理由が七海にはあった。

答えは簡単、邪魔だから。

ステージ発表などには、舞台演劇なども含まれる。劇の最中に、どでかいモニター用のスピーカーが放置されていたら目だって仕方がないだろう。

だから、現実的にはセッティングをしてから片づけまでを軽音部の発表に合わせて行う方法しかないのだ。

二つ目の要求としては、リハーサルないし音づくりの時間が欲しいとのこと。

モニターから返ってくる音の調整や、外部のスピーカーの音のバランスなどを合わせる作業が必要らしい。

これも、聞けばセッティングから始めて、かなり大雑把にしても一時間はかかるという。

ここまでこだわるのか、と流石に七海も天を仰いだ。

こんな要求をしてくるのは、前代未聞らしい。そして、その苦労を一手に引き受けているのは自分である。

とんだ貧乏くじをひいてしまったと、もう笑うしかない。

様々な機関と調整した結果。すべての人材を軽音部で用意すること。セッティングからリハーサルまでをきっかり一時間で終わらせることを誓ってもらうことで、実現までこじつけた。

しかし、軽音部の発表の時間帯を調整することでそれは何とかなりそうであった。各ステージ発表の順番が決まる中、軽音部は休憩後に出番をむかえるようにしたのだ。

休憩（五十分）→軽音部発表（二十分）→ジャズ研発表（十五分）→ステージ発表終了、となるように配置した。それによって、休憩中にセッティングをして音出し。発表を終えた後、ジャズ研の発表を次にもってくることで設備を共有しようとのことになった。

双方のアンプ機材は違うが、そこは微調整して何とかなるだろう、とのこと。

七海は、頑張った。

この年にして、靴の底を減らして頑張った。誰か自分を褒めて欲しかった。

「いやーー！！！　本当にありがとう！　助かったよ！　君のおかげだね！」

そして、今自分の手を握ってぶんぶん振りまわしてくる男を前にして彼はげんなりとしていた。

周りの視線が痛い。

「わ、わかったから……これで、お望み通りだろう？」

「パーフェクトだよ！　いやぁ、親切だねアンタ！」

七海は、目尻にうっすら涙まで浮かばせて喜ぶ美人の同級生をじっくり眺めた。人形みたいと思っていた顔だが、その様子を見ると自分と変わらない、ただの子供の表情だということがわかる。なんだか、無防備な表情を自分に見せてくれていることが無性に嬉しかった。

「別に、大したことじゃないよ。役に立てたなら、よかった」

心の底から、見栄を張っているわけでもなくそう言うことができた。七海は、少しだけ達成感や満足感というものを覚えて体がこそばゆくなった。

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｒｉｅｎｄ！！」

そうやって握っていた手を七海の背中にまわしてきた夏音に七海

の思考は停止した。
ハグ。
これは、俗に言うハグ。
「は、はぐあぅはぅぐぁーーーっ！！？」
一見、女の子にしか見えない同級生に抱きつかれている。髪から良い香りがしたとか、やわらかいとか。途切れそうになった意識の外では、黄色い声があがった気がする。
七海は、自らの生命の防衛本能によってなんとか彼の肩をつかんでどんと押し返した。
恐ろしく簡単に引きはがせた夏音は、よっぽど体重が軽いのだろう、数歩転びそうになりながら下がった。
しかし、そんなことには構っていられなかった七海はゼェゼェと肩で息をしながら虫の息だった。
「は、――」
何とか搾ったように押し出した声に、夏音は目を丸くして「は？」と聞き返した。
「ハジメテなのにぃーーっ！！！」
そう言って、七海はほうほうの体で何事かわめきながら逃げだした。　大人しい奴だと思っていたお隣の同級生の奇行に、取り残された夏音は首をかしげた。
「変な人だなー」
「夏音、今の悲鳴なに？　この世の終わりみたいな凄惨な響きだったけど」
「んー、よくわからない。夏だからじゃない？」

第十一話（前書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。

第十一話

「はい、スネアくださーい」
カン、カン、と8ビートを刻むスネアの、どこかぎこちない音が硬く響く。
「つぎーハイハットお願いします」
薄暗い体育館にはちらほらと一般生徒がいるだけで、がらんとしている。人が少ない広大なハコに響くのは、時々マイクを通したPAの人の声とドラムの音。
静寂と木霊する打楽器の間にはどこかしら緊張を孕んだ空気がぴりぴりと漂い、その作業を見守る者はそろって口をつぐんで額に流れる汗をぬぐっていた。
「ね、ねえ夏音。私の音、どこかおかしくないよな？」
夏音がステージを下りたところで、外音にじっと耳をすませていると、ベースをスタンドに置いた澪がステージを降りてきた。
「まだ、何とも言えないね。もう一度ちゃんと音聴くから。次、ベースだよ。ほらほらしっかり！」
そんな彼女の緊張をほぐすようになるべく明るく声を出すと、彼女は顔を強張らせながらも微笑もうとした。失敗したが。軽く笑って頷き返すと、夏音はステージに足を向けた。
後をついてくる澪は傍目にバレバレなくらいガチガチで先ほどから緊張を空気感染させている。

良くない傾向だ。

足がガタガタと。動悸もかなりやばい。澪が緊張に弱いことなど、今さら確認するまでもなかったが、こんなになるまでガチガチになるのを見ると、本番での演奏が不安である。
緊張は仕方がないことだし、適度な緊張は精神を冴え渡らせるこ

ともある。とはいえ、澪の縮こまり方は身体に余計な力が入ってまともな音を出せないではないかと懸念された。

とりあえず夏音ができることは本番までに彼女をなるべくリラックスさせる努力をすることだけだ。

段取りは事前に説明はした。とはいえ、全てが初めての体験に違いない。彼女達がライブを作り上げるのに必要不可欠なリハーサルの空気にびびってしまうのも無理はない話だ。

ＰＡの指示は手慣れているものだったが親切である。

今回、ＰＡに関してだけは外部の人間を呼び寄せた。ちょうど夏音が日本に来てからレコーディングスタジオで知り合った新米の斉藤という男が夏音の頼みを快く引き受けてくれたのだ。彼の経歴はスゴイ。

エンジニアを目指して音響の専門学校を出た後、すぐにそこら辺のレコード会社などに就職して下積み修行……をしないで単身で渡米。向こうのライブハウスでバンド活動をしながらバイトをして、幾つもの生の音を耳に入れて過ごした。

そのうち、運良く出遭ったハリウッドの音響関係の仕事をしている人物と懇意になり、アシスタントという名の弟子になった。弟子といっても全く仕事を回して貰えない訳でもなく、実際に向こうで仕事を任せてもらえるようにもなったところで日本に帰ってきた。

何でそんな惜しいところで、と気になった夏音が彼に尋ねると「向こうのＢ級映画の音響チームに入る機会があったんですけど……外れでした。Ｂ級のくせに気取った感じで、Ｂ級の誇りがないのか！　って感じで。腐ってもプロで、自分なんかより数倍もマシな仕事するんですが、姿勢とか、合わなくて……」と照れくさそうに語った。

その後、ツテというツテを使って今のポジションにいるらしい。

夏音は彼の姿勢を感じ取って、いたく感銘を受けた。この業界にいると、そういう熱い志を持っている人間と出逢えるのも醍醐味だ

と思った。

音響エンジニアといっても、その仕事の幅は広い。素人が想像するより、遙かに広い。彼は将来的には有名バンドやアーティストのレコーディングを担当したいと意気込んでいる。独特の訛りはあるものの、英語もばっちりなので、海外アーティストとの仕事には重宝されるだろう。

夏音はそう思っても気軽にできるさ、とは言わずにその場は黙って頷いていた。

そんな彼は、こういうライブの現場の仕事も大好きだそうだ。機材運びなどの肉体労働は疲れるが、現場だけの仕事だけは離れたくない、と。だから夏音は彼にすんなりこの話を持ちかけることができた。

いや、その話をした時に「うっそっ！　ちょ、マジでっ！　あのカノンさんが！？　ＪＫがＪＫでＪＫとＪＫによる学祭ライブ？　クソあがるわーー！！！　自分を指名してくれてありがとうございます！　仕事あっても空けていきます！」と意気込んできた。いや仕事は優先しなさいよ、と夏音は突っ込んだ。

結局、仕事と重ならなかったのは幸いだった。休日返上で来てくれただけでなく、夏音がギャラを払うというのに対し頑なに拒んで受け取ろうとしなかった。本来、金を受け取って演奏する立場の夏音からギャラを払うということに遠慮したというのもあるし、半分くらい趣味だからといった理由だ。

当日、見知らぬ男性が大量の機材を携えて現れるのを他の軽音部一同は呆然としながら受け入れるハメになった。どこからこんな人を借りてきたのか、と問いただされたが夏音は「お、親の知り合いやねん」とその場しのぎの関西弁で誤魔化した。

ステージセッティングなど絶対にできそうもない女子高生と、その気になればセッティングはできる華奢な男子一名だけでわずかな時間内に作業が終わるはずがない。

機材を運ぶ役は女手にも任せたが、細かいワイヤリングやマイキングは全て斉藤と夏音だけで行った。普段、アーティストとエンジニア。その関係の二名がこんな仕事をするはずがないので、かえって新鮮だったがタイムアップまで鬼気迫る様子で作業を進めていく二人の姿を誰もがぽかんとしながら見守っていた。

「イヤー懐かしいですねー！　学生の時、こんな風に講堂とか体育館のセッティングしていましたよー」

まあ、彼はやけに嬉しそうだったが。そう話しながら神速でケーブルを巻き上げていく姿は格好よかった。惚れ惚れするほどプロの仕事であった。

セッティングといっても、各アンプとドラムにマイクを当てる。モニターと外部スピーカーだけである。

そこまでステージの設計を終えると、後は彼女達にも出番がまわってくる。

「次、ベースお願いしまーす」

「ほら、澪の番だよ」

「は、はひゃっ！」

澪がびくっとしてストラップの位置を直した。さっきから何度目かわからないストラップ位置修正。どうも収まりが悪いらしい。どうやら彼女は寝よう寝ようと思って身体の至る所がかゆくなるタイプの人間らしい。

手元のボリュームをフルテンにした澪はオリジナル曲のフレーズをループして弾く。彼女が高出力のアンプ、またスピーカーから放たれるどでかい音に気後れしているのがわかった。どうもボリュームを出すのを惜しんでいるというか、普通に弾けば良いのにメゾピアノ。全く音にパンチがない。

ＰＡとの作業というのは、外のスピーカーの音のバランスを整えたりする。ドラム、各アンプにセットしているマイクで音を拾ってスピーカーから流す。各楽器の音を順々に合わせていく作業は、た

いていはドラム、ベース、ギター、キーボードという順になる。楽器ごとに使用するエフェクター、音量をＰＡに伝えるのが演者の役目だ。本番になってアンプからリハの三倍の音が出たらとんでもないのだ。

夏音はジェスチャーでもっと思い切り弾け、と澪に伝える。するとアンプから出てくる音が一・五倍くらいの大きさになる。斉藤が少しだけにやっとしたのが見えた。彼はしきりにステージと卓を行ったりきたりして、適当なところでＯＫの合図が出た。

今回のセットリストは異色である。ベーシストが交替して、澪から夏音へと弾き手が代わるのだ。

このたび夏音が使用するエフェクターは多くはないが、学校の講堂という特殊な環境故に、しっかりと音作りはせねばならない。次々と斉藤と掛け合って確認作業を進めていく。シールドを伸ばしてステージの下で外とのバランスを自分で見たりして相談を重ねた。

「後ろから聴いてどう？」

「いやー、結構色んなところハウっちゃってますねー。あの天井とかだよなー。あと、あのめちゃくちゃ立て付け悪そうな窓。とりあえず、めっちゃ削りまくってなんとかしてます」

「どうしようかなー。元々、バンドのために作られてないからね」

「時間かけたらどうにかなりますけど、まあそこまで支障ないです」

「そっか。あ、ちょっと全体的に中で上げるから外小さくして」

しばらくそのようなやり取りが続き、夏音はベースを置くと次にギターの番に。同じようにギターの方の確認が終わると、その後は唯、ムギ。最後にヴォーカルとコーラスといった順でリハーサルはまわっていく。

一曲目から二曲目への流れと一コーラスを確認すると、リハを終了した。

「ＯＫでーす、本番よろしくお願いしまーす！」

斎藤の言葉にメンバーはすごい勢いで頭を下げ、「よ、よろしく

お願いしまっふ！」と勢いづいた。それを見てまたもやくすりと笑った斎藤が伸びをしてＰＡ卓前の椅子にどかりと腰を下ろした。本当にお疲れ様です、と夏音は心で何度も頭を下げた。

「ふー……案外余裕あったね」

夏音が時計を確認すると、休憩時間終了まであと二十分もあった。

「そろそろ衣装着ちゃわないとなー」

「……衣装、ね。いしょう……だよね」

あの衣装を着ねばならないのか。もう避けようのない未来は目の前に。夏音は肩を落としてステージ裏に向かうのであった。

桜高祭、といえば地元では有名なお祭り行事の一つである。生徒の保護者をはじめ、地域の住民や他校の生徒までもが普段開かれることのない門を堂々とくぐることができる一大イベントといったところか。

近年、学生による文化行事への厳しい姿勢をとる保護者、各教育関係者たちが増えているせいで近辺の学校の文化祭がぎくしゃくとしている中、校風に謳っているように桜高祭は生徒の活動の自由度がかなり高い。泊まり込みも可能、火器の使用可、などと他校よりも緩い態勢である。

その代わり、生徒は自分たちの企画した出し物については企画からすべて自分たちで行わなければならない。資金繰りや、人員配備、飲食を扱うならその材料の調達ルートまでもが自分たちの手で確保しなければならない。そこには、一つの目標に対しての重い責任や物事の達成を学ぶ桜高の教育姿勢があらわれている証拠でもあった。

「つーわけで、お化け屋敷をやるわけになったのでっした！」
夏音が風邪をひいて学校を一日だけ休んでいる間に、クラスの出し物が決まっていた。お化け屋敷、企画立案はそれを告げた張本人の律。
「お化け屋敷……てなに」
ばーんと両手をひろげて開口一番にそう告げてきた律を宇宙人でも見るような目で見詰めた夏音。反応が鈍いことに首を傾げた律が「あぁー」と首肯して説明を加えた。
「知らないのかー？　日本の伝統行事だよ。教室をまるまる一つ使って肝試しをするのさー。うらめしや～、ってね！」
「いや、お化け屋敷は知ってるんだけど。何でそんなけったいなものを？」
「けったいとか平気で使う帰国子女の方がけったいだ。ていうか、定番じゃん」
定番だから、と単純な理由だが夏音は思い切りしかめっ面をした。
「面倒くさいのはいやですー」
「だーいじょうぶ！　小道具とか作ったり、みんなで作業するのとか面白いって！　きっと！」
おそらく律とは決定的な感覚のズレがあるのだろうと思った夏音はそれらしい理由を言い添える事にした。
「でも、それだと軽音部の練習だってあるのに時間をとられちゃうでしょ？」
「それもだいじょうぶ！」
「……ぺっ」
態度を揺るがせない律に夏音はついつい口でつくられた分泌液を吐きだした。
「えぇっ！　今の会話の中でそんなんさせちゃう要素が！？」
「新曲のギターソロ終わりのフィルでいまだにもたつく奴が何を自信満々に言っているんだろうと思ってね。できるようになったのか

しらー」
「う……だって、あの変拍子のところむずかしくて……」
「練習しろよ」
「夏音があんな変態な曲作ってくるから！」
「この口かーそんなことをほざくのは。口に靴下をつっこんでやろーか！？」
「ひぃーー！！」

というやり取りがつい二週間くらい前にあったのだ。
練習もしなくてはならないのに、クラスの出し物に時間をつぶされるのは歓迎できない。もちろん夏音は学校祭がどういうものか知っていた。定番だし。学園ものには欠かせない要素の一つである。
学祭が存在しない青春ものなんてないはずだ。
だが、クラス展示の作業はいつやらねばならないのか？
放課後、である。
夏音にとって放課後は何をする時間か。音楽をやる時間だ。また、お茶をして駄弁る時間。
てきとーに参加してブッチしよーと考えていたのだが。
現実はそう甘くはなかった。

「夏音くんは猫娘ねー！！」
「キャーーキャーーー」
キャーキャーという黄色い悲鳴をバックに、夏音は固まった。
「パードゥンミー？」
耳には入ったが、頭に入らない。夏音の中の夏音が神経をせき止めているに違いない。精神の安全を守るために。
「もう今さら変更は無理なの！」
「多数決だからね！」「民主主義ですもの……ふふっ」
夏音がぼんやりと学園祭早くこないかなー、などと呆けているう

ちにクラスの女子たちは秘密裏に動いていた。
お化け屋敷というのだから、脅かし役も当然ながら必要である。
その脅かし役に見事抜擢されたのはクラスのお人形さんもといマスコットにいつの間にか祀り上げられていた夏音。いらぬ鉢がまわってきた……とまでは夏音も飲み込める。そこまでは。
しかし、よりによってその役が猫娘。娘ってなんだろう。日本語の辞書をもう一度引いてみようかな、いや、やっぱありえないだろうおい、殺すぞというツッコミもなすがままに力失せて地面に墜落した。同時に、これから男としてのプライドも墜落する予定である。
目の前の瞳を輝かせた女子の壁は、暗に『てめー逆らえると思うなよ?』とプレッシャーをかけられているのだろう。あっさり従った夏音は心の中でひっそりと涙を流した。
後日、女の子用の浴衣を朱色に染め上げ、何故か裾をかなり短くされた衣装を目にした時は胃から何かがこみ上げてきそうだった。なんか、こう世紀末の大魔王的ななにかが。
まあ、衣装の完成品は割と凝った出来でさすが手芸部が在籍しているだけあった。
「違う違う！　そこはこう、いーい！？　こう、足をあげて『ニャーー』よ！」
「にゃー」
しばらく放課後にクラスの女子にそんな指導を受けることになったのだ。

かくして学校祭当日を迎える事に。
「というわけで、はいコレ。猫耳」
喜々として自分のメイクを担当している女の子が仕上げのアイテムを渡してきた。
「あ、泣いちゃだめよメイクがくずれちゃうじゃない！」
知るか、と答えたかっただって男の子だもん。

実に本番の五時間前ほどの話である。

さすがに軽音部の活動があることも承知してか、本番より前の練習には解放してくれる手筈になっているのは僥倖。

しかし与えられた役を健気に果たしていると、次の客が歩いてくる音がした。

夏音は、さて次に自分の魔の手にかかる哀れな客は誰か、と舌なめずりをした。既に割とノリノリである。しかし、彼はその人物の顔を見てぎょっとした。

何故か怖がりの澪がふらふらとお化け屋敷に入ってきたのだ。ぎょっとしたのには色んな理由があるが、第一は真っ正面から今の自分の格好を見られるという極刑にまさる事態が起こってしまうというもの。

澪はあまりクラス展示に関わっていなかったから、夏音の猫娘姿を知らない。知られたくもなかった。

彼女は明らかにビビりまくり、へっぴり腰のままのろのろと歩いてくる。その距離、五歩分ほど。

夏音は腹をくくり、澪の前に飛び出た。けたたましい妖怪の咆哮をあげながら。

「ニュィヤーーッハァーーッ！！！」

「キ、キャーッ！！！！　んむぐっ……んぅーーー！！　ニャーーー！！！」

突然目の前に現れた妖怪・猫娘が現れ、しかも割と乱暴に襲いかかってきたことで澪の恐怖メーターが瞬時に吹っ飛んだ。

「ニャーーー、見るな叫ぶな見るニ”ャー！！！！」

夏音は恐慌した澪をかついで、先に入ったカップルをひゅんっと追い抜いて出口から彼女を放り投げた。その後、猛ダッシュで元来た道を疾走する猫娘にカップルの男性の方が「キャーッ」と甲高く叫んだ。

今ので猫娘十回分は疲れた、と夏音は汗を拭った。
急にお化け屋敷の出口から飛び出てきた女子高生が白目を剥いて泡を吹きながら気を失っている光景にゴクリとツバを呑み、「オイ……やべーぜ……ココ」という噂が飛び交うように広まって大反響を呼んだ。

そんなごたごたをこなした後、夏音の役目が終わった。夏音によってがっつりハードルがあがったお化け屋敷、後任の猫娘の子は相当の苦戦を強いられたと聞く。
メイクを落としてやっと苦役から解放されたと思いきや、全員が部室に集まったところで悪夢は更新される。

「みんないるわねぇー？」
曲を二回ほど通して最終確認をしていたところ、さわ子が軽音部のドアを蹴破ってきた。
ニッコニコと。その様子が「みんなのさわ子先生よー」というオーラを全身で振りまいていて、夏音はその表情をみて、ふと悪寒が走った。すぐ後に自分の勘はそれは大したもんだったと知ることになる。
「先生ぇ、どうしたんですかー？」
鼻息荒く、尋常じゃない様子のさわ子先生に瞠目した唯が訊ねる。
「ふふーん、不本意ながらも軽音部に顧問になったことだし！　何か手伝えることとかないかなーと思ってぇー……衣装作ってきましたーっ！！」
やんややんや。まさか半分以上が脅迫によって顧問にさせたさわ子先生がよもや自分たちのためにそんな手間をかけてくれるなんて。
皆の表情が先生へ向けて尊敬を表すソレとなった。

「衣装ってどんなんですか！？」
律がまるでしっぽを振った犬のようにさわ子先生のもとへ駆け寄る。
「見て驚きなさい。コ・レー」
ぞくり。
フリッフリのロリッロリ。
あれである。今流行りのゴシックなんとかという。
夏音は目をこすって、その衣装の中に男物がないことを疑った。
「先生……その」
「なぁに、立花くん？」
「俺の、は？」
「え、これだけど」
スカートなんだけど。
「これ、男のじゃないですよね？」
「えっとね？　先生、女の子の服しかつくれなくてー、ごめんーみたいな？」
絶対、嘘である。
「スカートなんだけど。俺、この年でスカート穿かなきゃいけないんだけど。ていうか、完膚無きまでにゴスロリ？　ってやつなんだけど」
「大丈夫！　あなたに着こなせないはずないから！」
親指を立ててこちらにびしっと向けてきた顧問。あぁ、その親指を下に向けてアンタに返したい！
「拒否権は？」
「ありません（はーと）」
「うふふ、そんな～」
「じゅるり」
「もぉ～～先生とっとと消えてくださ～～い。ハートもまともに変換されないくせに」
「あらー何か言ったかしらー」

火花が散る。絶対にさわ子は夏音に恨みを持っているはずだったのだ。これは体よく仕返しできるチャンスと踏んだに違いない。

「あー……ま、まあ夏音なら、ねぇ……？」

律が同情めいた視線を送ってくるが、そう言っている本人も顔が引き攣っている。だって、とってもフリフリ。

断固拒否したいところが、目の前に自分以上に気の毒な人間がいることで心の均衡を保とうとでもしているのか。

「こんな姿が知られたら……あいつにみられたら……」

もう、二度とプロのステージには復帰できないかもしれない。さわ子先生が用意してきた衣装は、それくらいの破壊力を有していたのである。

それを着て、これから観客の前で演奏しなければならない。

本番前になると生徒もぞろぞろと体育館に入ってくるので、外に出られなくなる前に夏音は斎藤のもとへ向かった。

「あ、カノンさん。どうスか、調子は？」

「すこぶる……いいよ」

夏音に気付いた斎藤がパイポを加えながら夏音に声をかけたが、それに対する返答は実に歯切れ悪い。当然だ。

「あのね。今日、目にすることは一切他言無用だということは話したよね？」

「ええ、もちろん！　ここで聴いたり見たことはすべて秘密ですよね。わかってますよ。ギャラも弾んで、タダ同然でこんな面白そうなもの見られるならいくらでもお口にチャックしちゃいますよーぅ！」

「ホントにホントだからね」

「はいはい。スィークレットですよね！」

この男、発音が悪いのだ。

「絶対に秘密だよ」
「ひみとぅーですね」
おまけに結構バカだったりするから信用ならない。
「信用していないワケではないんだけど、念のためにね。釘をさす、ていうんだっけね」
「だーいじょうぶです！」
「よろしく頼むよ、ホントに……」
念には念をだ。言いたいことは言ったので、さっさとステージ裏に向かう。
数回ノックして、「どうぞー」という応えが返ってきた。
ステージ裏の放送設備が置いてある部屋では、すでに衣装を着込んだメンバーの姿があった。彼女たちのソレは、似合っているのかは別として可愛い仕上がりとなっている。これを拝めるお客さんは眼福ものでしょう、といったナリだ。
彼女たち、であったならば。

「コンナンデマシター」

彼女達の後、そそくさと影で着替えを済ませた夏音は生気の抜けた顔で自らの格好をさらけ出した。もうこの視線が痛い。むしろ、くせになりそう。
「似合っている、よ……ねぇ？」
ねぇー、と近所のオバチャンみたいな澪にふられたメンバーは夏音の姿に釘付けとなった。
「に、似合いすぎて逆にどんびきっていうか……」
「お人形さんみたいねー素敵ですよー」
「あぁ、ヤメテ。そんな言葉はいらない。泣きそうだから。この年になって一日何回も泣かされるの男の気持ちを考えてほしい」
男心は実に繊細なのだ。

「軽音部は全員そろってる？」
「はぁーい」
生徒会でステージ進行を担当している和がステージ裏で軽音部の面々に最終確認を促した。
「発表時間は二十分ね。機材も全部用意してあって……撤収作業はジャズ研の発表後に全員で行う、と……。あと五分で休憩が終わるわ……がんばってね」
律は部長としてその言葉を受け取り、大きく頷くと皆の方に顔を向けた。
「よーし……やるぞーー！！」
「おーーー！！！」
円陣をくみ、気合を入れる。夏音は両隣の澪とムギがわずかに震えているのを密着した肩に感じた。
夏音は頬をゆるめて皆に最後の言葉を零した。
「いっぱい、いっぱい練習したんだ。自信をもって演奏しようね。最後に、音楽を楽しむことを忘れないで」
夏音の言葉に全員が強くうなずき、ステージにあがる。
ライブの構成は、合宿で作ったオリジナル曲、ふわふわ時間。それとこれまた合宿でやったＳｍｏｋｅ　Ｏｎ　Ｔｈｅ　Ｗａｔｅｒ、最後にオリジナルのＷａｌｋｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｆａｎｃｙ　ｂｅａｒ。最初の二曲を夏音がヴォーカルを務め、次に澪がピンヴォーカルといった具合である。夏音はこのふわふわ時間という曲のヴォーカルをやる事を後悔していた。
とんでもなく小っ恥ずかしい歌詞なのだ。夏音にとって未体験ゾーン。初めて歌詞を魅せられた時は、作詞者の澪の脳内世界を垣間見てぞっとした瞬間であった。
和によると、お客さんは満員。立ち見の人までいるそうだ。
たしかに、ステージの幕の外には大勢の人間のざわめき、熱がう

ごめいている気配を感じる。クラスの人に宣伝もしたし、ポスターも作った。休憩を挟んで人気の少なかった講堂だったが、今や人で埋め尽くされているに違いない。

各自が自分の楽器をもち、スタンバイをする。

アンプから音を出し、それが外のスピーカーやモニターから流れるのを確認した。大きな音が流れるとざわめきが一瞬静まり、再び大きさを増してざわめく。

ステージ脇の和が「もう時間よ」と合図したのを見て、夏音は一度まわりを見渡す。

それぞれと頷きあってから中央のマイクの前に立った。

いざ、幕があがる。

「ワン、トゥー」

律のカウント。

唯のギブソンが若干ぎこちないリフを発射した。いや、まだ発射じゃない。装填。

澪のグリッサンドがうねる。真空管から放たれる極太の歪みが曲を押し出す。そこに重なるのはムギのハモンド・オルガンの音と夏音のギター。引き金は引かれた。

やはり稲妻のように轟く音と光をまき散らし、夏音のギターが自由に会場を駆け巡る。澪がボトムを支え、その上をひたすら驀進する。

小っ恥ずかしい歌詞をきちんとした発音でしっかりと歌い上げる。内気な女の子の胸に秘めた想い。きっとその娘は寝る前のベッドの中で相手の事を想うのだろう。

いったん曲に入り込んだら、夏音の集中力は凄かった。歌詞の内容をしっかり把握して、内容を無視しないで歌い続ける。羞恥心と

せめぎあいながら、聴衆にしっかり歌を届ける。
実はこの曲、ラップがある。おかしい。絶対、初めて耳にする人は「ん……んっ？」と二度見ならぬ二度聞きしてしまいそうな部分。
どうして合宿から本番に至るまでこの曲がこんな進化を遂げたのか。それは澪の歌詞に問題があった。澪としては、詩を書いているうちに盛り上がりすぎたせいで譜割も何も考えずに書き連ねてきたらしい。そもそも、曲に詩を乗せるのは初めての彼女はあまり意識しないで歌詞を作ってしまったそうだ。
根っから「うわーイタタ」となった律と夏音を除いたムギ、唯は詩をいたく気に入るわけだ。それは大絶賛の域で、この歌詞を削るのはもったいないと強く主張し始めた。正面切って詩を批判できない律と夏音は、しぶしぶ曲の方をどうにかする案に賛成する事になった。
で、出た結果がコレだ。ラップ。ドロップDチューニングの調弦。ディストーションとオーバードライヴを使い分けてそれぞれに特徴的に歪ませたギターとベースが曲に強烈なアクセントをもたらす。
この部分は唯一の責任として、澪に歌わせた。その間、夏音は思い切り上体を振って暴れる。
「ｈｕｗａｈｕｗａ－ｔｉｍｅ！！！　Ｙｅｅｅｅａｈｈｈｈ！！！！」
終盤になって何かがすっごく吹っ切れた夏音の叫びが体育館を埋めていく。
夏音はフィニッシュへ向かう曲の中、客の様子をじっと観察した。ステージ幕があがってからすぐに内臓が震えるくらいの爆音。客が呆気にとられて目を見開いている様子に、にやっと笑う。
これが軽音部の産声。彼女達にとって初めて作ったオリジナル曲だ。ムギが骨子をつくり、それを夏音が曲としての肉付けをした。全員でコンペしつつ、完成させていくうちに、微妙に足りない部分などを補った思い出もある。苦労した分、思い入れがある曲。
夏音は歌う。恥ずかしい歌詞にありったけのソウルをこめて、歌

った。
曲が終わり、残響が響く。音を切った後、夏音の声がヴォーカルマイクを通してしんと講堂に響いた。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」
すかさず、拍手の音が演奏者に送られた。それこそ雷のように降り注いできて、彼女達様子を伺うと、自分たちに向けられる万雷の拍手に唖然とした表情をしていた。
拍手は鳴りやまない。女子高生たちの甲高い声があちこちで上がるのを見て、夏音はにっこりと微笑んだ。
「コニチハー！！」
拍手が止んだ。
（あれ？）
クラシックの会場みたいに水を打ったような静けさ。
おかしい。何故、音がしないのだろうと夏音が首を傾げる。慌てて律の方に顔を向けた。
「おい、話が違うじゃないか！　俺がこれやったら絶対にどっかんどっかんだって！」
律を睨んで、潜めた声で彼女を責める。
「し、しーらね」
「あ、あ、後で覚えておれよ……」
怒りに方を震わせながら、アハハと取り繕った夏音が観客に向き合う。よく聞けば、「え、あの人ハーフ？」とか「日本語無理系な？」とか言われている。
（いやいや、留学生とかじゃなくて）
どんなひそひそ声もしっかり耳に入ってしまう夏音は大変気まずかった。ＰＡ卓にいる斉藤は卓に突っ伏してふるふると震えている。
夏音は彼が秘密を破った際は、六道の地獄すべてを味合わせてやろ

うと心に誓った。
「か、かんじゃいまーしたー！　軽音部です！　ヴォーカルの立花って言います！　立花！　立つ花って書いて立花！」
わずかにどよめく会場。おぉ～、と。ああ、日本の苗字だなぁ、と。
「カノンくーーん！！」
数人のクラスメートが夏音の名を呼んだ。
「へ、へへ……こいつぁどうも」
突然の事だったので、どう返してよかったか分からなかった。ステージで呼びかけられる事などしょっちゅうあったのに、プロとしての矜持はどこにぶっ飛んでしまったのかと嘆かわしかった。
「アァー、次はみんなが知ってる曲をやります。有名すぎるあの曲です」
律と目を合わせると、八分のカウントが刻まれる。二曲目はあっという間だった。放心気味だった彼女達は何回もやった曲だけに、演奏を楽しむ余裕ができたのか笑顔が見られるようになる。
中年の男性教師や父兄がやたらノリノリだったのを見て安心したが、やはり同い年の少年少女達は予想以上の反応を見せてくれなかった。
夏音は特に気にしないで、ギターをスタンドに置いた。
「チェーーーーーーーーーーーーーーーーンジッ！！！！！！！」
高らかに叫んでから澪を差し出す。
夏音の行動に澪が「はうっ」と俯き、途轍もなくのろのろとした足取りで中央のヴォーカルマイクへ向かった。
「かわいいー」
と言った声が即座に響く。それがますます彼女をアガらせてしまう事になっても、悪い気はしないだろう。
それを見送りながら素早くエフェクターを踏み、準備をする。アンプから音を出し、少しずれていた音を合わせた。
まわりに合図を送り、準備が整ったことを知らせる。

「Ｗａｌｋｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｆａｎｃｙ　ｂｅａｒ」
コーラスマイクで曲名を言ってから、夏音が腕を振り上げた。しばし空中で腕を止める。溜めを作ってまわりを見回し、覚悟はいいかと目線で問いかける。答えは確認しない。
腕は振り下ろされ、重低音からなるスラップが体育館の床をびりびりと振動させた。極限まで歪んだ邪悪な音が単体でグルーヴを作り上げていた。律のシンバルがそこに喧嘩を売るように重なる。バスドラが八分の裏で空気を打ち裂く。夏音は本当ならツインペダルを使用してほしかったのだが、今の律には無理だった。
何ともファンシーな曲のタイトルである。タイトルは全て裏切る。
クマが。
クマさんが、客を食い殺そうとでもいうかのように太い腕を振り回して暴れる様が浮かびあがる。
唯のギターは再びローチューニングに変更。何ともヘヴィネスな曲調で観客を圧倒させる曲だ。
全員が加わったところで数小節進む。ラストの小節で夏音のベースが取り残されることになる。
そこで奏でられる１フレーズ。たった１フレーズだけで曲の空気をがらりと変えてしまう。
今まで地獄の入り口から響いてきそうな恐ろしい音を客にぶつけていたのに、がらりと爽やかなパンクロックに様変わりだ。
ガールズパンク。とりあえずの方向性の一つ。
試せるものは何でも試す。このバンドの方向性がまだ定まっていないので、とりあえずここらへんから攻めるかと夏音が用意した曲である。
爽やかとは言うものの、あくまでイントロからの音のニュアンスに大きな変わりはない。
大きな大きな気まぐれグマは、自身の気まぐれで進む先の物を片

っ端からぶっ壊していく。腹の虫が悪ければ、手当たり次第に。彼は森を進む。彼の通った後はめちゃくちゃだ。

森に住む小動物達は慌てふためき、逃げ出す。クマさんはやがて森を走り抜けて川に出る。広々とした風景にすっかり機嫌が収まったクマさんはうっとりと川辺で両手で頬杖を着いて足をぱたぱたする。直後にハチに刺されて最後まで大暴れ、というストーリーを想像して作られた曲である。

そんな曲である。そこに澪の声を乗っけるのは冒険だったが、澪の声はかっちりそこにハマっていた。

二番のサビが終わり、唯のギターソロが入る。ヴィヴラートで細かく揺れる全音符で唯のギターが前に出る。何個か音外したが、客には分からない。

ソロが終わると、ばっと全員が後ろを振り向く。振り上がるスティック。ドラムを見詰めて呼吸を一つになる。

Cメロに入る前に難しい変拍子が入り、律のドラムもがっちり決まった。さらに疾走感あふれるアウトロ前の三十二分に逸れるフィル、突っ走り、ドラムロールの音がだんだんと上がってきて、ギリギリ壊れそうなところまで高まる。

全てが最高潮に昇り詰めた瞬間、音がぴたりと終わる。

無響の空間が数秒の間続いた。

それまでこの空間に大音量をもたらしていた演者たちはその余韻の中、肩で息をしながら顔を伏せていた。

響くのは生々しい息遣い。

その静寂を破ったのは一人の客の拍手。それが波のようにまわりに伝播し、だんだんと大きくなる。

今や、先ほどの音にも負けないくらいの拍手が軽音部の面々に降りかかっていた。

夏音は顔をあげた。何故か、このステージがどこか別の場所なのではないかという錯覚に陥った。隣や後ろを見たら高名のプロミュージシャンがいるのではないか、いつものステージではないか。

そんな感覚は、

「あ、ありがとーー！！」

上擦った澪の叫びで霧のように消え去った。

まわりを見渡すと、汗でぐしゃぐしゃになった顔をまっすぐにあげて誇らしげな彼女達。

夏音はそっと胸をおさえ息をつくと、ベースを置いて客にむかって手を振った。

皆がお辞儀をしたので、それに倣う。

お互いに目をやり、満足な笑みを返しあう。

この一体感。大きなエネルギーをぶつけあい、撒き散らす感覚。夏音はそれらを久しく味わっていなかった気がした。

次に控える人たちもいるので、万雷の拍手を名残惜しみながら、ステージから退散することにした。

各自が楽器を抱えてステージ脇に歩き去ろうと動いた。

全てが気持ち良く終わる。皆、そう思っていた。この後、ステージ裏で抱き合って感動を分かち合おう。皆、よくやったのだ。高揚する気持ちを弾ませながら足取り軽く、歩いたのだ。

しかし、足下はよく見なければならなかった。

一足先にステージ脇に消えようと急いだ澪が、唯のシールドに足を絡ませて前につんのめった。

「うおっ……と」

撤収しようとエフェクターを小袋にしまおうとしていた唯だったが、急にシールドがビーンとなって「ふぇ？」と間抜けな声を出す。

澪は唯のシールドを足に引っかけたまま数歩よろめいた。
当然のごとくシールドがアンプのジャックから抜け、爆発したような音が響く。
「み、澪！？」
あわてて澪のもとへかけよった夏音だが、彼女が晒している姿を見て「Ｏｈ．．．」と天を仰いだ。「もう……澪ったらド・ジなんだからー」では済まされない光景が広がっていた。
夏音はこれだけ短い裾だものね、と涙を浮かべそうになった。ここで問題である。ステージ下から上を見ただけでスカートの中身が見えそうな服装で転んだ場合、何が見えるか。
「い、イヤーーーーーー！！！！」
世紀の終わりとばかりに響いた悲鳴と共に轟いたその事件はのちに「学祭・パン見せ事件」として後の桜高軽音部に伝説として語り継がれることになる。

初めての学校祭はあっという間に過ぎていった。皆、帰りがけにクラスメート達に次々に話しかけられ大絶賛を受けた。一番嬉しかったのは七海がステージを観てくれていたことだった。どうしてか知らないが、彼は些かというか軽く見積もって過労死寸前のサラリーマンなみにげっそりしていた。
なかなか苦労人なのだろうと夏音は結論づけた。自分たちもステージの件では大分苦労をかけたので、夏音としては是非観てもらいたかった。
「観てくれたんだね！　ありがとう！！」
夏音は彼が視線を逸らしながら「み、観てたよ……その……すごかった」と言うものだから嬉しくなってしまった。顔を真っ赤にさせてよっぽど興奮したに違いない。
だから、思い切り彼に抱きついた。

「ありがとう！！　七海のおかげだよ！　これからも軽音部をよろしくね！」
「アッーーーーーー！！！！」
すると、彼は大絶叫をした後、縄抜けの術かと言うくらいの速度で夏音の拘束から逃れた。
「君はどうしてそう……っ！！　どういたしましてー！！」
と言い残して、廊下の向こうへ消えていった。仮にも生徒会役員が廊下を走るのはどうかと思った。

ひとまず全てが終わり、機材を撤収し終えてから一同は部室で一息ついた。
皆、やり遂げたという充足感に満ちたりた表情でお茶をしていた。日が傾いて、蜂蜜色の光が部室を包み込んでいる。そこに言葉はいらなかった。顔を上げれば、お互いが微笑みを交わし、頷きあう。
楽しかった。共有した感情に言葉は必要なかった。
誰もが満ち足りていた。
ただ一人をのぞいては。

部室の隅で人類初の暗雲発生機と化している秋山澪・花の十五歳。つい先ほど、大衆の面前でパンチラデビューを果たしたばかりの傷心の乙女である。
一同は再起不能となっている彼女をちらちらと見ては顔を合わせて表情を曇らせる。
無理もない。
ほぼ全校生徒の前でパンチラをかましてしまったのだ。全校生徒だけではない。父兄もいた。ロリコンもいただろう。パンチラ直後に響いたシャッター音は一生澪のトラウマになりかねない響きを持っていた。
いつまでも体育座りで肩を落とす彼女に、誰よりも長い付き合い

の律が「ここは私が」と一番槍を買って出た。
律は澪に歩み寄ると、ぽんと優しく彼女の肩に手を置いた。
「過ぎ去ったことはもーしょうがない！　元気だせよ澪ー！」
ぴくりとも動かない。屍のようだ。ひたすら呪詛のように「ぱん…ぱん…つ…」と繰り返すだけだ。
「パンチラくらい減るもんじゃないし気にしない気にしない！」
とは口が裂けても言えない夏音。間違っても口に出すことはできない。
この事は実に繊細な問題だし、男の子である夏音が口を挟むべきではないと思われた。
病的な彼女の反応を見て、律は肩をすくめて「コリャ、だめだ」と戻ってきた。
「いやー、それにしても気持ちよかったなー」
「ええ、あれだけ大きな音でライブができるなんて滅多にないもの！」
澪は放置の方向で話題を切り出した律にムギが力強くうなずいた。
「それにしても、夏音って本当に謎だよなー。ＰＡの人と知り合いだし。いつの間にかクラスで人気者だし」

尚、機材撤収は責任をもって軽音部が行った。ジャズ研の発表が終わると同時に客が捌けるのを待ってから斉藤と作業にあたった。
「いやー、なかなか良いモン見させてもらいました」
「まず、演奏の感想を言って欲しかったな」
そんな軽口を叩きながらも「三曲目、ヤバかったです。超エグかったです」と絶賛してくれた。斉藤の感想に耳をダンボにしながら傾けていた律達がおかしかった。
人気者については、夏音は自分でもよく分からない。
最初は敬遠されていたと思っていたのに、いつの間にかクラスに溶け込んでいる自分に気付いた時には驚愕したものだ。
「夏音くんヤバかったー」

「カッコよかったよー」
「あの衣装、また着てちょうだいねー」
「スカートの絶対領域に神を見た」
とクラスメートが声をかけてくれるのがこんなに嬉しいなんて。
いや、嬉しくないのもある。
これも軽音部のおかげ、だろうか。

「それにしても夏音くーん！　何でステージ降りてすぐ衣装脱いじゃうかなー。もっとあの姿の夏音くんが見たかったのにー！」
「写真撮ったんだからいいじゃんか唯さんよー」
あれ以上あの姿でいたくなかった。夏音がステージ裏にはけてからまずやりたかったのは、ショック状態の澪を何とかする事でもなく、喜びを分かち合う事でもなかった。衣装を脱ぎ棄てることだった。即行で服に手をかけた夏音をムギがものすごい剣幕で阻止するという一幕があったりした。
「本当！　あんなに似合っていたのに」
口を尖らせて不平を言うさわ子に夏音は冷たい眼差しを向けた。
「もうアナタの衣装は着ないと心に誓った」
「なーなー。もしかして今日ヴォーカルを務めた二人にはファンなんかついちゃったりしてなー！」
それは、ない。あんな姿の自分にファンがついたらなんか危機的なものを感じてしまう。主に貞操的な。
「あるかもー」
「ないない」
そう願いたい。
「まぁ、そうなったら楽しいなー」
無邪気に笑う律に笑顔で中指をたてた夏音であった。

「なんかこんなポスター見つけたんだけど」
【立花夏音ファンクラブ会員募集！！】
「オーーーマイガッ！！！　あ、あ、あ……あーーーーーっ！！」
膝から崩れ落ちた夏音はそのまましばらく動かなかったという。

エラー発生

何をしても、うんともすんとも。

全く投稿できません。次話を投稿するとセッションがタイムアウトしたとエラーメッセージが出るばかりで全く投稿できない状態です。

掲示板などに同じ質問がされておりましたが、これといった解決策は提示されておりません。

故に、次話投稿をしたいところなのですが、ままならず、困っております。

同じようなエラーが出たことがあった方、恐れ入りますが、その際の解決策を教えていただけないでしょうか。

連載中にこのようなメッセージを挟むのは不本意ですが、よろしくお願い致します。

第十二話（前書き）

長らくお待たせ致しました。いつまでたっても運営側から返答がないので、エラーの原因を自分で何とか探り当てようと頑張った結果……（後書きに続く）

第十二話

あたふたと目まぐるしかった学校祭から一週間が経った。まるでお祭りムードが抜けきらない空気のまま早くも一週間が経ち、校内に満ちていた浮き立った雰囲気も緩やかに影を潜めていった。

大きな行事が終わるのを見届けるように季節は移ろって行く。すると、ついこの間までサウナのごとく蒸していた空気もほんのり和らいだような気さえする。

ふと秋が始まり夏が終わったのことを風が含んだ金木犀の香りに知らされる。

薄?蜻蛉の姿が見られるようになるのはもう少し先だろう。それでも残暑という言葉通りに、日差しはまだ地上を攻める手を緩めてくれなかったりするのだが。最後まで仕事をきっちりこなす憎い心意気には感服だ。それでも、うすら寒くなった風と合わせてちょうど良い具合である。

校舎の中は生ぬるい空気で満たされていた。暖房の加減がまた微妙な時期なので、暑くなったり寒くなったりをくり返す中で、帰宅部の生徒がすっかり姿を消した校内はまさに生ぬるいと表現される温度を保っていた。

「まったく。誰の許可をとってんだろ」

廊下の片隅で呟かれた声は誰に言うでもなく淡い喧噪に溶けた。ひょろ長い廊下の窓に白い陽光が差し込み、影と光の規則的なコントラストをつくりだしている。

その一角に佇む人物は胸に流れた漆黒の髪を後ろに払い、不機嫌なオーラをびりびりと放っていた。入学当初より伸ばし続けた髪は肩ほどからだいぶ伸びて、背中の中程あたりで揺れている。

夏の空のような爽やかな青色の瞳、並外れて華麗な容貌は日本人には見えないのだが、燃えるような漆黒のオリエンタルな艶めきと合わさって独特な存在感を放っていた。

溜め息が一つ。

「やっぱりこういうのはまずいよね」

彼は廊下の掲示板に貼り出された一枚のポスターを前にして苛々と足踏みをした。

この立花夏音は一応、世界に知られたミュージシャンその人であって、それが何より問題なのだ。

ライブ後にできたファンクラブとやらについて、夏音は初めこそ気軽にかまえていた。B5サイズの画用紙に【会員募集中！】と文字だけ書いてあるひっそりとしたもの。発見者の律曰く、校内にぱらりと一枚だけ落ちていたらしい。掲示板等に同じものが貼られている様子はないので、首をかしげていたところだったのだが。

学校祭以来、自分のファンクラブとやらが目立った活動を見せることはないし、一時の勢いで衝動的に動いてしまっただけかもしれない。そもそも、ご本人様である自分に許可もないのは失礼な話である。

本格的にそんなものを始動させようとしているならば、憧れを抱く相手に不快な思いをさせようとは思うまい。

あくまで様子を見てやろう。そんな脳天気な気構えのまま、むしろ内心では面白がってすらいた。

その矢先のこと。

「ねーねー夏音くんこれ見てー」

夏音と律が鬼気迫る様子でスピードをやっていると、唯が部室に

駆け込んできた。
「忙しい」
それは一瞬とて目を離すことができないカードゲーム。故にたった一言、短く答えた夏音に唯が頬をふくらませた。
「せっかく夏音くんの晴れ姿を持ってきたのにー」
「はいはいあとでー」
「これ部室に貼っておこーよ」
「だから、あと……でっ！？」
あまりに唯がしつこいのでちらっと唯の持つモノに目を向けた夏音は思わず目を剥いてしまった。
「そ、そりゃなんだい……」
「夏音くん学園祭Ｖｅｒだよ！」
「ォゥ、ジーザス……」
夏音は瞳に飛び込んできた大きな文字に魂を引っこ抜かれそうになった。
【立花夏音ファンクラブ　絶賛会員募集中！】
ゴシックでロリータで、フリッフリでヒラッヒラで、それでいて夏音なポスターがあればこの世から燃やすべきだと夏音は脳裏にラッシュする走馬燈を眺めながら叫んだ。
「悪夢の再来だ。どんな陰謀がこの軽音部を襲うというのか……っ！」
椅子を蹴倒して天を仰ぐ。染みが目立つ天井がふと天使っぽい顔に見えてきた。
「よっしゃアガリーっ！」
急に手を休めた相手の隙を決して見逃さなかった律は、自分の手札を無くしたところでもはや勝負どころではない夏音に気が付いて目を瞬かせた。
「なんだ？　雨漏りでもしてんの？」
しばらく三人はそろって天井をじっと見詰めていた。

「ただのファンクラブの仕業だろ？」
何を大げさな、と足を組んで鼻をならした律。大胆なモーションで太ももが際どい部分まで露わになり、唯が慌てた。
「り、律っちゃん！　あんよがね……」
「あー悪い悪い。ワタクシったらはしたのうござんしたわー」
なんと言っても男の子の前である。男というには性別の存在感が薄い相手であるが、男には違いない。慎み深い女性にまた一歩近づいたと頷いた律だが、肝心の男がこれっぽっちも自分の太ももに関心を寄せていないことに気が付いた。
これにはさすがに乙女の矜持にちょびっと傷がつくというもの。
「おーいニイチャン。太ももだよーん」
あえてぴらっとスカートをまくってみせる律の存在などないかのようにうつむく夏音の態度は律の傷を抉った。
「私の太ももはそんなに魅力がないのかー！」
側にいた唯が思わずびくっとなった一喝をもって、やっと夏音は完全に呆けた表情を彼女に向けた。
「あぁ、ハイ。大変魅力的かと存じましゅ……」
まったく心がこもっていない賛辞に律は低い声でうなった。だが、あまりに憔悴した様子の夏音を見ているうちに気が抜けたのか、ふぅーと小さな息を吐いた。
「てゆーか、さっきから自分のポスターをじっと見て気持ち悪い系な？」
「あぁ、自分で見ていて気持ちの良いもんじゃないね」
「別にその写真自体は気持ち悪くないけどさ……」
だいぶご立腹の様子に律はどうしたものかと肩をすくめた。一方、唯はというと、ここに来てやっと自分の抱え込んできた一物のせいで夏音を落ち込ませてしまったらしいと気が付いた。

（ど、どうしよう。なんかよくわからないけど、私のせいだよね）

しかし、原因が全くわからない。わかるはずもない。無垢で真っ白かつ天然仕様の魂を持つ唯は夏音におそるおそる声をかけた。

「夏音くん！　悩みがあるなら私が聞くよ？」

「しょうぞうけん」

「え？」

「肖像権ってさ、あるよね」

「む、難しい話は抜きでお願いしやす」

唯は少し前まで持っていた人助けの心から一歩遠のいた。頭を使う悩みは役に立てそうもない。

「俺って一応……あ、これ言っちゃだめなやつだ」

今、ぼそりとトンでもないことを言われかけた気がする。唯と律、二人の第六感がそう告げていた。

「これ、どこで見つけたの？」

「こ、校内の掲示板に貼ってありました」

そう尋ねられた唯は、夏音の柔らかい口調にどこか背筋が冷えるような感覚を覚えた。

これはもしかして怒っているのかもしれない。知り合って半年ほどの付き合いだが、唯は彼が本気で怒っている場面を見たことがない。あからさまに怒りを表現しているうちは、本気で怒っているうちに含まれないのだろう。

怒鳴ったり、不機嫌になることはあるが、それは戯れの内として数えられてしまう。

そう。このように敵意を含んだ怒りを見せる夏音は初めてなのだ。

唯は「そうか」と低く呻いてから部室を出て行こうとする夏音の背中に声をかけずにはいられなかった。

「ど、どちらへ？」

「お花を摘みに……」

それ、女性用の……と何故か頭の片隅にあった豆知識が喉から出かかったが、精神で阻止した。

「いってらっしゃい……」
唯の言葉が終わらない内にバタンと扉が閉まった。
部室に残った二名の女子は思わず顔を見合わせ、何とも言えない表情の応酬を繰り返した。

冒頭に戻る。
目の前のポスターで二枚目である。掲示板は校内のいたるところに点在している。その半分は生徒が使用することができず、もう半分は生徒が使用可能ではあるものの、すでに生徒会や委員会または部活動や文化系コンクール関係の掲示物などで埋め尽くされている。
そもそも貼るのに教師の許可が必要である上、さらに大原則として掲示物の端に印鑑が押されてなくてはならない。
目の前のポスターに印鑑など、ない。つまりこのポスターはゲリラ的に貼っているということになるので、勝手にはがしてもよいということだ。
ビリッ。
派手な音がして自分の姿が二等分にされる。その実行犯はまさにポスターに写っている本人なのだが。
夏音は躊躇いなしに思い切りポスターをはがした。というよりも破いた。一つが終わると次へ。校内を練り歩き、ありとあらゆる掲示板をあたる。二つ目を破き、三つ目、四つ目へと。
「どれだけ俺のこと好きなんだっ！？」
好意を寄せてくれるという行為に対して嫌だなんて思わない。というより、自分に好意を抱いてくれる人の数は圧倒的に常人より多いだろう。仕事やプライベートあわせて。
ただ、今は世間に露出する訳にはいかないのだ。
自分が何のために普通の高校生をやっているというのだろうか。
日本のマスコミが夏音をかぎつけてどうこうすることはないと思うが、情報というのは恐ろしい。

この現代、ネット時代。自身もその恩恵にどっぷりあずかっている身としては、そこのところの恐ろしさを承知している。

誰がどこから見ているか。誰が嗅ぎつけてくるか。もしも自分の環境を乱す存在が現れたら？　日本にだってカノン・マクレーンを知っている人などいくらでもいる。

もしかして、この学校にも何人かいるかもしれない。過信ではない。夏音は自分の知名度を客観的に判断している。

現に学校祭の時はジャズ研の上級生に「あなた、どこかで見たことが……」と不審の目で見られてヒヤリとさせられた。

ともあれ、夏音の正体を知る者が軽はずみにネットに情報を流したとしよう。その情報はたちまちネットの海を漂いながら広まり、結果的に現実となって夏音に襲いかかってくる可能性が十分にあるのだ。

そんなことになったら、みんなの迷惑になってしまう。そのことが常に夏音の気がかりであった。

何より、澪以外のメンバーに自分の口以外から事実を知って欲しくないというのもある。最近になって、隠していること自体、何の意味があるのか自分でも分からなくなっていて、その問題に対して悩むこともあった。

だから、そうならないために動かなくてはならないのだ。夏音にとって、問題の芽は即刻摘むべきものであった。

「これで全部かな」

八枚。謎の執念を感じる枚数であった。これがいつから貼られていたのか分からないが、普段からぼーっと歩いているだろう唯の目にとまるくらいだ。素通りしていたとかは考えられないから、昨日から今日という可能性がある。

とりあえず、よしとしよう

ひと仕事終えたところで上機嫌になった夏音が部室に戻ると、他

の部員もそろっていた。
　神妙な顔つきで何を話しているのだろうかと近づくと、どうやら会話の中心に澪がいるらしい。
「だから！　私だってファンクラブとか認めたくないの！」
「んなこと言ったって作られたんだから仕方ないだろー？」
「私は断じて認めない！　あんなに大勢の人の前で辱めを受けたのに！」
「はずかしめって……パンチラくらいで」
「パ、パン……パン！　パ、パン！　パパンパン！」
「どもりすぎだ」
　喘ぐように過呼吸じみた音を漏らす澪は相変わらずの様子であった。しかし、顔を真っ赤にさせてわめく彼女に全員が心の内で安堵していた。
　この一週間ばかり、彼女はまさに色彩を失った廃人と化していた。その様子はホセに敗れたジョーもかくやと真っ白であり、そんな澪の姿は見るに堪えないものがあった。
　このまま部室の隅っこが定位置となるのだろうかと誰もが懸念していたが、どうやら元の調子を取り戻したようである。
「そちらさんも大変なようで」
　ふらりと現れた夏音が同情を含んだ表情で澪を気遣う。潤んだ瞳で夏音を見る澪は何かを必死に訴えようと、口をパクパクさせていた。
「Ｏｈ．．．Ｆｕｃｋｉｎｇ　ｔｉｒｅｄ！！」
　だいぶ疲弊した様子の夏音にムギが紅茶を用意した。
「よかったらハチミツもあるからどうぞ」
「ありがとう」
「と、ところで夏音くんは今まで何をやっていたの？」
　尋常でない様子で部室を出て行った夏音を見たのが最後、帰ってきた彼が何故だかひと仕事終えたぜーとばかりにスッキリしていたときて、首を傾げた。

「校内のポスター全部はがしてきたよ」
「えー！　何で!?」
「気にくわないからに決まってるじゃん」
「こんなに可愛く写ってるのに？」
夏音は、いったい何が問題なの？　と本気で聞いてくる唯に脱力しそうになった。
「いや、写り映えが気に入らないわけじゃないから！」
「私には夏音くんが怒る理由がちょっとわかんないよ」
時折、唯の相手ができる人間はよほど心の広い人間であるに違いないと思わされる。夏音は心の狭い人間ではありたくなかったので、無視したいという欲望をおさえた。
「俺が言いたいのは、筋を通せという話だよ」
「筋……？　夏音くんって変なのー」
唯に変人呼ばわりされるのは実に心外きわまりなかったが、返事をするのも億劫なのでムギに淹れてもらった紅茶を楽しむことにした。ハチミツを足してほんのり甘い紅茶が疲弊した体に優しく沁みこんでくる。
「あーー」
「オッサン外国人」
「うるさーい」
軽口を叩く律も大して気にならない。やはり癒しこそ、この軽音部の醍醐味であることは間違いない。非癒し系もいるけど、気にならない。
「夏音はどうしてそんな暢気にかまえていられるんだよ！」
突然、眦をつりあげた澪が爆発して夏音に詰め寄った。
「別にファンができるのはいいことじゃないか」
「お、お前は慣れているかも、しれないけど、私なんてただの一般ピープルなんだぞ！　私の身になって考えてみろ！」
そう言い放ってからわずかに間をあけてから「考えてみてくださいよ……」とぼそりと言い改めた。怒りをぶつけられる根拠がまっ

たく思い当たらない夏音であったが、テーブルに肘をついて気怠そうに澪を見やる。
「とは言っても、高校生のファンクラブなんてどこにでもあるものでしょ？　せいぜい取り囲んでキャーキャー言ったりとか」
「ひ、ひいーおぞましいっ！」
「裏で隠し撮り写真の卸売りが行われたり」
「か、隠し撮り？」
盗撮とも言う。
「澪ちゃんグッズが裏で流通するくらいだろ？」
「いやーーーっ！！！」
澪は己の身体を抱きかかえるようにして叫んだ。魂の底から飛び出たような悲鳴だ。
「ま、冗談だよ」
「やりすぎだぞ夏音」
澪の怯えように見かねた律が夏音を諫めるが。
「律には言われたくない」
「んなっ！」
「そもそも高校のファンクラブなんて創るやつらの自己満足から始まるものでしょ？　ファンである事とファンクラブを創ったり、所属することは全く別の目的でしょ」
「でも、その人のことを応援したいって思うから創るんじゃないの？」
「それもあるさ。でも、応援するならもっと別の方法があるはずだよ。結局は、シンボルを持ちたいんだよ。自分とのつながりをシンボルにしたい、ってことだろうよ」
「今日の夏音くん難しいことばかり言ってる」
しょぼんと気落ちした唯はずずーっと茶をすする。
「まあ応援される側としても不快には思わないけどさ。自分の味方です、って形にして示してくれるわけだから。ただ、お互いが認め合うことから始めなくてはならないってことだよ」

「つまり、こういうことだな？　ファンクラブ認めてやるから入会費などは……」
「まったくもって違う。もう喋りなさんな」
軽音部の長がまともな言葉を発することはないのだろうか。

どうせやるなら、お互い嫌な思いをしないでおこーねということである。やはり高校生になっても、むしろ高校生という年齢だからこそ、物事の道理がわかっていないのかもしれない。
道理とまではいかない。常識の度合いである。
想像力が足りないから、何をしたらこういう問題が起こるかもしれないという事まで考えが及ばない。
現に、よかれと思って作ったのであろうポスターも夏音の気に障ってしまった。おそらくこの件で動いている人は夢中になっていることだろう。
「ガキだね……」
ふいに呟いた一言に部室がしんとなる。
「ず、随分と辛口なんだな」
律が心なしか引き気味に反応した。それに無言でうなずいた三人も夏音の態度に違和感を得た。
「あら、やだ」
「あら、やだじゃない！」
「まー、迷惑かけないでやってくれるならかまわないんだけどねー。それにまあ、ポスターも剥がしたことだし大丈夫でしょう」
夏音が表情を緩めたことで、部室の空気もいつものほんわかなものへと戻った。

その翌々日。
「ふえてるー」
ぞっと背筋に寒々しいナニかが通り抜けた。得体の知れない戦慄が夏音を突き動かし、行動するまでに秒とかからなかった。昇降口

を上がって教室に向かうまで、たったそれだけの距離で二枚のポスターが掲示物に重ねて貼られていた。
合唱部の参加するイベントの告知ポスターの上に見たくもない自分の女装姿がでかでかと貼られているのを見て、肝が冷えるという言葉の意味を知る。
というより、合唱部に申し訳ない。
かろうじて悲鳴を抑えて、言うまでもなく発見したポスターは剥がした。この分だと他も見て廻った方が良さそうだと校内を走り回ったが、案の定の結果であった。
昨日まで無かったポスターがあちこちに掲示されているのだ。どれも無駄な存在感を放っており、羞恥に死にたくなった。
というより何枚刷ってあるのだ。
犯人の異常性が分かると、さすがに自分の手に余ると考えた夏音は、放課後にさわ子に相談することにした。

「ストーカーに狙われて、貞操の危機を感じてるって？」
夏音が一応あれでも教師だから、と頼りにした相手は自分の話をずいぶんと歪曲な解釈をしたあげく、とんでもねーまとめ方をしやがった。
向かいに座る社会科教師がコーヒーを噴き出したのを視界の隅で確認しつつ、夏音は大まじめに頷いた。
「超極端に突き詰めていくと、そうかも。いや、それは言い過ぎだとしてもちょっと行動に狂気じみたところを感じませんか」
「んー。そもそも、その子のやっている事に認めるべき点が一つもないのだけど」
「まったくです。俺としては、向こうから話に来てくれるだけでいいのに。よっぽど馬鹿なんだか、事をこじらせやがって……ってところです」
「あなたさえ構わないなら、職員会議に通すけど……さすがに、ね

？」

「そうなると、俺のファンクラブ云々が赤裸々に……遠慮します」

「そうよねー。でも、このまま放置するのもダメね。許可なしに掲示物を貼ることも、個人を担ぎ上げるような団体を創るのも」

「つまり、ファンクラブ反対？」

「教師としては」

「個人的には？」

「面白そうじゃないー。最近、そういうのと離れちゃったから懐かしいわー」

彼女は高校生の頃、ここいら一帯で有名なヘビメタバンドをやっていた。最終的に信者を呼び寄せるレベルには成長できた彼女のバンドの事だ。ファンクラブとのいざいこざやりとり等もあったのだろう。規模が違うが。

相談相手を間違えたかもしれないと思い始めたが、さわ子の言葉を聞いてから少し思うところがあった。

やっぱり常識を持って行動しない人は、恐ろしい。けど、この場合はよくよく考えるとそういうサイコちっくなものとは違う気もする。

幼稚なのだ。渦中のポスターのレイアウト、文章に至るまで洗練された出来とは言い難い。本当に何も考えていないのではないだろうか。

「つまり、底抜けの馬鹿か……」

「あ、え、いま先生に向かって……えっ……？」

「あ、違います。そうじゃなくて……やっぱりいいです。自分で解決しますから。お時間とらせてすいませんでした」

水をぶっかけられたハムスターみたいな表情で目を瞬かせているさわ子を放って職員室を出ると部室へ向かった。ダムダムと足を踏みならして階段を上り、乱暴に部室の扉を開けた。

「ん？」

普段なら誰かしらの声で楽しげな空気に満ちているはずの軽音部

に不穏な気配を感じた。戸惑い、本来は陽気な唯や律の困惑を伝える息づかい。異常に耳が良い夏音は瞬時に異常事態だと察知した。

なんか、いた。

「へーへー！　軽音部ってこんな風にお茶とか出るんですねー。想像と違ってびっくり素敵ですー！」

明らかに軽音部員ではない少女。

夏音の立つ位置からは後ろ姿しか確認できないが、少し不自然なくらいに明るい茶髪がぽんぽんと揺れていて、その形状は何というか特殊であった。

（そうだ、まどろみの剣だ。ドラクエで一瞬だけ使ってみたあの剣に似ている）

人によってはチョココロネ、クロワッサンと例えるかもしれない髪型は見事な縦カール。素晴らしきカール大帝。二次元でのみと思っていた髪型を現実に見て、夏音は息を呑んだ。

背後に現れた夏音に気づいていないのか、彼女は自分の言いたいことを自由に喋り通し続けていた。

やがて他の者の視線の先に気付いて振り返り、かん高い悲鳴じみた声をあげた。

「キャ～～～カノンさま！！」

「……さま！？」

ぎょっとして眼を見開いた夏音が説明を求める目線を仲間達に送る。全員が悲哀を帯びた眼を合わせてくれることはなかった。

夏音は心臓がばくばくと早まるのをおさえ、目の前の少女を眺め

てみた。髪型こそ特殊だが、いたって普通の子のようだと判断した。むしろ普通より可愛い部類に入る。しかし第一段階の印象は束の間のうちにぶっ壊されることになる。

「は、初めまして！　あたし堂島めぐみって言います！　あの……立花夏音ファンクラブ会長をやらせてもらっています！！」

一拍遅れて目眩が襲った。足下から崩れ落ちそうになるのをこらえ、額を抑えながらその少女――堂島めぐみとやらを睨む。

「何の冗談だこれは……」

「あの、あたし！　挨拶しなくちゃって！」

憧れの人を目の前にしてあがっているらしく、本来の快活な性格はナリをひそめているようだ。それでもこちらが遠慮してしまうくらいに声がでかい。

彼女にとってそれが自然なのだろうが、いつの間にかペースを握られてしまいそうなタイプである。

「友達に言われたんです。ファンクラブを創るって本人に挨拶もしないで勝手にやるのはよくないって」

夏音はその言葉にほう、と目を瞠った。案外、まともな交友関係に恵まれているらしい。自分の予想した通り、本当に何も考えていなかっただけなのかもしれない。友人の忠告に素直に耳を傾けるあたりも悪い印象は感じられない。

焦るあまり、少し大人げないことを考えていたかなと反省するにまで至った。

「あたし！　いっつも勢いだけで行動しちゃうからこんなのばかりで！　一昨日もその勢いからポスター作ったんですけど、誰かに剥がされちゃって……ひどいですよね。人がせっかく一生懸命作ったものを踏みにじるなんて……っ！！」

「ん？」

何が何だというのだ。思考が、その先にある面倒事を察知して早々に匙を投げかけた。いや、待てと強引に事態の理解に頭をめぐらす。

「夏音さまのベストショットを深夜かけて選んだんですよ。用紙だってあのサイズだと専用のプリンターしか刷れないし、遠くの専門店に行かないといけないのに。これって誰かの陰謀だと思うんですよね。きっとカノンさまの美しさ、可憐で、凛然とした佇まいに嫉妬した輩がいるんです！」

おそらくこの場の誰に助けを求めても、無駄だろう。こうしている間もノンストップで言葉を連射している堂島めぐみの勢いにすっかり萎縮してしまっている始末だ。

夏音はふっと嘆息すると、両の手を思い切り広げた。

パンッ！

と乾いた音が部室に響く。すると今まで矢継ぎ早どころかサブマシンガン並の速度で口を動かしていた存在も思わず口を閉ざす。

「堂島さんって言ったかな？」

「はい！　めぐみって呼んでください！」

「堂島めぐみさん」

「めぐみです！」

「ｓｈｉｔ．めぐみさんとやら。そのポスターを勝手に貼るのもいけないことだって知ってる？」

「え、そうなんですか？」

心の奥底から不思議に思っているのが表情に出ている。

「うん。生徒が何か掲示物を貼りたい時は先生の許可が必要なんだ。生徒手帳にも書いてあるし、考えたらわかるはずだけど」

「で、でも誰にも迷惑かけていないので大丈夫かなって」

「そう？　他の部活動の掲示物の上に重ねて貼ってあるのもあったけど」

「そ、それは悪いとは思いましたけど急いでいたし……それにずっと掲示してたんだからもういいと思いませんか？」

夏音の限界を超えてしまった。異文化コミュニケーションの時代とはいえ、相手の言っていることは欠片も理解できないのは問題である。

「君の言うことは何一つ共感できないし、道理を知らない子供のわがままにしか聞こえないよ。というより、高校一年生にもなって自分がやったこともわからないというのか？」

「え……あ、二年ですけど……へっ？」

「ファンクラブについては、こんな俺で良いなら好きにやってくれと言うつもりだったんだ。君が俺に一言でも許可をもらいに来たらね。あまり派手にやってもらうのも困るし、外部へ情報が漏れるようなことは一切ないように厳重な体制を敷くこと。俺の邪魔にならない程度にやって欲しいという二つの事を守ってもらおうとな。けれど君ときたら、俺にリスペクトを向けると公言しながら失礼にも程があることの連続じゃないか。ちなみにポスターを剥がしたのは全部俺だよ」

夏音の怒濤の勢いの説教に目を白黒させて唖然と聞いていた堂島めぐみであったが、最後の一言に大きく反応した。

「何でそんなことしたんですか？」

「教えてあげよう。自分の写真を引き延ばしたものを勝手にばらまかれて嬉しい人なんていないんだよ」

しかも本人の黒歴史ど真ん中の代物だ。何の罰ゲームだ。

「そんな……あたし……夏音さんのために……」

「それは俺のためじゃないよね。君のためだ。君が君自身の仲間を増やすために勝手にやっただけだ」

冷ややかに切り捨てる夏音の言葉は目の前の少女には辛いものとなるだろう。しかし、彼はあえて厳しく言わないとこの少女が学ぶことはないと考えたからこそ、冷淡な物言いになってしまったのだ。

とは言うものの、やっぱり女の子に厳しくあたるのは心に悪い。堂島めぐみの肩が細かく震えだし、しゃくりあげるような音が漏れる。どんどん大きくなる前兆に今すぐ回れ右して部室を出て行きたくなった夏音であった。

「う、うぇ……そんなぁ……」

くるぞくるぞ。
大噴火の予兆。その場の流れをじっと固唾を呑んで見守っていた女性陣もはぅっと息を詰めた。心なしか夏音に対する非難の視線が混じっていた。
「そんなぁ……そんな風に厳しくしかってもらうの初めてです！」
おや？
堂島めぐみは真面目な顔で厳かに言った。
「あたし一人っ子です」
「そ、そうなんだ」
「両親はいつもあたしのことしからないんです。かといって特別わがままっ子に育ったつもりはないんですが、納得いかないじゃないですか……ちゃんとあたしのこと見てくれてるのかなって。愛してくれるのかなって」
完全に自分の世界に旅立った者の目だ。秋葉原とか中野なんとかロードでよく見る目だ。あまりに心配と不安に駆られた夏音は思わず澪に目線でＳＯＳを出した。
（おいおい、どうするよコレ……予想外の展開でぶったまげたよ）
救いを求める視線は容赦なく澪を捉えていた。
（わ、私に何か求められても困る！）
引きつった顔で、こちらも眼で言い返してきた。すると他の面子もそれに参戦する。
（夏音が起こした事態なんだから、自分で何とかしろ！）
（ふざけんな不本意にもほどがあるだろ！　それにずっと高みの見物きめこんでたくせに！）
（とりあえず落ち着かせてみてはどーでしょうか？）
（ああ、そうだな。よし、唯やれ）
（なんで私っ！？　おそれおおい任務につき、私には身に余ります！）
（そうか……やれ）

（いやだよー。なんかこの子怖いもんっ）
（そこは天然系の魅力で何とか、さ）
（ひどいよ律っちゃん！）
（ひどくウィンクが似合わないな律さん）
（うるさい。ウィンクが外人だけのものと思うな！）
（とにかく！）
（やっぱり俺が何とかする感じ？）

眼と眼で器用にも悲鳴をまじえた会話を交わしていた結論として、やはり夏音が犠牲になることになった。留まることを知らずに喋り続けていた堂島めぐみに向き合った。
「だから夏音さまに言われる一言は純金にも代え難い価値があるのです！」
「ヨシわかったよめぐみさん！」
「本当ですか！？」
「あぁ何にもわからないけど、とりあえず落ち着こう。確かに俺が厳しいことを言うのは君のためでもあるよ。あるけど……」
「じゃあ、『お姉様』って呼んでもいいんですね！？」
「Ｈｏｌｙ　ｓｈｉｔ…」
事態に頭がついていかなくなった。
「今のは、許可をもらったってことでいいんですよね？」
「え、いや何のことを言っているのかな」
「あたし、しかってくれる人が欲しかったんです！　だからお姉様となってあたしをしかってくださいっ！」
眼の中に宝石のようなきらめきが踊っている堂島めぐみは夏音の手をとって、胸の前まで掲げた。
その手をばしっとふりほどき、
「ふざけんなこの縦ロール女が！　そのクロワッサン丸ごと切って校長像に寄贈してやろうか！？」
とは言えず。

エマージェンシーモードによって魂が肉体から緊急退避している夏音は既に目の前の少女を意識から半分ほど追い出している。

まさに危機回避本能の成せる奇跡の技には違いないが、残してきた本体は少女の言うことに差し当たりない程度にうなずくという悲劇のオプション付きであった。

ＹＵＲＩ。

これはユリ。

リアルで百合だけはなーと日頃から考えていた夏音。この場合、男と女でノーマルなカップリングであるが、何ともアブノーマルな響きとなって襲ってきたものだからたまったものじゃない。

そもそも、自分は男である。

「ポスターについては本当にごめんなさい！　あたし、もう二度と勝手なことしません！　だからファンクラブについて認めてもらいたいです」

やっとのこと手を離したと思いきや、がばっと頭を下げ始めたクロワッサンを眺めながら、こくりとうなずく夏音。

「それで、ファンクラブの方向性もお姉様に情け容赦のないお仕置きや説教をいただけるオプション付きってありですか？」

「それは……気が向いたら」

半分以下の意識で曖昧な肯定をする。

「きゃーありがとうございます！　あたし、さっき言っていたこともきちんと守ります！　勝手なことはしない！　ファンクラブはあくまで秘密裏に活動すること！　秘密厳守！　あたし全部守れますよー！　むしろ、お姉様の魅力が広まりすぎるのもアレなので、少数でいこっかなーなんて」

「そう……」

「ポスターは全部剥がしたんですよね？　まだ剥がしていないのがあったら自己回収しておきますので！」

「そう……」

「これでお姉様公認ってことですよね！　燃えてきたー！　あたし、精一杯お姉様を応援させていただきます！　立花夏音様のファン一号として！」

実際に君は一号どころか0を幾つも足した順位だよ、とも言えず。

「Ｓｏ・・・」

最後にほぼ抱きつくようなくらい接近してきていた堂島めぐみは万事充ち満ちたような表情で爽やかであった。

「では、失礼しますね！　今日はお邪魔してすいませんでした！　軽音部の皆さんのことも応援していますから！　それでは！」

重たそうな巻き髪を振りながら歩く彼女は部室を出る時に再度礼をして姿を消した。

竜巻が去った後はこんな空気になるのだろうか。誰も彼もが心神喪失していた。虚ろな瞳を抱え、その視線を虚空にさまよわせながら椅子に崩れ落ちていた。

なかでも一番ひどいのが夏音であったことは言うまでもない。

何かひどく恐ろしいものでも見てしまった五歳児のような表情で凍り付いていた夏音は、長い時間をかけて魂が完全に身体に戻ったのを感じた。

周りを見ると、徐々にフリーズから解けて動き出す部員たちの姿があった。

「夏音くん男の子なのに、何でお姉様なのかなー？」

唯、そこじゃない。決してそこじゃない。夏音以外の全員が思い、おそるおそる渦中の人物の方を向く。

唯の一言で決定的に我に返った彼は、むくりと立ち上がりふらふらと数歩よろめき……崩れ落ちた。

「う、うわーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

その後、錯乱状態に陥って叫ぶ夏音を慰めるために軽音部一同は

必死になった。終いにはしなしなと倒れ込む仕草に、確かに男にはみえねーわと共通の感想を抱いたことは別の話である。

とにかく。かろうじてＰＴＳＤだけは逃れた夏音は、一年の廊下で堂島めぐみの姿を見かけるたびに怯えきって逃げるようになった。彼に対してああやって公言した以上、きちんと目立った行動を控えているようであったが、人の眼がない場所にフィールドが移された途端、運動部顔負けの脚力で夏音に追いつくというスペックの高さを披露した。

立花夏音のファンクラブはそこそこの会員数を得て、水面下で活動中であるらしい。

時折、定期報告にふらりと現れる堂島めぐみの報告内容も恐ろしくて夏音は耳を塞いでいる。

日本に来て、新たなトラウマを発掘した夏音はしばらく百合っぽい表現を出す作品に拒絶反応を示すようになった。

ちなみに秋山澪ファンクラブ会長は事の次第をどこからか聞きつけたのか、後日、澪に便箋でファンクラブ活動の容認を求める至極丁寧な文書を提出してきたという。

第十二話（後書き）

文中の「しかる」という漢字が問題でした。あれ、常用漢字じゃないらしいです。環境依存文字っていうんですかね。この漢字が入っているせいでエラーになっていたようです。

・それを探るためにワードの文章をちょっとずつペースト（四行とかレベルで）

・エラーが出た時点でその文章の問題点を調べる。

という作業でした。わりと後半で見つかったので、辛かったです。それはそうと。

ＰＶ：４８９９０

ユニーク：３６５５

お気に入り：６４件。

あと一週間もしないうちに投稿開始から一ヶ月が経ちます。皆様、本当にありがとうございました。

面白くない、くそ、でも何でもいいんで感想をいただけたら幸いです。批評コメ大歓迎ですっ！

第十三話

何事も中庸が大切である。辛すぎても甘すぎてもダメ。賢すぎても愚かすぎてもダメ。

そして、暑すぎず寒すぎない季節。

それは秋。

日本の四季は実に色彩豊かだ。夏音は通学途中に通りかかるイチョウ並木が紅く燃えている様子を見てそう思った。

聞くところによるとこのイチョウはもう少しすると黄色くなり、やがて銀杏拾いが季節の風物詩となるそうだ。四季の中にも確かな変化がある。そして四季ごとにまるまる表情が変わる魅力がこの国にはある。

まだまだ奥が深いな、と感心するのはこういう瞬間だ。

思えば夏音が日本に来てからこの方、季節の味わいを感じる暇などなかった。いや、暇はあったにせよ心の余裕がなかったというべきだが。

夏音にとって引き籠もり期間と言えば基本的に家にいることを指していたものの、もちろん外出することも度々あった。とはいえ、それでもすっかり腰が重くなってしまった彼は落ち着いた気候を狙って外出することが多く、少しでも暑かったり寒かったりした場合は家を出ない。まるでハムスターのようなものぐさを身につけて、すっかりアウトドアへの憧憬を失っていた。

だが、それも去年までのこと。

ふと空を見上げる。空が高い。中国のことわざに、天高く馬肥ゆる秋というのがあるらしい。夏音に詳しい意味は分からないが、食べ物がおいしいこの季節に馬が肥るということだろうか。

馬も肥るのだから、人間だって体重が増えてもおかしくはない。
「だから、気にしすぎだよねー体重なんて」
世の女性を敵にまわす発言である。

「秋といえば食欲の秋って言うよねー。最近、食べ物が美味しすぎて気が付いたら食べてばっかりだよー」
本日のお茶菓子である紫いものタルトをつつきながら唯がふとそんなことを口にした。相も変わらず気の抜けた顔である。常に幸せそうだなーと感心しながら夏音もそれに同意して頷いた。
「日本の秋の味覚はどれも絶品だよね。俺もスーパーに出かける度に秋の食材に負けちゃってさ。作りたいものばっかりだよ」
あーわかるなそれー、と律も会話に加わり、一気にグルメトークに華が咲いた。それはこの時期の新米が楽しみだとか、その際の水分量の調整が～などという通の議題にまでのぼった。
一同がキャイキャイと玄人じみた食の話で盛り上がる中、ふと律は先ほどからまったく会話に加わる素振りを見せない澪が気になった。こと食べ物の話題が出ているというのに、強張った面持ちで何かに堪えるようにじっとしている幼なじみの姿は律にとって違和感しかない。いつもの調子でからかってみた。
「澪なんてすぐ誘惑に負けそうだよなー。毎年この時期に体重が体重が～って泣いてさー」
なんだかその姿がすごく想像しやすかったのでくすくすと笑い合う一同は、澪の眼がだんだんと昏い影を帯びていく様子をとらえることができなかった。
「おいおい、どうしたんだよ澪？　さっきから黙っちゃってさ。あれ……タルトも手つけてないじゃん？」
澪の様子を不思議に思った夏音がしごく軽い気持ちでそんな言葉を口にした途端。
ガタンッを椅子を蹴倒して澪が立ち上がった。

「うるっさーーーーいっ！　私の気持ちがわかってたまるか！！」
あまりの剣幕に誰もが顔をひきつらせて口を閉ざした。唯など唖然として口を半開きのまま固まってしまっている。
「私だって気にしてるんだよ……ついつい口にする食べ物のカロリーとか、その代わりに夕飯を減らしてみたりとか……それなのに人が食いしん坊の卑しん坊みたいに！！」
「い、いや誰も澪をそんな風に言ったりしてない」
「言っただろー！？」
「律さん、あなたのせいだ」
「なっ！　私が何を言ったって！？」
澪の剣幕に怖れをなした夏音が間髪いれずに律を糾弾する。どちらにつくべきかを一瞬で判断できるのは夏音的に世渡り術だった。しかし、何の身に覚えのない問責に律は慌てるしかなかった。何たって幼なじみがキレてる理由が意味不明だ。
「焼き芋。ブドウ、柿、カボチャ系、さんま、栗、キノコーーーアハハハハッ！！？」
ありのままの欲望を述懐する澪は涙を浮かべて立ち上がった。と思いきや、ざざっと床に崩れ落ちた。
「卑しい私が悪いんですー！！」
うわーーと泣き崩れる澪はあまりに痛々しかった。
誰もが視線を交わし、そらす。
夏音も例外ではなく、なんといった言葉を彼女にかけてやればいいか思い当たらなかった。それにいくら探したところで、今の不安定な澪には逆効果な気もしたのである。

反動、というものだろうか。酷暑が続いた夏は人間の体力を削り、余分なお肉さえも削り取ってしまう。事実、夏に痩せてしまう者は多く、澪も例外ではなかったのかもしれない。
普段、ダイエットを意識している故にアイスや冷たい物の魅力を

はねのけ、食べることを躊躇する。
　すると、必要な栄養がまわらずにこじれにこじれて夏バテを起こしたりする。そして何とか季節を乗り越え、秋を過ぎるあたりにはいつの間にか帳尻があっていたりするのだ。
　そういえば夏の終わりごろに澪が体調を壊していたのを思い出す。
　夏休みの初めに会った時と比べ、かなりやせ細っていて心配した記憶があるが、なるほど現在の澪はその時の記憶の彼女よりもいくらかふっくらとして――否、ふくよか感が増している。
「何をそんなに気にしているか知らないけど、ガリガリに痩せているよりかは健康的でいいと思うけどな」
　統計だと多くの男はふっくらめの女が好きという。
　夏音がふと漏らしてしまった一言に澪を除く女子がまずい！　という表情をした。
　遅かった。
　澪はゆったりと立ち上がる。怨嗟のオーラが彼女の周りを渦巻いており、その姿は誰が見ても日本のホラーの1シーンであった。
「Oh，my…」
　その異様な威圧感に夏音も一歩下がる。正確には椅子に座っていたので、気持ち的に下がる。
「ニクイ」
「み、澪？」
「憎い！　そのスタイルが憎い！　贅肉ひとつないし！　贅肉に悩まされたことなんて一度もありませんってか？　その余裕の表情が憎い！　憎さあまってかわいさ百倍！」
　褒め言葉である。それ、逆だよ……とは誰も言えず。
　夏音に詰め寄った澪は、ガシィっと夏音の顔をつかむ。そのまま握りつぶすのではないかというくらい力をこめ「いだィ！」それから憎しみ対象の身体の検分に移る。
「へ、へイ！！　何をするっ！？」

「み、澪ちゃんそれはまずいわ！」
ムギが悲鳴まじりに叫ぶが、何となく嬉しそう。
制服のボタンは神速で外され、気づけば半裸人になりかけていた。
「男のくせにこの身体……うらやましいっ！　いや、うらめしい！」
血を吐くような叫喚。実に自分の気持ちに正直な告白であった。
確かに夏音の身体に贅肉らしきものは見当たらない。ガリではないのに、スラっとしてまるで芍薬の花のよう。
「それ以上は洒落にならないって！」
女子生徒にひん剥かれそうな男。なんて凄絶な光景だろうか。夏音は振り払おうとするが、澪の力が強すぎてなかなか実行できないでいた。
底力というやつなのだろうが、使う場所を選ぶべきだと夏音は思った。
「澪ちゃんっ！　私は澪ちゃんの気持ちわかるよ！」
間に割り込んできた声の主はムギだった。夏音は、その姿が暴走する王蟲を止めるナウシカのごとく。何にせよ助かったと安堵した。
「私も……〇キロ……増えたから」
本人の名誉のために伏せ字でお送りした数値に澪の瞳が大きく開かれる。夏音は、ポカン顔で「たったそれっぽっちの数値の変動」だけに女子は命をかけるのかとガチ驚愕。なんにせよ自分の被害と加減しても納得できない。
「ムギも……？」
「澪ちゃんも辛いのはわかるわ。けど、夏音くんを私たちのエゴに巻き込んだらいけないと思うの」
「うん……うん……」
何故だかムギに後光が差している気がした。慈愛に満ちた彼女の言葉に、夏音を掴み挙げている腕の力が抜けていく。
「まるで犯罪者を説得するネゴシエイターのようだ」
と、もちろん心にだけ思った夏音は解放された途端、澪の魔の手

から抜け出した。
はだけた服を直しつつ、しっかり距離をとってその後のムギと彼女の会話を聞いていた。
勝手に二人だけで感動しているが、要約すると傷の舐めあいだ。
「ていうか、そんなに気になるなら運動でもすればいいんじゃないか？」
食べて動く。そんな簡単なサイクルで体重などいくらでも調整できるではないか。自分がそんな風にして生きてきたので何の迷いもなくそう言い放った夏音に二対の視線が突き刺さった。
「それができていたらこんなに悩むと思って？」
ムギの涼やかな微笑の先に般若の面を見た気がした。
「これだから何の苦労もしていない奴は……」
先程とは一転して思い切りこちらを見下し始めた態度をとる澪。
夏音は驚いた。
情緒不安定にも程がある。
「そんな訳で女性の敵ですよ？」
「その通りだ」
なんと、夏音はたったこれだけのやり取りを経て、女性の敵に認定されてしまった。
「これ完全にあなた方のエゴに巻き込まれてるよね」
「周りにいる人を巻き込むもやむなし、それが私のエゴです」
「エゴとか言ったら格好がつくと思うなよ」
「それにしても夏音くんはデリカシーがなさすぎよ」
「それは……女心に疎いっていうのは言い訳だけどさ。そこまで怒ることじゃないでしょう？」
夏音としても自分が責められるいわれはない。ムキになるのも大人げないと思い、理性的にもっていこうとしたのだが。
「はぁ～～」
と対する二名が同時に数年分溜め込んでいたのではないかというくらい重い溜め息をつかれた。タイミングもぴったりシンクロ。

「いつか刺されるといい」
「言うに事欠いてひどくない！？」
「私たちは1キロの目盛りに左右されながら生きているのよ。少しでも気を抜いたら大事件なのよ。身体中の脂肪が反乱を起こすの」
ひどい圧政でもしいているのだろうか。
「その割には毎日お菓子食べてんじゃ……」
「ムギの持ってくるお菓子はきちんとカロリー抑えめのものを選んでいるんだ」
「そうだったの？」
どの辺がどう抑えられているのだろうと首をひねった。前に砂糖のかたまりみたいなのを出されたこともある。
「え、ええ……も、もちろん低カロリーを基準に選んでおりますとも！」
「なんかどもってない？」
「とにかく！　夏音くんは今後の発言に気を付けるように！」
指をつきつけられるのは久しぶりである。何かさらっと誤魔化された感がしないでもないが、やはり反論しても意味がないと悟った夏音は大人しく引き下がった。
「わかったよ。気を付けますよ」
「わ、わかればいいのよ？」
一件落着、誰もがほっとした瞬間であった。
口は災いの元、というがまさにその通りだと夏音は痛感した。
しかし、口を開かずとも災いが降りかかることもあるのが人生である。
その場合はどうしろと？　ただ災いが通り過ぎるのをじっとこらえて待つしかないのだろうか。

どうも腑に落ちない。そんな面持ちの者が三名ほどお互いの反応を窺うように息を詰めていた。

果たして誰が自分たちの胸の奥につかえる疑問を口にするだろうか。ただの考えすぎというには同じことが一週間続くとそう楽観視できない。

そもそも、そこまで深刻な問題でもないのだが。こういう時、たいてい夏音がその役目を引き受けるのが常であった。この場合も例外ではなく、彼がふぅと吐息をもらしてから何気ない口調で口を開いた。

「最近なんか和菓子が多いよねー？」

ぴく、と律の眉がはねる。しかしそんな反応などなかったように笑顔で返す。

「んー、たしかに。嫌いじゃないけどこればかりだとなー」

「和菓子もいいけど、洋菓子もねー」

「たまには生クリームとか、ねえ？　夏音しゃん？」

「そうそう。フルーツが盛り沢山のプディングとか、ねえ？　律しゃん？」

「フィナンシェとかもいいわねー」

うふふ、と女子力を使用した会話。徐々に出力を上げていく二人。

一人は明確に野郎だが。

そこにずずっと渋茶をすすっていた唯が力無く呟いた。

「和菓子あきたー」

あまりに率直すぎるが、まさに自分たちの心情を代弁する一言に夏音と律は口をつぐんだ。

そう。飽きたのだ。

この飽食の時代。舌が肥えてしまった現役高校生たちのスイーツ舌は常にフレッシュなサイクルを求めているのだ。ケーキを食ったら羊羹を。煎餅の次はプリン。ババロア。時折、パンナコッタ。ロールケーキの後にはみずみずしいゼリーを食したい。

その欲望の流れを遮断するような和菓子のヘビーローテーション

はそのような純粋な物事の流れに逆らっているといってもいい。
その原因は言うまでもない。軽音部の茶菓子の提供者は琴吹紬その人しかいないのだから。
「ごめんなさい。最近、和菓子ばかりいただくの……」
しゅん。眉尻を下げ、心の底からすまなそうに謝るものだから誰も言葉を返せない。
「い、いや！　ムギが謝ることなんてないさ。いつもただでご馳走になっている身だしね」
「むしろ和菓子とか低カロリーで健康的だっていうしさ！　ジャパニーズスイーツって海外のセレブにも人気が……ね……」
墓穴を掘ったな馬鹿め、と夏音は蔑むような視線を固まった律に向ける。
「そうなのー。こんなに美味しいのにカロリーが低いの」
ほんわかとした口調でムギが律の言葉に嬉しそうな反応をする。
既に軽音部では、カロリーという言葉が出るだけで身の毛がよだちそうな雰囲気が発生するという。
この常に準修羅場世界と化してしまったのはやはり先週の出来事のせいだろう。
「カロリーが低いから安心でしょ？」
何が安心なの、とは聞けず。
夏音、律、唯は、もしやこのままムギによる恐怖政治が始まるのではないかと、軽音部の行く末に思いを馳せては身が震える思いをしてばかりいた。
デリケートな話題であるため、指摘しづらいのも夏音たちが口を閉ざす理由の一つであった。
そもそも、この三人が共同体のようになっている理由もよくわからない。いつそんな絆芽生えた。
そして、そのまま沈黙を通して練りきりを口に運ぶ三人であった。
もふもふと咀嚼する。うん、最高級なのが唯一の救い。
そして沈黙。

「ハ、ハロウィーンだ……」
「へ？」
まさに天啓だった。ふと降りてきたその単語に夏音がふるふると震えた。夏音が突然言い放った言葉に気怠く反応したのは憔悴しきった様子の律であった。
「何言ってんの」
「そうだ！　何をやっていたんだ！　もうすぐハロウィーンじゃないか！」
「おいおいー。ここは日本だぞー？　ハロウィーンなんてどうせお菓子会社とかが適当に盛り上げて終わりだって」
「え、本当に？」
異文化間のギャップがここにまた一つ浮き彫りになった。
「そうだよー」
そんなの認められないと夏音は俄然、勢い込んだ。
「やろうぜＰａｒｔｙ！！」
発音がネイティブなもので、もはやパーリィと聞こえる。その素敵な単語に唯の瞳が輝きつつあった。
「パ、パーリィ……その響き！！　美味しいもの食べられるの？」
「それはもう！　お菓子をいやってくらい食べられるさ！」
「やりたい！　私、ハロウィーンパーリィやりたい！」
「そうか唯もやりたいか！　そうとなったら計画を立てなきゃな！」
突然生気を取り戻した二人の様子に眩しいものを見るように目を眇めていた律であったが、本来のお祭り好き性質が魂の底から浮上してきたのか、だんだんとノリ気になってきた。アクセル全開で会話に参戦する。
「そこはやっぱりパンプキンづくしでしょ！」
「タルトにパイ、ケーキにプリン！？　作っちゃおうか！」
「いいね！　材料買い込んで盛大にやろうぜー！」
奇妙な高揚感を得て、三人は異様なテンションになりつつあった。
今すぐにでも扉を蹴破って買い物に出ていってしまうくらいうきう

きそわそわと落ち着かない。
「ところでハロウィーンっていつ？」
「十月の終わりの日だよ」
「ってもうすぐじゃん！」
ちなみに明後日ともいう。
「うん。家族でやろうかなって思ったんだけど、今年は二人とも無理だったんだ」
「え、毎年家族でやるものなのか？」
「俺の家はね。家族で一緒にいるようにはしていたかな」
「へー、すげーなー。改めて外国から来ているんだなって思うなー」
そんな所に感心されても、と夏音が苦笑を浮かべているとカチャン、と陶器のぶつかる音が響く。
「ムギ？」
湯飲みが足りないからとティーカップで緑茶を嗜んでいたムギが、同じく白磁のソーサーにの上に乱暴に置いた音である。中身が盛大にこぼれていた。
ムギがキレた？
誰もがそう思い戦々恐々としたが、それは杞憂に終わった。
「素敵ねーハロウィーン……私のお家、色んな催し物に招待されるけどハロウィーンパーティはないの」
いつものムギだ。何に対しても興味津々で、その瞳には常に無邪気で好奇の光を宿している麦である。
その無垢さこそがかえって心胆寒からしめるナニかを放っているという恐怖。
「かぼちゃのケーキなんてわくわくしちゃう！」
そんな反応に三人は警戒を強めた。その裏に何かしらの真意があるのではないかと勘繰ってしまうのだ。
「十月の終わりだと、今週の土曜日……あさってね」
手帳を確認して笑むムギ。一つ頷き、頬を染めた。
「よかった。何の予定もないみたい」

「む、ムギ？　その日は洋菓子の祭典みたいなものですよ？」
「最高じゃないー」
クロスカウンターで返ってくる屈託のない笑顔に、これ以上は何も言えない。
「たまには洋菓子も、ねえ……。私もいいよね……ねえ……澪ちゃん？」
「……」
得体の知れない悪寒にぶるりと身を震わせ、澪は気まずげに目をそらした。
先ほどから、一瞬たりとも会話に参加していない。それどころか、存在感が欠片も感じられなかった彼女であるが、どこか様子がおかしい。引き結んだ唇はわなわなと震え、脂汗がじんわりと額を濡らしている。病院へ行くことをオススメしたくなるくらいの様相を呈している。
しかし、その前にナニカ違和感が……。
何であろう。澪の顔がぼんやりと……なんか、違う。何が違うのか分からないが、ナニカが……。
「澪？」
おそるおそる夏音が澪の頬をつつく。
ふにん。
「っ！！？」
その瞬間に、夏音の危機回避能力的なナニカがいっせいに警鐘を鳴らした。スネークが見つかった時の比ではないレッドアラーム。その本能によって彼が全力のバックステップを決めるのにゼロコンマ一秒もかからなかった。
「お、おいどうしたんだよ夏音……」
律は唐突に飛び退いて呆然とする夏音に面喰らいつつも、その奇行の原因らしい幼なじみを一瞥する。そして、能面のように無表情の彼女におそるおそる近づき、その二の腕に触れてみた。
「ひ、ひぃっ！」

理解した、というより体内のシナプスが全速力でその情報を脳みそに叩き込んできた。

彼女に何があったかは定かではない。しかし、彼女の身体に物理的に起こったことはわかる。

「み、澪これッ！　軽くヤバ……ッ！？」

彼女は今の今まで自分は無であろうとしていた。しかし幼なじみの言葉を得て、いつまでも馬耳東風を貫いてもいられなくなってきた。

「う、う……うぅぅぅ」

感涙に咽び泣いている訳では絶対にないだろう。その涙は悔悟、無念がたっぷり詰まっている。長い睫毛はびったりと涙に濡れ、両の瞳がカッと全開のまま顔面がグシャグシャいうひどい有様であった。

曲がりなりにもクールな美少女というカテゴリに所属している秋山澪のあまりの姿。ファンクラブ会員にはとてもじゃないが見せられない。

「み、澪……お前、いつからだ……？」

というか、何で誰も気が付かなかったのだろうか。

「分からない……ケド、ヤバイと思ったのは一昨日……」

「いや、でも、そんな、まさか……」

「だって私たちにはいつも通りに見えたぞ……？」

そう。秋山澪は普通に見えた。細身の体躯とは言い難いが、女の子にしては身長が高い彼女はどちらかというとスレンダーな印象を他人に与える。それがちょうど一週間前に、少しふっくらしてきたかなぁーと感じたくらいで、そこまで深刻なレベルではなかったはずである。

少しだけとがった顎、すっと通った鼻梁。照りがあってなめらかな頬にかかる黒髪は和製美人を彷彿とさせ、つり目がちの瞳が顔全体をクールな装いへと引き締める。

しかし、現在の彼女をよく観察してみる。まず顔の外線がなめら

かというより、ふくよかな丸みを帯びている。その双眸もふっくらな頬に押されているだけのように感じる。そして……なんか、太い。

緩慢な変化につい気づくことがなかったが――、

「……肥えたか」

「そんな言い方はヤメテくれ～～～～～～～～～」

一週間のうちにここまで身体の表面上に変化が表れるとは恐ろしい。どれだけ摂生なしに食べればここまで太れるのだろうと夏音が感心する程度のメタモルフォーゼ。そう、これはもはや変化。

「ここまで澪が体調管理できない子だったとは……」

まったく嘆かわしいと額に手をあてる夏音に同意とうなずく唯や律もその表情に悲壮めいたものを隠さない。

「私はいったいどうすればいいんだ……」

「いや世界の終わりみたいに言うけど、痩せればいいんじゃないか？」

「それができれば苦労しないんだよ！」

先週も同じことを言われたが、今度はその口調にも力がない。むしろ、涙ながらにどガチで放たれるその言葉に切迫したものを感じられ、うっかりこちらの涙腺にきてしまいそうであった。夏音には彼女が言葉と共に喀血しているように見えた。

「そうは言うけれども。あなた痩せるための努力は？」

「……まだです」

険しく目を眇めた夏音の詰問に、超気まずそうにしれっと視線をそらした。

「アナタ、ダメネー」

「急に外人みたいに言うなよー。肥満大国から来たくせにー」

「ほう、肥満大国とな？　なら肥満大国でもないのに勝手に肥満になっている人はだーれだ？」

「うぅっ……イジワルだぁ」

「ていうか。何がどうなってこうなったのさ？」

先週の騒動後。澪とムギによってダイエット戦線が築かれていたようである（二名のみ）。その際にスイーツ条約とやらを交わし、一回のティータイムで用意できる菓子のカロリーの上限を決めていたそうだ（勝手に）。

それだけではなく、いっそのことお互い目標の体重に戻るまで洋菓子を口にしないという約束まで結んでしまったという。しかし、日頃から誰よりも甘いものを恋い慕う澪にとっては二日で地獄のストレスとなった。

やはり細胞レベルで我が身に染みつき、愛惜この上ないスイーツたち。その焦がれる想いは彼女を燃やし尽くさんばかりに肥大し、熱くなった結果……彼女は砂糖の僕となったのだ。

「肥大したのは想いだけではなく脂肪。そして、いま燃やし尽くさなければならないものこそ脂肪という訳だね」

「そんな風に言わ……はい、そうです」

「ムギは我慢していたというわけだ」

「ええ、私は和菓子も大好きだから平気だったけど……澪ちゃんは条約を破ってしまったようね……」

貴様らの間の裏切りなど知ったことか。おっとり自己弁護したところで所詮は共犯である。

夏音は盛大に溜め息を漏らし、あきれかえった。

「なるほど……て、いうかさ？　要するに二人の問題に全力で巻き込まれている俺たちの立場はどうなの？」

律と唯がばっと顔をあげた。言った、言ってくれたぞこの男！と勇者を仰ぎ見るようなアツイ視線が夏音に送られた。

「つまり、だ。俺たちは我慢を強いられていたわけだ。圧政に耐えていたわけだ！」

うっ、と押し黙る両名を見て、まさに水を得た魚状態の夏音は両腕を広げて高らかに声をあげた。ついでに最高潮に高まった夏音は

机の上にだんと上った。
「俺たちは甘いものを食べる権利がある！　つまりハロウィーンだ！　もう決めたからね俺は。テーブルには甘いもの以外乗せない！　辛いものを一切排除するんだ。そして虫歯なんて概念を捨て去り、砂糖で骨を溶かす勢いでそれを食す！」
それはまた堪らん……と唯は溢れ出そうになる唾液を必死に嚥下する。
「ただし！　そこに参加できるのはスイーツに身も心も捧げられる者のみだ！　体重だなんだと気にしてスイーツ様に背中向けようとする者に参加の資格はない！」
「！？」
革命の狼煙は今あげられた。予想をだにしていなかった内部反乱にダイエット同盟が驚愕にくれる。
「あ、来たければ来てもいいけど。それなりの誠意を見せてもらうからね」
夏音は怜悧な表情で二人を睥睨する。普段は爽やかな夏の空のような瞳が、今や極寒の海のような冷たさを帯びている。
その視線にあてられて、戦慄く二人は顔を見合わせた。
「では、後日」
スタンと机から降りてそれだけ言い残すと、颯爽と部室を去りゆく夏音。後をついて行こうか行くまいか逡巡して見せた唯と律。
この場合の味方になるべき相手は考えるまでもなく、結果、部室には魂が抜けたようにかたまる約二名のダイエット女子が残ることになった。

ハロウィーン当日。
「う、うわー。お姉ちゃん！　私、本当にこんな場所で料理しちゃっていいのかな！」
「無駄に広くてごめんねー憂ちゃん。たかが台所だから気兼ねなく

楽しもうよ」

せっかくの催しなので、他に誰か呼ぼうということになり、唯の妹である憂も招くことにした。誰かゲストを呼んで楽しむ、というより自分たちで準備して騒ぐのが目的なので、もちろん準備には唯や律も参加しなくてはならない。

そうなると、日頃から姉の労働負担を減らすことを目標とする憂が黙っているはずがなかった。

夏音が止めるも、「私も手伝います！」と言って聞かなかったのである。実に良い子だ。夏音の中で彼女の株がうなぎ登り。

やはりハロウィーンということで、パンプキンづくしである。ケーキ、タルト、パイ、プリン、ババロア、ムース、かぼちゃのスフレロール、ブリュレ、スコーン、モンブラン、さつまいもとコラボしたキッシュ、ベーグルや鯛焼きなんてものまで。

目白押しすぎて、なんかアレである。胸焼け確定ってことだろう。さすがにやり過ぎではないかと思ったが、あれだけ啖呵をきったもので後にはひけないという現状である。

「そう思っていたので、紅茶とコーヒーの取り揃えを充実しているからね」

同じ不安を抱いていたらしい律は、夏音が見せたその茶葉とコーヒーの種類に度肝を抜かれた。

「品評会でもするつもりか……」

はたまた「きき紅茶」でもするのかといったところか。

しかし、当日中にすべてを準備するのは困難であるので、一人につき二品を用意してきて、残りは夏音の家で作るということになっていた。

スポンジから作るケーキというのもなかなか本格的である。

夏音はそこまでやろうと思っていなかったが、それを可能にするオーブンも完備してあるキッチンの噂を聞きつけた憂いが是非にも、ということだった。あくなき探求心に感服。

というか、女子だらけのお菓子づくり。なんとも華やぎに満ちた

空間であるが、ふと「これでいいのか俺」と自問自答に苦しむこともある。だが、誰もが口を揃えて「決して違和感はない」と言うだろう。それこそが問題であるのだが。

しばらくして、夏音は自分の担当するベーグルが焼けるのを待つだけとなり、暇をもてあましてキッチンを出た。そのままリビングから玄関までの飾り付けを再び眺める。

前日の朝から自宅をハロウィーン仕様に飾り付けていた努力もあって、なかなかの出来映えに満面の笑みでうなずいた。これは是非、誰かに見てもらわないといけない。

「さて、あの二人はどうすんのかねー」

あれからいっこうに連絡がない。

一応、開始時刻は伝えておいた。家にあがる時の条件も添えて。

準備の時間はめまぐるしく過ぎ、宵が訪れる時刻となった。

あらゆるスイーツがテーブルの上に乗り、香る極上の甘味たち。女の子の空間。スイーツパラダイスの完成であった。

現在、唯たちはというと別の部屋でハロウィーンの衣装に着替えている。仮装して参加することが様式美であり、このパーティの大前提だという夏音による主張のためである。

この仮装に関して、夏音は何をモチーフにしようかひたすら悩んだ。

なにせ今までは母親が半強制的に着せたいものを彼に着せていたから、実は自分で選ぶのは今回が初めてなのだ。マザコン疑惑。

「夏音くん何ソレ変ー！！」

「び、びっくりするくらいテーマが見えない！」

「すごく……ユーモラスだと思います」

三者三様の反応であるが、ここからどんな答えが窺えるだろうかと夏音は小首をかしげた。

「おかしいかな？　色々コラボってるんだけど……」

「その耳は？」
「狼男の耳だよ」
「そ、そもそも服装は……」
「シスターを意識している」
「その長い犬歯は？」
「ドラキュラだな」
「その尻尾は？」
「さあ……なんだろ？」

「私は夏音がよければそれでいいと思う」

律が仏のような目で俺に微笑んだ。その表情を見てどこか腑に落ちないが、褒め言葉として夏音は受け取った。

かく言う彼女たちはなかなか可愛い装いである。平沢姉妹は王道パターンのとんがり帽子の魔女仮装をおそろいで、律は髪をオールバックにしてでかい傷シールと頭から飛び出るネジ……フランケンシュタイン。

しかし、クオリティが低いというか雑すぎる。

お互いが「……」無言の評価を下し合った。

とりあえず記念撮影をした。

「ところで澪ちゃんたち、本当に来ないのかな？」

開始時間まであとわずかといったところで、唯が心許なくなったのか、ふとそんなことを漏らした。

「うん……一応、誘ったんだけど」

「夏音がきつく言い過ぎたからじゃないの～？」

「とはいえ、あの時は結構キてたし……ほら、お互いにさ」

「でもあんな言い方されたら来づらいと思うけどなー。そもそも澪に至っては今さら甘いものなんて食べたら……そんな親友の姿

を見るのは辛いっ！」
「んー。一応、今日のはカロリー抑えめなんだけどな。砂糖や食材からすべて気を遣っているしさ」
立花夏音に妥協の文字はない。
「ていうか今日の目的だって、澪たちに来てもらわないと達成しないっていうか……」
「え？　そんな目的とかあったっけ？」
「あれ、言ってなかったっけ？」
双方、マジ驚く。
「あ、ごめん。普通に言うの忘れていた」
「お、おいおい……」
「ていうか、かなり大事なことなんだけどさ」
とザックバランな口調で夏音が説明をすると。
「ってそんなに重要なことを言い忘れるなーーーー！！！！！」
フランケンがキレた。

その頃、秋山澪はごく最近に一蓮托生となった相方・琴吹紬と夜の住宅街を歩んでいた。着慣れない、というか普段なら絶対に着るはずもない服のヒラヒラした部分が風にはためく。
だいぶ日は短くなり、白い電灯が点いてからずいぶん経つ。いつもなら、この時期に感じる一年の終わりに寂寞を感じていた澪であったが、この瞬間だけは暗くてマジで助かったと安堵した。
「ね、ねえ。本当にこんな格好でいくの……？」
「え、素敵な格好じゃない？」
「は、恥ずかしいよ」
「えー？　澪ちゃん似合ってる」
「こ、こんなの似合いたくない……」
「私のも素敵よねー。これ、なんて服だったかしら」

うきうきしている。この相方は、何故いつもこんな暢気でいられるのだろう。澪は自分の気持ちを共有してくれることを諦めた。

二人はそんな会話を挟みながら高級住宅街と呼ばれる一角に足を踏み入れた。

ここからは少し坂道となっている。澪は、少しの坂でも息が切れるようになった自分を情けなく感じた。

前までは体育会系とまでは言わないが、活発に運動を嗜んでいた。言い訳にするつもりはないが、軽音部に入ってから運動するという機会が極端に減った気がした。

かろうじて中学校まで培ったささやかな筋肉や、代謝といったものが高校生活を半年送っただけで失われていくような……。

最近では、学校の制服もきついものがある。精神的に。何故なら少しだけ肉付きの良くなった太ももを惜しげもなくさらさなくてはならないのだ。どうしてあんなにスカートが短いのかと恨み言を漏らすことも増えた。だから最近の高校生が風紀が乱れていると言われるんだ。入学前までは、「なんて可愛い制服」と思っていたのはあくまで過去の出来事。

（私は過去を振り返らない……）

所詮は言い訳だ。

自堕落に日々を過ごした報い。因果応報、まだ大丈夫と思い放置していた瑕瑾はやがて大きな致命傷へとなっただけのこと。

彼女は一週間前の「事件」以来、ずっと悲嘆にくれていた。

ついに立花夏音はこんな自分を見限っただろうか、と。

何せ自分たちのエゴで大切な軽音部のティータイムをぎくしゃくしたものにしてしまった。それだけではなく、澪はムギさえも裏切ったのである。

彼女は「仕方ないわ」と許してくれたが、夏音は違ったのだ……

……と思いきや。本日、自分たちは立花宅で行われるハロウィーンパーティーに招かれている。

「澪ちゃん、パーリィよ」

だ、そうだ。ムギの訂正が入る。

スイーツに背を向ける者に来る資格なし、とまで宣言されては足を運べるわけがない。そう思っていたのだが、夏音は奇妙な条件をこちらに提示してきた。

『以下に指定するコス……仮装をしてくるならば、参加の権利を与えよう』と。手渡された紙袋の中身を見た時は目を疑った。

「だからって、こんなの恥ずかしい……」

暗闇にまぎれるのがこれ幸い。電灯の明かりでさえ避けて歩きたいような気分になる。

「ふふ。でも夏音くんはこれを着てこないとダメって言ってたじゃない？」

「何のつもりなのよーあの男……」

とぼやいたところで始まらない。

ついに自分たちは立花邸にたどり着いてしまったのだから。

「ム、ムギが押して」

「え、澪ちゃんからどうぞ？」

インターフォンを押す役目を押しつけ合う二人であったが、いつまでもまごついていられない。近所の人の目がある。

ピンポン。

「ハーイ？」

インターフォン越しに聞こえたのは、ここの家主（の息子）の聞き慣れた声。

「と、トリックオアトリート！！！！」

そして、二人は家についたらこう叫ぶようにという指示を律儀に守った。

「き、きた……ちょ、ちょっと待って！！！」

ガチャリ、と荒々しく置かれたであろう受話器の音。何故か焦っ

たような夏音の様子。
澪とムギがお互い顔を見合わせ、なんとも居心地の悪い空気を味わった。
どんな顔をして家にあがればいいのか。
いや、そもそもこんな格好だ。恥とか、この際どうでもいいのかもしれない。
そんな思いに耽っていると、バタンと玄関が開いた。
「魔女っ娘キターーーー

らな！」
「いやー、それも含めて……あると思います」
羞恥プレイも嗜むのか、この男。
「ムギも似合うと思っていたんだよなー。ていうか、澪も巫女さんにしようか迷ってさー」
澪は、いつまでも真剣にうなる目の前の男をぶん殴ろうとする衝動を必死に抑えた。
「夏音くん？　本日はお招きいただいてありがとうございます」
ムギがすらりと夏音にお辞儀をした。そのまま顔をあげ、うかがうような表情で夏音に問うた。
「お邪魔してもよろしいかしら？」
「もちろんでございますお嬢さまがた」
夏音は軽妙な動作でお辞儀を返し、澪とムギの手をとってエスコートしていく。
玄関からリビングまで、ハロウィーン仕様となっている屋内。突貫作業にしては、かなり凝っているといってもいいだろう。
「う、うわ……」
覚悟はしていた。
テーブルの端から端まで乗っているスイーツの数々に目がやられそうになる。
今の自分にはあまりのも酷な光景である。
澪の思考が、やはり夏音はこんな光景を自分に見せつけてこらしめようとしているのかもといったネガティブなものへ移行しそうになった。
「さー、全員そろったことだし始めようか！」
「夏音？　私は、その……た、食べられないん……だけど……」
澪が神妙な口調で言うと、夏音はふっと相好を崩した。
「Ｉ　ｋｎｏｗ．．．でも気にしなーーーい！　言ったでしょ？　スイーツに背を向けてはならないって」
確かに、言った。言われた。とはいえ、今の自分としてはスイー

ツを頬張りたくてもかなわないのである。これ以上の体重増加は女として堪えられない。

「今日は澪、ムギ。二人が主役なんだよ」

「え？」

思いがけない言葉に耳を疑う。ムギも同じようで、困惑した表情でいる。

「あのね、夏音くんは澪ちゃんとムギちゃんのためにこのパーリィを計画したんだよ」

夏音の言ったことに首肯して唯が前に出て説明を加えた。

「本日をもってして、明日以降、澪とムギが痩せるまで軽音部は甘いものを我慢することをここに誓います！！」

「ちかいまーす」

夏音の宣誓に、きわめてノリ気な声と、そうではない声が後に続いた。

「ど、どういうこと？」

澪は事態についていけず、狼狽を隠せない。

「つまりさ。俺たちは仲間じゃないか？　ティータイムしている時、隣で我慢している仲間がいるのに平然としていられないんだ。だから、澪とムギが納得できる体重に戻るまでは俺たちも断スイーツを決行することにしたのだよ」

「夏音くん……」

そんな夏音の説明はあまりに荒唐無稽。そんな義理はないのだ。それがわかりきっているムギは震える声を出せずにいた。

澪はふらっとその場に崩れ倒れそうになった。

何てことだろう。そんな馬鹿な話があるはずがない。肥えたのは自分自身。脂肪貯金を一季に引き下ろしたのも自分だというのに、目の前の仲間たちは私と同じ苦しみを味わおうという。そんなことをする必要がないのに。

「だから、今日は遠慮しないで好きなだけ甘い物食べようよ。いやってほど食べて、死ぬほど胸やけして『もう甘いものいーや』って

なろう。それで痩せた後に『やっぱり甘いものないと生きていけないの！』ってなればいいじゃん？　それって背を向けるっていうか、また後で目一杯楽しむためなんだから、ある意味前を向いてるってことじゃないかな」

優しさが燃えるようにいたい。傷に沁みて、情けないくらいにいたい。

気が付けば、澪の眦から涙がこぼれていた。

仲間に想われることの暖かさと切なさが胸をいっぱいにさせる。

「あ、ありがとうみんな……」

ふと澪はムギと顔を合わせると、隣の彼女も涙ぐんで笑んでいた。

「私たち絶対痩せる！　早くみんなとお菓子食べれるように！」

「がんばれよ二人とも」

「がんばってね！」

「応援してます！」

一同は二人の宣言を受け入れた。二人のダイエット戦士の誓いを、その胸に刻み込む。彼女達ならできるはず、と。

「じゃ、始めようか？」

今夜はハロウィーン。楽しい楽しいパーティの始まりである。

「ここで死んでもいい……！！」

「このために生きているの！」

極上のスイーツに囲まれ、感涙に咽ぶ澪とムギの幸せな姿。口いっぱいにスイーツを詰め込む彼女達はこの世の幸福を凝縮したような笑顔を見せた。

これより三週間――――夏音立花プロデュース・地獄のダイエット生活プログラムを終了するその時までに確認された二人の最後の心よりの笑顔であったという。

結局、彼女達は二人だけで用意された菓子の半分を消化してしまった。どれだけ砂糖に飢えていたかが如実に表れた結果であった。

パーティの片付けが終わり、皆は一斉に夏音の家を後にした。
ハロウィーンの飾り付けはまだ残しておいてもいいくらい愛着を抱いてしまった。今日は疲れているし、二、三にちくらいはこのままでいいだろうと夏音はうなずく。
「Ｚｏｎｋｅｄ　ｏｕｔ．．．」
糞疲れたー、と仕事終わりのサラリーマンみたいにソファに寝転ぶ。
そのまま淡い微睡みに身を寄せようかと思ったところに、宅電が鳴り響く。
一人しかいないリビングに電話の音はけたたましく響く。
まるで誰もいないんだ、と家中に人が居ないことを確認していかのように空気を揺らしている。
だが、自宅にかけてくる相手は限られている。
夏音は重い身体を奮い立たせ、受話器をとった。
「Ｈｅｌｌｏ」
『Ｈｉ，ｈｏｎｅｙ？』
母である。
『夏音ーー！！　トリックオアトリート！！！』
父である。

「父さん母さんいっせいに受話器で喋らないでよ」
いったい向こうはどんな状態なのだ。
「とりあえず父さんはすっこんでいてくれないかな？」
『ひ、ひどいぞ息子！？』
「酔っ払っているのわかるからねー？」
受話器から漏れる息づかいが一人分減った気がした。
『今日は一緒にいられなくてごめんなさいね？』
「べつにー平気だよ」

『なんだか楽しそう。お友達と一緒だったの？』
「あ、わかる？　すごいね」
『トーゼンでしょ。なんだか満ち足りている声。あなたの声を聞けば、どんな状態が一発でわかるに決まっているじゃない』
息子だもの、と姿には見えないが胸を張っているだろうこの母親には敵わない、と夏音は思う。
『ところで夏音？　積もる話はあるんだけど、少し大事な話があるの』
「大事って……どれくらい？　たいていそう言われる時は良いことないんだよね」
『ううん……あの……ちょっぴりよ？』
「母さんのちょっぴりが信用できない」
『ひ、ひどいわ夏音っ！！　だいたい何っ？　ママって呼びなさいよ！』
「ハイハイ。わかったから、教えてよ」
『むぅ……あのね、あえて一言でまとめるからよく聞いておいてね』
「一言でトンデモネーのがきそう……どうぞ」
『マークに住所バレちゃった♪』
「そいつは…Ｍｏｍ．．．」
『じゃ、そういうことで』
「洒落になんねーぞ母さん！！！」
『アルヴィを責めちゃやーよー。ジョージも何にも悪くないの。クリスが全部悪いからね。そういうことに決めたの』
「ヘイ、何がどうなってそうなった？」
『私はこれ以上は……まぁ、あしからず』
「いや、ちょっ……母さん！？」
『愛してるわカヌーちゃんファイト♪』
「その愛称はやめてったら……！」
ガチャリ。

心優しい母親は無情にも電話をぶつ切った。
夏音は母親のあまりの身勝手な振る舞いはこの際気にしなかった。
今に始まったことではない。
「マークがくる……だと」
戦慄がはしった。
「むしろ、崩壊の序曲？」
そんな気分で過ごす秋の夜長はどこかうすら寒かった。

第十四話（挿絵あり）（前書き）

そろそろストックが終わりそうという……大変だー！！

気軽にご感想をいただけると、作者のモチベーションにつながります。とても喜んだりします。

ののしってみても、よろこびます。

第十四話（挿絵あり）

冬、枯れ果てた季節。眠りの季節。実りを待つ季節。秋が終わり春が訪れるまでのっしりと居座る彼の季節はこれがまたけっこう嫌われ者だったりする。それでも、なんだかんだ必要だから付き合う。本当のところ、嫌いではない人が多いのではないだろうか。

「俺はあの澄んだ空気とか好きだけどなー」

軽音部の一同は、これから来る厳しい季節についての話題で盛り上がっていた。彼女達がいるのは暖房をがんがんと焚いた校舎の一角にある軽音部の部室。ぬくぬくの室内とは反対に外の風景はすっかり寒々しい。

厚く空を覆う雲は太陽の日差しを阻み、紫外線をよりいっそう強く地表にお届けするのに貢献している。だから、意外にもこの時期こそ入念な肌の手入れが必要であったりする。

「でも外で遊ぶのもしんどくなるし、ずっと家に引きこもっちゃうよなー」

「そうなるとますます私にかかる重力が増してしまう……」

「いや重力は増さないから。増すのは澪の体重だけ」

すべてに平等に1G。重力のせいにしてはならない。

「雪降らないかなー」

一人、そんな会話の輪から外れて窓辺から空を見上げていた唯が、

「待て」をくらった犬みたいな表情でそんな一言を漏らした。残念ながらその期待に満ちた両の瞳に雪が映ることはない。

「北海道や東北ではもう雪が積もってるんですってー」

ケーキも食べ尽くし、手持ち無沙汰の状態でカップをいじっていた夏音におかわりを勧めながら、ムギが今朝ニュースになっていた

と語った。
　何でも去年は初雪も遅かったばかりでなく、降雪量も激減だったそうだが、今年はその利子を返済されたような豪雪の被害がひどいそうだ。そこに住んでいる住民からすれば、まったく迷惑な話に違いない。
　へぇー、と何心なく聞いていた夏音は、そういえば自分が住んでいた場所はあまり雪が降らなかったなと思い返した。それと同時に、随分と向こうに帰っていないものだと思う。
　あの季候、日本のとはまったく違うあの空気を触れないで久しい。思えば一年半も日本にいるのだと感慨深く溜め息をついた。
「雪ねえ。去年は見なかったなあ」
「あ、そっか。夏音は去年も日本にいたんだよなー」
「うん。ちょうどこの時期にさ、あまりに寒いから草津の方でずっと温泉入りながらのんびりしてたんだ。ベース片手に一人旅ってやつ」
「草津!?　温泉!?　なんだその悠々暮らし!　セレブか!」
　普段あまり自分と縁のない言葉に律が憤然と立ち上がった。去年の今頃といえば、自分は受験のために勉強漬けだったというもので、羨ましいことこの上ない話だ。
「ふふん。あぁ日本って素晴らしいって思った瞬間だったですのー」
「素敵ねー。その時はご家族と一緒に行ったの?」
「いや、ひとりだけど……」
　しんと部室に閑かな空気が流れる。この男は、たまにこういう空気をもたらすので注意が必要である。
「ねーねー。こないだせっかくの三連休だからどこか遊びに行きたいねって話してたよねー!」
「ああ、そういえばそんなことで盛り上がったな」
　主にお祭り好きの律と唯が中心となっていた。澪はまったく関心ないフリをしながらもしっかりと耳をそばだてていたその内容を思い出す。

「うっ……」
そして、ちょうどあの時。その瞬間を思い出すという事はあの地獄のダイエットの日々を思い出す事と同義であった。澪はあまりの凄絶な記憶に胃液がこみあげそうになるのをおさえた。
「それでね！　どこ行こうかずっと考えてたんだけど、温泉とかいいんじゃないかと思うのです！」
バーン、と皆の前に躍り出た唯に夏音はふぅ、と溜め息をついた。
「タイムリーというか、単純というか……」
「影響されやすいからなー唯は」
自分の提案が完璧であることをみじんも疑っていない唯は自信に満ちあふれた表情でどうだと視線をよこす。その中で一人、澪が小さな声でぼやいた。
「温泉……かあ」
ふいに表情が曇った澪の反応を見た夏音が意外そうに彼女に訊ねた。
「澪は温泉きらいな人？」
「い、いやそうじゃないけど……人前で、その……のは……」
「ん？　よく聞こえなかった」
「人前で裸になるのに抵抗があるというか……」
「そんなこと言ってたら温泉なんて入れないじゃないか」
夏音はさすがに呆れた表情で澪を見詰める。彼女が恥ずかしがり屋なのは周知の事実だったがそこまでとは思わない。しかし、そんなことより夏音は彼女の言葉に違和感を覚えた。
「ん？　ていうか合宿でみんなとお風呂入ってたよね？」
あの時の犠牲を忘れてなるものか、と夏音はぎらりと瞳を光らせた。
「い、いや……あの時は良かったけど」
「あぁーそうか。澪、まだ気にしてるんだ」
「だ、だから別にそういうのを気にしているわけじゃ……」
「そういうのってどういうのー？」
にやにやと意地をついた夏音の質問に澪はぷいっと顔をそらした。

頬を膨らまし、もう夏音の方など見るもんかと決意するかのように体ごとそらす。澪の反応をうかがって噴き出した夏音はおどけるように肩をすくめた。

「すねちゃった」

「今のは夏音くんが悪いわよ」

横からつん、とムギが責める。責めるといっても、その声音は冗談めいた色を含んでいる。かの騒動があった後、何だかんだと夏音のおかげで目標としていた体重に到達したことで彼女には絶対的な余裕が生じていたのだ。

もはや自分の精神は体重の話題だろうと動じないのだ、と。

「澪はもう痩せたんだから大丈夫だよ」

「ツーン……」

あ、無視されたと軽くムカっときた夏音である。

「おーい秋肥りの秋山さん」

秋をかけた二つ名のように彼女を呼んでみた。

「も、もう肥ってない！」

「じゃあ、元秋肥りの秋山さん」

あくまで意地の悪い夏音に「うぅ～」と唇を噛みしめ、涙目になる澪。自分の提案で何故か修羅場が形成されつつある、とそれまで事態をぽかんと傍観していた唯は慌てた。

「夏音くんそれはひどいよ！」

「ゆ、唯ぃ……」

珍しく自分を擁護してくれる人物（それが唯であろうと）に涙を浮かべて寄り添う澪であった。

「澪ちゃんはもう痩せたんだから！　脱いでもすごい澪ちゃんなんだよ！」

いや、それはどうだろうと誰もが口にしかけた。その表現は色々誤解を生む気がする。

「夏音くんは澪ちゃんのプロポーションを生で見たことがないからわからないんだね！」

唯の一言に夏音の目がキランと鋭く光る。
「いや、前に水着姿でしっかりと確認したよ。わがままＮｉｃｅｂｏｄｙだよね」
その両目と魂にしっかりと刻み込んだ思い出の一幕。
「な、何を言っているんだ夏音！　ふ、ふ、ふ、不埒な……っ」
「で、でも夏音くんはその先を知らないんだよね」
知ってたまるか、と夏音は手をあげた。降参のポーズである。
「別に俺は澪の身体が太まっているなんて言っていないだろう？」
「ふ、ふとまっ……そんな日本語はない！」
「ていうかー。あれだけダイエット頑張ったんだから自信もちなよ」
「で、でも……」
「とりあえず澪の意見はすべて却下ね」
「んなっ」
その事に反対する者もいなかったので、そんな流れに。
「ていうか温泉って近くにあるのか？」
初めて律が建設的な意見を口にした。たしかに、この近くにある天然温泉の噂など聞いたことがない。夏音がすぐに携帯で検索しても、いまいちヒットしない。
「銭湯？　ていうのならあるんだけど……違うよね？」
「あ、私はそれもいいと思います！」
急に弾んだ口調でムギが手をあげた。とはいえ、夏音は「銭湯」というものがよく分からない。アニメなどで出てくる時があるが、温泉とどう違うのかまでは知識になかった。
それにムギからしてみれば、銭湯なんてもっとも縁遠い物の一つだろう。ただ、わざわざ銭湯に入りにいくのに友達同士で行く必要などない。
「やっぱり少しくらい遠出する必要があるかもなー」
家に温泉マップがあったなぁ、と言う律に夏音は眉をひそめた。
「もしかして、また俺が車を出さなくてはならないのかな？」
一瞬、明確な間を挟んでから「いや、バスとかもあるだろうしね

ー」と律がしどろもどろに答えた。これは絶対にそのつもりだったな、と夏音は確信した。

その他の人間はしれっとした顔でお茶をすする。わざとらしい。はっきりと顔に書いてあるのだ。「せっかくアシがあるんだしさー」と。

別に軽音部でどこかへ遊びに行く時にいつも夏音が車を出すわけではない。しかし、高校生にとって遊ぶための交通費というのは絶妙に懐を痛めるやっかいなものである。できれば移動のためのお金は抑えるにこしたことはないのが本音であった。

実際、夏音が車を持っていること判明してから、使えるものは親でも使うべしという考えのもと、彼女たちの顔には、はっきりとドライバーを所望する輝きが表れるのである。こう、度々と。

もちろん車にだってガソリン代などの費用がかかるし、特に夏音の持つ大型ワゴンのガソリン代は満タンで入れるとなると彼女たちのお小遣いの額など軽く超えるだろう。

そうはいっても、彼女たち自身は運転することや車についての了見が浅いのか、これといって気にする様子はない。

夏音はそういった気が回るようになるのは実際に自分で車を運転してからなのだろうかと時折悲しくなる。夏音はそんな彼女達もいつかわかればいい、と自分を納得させている。

「ま、いいけど。近くだったら横須賀か、奥多摩……草津とか？どちらにしろ、日帰りはいやだな」

「草津がいい」

やけにきっぱりと律が言った。その瞳にはありありと期待の色が滲んでいる。

「別にいいけど、なんで草津？」

「草津って名前だけ有名だけど、一度も行ったことないからな」

そんなものか、と夏音は頷いた。

「みんなはどうなの？」

一応ぐるっと見回して他の意見を得ようとする。反対票もなく、

あっさりと草津行きが決まった。
同時に草津まで運転することが決まった夏音は密かに嘆息した。
今月の第三土曜日からの三連休。勤労感謝の日が月曜に来て、いい具合に連休となった場合はどこのレジャー施設も人で賑わうだろうから、渋滞が心配である。
「それで予算はどうする？」
「そうだな。草津だと宿泊費用ってどれくらいかかるんだろう」
そこで具体的に費用について考えるのがしっかり者の澪である。流されてすでに温泉行きを諦めている様子であった。
「俺は素泊まりで泊まったんだ。料理も好きだし、好きな時に食べて好きな時に寝て、好きな時に温泉に入る……最高だなぁ」
「すでにオッサンの域だな……」
律が軽口を叩くが、夏音は無視した。別になんと言われようとかまわないのだ。ダラダラしたい奴には最高の生活ではないか。
「そうだなー。一泊か二泊したところで素泊まりだと四、五千円かな。食事を何とかするとして、合計で七千円には収まるかな」
夏音が利用した宿は特別安いわけでもなかったが、ふらふら歩いていたら破格の値段で提供している安宿などもぼちぼち目にした。
「いっそのこと宿泊費も何とかなったらなー。あームギとか別荘持ってたりしないよなー？」
さすがの琴吹家でも、草津に別荘はないだろう。
冗談口に笑い飛ばした律であったが「確かあったと思うけど……どうだったかしら」と額に手をあてたムギに一同はそろって口をあんぐり開けたままフリーズした。
ちょっと待ってね、とムギは席を離れた場所でどこぞへと電話をかける。その連絡先は想像に難くないが、一同は息をつめてそれを見守った。
「はい……はい……ありがとうございます」
はっきりとそう聞こえた後、電話を切ったムギは振り返ってにっこりと笑った。

「いやー完全に遊びに行くだけってのもイイよなー！」
と後部座席にふんぞり返った律が言った。つづいてバリボリとスナック菓子を咀嚼する音。
「ほれ、夏音よ」
後ろからにょきっと生えてきた手にはイチゴ味のポッキーが。
「Ｔｈａｎｋｓ」
若干ぶすっとした表情だった夏音は一瞬だけ前方から目を離してポッキーにかじりついた。イチゴ味、初めて食べる味であった。というより、お菓子を食べるのはいいが、ぼろぼろとこぼさないで欲しかった。
後で掃除するのは夏音なのだ。
基本的に法定速度を守らないドライバーである夏音だが、関越をぶっ飛ばして、やっと渋川伊香保のＩＣを通過した所まで来ていた。
万が一、渋滞に捕まることを懸念していたものの、この流れだと予定していた時間よりだいぶ早く到着できそうであった。
目指すは琴吹家の別荘地。ムギの父親が温泉好きだったことで、全国で三つの温泉地に別荘があるらしい。北は登別。南は指宿。思えば、海辺の別荘でさえ風呂の設備が充実していたくらいだ。
要するに、夏音とムギ以外は交通費も宿泊費も諸々かからずに草津温泉が楽しめるというどれだけ幸運に恵まれているのかというラッキーガールだということだ。
別に請求するつもりは毛ほどもなかったが、流石に高速代くらいは出そうとするだろうかと期待していた夏音だったが、ＥＴＣという便利なアイテムのおかげで完全にスルーされた。
ふと彼女たちの将来が心配になった夏音であった。
ムギの別荘が使えるということでチェックインの時間を気にしな

くても良くなったので、あえて道が混まない時間帯を選んで夜に出発することになった。

金曜日の夜に出発して、日曜日の夕方に帰るというプランである。二泊三日で四千円にまるまる収まると聞いた時には目を剥いてしまった。

実に贅沢な連休である。全国のサラリーマンに祟り殺されてしまいそうなくらいの充実。

「おっんせーん♪　おっんせーん♪」

唯は途中に三十分くらい寝ていたが、起き出してからはまたテンションメーターを急上昇させ始めた。

「草津良いとこ一度はおいで～♪」「どっこいしょ」「あ、そーれ」

皆が楽しいのであればいいんだもん、と夏音は諦観の境地に突入していた。

「夏音。さっき買ったミルクティーでも飲む？」

助手席に座った澪がビニール袋をガサゴソと取り出す。どうやら先程の休憩で停まったＳＡで買っておいてくれたらしい。

「助かるよ。ありがと！」

まったく気が利く娘だとうなってしまった。夏音が実はコーヒーが苦手だということも考慮してくれている。それに比べて後ろの三人はずっと浮かれ騒いでいるだけだというのに。愛弟子の出来に夏音は少しほろりとしてしまった。

澪が助手席に座ったのは、何だかんだとメンバーの中で一番この車に乗る機会が多い（レッスンの時に家まで送るため）彼女が助手席に慣れすぎていたからであった。

何の疑問もなくさらっと助手席に乗り込み、さらには空調の調整やら常にオプションで差し込まれている iＰｏｄをいじったり、あまりにそれらの行為をナチュラルにこなす彼女は当然のごとく目敏さに定評がある律に突っ込まれた。

傍目から見てもたじたじになり「いや、何となく……音楽がさ……必要じゃない……」とモゴモゴ言うのみの澪の顔は真っ赤であっ

た。気が動転した彼女がかけたのはメガデスだった。
何故だか夏音も気まずくなるというものだった。あの空気は何だったのだろうと思い返しかけて、やめた。

「流石にこの時間からになると、今日は別荘の温泉だけだなー。明日は外湯めぐりとしゃれこみますかねー」
うふふ、と律がガイドブックを眺めて言う。
「りっちゃん隊員！　温泉まんじゅうも逃せませんぞー」
旅行が決まってから何回も繰り返されるこのやり取りに、どれだけ楽しみだ、と夏音は苦笑した。
「ガイドブックに載っていないところも知っているからつれていってやるよ」
「ほんとかー！？　すげーな夏音！」
「ダテに一ヶ月もいなかったからな」
「ぶふぅっ！？　そんなにいたのか！？」
思わずお菓子を噴き出した律は「車を汚すな！」と夏音に叱られた。

「つ、ついた～」
途中からカーナビに加えてムギの指示で車を動かし、山を少し登った所に別荘はあった。温泉街の景観を横目に通り過ぎ、ぐいぐいと奥地に進んでいった先。草津の中でも、特に奥地といった具合でこれは期待が大きいと誰もが胸をときめかせた。
「お疲れさまですー。いつもごめんね夏音くん」
ムギが伸びをして体をほぐしている夏音に申し訳なさそうに言う。だが、そんなことはお互いさまであったので、気にするなと笑顔で返した。
「むしろムギのおかげでずいぶんと楽しい思いをさせてもらっているよ」

「ううん。それは私じゃなくて父のおかげ。私は何もしてないから……」

台詞に反して、その言い方に卑屈な含みは感じられなかった。彼女は純粋に父親のことを尊敬しているようだし、自分の家がもつ威光に斜に構えている訳でもない。これは謙虚、という美徳。

「うん。でもムギがいないとだめだったからね。ありがと」

それでも筋を通すべきだと夏音は相手が気負わなくていいような軽い口調で礼を言った。

「ふふ、どういたしまして」

夏音はそう言って嬉しそうに目を細めたムギの横を通って別荘の玄関口まで荷物を運んだ。

「なんか旅館みたいだな……」

一同は古色蒼然とした純和風の温泉旅館、といった体の建物に目を見張った。照明も明るすぎない、伝統的な和紙を使用した提灯の明かり程度。

全部がそうではないだろうが入り口の雰囲気で、古きよき湯屋の趣を醸し出している。

「なかなか良い雰囲気だね」

「実は私もここに来るのは初めてなの」

「え、そうなの？」

別荘の持ち腐れではないか。

「そうなの。でも、素敵ねー」

そうやって建物を見上げるムギは心の底から嬉しそうだった。そうこうしているうちに、律と唯は玄関口からあがりこんでいた。

中には琴吹家から管理を任命されている富岡という人の善さそうな初老の男性が待っていて、ほとんどの設備を使えるようにしてあると説明した。

浴場の掃除も済んでおり、二十四時間入り放題だが、火傷には気を付けるようにとのこと。

さらにその他諸々の注意点を話し終えた彼は「じゃ、ごゆっくり」

と帰っていった。

と放り出されたものの、これだけ広い建物である。まずは何があるか把握しなくてはならない。とりあえず居間に荷物を置いて、建物内を確認しようかと思ったが――、

「うわーーすっげぇーーーっ！　露天風呂だぁーー！！」

「広いよりっちゃーん！　泳げるね！」

探検隊がさっそく浴場を発見したようであった。

「まったく、うるさいヤツらだな……」

ヤレヤレ、と言いながらもぐんと歩む速度があがった澪を見てムギがくすくすと笑った。彼女が草津に入ってからずっと隣でそわそわしていたのはバレバレである。

「ま、浴場は後で見るとして。暖房とかはどうなってるんだろう？」

「ボイラー室もあるけど、今はほとんど電気で管理しているんだって」

つまり、こんな風格のある老練された建物でもオール電化住宅への一途を進んでいるらしい

「じゃ、あの立派な囲炉裏は？」

「使えないこともないと思うけど……」

とムギは困ったように眉尻を下げた。

「まあ、様式美と機能美を両立することは難しいということか」

一応すべて実用品らしいが、それを活かせるスキルがないのではどうしようもない。それでも日本の古式ゆかしい生活品に興味があった夏音としては気落ちするのも仕方がないことであった。

「おーい夏音来てみろよー。すごいぞお風呂！」

「こーんのミイラとりさん！」

すっかり興奮した様子で居間に戻ってきた澪に対して、夏音はビシっと突っ込んだ。くふっと横でムギが噴き出した。

一日目――、長距離の運転でへとへとに疲れた夏音が風呂に入り

逃すことで終わる。

「あぁ〜〜いい。いいよ、これー」

変な時間に目覚めた夏音は朝日がのぼる直前に温泉を堪能していた。夜中過ぎに起きた彼は最高潮に不機嫌であった。歯磨きもできなければ、風呂にも入れなかった。暖房が弱々しく動いていたおかげで、風邪をひかなかったのが救いだ。

彼は外見を見事に裏切るような口汚い言葉を吐きながら、ふらふらと廊下に出た。

トイレを探して閑とした廊下を彷徨っていると、妙な音が聞こえたのでそちらに足を向けたら、浴場があったのだ。

「朝日を拝みながら朝風呂ってのもクールだねー」

天然の露天風呂。岩づくりの広い浴槽は源泉掛け流し状態で、常に滝のように湯が流れこんでいる。外気が冷えているので、温泉の蒸気が見事な湯けむりになって辺りを覆っていた。

夏音はそんな神秘的な空間に射しこむ朝の清浄な光を満喫している最中であった。

こんな時間に誰も来ないだろうとタカをくくり、完全に一人くつろぎモード。心を完全なるオープン状態へと解き放っていた。しかし、そんな時に限って上手くはいかない。オプチミストには優しくないのが現実というもの。

「あら、誰かいるの？」

そんな矢先にふいにかけられた声に、夏音はザバンッとお湯に沈み込んだ。思わず溺れかけたのは不可抗力だ。

ほんわか間延びした透明な声。まぎれもないあの子である。

「ム、ムギ！？　どうして！？」

水面に顔を出すと、濃い湯気の向こうに人影が見える。つまり、

いるのだ……夏音以外の人間が。つまり、その姿をこの場所で拝んではいけない異性が。

ゴクリ、とツバを呑み込む。

「もしかして夏音くん？」

ざばざばと取り乱している夏音とは裏腹に、のんびりと悠々たる調子でムギが声をかけてくる。湯気が立ちこめているので、お互いの姿ははっきりとは見えないが、彼女も一糸まとわずという訳ではないようだ。まだギリギリセーフの段階である。

「脱衣所で俺の服みなかったの！？」

男女の区別のない浴場だから、ムギが入ってくるのも不思議ではないが――気づけよ。

「あれ、そういえば夏音くんのお洋服だったのねー。すっかり忘れちゃってたのね」

あくまでも、のほほんとした態度を崩さない。暢気にも程があると夏音は憤慨した。

「と、とりあえず脱衣所に戻ってくれると嬉しい。そして、俺の着替えを待っていてくれないかな！」

ちゃぷん。

「失礼しまーす」

「もーぅ何やってんのこの娘はー！」

夏音が視線を落として狼狽えている隙に、ムギが岩で固められた同じ浴槽に入ってきた。

「マナー違反だけど、見逃してね」

「いやタオル入れたままお湯に浸かるとかはどうでもよくて！　いや、見えていないけどね」

何故、朝からこんなに血圧を上げなくてはならないのか。自分は基本的に低血圧で、朝に二行以上の台詞を吐きたくないし、ましてや怒鳴りたくなんてないのだ。現状、心臓は途方もない速さのＢＰＭで動いている。だって男の子だもん。

「ムギさん。あなた年頃の娘でしょうよ」

「えーと……ちょっと恥ずかしいけど。夏音くんだったら平気な気がして……」
「そんな根拠のない信頼を置かれても……」
身に余る光栄だが、この少女は少しは人を疑った方がいいと夏音は心配になった。男というのは総じて異性をエロイ目で見るもので、何より自分もそんな男である。
しかしムギは完全に腰を下ろし、おどけた口調で「まーまー。いいじゃないですかー」とか言っている。
こんな警戒レベルだと将来痛い目に遭ってしまうかもしれない。
（あ、わかった。男って意識されてないんだ）
自然と導き出された答えに肩を落とした。
入ってきてしまったものは仕方がない、と諦めて一緒にまったりすることにした。顔を半分だけ鎮めてぶくぶくと泡を立てていると、ムギが「んー」と伸びをする。
「綺麗ねー」
「うん。湯けむりに朝陽が射し込んでくるのがまた風情があるよね」
「うふふ、すごいのね。夏音くんたら風情なんて知っているんだー」
夏音の日本人度（命名・律）の高さがムギのツボにはまってしまったらしい。気品を失わない程度に身を震わせて笑っているのが伝わる。
馬鹿にされた訳ではないとわかるので、夏音もつられて頬をゆるめた。夏音はムギの笑いのツボが最近になって把握できるようになってきたなと感無量である。思えば半年以上も彼女たちと過ごしているのだと嬉しい溜め息が出た。ふぅーって出た。
「夏音くんたらおかしいの……っ！　お、おじさんみたい……っ」
長い溜め息を、オッサンの歎声と例えられるのも哀しい話である。
彼女が体を動かす度に夏音はどぎまぎとする。近くにいればお互いの顔が確認できる程度の視界が助かった。
近くにいなければあまり意識をしなくても平気。ムギは声だけの存在。いわばエコー。

「どうして夏音くんの髪ってこんなに綺麗なのかしら」
「近っ！？」
よもや接触されていた。ついでに頭も洗おうと解いていた髪の毛をひとすくいされる。
「綺麗な色よねー。あれ、根本のところが……？」
借りてきたネコのように大人しく髪を触らせていた夏音は「ああ？」と呻いた。
「この色は地毛じゃないからね」
「え、そうなの？」
「本当はブロンドなんだ」
「えーそれも見てみたい！」
「えー黒髪でもいいじゃないか」
「黒髪もいいけど……もしかして小マメに染め直しているの？」
髪だけではない、眉毛に……睫毛もだ。時折ムギが夏音の顔をじっと眺めた時に感じた違和感の正体はこれだ。
しかし、それは想像するにとんでもない手間がかかるはず。
「ん。ま、ね……」
急に歯切れが悪くなった夏音につられたように黙ったムギは髪の毛をいじくる手を休めて、出すべき言葉を彷徨わせた。
おそらく理由が、あるのだ。軽く踏み入れることができないもの。
「ごめんなさい。気に障ったかしら」
「別に……向こうじゃ誰でも染めてたからね。俺も黒いのが好きだから染めてるだけ」
「そう、なの……？」
「ムギの髪は染めてないんだろ？」
今は濡れないようにアップにしているその髪。ムギの髪はブロンドというには明るさが抑えめ、ただ地毛というには明るすぎるような黄金色と栗色の中間といった色合いだ。
染めているかそうでないかは目を凝らしてみればわかるもので、夏音にはそれが彼女の地毛だという認識があった。

「うん……母方の血筋がね……」
立場が逆転してしまった、と今度はムギが口ごもり、まごまごしだした。
「俺はムギの髪のほうが綺麗だと思うな」
「あ、ありがとうー。あ、夏音くんもブロンドだったらお揃いみたいでよかったのにね！」
「ふふ、そうかもね。でも日本人って何で髪の色なんて気にするんだろうなー」
「うん、まるで馬鹿みたい」
普段の彼女を知っている者からすれば、思いがけないほど厳しい口調だった。まるで知らずのうちに本音が漏れてしまったみたいに。
湯気は相変わらずもくもくと浴場に充満している。夏音は長くお湯に浸かりすぎたのか、若干のぼせてきたのを感じた。
互いにふぅ、と息をついた。
言葉にしなくても、お互いが察してしまった。言葉を超えたところで痛い共感が胸に突き刺さり、気まずい空気が流れる。
「さて。少し長く浸かりすぎたかな。俺は先に出るからムギはゆっくり温まっておいでよ」
タオルを引き寄せ、しっかりと体に巻き付けた夏音はじゃぶんとお湯を出た。
「え、ええ。また後でね」
「おぉ、ひとっ風呂浴びたし二度寝でもするかなー」
と余裕を吹かせたものの、風呂を出た途端に十一月の冷たい空気に晒された身体が急速に冷えてしまった。
夏音は足早に室内に戻り、熱めのシャワーを浴びてから脱衣所の衣服を急いで着こんだ。ドライヤーで長い髪を乾かし、乱暴に櫛を通す。何となく、一刻も早くこの部屋から出た方がいいと勘が働いた。
その勘は見事に当たり、風呂を出た瞬間に寝ぼけ眼の唯に遭遇してしまった。

ぎくっと心臓が飛び跳ねた。

「あひゃ～、かのんくん……ぷーりん……へるす……まいこぉ……いぇー」

目の前の夏音をきちんと認識しているのか怪しいが、どうやら半覚醒状態らしかった。謎の呪文を唱えながらふらふらとした足取りで廊下の先へ消えていった。

ほっと胸をなで下ろしてそれを見送った夏音は、背中に嫌な汗をかいてしまったと顔をしかめた。

「まあ、温泉はいくらでも入れるからいいか」

とりあえず二度目の惰眠をむさぼるために、居間へと向かった。

「夏音はまだ起きないのか？」

「まだソファで寝てたよ。よっぽど疲れたのかなー？」

「あ、醤油とって」「はーい」「それみりん」

「まあ、遅くまで運転させちゃったしな……」

「なんだ澪～？　自分の作った味噌汁を早く飲んでもらいたいのかー？」

「ち、違うっ！　そういう事で茶化すなアホ律っ！」

わいわいと騒がしい調理場には朝餉の芳香が漂っている。

食事に関しては、完全に自給自足することになっていたので、事前に買い込んでおいた食材を分担して調理しているのだ。

「オハヨー」

眠気まなこをこすって夏音が起きてきたのは、食卓にひと揃い並んだ後だった。

「相変わらず朝に弱いな……」

髪の毛ごとソーセージをもふもふと咀嚼している夏音を見て律が呆然と半ば呆れたように呟いた。

しかし、それが夏音クオリティ。

午前中からは全員が自由に温泉をまわる時間となっている。草津に散らばる多くの外湯をまわるだけまわるのだ。

湯当たりしてしまわない程度にさっとあがればいくら梯子しても案外へっちゃらなのだ。

とりあえずみんなで湯畑を見て、饅頭や煎餅の試食にありついたりしてから、各自で行きたい所へ散らばった。

夏音は以前に滞在した時にすべての外湯をまわり尽くした男である。さて、今回はどこに行こうものかと首をひねっていたところ、

「ヌッ！？」と背後に戦くような気配を感じてバッと振り返った。

「お茶飲んでたらみんなに置いてかれたよ夏音くん……」

その正体は、半べそかきながら背後霊よろしく夏音にひっついていた唯であった。

「らしいね」

ふっと笑って言うと唯は頼りなさげなに夏音を見上げた。

「みんなどこ行ったのかな？」

「かなり足早に駆けてったから、たぶん目星をつけた場所があるのかも。不安ならメールいれとけばいいじゃない」

「そだねー。えっと、りっちゃんうらみます、と……」

「置いてかれたのは自業自得でしょうよ」

「冗談だよー。今、どこかなー、と」

「ま、どこに行ったかは想像がつくけどね……」

草津の効能は皮膚炎の人には大変人気だと聞く。他にも、草津の温泉はあらゆる疾病、肉体の疲労に効くという。

そういった意味では、応用が利くというか。体重を気にする女性

たちにもそれらしい効果があると信じられている。
　澪が部室に持ち込んでいた雑誌の巻末付近に『絶対痩せる！？温泉が新陳代謝を高めることで……』という特集記事があった。
　夏音は何気なく雑誌を手にとっただけなのに、しっかりとページの端を折り込んでいるのと、何回も開いていることで自然とそのページを開きやすくなっていたことでその気まずい見出しを目撃してしまったのだ。
「澪もダイエット戦士に鞍替えするのかな」
　別に、どんな澪でも彼女の個性だと思う。そう納得してあげることが大人の対応ではないだろうかと思った。
「ま、唯には関係ない話だな」
「え、なにが？」
「なんでもないよ。とりあえず、もう律たちは一つ目のどこかに行ったんだろう。オススメの所があるからそっちに行こうぜ」
「ほぇー。オススメってどんな風に？」
「お肌がツルツルになりますぜ……」
「ほ、ほぉ！？」
「ま、どこ入っても一緒だろうけど。あそこは特に効能が強い気がするんだよね。アッツアツだけど」
「アッツアツ！？　江戸っ子かい？！」
「江戸っ子だ！」「おほぉ！？」
「Ｓｈｉｋａｍｏ…」
　夏音がふと顔に影を作り、唯の耳に顔を寄せる。
「な、なんと！？」
「イェス」
　眉根をぐっと寄せて真剣な表情になる唯とうなずき遭う。
　二人は互いの返事を待つまでもなく、駆けだした。
「あ、唯そっちじゃない！　だから！　人の話を聞きなさい！」

（痩せる……私はこれで痩せる……これで……ヤセル……ワタシ……ヤセ）

「澪―いいかげんに出ようぜー」

「出ない」

「のぼせて危ないっつーの！」

「やだー」

律は既に十五分はお湯に浸かっていると計算した。別に普通の風呂なら十五分も長い時間とは言えまいが、何せここは草津温泉なのだ。

お湯があっついのだ。

湯量、効能ともに豊富な草津の特長として、どの温泉も温度が高い。さっと入る分には良いかもしれないが、長湯には向かないと思われる。思われるのだが――

（何でこいつってこんな意固地……）

律は長年付き合っている親友の妙なところで発揮される意地の強さにすっかり参っていた。そして、こういった流れの先の顛末として澪がどうなるかも飽きるほど見てきた。

「ゼッタイ後になって後悔するに決まってんじゃん」

「特集では三十分は入らないといけない、って書いてあったもん」

「おいおい、それは休み休みの話だろー？」

この女はきっちり読んでいるようで読んでいない。なぜ、雑誌の持ち主である澪より自分が記事の内容を把握しているのかと嘆いた。

「律は先にあがっていいよ」

「何で草津くんだりまで来といて、我慢大会しなきゃならないんだよー」

心の底からアホーと叫びたかったが、この幼なじみは口で言うより経験して理解させた方が早かったりする。

それに肉体的にも最後まで付き合ってやれる自信がない。

「わかったわかったー。そんなら気の済むまで入ってろよー」

そう言い残してざばんとお湯を出た。そして、そのままこのアホ

を煮えたぎらせてしまえ草津温泉、と念じた。
「て、いうかムギは全然平気そうだなー……どして？」
「いいお湯加減ねー」
真っ赤になっている澪とは違い、ニコニコと余裕綽々のムギの肌はつきたての餅のごとく白さを保っている。彼女の生態スペックがますます疑わしくなる瞬間であった。

「ゆ、唯！　まだいけるか～～！？」
「ら、らいじょうぶーまだ十杯はいけふ……うぷっ……やっぱ無理かも」
壁一枚で隔てられた男湯と女湯。風呂だというのにショートパンツに半袖姿という出で立ちの夏音は崩れ落ちそうになる精神を支え合うために唯とエールを掛け合った。いや、彼女も無理そうだった。
「どうしたぃ、もう限界かい！？」
「Ｎｏ　ｋｉｄｄｉｎｇ　ｐｏｐｓ！！　とっとと黙って流せやっ！」
「威勢がいい糞ガキだなっ！　女みたいな顔してる癖にやりやがる！」
「顔は関係ないだろ、うぷっ……ちょっ、ペース早いって……あ、バカ！　やーめてっ！」
「めんこい面しやがってよー。うちの倅の嫁に来てほしーぜッキショー！」
「男だっつってんだろうがコノ……Ｄｕｍｎ！！　って流しすぎだｓｈｉｔ！！　Ｙｏｕ　ｂａｓｔａｒｄ！！」
「上半身だけでもいいんだがなぁ……俺はいいんだけどよぉ」
「Ｓｃｒｅｗ　ｙｏｕ！！」
「Ｙｏｕ　ｐｕｎｋ……Ｗａｓｈ　ｙｏｕｒ　ｆｕｃｋ、ｎ　ｍｏｕｔｈ！！」
ふいに流暢というより、カンザス辺りで聞こえそうな訛りの英語

がオッサンから飛び出た。
それに続いて今まで見たこともない量のアレが投入される。
半分に切られた竹を伝ってものすごい勢いで落ちてくるアレ。箸で掬うには不可能な次元である。夏音はそのまま箸を構えた格好のまま呆然と立ち尽くした。
「ひゃっひゃっひゃ！！」
それを見て高笑いするオッサン。
「悪魔ー！　くっそー今回はいけると思ったんだけどなーー」
夏音はその場に崩れ落ちた。その瞬間、壁の向こうから悲鳴が聞こえた。
「もう無理～～～」
壁の向こうで崩れ落ちる音が聞こえた。

「夢破れて山河あり……っぷ……」
「何だ唯～。急に詩心に目覚めたのー」
「松尾芭蕉が詠んだんだよー。夢が叶わなかったって……ぉえっ……ことじゃないかなー」
「そうかー。あっ……ぷ……ひぅーアブネ。芭蕉はよくわかってんねー」
何もかもが、違うが。
夏音と唯の両名は外湯施設にある無料の休憩場で横になっていた。もとい、グロッキー状態であった。
「くそー。英語わかんなら最初から言っておけってーの」
テンションが異様な方向に上がり、思わずスラング言いたい放題だったと後悔する。
「おしかったなー」
「おしかったねー」
二人して楽な姿勢を探して、横になる。

【挑戦者求ム　流しわんこソーメン　食べ切れたら『大友夜』の甘味全品無料券贈呈】

喉から手が出るほど欲しい商品だった。

流しソーメンとわんこそばをかけた恐ろしい種目だった。温泉の風景にそぐわない竹でできたレールがあり、上からどんどんソーメンを流されるのだが、そのペースがだんだんと上がっていくという地獄のルール。

最初は「案外イケるかも」と思うが、中盤を超えたあたりで、めんつゆを足している時間もなくひたすら流れ来るソーメンをすくい口に入れ、かまずに飲む、という作業の繰り返しだ。

別の名を苦行という。世の修行僧はこれに挑戦するべきだと思う。

未だ達成したものはいないという噂だが、そもそも終わりが見えない鬼ゲーである。

「大友夜のスイーツが……」

「うぅくやしひ……それより、お腹がくるしひ……」

韻を踏んだ台詞を吐きながら横で同じように苦しむ唯を見て、やっと冷静になった頭が「馬鹿なことをしたもんだ」と後悔を滲ませる。

せっかく観光に来ているのに、何故苦行に赴かねばならなかったのだろうかと。

「後で運動でもしないとご飯が入らないよこれ……」

「うぅ、そだね……」

「唯、俺たちってバカかな」

「……そだね」

どこか似たような行動をとる軽音部ｉｎ草津。

「みんな疲れちゃった？」

唯一、体力に余力があるムギは、討ち入りを果たした直後の赤穂浪

士のごとく疲弊しきった他の面々の様子に首をかしげた。
「温泉って入りすぎるのもいけないんだね……」
唯が漏らした一言に全員が無言で同意した。それは、まさに格言であった。
今日一日で七つ以上もの温泉をめぐった彼女たちは疲れを癒すどころか、どっぷりと疲労にまみれていた。
「澪にいたってはゲッソリしてね？」
夏音は当社比七十％ほどまで細くなった澪が目について仕方がなかった。途中から合流したが、お前に何があったと聞くに聞けない空気もあった。
「今日はもう何もしないでゆっくりしてたいや……」
言うまでもねーと意見が一致した。

夜になってすき焼きを食べた後、夏音は前に話してあったとっておきの秘湯に案内すると皆を車で連れ出した。
でこぼことした山道を車で十分ほど行ったところで車を止めた。
「ここら辺、何もなくないか？」
「そう。ここからは歩きだから」
「えーこの寒いなかー！？」
律は口をとがらせて盛大にブーイングを送るが、まあまあとムギやその他に窘められた。
「夏音くんがこれだけ言うんだから、きっと驚くほど素敵なのかも」
そうにちがいない、と自信満々で若干ハードルをあげられた気がした。ナチュラルに人を追い詰める天才だなとゲンナリしながらも夏音は黙って頷いた。
車を停車させてから、足早に険路を上ること十五分弱を歩く。
「くらいよーこわいよー」
「ほら、全員しっかりと前の人にしがみつきなよ。足下気を付けて」
整備されていない山道など初体験である少女たちの歩みはのろのろと。先頭を歩く夏音のもつ懐中電灯の灯りだけが頼りであった。

「しかも、何でそんなたよりないの持ってきたんだよー」
夏音が持つ懐中電灯の光があまりにも弱々しく、頼りないので律が恨み言をもらした。
「こうしないと楽しみが半減するんだよ」
ぶつくさと文句を言われるのをなだめつつ、先頭の夏音がふんふんと鼻歌をすさびだす。誰もが聴いたことのあるベースライン。
「ウェンザナイッハズカム！」
「その曲ほど陽気な気分じゃないよ！」

それから、えっちらおっちら歩き続けてしばらく経つ。
「着いたよ。でも、まだ顔をあげるなよー」
夏音は立ち止まり、一時の間を置いた。
「はい、目をあけていいよー」
「う、わ……すご」
ふとそう呟いたのは誰だったか。また誰かの溜め息が漏れる。
ここに来て、少女たちは夏音が執拗なまでに明かりを避けようとしていた意図を理解した。
億千の星空だった。銀色の海。王様の宝石箱の中身を夜空にぶちまけたような夜空。
山の木々に阻まれ、空は見えないようになっていた。さらに細々とした明かりのせいで、お互いが縦一列に並んで足下を見ながら歩いてきた。
明かりを抑えていたのは暗闇に慣れさせるため。すべて彼の計算のうちだと知る。
青白く光り、赤い紅を刷いたような星々の御前。しばし、だれもかれもが自然の壮大さに打ち臥せられていた。そこにはぽかんと口をあけて空を仰ぐ者しかいない。
「これだけじゃないぜレイディーズ。何か音が聞こえないか？」
夏音がいつまでも星空に魅了されている彼女たちに悪戯っぽく笑った。

「……水の音？」
かすかに、というよりハッキリ聞こえる豪快な水の音。夏音が「Ｃｏｍｅ　ｏｎ」と足下を照らして再び歩き出した。
その場所からはごつごつとした斜面が続き、慎重に下りていくとまたもや視界が切り拓ける場所に出た。
「た、滝！？」
そこにあったのは四、五メートルほどの滝。ゴゴゴゴ、と高度から大量の水が流れ落ちる時に発生する轟音。先ほどの音正体はこれであったのだ。またも驚嘆にくれる彼女たちに、得意顔の夏音が言った。
「ではお嬢さま方。例のものは持ってきましたか？」

「しっかし、こんなところにまで温泉が湧いてるなんてなー」
滝を少し下流に行ったところに、小さなログハウスがあった。犬小屋を少し大きくした程度のものだが、そこには「滝の下温泉」と表記されてある。
実のところ、こんな山奥にあったものとはつまり「温泉」のことであった。河原のあらゆる所に温泉が湧き出しており、その中でもきちんと岩で囲まれている場所がある。
今、その中で五人の男女が足をのばしていた。
リラックスしてこの世の幸福を受けたような弛緩した表情を見せていた律が、夏音に言う。
「そっかー。夏音は混浴狙いだったんだなー」
さもありなん、と納得されそうになった夏音は慌てて否定した。わかるよー、みたいな顔されてもゼッタイにどん引きされているのが見え見えだった。
真横で唯までもが「カノンくんたらえっちー」と言っているのが

心に突き刺さる。
「だ、だから水着持ってこいって言ったんじゃん！」
「怒るなよジョーダンだろー？」
かく言う夏音も異性の前ということで、しっかり水着を着込んでいる。
「ちゃんと水着買っておいてと言ったのに。何で俺だけこんなの？」
「いちおーみんなの精神衛生上の配慮だ」
どきっぱりと言われた夏音は「……ソウカ」と悲しげにうつむいた。皆が買い出しに行く際、水着が無いのでサイズだけ伝えて買っておいてもらったはずだった。
いざ用意された物を拝むと、下はショートパンツ。上は超薄手のノースリーブ……これは女の水着じゃないのか。
「最近じゃ、男でもそういうのが流行ってんだってよー」
「そ、そうなの？」
律はそんなワケねーだろと夏音に聞こえないように笑った。
「綺麗だなー。なんか星空の中を漂ってるみたいだね」
「ほんとだなー」
見上げれば満点の星空。落ちてきそうで怖いくらいのスケール。じっと見詰めていると自分がその中に浮いているような感覚。
「いくら暗くても、空気が澄んでないとなかなか見れないんだよなー」
「まさに冬ならでは、って感じなのねー」
冬の澄み渡った空気の方が星空を見られる確率が高い。夏音が冬が好きな理由の一つだ。
一同は片時の間、言葉を忘れてその光景に魅入っていた。
「ありがとうね夏音くん」
その静寂を破ったのは思いがけない唯の言葉だった。
「どうしたんだ唯？」
「何となく夏音くんにお礼言わなきゃなって思って」
本当に何となく言っただけらしい。何だよそりゃ、と苦笑して夏

音は足をあげてお湯をじゃぶんと跳ねさせた。
「でもなー。考えられなかったなー男と温泉入る日が来るなんて」
「私はたぶん一生ないと思ってたけど」
「とか言って夏音なら許すのかなー？」
「そんなこと誰も言ってないだろー！？」
「でも夏音くんだとそこまで嫌な感じがしないよねー」
「ほんとどうしてかしら？」
全員がそんなことを言い始めた。
ぽつりと律が「ま、コイツが男と思えってのが無理だろ」と呟いた。かろうじて澪にだけ聞こえたらしく、同意とうなずく。
「みんなして何だよいきなり？」
空を見上げるのを中断して、思わず彼女たちを睨む。
「まあ、みんな感謝してるってことだよ！　特別ってことだろ？」
「そ、そーお？」
居心地が悪そうに震えて夏音はぶくぶくぶー、と顔までお湯に沈み込んだ。
「もしかして夏音くんたら赤くなってる？」
「こ、こんな暗さで見えるはずないだろ！」
思わず水面から半腰に。いくらムギでもそこまで夜目が冴えている筈がない。
「そう言うってことは図星じゃん！」
「違うわアホ！」
「夏音くんかわいー」
きゃっきゃうふふ、とからかわれる責め苦を味わい、憤慨した夏音は彼女たちに向けてざぱんとお湯をぶっかけた。水のかたまりが律のデコに命中して飛散した。
「ぬわっ！　何すんだコラァ！」
「うるせーやい！」
「お湯が目にー」
巻き添えをくらった唯は酸性が強めの湯が目に入って沁みたらし

い。
「あ、ごめん」
「お返しじゃー」
「わぶっ！？」
「わ、わたしもお返しーとりゃー」
「ムギまで！？」
「あに他人事みたいなツラしてんだよ澪っ」
混ざれ、と。
「わ、私は何も言ってないだろう！？」
「ぶぅ、沁みるーー」
「あ、そんな恥ずかしいぞ律！」
「いいじゃん他に誰もいないんだからサー。澪もどりゃー」
律が勢いよく澪の方へ突っ込んでいく。
「み、澪ちゃん水着が……とれ……」
「Ｏｈ……Ｊｅｓｕｓ…」
軽音部はどこにいてもこんなものなのだろう。それが瞬く星空の下だろうと。

＞ｉ２３７５２―３０２９＜

二泊三日の小旅行は何だかんだと無事終了した。
夏音は全員を送り届けた後、襲ってくる眠気に全力で抵抗しつつ帰路についた。ガソリンはメーターぎりぎり。何とか家まで持ってくれて間一髪であった。
いつものごとく、ソファーでぶっ倒れていると携帯の着信音が鳴る。古くさいパンク。　これはジョンが大学時代に若気の至りで活動していたガチパンクバンドの音源だ。完全に廃れて久しい「ガチ」な感じが全面に出ていてジョンの黒歴史認定第一種の物である。　夏

音は嫌がらせとしてジョンからの着信音に採用している。
「ハイ、どうした？」
『カノン……元気かい？』
「何だよ。二週間前に会ったばかりだろ」
『い、いや……特に変わりはないかなと』
夏音は、この男はいったい何を言っているのだろうと怪訝な表情をつくった。
「別に何にもないけど」
『それならかまわないんだ。そういうことで』
「待てよジョン」
『な、な、な、な、なんだ？』
どもりすぎだ。
「マークのヤツはツアーだよな？」
『さ、さあーどうだったかな。彼のマネージメントは僕の管轄じゃない。それだけかい？　それじゃ』
「まあ、別にいいんだけどさー。それにしても母さんが『マークにすべて割れてしまったの』って言うもんだからビクビクしてたんだよなー。まあ、あれから三週間経ったし杞憂だったかな」
『……』
「ジョン？」
「す、すまないカンン！　いま忙しいんだから！」
ガチャリ。
「変な奴……それにしてもジョンのくせに生意気な……」
というより何のために電話してきたのだろうか。
夏音は「まあ、ジョンだし」と結論づけ、風呂に入る頃にはそのことをすっかり頭の中から消し去ってしまった。
確実に彼が怖れるモノが近づいてきていることなど知らずに。

第十四話（挿絵あり）（後書き）

お約束的な温泉のエピソードですね。ラブコメみたいにならないのが、夏音クオリティ。

番外編「山田七海の生徒会生活」（前書き）

今回、番外編です。明日で投稿開始から一ヶ月が経ちます。もっと多くの人に読んでいただけたらいいなあ。

番外編「山田七海の生徒会生活」

「つまり、どういうことなんですか？」
「あのね。山田くんにばかりこんなことを頼むのは申し訳ないんだけど……ね？」
「いや……ね？　じゃなくて。何で僕がそんな役目を？　香坂先輩とか適任じゃないですか」
「うーん。本当はその予定だったんだけどね。あの子、今年の夏はご家族で海外旅行らしいの」
七海は即座に「ちきしょうあのブルジョワがーっ」と心の内で叫んだ。もちろんそのような烈しい嫉妬に満ちた内心はおくびにも出さない。
狭量な男だと思われたくないから。このように涼しげな態度を心がけながら、実際にはそこまでクールになりきれていない男が山田七海という男であった。
現に両手を小さく合わせて小首をかしげる曾我部めぐみの憎いくらいの可愛らしさといったら。七海の口許は知らずのうちに緩んでしまっている。
普段は可愛らしい、というより美人な女性の先輩だが、ふとした時に可愛くなれるという強力な武器を持っている。火力は言うまでもない。
「……わかりました」
「ホント？　ありがとー。やっぱり男の子って頼りになるわね！」
破顔一笑、きらびやかな笑顔で七海に礼を言ってくる先輩に小さく息をついた。
「あぁ……また過剰労働の日々」
最後に惚れ惚れするくらい艶やかな笑みを七海に向けて、さっさと自分の座席に座ってしまった先輩を見送った七海は再びだだ漏れ

そうになった溜め息を寸で噛み殺した。
ただでさえ七海は女子生徒の人口が多い桜高の中でも、さらに女密度の高い組織に所属している。その名は生徒会といって、あろうことか唯一の男子生徒にアレコレを押しつけてくる素敵な先輩方が生息している。
唯一の男子。
ふざけるな、と七海は憤然と主張する。それはこの環境を俗にハーレムだと称する者がいるからだ。ハーレムとは漫画や小説だと主人公の特権のように扱われるシチュエーションだ。まさに聖域にも等しい選ばれし者の空間のはず。
だとしても、やはり七海はモブキャラなのだ。自分にとって正しい現実は「男だから」という理由で言い様にこき使われている毎日。力仕事は七海の出番だと期待の目線を送られる。最近では当然のように扱われている。
頼りにされていると考えたら嬉しくなくもないが、それにも限度がある。同じ学年の同期達はそろって七海に同情の視線を送ってくるが、先輩が率先して七海に仕事を頼むものだから年功序列に従う彼女達には何もすることができない。
ただ時折、お茶を机にさし置いてくれたりして七海はちょっぴり涙するのだ。

そして今も仕事を押しつけられてしまった。

ソフトボール部の応援、らしい。公式試合でかなり良いところまでいったソフトボール部の決勝の応援に生徒会からの代表が馳せ参じなくてはならないらしい。
どの部活に限らず、生徒会はこのように部活動応援などに借り出されることが多い。何の形式か知らないが、そういうことになっているらしい。
他にも、他校の行事に借り出される時はことごとく生徒会から選

ばれる。加えて、その犠牲は最近では七海が主に受けているのである。一昨日など、吹奏楽部の演奏会にどこだかのホールまで東京まで向かい、観客席から一緒にスィングするハメになった。

七海はいつまでこんな状況が続くのだろうと不安になった。生徒会の仕事はこんなに過密なものだろうか。聞くところによると、他校では生徒会の役割など学校祭の準備くらいのものだという。

今はもうすぐ夏休みという遊び盛りの高校生にとってこれ以上ないドキドキわくわくの時間である。

あーどこに行こうか。あれもこれも、それもあなたもと予定を立ててはしゃいでも罪はないはず。

だが現実は浮かれた七海を打ちのめすかのように残酷なストレートを放ってきた。

夏休みにまで生徒会の仕事が入っているなど、聞いていない。それも秋から始まる学校祭の準備などに休日出勤（この場合祭日出勤）を強いられる日々だそうだ。

何故、どうして、ホワイ。自分ばかりがこのような外れクジをひかなければならないのだろう。

（僕は書記だぞ書記！　もう書記の役割とか超えてるだろう！）

ここ最近で一番でかい仕事は、タイだかフィリピンだかバングラデッシュだかのストリートチルドレンを救うための活動に必要な金集めの企画のリーダーにされたことだ。

井戸を掘るのに必要なお金を集めるための方法って高校生に三十万円も集められるかという給与区の無茶ぶり企画だった。今どきの芸人でさえ、こんな企画はまわされないだろうに。

七海、集めた。

生徒会主催のチャリティーフリーマーケットに加え、残った品物をせどりをしたり、古物商との交渉をしている内に、品物の中にと

んだ値打ち物が紛れ込んでいたことが判明した。するとどうだろう。三十万どころではない金額が生まれ、呆然としたことは言うまでもない。

しかしだ。企画を進めたのは一年の七海であった。企画書を深夜かけて作成して、多方面へと走りまくった。

それが事もあろうに、七海があまりの金額にぼーっとしている内にもっとも憎き副会長・香坂成美がその手柄をまるごと掻っ攫っていった。

あの時ほど殺意が湧いたこともない。

いつか見返してやる、と復讐の炎を燻らせているのは秘密である。唯一不安なのが、燻ったままこの炎が消化してしまわないかというくらい。七海はあまり意志が強くないのだ。

（よし！）

秋が過ぎると生徒会も引き継ぎである。現在の最高権力である曾我部先輩と副会長である香坂がいなくなれば、この悪政もましになるはず。

その時こそ、自分の時代だと七海は密かに生徒会を牛耳ろうと目論んでいる。

こんなに働いている自分が後任を任されないはずがない。そして、事あるごとに仕事をしない副会長をやり玉にあげて後輩に伝えていくのだ。

七海は知らず顔をにやけさせていた。もしかしたら声も出ていたかもしれない。

「ちょっとななみー。気味悪い笑顔を浮かべてないで、暇ならコーヒーおかわりお願いできるー？」

「はい、ただいまよろこんでー！」

そう。今は我慢の時なのだ山田七海っ！　と必死に自分に言い聞かせた。

「山田くん。明日、八時に駅前に集合でいいかしら？」
「へ？」
時は夏休み。生徒会室にて七海が少なくとも三つ以上の仕事の資料をまとめていたところ、隣の席にいた真鍋和が何の気なしに話しかけてきた。
「なにが？」
「なにがって……明日、ソフト部の応援に行くんじゃない」
確かに、そんな予定が入っているが。
「え？　あれって僕ひとりで行くんじゃなかったの？」
「山田くん一人じゃ心許ないから、一緒にいけって」
「こ、心許ないって……」
「香坂先輩が」
「あの女っ！！」
自分は優雅に海外へと避暑するくせに、後輩に尻ぬぐいをさせる負い目を感じないのか。
「先輩をあの女なんて呼んだらだめじゃない。あ、ちなみに伝言で『大変遺憾ではあるけど、これにかこつけてオオカミになったらだめよ』だって。オオカミってどういうことかしら？」
さらにとんでもねー伝言を残していったものだ。これがそのまま遺言になればいいのに、と七海は舌打ちした。
「あの人の妄言は気にしちゃだめだよ。きっと頭ぶっ飛んでるんだから」
「ちょっ、山田くんっ！」
「ていうか思い切り体力バカで体育会系なのに、海外へ避暑って。去年はヴェネツィア行ったって聞くし。今年はどこだっけ、北欧？

フィンランド？　ストックホルム？　ベルギー、オーストリア？　あの人の場合オーストラリアで岩昇りしてる方が想像できるよね」

「山田……くん……」

和の声がか細くかすれる。彼女の場合、香坂先輩に可愛がられているから先輩の悪口のようなものを聞いて気分を悪くしたのかもしれない。確かに自分でも陰口みたいになって情けないな、と七海は気まずい空気を誤魔化すように咳払いをした。

「ま、まあ。任された仕事だからね。一人より心強いし、助かるよ」

「ななみ～～～～アウト～～～～」

「えっ……」

間違っても和の声ではない。彼女はこんな地獄の三丁目あたりから響いてきそうな恐ろしい声ではない。幻聴でないならば。七海は今すぐ死ぬことになる。

目の前の和は盛大に顔を引き攣らせている。その目線の向かう先にはそれはそれは恐ろしいナニカがあるのだろう。七海は滝のように噴き出した汗がYシャツを濡らしていくのを感じ、おそるおそる後ろを振り向いた。

「なーなーみーくーん。今、可愛い後輩から耳を塞ぎたくなるような暴言が吐かれたような気がしたんだけどー気のせいかなー」

「ひ、ひ、ヒィヤーーッ」

「どうもー。北欧が似合わない体力馬鹿女ですぅー。こんにちはー」

こんにちは、の時点で七海の顔面はよほど女子には似つかわしくないほどの握力を備えた手に覆われていた。万力のような強力で無情な力がぎりぎりと七海の顔の形を変えようとしている。

「ろ、ろうひてこうひゃかせんぴゃいがぁおっ！？」

七海は「噂をすればなんとやら」ということわざの意味をその身でもって体感していた。そういえば英語では「悪魔について話せば悪魔がやってくる」という言葉だったはずだ。

この場合は「ゴリラいついて」本当にゴリラがやってきた。
「あれー言ってなかったけー。今日、夕方からのフライトなのよー。時差が違うからねーお昼に出てお昼に着くわけじゃないの」
そろそろメガネが壊れそうである。思えばこの相手には何度もメガネを破壊されかけるレベルの暴力を頂戴していた。形状記憶という現代技術の恩恵がなければ、七海のメガネが壊れたであろう回数は計り知れない。
次第に七海は自分の足が地面を離れようとしている感覚を得た。顔だけを支点に持ち上げられている。どれだけ馬鹿力なのだ。
「いたひいたひいたひ～～メガネこわれっ！」
「今ね。ツボを押してるの。太陽穴といって視力回復に良いんですってー。これでメガネが壊れても大丈夫でしょ」
何という暴力理論。噂ではなく林檎を握りつぶせるその握力がさらに開放されていく。
「いやぁーーーーっ」
山田七海、魂のシャウトは生徒会室を駆け巡る。あまりに凄惨な光景に悲鳴を噛み殺していた和が慌てて割って入った。
「せ、先輩っ。それはやりすぎだと思います」
その瞬間、七海を締め付けていた力が消えた。解放されると、七海は地面にバタンと倒れ伏した。和の慈悲に心から感謝した。
七海を締め殺しかけた犯人はふん、と鼻をならすと少し柔らかい口調になった。
「まー可愛い和に言われたら仕方がないわね。あ、その角度から上を見上げたら踏みつぶすわよ」
あんまりである。七海は床と熱くキスをしながらそんな思いでいっぱいだった。確かにこの角度から上を向いたら素敵な光景と相まみえることになるが、そんなのはこちらからお断りであった。
命をベットして得られるほど良いもんじゃない。
よろよろと立ち上がった七海は、きっと目の前に立つ女を睨んだ。
「ここに何用ですか！」

にっこりと微笑む香坂成美。花が咲いたようなという表現が似つかわしい麗しい笑顔。

何といってもこの少女はゴリラ並の膂力を有した桜高生徒会の副会長その人である。

身長は女子としては高く、モデル体型といって差し支えない。現に街中でスカウトされたことも数度あるらしい。腰まで伸ばされた栗色の髪は毛先にゆるいウェーブがかかり、その髪全体からとんでもなく甘い匂いを放っている。

その容姿はむしろ深窓のお嬢様に類しても過言ではないほどの華やかさを持っているのだが、七海は彼女が未来から来た殺人ロボットだと言われても納得できる。

「おや、まあ」

おや、まあじゃねえよ。七海は決して口に出すことが憚られる暴言を心に落とした。人の顔面の形を強制的に整形しかけといて、すっとぼけたものだった。

「遺憾ね。夏休みなのに学校で働く可愛い後輩達の顔を見にきたらだめなのかしら？」

「ダメではないですけど……じゃ、もう見ましたよね。ほら、けっこう忙しい感じなんで、仕事に戻ります」

「どうしましょう可愛い後輩ににべもなくされちゃった」

全く気にしていない様子でよく言ったものである。七海は宣言通りに机に向かって座り直し、作成していた資料を端から見直す。

「てい」

横合いから入ってきた腕に資料が吹き飛ばされた。見覚えのある腕だ。

「なんなんですかっ！！　馬鹿野郎！」

「野郎じゃないわ」

「女郎め！」

「よく知ってたわね、女郎なんて」

七海の返しに目を見開いて驚いてみせた彼女はにやっと笑い、七

海の頭をがっしり掴んだ。目が笑ってなかった。
「でも、女性に言って許される言葉じゃないわ。訂正しなさい」
「お馬鹿さま」
「ふふ、まあいいけど」
傍から見ていた和は「いいんだ……」と驚きを露わにしていた。
この二人のやり取りは今期の生徒会が発足して以来の名物となっていた。
いわゆる戯れというやつで、本気で人が傷ついたりしていないので、基本的に傍観の姿勢がとられる。たまに肉体的に七海が傷つくこともあるが。
「まあ、せっかくだから聞いてよ。私、これから北欧に行くわけなんだけど」
やけに北欧、の部分を強調した香坂はうきうきと続けた。
「私の代わりに応援に行ってくれる後輩ちゃんのためにお土産を買ってこようと思うの。それで、二人は何がいいかなーって」
もしかして、そのために来たのだろうか。七海は目を丸くしてぱちくりさせた。
前から思っていたが、この先輩はどこか律儀な部分がある。もちろんメールや電話で済ませてしまえばいいことなのだが、少なくとも自分だけ遊びに行くことへの負い目があった訳だ。
「うーん。北欧って言っても、何があるんですか」
ピンと来ない。これがディズニーランド、とかであれば七海もすんなり頼めるはずなのだが。
「何だ。人に北欧似合わないとか言うくせに、何の教養もないんじゃないの」
ここぞと不敵な笑みを浮かべて七海を見下すような態度の香坂に七海はむっとした。悔しいが、その通り。
「私はムーミンのグッズとか売っていたら欲しいですかね」
「あっさすが和っ。わかってるー。ムーミンね！　とっても可愛いの探してくるわ！」

すらりと答えた和にとびきりの笑顔を向けた香坂はいまだに答えあぐねている七海の方をじっと見て、溜め息をついた。
「あぁーあー。これだからダメなのよね、七海は」
「今、考え中なんです！」
何だムーミンとは。日本のアニメじゃなかったのか。七海は和がすんなりご当地の品を答えたことに度肝を抜かれていた。
北欧。何が有名だろう。サウナ、白夜、フィヨルド、ノルウェイの森。いや、お金にできないプライスレスな知識ばかりが頭をめぐってしまう。シュールストレミング……は死んでもイヤだ。
「キ、キシリトール！　ガンム！」
若干かんだ。しばし悩んだ挙げ句、ぽんっと出たのがこれである。七海は口にした途端、羞恥心にもだえた。
よりによってキシリトールガムとは。いや、これでも向こうにちなんだ物の名前が出ただけで褒めていただきいのだ。
「え？　そんなのでいいの？　日本にたくさん売ってるじゃない」
香坂はかなり怪訝な表情で七海を見詰めた。絶対に変な奴だと思われているに違いない。
「い、いやー。本場のキシリトールで健康な歯になりたくて」
「えー。あなた頑丈そうな歯じゃない」
たしかに以前、正拳を頂戴した時にも折れなかった自慢の歯である。だが、ここは男の意地というものがある。一度言ってしまったものを撤回するのは七海的にちと恥ずかしい。曖昧に笑っていると、先輩は腑に落ちない様子だったが、ややあって頷いた。
「じゃ、キシリトールね。詰め合わせとか売ってたらそれにするわ」
晴れやかに笑ってから先輩は「じゃ！　行ってくるわね！」と言って教室を出て行った。
止める間もなかった。
「本当にそれ訊きにきただけ……？」
「さあ……」
七海は嵐のように過ぎ去っていった先輩を思ってしばし和と顔を

見合わせた。

それからの日々は猛烈に忙しかった。過密日程の中を仕事に明け暮れ、夏休みらしいことをする暇もないくらい。きちんと和と二人でソフト部の応援にも行ったし、ボランティアにも参加した。

桜高を代表してパネルディスカッションに曾我部先輩と二人で参加したことはひと時の安らぎだったが、その他校内の雑用が生徒会に押しつけられた。

もちろん男手の有効活用は忘れず、資料室の整備や倉庫の大掃除などもやらされた。

その中で七海にとっては副会長の姿がないと肉体的にも精神的にも楽だという発見があった。

彼女の姿がないだけでこれだけ変わるものか、と驚いたものだ。普段から肉体言語を七海に解き放ってくる香坂は淑やかな容姿を全力で裏切る男っぽい絡み方をしてくるのだ。

七海としては常に腰が引けた状態で言いなりになる他ない。断ってもいいのだが、首を横に振った時の自らの末路を想像すると恐ろしい。

七海としては他の女の先輩方もそれはそれで恐ろしいのだが、香坂は別格だった。

ああ楽だ。この世の春だ、と七海は浮かれていた。部活動で鬼コーチがいない時の練習ってこんな感じなんだろうな、と顧問不在時にやけにテンションがあがるバスケ部の気持ちを知った。

そんな夏休みが半分ほど過ぎた中、そろそろ休み明けに入る生徒会最大行事である学校祭の準備のため、生徒会の者は例外なく生徒会室に集まるようになっていた。

そして、香坂成美が帰ってきた。

一番の繁忙期に悠々と海外でいる訳にはいかない、という理由で一人だけ旅行先から帰国したのだそうだ。何とも責任感あふれる行動である。もっと普段に活かして欲しい、と七海は思う。

「あ、ななみー。まだ残ってたの？」

下校時刻が過ぎて久しい時刻。生徒会役員は準備のために校内に残ることを許されていて、たいていの生徒はそのまま生徒会室に缶詰状態であったが、ここまで遅い時間に残る者はいない。七海を除いて。

「持ち帰りの仕事とかあまりしたくないんで、片付けちゃおうかなって」

少なくとも高校生の台詞ではない。これではワーカーホリックな会社員さながらである。

「ふーん。よし、もう帰るわよ」

「え、帰るわよって。今言ったこと無視！？」

しかもその物言いでは、自分と彼女が一緒に帰るみたいではないか。

「あのね。一人でも生徒が残っていたら先生方も帰れないんだからね。そこらへん、ちょっと考えなさい」

その言葉にはっとする。確かに、時刻は八時を迎えようとしていた。いつもこのくらいの時間まで学校に残る先生は数人いるから、あまり気にしなかったが、確かに七海が帰らないために残っている先生もいるかもしれない。

「わかりました。もう終わりにします」

しかり、と七海は素直に香坂の言葉を受け入れ、資料を急いでしまい始めた。七海が机の上に乱雑になっていた資料をかき集めるのに苦戦していると、背後で呆れたような溜め息が聞こえた。

「はぁー。何でもっと綺麗にできないのかしら」

その言葉にむっとしても七海は手を止めない。
「資料の数が多すぎるんですよ。パソコンとか使わせてくれたらもっと楽なのに」
この数をアナログで片付ける時代はとうの昔に終わったはず。わざわざパソコン室まで出向き、往復するのは手間以外の何物でもないのだ。
「それなら前に予算通ったから、もう少し待ってちょうだいよ」
「あれ、通りましたっけ」
「ええ。私とめぐみで田代先生を押しきってね」
七海は机に向かったままで見えないが、背後の香坂が最上級の悪い笑顔をしているに違いないと思った。何だかんだと生徒会の重要事項は会長と二人のコンビでもぎとってきたのである。どんな手腕を持っているのかは甚だ怪しいが。
「あぁーもう苛々するわねー。男ってみんなこうなのかしら」
待ちくたびれたのか、好き勝手言いたい放題の相手に七海はかちんときた。
「別に待ってなくていいですよ。僕、わりと最後に出るんで慣れてますし」
「あほたれー。後輩残して帰る先輩がいるかい」
「普通、先輩が先にあがるものじゃないですか？　逆は気を遣うけど」
「いいから！　ほら、もっとてきぱき手を動かすの！」
見かねた香坂が七海の斜め横からぬんと身を乗り出して資料を片付け始める。何故か彼女は七海をかすめるようにカットインしてきたのだ。肘がこめかみをかすった。彼女はナチュラルに七海にダメージを与えるのが趣味なのだろうか。
（うわ……この匂いは……あふん）
見た目は麗しく、性格は乱暴がさつに近いのにやっぱり女の子でふわふわ良い匂いがする。七海の苦手分野である。
女の人の匂いの不思議は不肖・山田七海の十六年の歳月をもって

しても解き明かされていない。
七海が手を伸ばしたままの姿勢で硬直している間に、香坂の手は動き続けてあっという間に資料はまとめられていしまった。お互いの腕がふれて、「あっ……もじもじ」という空気は一切起こらなかった。むしろ動かない七海の腕を邪魔とばかりにばしばしと叩いてよけさせられていたのだが。
「は、はやっ！」
「ふふー。副会長をなめないでよ」
得意気に笑う香坂が七海を見下ろした。こういう時に彼女がどういう言葉を欲しいか七海は知っていた。
「おみそれいたしました」
少し大げさに頭を垂れる。すると偉そうに鼻を上機嫌に鳴らした彼女のできあがり。
どれだけ敬われたいのだ、と七海は俯いたまま軽く舌打ちをした。そんな七海の不遜な態度には気付かない香坂はまた打ったように明るい声を響かせた。
「さ、とっとと出るわよ」

全ての電気を消し、鍵をかけると職員室によって教職員に挨拶をする。この時間だととっくに正面玄関は施錠されているので、職員用の出入り口から校外へ出た。
「流石にもう日は落ちたわねー」
「あぁー、そうですね」
七海の三歩ほど先をずかずか歩く香坂成美。結局、一緒に帰ることになった訳であるが。
（どうして、こうなった）
この先輩といると何をされるか予測不能なのである。というよりどのような攻撃が加えられるかが未知数、七海に蓄積する防御パターンも限りがある。

「ななみは家どこなの」
「本田町ですけど」
「あれ？　もしかしてご近所さんだったの！？」
「近所って……もしかしなくても先輩はあの豪邸が建ち並ぶ……」
高級住宅街である。七海の自宅までは豪邸と称すべき家が軒を連ねている住宅街を通過する必要がある。
「そうよ」
お嬢様だということは判っていたが、本当にそうらしい。
「でも通学途中とかに遭ったことないわね」
「まあ、たまたまじゃないですかね」
「ふーん。あんた朝早かったっけ？」
「いえ、これといって普通ですけど」
「ふーん」
自分からふっといて「ふーん」しか言われないのも悲しい。怒りというより悲しい。
（ていうか、あそこまで同じ道ということか）
気が重くなって沈黙していると、些細なところも見逃さない香坂であった。
「なんか急に大人しくなったわね。私と帰るのがいやなの？」
「滅相もございません」
イエス！　とは言えない物騒な雰囲気を醸し出しながら言われても困る。とはいえ、気が重くはあるが嫌悪するまででもない。ノーでもないけど。
「ていうか、いつもあんな時間まで残ってるの」
「今さらですか。あれだけの仕事量なんで普通に帰ってたら終わんないですよ」
「むー。そっか……悪いことしたわね」
「え？」
この先輩にしてはずいぶんと殊勝な物言いである。言葉だけでなく、心からすまなそうな態度をとる香坂に七海は狼狽えた。

「なんか仕事押しつけまくっちゃってさ。あんたもほいほい請け負うからつい、てやつ？」
「はぁ。つい、ですか」
「それに私、この学校入って二年間も男の後輩なんていなかったからさ。どうも加減というか、調子がわかんなくて」
「まあ、女子校だったわけですしね」
「そうなの。まさか共学になるなんてねー。予想外もいいとこ」
「だから扱き使ってしまったと？」
それが理由だとしたら、何ともやるせない。つい、で過労死でもしたら末代まで祟ってやると心に誓っていると、前を歩く香坂がぴたっと足を止めた。
「あなた、聞くけど」
「……ハイ」
七海は真剣な表情でこちらを振り返った香坂に、ごくりとツバを飲み込んだ。
「マゾではないの？」
「んな訳あるかっ！」
敬語も吹っ飛ぶくらい反射的に叫んでしまった。幸いにも「生意気なっ」と拳が飛んでくることはなかった。七海の言葉を受け取った彼女は「ふーむ」と思案する様子を見せる。
「後輩に押しつけてばかりじゃダメな先輩よね。よし！　これからはほどほどにするわ！」
腕を組みながら言う台詞ではないが。そしてあくまで尊大な態度は崩れないのだなぁといっそ惚れ惚れするくらいの潔さに七海はしばしぼーっと見とれた。
「そうしてくれると非常にありがたいですが」
「そうでしょう。ま、というわけでハイッ」
どう前の文脈からつながるか分からないが「というわけ」で香坂は鞄から小さな袋を出して手渡してきた。
「え、何ですかこれ？」

「北欧のお土産よ。北欧が似合わない女からの、でよければ受け取りなさい」
「ああ……キシリトール」
そういえば旅行前にそんな事を頼んだ覚えがあった。本当に欲しかった訳じゃなかったので、忘れかけていたが。
「いいからっ！　それで毎朝毎晩スッキリしてることね」
ぐいっと両腕に押しつけられた袋は予想していたより重みがあった。
「あと、ついでに蚤の市でよさげな小物があったからおまけを同封してあげといたわ」
「おまけ？」
何にせよ、と中身を確認しようと七海が袋に手をかけたのだが「アウト～！」という怒声に阻まれた。
「普通、この場で空けるかい！　ななみよ。チェリーボーイよ！」
うるせえよ、と七海は毒づいた。もちろん心の中で。
「そういうのは笑顔で『あざっしたー』って言って帰ってから空けるものよ。礼儀よ。マナーよ！」
「あぁーわかりましたよ！　香坂先輩、ありがとうございました！」
「どういたしまして！」
どこかやけくそになった二人はその後、沈黙のまま帰路を突き進むことになった。会話らしい会話はなかったが「お腹すいたー」「今晩、なんだろ」「買い食い、はまずいか生徒会だし」という短い応答が続いた。
何と香坂宅に至るまでの通学路はほとんど一緒という事が現実に判ったところで、彼女の自宅に到着した。
その豪邸の様相を細かく描写した瞬間、山田七海という人間の何かが壊れそうになるので割愛。
「さて、お別れだけど」
門の前で仁王立ちをきめた香坂が神妙に切り出した。
「あんたは見た目、かなりダサイ。気を遣わなさすぎよね」

「別れ際に思春期の男の子を傷つけるのが仕様ですか？」
「どうせ私服も地味なんでしょうよ。だから、あなたはありがたく思った方がいいわ」
「流石に僕でも泣きますよ。いいんですか、自宅前で後輩を泣かせても。わんわん泣きますよ」
ただでさえ「差」というものに打ちひしがれかけているというのに、この追い打ち。流石の七海も涙を禁じ得ない。
「あー、ちがくてっ。もー何て言ったらいいのかな……とりあえず、とりあえず帰ってお土産を見なさい。優しい先輩からの心遣いを知ることでしょう」
「はぁ……よくわかりませんが、了解しました」
七海が首を振ると香坂は「また明日！」と家の門をくぐって行ってしまった。訝しげな顔をしたまま、しばらくその場に突っ立っていた七海は肩をすくめると歩き出した。

「ふーん。意外にぎっしりだなぁ」
自宅に帰り、夕飯を食べて風呂に入り、テレビ番組を適当に流し見していた後にお土産をついに開封することにした。まずは一番大きく目立つ箱はキシリトールのガム。向こうのよくわからない言葉で成分表示などがされているが、空けてみるとなかなかの量だ。一口食べてみると目が覚めるような涼しい味わいが舌に広がって美味しかった。
「ん、これかな。おまけ」
ガムとは別に小さな袋があった。中をおそるおそる開けてみると、出てきたのはブローチだった。最近では男がつけてもおかしくないのだろうか。だが、デザインは悪くない。
色は白に近いピンクで花弁をイメージしているだろう形をしたデザインで、ところどころアクセントに使われている青色の材質はもしかして。

「宝石？　じゃないよな」
あの先輩がこんな高価なものをくれるだろうか。でも、金銭感覚が狂っているとすればその辺の宝石など軽い出費ということもありえる。
「ま、なんかのパワーストーンってとこかな」
とはいえ、何ともセンスのある一品である。派手すぎず、かといってシンプルなセンスが漂って七海がつけても不自然ではない。洋服につけてもいいし、鞄につけてもいいかもしれない。
「成る程。これを機にお洒落にはげめよってことか」
そんなんじゃいつまでたってもチェリーボーイだ、と言いたいわけか。
「まあ、ありがたく受け取っておきますかね」
七海は、あんな先輩でも自分に優しい一面を見せてくれただけでよしとした。
もちろん七海は宝石に興味がない日本の男子高校生であったし、その宝石の名前も宝石の持つ意味など知るよしもなかった。後々、これが痛い目に合う布石であることは神のみぞ知る。

後日、会長とこんな会話があった。
「あ、山田くん。そのブローチ素敵ね」
「え？　これですか？」
「うん。成美のと似てるのねー。私、あれ見てから欲しくなったから、似たようなの探してるんだけど、なかなか見つからなくてね」
「へ、へーそうなんですか」
「成美のは黒っぽかったけど、なんか対になってるみたい。いいなー私も欲しいなー。ね、山田くん。卒業祝いに私がそれ欲しいって言ったらどうする？」
悪戯っぽい口調だが、割と目が真剣と書いてマジと読む感じだ。

「す、すみません。これはちょっと差し上げるわけにはいかないんです」
「そ。ざーんねん」
名残惜しそうに七海のブローチを撫でていた先輩がにっこり笑って七海に言った。
「大切にしてね」
だが返事を聞かないで彼女は行ってしまった。七海はやっぱり女性にも評判が良いブローチなんだと鼻高々になった。
「もちろんですよ」

第十五話（挿絵あり）（前書き）

投稿開始からちょうど一ヶ月が経ちました！！

お気に入り件数も伸び、嬉しいばかりです。

感想や一言でもコメントをいただけるとモチベーションにつながります。

第十五話（挿絵あり）

「まったく人がごみごみと……」

サングラス越しの瞳に映る風景に、男は思わず下品な言葉を吐き捨てた。いわゆるFが頭につく言葉だ。人の多さといえばアメリカの方が圧倒的だが、こうも狭い空間に人が密集してくると話が別である。

不快度がぐんと上がり、男はますます剣呑な空気をその身に帯びていくばかりだ。ぐいと眉根を寄せてしかめ面をつくりながら、背の低い人間たちがぞろぞろと蠢く様子を見る。

その中の幾人もがチラチラと自分に視線を向け、こちらと目が合うとぱっと逸らす。そんなことの繰り返しに男は少々やけになった。試しに彼の肌とは対照に白く輝く歯を出して手を振ってみた。

視線の先にいた小さい子供が怯えて親に抱きついたのを見て、悲しくなる前に恥ずかしくなった。こんなのは自分のキャラではないのだ。こういう時は赤面してもわかりづらい肌でよかったと思う。

彼らに悪気がないことはわかる。しかし日本ほど他の人種に対しての意識が曖昧な連中はいないと男は考える。

ただ、自分たちとは違うナニカ、という認識だけがあるだけでそこにあからさまな嫌悪の表情、排他的な視線が含まれることは少ない。

あくまで少ないというだけで、全くないという訳ではないが。

おそらく彼らは外国人の中でも、褐色の肌をもつ自分の姿が珍しいのであろう。

男はふと自分の格好はどうだろうかと気になった。どこか浮いたところはないか。奇をてらったファッションは好まないが、日本人のスタンダードからして突飛なものに映ってはいないだろうか、と。

日本人のファッションはなかなかイケているのだ。
もともと知ってはいたが、こうして街中でじっくりと過ぎゆく人々を観察していると独特のセンスを極めている者が多いことに感心させられる。
今日は、これから出向く場所のことを考えてフォーマルなジャケットを選んでもらった。これを選んでくれた人は細身な自分にぴったりだと褒めてくれたから信頼できるはず。
男はやはりこの視線はただの好奇心からなるものだろうと結論づけた。
彼は日本が嫌いではない。ましてや日本人に抱くネガティブな気持ちはまったくない。
（ここはアイツの国でもあるからな）
自分がリスペクトする人も日本の生まれが多い。だからその無意識な不躾さを寛容の精神で平然と受け流すことなどたやすいことだ。
一つの問題が解決したところで、いまだに彼が不機嫌なのは別の理由だった。
「Ｓｈｉｔ…．あいつめ、首を洗って待っていろよ……」
その一つが今回の来日の目的というか原因となる人物の事を思い出すだけでムカつくから、というもの。
二つ目の理由が、
「何でこんなに路線が多いんだ……っ！！」
彼はもう二時間も駅から駅へと渡っている。
今、踏み出して行くべき場所を見失った者はただ佇むしかないのだ。人はそれを絶賛迷子中という。

時は遡る。
今年度の新入生が入学して二月ほど経ったある日。
桜ヶ丘高等学校に勤続十年目。男女交際未経験年数イコール実年

齢の美術教師・竹中ヤスオは、生まれて初めて匂い立つような美女というものに接近を許した。許したというか向こうからひょこひょこと勝手に近づいてきた。

どこの学校も同じだろうが、桜高の教師たちは時折校門に立って、勝手に抜け出す生徒がいないかを見張る。その役目はちょうど授業が入っていない教師が担うことになっており、特に決まったローテーションはない。

そもそも滅多に抜け出す者などいないのだし、ちらっと形だけ見回るくらいだ。

そのまま校門まで歩いてヘイ異常なしUターン、ポーゥッ、と去ろうとした間際、「Ｈｉ！」と声をかけられたのだ。

まず、その声にぎょっとした。

すっと耳に入ってきた声は無視や否定することを許さず、発声した者へと目を向けるような力を持つ声。

どこまでも透き通っていて、鈴をふったような声かと思えば、ところけるような甘美な響きを含んでいる妖艶さ。純真な少女の声でありながら、色気のある成人女性のような声。

聞いただけで竹中は金縛りに遭ったように固まった。

（うわー外人さんだなぁ）と脳みその隅っこで思考が流れる。

さらにその容姿。腰まで流れるウェーブがかったブロンドヘアーはまるで絵画から抜け出してきた女神のような様相を呈しており、細身ながら膝丈のスカートから伸びる白い脚はすらっと引き締まり、形の良い腰が強調されている。

威厳すらある美貌を有しながらも、女性は人懐っこい笑顔を浮かべて竹中に向かって手を振っている。

これは夢にちがいない、と現実逃避しかけたところで目の前に迫った金髪美女に意識を取り戻すことができた。

「な、何か御用でしょうか？」

「ここは桜ヶ丘ハイスクールよね？」

「え、はいその通りですが」

少しクセのあるイントネーションながらも流暢な日本語が飛び出てきたことに知らず安堵の息がもれた。

少し落ち着き、いろいろ頭の中で思考できるくらいの余裕ができた。

もしかしたら自分はこの美貌の人物の役に立てるのかもしれない。別にそこから何かが進展するなんて思いもよぎらなかったが、こんな人のために何かできるのは誇れることだろうなーと思った。

「そ、ありがと」

「え？　ちょっ……」

女性はそれだけ言うとあっさりと竹中の横を通り過ぎていく。無情にも竹中の心中など知るはずもなく。

しばらく校門の前には、女性が残していった甘い残り香を胸一杯に吸い込みながら笑顔の彫刻と化した竹中の姿があった。

三十分後、やおら意識を取り戻した彼は、たった今出会った美女がどこかで見たことがあったような気がして首をひねった。

しかし、とっくに自分の担当教科の時間だと気が付くと顔面蒼白となり校舎へ戻った。

通りゆく人の目を惹く見事な金髪を揺らしながら女性は道を闊歩していく。彼女は校庭をうかがいながら、天真爛漫な少年少女たちが元気に走り回っているのをサングラス越しに確認した。

規則正しいかけ声、喚声、大歓声。校庭の隅にはドッジボールをやっている生徒の姿も目に映る。

「元気なものね」

安堵の息がそっと漏れた。息子の様子を見る、という彼女の目的は果たされなかったが、この場所なら大丈夫そうだと確認できただけでも収穫であった。

モデルのようなプロポーションを携えて、颯爽と歩く彼女の姿はまるで映画の一幕のように洗練されており、あつらえたようにその

視線の先には真っ赤なスポーツカーの横で待ち構える男の姿があった。

彼女は男の姿を確認するや、ダッと駆けだして男性の胸に飛びついた。

「ああーんカノンと会えなかったー！」

ほんの一瞬。瞬きするだけの時間の内に彼女は一寸前のクールな装いを地べたにかなぐり捨て、べたべたと甘えた声を出し始めた。

そんな彼女の様子に破顔一笑の男性も、がっしりと彼女を腕に抱く。

「まー何とかやってんだろうさ」

「んー、良い子たちが多そうだったけどー」

「そんなら平気だな！」

「そうかしらー？」

「そうとも！」

「ダーリンっ！」

「よしよしいい子だアルヴィー」

そのまま二人はいちゃつきはじめた。

「まー外人さんはダイタンですなー」

桜ヶ丘高等学校建立前よりこの土地に住むキヨさん（八九）は目の前でラブりだした二人を見て、感心したように呟いた。

暗い。

白い。

暗い。

しばらく暗い。

やっぱり白い。何もない。

ぱちくりと瞼が疑わしげに開いたり閉じたりしている。

夏音は朝が弱い。起きた瞬間に思考が冴え渡るような事は十年に一度の大珍事というレベルだ。今まさに自分が明瞭な視界を得ていることはよほどの異常事態か、夢だろうと考えた。

夢にちがいない。

何故なら今の自分はこの真っ白い天井を見ることはできない。現在、夏音がベッドから天井を見上げると特大のアニメポスターがあるのだから。

（じゃおりんがいない……）

夏音が大好きなキャラクター。毎朝、変わらぬ笑顔で自分に微笑む彼女がいないなんてありえない話なのだ。

明晰夢という種類の夢は、夢の中にありながらある程度の思考が可能とされている。彼はこれが夢だと勘づいていた。

静かすぎる。世界から音が逃げてしまったようだ。

ベッドから起き上がって靴を履こうとした瞬間、吐き気に襲われた。

ああ、こんな感じだった。

頭の片隅で、この感覚は今でも鮮明に覚えているものだなと感心する一方、涙がぼろぼろと溢れてそれが床にこぼれるのを絶望的な気持ちで見送った。

身を丸くして吐き気が通り過ぎるのを待つ。亀のように首をひっこめ、頭を抑えてひたすら。

やがて心が落ち着きを取り戻していく。機械的に。ひどい時は気絶していることもあった。

すべて嘘に決まっている。

偽りの夢だから、もう一度ベッドに戻って目を閉じれば……あるいは、悪夢から覚めるために階段とか高いところから飛び降りてみれば目が覚めるかもしれない。

そう考えたところで、彼に実行する勇気も気力もなかった。

この時の世界の色はどれも褪せたように美しくなかった。

絶望的な感情はどんどん広がっていく。

こんなにヒドかったっけな、と首をかしげる自分。

また、ああ何てひどい世界なんだろうと嘆きもがく自分がいた。

「大丈夫だよ夏音くん！　こういう時は、とりあえずお茶だよ！」

ふと聞こえた間延びした声に意識が白く溶けた。

「！？」

関節のどこかがぱきりと鳴った。目の前には甘く微笑む蛇池歌織（じゃいけかおり）。

通称じゃおりん。夏音の心のオアシスの一人である。

いわゆる目覚めなのだと脳が理解する。

夢というのは実によくできている。夢の中でどれだけその世界の住人に馴染んでいたとしても、一瞬で現実の自分を取り戻す。

夏音はいやな汗でぐっしょりと寝間着が濡れているのを感じた。

どこもかしこも布が肌にひっついている感じがひどく不快で、すぐにシャワーを浴びようと起き上がった。

ここは日本だからベッドから起きても靴を履くことはない。唯に貰ったもこもこしたスリッパに足を突っ込んで部屋を出る。

しばらくして、熱いシャワーを頭から浴びてそっと目を閉じる。

ひどい夢だった。

いくらなんでも誇張がすぎる、と夢の中の自分が馬鹿らしくなった。悲劇のヒロインにでもなったつもりだろうか。夢の脚本家のセ

ンスが疑われる。
あそこまで、ひどくはなかった。あんな絶望に負けそうになって、死にたくなるような過去は嘘だ。
かつて抱いたことのある感情だという点に嘘はないが。それを言えば、一度抱いたことのある感情を良い方にも悪い方にも倍増させ、膨らませてしまうのが夢というものなのだろう
何にせよ、すべては終わった話だ。
確かに思い出せる荒れた時期。けれど、夏音には救いの手をさしのべてくれる人がいた。
だから、あんな絶望に負けそうになることはなかったはずだ。
「もしや深層心理っていうやつか……」
後でその辺の情報をチェックしてみようと決めて、シャワーを止めた。
「ていうか、今何時だろう」
備え付けの時計を見る。
世間ではランチタイムと呼ばれる時間だった。
やけに目覚めがいいと思った。

「あれー夏音ちゃんどしたのー？」
「重役出勤ってやつ？」
「あはは、おそよー」
教室に入ると、クラスの女子が堂々と現れた夏音に気が付いて声を投げかけてきた。
茶化すように声をあげて笑う彼女たちに「まだ時計の時差調整してないんだー」と言うと「もう半年以上たってんのに！？」「うっけるー」と大ウケされた。
夏音は今日もどっかんいわせてやったわと満足して頷いた。
そんな彼女たちとの華やかな戯れをかわし、指定の席へ座ると周

りの男子が三々五々と集まってきた。
「夏音くん新記録達成だね！」
「今度の言い訳はどうするの？」
（うるさい朝からムサ苦しい）、と夏音は心の中で盛大に舌打ちした。世界は昼と呼ばれている時刻だが。
「メインディッシュは後からくるものさ、とかどうだろ？」
「うわーっサブいってお前！　いや、でも夏音なら嫌味じゃないかも……」
「夜中に妖精さんのパーティに出かけていたらついつい寝坊しちゃったワ、とかは？」
「なげーよ」
「じゃ、こんなんは……」
随分と勝手なことばかり抜かしている。夏音は自分の頭上で飛び交う言い訳の応酬をうんざりした面持ちでやり過ごす。というより、どれだけレパートリーを持っているのだ。
「フツーに謝るよ。言い訳はないですー」
「うわ、見た目に反してなんて男らしい」
「アメリカって言い訳文化なんじゃないの？」
一言洩らすたびに、こうした反応が起こるのはどうにかならないものか。
「あ、夏音くんご機嫌ななめ」
「お前のせいだ」
「何を言う。貴様だ」
「お前だ」
「私だ」
「お前か」

うぜえ。
この日本語が夏音の気持ちを表現するにぴったり。彼はこの三文字の日本語が大好きだ。さあ言おう。言ってしまおう。

大きく息を吸い込み、周りでざわめく馬鹿な男どもに怒りをぶちまけようとした時。
「立花くん！」
「ん、おはよう七海」
夏音の怒りを寸で遮ったのはクラスの委員長・山田七海（お世話になっています）その人であった。
怒気で膨れあがったオーラをばちばちと滾らせ、夏音をきっと睨んでいる。思えば彼はこの一年で言い様の知れぬ迫力を身につけた。
「おはよう、じゃないだろう！　いろいろ言いたいことあるけど、普通この時間になったら来ないだろう！？」
「いやー七海の顔を見たかったんだよ」
「また君はそんなことを……っ！　からかうのも大概にしたまえ！」
「ぷっ……た、たまえ、だって……古代の日本語？　ムスカ様がそんな感じで……」
「ち、ちがっ……つい言ってしまっただけだ！」
「たまえ？」
「大概にしやがれ！　と言おうとしたんだ！」
「それはキャラが違うだろ」
「う、うるさいな！　どうせ寝坊したんだろう？　部活するためなら放課後に来ればいいじゃないか？」
「だーかーらー。七海に会いたかったから？」
淡桃色の唇がぷるんと揺れる。夏音は七海を絶妙な角度から見上げ、甘く囁きをもらす。すると、彼は顔を真っ赤にして――、
「ッアァーーーーッ！！」
叫んだ。壊れた。瞬時にクラス中の視線が彼に集まる。
夏音と七海の会話はだいたいこんな感じに終わる。夏音にとって根が真面目な七海は誰よりもからかいがいがある玩具のような存在だった。
このように爆発する七海をクスクスと笑って楽しむ彼はイイ趣味の持ち主といっても過言ではない。

「な、何で掘られてんだよ七ちゃんっ」
実際のところ夏音はそれを痛快愉快と笑っているクラスの男子たちとも仲が悪い訳ではない。
入学当初はそれこそ避けられていたのだが。すでに仲の良い者同士で固まっていた男子グループと一緒に行動することもなく、ひどいもので体育の着替えの時間などは皆、何かから逃げるように夏音を一人だけ置いてさっさと更衣室から出て行く始末だった。
女子はというと、いつもキラキラとした瞳で夏音を見つめる者ばかりで、あまり話しかけてくれなかった。
そんな状況を打ち破ってくれたのは、軽音部のおかげに他ならない。律と澪の二人が教室で夏音と普通に話しているのを見て、じょじょにまわりの夏音に対する態度、警戒心というものが「お、こいつ意外とイケんじゃね？」的に溶けていったように思える。
ころっと態度を一転させた男子どもは何かと夏音をかまってきて、それが時折たまらなく煩わしい。日本人のくせに空気読んでくれない。
このように確実にクラスのマスコット的な存在として祭りあげられていた。
しっしと夏音が彼らを追い払い、周りの人が捌けたタイミングで声をかけられた。

「お前、いい加減にしないと部活にも影響出るかもしれないぞ」
声のトーンを聞いただけでとっても機嫌が悪いなとわかるのも珍しい。振り向くまでもなく、声の主が澪だとわかった。
「ダイジョブダイジョブ！　お茶の時間までには必ず来るようにするから」
「おい……うちはお茶飲み部じゃないぞ！」
「果たしてどうかな」
にやり、と夏音が笑うと「うっ」と澪がひるんだ。

「最近、音を合わせたのはいーつだったかなー！」
「い、一週間前……」
「まーまー。軽音部って何かしらねー」
「す、すいませ……って何で私が謝ってるんだよ！　夏音も原因の一人だろー！？」
「はいはい」
澪は受け流しやすい。チョロイともいう。冷静かと思えばことのほか直情型なので、飄々とかまえている夏音はひらりひらりとマタドーラのごとく彼女の突進を流しまくれるのだ。
「むぅ……今日こそは練習するからな」
「はーいはい！」
クスクスと笑って、憮然としている澪の鼻をぴっと押した。
「ぬぅっ！」
それをばっと振り払い憤怒の表情をつくる澪からさっと逃げ、教室を後にする。
後ろで澪が叫んでいるが、気にしない。どうせすぐに「はぅっ」と人前で叫んだことに気づいて縮こまるだろう。
担任に怒られるだろうか。先に職員室に行って適当に謝ってこようか。
何だか今日は気分が良い。夢見が悪かったにせよ、こうして日常の匂いを嗅いだことでどうしようもなくほっとしてしまったのだ。
幸い、つまらない授業はあと一コマ。担任に盛大な溜め息をつかれてささっと戻れば大丈夫。
彼は軽い心持ちで職員室のドアを開けた。

【Ｍｉｓｓｉｏｎ：夏音は校舎裏・地獄の掃き掃除の勅令を受けた】

「ってなんでじゃー！」
校舎裏で一人、ぽつんと竹箒を持たされた夏音は思い切り手に持

つソレをたたきつけた。
　この場所まで疑問を抱くことなく来てしまった自分も大概だが、よりにもよって誰もが嫌と言う学校で一番掃除したくない場所ランキング堂々一位、単独一位の校舎裏をたった一人で掃けというのだ。
「体罰と言ってもか、か……なんだっけ。かげん？　かごん？　じゃないよもう。とりあえず立派なｐｕｎｉｓｈｍｅｎｔだよこれは」
　日本の教師たちはＰＴＡとやらを怖れているはずだ。その名前を出してみればよかったと後悔する。
　掃き掃除と言っても、ついこの間まで大量にあった枯葉たちの姿は見えなくなっていたし、砂ばかりの校舎裏を掃く目的が見当たらない。
　最近、風が強かったからみな飛んでいってしまったに違いない。このまま自分も風のように消えてしまおうか、と思った。
　ふと何気なく思った。それだけだった。
　しかし、何心もなく思ったその「消える」という言葉に胸の奥がしくりと痛んだ。
「むぅ……」
　今日は夢のせいですっかりとナーヴァスな心持ちである。衛生的な精神のために一刻も早く甘いものを摂取しなきゃ、と思い至ったので掃除を放棄することに決めた。
　箒を用具入れにジャンピング投げ入れ、部室へと急ぐ。
「今日のお菓子はなんだろーなー」
　階段を上る。駆け上がる。銅の取っ手をひねり、バンッと扉を開けた。
　おや？　と思う。
　空気が違う。何だか凍りついた空気。
　戸惑いに満ちていた。
　それでいて何だかこの肌にぴりぴりくる緊張感に懐かしさを覚え

た。

夏音はするりと部室に入ると、すでに全員がそろっているのを確認した。

一人多い。

どう数えても一人多い。

しかも、そのプラスアルファは絶対に学生じゃない。学生じゃない上に日本人じゃない。

その男は新たに部室に入ってきた人物に気が付き、夏音の方へ振り向いた。ふっ、と大きく口角を押しあげる笑い方。夏音の記憶にある見覚えのある笑い方だ。

夏音の額を一筋の汗が零れる。

その男は顔にかけていたサングラスをやおら外す。

「Ｈｉ……Ｋａｎｕ？」

「マーク……。Ｊｅｓｕｓ……」

いるはずがない人物がいた。

回れ右して、ダッシュした。

二秒でつかまった。

夏音は今日が人生の正念場だ、と泣きそうになりながら「ほら悪い予感が正しかったー」と誰に言うまでもなく文句を言った。

「さっき職員室の方がえらく騒がしくなかったか？」

律はやけに閑散とした廊下を歩いていて不思議だな、と思っていたところに職員室の扉付近の人だかりに出くわした。

野次馬根性丸だしの生徒が溢れているのを見て「うわー、これには混じれない」と思った律は、特に関心の的を確かめないで部室まであがってきたのだ。

「誰か有名人かも、って話だよ。なんか校長先生がわざわざ職員室まで飛んできたみたいだよー」
律より遅れて部室へ訪れた唯は野次馬の一人、それも最初から事態を目撃していた生徒を運良くつかまえて事情を聞いたらしい。
「っへー。校長がねー」
やっぱり見ておけばよかったと律がぼやく。
「唯はその誰かさんを見なかったのか？」
「見たよー」
「見たんかいっ！」
律はがくっと椅子からずり落ちそうになり、澪は「うるさい」と睨んだ。そういえば唯は肝心なことを言い忘れるきらいがあるのを忘れていた、と律が頭をかいた。
「で、どんな人だった？　有名人？」
「んっとねー。後ろ姿しか見えなかったけど、金髪の女の人だったよ」
「それだけじゃなー」
「あ、後ろから見てもすごく美人だったよ！」
「背中だけでわかるのか」
「校長先生が顔真っ赤にして握手してたからきっと美人さんだよ！」
「な、何者だその人っ！」
「あと男の人もいてねー、すっごく校長先生になれなれしかった」
「やっぱ私見てこよーっと」
即実行を肝に銘じている律はがたっと机を揺らして立ち上がった。
そのやりとりをぼんやりと聞いていた澪はふぅ、と溜め息をついた。
「やっぱり野次馬しに行くんだな。そんなことだろうと思ったよ」
「ふーん。澪だって気になってるくせにー？」
「別に気になってない」
「ちぇっ。今日はノリが悪い」
澪は、ぶつくさと口をとがらせて文句を言う律を無視することに

した。

渦中の人物が有名人だと決まったわけではないし、それに有名人なら毎日のように見ている。

この部活だと、自分しか知らない事実。そこに多少の優越感を感じて密かに微笑んだ澪は、ちょうど読んでいた音楽雑誌の特集ページに目を凝らした。

特集は『マーク・スループ』というギタリストについてあらゆる装飾語を駆使して、彼のすごさを解説しているものだ。

六ページ半も使っているのはすごい。楽器についての専門誌ではない雑誌で機材の紹介に二ページも割いてくれているのは珍しい。楽器は違えども、プロの機材を知る瞬間は嬉しいものだ。

澪は「ん？」と見出しを二度見した。スループ、という姓。

（この人もスループ一家なんだ……）

自分にとって決して他人事ではなくなったそのファミリーネーム。こうして雑誌などでこの名を見かけると、改めて自分がとんでもない人物の近くにいるのだとおそろしく実感させられる。

十中八九このマークという男も彼の知り合いなのだろう。スループという単語はつぶさに『音楽家』であるという意味を含むのだから。

この人はどういったジャンルで活躍しているのだろうとじっくりと記事を読もうとした時。

『Ｓｉｌｅｎｔ　Ｓｉｓｔｅｒｓの変態ギターの奥義がここに明らかに！？』

という一文が目に飛び込んだ。

（こ、この人がギターだったんだ！？）

Ｓｉｌｅｎｔ　Ｓｉｓｔｅｒｓというプログレ色の強いロックバンドがある。

初期のアルバム以降はロックというよりメタル寄りの雰囲気だが、その特色はメンバー全員の技巧の鋭さから生まれるめまぐるしい展開である。全員が神業的なフレーズを怒濤の勢いで重ね合わせ、頭

がおかしくなってきそうなことを平然とやってのけるのだ。
澪がこのバンドを知ったのは一年ほど前だった。某レンタルショップで未開のCDを発掘していた最中、とあるCDアルバムのジャケットに惹かれて（いわゆるジャケ借り）とりあえず一枚借りて家に帰り、コンポで流してみたのだ。
気が付けばその日のうちにすべてのアルバムを購入していた。
それほどの吸引力をもつバンドである。
バンドの歴史としてはヴォーカルとドラムの二人、準レギュラー的なキーボードを抜かせばギターとベースのポジションが常に不安定なバンドだった。
不安定、といっても演奏力のことではない。入ったり、やめたり。初代から含めるとギターは四人くらい変わっている。
どうやら最新のアルバムではまたもやギターが変わったらしいという話は耳にしていたが、澪はそこまで気にしていなかった。
どれだけギターが変わっても、例外なく超絶技巧の変態ギタリストが加入してくるのだから。そもそも、澪としてはバンドとしてのサウンドの中心に座しているドラムとヴォーカルがいる限り、音楽性に問題はないだろうと考えていた。
最新アルバムは視聴で聴いただけだが、「またすごいギターがきたなぁ」と思った。
あの次元になると、すごさのインフレが起こってどれだけすごくても感覚が麻痺してくるという不思議。
（黒人の人だったんだ）
黒人のギターヒーローが少ないというのはいかにもな話ではないかと澪は考えている。ジミ・ヘンドリックスというジェフ・ベックやクラプトンにして「彼に勝てるギタリストは存在しない」と言わせた大御所はいる。
とはいえロックのギターヒーロー、メタル界の怪物ギタリストな

どと言われて思い浮かべることができる黒人ギタリストが何人いるだろう。

少し音楽をかじっている、などと言う人に問うても首をひねって答えに詰まるだろう。

Ｃｒａｃｋｄｕｓｔはガチメタル。レニー・クラヴィッツ、ロイド・グラント、ガンズのスラッシュ……はハーフだ。しかし、探せばいるといった程度だろう。世界は広いが、認知度の問題だ。

ここのメンバーは全員白人なはず。その中に違和感なく入って受け入れられる（ファンに）には相当の腕を持っていると思って間違いない。スループの名を背負う者としては面目躍如といったところだろうか。

澪は低く唸りながら記事の上に視線を這わせた。

（空間系が少しだけ夏音とかぶってるかな。やっぱりあれはプロ御用達なのかも）

こうして雑誌に夢中になろうとした拍子に、部室を出ようとした「ウギャーッ」という律の悲鳴が響いた。

澪は驚いて振り返った。振り返りつつ「いくらなんでもウギャーはないだろう。女の子として」と暢気に考えていた思考が凍り付いた。

「Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ．　Ｋａｎｏｎ　ｈｅｒｅ？」

平日、放課後。私立高校の音楽室で黒人に遭遇する確率は非常に少ない世の中だと思われる。

ましてや日常会話で使える英語を学んでいない日本の高校生が英語で何かを問われたときたら、フリーズしてしまうのは致し方ない事だ。

「Ｉ　ｈｅａｒｄ　ｈｅ　ｗｏｕｌｄ　ｂｅ　ｈｅｒｅ…ｈｅｙ，ｗｈｙ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｍａｋｉｎｇ　ａ　ｆａｃｅ？」

その男の肌は黒く、背が高かった。白いジャケットを着ていて、そのままジャズのステージに立っていてもおかしくない雰囲気を持っているが、何故か足下がスリッパ。

高級感あふれるハットにサングラス。落ち着いて見ると、お洒落だと言えなくもないが、彼女たちにそんな心の余裕はない。

律の喉から呼吸だけが漏れる。何かを話そうとしても、喉が言葉をせき止めてしまっている状態だ。

パニックにより真っ白な状態の律を見て、その黒人の男は訝しげに律をのぞきこんだ。すると「Ｏｈ！」と手のひらを叩き、ぱっとハットをとって陽気に一言。

「コンニチハ！」

誰もが思わず体の力がずるっと抜け落ちそうになった。

「は、はろー！」

せっかく向こうが日本語で挨拶してきたのに、テンパった律が英語で返す。すると、その男も笑って「Ｈｅｌｌｏ，ｌａｄｙ」と返してきた。

「アー、カノンはいますか？」

たどたどしくもしっかりと日本語を話してきて、伝わった。夏音がいるか。

この男は夏音を探しているということだ。

「あ、い、いません！」

（嘘ついた！？）

律が思い切り嘘をついた瞬間、唯、ムギ、澪の三人の心が一つになる。

「ソウデスカ……ここ、ケイオンブ？」

「イエスイエス！」

「Ｓｔｒａｎｇｅ……彼はケイオンブのはずです」

「い、いやその……」

このタイミングで律が澪たちの方を振り向いた。助けを求める目をしている。はっきりと救難信号を発信しているのがわかる。

しかし、勝手に嘘をついた律を助ける術が見当たらない。
何より、できるだけ巻き込まれたくないので三人は全力で目をそらした。
その瞬間、律の白目にギロッと血管が血走った。
腹をくくって、律は一人で応対する。
「今、いなくて。後で来る、オーケー？　あぁ……ヒー、カム、レイター」
めちゃくちゃな英語だが、それで伝わったのか男は「Ｇｏｔ　ｉｔ」とうなずいた。
田井中律、初めての異文化コミュニケーションここに成功。かと思いきや。
「ココでマッテます」
「へ？」

端的に言うと、田井中律は役に立たなかった。結局、彼女たちはそのまま男を中に通し、あまつさえ自分たちの席をすすめるハメとなってしまったのだ。
とりあえずおもてなしの心によってムギがお茶を出し、唯は珍しく緊張しながらもまじまじと彼を見詰めていた。わりと興味津々のご様子。
そんな中、澪は滅多に交流することのない外国人にがちがちに緊張していた。ちなみに普段接しているアレは外国人ではないと認識している。
よりにもよって隣の席にどっかり座られてしまったせいで、まるで借りてきた猫のように背筋を伸ばして固まっていた。先程から雑誌は同じページのままめくられていない。
（ひ、ひぃーっどうしよう。何か話しかけたほうがいいのかな。ていうかさっきからずっと黙ってるけど怒ってるのかな？　でもこう

いうのはムギとか唯とか律とかの出番だろうし）

自分より遙かに社交的なはずの彼女たちが話しかけないとなると、ひたすら重い沈黙が自分の胃を直撃してくるのだ。

自分が何か粗相でもしたら「オーゥ、ファッキンジャップ！」とか言われるのではないか。澪は頼むから誰かはやく喋ってくれ、と切に願っていた……が、誰もが同じくそれを願っていた。

（ムギなんてお嬢様で英才教育とか受けてそうなのに！？　外国とかもしょっちゅう行って他国のお偉いさんと会話とかしてそうなんだから、とっとと話しかけてー！）

心が追い詰められているせいで何もかも他人に丸投げの姿勢をとっていた澪は、やっとの思いで首をギギギ、と動かしてお茶を振る舞うムギの顔を見ようとした。その際、隣に座る黒人の顔を眺めることになったのは偶然だった。

そして、ふと自分が開いている雑誌の特集になっている黒人と瓜二つであることに気づいたのも偶然であった。

目をぱちくりさせる。

澪は自分の目がおかしくなったのかを疑い、こすってみた。

視線を落とし、雑誌の表紙を確認。つづいて、隣を確認。

（こ、黒人って日本人からしたら見分けがつきづらいし……まさか、な）

それに、マーク・スループは特徴的な髪型をしている。

縮毛矯正をしているのか、肩過ぎまであるだろう長髪の顔まわりがさらっとしたストレート。それ以外をコーンローやドレッドの組み合わせというお洒落なヘアスタイルのはず。

ハットをかぶっている時点で確認できないが、よく見れば隣にいる人物は少し髪が長いように見える。

（か、髪が長い黒人なんてごまんといるはず）

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

ムギが茶菓子を出したことで、彼が礼を言う。そして、おもむろにハットを脱いだ。

（う、う、う～～～～。神様のばか～～～）

しっかりとお洒落ヘアが確認できた。

（本人だよ……本人なんですけどっ！？）

額からだらっだらと汗が流れ、目が怪しい動きをし始める。動揺のあまり焦点が定まらず、背中にも汗がだらりと垂れた。

傍から見たら明らかに挙動不審の女である。

何故、こんな人物がこんな場所に……と思いつく原因は一つしかない。正しくは、一人しかない。スループ。この単語だけで一たす一より簡単に、導かれる答えだ。

（こ、これって夏音と鉢合わせになったらまずいかも……？）

澪は、その鉢合わせは夏音がプロであることを他の軽音部の者に知られることにつながってしまう気がする。

いつかは話すとは言っていたが、このような形でバレてしまうのは彼の本意ではないはずだ。

実のところ、澪はどうして夏音が入学当初に本当の事を打ち明けてくれたのかがわからない。

もともと知っていたというのを見越した？　ベーシストとしていつかバレてしまうと考えたからだろうか。

そこにどんな理由があったのか。また、理由はなかったのか。

ともかく澪にとっては夏音が自分にだけ打ち明けたという事実だけあれば満足だった。

それが自分の秘密だったし、誰かと秘密を共に抱える楽しみは何だかスリルがあって楽しい。

完全に子供みたいな理由だが、澪にとっては何だかよく分からないその他諸々の理由――言葉で説明なんてできない――――によって、夏音の正体が明らかになってしまうことは歓迎されにくい事柄であった。

その正体が何なのかはよく分からないし、分からないままがいいと女の勘がささやくもので考えないようにしている。

とりあえず、目の前の問題は截然としている。皆の前で二人を接

触させないこと。
　果たしてそんな難題を乗り切ることができるのだろうか。こんな汗だくになってワイシャツを濡らしている女に。

（あ、メールすればいいんだ）
　うっかり文明の利器を忘れるところであった。澪はさっそく震える手で携帯を開こうとした。
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋａｙ？」
「は、はぅはあ？」
　突然、男に話しかけられた。マーク・スループに。超絶天才ギタリストに話しかけられた。秋山澪、てんぱる。すると日本語で言い直された。
「アナタ顔、ヒドイよ」
「ひ、ひどい？」
　その言いぐさがヒドイと思わないか、と澪はショックを受けた。
「気分ワルい？」
「あ……」
　そこで彼が体調を気遣ってくれていたのだと理解した。
（い、意外に紳士的？）
「ド、Ｄｏｎ、ｔ　ｗｏｒｒｙ」
　かろうじて思い出せた一言を絞り出すと、やはり心配そうな顔をしたまま、それでも一応納得したように「そう」と引き下がった。心なしか不満そうだ。
　澪は再び携帯画面を開く。送信履歴のトップの方のアドレスに急いでメールを打つ。
【マーク・スループが部室に！】
　たったそれだけだ。
　雑誌に隠して、携帯を打つ。ノンルック打法だとしても、それだけ打つのに現役女子高生が五秒もかかってたまるか。そう意気込んでも震える手は思い切り誤字、誤変換のオンパレードを奏でる。

慌てて打ち直さねばならない。クリアで全てを消す。
もう見ながら打とう。テンキーに親指が乗ろうとした瞬間。
ガチャリ。
絶望の扉が開く音がした。携帯をもつ手を力無く下ろし、澪は天井を仰いだ。
（もう、しーらない……）
自分は少しだけ頑張ったのだから。

夏音の弾かれたような脱兎は束の間にして終焉した。
襟を掴まれ、即座に身を縮めている夏音はまるでご主人様に叱られてしゅーんとしょげかえった犬のようだった。その表情は、ひーんと尻尾を巻いた犬そのもの。
「この大間抜け！！！！」
控えめに言ってそんなニュアンスの英語が天下のギタリスト、マーク・スループの口から飛び出した。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい～～～～」
軽音部一同は、あっという間の展開にぽかんと口をあけていた。
英語で飛び交う会話、というより夏音が一方的に謝っていることくらいはもろにわかる。
「こんなに弱っちい感じの夏音って珍しいかも」
律がぽつんと言った一言、澪はよりによってソコかと思わないでもなかったが、たしかにそうだと小さくうなずいた。
「何で俺に何も言わなかった！？」
「いったいその髪はなんだ！？」
「何でずっと連絡をよこさなかった！？」
「バカか！？」
「すぐ戻るとか言っていたそうじゃないか？　もう二年も経つんだ

ぞ？」
「高校の軽音部に入ったって聞いた時は目眩がしたぞ！」
「やっぱりお前はバカだ！」
「どあほーーーー！！！」

破竹の勢いでなじられている夏音は肩をすぼめて、びくびくと震えていた。
最初から全力で白旗を振っている。相手にお腹を見せる獣のごとく、逃げ腰だった。
興奮冷めやらぬ状態で夏音の首根っこをおさえているマークは罵倒してもしきれんとばかりに矢継ぎ早に口を動かす。夏音はうっすら涙を浮かべてひたすらそれに堪えていた。そんな状態が続くかと思いきや、
「Ｍａｒｋ．　Ｃａｌｍ　ｄｏｗｎ　Ｍｒ．Ｗｏｌｆ．　Ｍｙ　Ｌｉｔｔｌｅ　Ｒｅｄ　Ｒｉｄｉｎｇ　Ｈｏｏｄ　ｌｏｏｋｓ　ｓｏ　ｐａｌｅ．」
しゃらん。
甘く、やわらかい。聴いただけで美しい人物を想像してしまうような美声が張り詰めていた空気に割り込んだ。
その一瞬で場の空気が華やかになり、部屋を埋め尽くしていた緊張感が消え去った。
「もー。マークは寂しかっただけなのよね」
太陽のように輝くブロンドヘアーを揺らしながら、モデル顔負けのプロポーションの美女が入り口に立っていた。こちらも日本人ではない。
顔も姿も眩く光輝いていて、部室中を照らした。花のような唇がくすりと笑い、青い瞳がすっかりしょげ返っている夏音の姿を絡め取った。

＞ｉ２４０００－３０２９＜

「Ｍｙ　ｌｏｖｅｌｙ　ｓｗｅｅｔ！！」

そう叫ぶと彼女は夏音をぎゅぅーっと抱きしめ、その顔にキスの雨を降らせた。欧米式の熱烈なスキンシップに日本の女子高生たちはたじろぐ。

キスしたよ。

キスだよ。

「Ｍｏｍ！！？」

軽音部の面々は、夏音が女性に返した一言に固まった。

「マムだって！！？」

全員、目を剥いて女性を凝視した。女性は魅力的な微笑を浮かべて、人懐っこく笑った。

「カノンの母でーす！　アルヴィって言いまーす！」

日本語。

一同は正面から彼女の顔を見て口を揃えて言った。

「姉妹……？」

髪の色以外はほとんど瓜二つという容姿をしている。どちらかというと女性の方が完成されている感じがする。夏音完成版。唯が正直な感想を洩らした。

「よく言われるのーありがとう！」

アルヴィは艶然と笑って少女達に微笑みかける。一方、アルヴィに夏音をかっさらわれたマークは肩を大きくすくめた。

「とりあえず、俺はこいつに物申さなくては気がすまないんだ」

「ええ、わかるけど……でもアナタ、すでに色々言ってたじゃない」

「これだけじゃ言い足りない！」

アルヴィは自分の息子がマークから買っている恨みは存外深い、と困惑した。頬に手をあて、眉尻を下げて改めて息子を見下ろした。解放されるや、すぐに自分の背後に逃げ隠れた自慢の息子を。

「あなたも何か弁明はないの？　言い訳しておかないと後々ひどいかもしれないけどー」
　母の言葉を得て、夏音はおどおどと母の影から前に出た。深呼吸をしてちら、とマークを見てぎこちなく微笑む。
「や、やあマーク。ひさしぶり」
「……久しぶり？　ああ、久しぶりだな。これは久しぶりだろう」
　置かれた間がとても痛い。ギロリ、と蛇に睨まれた蛙状態に陥った夏音はふたたび「ひぃ」と飛びあがった。
「ずっと一方的に音信不通だったヤツの言う台詞にして気が利いてるな？　そいつは冗談のつもりか？」
「ち、ちがうんだよっ！　みんなには何も言わないで飛び出してきちゃったから……その……色々ございまして」
「みんな？　俺以外の奴らはほとんどが知っていたんだけどな。はたしてその“みんな”とやらに俺は含まれていないのか？」
「う、うぅーー……ごめんなさい」
「何に対してのごめんなさい、だ？」
「黙って行ってしまってごめんなさい」
「それだけじゃないだろう？」
「その他諸々ごめんなさい」
「だから、その諸々ってのはなんだ？」
「う、うわーん」
　夏音はたまらず泣いた。もう抑えていられなくなり、人目を憚らずに恐怖による涙を流した。今時、うわーんと泣く人間も珍しい。
「くそっ。何でお前はいつもいつもいつもそうやって泣けばすむと思って！？」
　シュゴーッと怒りの蒸気を頭から発したマークが夏音に詰め寄る。
「あらー、懐かしいやりとりねー。マークったら好きな女の子にちょっかいつい意地悪して泣かしてしまうタイプの子なのよねー」
「ち、違う！　いい加減なことを！」

語気を荒げて反駁したマーク。あまり気づく者はいなかったが、彼の肌はそれこそ真っ赤に茹だっていた。

「泣けるならいいじゃないの」

マークは、アルヴィが静寂をまといながら投げかけた言葉に息を詰まらせた。彼女の言葉は氷を飲み込んだように一瞬で自分を黙らせた。視線をうろうろとさまよわせ、ゆっくりと泣きじゃくる夏音を眺める。

「ベースは……続けているんだな」

先程までの詰問するような鋭さはなく、優しく確かめるような口調（かなり気を付けて）で彼は訊いた。

それに対して夏音は幼子のようにこくん、と大きく頷いた。

「ベースは持ってきているのか？」

「……あるよ」

再び素直にうなずく。完全に大人と子供のやり取りだ。マークはパチン、と手を鳴らすと周りを見回した。

「ちょうど良い。ところでジョージはどこにいるんだ？」

「ダーリンならおトイレに行ったわよー。でも、階段をのぼってすぐにここに来るわ」

アルヴィはまだ姿も見えない誰かの階段をのぼる足音を聞き取っていた。そして彼女の話した事はすぐにその通りになる。

またもやガチャリと扉があき、第三の客が姿を見せた。

「いやー日本の学校のトイレって超久しぶりでくそあがったわー！」

豪快に笑いながらどすどすと部室へ入ってくる男は当然のごとく注目を浴びた。どうやら彼がジョージであるらしいが、明らかに日本人だ。年の功は二十代後半といったところで、一見細身に見える身体も近づくにつれて一切に無駄がない、限界まで絞られた鋼の筋肉に包まれていることがわかる。

彼は夏音の姿を見るにつけ、にっこりと嬉しそうに頬をゆるめた。

「ややー、息子じゃないか。父をハグしておくれ。ていうか俺から

しちゃうもんね！」
そう言って夏音のもとまで一瞬で距離を縮めるとアルヴィと同様にむぎゅっと抱きしめる。
「ぐへぇっ」
夏音の喉からカエルが潰れたような声が飛び出る。
めまぐるしい展開の中、完全に置いてけぼりの女子高生は唖然とそれらの様子を見守るだけだ。
ちなみに、彼女たちは先程から交わされる会話のほとんどが英語なので、何を言っているのか、何で夏音が泣き出したのかも把握できていない状態だ。
ぽかん顔の女子高生たちがフリーズしているのに気づいた男はくだけた笑いを浮かべて、少女たちに挨拶した。
「立花譲二です！　夏音の父でーす！　どうも息子がお世話になってるね！　ありがとう愛してる！」
初対面で同級生の父親に愛された少女たちは、硬直状態をさらに進行させた。
「何言ってるのさ！　みんな固まったじゃない！」
夏音はいきなり部活の仲間たちに愛してる発言をかました父親をぽかりと殴った。それでもこの父親、どことなく嬉しそうだ。
「カノン、ベースを用意しろ」
親子の久々の再会をじっと眺めていたマークが厳しい口調で夏音に言った。ぴくり、と夏音の耳が動く。
「……やるの？」
「そうだ。ここは軽音部なんだろ？　それでギターを貸してもらいたいんだが」
マークは椅子に座ったまま強制的にアウトサイダーをやらされていた少女たちに声をかけた。
「え、何？　ギター？」
唯はギターという単語だけ聞き取れて、反応した。
「イエス。あー、ギターかしてくだサイ」

「ゆ、唯っ！　ギターだ！　お前のギターを今すぐ貸してさしあげるんだ！」
何故かあわてふためく澪が唯に命令した。
「え？　いいけど……ていうか澪ちゃんすごい汗だけど大丈夫？」
「私のことはいいから！」
あの世界のギタリストにギターを貸せと言われる機会など、一生に一度だ。
そんな澪の内心など知らない唯はやけに狼狽している澪の様子を不思議に思った。
それでもギターを貸して欲しいというなら、貸そうではないかと思いケースからギブソンを取り出した。
「う、うちの子をお願いします」
どこか、手塩をかけて育てた一人息子を送り出すような気分だった。マークは唯の差し出したギターを見て、ヒューッと口笛を吹いた。
「レスポールか……渋いな」
ぱっと見、ただの女子高生がレスポールを使っているとは思いもしなかったのだろう。セッティングが良くないとはいえ、予想外の名器にマークの機嫌は少しだけ回復した。
「カノン。お前も早く用意しろ」
レスポールをかまえたマークに声かけられ、ハッとなって夏音もいそいそと準備をし始めた。
「お、なんだなんだセッションか？」
夏音の父、譲二は楽器の準備をし始めた息子たちを見てそわそわし始めた。
「俺もまじる！」
わくわくが収まり切らなくなったのか、そう叫んだ。どこから取り出したのか不明だが、その手には二本の細長い棒が収まっていた。
「スティック？」
誰よりも見覚えのあるその道具に反応したのは律だった。仲良く

固まってはいたものの、しっかりと事態を見守っていた彼女は、突然現れた夏音の父親が取り出したスティックを見て唖然とした。
「え、夏音の父さんってドラマーなのか!?」
「クレイジー・ジョーってわりと有名だと思うけど……あまり日本のメディアに出ないから知らないかな」
楽器の用意をしながら夏音が律に答えた。思えば夏音が部室で軽音部の誰かと話すのはこの瞬間が始めてだった。
「聞いたことあるような……」
「ま、そんなところだろうね」
「ていうかお前さんお前さん」
「な、なんでしょう」
平然と会話をしている中、律はそろそろと夏音に近づいた。
「そろそろコレがいったいどういう事なのか説明が欲しいんだけどなー」
もっともである。しかし、夏音は律の言葉にすっと目をそらしてうつむく。
「ごめん。あとで……ごめん」
そんな反応が返ってくるとは思わなかった。
律は予想外にも自分が夏音を傷つけてしまった気がして、ショックを受けた。
「そ、それならあとでも……べつに大丈夫っていうか?」
「……」
律はふらふらと椅子に戻った。

「まだソレを使っているのか」
マークがふと呟いたのが、自分のベースのことを言っているのだと気づいた夏音はそっとボディを撫でた。
フォデラ・エンペラーの五弦。コントロール部付近にできた小さな傷に目をやる。

「だって、クリスがくれたものだもん」
「チッ。俺がやったのはどうした？」
「もちろんアレも大切に……」
「ふん、なら別にいいんだが」
「飾ってあるよ」
「弾けよ！」
準備をしながらふっと夏音は引きつっていた表情を崩した。
「なんだか懐かしいね、こんなやりとり」
「うるさい。何を暢気なことを」
「別に暢気でも何でもないよ。俺はいつもこんなんだよ」
「……知っている」
「ヨシ、準備できたよ」
二人は会話をしながらも、しっかりと音を出して準備を整えていた。
「父さん、大丈夫？」
「いつでもいいぞー」
夏音は母の肩を抱いて何か小言で囁いてクスクス笑っていた父親に尋ねた。友達の前でまでイチャつくなバカ、と思ったが口にしなかった。
「ていうか律にドラム借りるよって断ったの？」
「律ってどの子だい？」
まだ、だった。この父は……と溜め息をついた夏音は律の方を向いて、その特徴を父に伝えた。
「Ｆｏｒｅｈｅａｄ」
「あー、君がドラムかい？　ドラム借りていいかな！？」
なんか今、とても失礼なやりとりが交わされた気がしたが、律は快く「あ、いいですよー」と答えた。
許可を得た譲二はささっとドラムセットに向かった。
「ヒップギグか。なつかしいなー」
椅子の高さだけ調整して、そのまま持っていたスティックをスネ

アに一発。
その一発で言葉などいらなかった。
そのたった一発のスネアだけで律は全身に雷が走ったような衝撃を受けてしまったのだ。
続いて、他人のセッティングのままでドラムを叩き始めた人物のプレイに顎が外れそうになった。
自分なんかより数倍、それ以上も音が大きい。クラッシュを打った瞬間、鼓膜を凄まじい音圧が襲う。爆弾でも弾けたような鋭くて短い、破裂音。
腰が椅子に張り付いてしまったように動けなかった。身じろぎさえできなかった。
律が衝撃を受けている隣で、澪も茫然としていた。すっかり白澪と化した彼女はもはや情報を処理しきれていなかった。
（夏音の父親といえば、あの伝説のセッションドラマー。加えてマーク・スループ。カノン・マクレーンの三つどもえセッション……）
自分は、今まさにとんでもない物を目撃するハメになる。
音楽ファンなら垂涎モノの機会に違いない。内心、自分だってこんな機会をお目にできる事に胸が震えぬはずがない。
しかし、何だかんだ心配事がありすぎて、集中できないのも事実。
横に視線をずらして、仲間たちの反応をうかがってみた。
律は、先ほどから肩ならしとばかりに鳴らされるドラムに魂を抜かれたように見入っている。当然だ。桁が違う実力を持っている者の演奏をこんなに身近で聴ける機会など滅多にない。
さらに横の唯。他人にいじられる自分のギターのことばかり気にかけているようだが、これから始まるとんでもない何かに心を躍らせているようだ。野生の勘に違いない。
ムギはというと、先ほどから近距離でじゃれつくマークと夏音の姿を指くわえて眺めている。恍惚そうな表情。そっちもイケたのか、と澪は知りたくもない新事実を得た。

（あーもうみんなゼンッゼンわかっていない！　このセッション、ふつーにお金とれるんだよ！？）

チケット代、S席で唯の一月分の小遣いより遙かに高いだろう。

誰かこの心境を分かって欲しい、と澪は肩を震わせた。さらに悪いことに、

「なんかずるいわ……私だけ仲間外れじゃない！」

とアルヴィが騒ぎ出したせいで、ムギからキーボードを借り受けた彼女がセッションに参加を決めたのだ。

澪はもちろん知っている。

アルヴィ・マクレーン。

超がつくほど有名なジャズシンガー。ピアノも相当できることは周知の事実。

澪は決めた。

このてんやわんやの先に何が待っているか。

そんなことはどうでもいい。忘れよう。とりあえず、忘れよう。

今はそんな事を忘れて楽しんだ方が勝ちなのだ。

そう考えると、気が楽になった。ついつい強張っていた顔もゆるんだ。肩の力と共に、心配などがするりと抜け落ちた。後に残ったのは、心躍る胸が弾む気持ち。

「アハっ」

何て最高な一日だろう。

「アハハッ」

「み、澪ちゃん？」

ふいに笑い声を漏らしだした澪に気づいたムギ。何かの発作かと思ったのだ。

「アハハハハハッ！　すごい！　最高だぞ！　なあムギ！？」

「な、なにがーっ！？」

「おい唯も見ておけすごいぞー！　なかなかだー！」

「澪ちゃんが壊れた……」
ムギには、理由がまったく見当たらなかった。

演奏が始まった。

音が。
まるで、そこから音楽が発祥したような誕生の仕方だった。
一音の始まりから終わる瞬間までもが計算づくかのようなギターの音が響く。
このギタリストがこの世の中にその音を発した瞬間と、聴衆の耳に届く瞬間の音はまるっきり違うのだろう。空間を伝播して、震わして影響させて広がる。音の力。
さらに幽玄な調べが続く。青白いスポットライトが彼だけに当たっているような存在感。
マークのセッティングは夏音からいくつか借り受けた足下だけで、今はいわゆる直アンの音。マーシャル社の技術とレスポールの根源的な絡み合い。そこにそれだけじゃないナニカが演奏者によって足される。
それだけであっと息を呑む音を生み出しているのだ。
それを支えているのは譲二のドラム。ＢＰＭ一つ分もズレない正確さでマークと曲を進行させている。
ミディアムテンポで進む曲が八小節ほど進んだところで夏音のベースが混じる。ただそれだけで音の厚さが数倍に膨れあがる。
さらにしばらくして鍵盤の音が参加した時には他が入る余地のない鉄壁の要塞のような音楽ができあがっていた。
互いが互いのすべてを知り尽くしているようなアンサンブル。
相手の呼吸が自分のものであるかのように反応する面々。
ふとベースがレイドバックすると、周りもそれを知っていたかの

ように独特のグルーヴへと変化させてしまう。
プロのミュージシャンの中でも、超一流と呼ばれる者たちは時たまに超能力ではないかと思うような感覚を見せつける時がある。嗅覚、聴覚、視覚。そういうものを全て超越した感覚をもっているとしか思えない奇跡的な反応をしてしまうのだ。
彼らはまさにそれにぴったりと当てはまっていた。決め事に縛られないセッションの中を巧みに動くだけではない。彼らの可動領域に限界はなく易々と遠くへ行ったり近づいたりする。彼らは音楽で連なり、一つの生き物のように駆け巡っているのだ。
今までのは肩慣らしと言わんばかりに苛烈さを帯びてきた演奏の最中、マークによるギターソロが始まる。ブラックミュージックを通ってきているのがはっきりと分かる特有の手癖、リズム感、ブレスのタイミング。
完全にマーク・スループの独壇場と化している、と思いきや、ふとクラシックのフレーズが出てきたりする。アンビバレンツなのではない、彼の場合、全て上手く混じり終えているマークの音楽としている。
音楽のジャンルという垣根を越え、あらゆる音楽を取り囲んで別々のモノとしてではなく、表現の一つとして昇華してしまっているのだ。
若くしてフレージングが神がかっていると評価される彼はそのまま彼の存在を音に乗せて押し広げる。一つのギターが鳴っているとはまるで思えない重厚さをもって彼のソウルを部屋中に埋め尽くそうとしていた。
夏音はその演奏を聴きながら、頬をゆるめた。それと同時に青い瞳が小さく揺れる。
彼にとってこの友人と音を合わせるのは実に二年半ぶりである。ますます磨きがかったテクニック、感性の爆発が目の前で展開されることは心の底から嬉しくて、たまらなく興奮する出来事なのだ。それと同時に懐かしくなる。昔を思い出し、引っ張っていかれそう

になる。
けれども、今の夏音は踏みとどまらなくてはならないのだ。しっかりと地面を踏みしめてある証明をしなくてはならない。
ギターソロが止んでアルヴィのピアノソロ。それが終わると自分の番になった。

一小節の溜め。
直後に和音を抑えた状態で右手を思い切り指板に叩きつけた。パーカッシヴな全音が響いたところですぐにトーンを急降下。フラメンコ奏法でざくざくとアンサンブルを巻き付けていく。
叙情的なフレーズでその場は夏音のものに様変わりする。続けて彼はシャッフルのラスゲアードを展開させていった。時にスラップを混ぜながらの絶妙な音色のコントロールは何に分類される音楽かも知れたものではない。
飛瀑を連想させる三連符が始まったと思いきや、タッピングから生まれるハーモニクスが幻想的に響く。
そこを機転に横ノリなグルーヴを展開。神がかったピッチコントロール。ありとあらゆる手癖をミックスさせて創り出す幾何学的なベースラインで圧巻していく。
夏音にしか持ち得ないアーティキュレーション。ワンアンドオンリーの音。世界に認められた音。
色彩の魔術師と呼ばれた多彩な感性が空白の二年間で磨きに磨きを重ねられたのだ。
夏音はベースを弾かない日はない。一日何時間も練習を重ねたのは引きこもっていた時でも変わらなかった。
でも、それだけではない。
夏音が新たに得たもの、経験。今までの人生では馴染みのないどうしようもなく普通で、世間ではありふれていて、それでも温かい世界。
夏音は誇らしげに自分の持てる全てを肯定して出し尽くせる。

少なくとも、この一年は無駄ではなかった。そう自信を持って思えるのだ。

だから彼はそのことをマークに教えてやりたかった。

もっと世界が広がったのだ。

（あれから成長したよ。ちゃんと前に進んでいるんだよ）

夏音はいつの日か言われた言葉を思い出す。

『音は実に雄弁だよ。時に人間の言葉なんかよりも遙かに多く伝えたいことのせることができる素晴らしいものなんだ』

だから、夏音は音にこめたメッセージをありったけの力で放射する。

それは緑で、大地で、水銀の赫、風であって真冬の透明、枯れた石畳の灰色。

あらゆる色彩の音色が夏音の中から世界に溢れだす。とどろく音の奔流となって、部屋を満たす。

絡み合うビートたちは前に後ろに交互に行き交う。全員分のソロが終わると、ここからが本領発揮だった。

この面子で行われるセッション。夏音が生まれてから何回行われたか数えられたものではないほど積み重なった信頼が崩れることはないのだ。

セッションという場にかかわらず。夏音はディレイ、コーラスを踏む。ハーモニクス。倍音のアルペジオが幾重にも重なり、深海のソナーのように深く、優しく、包み込むように拡がる。いくつもの水の層。水で出来たレースのカーテンが光の射し込まない場所で淡くゆらめく。

それを受け取ったマークもディレイを踏む。合わせてリバーブのスイッチが光っている。二つのフィードバックが重なり合い、許すように溶け合って、増してゆく。床が地震のように震えだし、音の

壁が部屋中を押し潰していく。
そんな中、譲二がにやりと悪戯小僧のように笑う。アルヴィはそんな彼らの様子を微笑ましそうに見詰めて、しっかりとついていく。

後は、もう喧嘩だった。

マークが人間離れした速弾きを始めると、夏音もそれに劣らぬ速弾きフレーズを繰り出す。
すると、ふとドラムのフィルでスリリングなビートに逸れ、

「　　」

ブレイク。時が止まる。宙に放り出されたような感覚。
再び世界が動きだし、またうねるグルーヴがそこかしこに迸り火花を跳ねさせる。
五連符や六連符が飛び出す頃には、彼らの世界は有頂天にのぼりつめようとしていた。
ワンペダルで五連を可能にしている怪物ドラマー。神々の争いを繰り広げているかのような弦楽器隊による演奏は留まることを知らなかった。

たっぷり一時間。
一時間の即興演奏がやっと終焉した。
日が傾き。夕陽が部室に射し込み、部屋をオレンジ色に燃え上がらせている。
四人の女子高生は魂が抜けたように虚ろな表情で座っていた。ぼんやり、とまるで魂とひきかえに悪魔の演奏でも見てしまったかのように。
瞳を当社比一・五倍の大きさに見開いて、その瞳には光が入って

いるのか怪しかった。
それでも、彼女たちは「はっ」と意識を取り戻す。
今、起こったことを必死に反芻するように目をぱちくりさせる。
夢を見ていたような気もするし、未だ耳の中で起こり続けている気もする。もしかしたらまだ夢の中かも。
ぼんやりと互いの頬をつねり、夢からの脱出を図る。しかし、彼女たちは見た。

演奏が終わり、オレンジの空気の中そっと佇む彼らを。
うつむく夏音の目からぼろぼろと流れる涙を。
彼は肩を震わせ、両手で顔をおさえた。
彼女たちは不思議だった。何であんなにすごい演奏をしたのに、そんなに悲しそうに泣くのだろう、と。
答えは想像すらできなかったが、自分たちが何か彼にしてやれることはないかと頭をひねった。しかい、頭をひねっている間に彼の肩を抱いた者がいた。
マークはギターを背中にまわすと、しっかりと夏音の小さな体を自分の胸に押しつけた。
言葉はない。
夏音は何かをしきりに呟きながら、ぎゅっとマークの背中に手をまわした。
「あまり心配させるな……手のかかる――だな」
軽音部の者には誰一人として、彼が何を言ったかわかった者はいなかった。だが、それはきっと夏音を温める優しい言葉だったのだろうと。優しく緩むマークの目を見て、そう思った。

「あの……皆さま。大変お騒がせしました……」
なんか一段落ついたらしい夏音が「途中からずっと放置されていた」軽音部の仲間に頭を下げた。かなり気まずそうに。

「い、いやーなんか、こちらこそ。たいそう素晴らしいものをお見せいただいて……」

何故か澪が代表で夏音にそう返すが、お互いしどろもどろでまとまるはずがなかった。

「ま、とりあえず。何が何だか知らんが、私らはお前の事情に全力で巻き込まれていたっていうのはわかった」

律が耳をほじりながら、投げやりに言った。それが批判に聞こえたのか、夏音が身を縮めた。

「その通りなんだけど……俺の事情だ。みんなには話しておかなくちゃならないことかもしれないことが……」

「夏音！！」

そこで澪が慌てて遮った。本人が話すのであれば、問題ないはずだが、何となく反射的に遮ってしまった。

当然のごとく、皆の注目を浴びる。これが俗に自滅と呼ばれる行為である。

「い、いや……何でもない」

「なんかアヤシイな」

律がそんな澪の様子を胡乱に見詰める。目を眇めて、じーっと。

「澪、隠し事はいかんぜよ」

「な、なにも隠してなんかない！」

「どうなんだ夏音！？　お前ら二人して秘密の共有とかしちゃってたり！？」

「澪には……前に話したことがある」

「はぅわー。言っちゃった……」

澪は額に手をあてて、へなへなと床にへたりこんだ。

「あら、カノン。女の子は大切にしないとダメよ？」

「母さん……今、大事な話の最中だから」

後ろからぬっと現れ、腕を絡めてきた母親に困った表情をつくる。

二人並べば、まさしくそっくりで、本当に姉妹みたいだと律は思った。そして、親子のスキンシップを目の当たりにして、おそるべ

しグローバルスタンダードなコミュニケーションだと感心した。
「今、俺がプロなんだよーって話すところなんだからさ」
「え！　あなた、教えてなかったの！？」
アルヴィ、まじ驚く。同じ瞳の息子を信じられないとばかりにまじまじと眺めた。
一方、たった今放たれた言葉に律の時が止まった。
「え、今なんて？」
後ろを振り返る。唯とムギは何がなんだか……と首をかしげる。すると「みーおちゃん？」と猫なで声で床に倒れ込んで女の子座りしている幼なじみを睨む。
うつむいたままドキッと肩を揺らした彼女が律から逃げようとした。「ギャッ」律に足を踏まれた。
「え、マジで言ってなかったの？　ジョージおどろきーだよ！」
息子から初めて聞かされた事実にショックを受けたらしい譲二は、ぱっぱっと携帯をいじりだした。
「す、すいません！　今すごく不穏な言葉が聞こえたような……もいっかい？」
律がうふふ、ええまさかもしかしてと微笑む。
夏音は姿勢を正して、はっきりと宣言した。
「私、アメリカでプロのミュージシャンをしておりました」
（あ、言っちゃった）と澪は遠い目をした。
静寂。
「ほらほら、コレ見てよ。自慢するためにホームページをお気に入りに入れているんだー」
携帯をいじっていた譲二が、笑顔のまま硬直している律に携帯の画面を見せる。
ギギギ、と油が足りていないブリキの人形のような動きで律が画面を見る。唯とムギもささっと寄り添って、同じくのぞき込む。
そこには見慣れない、長いブロンドヘアーの、彼女たちが見たことのないベースをかまえる夏音の画像。

『Ｗｅｌｃｏｍｅ ｔｏ “Ｋａｎｏｎ ＭｃＬｅａｎ” Ｏｆｆｉｃｉａｌ Ｗｅｂ Ｓｉｔｅ』

トップの画像が次々と変わる。
見たことのある歌手と同じステージに立つ夏音。
何万人もの観衆の前に立つ夏音。
でっかいステージに立つ夏音。

「えぇーーーーーーーーっ！！！？？」

放課後の校舎に憐れな女子高生たちの悲鳴が響き渡った。

第十五話（挿絵あり）（後書き）

主人公の正体、ついにバレました。

第十六話

立花夏音は生まれからして、人より恵まれていたといえよう。世界でも有数の才能あるミュージシャンの両親の間に生まれ、両親の周りには常に多くのミュージシャンが集い、その中にクリストファー・スループがいたという時点で彼の将来は決定されていたのだ。

夏音の父、譲二が親友とも呼べるほど仲が良い彼の家族は例外なく全員が音楽に関わっているいわゆる音楽一家である。

彼らの周りには音楽がない日など存在しない。

そのような特殊な環境で育った夏音が音楽に関わらないはずがなかった。

生まれた時から夏音にとって音楽とは片時も離れずにそばにあるもので、間近で音楽が鳴っていない生活などありえないものだったのである。

夏音は誰からも可愛がられ、誰もがありとあらゆる楽器を教えこもうとした。ギター、サックス、ピアノ、ドラムに始まり、幼稚園児には持つことすらままならない楽器をぐいぐい押しつけられ、はたまた陽気にセッションを聴かされる毎日。子守歌は最前線をひた走る音楽家達が生み出す至高のアンサンブルだった。

結局、より多くの楽器に触れた夏音がもっとも心を奪われたのはベースだった。将来、それでベーシストとしてデビューすることになる彼の音楽性を支える一番のバックグラウンドはこの環境だったことは間違いない。

そんな中、一年のほとんどをスループ一家と過ごす夏音は当然、そこの家の者とも家族同然に育つことになる。年が近かったマークとは一番仲が良く、マークが兄貴面で夏音の面倒を見ることが多々あった。

すくすくと、そして貪欲にあらゆる音楽を呑み込んでいった夏音

はあらゆる者に天才と囁かれた。もちろんその裏に弛まぬ努力もあった。容姿が並外れて可憐であったこともあり、世間は彼に飛びつくことになる。

それがスループ一家の小さな音楽家、として七歳でその才能を見出されてプロとしてデビューすることへ結びつくのは時間の問題だった。

超大物メーカー。伝統高き老舗メーカーが行った前例のない最年少契約。どうせ青田買いだろうと見くびる者もいたが、彼らの度肝を抜くような演奏をその頃、すでに身につけていたのである。

年齢に似つかわしくない成熟した感性は長年音楽を愛してやまない音楽フリークの耳にも十分に耐えうるもので、むしろお釣りが返ってくるほどのものであった。

現在に至ってはすでに個人のアルバムを三枚出している上、参加したプロジェクト、セッションは数知れない。

そんな音楽人生を順風満帆でいく彼が、どうしてプロのステージを離れることになったのか。

「耳が、きこえなくなったんだ」

片耳だけどね。それが救いだったかのように添えられる一言。夏音はその事を何でもないことのように語った。さらに続けて、

「あと、別に契約に待ったをかけたのはそれが直接の原因じゃないよ」

当時、あまりに憔悴を見せる夏音の様子に毎日葬式のような空気が流れた。活気あふれるミュージシャンのセッションも、心なしかマイナーコードがあふれる物悲しいものが増える。

ある時、スペイン音楽の哀愁に満ちたギターを弾いていたマークの七つ上の兄が、ふと、おふざけで葬式の曲を弾いていたところ、

マークをはじめ、あらゆる人間にボコボコにされたこともある。
いつの間にか、それだけ中心的人物となっていた夏音が落ち込むと、彼の周りの人間は一様に彼のことを心配した。あらゆる手で慰めをしたが、それが空回りして慰めようとした人物が落ち込んで帰ることもしばしばあった。
耳が聞こえなくなる。その原因はなんだったのか。
「ストレスだって」
心因性の難聴。突然。しかもステージの上で聞こえなくなった。自分を襲った事態に動転した夏音はその場で意識を失った。
「ストレスの原因……今になって考えると思い当たる節がバリバリありまくりなんだけどね。あそこまでひどくなるなんて自分でも思ってもいなかったんだよね」
彼に対するあらゆる賞賛の裏には常に嫉妬や心ない批判が絶えなかった。その理由として挙げられるのが、夏音が一所にとどまらなかったからであった。
夏音はどんな音楽シーンにも足を踏み入れた。最初はジャズ、フアンク、ブルースやフュージョン。それがロックやメタルへと広がり、さらにはミリオンセールスのポップアーティストのバンドで演奏したりすることもあった。実は、現在マークが加入しているＳｉｌｅｎｔ　Ｓｉｓｔｅｒｓの二つ前のベースが夏音だったことは一部では有名な話である。
住み分けを強調する人間。縄張り意識を強く持つ人間にとっては面白くない話だったのだ。中でも最も大きな理由としては自分より遙かに年下、息子といって良いくらいの年の子供の活躍を良く思わない者がいたということである。
「もちろんそんな心狭い人間が真剣に音楽に向き合ってるとはいえないがな」
立花譲二はそう語る。

「もちろん夏音に危害を加えたり、暴言を吐いた人間には然るべき処置をとってきたよ」

もちろん全ての人間が夏音に批判的だった訳ではない。多くの者は夏音を守ろうと動き、フォローした。

なかでも両親を除いて一番に夏音を擁護する壁となったのは、クリストファー・スループ。誰もが一目を置く音楽会の巨匠その人であった。

クリストファーは夏音にそうと気付かせずに庇護を置き、夏音の音楽性をのばすことに身を入れ続けた。業界きってのビッグネームに明らさまに夏音を攻撃する者は数を減らし、表沙汰には一件落着かと思われた。

「なかでもとびっきりの糞野郎がいてね……夏音に手を出そうとしたんだよ」

『クリストファーの妾のくせに』

夏音はその言葉の意味がわからなかった。

首をかしげ、その意味を問おうと相手に尋ねようとした刹那。その相手は肩をひっつかみ、壁に押しつけてきた。二回り以上も大きい体躯をもつ相手が覆い被さって耳元で囁く。

『どら、俺にも試させろよ』

物理的に身動きができないだけでなく、経験したことのない恐怖が金縛りのように夏音の身を縛り付けた。生ぬるい息遣い。

締め付けられる首が痛み、悲鳴をあげようと思っても声は引きつったように出なかった。

『ふ、ふふ……ヒャハハ』

狂気が相手の瞳に宿る。夏音はＳＦ映画のモンスターにでも襲われたヒロインのように誰かが助けてくれるのを願った。

しかし助けてくれる者は現れない。
どうするべきか。動かなくては。そういえば、マークにこういうシチュエーションになった時はこうしろと教わったことがあった。ふいに閃いたその行動を夏音は躊躇いもなく行った。
「地獄に落ちろ糞野郎！！」
ちょうどハマっていたマフィア映画の台詞つき。
ゴールデンクラッシュ。
相手の股間を思い切り蹴り上げた。
見事に命中した一撃は相手の呼吸を奪い、相手が悶絶している隙に夏音は逃げ出すことができた。
何かわからないが助かった。おっかなかったが、何とかなったな、と安堵と共に帰宅した夏音はそのことを両親に告げた。
夏音は、その事を聞いた瞬間の両親の表情は今でも忘れられないという。数秒後に家を飛び出した両親が「妾」という言葉の意味を教えてくれることはなかったので、自分で調べた夏音は目を疑った。
自分に縁のない単語。しかし、襲ってくる生々しいイメージ。身に覚えのない侮辱に訳がわからなくなり、何より侮辱の対象が自分ではなく大好きなクリストファーに向かったことに悲しくなった。
当時、年配の人間関係が主流だったために性については人並み以上に知識だけは持っていた夏音は嫌悪感がまとわりついて離れなかった。自分がそういう対象として見られることへの汚らわしさ。
聞けば、その男は周りの人間にもあることないことを吹聴していたらしい。いわゆる悪口仲間みたいなものがあり、その中で幅をきかせていたという。
“まだ小さいから相当“具合”が良いらしい“
“クリストファーだけでなく、まわりの男の格好の玩具”
などと聞くに堪えないことばかりを好き放題言い荒らすだけの集いだ。
当然のごとく、夏音のフォローに動く人間が大勢いた。
余程のショックを受けているのでは、と夏音の心を憂慮する周り

の反応とは裏腹に本人は気丈な様子を見せた。
何も気にしていない。自分で撃退できたのだから、むしろ褒めろと茶目っ気たっぷりに振る舞うものだから誰もがほっとした。
トラウマなどになって、人格形成に影響があるばかりか音楽にも悪い影響が及ぶかもしれないという懸念はおさまりつつあった。
ステージで倒れた夏音の姿を見た誰もが、それが甘い考えだったと後悔することになる。
「ま、最初は落ち込んだけどね。けど俺を見てあまりに落ち込むみんなの様子が逆に心配になってさ。マークなんて滅多に泣かないのに、影で嗚咽まじりに俺のCDを聴いてるんだもん。まいるよね」
自分は愛されている。それだけでやっていけると思った。
「ステージで倒れたのも、なんかパニックになっちゃってさ。ほんと。耳聞こえなくなるほどひどいとは自分でも思わなかったよ」
心因性の難聴が回復する期間は個人差がある。半年以内で治る者もいれば、三年かかる場合もある。

それでも夏音は片耳でやっていこうと考えた。
では、何で日本に来たのか。

「つまり、グランパだね」
夏音は遠い目をする。
「父さんって家出人間なんだよね。父親から勘当されてこの年まできちゃった人なんだけど」
ずっと実家とは疎遠になっていた譲二が妻と息子を両親に会わせたことはない。一方的に結婚した事と、子供ができた事だけを手紙で知らせた手紙をのぞけば、他に連絡をとったことはない。
そのどれにも返事はなかったという。
「俺も話の中でしか知らなかったからさ。父さんの親なんて架空の人物くらいに思ってたんだけど」
夏音がふさぎ込んでいた頃。一通の手紙が来た。

送り元は『立花浩二』。
一度も会ったことのない夏音の祖父だった。
「『拝啓　立花夏音様』なんて書いてあるんだよ！　それに季節の挨拶とか。難しい漢字ばかりでよくわからなかったんだけどね」
ニュースにもならなかった話をどこでどう知ったのか。
手紙には夏音に起こった事を心配する内容でびっしりと埋まっていた。その中には、譲二に対して「ふがいない」だとか「息子を守れなくてなんとする」といった節がたびたび登場して笑えたという。それでいて、日本に来い。会いに来い、とは書けない頑固な不器用さは譲二とそっくり。
何となく祖父の人柄が染みこんだような手紙だった。
一度も顔を合わせたことのない自分を心から心配していた。夏音はその手紙からは確かな愛を感じた。
すぐに返事を送ったが、もう一度祖父から手紙が届くことはなかった。
祖父の訃報が届いたのはその一ヶ月後だった。

夏音はそのことをアルヴィから聞かされたが、譲二から夏音に何か言うことはなかった。
今までもそうたったように、あくまで実家のことを夏音に話すつもりは一切なかったのだと思われる。
譲二は葬式に出ることもなかった。祖父は妻――夏音の祖母――を亡くしていたので、葬儀や諸々のことを親戚で執り行ったらしい。
夏音は祖父の訃報を聞いて泣くことはおろか、特別悲しいと思う感情も湧かなかった。もちろんまったく悲しくなかった訳ではないが、「あぁ、死んだのか……」といった程度の感興のみで、むしろ一度も会えなかったことが残念という気持ちが強かった。
「せめて一度くらいは会ってみたかったな」
いくら想っても、もう会えないものは仕方がない。

そう思ったのが夏音だけではなかったということだろう。しばらくして譲二が夕食の席で夏音に尋ねた。

何気なく、意図がないように。

「夏音、日本行かなーい？」

だから、息子も何気なく答えた。意図など知らないように。

「いーよー？」

今さら日本に行ってどうなるものでもないだろう。しかし、譲二は何を思ったのか日本に行くことを決めた。

夏音も似たような心境だったのだ。

日本で暮らしてみたい。

祖父のいた国。父親の生まれ育った国。

自分は生まれてこの方、音楽に包まれて生きてきた。それ以外はあまり知らない。

夏音は今まで生きてきた環境から少しだけ離れることを決めた。

「という訳なんです」

息を呑んで全てを聞いていた軽音部の面々は、知れずと詰めていた息を吐き出した。目の前には三人そろって座る立花親子。それに向かい合って座る自分たち。マークは一人ソファーの方で遠巻きに話を聞いていた。

最初に出されたお茶はすでに湯気をおさめている。

「あ、ちなみに耳はもう治ってるからね」

押し黙る彼女たちに慌てて補足される。

立花夏音という男は常に何かを隠していた。その隠し事の正体をさらっとこぼされた一同はたまったものではなく、説明を願ったのも当然の話であった。

とりあえずお茶を囲みながら、とムギが紅茶を淹れてから夏音がすべてを語ることになった。時折、譲二が説明を加えたりしながら

アメリカにいた頃の話があまねく語られた。
「へ、へえー」
初めに声を出したのは律だった。
「なんていうか、その……」
彼女はしどろもどろになりながら、夏音を見詰めた。
「お前がプロだったーって言われても正直……全然驚かないんだけどさ」
「え!?　驚かないの!?」
予想外の返答に夏音の方がぶったまげた。ナンダッテー、と絶対に腰を抜かすと思っていたのに。
「むしろプロって言われるとそれはもう……すっと腑に落ちるというか」
「ムギまで!?」
もとより知っていた澪は言わずもがな、唯もうんうんと頷いていた。
「ま、といっても。実際にプロなんだーって言われるとやっぱり驚きはするけどな」
律は先ほど悲鳴をあげた理由を語る。周りを見ても、おそらく自分と同じ。
夏音がただ者ではないことを察していたのは間違いなかった。
「そもそも。あれだけの事をやっておいて素人ですーって方がかえって不自然だよな」
思えば、数々の常識外行動。部室に高級機材一式を運んでおいてなお余りがあったり。　そもそもの実力がおかしい。
「それよりか……お前のアメリカでの出来事の方がだんぜんヘビーなんだけど……」
先ほどの話を思い返してそう述懐する律は顔をひきつらせた。十代にして、とんでもない経験の持ち主だったことが判明したのだ。
まるで映画でしか聞かないような壮絶な過去に、少々たじろいでしまった。

「そ、それは私も聞いてなかった！」
澪が不満そうに夏音をにらみつける。その目には、ありありと私との中で水くさいぞ、と書いてある。
「ん？　みーおー？」
律は些細な隙でも食らいつく。
「そういえばソッチの話もあったんだ。何でお前だけ訳知り顔で参加してるんだ？」
「あ、ち、ちがう！　これには訳があってだな！」
しまった、と顔に出して口籠もる澪だったが、すでに遅かった。
「その訳を教えてもらいたいなー」
「そんな話は今どうだっていいだろ！」
「よくなーい。そこのところハッキリせんかい！」
「私も聞きたいでーす」
挙手一名、琴吹紬。そこにごく自然に唯も加わる。
「そういえば、何で澪ちゃん知ってたの？」

「賑やかな子たちねー」
火がついたように騒ぎ出した少女たちに目を細めたアルヴィが夏音にうっすら微笑んだ。
「良い子たちばかりじゃない」
「まーね……」
このように喧しいけど、と心で付け足す。それが救いになっているという事は口に出さない。夏音はそもそもこれだけヘビーな話をしているのにこの反応は何だと不満を抱いた。自分が予想していた反応とはえらい違いである。
「て、ゆーかさ」
途中からずっと押し黙っていた譲二が口を開いた。思いがけず響いた低い声に騒いでいた者たちもしんとなった。
「親父から手紙とか超初耳なんですけどっ！？　ねぇ、それどういうこと！？」

「あー……そうだね」
「そうだね、じゃなくてっ！　何か……何かやだっ！」
「何がだよ。友達の前でごねないでよ」
「しかも何かその話だと俺が親父のために日本に来たみたいなっ！？」
そこか……と夏音は溜め息をついた。
それとなく濁したが、明らかに理由はソレだろうと呆れた目線を実の父に投げかける。
「実はねー。私がお義父さんに夏音のことを伝えたのー」
「アルヴィ！？」
思わぬ所で現れた伏兵に譲二がぎょっとする。真横の妻を信じられないといった表情で食い入るように見詰めた。
「これはあなたへの唯一のナイショ話だったんだけどね？　実はたまーにお義父さんと手紙のやり取りをしてたのよー」
「そんな話は聞いてないっ！」
「言ってなかったもの」
バッサリと返され、思わず頭を抱える譲二。
「あんのエロ親父が！　人の妻に色目つかいやがって！」
「それはちがうだろ」
息子も思わずつっこむ。
「ナイショにしていてごめんなさい……けど、これは私のわがままだから」
「アルヴィ？」
譲二は妻の様子をそっと窺う。そして俯いた妻の顔に表れる悲痛の表情に彼女の肩を抱いた。
「夏音が生まれることになって結婚を決めて……私があなたの家族を知らないまま一生を過ごしたくなかったの。今しかない、って思って私からご両親へコンタクトをとったわ。
ほら、ちょうどあの頃に一週間だけ外出したことあるじゃない？
その時に日本へ行って、お義父さまに会ってきたの」

「あ、あの時……マイアミにバカンスに行ったんじゃなかったのか……？」

妊婦だったアルヴィが突然、フロリダに行くと飛び出た時は恐慌した。

譲二はマリッジブルー、いやマタニティブルーかと青ざめて仕事をキャンセルしかけたのと思い出す。

「ふふ、そうやってあなたは疑いもしなかったわね」

彼女はそうやって自分を疑うことを知らない夫を見やって笑った。

「会うとね。あなたの親だ、ってすぐにわかった。あなたの育った町を見たわ。あなたが昔使っていた部屋も。夕食をご馳走になって、あなたの好きだった料理なんか出してもらったりして」

遠くを見るように微笑むアルヴィは息子を愛おしげに見詰めた。

柔らかい笑みだった。

「お腹の中にいるこの子のことを紹介したかったのよ」

それからアルヴィは義理の父と連絡を取り合うようになった。出会った時にも目を丸くしただけで、すぐにアルヴィを受け入れてくれた優しい義父は、実の息子のことなんかよりアルヴィと夏音のことを気にかけた。

手紙の内容も、主に夏音のことが中心であったという。

そんな話を聞くのは夏音も初めてだったが、これでどうして祖父が自分の事を知っていのか明らかになった。

「そんなことが……」

譲二はいまだその顔に驚愕をありありと表していたが、妻をじっと見ていると次第に頬をゆるめていった。

「まだまだどうしようもねえガキだな、俺も。そうだ夏音、まだお前に確認してなかったな」

「何のこと？」

「これから先のことだよ。一度は逸れた道だが……このまま高校生を続けるのか？」

譲二の言葉に息を呑んだのは軽音部の一同であった。

プロという事実を知った上で、夏音には二つの選択肢が存在していることが明らかになった。

わざわざ日本で高校生をやらずとも、人とは違う輝ける道が用意されている。それは決して自分たちとは交わらないであろう行き先。遠い場所へ旅立つ切符を与えられた者なのだ。

思えば、この毛色の変わった同級生は自分たちとは違う遠い場所から訪れただけなのだ。もともと自分たちと同じ囲いの中にいた訳ではない。彼がこのまま平凡な高校生活を続けることの意味を探す方が難しいはずなのである。

「続けるけど？」

それに対してあっさりと夏音は答える。

「そうか」

子が子なら親も親である。譲二はそれだけ言うと、にこっと笑って席を立った。

「なら、それでいい」

息子を見て、うなずいた。そのまま夏音の方へまわり、頬にキスを落とす。

「俺たち帰るわ」

と残すと、その様子をぽかんと見ていた少女たちに手をふった。

「お邪魔したね。これからも息子をよろしく頼むよ」

そしてマークに声をかけると、嫌がるマークを無理矢理に肩を組んで部室を出て行った。

「あれ、どうしたの母さん？」

瞬く間に姿を消した父親と親友の後を追わずに佇んでいたアルヴィに声をかける。彼女は息子の仲間たちをじっと見ていた。

「ううん、私も帰るわ。その前にこの子たちにお別れの挨拶をしなくっちゃ」

「あ、私らですか！？」

慌てて立ち上がった律に続いて、皆がアルヴィに向き合う。

「ありがとうね。カノンをお願い」

真剣な面差しで言うと、全員を抱きしめ頬にキスをした。
そのような挨拶習慣に慣れていない彼女たちはそろって顔を真っ赤にさせた。おたおたする彼女たちに柔らかく微笑むと、夏音に向かって「家で待ってるからねー」と残して部室を出て行った。
部室に残るのはいつものメンバー。
まるでハリケーンが過ぎたようにかき乱された空気がしん、と静寂を落とした。
「い、いい匂い……」
一人、誰知らず呟いた者の言葉がよく響いた。全員がそれに同意とばかりにうなずく。
「じゃなくて軽音部ミーティング！！」
切羽詰まった部長の一声が今までで一番それらしかったという。

陽も完全に落ちて、電気を点した部室。先ほどまで遠くから聞こえてきたソフトボール部のかけ声はもう聞こえない。一同はお茶を淹れ直して、いつもの形で席についていた。いつもの静穏とした雰囲気はない。誰もが言葉を発しづらい中で律は全員の心の内を代表してずばり夏音に訊いた。
「で、夏音はこれからも軽音部なんだよな？」
「もちろん。今までも、これからも俺は軽音部だよ」
夏音は淀みなく、彼女たちの硬くなった体の緊張をほぐすような言葉を落とした。
「そっっっっかぁ～」
尋ねた律が長く重たい息を吐いたのをきっかけに、全員がほっと安堵の表情を浮かべた。
「はぁ～。よかった～。一時はどうなるかと思った～」
彼女にとって緊張を保てる我慢の限界だったのか。唯が机にへなへなと崩れ落ちていった。
「それにしても夏音くんがプロだったなんて！　びっくりじゃない

けど、びっくり！」
「ムギ、意味わかんないよそれ」
「違うの。プロでも不思議じゃないなーって思ってたのに、いざ本当にプロだって言われると……やっぱりすごいよ」
「ま、確かにな……」
うまく言葉がまとまらずに要領を得ないムギだったが、その気持ちを共有できると律はうなずいた。
「いろいろ合点がいくっていうか。パズルの最後のピースが見つかったっていうか……」
「うん！　まさにそんな感じ！」
簡潔にまとめた律がムギ称賛の目線を送られる。
「でも、いいのか？」
澪は今まで二人きりの時でも聞けなかった事を口にする。
「卒業するまでずっと活動しなくていいのか？」
人の関心は移ろいやすい。高校生活を三年。一年のブランクがあるとして、四年以上も姿を現さない状態で再び認めてくれる人がいるだろうか。
過去の人になってしまわないか。無用の心配かもしれないが、澪はその部分を夏音がどう考えているかをずっと気にしていた。
「活動しないなんて言ったつもりはないよ。実を言うと、今でも仕事はやってるんだ」
「え？」
「カノン・マクレーンとして堂々と世間に露出したりはしないけどさ。スタジオミュージシャンみたいにレコーディングに参加したりはしてるんだ」
「そ、そんなの聞いてないぞ！」
「もちろん澪にも言ってないもの」
それから夏音が幾つか挙げたアルバムや曲のタイトルの中にはCMで流れるような有名なものもあった。
「あ、あの曲のベースってお前だったのか！？」

律は世界的に有名な自動車会社のＣＭに使われた曲を思い出す。エコロジーを訴えるために頻繁に流れたため、何となくテレビを流している人でも聞き覚えのある曲である。

昔、グラミー賞を獲ったカントリー歌手がヴォーカルに抜擢されていた。

「いや、あの曲はベースだけじゃなくて俺が作ったんだよ」

さらっとそこに加えられた新たな事実に流石に言葉をなくした一同であった。

「まぁ、こそこそとやってるわけですよ。そういう仕事を再開したのも桜高に入学してからの話なんだけど」

「ま、マジか……」

彼女たちは、改めて目の前にいるのがとんでもない人物なのだと思い知らされた。

「みんなには謝らなくちゃね。隠していてごめん」

かしこまって頭を下げる夏音に一同は顔を見合わせて噴き出した。

「な、なに？」

急にくすくすと笑い出した彼女たちに何かおかしなことでも言っただろうかと当惑する。

「今さら、だっつーの」

夏音はうんうんと同調するようにうなずく彼女たちを上目遣いで見詰めた。

次々に暖かい言葉をかけられるのをむずがゆそうにしながら。はにかんで。白磁のような肌に朱がさしているのを誤魔化すようにぽりぽりと頬をかいた。

「ありがと」

第十六話（後書き）

とりあえず夏音が隠していたことがバレた訳ですね。それに対して軽音部の反応はぽかーんとしつつも受け入れるという。

中には「え、こんだけ？」と肩すかしをくらったような気分の方もいるでしょう。

ただ、私はスケールこそ違っても似たような体験をしたことがあります。

そもそもプロといっても境界線は曖昧かなと思います。プロの定義も皆さんによって違いますし。

皆さんは自分の周りの人間が、プロでしたーってなったらどう思うでしょうね。

案外、プロといっても普通の人ですからね。先に知り合ってから後で知ったパターンもありますし、もともとプロだと知っておきながら会うパターンもありました。

私自身、そういう人が近くにいてもおかしくない世界にいましたので、わりと「プロ」という人種は近くにいました。あ、もちろん私はプロではありません。

そこで女子高生たちならどんな反応をするか……と考えに考え抜いた結果「ま、こんなもんだろう」という感じで作りました。

例えば「な、なんだってーっ！！？　キャー（バタンキュー）」という流れも考えたのですが、どう考えても不自然に感じてしまったのです。

よく「あいつ、マジでプロ並にうまい！」と盛り上がっている人物が「プロなったってー」て言われたら驚きつつも「あー、やっぱ

りそうか一。そうなるよなー」っなりませんか。

たぶん彼女たちにとって、今はそんな感じ。

スゴイっていう感覚が麻痺しているのもありますが、仲間として知り合った相手だから極端に反応することはないだろう、という結論です。

どちらにせよハッキリ言えるのは「これから」です。夏音がプロであることが物語に関わってくるのはこれより後のお話になります。

これはいわば大きなプロローグが終わったに過ぎないかな、と。

エロゲで言ったらここからＯＰが流れる、みたいな。長過ぎですね、ＯＰ。

それでは、残りのお話もお付き合いしていただければ幸いです。

番外編2「マークと夏音」（前書き）

今回は少し短いです。

番外編2「マークと夏音」

マークは先ほどから自分にひっつく小さな生き物を見下ろした。
こちらが身じろぎをしてもちょっとやそっとでは動じない。
なんと言っても体ごとべったりとひっつかれて、なかなか抜け出すこともできない。
「ねーねーまたやろうよ！」
さっきから口をついて出るのは無邪気なお誘いの言葉。自分の姿を見つけた途端、どかっと渾身のタックルを決めてきた相手は、彼がうんと頷くまで解放するつもりはないだろう。
「だから言ってんだろ。俺は今からやることがあるんだからな」
にべもなく言い放った言葉にすかさず盛大なブーイングが起こる。
非常にやかましい。
「いい加減に一人で弾けよ」
「だってまだあんなに速く動かないもん！」
「それができるように、一人で頑張るんだろ？」
「やだ！　マークのとうへんぼく！」
「とう……なんだって？」
聞き慣れない単語にマークは目をぱちぱちと瞬かせた。腰元の小さな友人が自分の知らない語彙を持っているはずがないのだ。
年上としてのプライドが働く前に呆気にとられてしまった。
「わかんないけど。父さんが言ってたよ！」
「ジョージが……変な言葉を覚えてんじゃねーよ」
「一回だけ！　一回だけ！」
マークは思わず天を仰いだ。以前も一回だけ、と言って一時間以上も付き合わされた記憶がまだ浅い。
しばらく反応しないでいると、がっちりと服を掴みながらぴょん

ぴょんと跳ね始めた。
この粘っこさには感服してしまう。この根性が数々の音楽を呑み込む貪欲さと合わさって、天才だとか何とかと言われるのだろう。
そのしつこさは、身をもって理解させられている。マークはそっと溜め息をつくと、視線を再び下に降ろした。
「わかった。だが、カヌー。本当に一回きりだからな！　お得意の『もう一回』を言い出したら二度とやらない！」
「わかってるよ！　だって本当に一回だけだもん！」
ぱぁっと瞳を輝かせて声を立てて、腰を掴む力が消えた。マークはぱっと自分を放して離れた小さな生き物を見る。
にこにことこちらを見上げる年下の少年。立花・M・夏音は少年というには可愛らしすぎた。
フランス人形館あたりに紛れ込ませても何の違和感のないくらい精緻に縁取られた芸術品のような造り。
鼻、目、睫毛、唇、耳。
人々が思い描く白人の美少女、物語のお姫様。そういったものを全部まるごと詰め込んだような容姿を備えていた。
お人形、というには生気に満ち溢れすぎているが、彼を表すのにちょうど良い表現だ。大人しくしていれば。
マークは夏音ほど美しい生き物を見たことがなかった。いや、正確には美しい幼児、だが。
この少年は彼の母親によく似ていて、並ぶと娘と母にしか見えない。よく聖母子像、と評されていて、スループ家に訪れる数々の音楽家たちに評判だ。
夏音の両親はマークの父親の大親友で、マークが母のお腹に発生する前からの付き合いだ。
マークが物心ついた時から当たり前のように側にいた夫妻にもやがて子供ができたわけだ。
夏音が生まれた時、マークは四歳。夏音のおしゃぶりがやっと外れて未知の言語を喋りだした時期には五歳。

アメリカでいう義務教育まで二年の猶予しか残されていなかった。マークは文字の読み書きができたし、特別な教育など無くとも、その辺の幼児レベルかもしくはそれ以上にしっかりとしていた。

マークにとってＡＢＣの歌なんかを他の園児たちと混じって口ずさむことは、苦痛を伴う荒行以外の何でもないということが体験入園の時に判ってから、幼稚園には通っていない。

だが、小学校は通わなければならない。

それこそが、どうしようもなく気が滅入って鬱になる原因だったりした。

その年で鬱になる幼児も珍しいが、音楽から離れる時間が増えるのは歓迎できるはずもなかった。

そこで彼は、もうすぐ平日の日中を学校という牢獄に閉じ込められるようになってしまう前にたくさん遊びたいと考えていたのだ。

やはり世間一般の基準とはかけ離れた幼児だが、スループ一家は基本的に大らかで、最終的に音楽で食っていけばいいさという意見の者ばかりだった。

しっかり家庭環境に影響されたともいえよう。

さらに何だかんだで学校には絶対に行った方がいい、と強く主張したのは立花夫妻だったというのだからどうしようもない。

とにかく、一日が自由に使える残りわずかな期間を謳歌しようと思っていた矢先。

夏音と一番年が近いマークにお目付役が下ったのは災難であった。少なくともマークにとっては。

少し前まで床でハイハイしていたと思いきや、周りの大人達に最高のおもちゃにされてしまった夏音はありったけの音楽を詰め込まれていた。

常に音楽が満ち溢れる環境で育ったマークも同じような道を辿ったというか現在進行形で辿っている最中であるが。

彼もまた、まるで永久に鳴り響くのではないかと思われる楽器の音を子守がわりに育ち、とりわけ最も得意なギターは少なくとも同

年代の子供とは次元を逸しているほどの技術を持っている。
それに比べても周りの人間たちの可愛がりようは異常だ。
一を教えたら十を吸収する才覚に夢中になるのはわかるが、指の皮がむけてぼろぼろになるくらいに楽器を触らされる幼児を見ているのは流石に不憫だった。

とはいえ、少し前までは自分が同じような場所にいたのに、入れ替わり立ち替わりに夏音をかまっていく大人達を見て面白くなかったというのが本音であった。
偏向的に大人びた一面があるマークも所詮は子供なのだ。

そんな大人たちの手から解放された夏音が真っ先に向かう先がマークだった。
何とも懐かれたものだと悪い気はしなかったし、末っ子の自分にもむしろ妹（少なくとも弟には思えない）ができたような気分で誇らしかったりもした。
それは今でも変わってはいないのだが、問題は夏音という子供の特異性に起因するのだ。
夏音が天才と呼ばれる片隅で、マーク自身も負けているつもりは一切ない。　夏音が覚えた楽器は当然ながら演奏することができるし、実力も雲泥の差だ。ちょっとやそっとじゃ追いつかれるはずはない、とタカをくくっていたのだが。
「こないだの弾けるようになったよ！」
と満面の笑みでギターを抱えてきた夏音が、つい先日に弾けなかったフレーズを完全に再現してしまったのをきっかけに考えを改めた。
驚異的な集中力をもって夏音は音楽を吸収していく。才能、という要因が大きいのだろうが、やはり異様な速度で音楽を修めていく姿はマークの背筋をぞくりとさせるものがあった。
さらに技術的な面は努力でカバーするという非の打ち所がない姿

勢に、最近はマンネリっぽくなっていた自分の技術面を危ぶむきっかけにもなったのだ。
それからマークは必死に練習するようになった訳で、夏音から尊敬の眼差しをかろうじて受けることになった。お兄ちゃんも必死なのである。

そんなある日。つい戯れというか、遊び半分の気持ちで一つのギターを二人で弾くギター連弾をやったのだ。
ちょうどその時、左手が間に合わなくて弾けないフレーズがあるという夏音がピッキングを担当。
左手で弦を押さえるのをマークが担当した。Ｔｉｃｏ　Ｔｉｃｏのパフォーマンスや、自分の家族や親類たちの連弾を見て以来、自分もやってみたいという願望があったので、マークとしても些か興奮を隠せなかった。
初めはつっかかりながら、ぎこちなく。次第に息を合わせていくうちに、素晴らしい演奏になった。
楽しかった。
だが、それ以上に楽しかったらしいのが夏音であった。
すっかり連弾にハマってしまったのか、ことある毎に夏音はマークにそれを求めてくる。よっぽど楽しかったんだな、と微笑ましかったのは最初のうちだけである。
今では、そう。うんざりという言葉がぴったりだ。
正直、あれは神経がすり減るのだ。実力が釣り合っていないと、顕著に難易度が上がる。

「ほら、とっととギターを持ってこい」
「うんっ！」
だだっと駆けていった夏音を見送ってから、マークは踵を返した。
向かう先は玄関。

この隙にばっくれようという魂胆である。
しかし、とマークは足を止めた。過去のトラウマが彼の足に自動的にブレーキを施したのだ。
以前、同じようなことをして自分がどんな目に合ったかを忘れてはいないだろうか。
ある時、マークに放っぽられた夏音は大泣きどころではない、スコールのような大号泣で周囲の大人を驚かせた。
泣きわめく理由を訊いても答えない夏音に、何かの病気ではないか。大変だ、救急車を。と大騒ぎにまで発展してしまった。
後々、落ち着きを取り戻した夏音の口からマークの名が飛び出た後の彼が受けた被害は筆舌に尽くしがたい。
あの時の自らの顛末が脳裏にフラッシュバックしたマークは玄関からばっと飛び退った。
危ない。
トラウマを繰り返すところであった。人間は学ぶもの。寸でであったが、マークは同じ失敗を繰り返さない。慌てて居間に戻って夏音を待った。
「持ってきたよ！」
とことことアコースティックギターを抱きかかえるように持ってきた夏音はコミカルに映る。
いたって普通のサイズのギターなのだが、小さな体には不釣り合いなバランス感を呈している。
マークが居間のソファに座るとポテポテと走り寄ってくる。そのままますぐ横に座ると、マークはネックを左手で握った。
同じソファに座っているので、よっぽど体を密着しなければならない。ふにん、とやわらかな感触にマークは僅かにたじろいだ。
「ジャンゴ、だろ」
「そのとーり！」
ジプシーギターの押さえ方は特殊で指使いも通常で覚えるものとは違う。しかし、問題が一点。

「おかしいだろ」
「何が？」
「俺からすれば右手の方が難しいぞ」
「どうして？」
夏音は質問の意図がわからない、とでも言うかのように首を傾げた。
「どうして、って俺が訊いてるんだろ」
「むぅー」と口を尖らせてうなる夏音。
「だって、できるんだもん」
「よしわかった。やっぱり、お前はおかしい」
「おかしくないもん！」
このくりくりと愛らしい瞳をつり上げて憤慨されても何一つ怖くない。
マークは鼻で笑うと、左手を指板の上に走らせた。タッピングだけで音を出すと、パーカッシヴな音色が生まれ出す。
「オーケー、やろう」
「何やるかわかる？」
「部屋から駄々漏れになってたからわかるさ。インプロヴァイゼーションだ」
にっこり笑って大きく頷いた夏音がマークの指を置いた弦をなぞる。

短く、ふっと互いの吐息が漏れた。

バラバラと音階を辿り、メロディーに紡いでゆく。
まだグルーヴとか、ノリなんてものはない。
触る触る、といった感じに息を合わせてゆく。

一瞬だ。

どこからどうそれがシフトしたのかは定かではないが、二人の音楽が始まった瞬間がわかった。

嗅覚、聴覚、そんな次元を超えたところにある感覚がこの場にある音楽をがっちり掴んでしまうのだ。

分散和音とマイナーキーのスケール展開を叙情的にこなす。

何小節か進むと歯切れの良いストロークの連続、突風のごとく、それがやわらぐ、刹那に影となった激しさの代わりに再び物悲しい音の粒が上へいったり下にいったりする。

何年経っても色褪せることのないジャンゴの音。

人は、後に生きる人にとんでもない音楽を遺していくものだとマークは思う。

まさに静と動。

ジャンゴはスィングジャズとジプシー音楽を融合した初の人間と言われているが、やはり彼の根幹にはジプシーの音が大きく存在している。

ジプシーの音楽には何とも哀愁漂うエッセンスが盛り込まれている。

いや、人が哀愁と呼ぶものに似た情感を掻き立てられるだけで、他の何に置き換えるような言葉はないのかもしれない。

ひたすら、これがジプシーの音楽だ。魂だと理解するしかない。

彼らの音楽を知るということは彼らを知ることであって、マークは一生かかってもそこに辿り着くことはないだろうと直感で理解していた。

その表現に限りなく近づけること、は可能だろうが。

なりを潜めた激しさが徐々に表に出てくる。
急に烈しい三連符が雪崩れのように始まると収まり、六連へと膨らむ。高速のトレモロ。弦を引き千切りかねない激情でストロークをする夏音とマークは一体となっていた。

お互いの呼吸がつながり、息を吸ったらどこからそれを吐くか。そんな考えずともわかる自然の行為に等しい次元までシンクロしていた。

激しさの裏に静けさが訪れる。一度高まったものを鎮める行為、暴走しないようにコントロールするのは至難の業だ。
忍耐と情熱をもって生み出される音楽は小学校にも上がっていない幼児達には早すぎた。
マークは相方の、否、自分の右手が収まりきるはずがないと頭の隅で冷静に理解した。それと同時にテンション爆発で全力パッション中の音に酔いしれていた。

途中でピックがぶっ飛んで素手でストロークをする夏音も同じく、目の前でこの狭い部屋を支配する音楽に夢中になっている。

ビンッ！

「アッ！！」

狂ったダンプカーのように突っ走っていた二人は、今の自分達にふさわしくない音に集中を削がれた。

三弦と一弦が切れた。それも同時に。
気が付けば荒い息をしていた夏音は「ふへぇ～」と背もたれに倒

れ込んだ。ギターを隣に乱暴に置くとへらへら笑い出す。
「何だよ」
同じようにトランス状態から解放されたマークもソファにもたれながら、にやにや笑う。
「たのしかったぁ～」
本当に幸福そうに笑う。マークはその笑顔にしばし見惚れ、言葉を失った。
それから頭を押さえて、夏音の腹の上に足を乗せて溜め息をついた。
「疲れた……」
「ねーまたやろうよ！」
マークの足を押しのけて、腹の上にのし掛かってきた夏音がマークの胸の上で頬杖をつく。美少女顔にはお似合いの格好だ。
それが花畑などであったならば。
「ええいっ」
マークは全力で夏音を押しのけた。結果、小さい妹分（弟）はソファの下に転げ落ちた。
「一人で弾けるようになれ！」
「え、もう今のくらいは弾けるよ」
「さっき弾けないって言っただろう！」
「弾けないのは他の曲だもん。マークがこの曲を指定したんじゃないかー！」
「こ、の……」
マークの褐色の肌に青筋が浮き上がる。　夏音は大好きなお兄ちゃんの短気な面を知っていたが、これくらいは許されるだろうと甘い考えでさらに付け加えた。
「本当はやりたい曲あったんだから。もう一曲くらい、いいよね？」
「いいわけあるかーっ！　このボケナスが！」
大爆発だった。

夏音は耳を押さて飛び上がると、部屋を脱兎の勢いで飛び出ていった。素晴らしい逃げ足、逃げ様だった。

マークは肩で息をしながら、夏音が置いていったギターをちらりと一瞥した。

「……ヤバイな。どんどん上達してきている。異常速度だ」

ぷるぷると震える左手をぐっと押さえた。

たった一曲なのに、とんでもない集中と握力を持って行かれてしまった。

あと一曲なんてとんでもない。

「くそっ。こうしちゃいられない！！」

兄としては、常に年下に対する威厳を保っていなければならない。

マークは夕飯まで部屋を出ない、と心に誓って自分の部屋に向かった。

番外編2「マークと夏音」（後書き）

ＰＶ：８８，６３３
ユニーク：５８２４
お気に入り：９９

ありがとうございます！！

これからもよろしくお願い致します！

第十七話（前書き）

え一。

ＰＶが１０万を越えましたありがとうございます！

今後とも、拙作をよろしくお願い致します！！

第十七話

夏休みに較べて冬休みは極端に短い。だから長期と名のつく休みを挟んだとして、寒さがゆるむ事などなく、むしろより厳しく増した冷気は容赦なく生徒達を襲う。

さみーさみー、と暖かい校舎に逃げ込んでくる生徒たちの姿もまた見慣れたものであった。ごうごうと暖房を焚かれ、ほっと暖かい教室内には異様な眠気が満ちていた。

次から次へと登校してきたクラスメートが教室の外から冷気を持ち込んできては、顔を顰める廊下側の席の子は不憫ともいえる。それというのも教室内で気温の格差が存在するからだ。

たいていの生徒は窓側に備え付けられたラジエータ付近に密集する。教室における唯一の暖房機器は窓側にしか備え付けられておらず、温もりを求める生徒達はこぞって暖房の前に向かうのだ。夏は微かに入ってくる風を求め、冬は暖かみを。

やはり窓側の恩恵はことのほか大きいらしい。それでも教室人口の大半を女子が占めているため、男子達は窓際に陣取る女子達を悔しげに眺めていたりする。しかし、実をいうと窓際に座る男子生徒が一番気の毒だったりする。周りを異性に囲まれて身動きできない姿はなかなか涙ぐましい。

そんな何とも言い難い、ぬっくーい雰囲気が流れている教室内に別の理由で凍りついている生徒が一人いた。

「そんな……ひどい……ひどいよ！」

「だ・か・ら！　ちゃんと誘っただろー？」

「俺、遅くからなら行けたんだよ！？」

「だって家族でクリスマス過ごすなんて言われたら、こっちもしつ

こく誘えないじゃんよー」

今にも泣きそうな表情で机にすがりついている夏音とそれを面倒くさそうに慰める律の姿は注目の的であった。あまり朝の娯楽が無いのか、誰もが遠巻きに眺めている。

「あの、マークっていう人もいたんだろ？　久しぶりだったんだからたっぷり一緒に過ごせて良かったんじゃないの？」

「マークはクリスマス前に帰りましたー！」

「そ、そうか」

がばっと顔をあげ、恨みがましい視線を向けられた律がたじろぐ。予想以上に根にもたれているなと、内心ひやりとしていた。

昨年のクリスマス。夏音から非常に重要なカミングアウトがあった後に訪れた毎年恒例のイベント。

お祭り好きの律としては、世間に蔓延しているこのイベントの副次的な意図を唾棄すべきだ、という名目によって友達同士でわいわい過ごしたいねーと考えるのは当然であった。

そもそも、クリスマスに自宅にいる事で弟含めた家族に「今年も予定ないのねー」的な生暖かい目線を向けられる未来を想像するだに、ぞっとしないのだ。

だから、勝手に計画をたてた。ダメもとでムギの家を使えないかと画策したが、断念。甘い考えだったようだ。とはいえ、結果的に唯の自宅が使えることになり、晴れて軽音部の仲間でクリスマスを過ごす事にあいなったのだ。

「そこは押してよー。しつこいくらいに押してよー」

目の前で半べそかいている美少女――ならぬ、美少年かっこ年上かっことじ、はそのイベントに参加することができなかった。

律が部活でクリスマス会の開催宣言をした日、夏音が風邪をひいて学校に来ていなかったことから始まる。

彼女はメールで「クリスマスにみんなで遊ぼうって話したんだけ

ど、夏音は来れるか？」ときちんと連絡したのだ。だが、それに対する答えは「家族と過ごすからごめんねー」というそっけないものだった。

そういえば、アメリカだとそういう習慣だよなーと納得してしまった律はそれ以降は夏音を気にかけることはなかった。悪気は一切なく、家族で過ごすなら仕方ないのだと思ったからだ。

律は、振り返ってみて自分はそこまで悪いことをしたとは考えられなかった。

「初詣は一緒に行けたんだからいいだろー？」

律はそれでも夏音が可哀想だと思って相手していたのだが、だんだん面倒くさくなってきたので、携帯をいじりながら相手をしだす。

初詣は軽音部の全員で行った。律の策略によって澪がただ一人だけ晴れ着姿でやって来たのを見た夏音がやたら興奮していたのが記憶に新しい。

日本の初詣の作法などまるっきり知らない彼に一から説明して、お参りも一緒にしたし、おみくじもひいた。正月を過ぎ、主に体重関係の悩みでデリケートになっている澪とムギに対して、懲りもせずに地雷を踏んだ唯には焦った。まあ、和気藹々と過ごした楽しい思い出である。

「それに父さん達は九時前には知り合いのミュージシャンが集まるパーティーに出かけたよ」

「そっちに行けばよかったんじゃないのかー？」

「……最近、いろいろあったから観るもの溜まっていてさ……」

「あぁ、そっち関係の……」

オタクスティックな用事だ。律たちが紆余曲折はあったものの、ワイワイと楽しんでいた隙にどれだけ寂しい時間を送っていたのか。一人、暗い室内でアニメ鑑賞に耽る姿を想像して、胸を締め付けるものがあった。

「何か……すまんっ」
「もう仲間外れはいやだからね」
「……わーかったよ」
どうして自分がこんなに責められているんだ、と不服しか生まれない。それでも律の中の面倒くさいという感情がそれを上回ったので、しぶしぶ引き下がった。
「あ、そういえばそのマークさんとお前の母さんが……」
律はそう言いかけたところで、はっとして口をつぐんだ。
「ん？　母さんとマークがどうしたって？」
非常に聴覚が優れた夏音は律の発言を聞き零さなかった。小首をかしげて見詰めてくる夏音に、オホホと決まり悪そうに笑う。
自分がうっかり口に出しかけた内容は、本人の耳に入れていいものか微妙であった。このことは、夏音をのぞいた軽音部でも簡単に話し合った。
そこでこちらから夏音に問いただすようなことはよそう、と決めたのである。

それというのも、例のカミングアウトの翌日。珍しく、遅刻した澪とは別々に登校していたのだが、学校に到着すると校門のあたりに異様な雰囲気が轟々と漂っているのを見かけた。
すぐ前方を歩く一組の生徒が「あれ、昨日の人じゃない？」などと会話しているのを耳にキャッチした律はその視線の先をたどってみた。たどってみたところで、顔が引き攣った。
見れば、どこか及び腰の生活指導の教師を気にもかけずに存在する一組の男女。
片や洋画にでも出てきそうな金髪美女。片やサングラスをかけた黒人の放つ存在感は、早朝の学校前にはえらくミスマッチだった。
まるで子供を産んだようには見えないが、夏音（十七）の実母で

あるアルヴィ。もう一人は、世界的人気を誇るバンドのギタリスト。

律はうわーいやだなーと思いながらも仕方ないので、校門に向かう。すると歩いてくる律たちに気付いたアルヴィがはっきりとこちらに向けて手を振ってきた。

微笑むだけで背後に不可視の花が散らばる。

(うわー後光がさしてるよ)

オーラが半端ない。おまけに二人そろって近づいてくる。この時点で無視することなどできず、会釈をする。

「ハーイ！　寒いわねー」

「は、はい。あの、夏音のお母さん……」

「あら、気軽にアルヴィって呼んでちょうだい。あなたはたしか、えっと……ごめんなさいね」

「あ、律です。田井中律って言います。あ、アルヴィさんはどうしてここに？」

「律ちゃんねー。私というより、この子があなた達に用があるみたい。どうしても言っておきたいことがあるそうよー？」

どうみてもこの子、という柄ではないが。ぽん、と肩に手を置かれたマークは嫌そうに顔を顰めて、それがとんでもない迫力なのだ。

「この子、まだ日本語が上手じゃないから私が通訳なの」

そのまま背中にまわされた腕がマークを律たちの前に押し出す。少しよろめいてから咳払いを一つ。不機嫌そうだった表情とは裏腹に割とフランクな声で「Ｈｉ」と話しかけられた。

律は「ハ、ハイっ！」といかにも日本語のままの発音で返す。

昨日のこともあり、すごい人なのだという事は骨身に沁みているのだが、それでも気軽に話せるような相手ではない。

律がガチガチと固まっていると、マークはぽつぽつと口を開いた。

「君たちはこの一年、あいつと一緒にいたそうだな」

アルヴィによる通訳で即座に日本語に直される。

「ずっと音楽をやっていた。そうだな？」

「え、ええ。まあ、ハイ」
“ずっと”音楽をやっていたかと言うと語弊がある。十割の内、音楽は四割ほどしか占めていないのではないか。
そう考えると、プロのミュージシャンと過ごしていたというのに、なんてもったいない時間を過ごしていたのだろうか。
「一緒に音楽をやっていて……どう感じた？」
「どう……って？」
「楽しかった。切なかった。色々あるだろう？　あいつと一緒にやる音楽はどうだったんだ？」
「あいつとの……音楽」
考えずにはいられなかった。昨日の晩はその事がずっと頭を占めていたし、おそらく他の皆も同じだと思う。
「あいつとの音楽は……疲れます」
そんな事を言うつもりではなかった。
楽しい、とか興奮するとか。終わった後の達成感なんか、伝えるべき事がたくさんあった。
それでも、この口は選ぶべき言葉を選べなかった。ふと、口に出してしまったことへの罪悪感がわき上がる。
「いや、何て言うか内容が濃すぎるって意味で！」
慌てて律が弁解を口にすると、マークは声を立てて笑った。なんかウケた……と律はほっと胸を撫で下ろした。なんて疲れる会話。
「君はドラマーだろ？」
「ええ、まあ」
「楽器をやめたいと思った？」
「ドラムを？　それはないです！」
ドラムをやめたいと思ったことなんてない。予想外をついてきた質問につい声を荒げてしまった。
はっとしてマークを見ると、腕を組んでこちらをじっと見詰めていた。
「オーケイ、わかったよ。君は……君たちはまだ知らないんだな」

「知らないって……何ですか？」
「あいつの本当の意味での恐ろしさを知らないんだ」
その言葉を聞いたアルヴィがくっと眉をひそめるのが判った。数秒、躊躇った後に彼女はその通りに訳した。
「恐ろしさ？」
「そうだ。君たちはあいつの本当の実力も見ていないし、そんな奴と一緒に音楽をやっているという行為を理解していない」
彼はどうしてか晴れやかな顔をしている。滔々と語られる言葉が律の頭を鈍らせていく。
何を言っているのか、理解ができない。
「そうか。安心したよ。君たちは楽しく音楽をやっているんだな。俺が言うまでもないだろうけど、これからも是非、音楽を楽しんで欲しい」
「は、はあ……」
「よかった。遊びの範囲で」
「……え？」
律はその言葉がかなりしゃくに障った。自分たちの活動がお遊びと言われたのだ。
プロから見ればお遊びかもしれないが、これでも真剣にやっている音楽を馬鹿にされた気がしたのだ。
「それ、どういう意味ですか？」
思わず語気を荒げて反問したが、アルヴィがそれを許さなかった。非常に困った様子で額に手をあててマークに何かを言うと、マークは肩をすくめて笑うと「サヨナラ」と律に手を振った。
「んなっ」
「ごめんなさいね」
律が呼び止めようとすると、アルヴィが遮った。眉尻を下げて申し訳なさそうに律の頬に手をやる。その困り顔さえも美しい友人の母はふぅ、と甘い溜め息をついて律に対して切なげに微笑んだ。
「悪気はないの。むしろ、あなた達を心配してるのよ」

「あの言い草で？　すっごく馬鹿にされた気がするんですケド！」
「まあまあ。そんなに目くじらたてないでちょうだいなー。あの子の言った事もまるっきり外れてはいないのよ」
「だから、それが意味わかんなくて……」
「それはね。私はあなた達が実際にソレを味わうのが良いと思うの。言葉で語っても仕方がない事だもの」
　律はショックだった。突然現れた友人の家族がそろって訳の分からない事を述懐していく。その内容が気に障る。
「さっきからあいつがひどい事をする奴だって聞こえるんですけど」
「あなた、あの子のために怒ってくれるのね。もちろん私たちはそんなつもりはない事は分かってちょうだい」
　アルヴィは、彼女の息子と同じように人を真っ直ぐ見詰める青い瞳で律を射貫いた。
「それでも、過ぎた才能が時に人を傷つけることもあるの」
「……よくわかんないです」
「大丈夫よ。今はそれだけで……あなたはあの子を好きかしら？」
「……そんなの、仲間ですから」
「そう」
　アルヴィは律に顔を近づけると、昨日のように頬に口づけを落とした。ちゅっとくすぐったい音が響いて、律が硬直する。
「よろしくね。願わくば、あの子の事をもっと知ってあげてね」
「ひゃ……ひゃいっ！」
　美人のキスの威力を侮ってはいけない。律は舌がもつれて上手く返事ができなかった。

「じゃ、また会いましょう」

　顔を真っ赤にさせている律に手を振って彼女は去っていく。しばらく行った処にマークが待ち構えていて、登校してくる生徒たちの群れを真っ二つにしながら歩み去っていった。

やはり凄まじい存在感。律はリアルモーゼを目の当たりにした律はぽかんと彼らを見送った。

その後、夏音がいない間に軽音部の皆に今朝の事を報告したのだった。

「へイへイ、母さんとマークがどうしたってー？」

そんな事もあって、うっかり口が滑るところだった。ギリギリセーフである。律はしつこく繰り返してくる夏音の顔を眺めた。

相変わらず、麗しい。彼の母親と瓜二つの美貌が自分だけに向いている。内心で舌打ちすると、ぺしんっと夏音の顔を両手で挟んだ。

「お前、本当にうらやましいなー」

「な、なにが？」

若干喋りづらそうに夏音が返す。

「その睫毛とかムカつくなー」

「り、律しゃんはなしてっ」

そのまま頬を引っ張って遊ぶ。すべすべもちもちの肌が面白いように形を変えて、律は意地悪く笑った。

結局、少し前の発言も頭からぶっ飛んだらしく律は難を逃れることができた。

「そういえば夏音くんの動画いっぱい観たんだけど、すごいよねー」

放課後、それまでと変わらない形でティータイムが行われている最中。いつものように菓子をめいっぱい口に含んだ唯がもぐもぐと咀嚼しながらそんな事を言い出した。

「唯ちゃんも観たの？」

ポットの中身が空になったため、新しく茶葉を蒸らしていたムギが唯の発言に顔をあげた。

「うん。もしかしてムギちゃんも？」
「ええ。素敵だったわー」
ムギは恍惚の表情で微笑んで、こくりとうなずいた。
両者の会話を何気なく耳に入れていた律は「やっぱり全員同じ事考えるんだな」と半ば呆れるように感心した。
かく言う律も、ユーチューブ等の動画サイトでカノン・マクレーン関連の動画を漁るようにチェックしていたのであった。
どんどん関連動画が貼られており、次から次へと自分の知らない夏音を目にすることになった。
コメントは英語がほとんどだったりするが、中には日本人がアップしている動画もあり、なかなかの認知度がある事を思い知らされた。
枝分かれするように際限なく連なっている動画の中には、律が尊敬しているドラマーの一人とのセッション動画もあり、度肝を抜かされた覚えがある。
「えー、何それ。超恥ずかしいんだけど！」
そんな彼女たちの会話を前にして夏音が頬に手をあてて顔を赤らめた。こうして見れば、普通の女の子……百歩譲って少し綺麗すぎる男の子にしか見えない。
「夏音くんって髪の毛染めてたんだねー」
「うん……ま、色々あってね」
「でもムギちゃんのとはちょっと違う感じだよね」
「え、私？」
急に話を振られたムギはついどぎまぎする。その際、ティーカップに注いでいた紅茶を溢しかけていた。
「私も色素が薄いけど、金色ってほどでは……。どっちにしろ夏音くんほど綺麗な色じゃないもの」
「ええーっ？　私、ムギちゃんの髪の色好きだよー」
「ふふ、ありがとー」
やや虚をつかれたような顔つきで、それでも嬉しそうにムギは笑った。

そんな中、澪は何とも言えない眼差しで彼らを見ては小さく溜め息をついていた。よく見ればその表情はどこか憮然としていて、ふてくされているようにも映る。

実際に、澪は少しだけ面白くなかった。もともと自分だけが気付いていた秘密があっけなく他の部員にバレた。それでいて何かしらの変化が表れるものだという懸念も何のその。

軽音部はいつもと変わらぬ安穏とした空気を醸し出している。まさに順風満帆、平凡な航路をのほほんと漂い続けているのだ。

百歩譲って、澪だけが夏音の秘密を知っていた事を散々からかわれたことは仕方がないと思う。

幼なじみが自分をからかうための隙を与えてしまったのだから、そうなるのは自然の流れだったといえよう。結局、自分が今までずっと夏音にベースを教わっていたことが露見してしまった。

もちろん死ぬほどからかわれた。多大な羞恥心を犠牲にしたというのに、ここまで部に変化がないのはどういうことだろうか。

澪は和やかに頬をゆるめている仲間たちを一瞥した。

プロのミュージシャンが側にいることを知ったのだ。それなりに音楽的な意識に変化があっても良いのではないか。

むしろ向上心がある者なら、千載一遇のチャンスとばかりに夏音を利用するくらいの勢いがあって然るべきだろう。何かないか。普通では考えられない何かすごいことを達成する機会があるはずだ、と期待する心が生まれるはずなのだ。

しかし、彼女たちは今まで通りに仲良く高カロリーのお菓子をつっつき合うだけ。

これではまるで宝の持ち腐れのようなものだ。

（宝の持ち腐れ……）

ふと、頭に湧いて出た言葉にはっとなる。

思えば、この言葉はまさに軽音部にぴったりではないか。

ギター歴が一年にも満たないのに、飲み込みの良さとセンスだけ

は抜群の唯。
　堅実な鍵盤を操る技術と、夏音の影響によってシンセの知識を増大させたムギ。
　いまだ怪しいテンポキープながらも、普通の女子高生よりは卓越したドラミング技術を持っている律。
　そして、カノン・マクレーンからほぼ一年間もベースの手ほどきを受けた自分。完成というには程遠いが、それなりの土壌を持っているはずである。
　むしろ、依然として伸び代が十分に残されているといってもいい。
　だというのに軽音部でライブをやったのは一回きりというのはこれ如何に。
　自分たちの実力を確かめる機会がない。いや、機会を放棄しているといってもいい。
　このままだと、次のライブがいつになる事か。どうにかしないと。
　自分が、唯一まともな自分が何か行動を起こさないと……と悩むだけの澪は、いつまでも行動に起こすことのできない自分の小心さ加減を呪った。
　結局、今の自分だって彼女たちと同じく、高カロリーの菓子と高級茶葉を消費するだけの存在なのだ。
　情けなくて溜め息をつくことしかできない。
「おーい澪。さっきから難しい顔してどうしたー？」
「うるさい。今考え事してるんだ」
「恋煩い？」
「ぶふぅーっ！？」
　澪は思わず口に含んだ紅茶を噴き出した。滅多に見られない澪の粗相に一同が唖然としていた。
「ず、図星かっ！？」
　とりあえず澪は、焦って違う方向に勘違いを進めようとする幼な

じみの頭に拳固を落とした。
「何をくだらないこと言ってるんだよっ！」
「い……っ……」
ワリと切羽詰まった表情で頭をおさえる律。予想以上に澪の拳固の威力が強かったようだ。
「り、りっちゃん大丈夫？」
見慣れた光景だが、普段の十割増しの威力を放った澪の拳は傍目にぞっとしない鈍い音を奏でたのであった。確実にベードラ一発分の音はした。
「す、すまん……強くしすぎた」
あまりに痛がるので流石にやりすぎたかと不安になった澪。
「だ、大丈夫か？」
そっと歩み行って、うずくまる律をのぞきこんだ。その瞬間。
バッ。
「へ？」
赤い水玉と私。
立ち上がり様に勢いよく振り上げられた律の手は、親友のスカートにひっかかり、思い切りまくりあげた。
当然の結果として、露わになる澪の下着。
その瞬間、学園祭の事件が電光石火で脳裏に浮かんだ夏音は目をそらすこともできずに、澪の下着を拝んだ。
刹那がスローモーションに引き延ばされ、赤と白のストライプが全員の目に焼き付く。
「Ｊｅｓｕｓ……」
「お返しだーっ。今日のパンツは何色かなーってね！」
頭に巨大なタンコブをこさえた律は驚異の回復力で反撃を加えた。
けれども、彼女の幼なじみはしっかりと成功したその復讐を笑顔でむかえてくれるはずもなかった。
「りーーーーつぅーーーー！！！！」

血を吐くような悲鳴が部室に木霊した。

「で、澪は何を悩んでたんだよ？」

見事な二段タンコブを咲かせた律は、ふと神妙な表情をつくって澪に向き合った。その横では、何故か巻き添えをくらった夏音が小さめのタンコブをさすりながらうなずいていた。一応、見たということで夏音は甘んじてその一発を受けた。

ただでさえ吊り目なのに、怒りによって目尻がきつくなった澪は完全にブチ切れている様子である。

喉をならし、怒りのオーラをふしゅーっと発している彼女は、無理矢理律に献上させたタルトに勢いよくフォークを刺した。

「うっ」

まだ怒っているらしい。ここまえ怒りを引き摺るのは滅多にないので、律はたじろいだ。

「軽音部なのに」

一言、口を開いた澪が溢す。

「なのに？」

「軽音部なのに、何で私たちはライブをしないんだ？」

「……」

澪をのぞく全員分の沈黙が流れる。

「な、何でだろうなー」

乾いた笑みで笑う律に視線が集まる。その中に混じる厳しい目線に律の態度がしぼんでいく。

「澪の言う通りだね」

夏音は腕を組み、強くうなずいた。夏音の言葉を受け取った全員の視線が彼に照射される。

「せっかく練習してるんだからライブに出ないと損だよ」

夏音の言葉に全員の顔が引き締まった。
練習。練習といえば、軽音部で練習をする頻度が問題である。冬休み前のハプニング勃発の時点で一週間も練習をサボっていた状況だった。その上、すぐに冬休みが始まったので合わせて二週間以上は裕に演奏していない。
「確かに練習量は少ないね。絶望的なくらい」
それでも、と夏音は続ける。
「みんな家ではきちんと練習しているみたいだし、その成果を本番で出す事も必要じゃないかな」
全員がその言葉に思うところがあった。中でも唯は去年ギターを始めたばかりの頃の自分と今の自分を比べて思わず唸ってしまう。
自分でリフを考えられるくらいに腕をあげる事はできたと思う。学校祭以来、かなりのオリジナル曲を作ったが、そのどれにも頭を絞ってひねり出した彼女のギターフレーズが紛れ込んでいる。
同じように律やムギも自分が持っていなかった技術を着実に身につけている。それらのきっかけはやはり夏音である。
今思えば、自分たちはこの年若いプロミュージシャンの元でそれなりに演奏技術を向上させていたのではないか。
中でも澪は、他の者とは比べようもない程の上達を見せていた。
「私、ライブやりたい！」
唯が胸の前で両手を握って力強く言い放った。
「ライブやろ！　やりたいよ！」
「急に態度変わったな……でも、私も」
律も、本番のステージで自分の腕をかき鳴らしてみたいと思った。
「わ、私もライブできるならやりたいです！」
次々と沸き起こるライブコールに夏音はふっと笑って澪を見た。
「だ、そうだよ。これでいいよね？」
「そ、そんなの私の方がもっとライブやりたいもん！」
よく分からない返事をしてきた澪に苦笑した夏音は、ぱんっと手を打った。

「とにかく！　全員一致だね！　ライブしよう！」
「「「「おーっ！」」」」

それから一同はライブをやるにあたって、「いつ、どこで」を決める事にした。二月に入れば学年末のテストが入ってくる。やるなら、その前。問題は「どこで」やるかだ。

「場所は講堂でいいよね」
「うん、そこしかないと思う」
体育館ともなると、他の部活動が練習に使っているので無理がある。文化祭のように限られた時間でセッティングする必要もないので、リハーサルの余裕もある。
「ちょっと待ったー！」
すんなりと決まりかけた場所の件に異議を申し立てる者がいた。
「どうしたんだ律？」
注目を浴びた律はコホン、と咳払いをした。
「いやいやー。お前らちょっとばかし考えてみようぜ」
と彼女は講堂でライブをするにあたっての問題を挙げた。
第一に、セッティングとリハーサルの時間に余裕があるとして、本番が開始可能になる時間はいったい何時頃になるか。
第二に、ほとんどの生徒が何らかの部活動に勤しんでいる中、客が来るのかといった問題だ。
「そもそもある程度お客さんがいないと話にならないだろ？　それで言うなら放課後にやるって時点で何人が来るんだ？　しかも授業が終わってすぐに始められないなら帰宅部の人だって帰っちゃうだろ」
「……Ｏｈ」
ここで誤解が無いようにしておくが、それに反応したのは夏音ではなく澪であった。澪は律の口からすらすらと出てくる至極まっとうかつ的を射ている指摘に心底驚いた。

それでついついネイティブっぽい発音で驚きを表してしまったのだ。

「そんなの考えてもいなかった……」

「そうだなー。俺も聴いてくれる人がいないとやる気が出ない」

いつでも自分の演奏を聴きにくる大勢の客に恵まれていた夏音にしてみれば、本番という名で誰もいないようなホールでぽつんと自分たちの演奏が響く事など、何にも耐え難い事態なのである。

声をかければ……かけなくても謎に自分を慕ってくるファンクラブのメンバーが集まってくるだろうが。

ひょっとして澪のファンクラブと合わせれば、結構な数になるのかもしれない。試す気はさらさらないが。

「でも、他に演奏できる場所なんてあるのかしら？」

心なしか前向きに傾いていたムードが失速したように思える。各自、頭をひねってどうしようかとうなっていると、問題を指摘した張本人である律だけは自信に満ちあふれていた顔をしていた。

「ふっふー。やっぱりここは部長である私の天啓めいたアイディアが必要みたいねー」

今日の律はどこかおかしい。まっとうな部長としての自覚がついに目覚めたのかと誰もが疑いかけたくらいである。

「一応、聞くだけ聞いてみようかな」

「お前、私の扱いひどくね？」

夏音から全面的に信用されていない事を知った律はがくっと肩を落とした。しかし、自分の発言に注目が集まっている事に気を持ち直して再び尊大な態度を復活させる。

「まー聞いて驚くがいいさ。実を言うと、私の友達でバンドやってる子がいるんだけどさ。その子が今度あるイベントに出場するって言ってたのを思い出したんだよ」

「ん……？　今、出場って言った？」

「まーまー最後まで聞きなさいよ。確かあのイベント何て名前だったけな……轟音……いや、爆音……えーと……」

「も、もしかして」
まるで痴呆老人と化した律の言葉を聞いていた澪が青ざめたような顔で震えだした。
「爆メロじゃないだろうな！？」
「あー、それだ」
律が澪の発言にぽんと手を鳴らした。頭の奥でつっかかっていた物が判明してスッキリした笑顔だ。その笑顔と対照的に頭を抱えて悲鳴をあげる澪に一同はぽかんとした。
その悲鳴に切迫した響きを感じたのだ。
「爆メロってなに？」
何だか美味しそうな名前かも、と涎を垂らしそうになった唯に不敵な笑いを浮かべた律が説明する。
「爆メロ☆ダイナマイト！　十代限定のバンドイベントさ！」
「意外に男くさい名前だね」
唯がガッカリしたような声を出す。
「いや、誰も殴り合ったりしないからな」
全く予想外の感想に律がむっとした。もっとこう、バーンと驚きを示されると思っていたのだが。
「い、いやだ。いやいやいやいや！！」
「澪さん？」
突然、引き付けを起こしたように痙攣する澪は頭を抱えて窓際に移動するとぶるぶると縮こまった。
尋常ではない様子の澪の様子に誰もが唖然とした。
「いったい澪ちゃんはどうしたのかしら」
ムギが心配そうに澪の側による。そっと肩に触れると稼働中の洗濯機のように振動している。思わず手をひっこめたムギであった。
「ムリムリムリムリ」
念仏のように呟く澪の表情は蒼白いのを通りこして土気色へと変

化しそうになっていた。やがて、これは相当な異常事態だと悟った一同は、彼女をそんなにさせた爆メロについて律に問い正した。
「ペニーマーラーってライブハウスで毎年開催される十代限定のバンド合戦なんだ。コンクールっ言ったら違う気がするけど、そんな感じ！　優勝したら賞金二十万円！」
「あー、そういう感じのか」
夏音は納得したように頷いた。どこにでもあるコンテストだという事だ。
「二十万円！？」
そこに反応したのは唯だった。彼女の中で二十万円があれば、どれだけのケーキを買う事ができるかという妄想が思い描かれていた。
「あ、もうそんな食べられないや……」
「唯は何言ってんだ？」
律は一向に自分の思い通りに進んでくれない会議に苛立ちを感じ始めていた。
「だから出ようぜ！　爆メロ！」
「ちょっと待って。それってテレビとか入るの？」
勢い込んで立ち上がった律に夏音が声を差し挟む。
「いや、そこまで大きいコンテストじゃないからテレビは無いよ。もともと閃光ライオットを真似ただけのローカルなものだし……って言ったら開催者が怒りそうだけど」
「そうか。なら俺は出てもいいかなと思う。賛成一票！」
「おおっ！　これで賛成二票だな！」
「わ、私も一票！」
いきなりの大舞台に逡巡していたムギだったが、意を決めて手をあげた。
「おーい唯は？」
律はそう言っていつまでも妄想の世界に入り浸る唯の肩を揺する。
「はっ！　出ます！　超出ます！」
「よし、これで残るは……澪しゃーん」

律はずっと隅で震える澪の脇に手を差し入れて、持ち上げて立たせる。小さな首を振っていやいやした澪だったが、強引に立たされたのでかろうじて地面に足を踏ん張る。
「そんな……あれ、何人来ると思ってるのよ!?」
「えっと……前に二人で言った時はハコが満杯ぎゅうぎゅう詰めだったから……二千人くらい？」
「ヒィーーッッ!!!」
再び悲鳴をあげて崩れ落ちた。
「二千人かー。ライブハウスにしては結構キャパあるんだね」
「まー基本的にプロのバンドが来る場所だからな」
「それなら不足なし、だな」
少しだけやる気を出した夏音であったが、ふいに怨嗟のこもった視線を感じた。
「何で俺を睨むの？」
「絶対イヤだからな」
「頑なに拒むねー。別にいいじゃんか」
人前に出る事が苦手なのは分かる。ここまで拒むとは誰も思っていなかったが、考えてみれば初めてのライブでトラウマを持っているのだ。
「あんな事は滅多に起こらないよ？」
「そ、その事じゃなくて！　ていうかそんなの今ので思い出したよ！　やっぱり、ライブやめましょう！」
「さっきライブやらないのかって怒ってたの誰だろーね!?」
支離滅裂な澪に夏音は呆れた。このままだと基本的に逃げ腰の澪はあれよこれよと理由をつけて拒み続けるだろう。
「澪は人前でやる度胸をつけないと！　練習で出来たんだけど本番出来ませんでしたーじゃ意味ないんだよ？」
「そ、それは分かってるんだけど……」
「まあ、こういう場合は澪の意見は無視しよう」
夏音の言葉に澪が目を剥く。

「なっ！？　私だって軽音部員なんだぞ！」
「民主主義の原理は多数決なのです」
「くっ……これだから民主国家から来た人間は……」
「日本も民主主義じゃないか」
うっ、と返す言葉を無くした澪はしおしおとうなだれていった。
「まー澪を口説き落とす方法は幾らでもあるんだなー」
意固地に反対する澪の頭に手を置いて律はごそごそと携帯をいじり始めた。何だ何だ、と様子を見守っていた一同だったが、「おっ、コレだ」と動きを止めた律が澪に携帯の画面を見せたのを見て「なるほど」と頷いた。
「こ、これはっ！」
澪の顔が真っ赤になる。
「これ、公開しちゃおうかなー。ファンクラブの人とか、飛びつくぞー」
「この悪魔っ！」
明らかに涙を浮かべて悔しそうにほぞをかむ澪の敗北だった。その携帯に何が映ったのかは二人しか知らない。

「と言う訳で全員の意見が一致したって事でよござんすねー！」
反対の声はあがらない。
「あの、こちらのイベントは誰でも出る事が可能なんですか？」
ムギがおずおずと疑問を挙げる。すると、ビシッとムギに指を突きつけた律が「よく気付いた！」と叫んだ。
「もちろん誰でも、はムリ。だからデモ音源を送らないといけないんだよなー。その方法も考えないと」
「音源か……」
夏音は頬に手をあてて思案する。
「それなら俺の家で録音しようか」
「できるの？　録音」

「もちろん。我が家の自宅スタジオに不可能はない！」
澪は床に伏せながら「あー確かに」と思った。毎週通っているので今さらスタジオの機材設備を見ても驚かないが、他の者は度肝を抜かれるだろう。
「すごいのねー夏音くん」
「まぁ、これでも本業ですから？」
少し鼻を高くする夏音に一同は苦笑した。本人に言われたら返す言葉もない。
「とにかく、決まりだね。その前にそのデモ音源の応募締め切りはいつまでなんだ？」
新曲も作る事を考えると、あまり余裕がないと困る。すると、律は再び携帯をいじる。しばらくして「あっ」と重たい声をあげた。
「今週の……金曜日だ」
その場に戦慄が走った。
「それ……世間では明日って言いませんか？」
「……そうとも言う」
唯一、澪だけが「それなら間に合わないな」と喜んだ。

郵送する事を考えたら、当日の午前中までには音源が完成していなければならない。つまり、この瞬間から明日の朝までにレコーディングを済まさなければならないのだ。
夏音としては、そのイベントの敷居がどこまで高いのかは判らないが、万が一にでも落選する事など許されない。夏音の全プライドをかけても許されない。
「今日……今日は俺の家に泊まり込み！！」
夏音の裂帛の宣言を拒否できる者はいなかった。一同には既に参加を見送るという選択が見えていなかったのである。ただ一人をのぞいて。

もう放課後に部室にいる暇もないくらいにてんやわんやとなった。まずは機材をどうするかという話になったが、部室にある機材より遙かに良い物が夏音宅にあるということで事なきを得た。

とりあえず、各自の家に帰ってから最低限の支度をしてから夏音の家に集合することになった。唯一人だけ実家が離れているムギは夏音の家に直行する事になった。

実家にその由を連絡するムギが受話器越しに「ええ、もちろんみんな女の子よ」と言っていたのを夏音は聞き逃さなかった。

まあ嘘も方便、男が混じっているなど家族が聞いたら事だもんな、と心に繰り返し納得させた。

「お友達の家にお泊まりって初めてでわくわくしちゃう！」

と胸を高鳴らせるムギを一瞥した夏音はふっと笑った。

「今夜は寝かさないぜ？」

「あら、うふふ」

夏音の言葉を冗談だと受け取ったムギは案外まんざらでもない笑顔で返したが、まさかこの時の夏音が本気で言っていたと知るハメになる。

「ストップ！」

「……ハァ」

律は作業開始してからもう何度目にもなるその言葉にうんざりといった顔をした。現在時刻は夜中の零時を超えて久しい午前三時。真夜中である。

「だから、さっきからずっと同じ所で台無しになってるんだよ。そこのキックは百歳でくたばりかけのお婆さんに肩叩きするくらいの気持ちで！」

「私だってさっきからやってるつもりだっての！」
「フェザリングが苦手といっても程があるだろう。不格好な音で支えられてもこっちが音を乗っけたくないよ」
「……いつにも増して厳しすぎないか……？」
「そりゃそうだよ。わりと厳しい審査になるんだろ？　半端な物出したくないだろう」

もう一回、と夏音はカウントを促す。知れず溜め息をついた者は律だけではない。
同じく何時間もレコーディングを共にしている他のメンバーも疲労にひしがれた表情で肩を落としている。
レコーディングを開始してから六時間がまわっていた。
夕飯を済ませた一同が夏音の家に集まったのが夜の八時。それからあらゆるセッティングと音作りを入念に済ませ、一時間後にレコーディングを開始させた。

初めは各楽器ごとに録る予定だったのだが、ほとんどの者がクリックに合わせた演奏だとどうも調子が発揮できなかった。そうと分かった夏音は、やはりバンドで合わせた演奏を録音した方がいいとすぐに判断して、それからほぼぶっ通し状態で録音を続けている。
間に休憩を挟みつつであったが、いつもの軽音部のようにゆったりとお茶を淹れる暇はなかった。
集中を途切れさせたくないと主張する夏音は最長で十五分の休憩しか許可しないのだ。
体力的に限界が訪れようとしていた。それでも夏音が妥協を許すことはなかった。

「疲れたのは分かるけどさ、みんながしっかりやれば早く終わるんだよ。ぱっぱと終わらせようよ。頑張ろうよ！」
夏音が励ます言葉も、どこか白々しく聞こえてくる。

皆は表面上では頷いていたが、夏音の言葉の裏には自分達の下手さを皮肉るような意味が含まれているのでは、と疑ってしまったのだ。

今までの練習の時とは明らかに違う。練習の時もそれは厳しかった夏音だが、ここまで他人を追い詰める事はなかった。

特にドラムの律に対する指摘はいっそうの厳しさを増していた。ことあるごとにドラムである律が注意をされ、次第に律の精神にも不可がかかってきた。

ちなみに先ほどから夏音が止めている理由はサビ終わりで打って変わって静かになる部分で、律のドラムの音が大きすぎるというものであった。

ドラムを小さい音で叩くのは、意外に技術を要する。

熟練した者になれば、ボリュームだけでなくニュアンスさえ自由自在なのだが、律はそうは行かない。弱く弱くと言われて努力しても、なかなか満足いく出来にならないのだ。

今度は一曲を通す事ができた。

各楽器の音の余韻が消えるのを待って、夏音が口を開いた。

「うん、今のは良かったよ律！」

「……で、今度はどこがダメなんだ？」

及第点を得たと知っても、全く嬉しそうなそぶりを見せない律。むしろ、次はどんな指摘がくるのかとげっそりしていた。

「んー、色々あるけど……」

まだ色々あるのか、と青ざめた。

「まぁ、とりあえず大丈夫かな。最後のタムとバスドラ絡めた三連まわしのフィルもいい感じだったし、そこから転調する所をもっと勢いよくやってくれれば最高だね。ていうかドラムより、キーボードなんだけど」

「わ、私ですか！？」

急に方向転換して自分に指摘が入ると思っていなかったムギは狼

狽してビッと背筋を伸ばした。
「やっぱリバーブもっと浅めにしてくれないかな？　何となく、深すぎる気がね。俺も俺で揺らしてるじゃない？　上手く噛み合ってない気がするんだよね。こう……もっと湖畔に落ちた波紋みたいな？　生まれたての静かな波。岸まで行かない感じで。わかる？」
「あ、ハイ！」
「でも……どう思う？」
「そ、そうですね。試してみるね」
「うん、お願い。あと決めのグリッサンドはもっと大胆にやってもいいよ」
「はいっ！」
それから1コーラスだけ通す。演奏が止まると「やっぱこっちのがいいね」と頷いた夏音は額に流れた汗を拭った。
「よし、休憩しようか」
その一言に一斉に安堵の息が漏れた。
「もうこんな時間か！　夜食でも用意しようか？」
「夜食!?　わーい！」
夏音の言葉に咄嗟に反応した唯はぶんぶんと尻尾を振る。少しでも多く体を休められるなら、と他の者も楽器を置いてそれに賛同した。
今から本格的に作るには手間がかかるとの事で、一同は立花家に常備していたカップ麺にありついた。

「うぅ……夜中にこんなの食べたら太る……」
「こんだけカロリー消費してるんだから平気だって」
涙を飲んで麺をすする澪を慰めるように律が言う。
「あっ」
律が箸をぽろりと落とした。握力がほとんどなくなっているのだ。
律は「ポロっちゃったー」と笑いながら周りを見ると、他の皆の箸

を持つ手が震えていた。
唯もムギも。食べづらそうに箸を動かしている。特に旺盛な食欲を余している唯は手が上手く動かない事への歯がゆさにもだえている。
「うー、もっと大胆に食べたいのにいけんですばい……」
全員、こんなに連続して楽器を弾く機会がなかったから腕に来ているのだ。
律は改めて、夏音の音楽への厳しさを知らしめられた気がした。もしかして、マークが言っていたのはこういう事なのかもしれないと思い返す。
しかし、厳しいものの自分は音楽をやめたいなんて気持ちにはなっていないし、やはり大げさな口を叩いていただけだと一笑する。

「あー、やっぱ久々に食べるとうみゃい！」

隣でずるずると麺をすする夏音はまったく体に変調をきたした様子はない。手が震えるどころか、疲れているそぶりさえ見せない。その一人だけ余裕綽々といった態度に律がむっと目を眇めた。
「今日はあとどれくらい続くんだろうなー」
箸を置いた律が椅子に背をもたれかけて、ぽつりと言った。麺をすする音が止む。意識して皮肉を言ったつもりはないが、律の発言は夏音の耳にひっかかってしまった。
「終わるまで、じゃない？　最低でも学校行く前に郵送しなきゃだめだし」
真剣に答える夏音は「そもそも今日中に届くのかな……」と頭をひねっていた。
「ていうか夏音が満足するまで、の間違いじゃないか？」
「お、おい律っ」
澪が何を慌てたのか、自分の幼なじみの名前を呼んだ。
「ん、どうしたんだ澪？」

「何をぴりぴりしてるんだよ。ここで録った曲が審査されるんだから、みんな良いもの作ろうと頑張ってるんじゃないか！」
「そりゃ私だって同じだけどさー。こだわりすぎじゃないか？　はっきり言って、向こうだって別にＣＤ音源レベルを求めてなんかないだろうしさ？」
　律の意見は間違ってはいない。今回のイベント規模で、アマチュアのバンドにＣＤ音源のような音質、ましてや絶妙なニュアンスまで求める審査員はいないだろう。
　むしろ、そういう物は一挙に本番で味わうものであり、最低限の水準を持っていないバンドを篩にかける作業としてのデモ審査である。
「こだわる事は悪くないけど。ちょっとはウェイトを考えろよってェ話」
　その言葉はハッキリ夏音へ向かっていた。夏音は律の意見に黙って耳を傾けていたが、何も言い返さなかった。ずるずると麺をすすり、スープまで飲み干して息をつく。やがて顔を上げ、
「……そうか」
　たった一言。夏音はそれだけ言うと、立ち上がってカップ麺の容器をゴミ箱に捨てた。
「それなら、あと一回だけ通して終わろうか」
　それだけ言うと、食べ終わったら降りてきて、と言い残して先にスタジオへ行ってしまった。
「律、今のはお前が悪い」
「……なんだよ。みんなだって同じ事考えてくせに」
　ふてくされたように口を尖らせた律は澪を軽く睨んだ。本気で怒っている訳ではない事がわかっている澪は、ふぅと息を漏らして頬をゆるめた。
「たぶん、これが普通なんだよ」
　誰にとって、と澪は言わなかった。少なくとも、自分達ではない誰か。

「……わーかってるよ」

全員が夜食を食べ終えてスタジオに降りると、夏音が椅子に座ってうつらうつらと船をこいでいた。

「んぇ？」

律を先頭に全員が戻ってきたのに気付くと夏音はハッとして立ち上がる。

「よーよーお前さんも実は超疲れてんじゃねーのー？」

律があえて元気よく夏音に絡むと、少しだけふらりとしていた夏音がむっとした表情をつくった。

「俺はちゃんと睡眠とらなきゃ厳しいんだもん」

「ああ、毎朝あれだけ眠そうだもんな」

と言うことは、今もかなり無理をしているはずである。年が上だとしても、肉体年齢には関係がない。見るからに折れそうなくらい華奢な体。

律は、むしろ自分の方が体力あるんじゃないかと思った。

（こいつも無理してんのかな……）

律は、自分達だけが苦しんでいると思っていた。

「ヨッシャー！　カンッペキにやったろー！」

夏音は急に大声で叫んでドラムセットに座った律に驚いて目をぱちくりさせた。人間夜更かししているとハイになるというが、これがそうなのだろうかと首をかしげる。

「おーい夏音もぼーっとしてんなよー！　始めるぞー」

「あ、あぁ……それじゃあ、やろうか」

急にフルテンになったテンションに気圧されつつ、夏音はギターを構える。ボリュームペダルを踏み込むとノイズが部屋の中に溢れ始める。

顔を上げると先ほどまでと違い、どこか堅さがとれた彼女たちの

顔が目に入った。音に意識を集中しかけていた夏音はそっと笑みを零した。

「オーケー。楽しもう！」

乾いたスティックの音が鳴り響き、彼らの音が混じり合った。

「あれ、夏音まだ起きてるのか？」

まだ地下室に続く階段の電気が消えていないのを見て、律は目を瞠った。まさかと思い、そっと階段を下りて透明な分厚い窓がはめ込まれた防音扉から中をのぞく。

すると案の定、ヘッドフォンをかけてパソコンに向かって作業する夏音の後ろ姿があった。

軽音部女子一同は、地獄のレコーディングが嵐のように過ぎ去ると、一同は精根尽き果てた有様でベッドに倒れこんだ。なんとロハスな立花家にはなんと客室用の部屋があり、そこに巨大サイズのベッドが用意されていたのだ。

女の子として、というより人としての体裁もそっちのけで床に就いた他の者とは違って、律はシャワーを浴びることを望んだ。

もはやスポーツと言ってもいいくらいに体を動かすドラマーとして、大量にかいた汗をそのままに寝る事は堪えられないのだ。夏音から客用のタオルを借り受け、シャワーでさっぱりする。

もちろん入念にドライヤーをかけ、使い捨ての歯ブラシで歯を磨く。

流石にここまで来ると律も恐縮を通り越して呆れてしまった。

ホテルばりのアメニティが完備されている理由を尋ねたら、その身一つで客が泊まりに来ても大丈夫なようにしているのだ、と返された。

その割には客室が使用された形跡はまったく見られなかったのだが。

寝る前の支度を終えたところで、さあ登校まで残りわずかな睡眠

をとるかと部屋に向かおうとした所だったのである。

「おーい、夏音？　寝ないのか？」

扉を開けて入った律がそっと声をかけても夏音は気付かない。よく聞いたら若干ヘッドフォンから音が漏れている。

背後に近づく律の気配にも気付かず何に没頭しているのかとパソコンの画面をのぞき見る。

英語だらけで、ＬＯＯＰやらＴＲＡＣＫやらの文字が律の目をぐるぐるとまわす。波形みたいな物がいくつも並び、まるで病院にある生命維持装置を分かりづらくしたみたいである。

じーっと前のめりになって画面を見詰めていると、ふと腕が夏音の肩に触れた。

「うひゃぁっ！？」

文字通り飛び上がって奇天烈な悲鳴をあげた夏音。あまりに声を出すので、律の心臓も飛び出そうになった

「り、律！？」

夏音は胸を押さえながら、律を指差しながらかろうじて声を発した。

「前髪がある！」

「前髪くらいあるわ！」

「いや、ほんと髪下ろすと印象変わるねー。なかなか可愛いじゃん」

「余計なお世話だー」

律にとってあまり触れて欲しくない部分である。褒められると体がむずがゆくなるので、それを誤魔化すように話題を変えた。

「なーに一人でこそこそとやってるんだよ？」

「別にこそこそなんてしてないよ。ミックスをしてるんだ。だいぶ突貫作業になっちゃうけどね」

さらっと告げられたその言葉に律は素直に感心してしまった。

「とっことんこだわるなー」

「まぁ、時間がないから雑になっちゃうだろうけど」
肩をすくめてパソコンに向き直った夏音はマウスをいじって律にはさっぱり意味不明な操作を続ける。その様子をしばらく見送っていた律は腰に手をあてて感嘆の息を漏らした。
「夏音はプロなんだもんなー」
「んー？　まあ、プロですよー」
「それ、どれくらい続けるんだ？」
「ギリギリまでやるつもり」
「それ、さっきから何やってんの？」
「いろいろだよ。ＥＱいじったり、ちょいちょいエフェクトかけたり……まー語り尽くせないけど、いろいろ」
「あー……なるほどな！」
二秒で理解することをぶん投げた律がうんうんと力強く頷く。明らかに理解していない。
そんな律に視線は向けないまま、夏音はふふっと軽く笑った。
「ま、色々かっこよくするための作業ってこと」
「あー私にもわかる説明をどーもありがと」
夏音の周りにはごちゃごちゃと機械が並んで、何本もケーブルが繋がり合っている。そういう様子を見ていると思わずいじりたくなってしまう衝動を抑えて律は真面目な表情を作った。
「まぁ、私に言えることがあるなら、あまり無理するなよーってことくらいか」
「はーい。善処するよー」
「すっかり日本人みたいな逃げ方を覚えやがって……」
律が苦笑いを浮かべて夏音の小さい頭を小突く。
「アテッ」
「じゃ、私は寝る！」
「うん、おやすー」
またどこかのアニメから覚えたな、と笑いながら律はスタジオを後にした。

それから数時間後。外は完全に朝陽がのぼっている。
早朝の立花宅のスタジオに死者も目覚めんばかりの大音声が響く。
「う、うおーっほほほ！」
頬に手をあてた唯が奇妙な叫び声を出す。本人的に感動のあまり出た喜びの声らしい。
「すごーい！　これ、本当に私達が演奏してるのかな！？」
「もちろん！」
ミックス作業を終えてＣＤを完成させた夏音は二階の客間で死んだように眠る彼女達を叩き起こした。僅かな睡眠時間しかとれず、揃って寝ぼけ眼の彼女達に音源を聴かせたのだ。
曲が始まると同時に、ばっと意識を覚醒させた一同は興奮に満ちた様子で自分たちの曲を聴き終えた。
「俺としてはまだまだな出来だけどね。これで予選ごときを落とすような審査員は耳が腐って死ねばいい」
自信に満ちあふれてそう豪語する夏音は自らの言葉に何度も頷いた。
「正直、自分達で聴いてみてもかなり良いんじゃないか！？」
唯の喜び様に負けないくらいの勢いで澪が言い放った。
「これで今回の有望株とか期待されちゃったりしてー？」
律が調子づいた言葉を口にしても、反論する者はいなかった。
「これで優勝ね！」
同調するように強くうなずくムギは意気込むあまり律の手を握った。
「い、いやー。突っ込んでくれないと恥ずかしいってか……」
突っ込まれない事に戸惑った律は苦笑い。

「まぁ、戦う相手が分からないけど俺がいるからには優勝しかないでしょう！」
「げっ……マジな奴ばっかでやんの」
「りっちゃん！　優勝だよ！　二十万円でケーキ食べ放題だよ！」
「お前は煩悩だけだなー」
唯の瞳の奥に浮かぶ数々の甘味が彼女の考えを如実に表していた。
「優勝かー。もし、そんな事になったら……なったら……」
調子が上がっていく会話に乗っかろうとした澪は自分の言葉の途中でふと留保していた重要事項が喉の奥からせり上がってくる感覚を覚えた。

「ゆ、優勝……目立つ……ていうか、アレ。やっぱり出場しちゃうのーーー！？」

頭を抱えて青ざめた澪が壊れたように叫ぶ。

「今さらかよっ！？」

とりあえず、全員が突っ込んでおいた。

第十七話（後書き）

ちょっと更新が落ち着くかもしれません。

番外編3「インタビュー」「お買い物」（前書き）

こちらは苦し紛れの掌編二本になります。激しく本編とは関わりがないので、読まなくても支障はありません。

番外編3「インタビュー」「お買い物」

アルヴィ・マクレーンの場合

ねえ、あなたはどこの世界にクリス・スクワイアのプレイを模倣しきれる五歳児がいると思うかしら？

このことを話すと誰もが「そんな子供がいるだなんて嘘に決まっているじゃないか」って言うの。

「アルヴィは相変わらずだな」とか。失礼よね。だから実際に聞かせてみるでしょ。すると、顎が外れてしまったのかしらってくらいに大口あけて驚くから最高よね。あの顔、大好き。

中には、まるで悪魔の子だとか真剣に罵倒されたこともあって…

…まあ、その人には然るべき処置が下されたけど。うちの子はロバート・ジョンソンじゃないってのね。

ああ、そう。

「模倣しきれる」って表現したけど。

その人のベースを完全にコピーできるという訳じゃなくってね。まったく同じプレイをする人なんていないもの。

その人が出す特有のエッセンスを抽出して、自分のものにする。言葉通りに自分のモノにするってこと。

それって既にコピーとかの域を超えていて、既にその人のオリジナルの音に組み込まれているってことなの。

コピーして、その音を体内に取り込む。血肉になり、その肉には個人の魂が染み渡っているのよ。これって食事みたいじゃない？

動物の肉を食べて、自分の肉体の維持と成長のためにそれを取り込むの。彼のプレイを表現しようとして、何十年もかける人もいるのに。それをただ食事するみたいに、わずか数ヶ月でモノにしてしまう。

それが私の息子。

カノンは私たちの宝。この子を世の中に誕生させることができたこと、それが私の人生の意味じゃないかって思うの。言い過ぎじゃなくてね。

唯一の不満はあるけど。外見は少しくらいジョージに似てくれてもよかったのにー、って。ジョージの目許とか、耳の形とか。ちょっとくらい、ねえ。

私のママに言わせてみると、どうやら私の小さい頃に瓜二つらしいわ。将来、一緒にショッピングしたりするのが楽しみ。姉妹みたいに思われるかしら。

話がズレたけど、私が言いたいのはカノンがとんでもない子供だってこと。誰よりも早く気づいたのよ、この私が。今ではもうみんな知っているけど。

音楽の申し子っていうのかしら。神童？　おそらく、モーツァルトが生きていたらこういう感じだったと思うわ。

みんなが何でも甘やかしてペットにえさをあげてしまうみたいに、次々と「音楽」をあの子に食べさせたわ。やればやるだけ吸収していくから、面白いみたい。

すでに何百というスケールがあの子に染みついている。インド音楽なんてジャズのスケールより数が多いのに。悪ふざけで教え込んだ人がいたみたい。まさか吸収するなんて思っていなかったでしょうけど。

つまり、何が言いたいって？

うちの子ったら、本当に天才なのー！！

もう宇宙一！！

あ、宇宙一はジョージだから銀河系一、かしら？

でも宇宙といってもSWみたいにいくつも銀河があるはずだから

銀河系って小さいかしら……ねえ、どうしようかしら？
え、宇宙一に決まっている？　そうなの。あなた、あの子が好きなのね。崇拝しているの？　え、お姉様？
よくわからないけど、あの子もモテモテねー。

クレイジー・ジョー（立花譲二）の場合

どうも、息子の父だ。
譲二って言うんだ。
アルヴィが息子の自慢ばかりって？　あれはいわゆるイントロダクションだから。コースで前菜だよ。必要だろ？　前菜。
俺は実際に夏音が見せた最高にキュートな思い出の一つでも語ろうかな。

夏音が六歳の時だ。
俺が集めたバンドのライブがあってね。俺がリーダーだってもんで、そのライブのゲストに夏音を呼んだんだよ。
本番でさ、俺がステージにあいつを呼ぶだろ？　ほんのり緊張しつつ、あの体に不釣り合いな大きさのベースを抱えて……、走ってくるんだ。

こう……トコトコーって。

思わず抱きつきたくなったね。いや抱きついたんだけどさ。ついでに脳内シャッターも押したよ。連写したよ。

夏音を抱いて俺の息子だオラァ！　って言うと会場がどっかんどっかんなもんでさ。でもあいつら正直ナメきってた。
どこのお人形さんが現れたんだろーって。かわいーでちゅねーっ

て。傑作なことに、そいつがベース弾き出した瞬間見る目が変わるのよ。

何だこの小さい生き物は？　って。人間か？　なんてな！　ハハハハッ！！

まあ、外れじゃない。

人間じゃなくて、天使だからな。まじ天使。

とりあえず一曲あの子が参加しただけで、会場もヒートアップ。別にロックをやっていた訳でもないのに、あの異常な熱狂ぷりはヤバかったね。

とてもクレイジーな雰囲気だった。あの空気だったら何やってもイケそうだぜ、って感じがした。バンドのメンバーもずいぶんとご機嫌で、ノリにノっていたよ。

トロンボーンのディヴィスなんて、おいおいお前それツッコミすぎだろ殺すぞってくらいだったしなー。テンションあがりすぎたんだな。

ごめん汚い言葉が、ね。つい、ね。

とにかく。息子の力によって舞台が一億倍にも輝いてね。

最高な一夜だったと思う。途中まではね。

けどなー。夏音に影響されたメンバーの中で、特にバンドの花形。サックスのロニーがひどかったんだ。

演奏中からべたべたと夏音に体を寄せてさ。

傍から見たらこれこそミュージシャンのセッションだ！　ってんだったろうよ（確かに格好良いとは思ったけど）。インプロヴァイゼーションの迫力がある？　俺からしたらオイオイ、てめー近すぎじゃね？　ってなるだろう？　当然だろう？　激しくうなずいているけどわかってくれるんだね。

こっちも暢気にスイングしてる場合じゃなかったんだ。まあ、ちょっぴりカチーンとしたけど曲は通したさ。

ロニーがサックス吹いていない瞬間に、夏音の後ろまわってカメ

ラ目線でキメ顔していたのも我慢したさ。
けど、やりやがったよ奴さん。
演奏が終わる瞬間にキスしやがった。
おでこに、チュッって。いや、ブチューッってしやがった。そのタラコ唇で。
その瞬間のことはよく覚えていないんだけど。
気が付けば、ドラムのスティックが俺の手から消えていてロニーがステージ下の地面に頭から突き刺さっていたんだ。ガキん時に見たあの映画のワンシーンがよみがえったね。何だっけ、犬神家の一族？　観たことないかな。
まあ、ともかく後で映像を見て確認したんだけど。ちょうどロニーがアップになった時、後ろからとんでもねー速さで飛んでくる物体が「スコーン」って奴さんの頭にぶつかったんだ。
最高に笑える映像だよ。あれは俺のスティックだったんだ！　我ながらナイスなコントロールだよね。

会場がシーンってなってさ。とりあえず他のメンバーも「目の前で逆さ一転倒立しているこいつに何があったんだ？」って驚いた顔をしていた中、俺に近づいてきた夏音が言うんだよ。
「ロック以外の音楽でもこういうパフォーマンスするんだね！　ロニーはプロなんだ！　すごい！」

ってな。
どうだいこの邪気のなさ。普通に考えればどこの世界に好きこのんで自分から地面に一本差しになりにいこうとするバカがいるんだって思うだろ？
天使に地上の下らない理は必要ないってことだよ。
もちろん「いいか。これは変態にしか使えない技だから、絶対に真似してはだめだ」と教えたよ。「変態になったら刑務所行き」だってな。音楽だけじゃなく、教育もきちんとしていたんだ。

え、ロニーがどうなったか？　あいつが起き上がった瞬間、目の前に心配そうな夏音がいたからヤツは微笑んだ。

「天使がいるな」

って微笑んだ。さっきまで腹立たしく思っていた相手でも、その反応には俺も微笑ましくなってね。

すかさず、

「俺の天使に気安く障るな」

って言ったよ。

最高にキメてやったと思うんだ。息子も父を尊敬し直すはずだったんだ。

ところが、キメ顔でポーズまでとった俺に何て返したと思う？

「ところで、僕は誰だ？」

呆けた顔でヨダレ垂らしながら言うんだ。俺の発言なんて瞬時に埋もれたよ。おいしいところ持っていきすぎだろう。

それから二時間後くらいにロニーは自分を取り戻したんだけど。誰にでも優しい夏音が心配そうにあいつの頭を撫でてやったのが効いたに違いないと思う。

世話をかけるヤツだって全員が呆れていたがな。

まだまだ数え切れないくらいのエピソードがあるな。

とにかく、うちの夏音は天使だってことを話せばよかったんだよね？　こんなもんでよかったかな？

ところでコレって何の取材だったのかな？

そもそも君は誰かな？　その巻き髪すごいねーアニメみたいだよね。どうやって巻いてるの？　ちょっと触っていいかな。

ていうかさっきから恍惚な表情でお姉様お姉様って連呼してるけど……その写真、うちの夏音っぽいんだけど気のせいかな？

ソレ女の子の格好している気が……そうじゃなくても焼き増しと

かお願いできるかな。
ファンクラブ？　入らないとだめなの？
どうしようかな……どうしよう。

『憂と夏音』

「本当に無理いってごめんなさい」
「いいんだよー賑やかで楽しいから」
「あ、夏音さんは座っていてください！」
「いやだよー。俺だってこれが趣味なんだから。それに家主が座ったまま客人に料理させるなんて流儀に反するよ」
「は、はぁ……」
思わず苦笑もしちゃうよ。流儀に反する……だなんて。この言葉を使ったことのある日本人ってどれだけいるかな。この人はたまにおかしな日本語を使う。
古くさかったり、どこか外れていたり。今時の若者が使うような言葉じゃないのが飛び出たりも。
お姉ちゃん曰く、夏音さんが日本語が達者なのは日本のアニメとか古い映画とかを参考にしているからなんだって。夏音くんはオタクだからーって言っていたけど、オタクってすごいんだなーって思う。

どっちにしても私の意見、たぶん聞いてもらえないんだろうな。
それで案の定、夏音さんにも手伝ってもらうことになっちゃった。
夏音さん……あの、馴れ馴れしくするつもりはないんだけど、夏音さんって呼んでいるのは「立花さんなんて呼ばないで！」って前に言われたから。
あまりに激しく頼むものだから驚いちゃった。
何でも、友達の妹に他人行儀にされたくないから、なんだとか。
ちなみに。そうやって自分の意見とか希望とかをストレートに伝えるところがちょっとだけお姉ちゃんに似ているかも……って思ったのはナイショです。

似てない部分はハッキリしているけど。
この人は私に楽ばっかりさせてくる。

私ってもしかして気遣われるのが苦手なのかな？　とか自分の知らなかった一面に気付かされた。
苦手、ってことはないと思うけど。どうしてなのか、この人のお世話になってばかりで何もしないのは嫌かも。
「で、今日は何風で責めますかシェフ！？」
おどけた動作で両手を広げた夏音さんがおかしくて声をたてて笑っちゃった。すると夏音さんもにっこり目を細めた。
「憂ちゃんはまったく唯に似てないなー」
「え、そ、そうですか！？」
お姉ちゃんに似ていない……って久しぶりに聞いたかも。似すぎ、とか平沢姉妹双子説！　とかならよく言われるけど。似てないって言われるのは珍しい。
「外見は似ているんだけどね。中身的な問題」
ああ納得。中身で似ているって言われたことは、ないものですから。
「笑う時とか、こう……口に手をあててお淑やかに笑うところとか。

唯だったらありえないしねー」
「お、お姉ちゃんは笑ったら可愛いです……よ？」
「可愛いけど、こう……犬を見ている気分になるよね」
「い、犬！？」
それはあまりの言い草。だって……よりによって、犬。
私はムキになって言い返さなくちゃ、って思ってしまう。
「犬、可愛いじゃないですか！」

「犬は可愛いねー。グレートピレニーズとか好きだなー」
「は、はあ……」
「大きくて白い犬が飼いたいんだよねー。あ、唯は子犬かなー。柴犬って感じだね」
「お姉ちゃん、柴犬ですか？」
「柴犬……日本犬も捨てがたい」
「……」
そのまま真剣に悩み始めた夏音さんは本当に変な人だなって思う。
変な人、ならまだしも変な美人なのが困るところ。
この人の美貌を言葉に言い換えることは難しい。
何百人もの小説家や詩人を並べて、夏音さんの美しさを表す言葉を考えさせてみたいな。
ありとあらゆる美辞が並ぶんだろうな。そして、それはとても美しい文字の羅列。
近寄りがたいレベルの美人さんなのに、エプロン姿がやけに板についていたりするのを見ると可愛いな、とも思う。もともと可愛いんだけど、可愛さのランクがあがったような感じ。ちょっとズルイよね。
「ふぅ」
「どうしたの？」
「……っな、なんでもないです！」
いきなり近かった。

目の前に醒めるような美人がいたもので、ぐって後ろに退いてしまう私。

「ゆ、夕飯ですよね。私、今日はイタリアンにしようかなって。でもここのキッチン使えるなら中華でもいいかなー」

「悩むね」

「悩みますー」

「なら、食べる専門の人に聞いてみるかな？」

「お姉ちゃんは……たぶん、どっちも食べたいって言うと思います」

「そうか。なら、両方作ってみよっか？」

「夏音さん、中華は？」

「俺はイタリアンを作ろうかな」

作ったことないんですね……かろうじて口にするところで止めた。

作るものが決まったところで、お姉ちゃんを残してスーパーに出かけることになった。

夏音さんと二人きりで。

何でこんな会話が発生しているかというと。事の次第はひょんな不幸から始まった。

今日は夕方まで友達とプールで遊んでくる日だったから、家にはお姉ちゃん一人だけ残すことになっていて、私は夕飯までには戻るつもりだった。

買い物して帰ろうか、いや冷蔵庫にはまだ余裕があったはずだと余り物で作れる料理の献立を頭に思い浮かべていく。真夏の夕暮れは見た目こそ安穏としているけど、常に身体中から汗が噴き出るくらい暑い。

オレンジ色に染まる風景が、まるでガスバーナーであぶられているみたいに見えてしまう。

最近、そうめん続きだし。冷たいパスタでも作ろうか。たくさん

野菜を入れて、鶏肉も使った和風冷やしパスタにしよう。そう決めたらお腹を空かせてうだっているお姉ちゃんの姿が目の裏から離れなくなった。

そうして急いで帰ったのはよかったんだけど……ちょっとまずいことになっちゃった。

「え……冷蔵庫しんじゃってる……」

冷蔵庫を開けてみてびっくり。冷蔵庫はあまりの暑さに仕事をサボっていた……わけではなく。家中が停電していた。

ごろごろしているお姉ちゃんが何で気づかなかったのか。答えは簡単。お姉ちゃんはエアコンが苦手だから、日中どれだけ暑くても団扇だけで乗り切ってしまう剛の人。

アイスはとっくに食べ尽くしていたし、他に冷蔵庫の中身を確認する用事はないと思う。動物的な嗅覚で涼しい場所を探してじっとする。

ヴェネツィアのかの有名なカフェ・フロリアンの影追いみたいに影を追ってごろごろ。涼しい場所を見定めてはごろごろ……かわいいよね……じゃなくて。

冷蔵庫の中身が全滅していた。これが何より大事だったのです。

「野菜もだめ……はぁ……」

冷凍庫にお肉もあって、たぶん明日の朝か昼までにはなくなる程度の量だったのが救い。

これが買い物したばかりだったら間違いなく泣いていたと思う。

「どうしようお姉ちゃん……」

少しだけ涙声になった私の肩をぽんと叩いたお姉ちゃんは自信満々な顔つきでこう言った。

「私に任せて憂っ！」

お姉ちゃんは本当に頼りになる。こういう時におろおろしてしまう私を引っ張ってくれる頼もしいお姉ちゃん。

それが友達にすがりつくという手段であっても。お姉ちゃんはその時の状況に見合った最適の答えを見つける天才ってことなんだと

思う。この時、誰よりも早くターゲットに指名されたのが夏音さんだった。

そして、平然とOKと頷いてしまう夏音さんもすごいと思う。

「そいつは大変じゃないか！　オッケーすぐCome on girls！！」

と一切の躊躇なく。こうして私達は夏音さんの家に招かれて夕食をとることになったのでした。

けど、お世話になるのだから食材くらいはこちらで何とかするべき。

そう意気込んだ私にも「俺も食べるんだから半分出すよー」と言って私の言い分を全くきかなかった。

どれだけ説得しようとしても。

一度決めたことは何が何でも貫く頑固な人だって思った。新しい発見。

それで何を作ろうか相談した結果、イタリアンと中華に決まったというのがさっきまでの流れ。

カートを押して店内を歩く。野菜なんかをじっくりと見繕ったりしていると「あ、虫くってら」とか「こっちの方がゼッタイ中身が詰まってる！」とか主張する夏音さんがおかしかった。

「これくらいなら、虫に食べられてる方が美味しいですよ？」

「えー、そうなの？」

「そうなんですよー」

「憂ちゃんは物知りだね」

「田舎のおばあちゃんのお庭で野菜を栽培しているんです。たまに野菜の世話を手伝ったりするんですけど、その時におばあちゃんが教えてくれて」

「素敵な人だね。俺のグランマは全然そういうの教えてくれなかったなー」

夏音さんのおばあちゃん。私の中の好奇心がむくりと立ち上がった。

「どんな人なんですか？」

「んー。憂ちゃんは知らないと思うんだけど……わりと有名な女優だよ。正確には、だった、かな」

「女優さん……映画とかですか？」

「そうだねー。映画が中心だなー」

それから夏音さんがいくつか挙げた映画の名前の中には、聞き覚えのあるものが確かにあった。名作紹介とかでよく登場するようなやつばかり。

「あ、その映画は観たことあります。たしかすっごい綺麗な女の人が十人くらいの男の人と同時に交際する話ですよね。それで、次々に『あなたに私はもったいないわ』っていう決めゼリフでふっちゃうやつ！」

「よく知ってるね。あれも相当古いけど……その女の人ってのがうちのグランマ。すごい悪女してたでしょ」

「え？」

「あの時のグランマは綺麗だったなー。あ、過去形にしたら殺されちゃうな。でもすっごく光輝いていたよねー。まさにマドンナって感じかな」

「えー！？　あの人が夏音さんの！？」

どれだけすごい事か逆にわからない。それなら夏音さんは超有名人の孫？

「そんなにすごいことでもないよ」

そんなにすごいことなんですけど。そんなしれっと言われても困ります。

さらっと度肝を抜かれたまま、カートを押して店内を練り歩く。

「あ」

「うん？」

別にあうんの呼吸とかじゃなくて。
お菓子コーナーを通り過ぎた時につい声を出してしまったら夏音さんも振り向いて立ち止まった。
「お姉ちゃんにおやつ買っていかないと」
「あぁ、そういうのも管理してるんだ」
「これ、お姉ちゃんが好きなんです」
「それ、たまに部室でも食べてるな」
いちご味のポッキー。二つ手にとってカートに入れた。
「この代金はちゃんと払いますから」
「はいよー」
別会計にするのも手間だから。きちんと断っておく。
カートが再びゆるーく発進する。
「そういえば、家だと唯はどんな感じなの？」
「お姉ちゃんですか？　いつもテレビみてごろごろしてます」
ごろごろするのがお姉ちゃんという生き物だから。
「ギターはどれだけ弾いてるの？」
やっぱり気になるのはそこだよね。
「お姉ちゃんはすごいんです。ギター始めてから、ずっと弾きっぱなしですよ。私もたまに練習に付き合うんですけど、気付いたら四時間くらい弾いてる時もあって！」
私がいかにお姉ちゃんが真剣にギターをやっているかを説明すると、夏音さんは嬉しそうに笑った。その笑顔が少し得意気に見える。
「そ、よかったー。唯には二時間以上は弾くように言ってあるからね」
「夏音さんがお姉ちゃんに言ったんですか？」
あ、そういえば夏音さんに教えてもらっているってお姉ちゃんが言ってた。
「うん。唯は教えれば教えるだけ、まるでスポンジみたいに染みこんでいくからね。たぶん人の三倍の速度で上達してるんじゃないかな」

「へ、へー！　やっぱりお姉ちゃんすごい！」
「ただ、前に教えたこととかすっかり忘れていたり……」
「はは……」
「なのに次の日にあっさりできてたりしてさ。あれ、できてるじゃんって。ちゃんと復習したんだなーって感心してると、『あれ、夏音くんに教えてもらったっけ？』とか平然と言うんだ。むかつくよね」
「そ、そうなんだ……」
たやすく想像できて、お姉ちゃんらしいの言葉に尽きる感じ。夏音さんに申し訳ない。
「後はメンテナンスをしっかりやるように口すっぱくして言ってるんだけど……なかなかギターをいたわらないんだよねー」
「え？　かなり大切にしてると思いますけど？」
「まさか、まだギターと一緒に寝たりしてる？」
「それはもう毎日……あっ」
これって言ったりしたらまずかったかも。と思った時には遅かった。
「ゆ～～い～～～」
ぎらぎらと燃えさかる真っ黒い炎が夏音さんの瞳の中に見えた。美人が怒るとこんなにもおっかない。お姉ちゃん、ごめんって心の中で謝る。
「あれだけ言ったのにわからんとは……お仕置きだな」
「お、お仕置き!?　ごめんなさい！　お姉ちゃんには私がしっかり言っておくので許してあげてください！」
「憂ちゃんがそうやってかばうから唯が……」
「お姉ちゃんは言えば聞いてくれます！」
「言っても聞かなかった時は？」
「う……何度も言います！」
「ふーん。それで憂ちゃんは唯をしつけてきたのか……」
「し、しつけだなんて！」

お姉ちゃんはペットじゃない。しつけなんて……しつけなんて……当たらずとも遠からずかもしれない。

「まぁ、今回は勘弁しましょうか。けど、今度はちょっとスパルタな練習にしてみよっと」

これが限界みたい。お姉ちゃんがしごかれる未来を用意してしまった。こんな妹でごめんなさい。

「お、お手柔らかにお願いします」

「ふふん。それは唯次第だね」

ウインク一つ。何故か機嫌がよくなってしまった夏音さんはずんずんとカートを押していってしまった。

「うぅ、ごめんお姉ちゃん……」

おいしい中華、作るから。

「憂ちゃんは本当に唯が好きなんだね」

買い物も済んで、夏音さんの家へ向かう途中に呟かれた言葉がすっと頭に入った。

「はい、大好きです」

恥ずかしい、とかを感じなかった。他意はなく、ただ事実を確認するみたいに放たれた言葉だから。私も言葉の用意とかしてなくても、当然の答えを出した。

「俺もこんな妹が欲しかったなー」

「え？　そ、そうなんですか」

「上ばかりでさ。下に弟も妹もいなかったんだ」

「それ、意外です。夏音さんって面倒見が良いからすごくおねえさ……お兄さんオーラ出てますよ」

「それは年上だから気をつけてるの」

口をとがらせて言う夏音さんがちょっと可愛かった。

「よし。憂ちゃんは今日から俺の妹だ」

真剣な表情で真っ正面から言われた。

数秒の間。

「エーーーーッ!!?」
私、お姉ちゃんの妹なのに。嫌ではないけど……反応に困る。
「冗談なのに……そんなに嫌だとは思わないじゃん……」
夏音さんは夏音さんで変な勘違いで落ち込んでいる。
「い、嫌ではないです！」
「また、そうやって……」
「嫌ではないですけど……夏音さんをお姉ちゃんって呼ぶのはちょっと……」
私にとって、お姉ちゃんはお姉ちゃんだから……。
「俺、お兄ちゃんなんだけど」
冷たい瞳とぶつかった。
「あ……」
やってしまった。
その後、すっかり機嫌を損ねてしまった夏音さんをなだめるのに苦労した。でも案外、お姉ちゃんの機嫌を回復させるための手段がそのまま通用したりしておかしいよね。
やっぱりあの二人って似ているかも、なんて。
私の勝手な思い込みかもしれないけど。
前から仲良くなりたいなあ、って思っていたけど。今回のことでちょっとだけこの人との距離が縮まった気がした。

第十八話（前）（前書き）

今回、長くなったので前後編にわけました。

第十八話（前）

「ねえ、バンド名ってどうしようか？」

爆メロの公式サイトからダウンロードしたエントリー用書類とにらめっこをしていた夏音がふと顔を上げて放った一言に食後のティータイムを楽しんでいた者達がぴしりと固まった。

バンド名。

それは自分達を表す一番の象徴となるもの。その瞬間、軽音部の面々の脳裏に閃光のごとく映像が流れた。

ある者にはＣＤショップで自分達のバンド名がどでかくコーナーを占拠する光景。またある者には音楽好きな子供が「〇〇ってマジ熱くてさー」と友人に語る様。とある姉には「うちのお姉ちゃん、〇〇のギターなんだよ！」と語る妹の姿が。

当然それぞれの〇〇には自分が考えついたバンド名が当てはまり、妄想は瞬時に熱を帯びて加速していく。どこまでも行ってしまいそうになる脳内世界に歯止めはきかず、現実から離れたままぽーっとうっとりする彼女達を眺めていた夏音は手に挟んだボールペンをとんとんと机に打ち鳴らした。しばらくぼんやりした表情で彼女達を見詰めていたが、大きく悩ましげな息をついてから書類に向かい直った。

「ま、テキトーでいいか」

ときめく妄想の世界へ旅立った彼女達を放っておくことにして、さてどんなバンド名にしようかと頭をひねることに専念したが、いち早く現実へ引き返してきた唯がびしっと手を挙げた。

「はい！　ノースイーツ・ノーライフがいいと思います！」

思わず夏音の手から落ちたペンが乾いた音を立てる。

「私は女っ気如雨露が良い！」
続いて律が負けじと声を張り上げる。そのセンスに寒気を感じた夏音はぶるりと身を震わせた。
「ぽ、ぽわぽわチェリー、とか？」
お前は出場に反対じゃなかったのかと半眼でまじろがずに澪を見詰めた。
「……一応、聞いておこうかな。ムギはどう？」
声をかけられるまで陶然と虚空に視線を彷徨わせていたムギがその表情のままに衝撃の言葉を紡ごうと、
「私はー……カミングアウー――」
「なんかそれ以上言わないといて！」
するのをなんとか防いだ。
夏音は途中まで耳に入った時点で背筋を通り抜けた悪寒に従い、ムギの言葉を遮った。何だかそのまま台詞を完結させたらまずいような気がしたのだ。
はー、と重たい溜め息をついて眉間に手をあてた。個性的と言ってしまえば聞こえは良いかもしれないが、見事に方向性がバラバラである。おまけにセンスがところどころ崩壊している。
「あー……Ｃｒａｚｙ　Ｃｏｍｂｉｎａｔｉｏｎ、と」
夏音はその時ふと思いついたバンド名を書類に書き込んだ。何と言うか、個性的な人間がこれでもかと揃った軽音部である。並べて見るとちぐはぐな組み合わせだが、どこかまとまりがあるので案外ぴったりだと思ったのだ。
何より、あくまで仮決定なのだからこんな事で時間を無駄にしたくないというのが率直な感想だった。都内に郵送なので、今日中に届くはずだが学校に行かなければならない時間は目前に迫っているのだ。
「あーっ！　勝手に決めてやんの！」
その行動に目敏く反応した律が盛大にブーイングを飛ばした。それに続いて次々に幾つもの不平が夏音に飛び交う。

「あ、あくまで仮だから！」
「そんなこと言って強行決定するつもりだろー抜け目ない奴め。そんなの長いし覚えづらいし英語だし！　何よりダサイ！」
「ダサイって……言いたいこともわかるよ。俺だってじっくり話し合って決めたい。でも、このままだと学校遅刻するんだけど！」
例え自分のセンスを全否定されたとして、夏音の気持ちはあくまでこの一言に集約される。これから取り急ぎ郵便局に寄らなければならない。しかも営業時間の都合で本局まで遠回りしなければならないのだ。いつもより早く家を出なければ間に合わない。
「ねーねー。ていうか、あの時計おかしくない？」
居間に備え付けてある壁掛け時計を指し示した唯が自分の携帯と交互に見比べて不審を訴える。
「何が？」
「あれ私の携帯より二十分くらい遅れてるよ」
「はぁ？　唯の携帯がおかしいんじゃないの？」
律が唯の携帯をのぞき込む。そして、自分の携帯と見比べて――
「う、うそーん」
青ざめた顔が呆然と固まる。
「……」
夏音はあくまで冷静にその事態を受け止め、おもむろにテレビを点けて朝のニュース番組を見た。そこに表示される左上の数字を確認して、ふっと小さく微笑んだ。
「あ、あの時計……滅多に見ないからさ……」
誤魔化すような微笑を浮かべながら、声を震わせながら弁解する夏音は、背後で彼女達が浮かべている表情を確かめる勇気はなかった。

その日、見事に軽音部全員が大遅刻をするという不始末のせいで、顧問であるさわ子にしわ寄せがいったらしい。仲良くお揃いで遅刻

する必要もなかったのだが、どうあっても一緒に郵便局に行くと言ってきかなかった彼女達を振り切ることが夏音にはできなかった。速達の荷物を預かった瞬間「どーか通りますように」の願いをこめてパンパンと二拍手のちの一礼をされた郵便局員の表情は見物であった。

結局、一同は放課後に部室に訪れたさわ子にくどくどと文句を言われるハメになったが、もちろん神妙に話を聞く者などいない。説教をする人物が手に持つフォークと次々と口に消えていくケーキがなかったらそれらしく聞けるのに、と全員一致で思った。

そもそも彼女達は肉体的にも精神的にも誰かの説教を聞いている余裕などなかった。

レコーディングぶっ通しのオール空け後すぐに全力疾走をかました上に六コマの授業を乗り超えた一同は完全にグロッキー状態。授業中は死人のように眠り、移動教室は幽鬼のようにふらつく。

どのクラスも体育の授業が入ってなかったのは不幸中の幸いであった。唯は太陽が黄色く見えるぜ、としきりに呟いていた。

ちなみに爆メロに応募したことはさわ子には伏せてある。ひとまずの結果が出ない内に話したところで、いざ落選という情けない事態になった時に恥ずかしいからという理由だ。夏音はしきりに大丈夫と訴えたにも関わらず、部長とその幼なじみが強く反対した。

「これの結果はいつ分かるんだろう」

「たしかどんなに長くても二週間くらいで発表されるって」

「二週間ねー……どう考えてもこの選考日程、テストとかぶっちゃうよな」

むぅ、と眉間に皺をつくって唸る律。あまりテストなど気にするタイプに見えない彼女でも相応の懸念はあるらしい。

何と言っても学年末は成績に重要な影響を及ぼす。一年の復讐的なテストでもあるので、平均点が高めになるという情報も流れているだけに、その捉え方は深刻になりやすい。

基本的に成績なんてどうでもいい夏音にとってはテストなど瑣末

事でしかないのだが、他の者にとってはそうでもない。あからさまに我関せずと聞き流すような軽率な態度は控えた。

「どうにかメリハリつけてやらないといけないな。審査が通ったら、の話だけど」

あらぬ所へ視線をやりながら語る澪の内心は明け透けである。どうあっても大舞台に立ちたくない澪は自然の流れで審査落ちすればいいなあーと思っているのはバレバレである。

どうしてそこまで拒否るのか、と問いただせば、過去数回も足を運んでいるイベントだけに憧れが強すぎるだそうだ。

小規模なイベントだが、根強いファンがいる音楽イベントだ。ここからメジャーに駆け上がって成功しているバンドは幾つもある。澪曰く、最初から敷居の高い所から始めるより、自分としては小さな所からこつこつとやっていきたいらしい。

夏音はその言葉に、ずいぶん悠長な話だと呆れた。

彼はチャンスとは自ら掴むものであって、ふと自分が大注目を浴びる覚悟くらいなくてどうするのだ、と考えている。

かつて自分が四歳でドロシー・チャンドラー・パビリオンの舞台に立たされた時、または六歳の時に急遽、代役でカーネギー・ホールに放り込まれた時は覚悟などこれっぽっちもなかったものの、土壇場で何とかやってしまう胆力があったおかげで乗り越えたのだ。

だから、これをきっかけで軽音部が一般聴衆の前に出る事は大変良い事である。

優勝までは望まないが、外からの評価という物を与えられた彼女達に大きな変化が訪れる事は間違いないのだ。

「そうだね。がっつり練習してからテストを挟むとモチベーションが下がっちゃうだろうし。今のうちから手をつけようか、勉強」

「ほぇ？　夏音くん何でこっち見るの？」

その言葉と同時に確実に自分に照準が合わせられた瞳に唯がたじろぐ。

「唯さん。我々はあなたが心配なのですよ」
「だ、大丈夫！　今回はいけると思ってる！」
「ダウトー！」
「ひ、ひどーい！」
「悪いんだけど、唯の大丈夫は信用がないのです」
「うぅ……ハイ」
因果応報という。過去に全力で部に迷惑をかけた覚えがある唯はその言葉に素直にうんと頷く事しかできないのだ。
「とりあえずは選考結果を待つかー」
あくびをかみ殺しながら律が会話を戻した。
「驚くことに音源が通っちゃったら後は実演審査一回で最終なんだってさ」
理由は審査に金と手間をかけていないイベントだから。ならばスタジオ審査に向けての練習もせねばならない。ますます勉強に集中している時間などなかった。何にせよ、唯一人だけが頑張ればいいのだ。
他の部員から発せられる無言のプレッシャーをぴりぴりと肌に感じた唯はごくりとツバを飲み込んだ。

それから二週間と数日はあっという間に経ち、放課後まで一枚の封書を取っておいた夏音は全員が集まったところで立ち上がった。
「皆さんにお伝えすることがございます」
一様に息を飲む音。今まさに全員の注目を浴びる一枚の紙を手に持つ夏音は絶妙な溜めをつくってから、高らかに叫んだ。
「一次審査通りましたー！！！」
その瞬間、爆発したような歓声と共に澪が意識を手放した。

「いやーまさか通るなんてなー」
「通るさ。アレだけやって一次すら通らないはずないって」

偶然だが、いつになく豪勢に振る舞われた茶菓子をわいわいと囲む一同はいまだ興奮冷めやらぬ状態である。

一同はブラックアウトした澪をソファに安置すると、全員が手を取り合い飛び跳ねて喜びを表した。

純粋にやれめでたい、と口にするムギや唯とは違い、律はまさか自分があのステージに参戦しようとする日が来るとは思いもしなかった、と柄にもなく眦に涙を滲ませていた。

嬉しすぎて出る涙だ。

もし、このまま次の審査を通ったら憧れのステージでライブができる。彼女にとっては紛れもなくとんでもない事態だ。

デモが通る事がどれだけすごい事態なのか。通って当然だと言い放つ夏音の言葉に納得している唯やムギはまるで理解していない、と律は暢気な彼女達に呆れた。　何十というバンドがこの一次審査で落とされるのだ。運で残るはずがない。

爆メロは野外ステージを貸し切って本物のフェスさながらのステージ、といった規模のものではない。他のイベントの二番煎じと評される事もあるが、何と言っても主催者側の意気込み方が半端ないのだ。

まず主催する会社で働く人物のありとあらゆるコネを使って審査員に誰もが知っているプロミュージシャンを数名据える事で、大きく箔をつけている。

審査員がメディアへの露出度が少なかろうとも全く関係なし。

露出などしていなくても、その道の者から圧倒的支持を受けている人物達をよくもここまで、という程集めている。

特徴としては、イベント当日の様子をメディアに乗せて発信することがないという点が際立っている。

自宅で悠々と新鋭バンドをチェックすることなどできない。その場所に足を運んだ者だけ、新たな伝説の始まりを目撃しに来た者のみが口伝てに出場バンドの評判を広めることができるのである。

さらに優勝したバンドへのフォローもないしレーベルのプロモー

ションを期待しても無駄だ。
イベントで観客の期待を勝ち得たとしても、後は自分達で道を切り拓いていかねばならない。優勝してデビューすることはない。そこで得たチャンスを活かすことができた者たち。そこで生き残った良質の音楽を世に送り出したい、という音楽提供者の熱い想いが詰まった仕様。
人はそういうのに弱い。大がかりなプロモーションが背後にチラチラ見えるようなライブイベントが蔓延する世の中に突如として現れた隠れ家的イベント。
ぷんぷんする「本物」の臭い。ミーハーなコンテストなんかぬるい。どれ、いっちょ本物っていうのを俺が発掘してやるんだ、という人間が一挙に押し寄せるアングラかつ敷居の高いライブイベントとして成功を収めているのだ。
十代限定、というのも面白い。よくこんな若手どもを見つけたな、という程の才能の塊ばかり。律は中学二年の時に友達に誘われて観に行った時、かつて味わったことのない刺激を与えられた。
自分とそう変わらない年の人間が千人単位の人を熱狂の渦に引きずり込むリアルを体感させられた。
言葉に出来ないくらい悔しかったし、まだ何も始まっていない歯がゆさを噛みしめて帰った記憶が鮮烈に思い出される。
翌年は澪を連れて行き、そこで一年前の自分と同じような反応を見せる幼なじみと一緒に爆メロのステージへの畏敬の念をよりいっそう高めるのであった。
ちなみに、その二回目で優勝したバンドは最近、二枚目のフルアルバムをリリースしていた。
でも、まさか通ってしまった。浮かれていようが、楽天的だろうが通ってしまったのだ。
まだ一次審査、されど一次審査。このイベントに至っては次が最終審査という短いレース。それを勝ち進めば本選が待っている。
何回も審査を重ねるような形ではなく、より厳しい審査をたった

の二回の内で行うのだ。経営側は音楽に対して辛口もいいところで、デモの時点で特大の篩にかけられる。

次に演奏を直接聴く事で審査する。バンドの良さを色んな角度から知る必要なんてない。彼らが良いと思うか思わないかが決め手なのだ。

一次を通った時点でそこにはＲＰＧでいうボス級軍団しか残っていないのだろう。よーいのドンした瞬間、有象無象を蹴散らして最終審査を乗り越えようとしている猛者達が。

そんな中に軽音部が紛れ込んでしまった。まぐれではなく、自分達で作り上げた形が誰かに認められてしまった。

律は途端に恐ろしくなった。おそらく、この恐怖に気付いている者は他にはいない。

いや、いたとしてもそいつは気絶している。使えない。

「ちょっと私も予想外っていうか、こんなにあっさり行くとは思わなかったなー。結構動揺してるんだけど」

「そもそも言い出しっぺは律じゃないか。通らないと思って提案したんじゃないでしょ？」

夏音はまるで理解できない、と涼しい眼差しを律に送る。

「いや、そうじゃなくてさ！　私もこのメンバーでどこまでやれるか、っていうのが興味あって……そういう意味で爆メロを推したんだけど。いざこうやって通ってしまったら現実感なくてさ……この微妙な感じ、伝わるかなー？」

「まったく意味がわかんないや」

「あぁー、外人は日本人の曖昧で繊細な心の機微を捉えられないからなー」

「そういう事じゃないだろ！　ていうか二重国籍なめんじゃないよ！」

「あーつまり！　この展開は、な。ガチでヤバイってことだ」

「ガチで……ヤバイとな？」

「あぁ、そのとーり」

「日本語、おかしくない？」
「お前に指摘されたくないわ！」
今までずっと外国にいた人間に母国語を指摘されて、ついムカっとしてしまった律は憤然と言い返す。
「これはスラングなの！　帰国子女さんもっとフランクな日本語に触れたらどーかしらー！？」
言い放ってから馬鹿にするように思い切り夏音を見下す。彼はそれに対してむっと眉を寄せて何か言いたげに口をぱくぱくとしたが、ふんっと鼻で笑った。
「つまり、律はびびってるってことだ」
「誰がっ！」
憤慨した律だったが「いや、実際そうなんだけども」と一瞬だけ心に浮かべてから、それを振り払うように「ここまで来たら逆にあがるわー！　やってやろーじゃんかー！」といきり立った。
反動もあってか、若干空回り気味になってしまった律の威勢を見てにたりと笑った夏音は両手を振りかざして「そうだー！」と追従した。
「もーこの際だから優勝目指しちゃおー！」
流れに乗って唯が拳を振り上げる。すると火がついたように全員が立ち上がり、机をばんばんと叩く。
「優勝！　優勝！」
「イェー！」
ジャンベを打ち鳴らすアフリカ少数民族のようにアフリカンビートで加速していく机。全員のテンションが明らかにおかしくなった部室。
「うぅ……ここは、どこ……？」
不幸なことに全員が飛び跳ねてドタバタと床を振動させている最中に意識を取り戻した澪が呻いた。騒がしさに顔をしかめ、そっと上体を起こしてみると、目の前に異様なテンションで飛び跳ねる仲間達の姿が。

「ど、どうしたんだよみんな？」
「Ｙｅａｈ！！？」
「いや、Ｙｅａｈ！？　じゃなくて」
完全に取り残された澪は全てを放り投げてもう一度意識を失えないかを必死に試みた。

あれから三週間。目の前の行事が頭を占めるあまり、全員が完全にスルーしていた澪の誕生日を遅ればせながら祝ったのが四日前。唯に関しては多大なプレッシャーをかけて猛勉強を命じた効果があったのか、期末試験は何とか乗り切れそうだと言う。
あくまで本人談だが。部としても唯が赤点を取らなければ良いので、人様に迷惑をかけない結果であれば問題ないのだ。
まるっきり信頼なしで傷ついたよという唯。前科者の汚名を雪ぐにはそれなりの時間がかかるというものだ。
スタジオ審査という名目の最終審査だが、なんと実際に爆メロの会場となるライブハウスのステージで演奏する事実上のライブ審査となっている。
本番さながらの音でじっくり正確に品定めをされるそうだ。公式サイトの発表では、一次通過者の数は十四。全応募者数、実に八十五組の中から選ばれた十四の中に軽音部が含まれるという事に一同は身震いする思いだった。
審査日はライブハウスの運営するライブの隙間を狙って行われ、一日何組といったように数日に分けて行われる。各組の予定を合わせた結果、二月の中旬――テスト直後に決定した。
日付が決まれば、後はそれに向けて驀進するのみだ。
そこで夏音は一度気合いを入れ直してやっていくために、本日の放課後は部室ではなく自宅に皆を集めることにした。
楽器を持ち込み、早速例の自宅スタジオでミーティングが行われる。

「今の私達らしい曲ってなんだろうね」
「うーん……曲調がバラバラだもんなぁ。何のバンドって言われたら答えに詰まっちゃうような」
議題は自分達が演奏する当日のセットリストである。提出したデモの曲は必ずやるとして、現在の軽音部が持つ十一曲のオリジナル曲の中から選び抜くのだ。あの緩やかな活動の中、半年で十一曲を作ったといえば、相当な数だといえよう。
軽音部はいまだ未知数。各自がバラバラのバックグラウンドを持ってバンドとして集まっているだけでなく、それぞれがこの一年で様々な音楽的背景を獲得してきた。それが上手い具合に混ざり合うこともちぐはぐになってしまうこともある。
ここがバンドの面白い所であるが、バンドで生み出される化学反応は一プラス一ではなく、時によっては百にも千にもなる。しかし今の軽音部はその段階にない。
自分達の音楽を模索中といったところで、あらゆるジャンルに手を出して試行錯誤の最中である。とどのつまり、どの音楽もやってみないと、自分達に合うかわからないんだから色々やってみよーということだ。
それ故に次々に曲が生み出されていった。中にはイマイチ出来が悪い、と二度と演奏しなくなった曲もある。
そのような試行錯誤を経た後に残っている曲はそこそこの出来だという認識が共通してあり、現にその内の一つが他者に認められたわけである。
甘いバラード、物悲しいバラード。メロコア風の曲もあれば、プログレだったりアンビエントなニュアンスを出す曲もある。
こうして並べてみれば現在軽音部が用意できるセットリストは見事にバラバラな曲調ばかりである。
夏音は総じて音楽のジャンルという垣根を良く思わない傾向があった。正確には、ジャンルを気にして選り好みするという思考。お堅い頭の連中が棲み分け、などと声を大きく主張する現実が嫌いだ

った。
本人がプロとしてバリバリ活動していた時の活動範囲がその音楽に対する意識を如実に語っている。
縦横無尽に幅広い音楽の中を駆け巡っていた夏音は、それぞれの音楽に良い部分が数多あることを知っている。
良いものは良い。それが全てだ。
その思想は徐々に軽音部内にも浸透していき、次々に生み出されていくオリジナルの曲にも反映されていると言える。
そんな中、十一曲の中から絞って演奏する事は実に悩ましい問題なのだ。どの曲も悪くない、だがどれにしよう。バンドとしては嬉しくも悩ましい。
「クマさんは良いと思うんだよなー。二曲目に勢いつけるのに最適じゃない？」
「確かに二曲ぶっ通しでいくならそれが良いかも」
Ｗａｌｋｉｎｇ　ｏｆ　Ｆａｎｃｙ　Ｂｅａｒ。通称クマさん。学校祭でやったイントロのエグい一曲だ。そのベースラインを澪が弾けるようになり、レギュラー曲に定着しつつある。
とりあえず律の意見を一つとして頭に入れる。なかなか的を射ている意見だと皆が頷き、皆の同意となりかけたのだが。
「でもチューニングがなあ」
「その問題があったねー」
「とにかくバランスを見ないと。技巧が目立つ曲ばっかりだと単調だし。バラードは必ず入れたいよね。それでいてやっぱり一曲は本当にヤバイ曲が欲しい……」
「ヤバい曲……アレかな」
ふと律が遠い目をする。
「“バス亭”な」
律の言葉に夏音以外の者が息を呑む。現在、軽音部が持っている曲の中で最も物理的に難易度が高いのが「バス亭」である。Ｂメロに三十二分の休符がごちゃごちゃとあり、律にまるまる十六小節呼

吸が止まると言わしめた曲。
　ギターソロの最中に転調、ごちゃごちゃしてからまた転調。合間にはキーボードと他楽器との掛け合いに加え、ベースとリードのユニゾンフレーズが目白押し。なお、夏音の満足行く演奏を行えた事は未だかつてない無茶ぶり曲。
「あれ、本番でやれる勇気はないな」
「えーアレ弾き通せたらかなり格好良いじゃん！」
　げんなりと呟いた律に夏音は頬をふくらませて訴えた。
「とりあえず保留で」
　部長の言葉にほっと胸を撫で下ろす反応に夏音はさらに頬を膨らませた。
　夏音の意見を何とか押し込めて曲決めは進んでいく。
　気が付けば一時間以上も曲決めに費やし、何とか五曲に絞る事ができた。
「曲はトリビュート、クマさん、夢日記、キャンディーウォーズ、スクールデイズで良いですかー」
「はーい！」
　嬉々として声を張り上げた律に元気よく手をあげた三人。渋々と手をあげる一人によって全員一致で可決された。
　とはいっても五曲全てを演奏できるか分からないので、前三曲が中心になる。
「じゃぁ、曲が決まったところで練習開始！」
　そう言って下がりかけていたテンションを引き上げた夏音はすかさず「おー」と威勢良い返事が返ってくるかと思いきや、
「その前にお茶……しませんか？」
「異議なーし！」
　まぁ、いっかと夏音もその決定に従った。まだ焦ることもない。そう楽観的に考えていたことがすぐに裏目に出るとは知らずに。

「はぁ」
　重苦しい溜め息がスタジオの温度をどんどん下げていく。溜め息一つとっても見る者が惚けてしまうくらいに絵になる男がいる。しかし、例え見た目が華やかでもそれを目の当たりにした者はその男から溢れ出る冷気に身を縮めた。
「もう何度目だろう……果たして何度目だろー」
　がしがしっと乱暴に髪の毛をかき乱すとストラトを置いた夏音はふっと椅子に座った。少女達は不安げに視線を交わし合い、どういった反応をするべきかを探り合った。
「あのね。アンサンブルが完全にぶっ壊れてんの。みんなお互いの音が聞こえないの？」
　顔を俯かせたまま、うんざりと吐かれる言葉が張り詰めた空間に鈍く広がる。
「ご、ごめんね夏音くん。私がリズム狂わせちゃうんだよね」
　物音を立てる事さえ憚れる雰囲気の中、勇気を振り絞った唯が口を開いた。
「正確なリズム感を持つ事は最低条件……だけど、みんなできてないから。唯だけじゃないよ」
　一言がぐさりと胸を抉る。
「曲が速くなっちゃうのはもーこの際仕方ないとして。みんなすぐに合わせないと。かといって律も周りが聞こえてないから合わせようとしても意味ないし。お互いが引き摺り合ったりしてごっちゃごちゃですよ」
　夏音の指摘は一つとして間違ってはいない。フィーリングが全く合わないどころか、今の彼女達の演奏の中にグルーヴを見つける事は難しい。時折、良い感じになったとしても誰かが必ずそれを崩す。あろうことかそれがドラムであったり、ベースといったリズムセクションだったりする。
「ねえムギ。指、疲れた？」
「だ、大丈夫です！」

「そう。悪いけど、がんばってね」
激励の言葉とは裏腹に絶対零度の、感情の乏しい表情で言われたら堪ったものではない。顔にかかった前髪の間から覗く瞳の鋭さにムギはかろうじて悲鳴を抑え、震えそうになる足を踏ん張った。
強張りそうになる表情を微笑で隠して「うん、ごめんね」と返した。
「夏音。少し身体も頭も冷やさない？　煮詰まった時はインターバルを置いた方が良いって前に言ってただろ？」
自身もいい加減に指の力が無くなってきそうだった澪。学校祭以降、ヴォーカルを降りて幾分かベースに専任することができるようになった澪にも夏音の叱責は遠慮なく飛ぶ。自分も怒られる身だとしても、彼女はこの険悪な空気を払拭しなくては、と休憩を提案した。
このような諫言も、他の部員より一番接する機会が多い澪だから言えたことである。いわゆる、怒られ慣れた弟子の特攻だった。
「……うーん休憩……ｏｋａｙ。そうしよっか」
澪の提案にあっさり頷いた夏音がギターをスタンドにかけてぐっと伸びをした。そして自らが重くしてしまった空気を透き通る一声で切り裂いた。
「おーーー茶だあーーーーーーーい！！！」
張り詰めた空気が不思議な程、一瞬で消え去った。依然として胸にわだかまる物をすぐに消し去ることはできなかったが、彼女達はずっと強張っていた頬を緩めることに成功した。

スタジオを出てリビングに集まると、一同は淹れ立ての紅茶とワッフルを囲んでくつろいだ。驚いたことについ先ほどまでのざらついた空気は一切ない。
一度落ち着くと身体に溜まった疲労が押し寄せてくる。今すぐにでも眠ってしまえそうな疲労感と格闘中の律は震える手で紅茶をすすりながら、そっと他の者の様子を窺っていた。唯、澪、ムギ。つ

い今し方まで真っ青になって楽器を弾いていた彼女達だが、この場においてはぎこちない様子などは見られない。
身じろぎしただけで傷ついてしまうやすりのような空気はどこにいったのだろうと思う。皆、すっかりリラックスしている。何より、一番だらーんとソファーでまったりしている夏音は先刻まで鬼教官のような檄を飛ばしていたというのに。

不思議な男である。
この男がどれだけ練習で怒ったり、剣呑な雰囲気を醸し出した時でも、練習が終わってしまえば一気にそれが白昼夢であったかのように霧散してしまう。すぐにいつもの立花夏音の空気に巻き込まれてしまう。ぐっさり心に傷をつけられても、おかしな事に気にならなくなってしまうのだ。
人の顔色を伺いがちな澪でさえ、肩の力が抜けきっている。
唯やムギは言わずもがな。
その反面、律は物事を引き摺りがちな自分を自嘲していた。
練習の最中に言われた一言が彼女の頭の中を離れない。
練習は練習、とオンオフで割り切るだけの余裕が自分に欠けている悔しかった。
他の皆が大人なのかと問われると首をひねってしまうが、それでもそんな割り切り方がうらやましかった。
自分の普段の外面とは正反対な内面を知ったら周りはどう思うか心配になる。田井中律という少女の意外にも思える一面が彼女を余計に悩ませる。
律はこのままではイケナイと気持ちを切り替えようとした。自分一人が重苦しく悩んでいるというのに、目の前のふやけた顔をしている美貌の主を見ていると馬鹿らしくなってくるのもある。
曖昧にその場の話に合わせて笑っていた律だったが、ふとその態度に気付いた澪が声をかけた。
「どうした律？　ぼーっとして」

「え？　い、いやー腹減ったなーって思ってさ！」
「ああードラムは一番エネルギー使うからねー。仕方ないよね」
クッキーを頬いっぱいに詰め込みつつ、ハムスター化した夏音が神妙に頷いた。ばりぼり。その真剣な態度と顔があまりに合わなすぎて、一同は「ぶっ」と紅茶を噴き出した。
「ん？　なに、どしたの？」
「そ、その顔をどうにかしろっ！　くふふっ！！　アハハハハ！！」
「だから何がぶふぉっ！」
クッキーの細かい欠片が喉にいったのか、夏音がクッキーを噴き出した。
「きたなっ！？」
「げほっげほっ！」
「もーお前、サイアク！」
何だかんだでいつもの空気に戻ってしまうのが軽音部だったりする。

気が付けばミーティングを含めて練習が始まってから三時間以上が経っていた。世間のご家庭では立派に夕飯時といっていい時間だ。
休憩を終えてまた練習、とは行かなかった。話合いと軽く練習のつもりがこんなに根を詰めてやるハメになるとは思いもしなかったのだ。
律は弟に夕飯を作らねばならず、唯も憂がご飯を作って待っている。今日はここまで、という事で一同は解散した。
夏音が車で送ろうかと申し出たが、丁重に断れた。なら玄関先まで、と見送りに出ると澪が声を潜めて夏音に話しかけてきた。
「なあ夏音、あまり根を詰めすぎないように頼むよ」
「別にそこまでやってないと思うけどなー」
「夏音がそうでも。こう言うのはなんだけど、私達はプロじゃないんだから。とりあえず明日、いつもの時間に行くから」
というのはベースのレッスンの話だ。

「うん、わかった。待ってるよ」
「じゃあまた明日」
「気をつけて帰ってね」
澪が門の向こうへ消えるのを確認してから、夏音はしばらくぼーっと空を見上げていた。それから星も何もない鈍色の夜空を視界から外すと家に入っていった。

時間割の中に卒業式演習なるものがちらほらと含まれる中、部内に卒業生を抱えていない軽音部はこれといって特定の卒業生に何かすべきこともない。目下、最終選考に向けて練習するのみ……のはずだったのだが。
「最近どうも誰かに見られている気がする、とな」
「うん……そうなんだ」
真剣だが、どこか諦観したような乾いた笑顔の澪がかくかくと頷いた。何となく、煮えきらない様子だ。
妙な態度である。夏音は「相談があるんだ」と改まって澪に声をかけられたので、思わず姿勢を正して話を聞いていたのだが、その内容を聞くと「なんだ」と嘆息した。
「俺なんて学校祭以降いつでもどこでも視線を感じるよ」
犯人は言わずもがなだ、と付け加えられる。なんと言っても立花夏音には恐ろしい集団がつきまとっているのだから。
それはファンクラブという名をもって時折、夏音の日常にささやかなスリルをもたらす。リアルに振り返れば奴がいる状態。
「あぁーあー。澪しゃんもファンクラブあるんだっけねー」
虚ろな目をした夏音がふと思い出したように澪を見る。「あータイイヘンねー」と自らを棚に上げて同情的な眼差しに澪の眉がひくつく。この男にそういった憐憫を向けられる筋合いはないと思ったが、何とか腹に落として先を進める。

「そ、その話はいいから！」
何より澪にとって話題にしたくない内容だ。自分などにファン、とは何事。あの失態の末にできたファンなんていかがわしいものに決まっている。
とはいえ、案外トップの人間は礼儀正しいようで以前にファンクラブ設立の許可を賜るための慇懃な文体の書状が届いたのは記憶に近しい。承諾したつもりはない（どこに承諾したものか分からなかったから）が、活動は水面下で行われているらしいと風の噂に聞いた。
「他のみんなには相談したの？」
「したからこうやって夏音に相談してるんだ」
「あぁ、そういうこと」
鷹揚に頷く夏音。納得である。役立たずという漏斗を通り越しても濾しきれなかった悩みなのだろう。それは大きい悩みが残ったものだ。そして夏音は最後の砦のように信頼されているのだろうと鼻を高くした。
「そういうことなら俺に任せなさい」
「ほ、ほんとかっ！？」
「うん、まずは澪に問いたい。自意識過剰という言葉を知っているかい？」
「お前もかっ！」
「いや、まずその線から潰していこうかと」
「もういい！」
基本的に人の役に立たず。軽音部クオリティここにあり。かの歴史の名言に近い台詞を吐くと、憤懣やるかたない様子で澪は部室の扉を蹴破って出て行った。最近、行動が荒々しくなってきていることに彼女は気付いていない。
数十分後。
「それでライブをやりたいと。へぇー」

また突拍子もない事態が発生した。軽音部の得意分野である。他の面子が揃ったところでお茶を開始していた頃に出戻ってきた澪がとても気まずそうにライブをやらないかと持ちかけてきた。

いわく件の視線の正体は澪の妄想ではなくて本当に存在していたようで、やはりファンクラブの者によるものだったらしい。

しかし話はそこで終わらない。何とそのファンクラブの者はクラブの会長張本人で、加えて生徒会の元会長だったという驚天動地の事実が露わとなった。

元会長の曾我部恵は容姿端麗、公明正大、頭脳明晰と誰もが認める生徒会長の鑑のような人らしい。皆も全校集会で何度も目にしたことがあり、確かにそんな四字熟語が似合いそうな人物に見えた。

「ていうか恵って名前はファンクラブの会長になる素質でもあるのかな」

立花夏音ファンクラブの会長もめぐみという名前だ。

ともかく、そんな人間もつい魔がさしてストーカーに陥ってしまったのだという悲しい事件はこうして幕を……閉じなかった。

「曾我部先輩も悪気があったわけじゃないみたいなんだ。なんか、好きな人をつい目で追ってしまうような感覚だったらしい」

「それ、自分で言って悲しくないかい？」

夏音のツッコミに言葉を詰まらせる澪だったが、あえて無視して続けた。

「私としてもなんか面はゆいんだけど、そこまで想ってもらって知らんぷりするのも嫌なんだ。だから、卒業する先輩に私達からお祝いと見送りを兼ねてライブを贈ってあげられたらなって」

顔を赤くしながら言い切った澪はつぃ、と顔を俯かせる。もじもじと指をいじって反応を待っているあたり、いじらしさが満開だ。

そんな彼女の想いを受け取った唯がにっこりと微笑んだ。

「澪ちゃんすっごく最高なアイディアだよそれ！」

「ほ、ほんと？」

「ええ、澪ちゃんらしくて素敵！　曾我部先輩も絶対に喜んでくれ

るわね！」
　ムギの力強い後押しに澪の顔がぱあっと輝く。澪も時期的に一大イベントに向けて高まるモチベーションに水を差さないか不安であったのだ。余計な時間を割いてまでやりたくない、とでも言い出されたらおそらく何も言い返せなかっただろう。
　結果、弾き語りでも何でもやるつもりではあった。よく考えたら軽音部の中に反対するような心が狭い人間なんているはずなかったのだ。
「ま、澪らしいな」
「そうだね。ライブ審査前に誰かに聴いてもらうのも良い機会だし、どうせなら高校最後にさいっこうに贅沢な想いをしてもらおうよ」
　律と夏音も乗り気な発言を加えて、一気にライブムードになった。何の曲をやるか、構成はどうするかという話に火がついてミーティングをした結果。
「私が……ヴォーカル？」
「そこはそうでしょう」
「……や、だ…」
　いつもなら即答で「やだ！」と反応する澪も歯切れが悪い。秋山澪のファンというのであれば、彼女自身のヴォーカルが聴きたいはずだし、学校祭の時はしっかり一曲歌ったのだ。
「学校祭が終わってから俺がヴォーカルをやってきたわけだけど、澪だってちゃんと歌えるんだからもったいないよ」
　夏音はひそかに澪にヴォーカルの素質を見出していた。声量はまだまだまだ足りないが、しっかり音を取れる上になかなかヴォーカル映えする声を持っている。
　そもそも、ギターと歌を同時にこなすことのできない唯をのぞいて軽音部全体のコーラスワークはなかなかのものである（特訓によって）が、中でも澪の声域は下に出る分、重宝されている。
　全曲の中で一番低いヴォーカルの時に六度下を通る声で出せるのは澪くらいである。

「という訳で澪ヴォーカル！」
「ちょっ、ちょっと待って！　考えさせて！　熟考させて！」
逃げ腰の澪に猶予を与えてはならない。この一年でそれをよく学んだ一同は強制的に澪をヴォーカルに据える事にした。
「澪が良いと思う人～」
「はーーい！」
澪を除く全員分の賛成。民主主義の原則に則った文句のつけようもない採決である。前にもこんな事があった気がして澪は深くうなだれた。
どうせこういう時は自分に決定権はないのだから、と諦める事が肝要であると、彼女もまたこの一年で学んだのだ。
「ただ、それだとやれる曲が絞られてくるぞ？」
最後の抵抗と唇を尖らせて澪が言う。
「ヴォーカルしながら弾けない曲なんて幾つもあるんだからな！」
威張って言う事ではないが、一理ある。
「そうだねー。どうしようか」
夏音が笑いながら首をひねった。明らかにこの事態を楽しんでいる顔である。すると同じくにやにやしていた律がふと気難しい表情で口を開いた。
「それ言うなら、夏音はリード弾きながらよく歌えるよな」
「うん、本当そうだねー！　すごいよね！　ていうか私が早くリード弾けたら良いんですがね……へへ…へ」
前半は素直に賛同しながら、後半は自嘲気味に笑う唯がずんとテーブルに重い視線を落とした。ギターが二人いる軽音部だが、実際にリードを弾いているのはヴォーカルを担当している夏音である。
一般的にはギターヴォーカルがバッキングに徹する姿が多く見られるが、まだ唯にはリードを任せられないという理由で夏音がリードをとる形態となっている。唯が腕を上げたらツインリードというのも面白いかもしれないと夏音は考えているのだが、基本的にギターが二本あってもお互いがボス級の実力を持っていないと釣り合わ

ないものだ。現状はなかなか抜け出せない。
「コツだよコツ」
そう簡単に言ってのけるこの男を基準にしてはならない、という共通の見解を持っている他の部員達はそろって溜め息を落とした。
「コツで何とかなれば苦労しないってーの」
そんな全員の気持ちを代弁した律が苦笑混じりに言い返した。
「ところでコツのコツってどういう意味？」
「知らんわ！」
珍妙なやり取りを挟んだ後、また真剣な話し合いに戻る。確かに、色々難しい曲が多い。というより、この時点で一同の頭にはハッキリとある感想が浮かび上がっていた。「面倒くさい曲ばっかだな」と。犯人は一人だが。
「なるべくシンプルな曲にしよう。ほら、前にやったふわふわ時間。それにクマさんでしょ。カレーのちライスとか私の恋はホッチキス、とか！」
「あぁー。あれなー」
「それってほとんど澪ちゃんが作詞したやつだよね。私、あの歌詞好きだからもう一度やりたいなー」
唯には大好評だった小っ恥ずかしい歌詞がのった曲達。夏音が歌うにあたって羞恥心とのせめぎあいに敗れて消えそうになっている数々の曲。
「うん、私もいいと思う！」
「そ、そう？　それなら、いいかな」
べた褒めされて悪い気はしない澪が頬をかきながらやる気を出しつつあった。さらに夏音が一押しする。
「そうだよ！　あのクレイ…独創的な詩の世界を表現できるのは澪しかいないよ！」
聞く者によっては完全に馬鹿にしている発言だが、自分の師匠的な人物にそう言われて澪の瞳がぴかんと輝いた。
「よ、よし。それならヴォーカルと一緒にできるな！　そうと決ま

れば練習しないと！」
　がたんっと立ち上がり、楽器に向かう澪を尻目に一同はにやにやと視線を酌み交わした。ちょろい。
「あ、ちょうど良い機会だから今回は唯もしっかりコーラスするんだよ」
「嘘っ！？」
「ほんと」
「わ、私まだギターと歌できないよ！」
「だから特訓するんじゃないか」
「とっくん？」
「Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｔｒａｉｎｉｎｇをね」
「す、すぺしゃるとぅれーにん？」
「Ｙｅｓ」
　にたりと口角をあげる夏音に唯は嫌な汗が背中を垂れる感覚にぶるりと震えた。

　唯にギターと歌を両立する地獄の特訓三日間を経た後、ライブ当日を迎えた。
現生徒会の和に協力を得て、講堂に曾我部先輩を連れてきてもらえる手筈となっている。
　もう学校に用もない先輩を学校に連れてくる口実として、和が生徒会の引き継ぎで分からない所を見てもらう事になっており、その間に講堂に機材を運ぶのだが、今回は最小限の機材を使う事になった。
　アンプも持ち運びやすい低出力のコンボタイプに。さらに外音を使わないので楽器を奥だけ、という驚異的な早さでセッティングが完了した。マイクは仕方がないので講堂備え付けの音響設備で何とかすることに。
「ていうかよー。ライブ直前にこんなこと言うのもなんだけど……

……唯、喉やばくないか？」
　コーラスマイクの前で発声練習をしている唯を不安げに見ていた律がたまらず口を開く。
「え、そう？」
　屈託無い笑顔で首を傾げる唯の声はかなりハスキーだ。ハスキーというか嗄れてしまっていうる。こんな老婆のような声でコーラスなんかしたら聴くに堪えられないのではないか。
「ていうか今朝会った時から突っ込みたかったよ！　おい、お前どういう練習させたんだよ？」
「フツーにやっただけなんだけどなー」
　おかしいなー、と頭をひねる夏音に非難の視線が飛ぶ。
「お前の言う普通の尺度がおかしい！」
　三日間でふわふわとした雲のようなキャンディーボイスが巣鴨のばっちゃんに早変わりだ。とんだビフォーアフター。明らかに指導者のミスの結晶がここにあり。
「でも、わりとギター弾きながら歌えるようになったよ？」
「とりあえず、今日は夏音がコーラスな」
「えぇー！　せっかく特訓したのにねー」
「ねー？」
　ぶーぶーと文句を言う二人に澪が爆発した。
「今日は曾我部先輩のために演奏するんだからな！　ちゃんと真面目にやれ！」
　講堂によく響く澪の怒声に二人は「……うっす」と大人しく従った。
「あ、和ちゃんがもうこっち来るって！」
「マジか！　セッティングまだ途中なのに！」
「四十秒で済ませな！」
　わーわーと慌てふためいている内に、ガチャリと講堂の重い扉が開く音がした。
　来た。

閉じられた幕の向こうに聞こえる、確かな二人分の足音がこちらに近づく。
「ね、ねえ真鍋さん。こんな所に呼んで何があるの？」
「実は軽音部に呼ばれて来たんです」
「え！？　ま、まさかお礼参りとか！？　いや！　堪忍してちょうだい！　そういうのは成美にお任せよっ！」
「そんなバカな」
その瞬間、端っこにいた唯が幕を開けるボタンを押して慌てて所定位置に着いた。
幕の向こうに見えてきた曾我部先輩のぽかんとした顔を見て、夏音はまずはサプライズ成功だと笑った。
「曾我部先輩！　ご卒業おめでとうございます！」
全員で声を合わせて先輩を祝う言葉をかける。中央に立つ澪が緊張でカチコチになりながらも先輩にじっと目を合わせた。
「あの……私達、桜高軽音部がお祝いの意味をこめて演奏させていただきます！　聴いてください！」
そして澪の底深い歌声が夕陽射し込む講堂を震わせた。

終始うっとりと演奏に聴き入っていた、というより澪に観入っていた先輩は飛び跳ねて喜んでくれた。しっかり澪からサインを貰っているあたり、抜け目がない。とにかく、ライブは無事に成功した。
終わってみて夏音は今回演奏した曲は自分が歌うのには合わないとして切り捨ててきたが、いざヴォーカルを代えただけでしっくりきたことで、バンドの新たな可能性をもう一度考えねばならないと考えていた。
こういうのも悪くない。そう感じたのだ。
ともあれ最終選考へのモチベーションが少しでも高まったかな、と悪くない感触に頬をほころばせていたところ。
「ズルイです！」

「……ウヒャー」
夏音は人間とは思えない機械的な悲鳴を漏らした。
「お姉様！」
一同が部室に戻ると、扉の前に夏音にとって嫌なくらい見覚えのあるクロワッサンヘアーの少女が憤然と待ち構えていた。
一難ならぬ一めぐみが去った後にまためぐみ、である。
夏音はその姿を発見した瞬間、階段から落ちそうになったが何とか踏みこたえた。
部室に帰還してきた軽音部に気付いた彼女はひどく息巻いた様子で、その表情には若干の恨みがたっぷりとこもっている。
ついでに涙目で上目遣いという小技を用いるこの少女に夏音は弱い。
「会員の報告で軽音部が講堂に楽器を運んでいたって耳に挟んだので、向かってみたら演奏しているじゃないですか！　しかも二人の観客のために！　こんなの二人占めですよ二人占め！」
ビシッと指二本を立てて猛然とまくし立ててくるこの超絶巻き髪ヘアーの少女の名は堂島めぐみ。立花夏音ファンクラブの会長だ。
夏音には、現代に生きるガチ百合っ子という認識をされているが、何故か男である夏音に傾倒しきっている。挙げ句の果てにお姉様などという屈辱的な呼称を堂々と言い放ち、夏音をナチュラルに苦しめている。お姉様とは言うが、学年は二年。事実上、夏音と同い年である。
「……っ」
夏音は助けを求めて仲間達に視線を送る。光の速さで反らされた。
「私達にはそういうの無いのでしょうか？」
「そ、そうだね……今回は特別講演だったわけだし……しょっちゅうはチョット」
「そこを曲げられませんか？」
曲げたくないなあ、とは言えない夏音はたじたじと言葉を詰まらせる。嫌な汗が身体中の至る所から噴き出ている。

「い、いやあんまり講堂を自由にするのも……ねえ？　今日だって軽く怒られちゃったし」
「そんな……」
そのままがっくしと膝をついためぐみは人生に絶望した中年サラリーマンのような悲愴感を漂わせる。ここで可愛い描写が出てこないのがこの少女らしい。
「そんな……もう、今の私じゃだめなの……」
夏音にはよく分からない言葉をぶつぶつと呟きだした。いけない傾向だ、と急変した彼女の様子を危ぶみながら夏音は悩んだ。
「め、めぐみちゃんさ。とりあえずその……お姉様ってところを直してくれたら考えるよ」
「え？　どうしてですか？」
いったい何言っているのこの人？　みたいな目で夏音をじっと見上げためぐみの瞳に曇りはない。曇り無き眼に射貫かれた夏音は「うっ」と一歩退いた。
「お姉様はお姉様でしょう？」
ガチ百合世界に生きる少女はやはり恐ろしい。本当にお姉様、等と言う者がまわりからどんな目で見られるかに気付いていないのだ。
最低限、人前で呼ぶなという命令に従っているだけマシであるが。
「ひ、人のことは名前で呼ばないと」
「名前で？」
「そうそう。名前で、ね？」
「な、名前で……キャッ」
かぁーっと顔を真っ赤にするめぐみは頭を抱えてふるふると首を振った。見た目だけは可愛らしいが、何とも寒々しさを覚えた夏音であった。
「ついに……ここまで来たのね」
「え！？　いや！　君がどこまで行ったのかわかんないけど！　ただ名前で呼ぶだけだからね！　今時の幼稚園児でもやってるよ！」
「でも……恥ずかしいです」

「お姉様の方がよっぽど恥ずかしいから！」
「そう……ですか？」
「そうだよ！」
「お姉様がそう言うなら……」
「いや、直ってないよ！　肝心なところ直ってない！」
「か、夏音さま」
「初心に還っちゃったよ！　せめて『さん』でお願いします！」
「か、夏音さん！！」
目を閉じて意を決した様子のめぐみが夏音の名を呼ぶ。
そこに至るまでどんな壁を乗り越えたのかは不明だが、相当な体力が必要だったらしい。ゼェーハァーと荒い呼吸をする彼女は「一仕事したぜ」みたいな爽やかな笑顔で額に流れた汗をそっとぬぐった。
「名前で呼んだら、演奏していただけるのですよね？」
「……あ」
そんな事を三十秒前くらいに言った記憶があった夏音はしっかり言質を取られていた事に愕然とした。いや、しかし考えると言っただけでやるとは一言も言っていない。
「明日、同じように講堂でお願いします」
だが、今さら断れるはずもなかった。
「……ミンナ、イイカナ？」
ハイライトが失せた瞳で振り向かれた軽音部一同は首を横に振れるはずもなかった。
ちなみに、蛇足として奇しくも2デイズとなってしまったライブだったが、二日目に集まった十五名の生徒を前に終始ヴォーカルが顔を引き攣らせていた。

第十八話（後）

てんやわんやもあったが、ついに軽音部は大きな試練の日を迎えた。

会場は都内にあるライブハウス、ペニー・マーラー。アマチュアのイベントからインディーズ、メジャーアーティストまで幅広く愛用されている有名なハコである。

最終選考にあたって主催側から一次通過バンドに対して幾つか指示があった。

当日、機材を持ち込むバンドは事前に申請する必要があるとのこと。この場合の機材というのは、各演者の楽器やエフェクターではなく、アンプやドラムセットをそのまま持ち込むことを示す。

軽音部の場合、アンプ、ドラムセット、ＰＡ、スピーカー等々、まるまる自分達だけでライブを行えるくらいの機材環境が整っている。本来なら普段使っている機材を全てそっくりそのまま使えるのが理想だが、ここで搬入の問題が出てくる。

ライブハウスまで持っていくのに車を使う必要があるが、それは夏音が車を持っているおかげでさして問題ではない。問題なのは限られた時間内で大量の機材をセッティングできる余裕があるかである。

夏音にとっては時間をたっぷり使ってスタッフが機材をセッティングするのが当たり前だったので、そこに頭を悩ます日が来るとは思いもしなかった。

「なになに……ＹＡＭＡＨＡのＹＤ－９０００とＰＥＡＲＬの……うーん……私のやつより良い機材だしなあ」

何よりドラムのセッティングが一番面倒くさいことになる。ライ

ブハウスの人員をどれだけ割いてくれるかも不明だが、他にも会場に合わせてチューニングをすることも考えれば、当日の流れが把握できない時点で極力時間を省くように努めなければならない。
律はドラムセットを持っていくのかを最後まで悩んでいたが、結局ペダルとスネアだけを持参することになった。
最終的に唯、夏音、澪も部室のアンプヘッドだけを、ムギはスタンドとアンプ本体を持ち込むことになり当日を迎えることになった。

軽快に走るハイエースの車内は異様な雰囲気に満ちていた。ハンドルを握る夏音はちらちらと何度もミラーでそれを確認して眉を寄せていた。その内、ついに我慢しきれずに綺麗に響く声を張り上げた。
「はーいみなさん昨日は眠れましたかー」
「……うん」
ただ一人だけ反応した唯は夜更かしの勲章を目許にこさえていた。隣に座る律とムギは互いに頭をもたれ合って眠りの世界に旅立っている。
「せめて移動中は寝てなさい」
「……」
返事はない。後部座席の三人が仲良く眠った現在、助手席の澪の方を見た夏音はまたしても眉を顰めてしまう。
「澪も眠れなかったんだね？」
「何回も何回もシミュレートして……曲のおさらいとかやっぱり練習しなくちゃって思ったら気付けば朝に」
「澪も寝ておきなさい」
「眠れない！」
充血した目をかっと押し開いて夏音の横顔を見詰める澪は一人だけアドレナリン全開だった。
「わかったから。その目であまりこっち見ないで怖いの」

「どうしよう……こんな状態でちゃんとできるかな」
「そう思うなら気絶してでも寝ればよかったんだよ」
「夏音は舞台慣れしてるだろうけど！」
「そういう苦情は受け付けておりません」
今さら本番前に寝付けなくなるほど緊張することはない夏音。彼にしてみれば、体調を万全にしておくことも仕事の内だ。
「しかたがないなー。眠れる曲でもかけるか」
そう言って夏音は信号で車が止まっている間に手元のプレーヤーを操作する。優しいピアノのメロディーが流れてゆったりとした時間が流れ出す。
「Ｔｈｅ　Ｇｏｌｄｂｅｒｇ　Ｖａｒｉａｔｉｏｎｓ。バッハが貴族様を眠らせるために作った曲らしいよ。まあ気休めだけど」
「……ぐぅ」
「バッハすごい！」

「うわーおっきー！」
駐車場から機材を積んだ台車を押して会場の前に着いた途端、一同はそのライブハウスの堂々とした佇まいに圧倒された。
都心から外れた場所にあるものの、高層ビルが騒然と建ち並ぶ都会の風景に突如として現れる長方形の建造物は独特の雰囲気を放っていた。全て黒く塗られたシックな外観は全てを包み込む圧倒的な存在感がある。
目が眩むような光の洪水も、爆ぜるような音だって閉じ込めて、その中で沸き起こる歓声、燃えるような熱気に人がどよめき発するエネルギーをまるごと許してしまう場所。
これまでライブハウスなどに縁がなかった唯などは大きく口を開けたまま唖然としている。

「へー！　わりと大きいね」
　サングラスをかけた夏音が建物を見上げて一言。その当人の格好は周りの少女達と比べて明らかに浮きまくっている。帽子を目深に被り、まるで顔をさらさないように気を遣う芸能人のような出で立ちである。
「あくまで今日の俺は高校で軽音部をやってる立花夏音だからね！」
　既に同じ台詞を飽きるほど聞かされた彼女達はそっと呆れた表情になった。
　この男、数日前に突然「えーワタクシ絶対に正体を明かしたくないので、当日は変装します」という宣言をしたのである。事情を知っている彼女達もその本意はよく分かるので了解とした。
　ところがいざ変装と銘打って現れた夏音の格好は彼女達にとっては「それのどこが変装？」と突っ込みたくなるようなクオリティだった。お粗末。気付かぬは本人のみ。
　カノン・マクレーンとしての彼を知る者にとってはトレードマークのようなブロンドヘアーは黒染めによって隠れているのだし、後は目許さえ隠せば何とかなってしまう気もしたので、あえて何も指摘しないのは彼女達の優しさ。マスクもした方がいいかとしつこく訊ねてきた時は流石に止めたが。
　各々の衣装に関しては制服で行くのも何か狙っている気がするので、却下された。普通に私服で向かうことになり、コンセプトも一切ないバラバラ状態である。バンド名にふさわしいといえばふさわしい。
「久しぶりだなー」
　何度か客として訪れたことがある律が感慨深げに呟く。客として訪れるなら、正面の入り口から入ることになるのだろうが、今日は違う。選考を受ける者は裏口から入る手筈となっており、律と澪の両名は未だかつて足を踏み入れたことがない関係者用の出入り口を前にして感動しきりだった。
「入り口でかー。ここから機材の搬入搬出とかすんのかな」

トラックで侵入可能なくらいの裏口を見る限り、そうなのだろう。入り口には警備員が一人いるだけで、そのままずかずかと入っていいものか逡巡してしまった。夏音が彼女達の後から息を切らして台車を押して追いつくとちょうど良く向こうからスタッフらしき男性が現れた

「おはようございまーす！」

カジュアルな笑顔で警戒心を与えないような挨拶。慌てて頭を下げる高校生を微笑ましいと思ったのか、バンドをやっている人種にしては随分と平凡人畜無害に思われたのか、でれっとした笑顔を浮かべたその男性は軽音部が運ぶ機材の方に目をやって軽く目を瞠った。高校生バンドでこんな大荷物というのも珍しいに違いない。

「Ｃｒａｚｙ　Ｃｏｍｂｉｎａｔｉｏｎの方々でしょうか？」

「あ、はい！」

代表して律が肯定すると、男性は大きく頷いた。

「私、ペニー・マーラースタッフの高木と申します。参加表明証はありますか？」

「あ、はい。ここに」

いそいそと律がカバンの中から一枚の紙を取りだして高木に渡す。

「……ハイ、確認しました。とりあえずこちらにお願いします」

と言う高木に案内されて中に入る。通路は運搬の邪魔にならないように片付いていた。省エネなのか分からないが、通路の照明は薄暗い。独特の匂いが漂い、一人をのぞいて別世界に侵入してしまったような感覚に軽音部一同は自然と緊張を高めていく。

無意識に一列縦隊となって高木の後をついて行くと、巨大なリフトの上に機材を置くように言われた。この先がステージで、運搬はこのように行うのだと説明される。

「はい、ひとまず大きい機材も置いたところで。本日は3バンドの選考となります。あなた方で全員揃ったので会議室で本日の流れ等の説明をします」

さらにステージ裏の通路を右に曲がったり左に曲がったりして階

段を上り、迷路を伝うような気分で高木に追従して会議室に向かう。
先導する高木が廊下の突き当たりにある扉の前で立ち止まり、扉を開けた。
「Ｃｒａｚｙ　Ｃｏｍｂｉｎａｔｉｏｎさん入りまーす」
高木の大声にびくっとしながら律を先頭におずおずと部屋に入ると、まず律が軽く息を呑んだ。すぐ後ろにいる澪にしか聞こえない程度の。それに気付いて後から部屋に入った澪は律の反応を理解した。
既に部屋の中には並べ置かれたパイプ椅子に腰掛ける他のバンドの姿があった。
それぞれが厳しい一次審査を勝ち抜いた者たち。このイベントに参加しているのは外でバンドを組んでいる者が大半だろう。
バンドマン独特の雰囲気をぷんぷん放っている。派手なカラーリングが入った髪の者や独特のファッションスタイルが際立つ者。緊張でガチガチになっている軽音部に比べてまさに泰然自若、腕を組み落ち着き払うその様子は歴戦の戦士の雰囲気すら感じる。
前二人の様子がおかしいことに気付いたムギと唯は目を合わせて首を傾げていたが、室内にいる全員の視線が一斉に自分達に向けられた瞬間、びくっとした。そしてひそひそと「ねえムギちゃんあの髪型セット大変そうだね」「ピアスをあんなにたくさん……痛くないのかしら……」意外に余裕あり。
そんな中、彼女達の背後から夏音が静かに躍り出て、
「おはようございまーす」
良く通る透き通った声が響き渡る。
「おはよーざっす！」
「ハヨマース！」
「おねあしゃーす！」
「おはよーです！」
「うぉっしゃーす！」
一挙に挨拶の大合唱が返ってきた。ピアスを大量に空けているモ

ヒカン風の男も座ったままぺこりと一礼。
「挨拶は基本です」
つい固まってしまった彼女達を振り返って夏音が得意気に語った。
「はーーーいオハヨウございまーーす！！」
全員が席についたところで、いきなりテンション高いオッサンが現れた。ライダース風のファッションに身を包み、ご丁寧にかけていたサングラスを胸ポケットに挿して「ハーイ」と白い歯を光らせる。
「あれ、誰？　すごい出オチ感がびしばしと……」
唐突に現れて場を仕切りだした男性に訝しむような眼差しを送った夏音はこっそりと隣の律に耳打ったのだが、
「ばっ知らないのか！？　いや、知らないよな……ＦＭとか聴かないだろうからわかんないと思うけど、ＤＪレイジだよ」
随分と過剰な反応である。
「レイジ？」
「バッキングページっていう番組の名物ＤＪ。超有名だよ！　ていうか爆メロを主催してる番組だよ！」
「ふーん」
夏音はあまり興味をそそられた素振りを見せずに何となく頷いた。
夏音は日本のラジオ番組など聴かないのでピンとこないのである。
「審査方法はいたって簡単！　ライブをする！　俺達に見せる！　それでこいつらぶっ飛んでんなって思わせたらＹｏｕ達の勝ちだ！」
えらくシンプルだが、それでいいのかと胡乱気な目線を送った者は少なくない。
「だーかーら！　本番さながらの勢いでやって欲しい！　客はいないけど、本ステージでやってるくらいのつもりで頼むぞーい！　じゃ、審査員席で待ってまーす！　待ってまーす！」
語るだけ語ると、ＤＪレイジは再び白い歯をきらりと光らせて悠々と部屋を立ち去ってしまった。歯に蛍光塗料でも塗っているのかと夏音は首を傾げているのをよそに、室内の誰もがまさかあれで説

明が終わりかと言葉を失っていた。
まさか、そんなはずはなかった。
後ろに控えていた高木がそそくさと前に出てきちんと丁寧な説明を始めた。
「あの男の意味は?」
ぼそっと誰かが呟いた疑問に答えられる者はいない。説明を続ける高木だけが唯一、気まずそうに身を縮めていた。

その後の高木の説明によると、事前に決めてある順番に従って呼ばれたバンドが審査員の前で演奏することになる。制限時間は四十五分。その内でバンドの全力をぶつけて頑張れという言葉で締めくくられ、最初のバンドがステージへ向かっていった。
何と言っても軽音部の出番は最後であった。残されたもう片方のバンドと一緒に会議室に取り残されてしまった。
「うぅ〜……緊張……ってレベルじゃない震えがきてるんだけど」
ガクブルと恐慌状態の澪ばりに震える律はすっかり青ざめた顔で腕を抱えている。
「リラックスだよー律。ていうかみんなも緊張しすぎだよー」
一人だけのほほんとしている夏音を除き、彼女達は揃いも揃ってナーバスになっていた。無理もないが、体が強張っていては良い演奏などできたものではない。
緊張というものは二種類ある。ほどよいプレッシャーによって集中力が高まり、良い結果をもたらすもの。思考を鈍らせ、体をがんじがらめに強張らせて最悪の結果を生み出すもの。
彼女達の場合だと明らかに後者だ。このままだと良い結果はつかめない。
「ムギー、お茶にしよう?」
見かねた夏音が努めて柔らかい口調でムギに言った。
「へ? あ、お茶……そうだ。私、ティーセット持ってきたんだ」

まるで上の空だったムギが夏音の言葉で目覚める。ぽんっと手を叩くと、お茶の準備を始めた。

「それティーセットだったのか……」

ムギが持ってきた鞄には気が付いていたが緊張で突っ込む余裕がなかった一同は驚きと呆れが半々だったが、それでも少しだけ頬をゆるめた。

こんな所でもお茶。考えてみれば軽音部らしい。

突然、ケーキやら紅茶やらを広げ始めた連中が物珍しいのかもう一組のバンドの視線がこちらに向けられる。

軽音部と共に大気中の彼らはモヒカン、ピアスの男、超絶カラフルヘアーと個性豊かな顔揃いである。男のみの編成で、ほぼ女だけの軽音部とは対極の空気を醸し出している。

先ほどからチラチラとこちらを窺い、どうにも軽音部の様子が気になって仕方がないらしい。彼らの熱い眼差しに気付いてはいたものの、こちらから話しかける勇気は彼女達にはなかった。

ただ一人を除いて。

「こんにちはー」

「ばっ唯！　なに普通に話しかけてんだよ！」

ふにゃんとした笑顔で向こうのバンドに手を振る唯の腰を律が慌ててせっつく。

「へ？　何かだめ？」

「アレだ。精神統一とか色々あんだよ……見ろよあのただならぬ雰囲気。良く切れるナイフみたいに研ぎ澄まされた感じ……相当できるぜ」

唾を飲み込んでしばらく真剣に語る律を不思議そうに眺めていた唯は「ふーん」と言って大人しく座り直した。そんなものかと納得したらしい。

夏音はその言葉をいまいち理解できなかったが、傍目に向こうも緊張しているだけに思えた。

「せっかくだから仲良くやればいいのに」

夏音の言葉に唯がもっともだと頷く。
「やっぱりそうだよー。ねえムギちゃんお茶ってまだ余ってるかな？」
「ええ。多めに持ってきているから。それにここにもポットあるみたいだから大丈夫」
「よかったー。あのーすみませーん」
唯のリトライ精神に最早止めることすらままならなかった律はあんぐりと口を開けて額を押さえた。
「は、はひっす！」
おや？　と一同の時が止まる。今、裏返った情けない声は天にそそり立つ頭髪を持つモヒカン男から出た気がした。
「にゃ、にゃんでしょう！？」
「にゃ？」
モヒカン男は明らかに挙動不審の体で自分に呼びかけた唯を凝視している。
「いやー、四十五分って長いからお茶でもどうですかと思ってー」
「お、お茶っ！　お茶ですって！？」
いちいち感嘆符がつくような反応を示す男だった。よく見たらモヒカン男を筆頭に彼らのメンバー全員がぽっと顔を赤らめている。
「い、どうするよ……？」
「お茶ったって……俺らがお邪魔して悪くないかな？」
「で、でもせっかく誘ってくれてるんだしよー」
小さく固まってプチ会議が始まっている。
「なんてーか……意外に純情？」
呆気にとられた律がすっかり拍子抜けして呟く。
「人は見かけによらないよね」
うんうんと頷く夏音。
「ていうかお前ああいう人達が怖くないのか？　ほら、あんまり言いたくないけど前の学校とかで……」
「別に彼らとは違うよ。それに真面目に音楽やってきたからここま

で来れたんでしょ。良い人に決まってるよ」
「そんなものかなー」
戸惑い続ける律に返事をしないで夏音は会議中の彼らに声をかけた。
「おかわりできるくらいは用意してるから遠慮しないでいいよ」
その一言が決め手になって彼らはためらいがちな足取りでパイプ椅子をこちらまで持ってきた。
「なんか……すんません」
モヒカン男が軽く頭を下げてムギから紙コップを受け取る。他のメンバーにも行き渡ったところでモヒカン男が口を開いた。
「俺、マイナージェネレーションの田口って言います。一応、バンドのリーダーです」
やけに率先して話していたが、モヒカン男もとい田口がリーダーだったらしい。続いて口々に自己紹介が始まる。
「ギターの泰二です」
「ドラムの丸山です」
「ベースの鈴木です」
ぺこり、と一糸乱れぬお辞儀。とても礼儀正しい。
奇天烈な風貌の男達に頭を下げられた軽音部一同も「これはご丁寧に」とお辞儀する。
顔を上げたモヒカンが怖々と一同を見渡す。さっと掌を上に差し出し、一声。
「お、お手前は？」
どこの任侠者だ。
何を言われたか分からなかった一同だったが自己紹介を求められているということを察して順に紹介を返した。
ずずっ。一斉に紅茶をすする。
「……」
盛大な沈黙が広がった。向こうの緊張が伝染して軽音部側も口を開くに開けなくなった。互いに刹那的な視線の探り合い。

「自分ら今回が初出場なんですけど、あなた方は？」
するとドラムの丸山が若干言葉に詰まりながら重くなりかけた空気に会話を落とした。
「私達も初めてなんです」
向こうも初出場という情報にムギが破顔して答える。にっこり笑いかけられた丸山はさっと視線を逸らして俯いた。
「そ、そうなんですか……上手くいくといいですね」
「ええ、そちらこそ！」
「いやあー」
なんともデレデレだ。
「君たちは外でライブやってるの？」
何とも言い難い空気に耐えかねた夏音がどうにか広がりそうな話題を選んで彼らに問いかけた。
「そですね。月に二回のペースで細々とやってます。ノルマを回収できたことはないですけどそれなりに良くしてもらってますね」
モヒカン田口は頭を掻きながら語るが、何故か夏音の方を見て照れる。
「へー外でやってるんだ」
外バンに興味をそそられた律が会話に参入する。案外、怖い人達じゃないことが分かって普段のフランクな口調に戻っていた。
「外バンかー。面白そうだよなー」
羨ましげに溜め息を漏らす律に田口が驚きを露わにして声を上げた。
「え、皆さんは外でやってないんですか!?」
「え？　うん。私らは高校の軽音部だよ」
「そ、それで一次通ったんですか……すげ……」
「い、いや！　すごくなんかないって！　実際に大勢のお客さんの前でライブするのって滅多にないし、たぶん本番慣れとかの面でもう……」
「そんなこと！　俺たちだってゼンッゼン緊張しっぱなしですよ。

今だってもうガチガチでひどいですし」
「いやいやーでもライブハウスに普段から出てる人達に比べたら」
「そんなそんな！　皆さんの方がすごいですって！」
「お世辞ですって」
「こちらこそー」
「いーえー」
「おい、いい加減にこの会話をやめておくれ！」
我慢の限界が訪れた夏音によって会話が中断された。
「ていうか四十五分って言ったけど、案外すぐだよ。お茶を勧めておいてなんだけど、準備とかしなくて大丈夫なの？」
夏音がそう指摘するとハッとした彼らはお茶を一気に飲み干すと、
「す、すみません準備しなくちゃなんで。お茶ごちそうさまでした」
と頭を下げて準備を始めた。
片や機材を取り出し、片や体操を始める彼らを感心したような眼差しで見詰めている少女達に夏音はふっと頬をゆるめた。
「珍しい？」
「え、なにが？」
「だってみんなはライブ前に体操とかしないでしょ？」
「そりゃ、簡単なストレッチはするけどあそこまで念入りには……」
全員の視線の先にはリーダー田口が入念にストレッチをしている姿があった。開脚や、どこの部位をほぐしているのか検討もつかないような柔軟まで行っている。他のメンバーはギターやベースを取り出して手慣らしに何かのフレーズを弾き、ドラムはヘッドホンを装着したまま、パッドにスティックをリズミカルに叩きつけている。
「すごいな」
それを見た澪がぽつりと感想を漏らす。今まで軽音部に見せていた気弱そうな一面はさっと消え失せ、張り詰めた雰囲気を纏い始めたマイナージェネレーションの面々。夏音はおもむろに立ち上がってケースからギターを取り出した。
「あれ夏音くんどうしたの？」

「うん。審査が始まる前に弦も替えたいしね」
「わ、私もやろー」
慌てて唯がギターを取り出すと続くようにムギと澪も自分の楽器のもとに駆けよった。
「別に無理に真似してやることないのに」
すかさず夏音がにやにや笑って言うが、集中しているので聞こえませんと主張するように無視される。
パタパタと音がするかと思えば、律がしれっとした顔でその辺にあった雑誌を積み上げてメトロノームに合わせてスティックを振り回していた。
やれやれ、と含むように微笑んだ夏音だったが、次第に自分がすべき準備の方に意識を集中させていった。
それから数十分後に軽音部による盛大なお見送りでマイナージェネレーションが審査に向かうと、会議室には軽音部しかいなかった。どうやら前に選考を受けたバンドはそのまま帰ってしまったらしい。
「なー。夏音はいつも人前で演奏する時って緊張しないのか？」
身内以外誰もいない空間になると、スティックを持つ手を止めた律が弦を張り替えている夏音に声をかけた。
「んー。緊張ね……する時としない時があるけど。でもステージに行く時まではちょっとくらいは緊張するよ」
淡々と答える内容に驚きの声が上がる。
「夏音くんも緊張するのねー」
「そりゃーね。みんなと変わんないよ」
「でも私、学校祭の時はあまり緊張しなかったなー。緊張より楽しみだなーって感じのが強かったもん」
「そう！　まさに唯みたいな感じ！　楽しみ、っていう方が緊張を上回っちゃうんだよね。演奏が始まったら緊張とかは消えちゃうかな」
そしてどこか遠い目をして微笑む夏音。
「あっという間に音楽の世界に連れ去られちゃうんだよ。お客さん

がいて演奏する俺達がいるんだけど……ノーボーダー。全部の境界線が溶けてしまう。そこにある音楽と調和して自分の全てを捧げるんだ。それで……たぶん理性とか越えた部分で会話をするんだ」

夏音が語るのはこの場にいる者にはおそらく理解できない領域の話。頭で理解することは不可能な体験。どれだけ目を凝らしてみても、その瞳の中に映るどこかの景色は彼女達には見えない。

そこに辿り着くまでにどれだけの時間が必要なのか。おそらく途方もない時間。それぞれが今まで考えたこともない自分達の遠く先に待ち受ける音楽の世界について思考を伸ばしていた。

「別に理性が飛んじゃうとかじゃなくてね。すごく冷静な自分もいるんだけど、何ていうのかな……」

うーんと唸りながら首をひねるが、大きく息を吐いて両手を上げた。

「まあ、言葉じゃ説明できないや」

皆はからっと笑った夏音に思わず頷いてしまった。説明できないということが言いしれぬ説得力を与えてくるのだ。

「俺はライブ前には念入りに体をほぐすようにしてるよ。最高のパフォーマンスにはガチガチになった体では行えないからね」

「なんていうか夏音くんが本当にプロなんだなーって思っちゃうね」

瞳を輝かせた唯が感心して言う。

「ていうかプロですから」

「ま、そうだけども」

夏音がプロであることを暴露してから時折出る冗談に笑いが起こった。

「Ｃｒａｚｙ　Ｃｏｍｂｉｎａｔｉｏｎさん。そろそろ出番なんで準備お願いします」

という言葉に導かれてステージに向かうまでの時間は誰もが無言だった。楽器を持って、ステージに近づくにつれて耳に入る爆音。

この音の発生源は言わずもがな、先にステージに上がったマイナージェネレーションである。
軽音部がステージ脇に辿り着くと、ちょうど演奏が終わる瞬間だった。
音の残滓から伝わる彼らの実力。この音はどんな風にその空間を震わせていたのか。伊達に予選を勝ち抜いた者達ではないということはすぐに彼女達の頭に叩き込まれた。
身を固くして立ち竦む彼女達の横で夏音はいそいそと機材の準備を始めていた。
「ほらほら。急いでセッティングするんだからぼーっとしてる暇はないよー」
審査員と何事かのやり取りをするマイナージェネレーションから目を離さない彼女達に夏音の声がかけられる。はっとして夏音の方を振り返った時には既に彼はスタッフと話を進めていた。
「とりあえず中は自分達のアンプからメインで出すから最初はモニター抑えめでお願いしたいです。音を合わせる時間くらいはくれるんですよね？」
「それは大丈夫です。なるべくスピーディーに対応するんで遠慮なく何でも言ってください」
それから夏音がスタッフへアンプの説明などを終えて待機していると、機材を片付け終えたマイナージェネレーションの面々が軽音部のいる方に捌けてきた。
「あ、お疲れ様っす！」
モヒカン田口が軽音部の姿に目をとめると、にかっと笑った会釈してきた。控え室から出て行く時より自然体な感じが出ており、この分だと演奏の出来は上々だったのかもしれない。少なくとも落ち込んだ様子はない。
「ていうかヘッド持ち込みっすか！？　超本格的じゃないですか！」
早速、軽音部の機材に目をつけた田口が目を丸くする。
「そうかな？」

「そうっすよ。俺らなんて、ほら。この撤収の早さときたら……」
「素晴らしいことじゃないか。それより、審査はどうだった？」
「まあ、わりとやりやすい感じですよ。朗らかなオッサンばっかです……けど」
「けど？」
これればかりは黙って会話を聞いていた他の者も聞き返す。
「一番左に座ってるオッサン。確か新手のレーベルの社長らしいけど、すっげー変な質問してきますね」
「変ってどんなさ？」
「それはですね……まあ、それはお楽しみということで」
「なんじゃそりゃー」と揃ってこけた。どうやらこのモヒカンはここに来て、初めて彼女達がライバルだということに頭がめぐったようだ。敵に塩を送ってたまるかという心算が唐突に変わった表情の変化でバレバレである。
マイナージェネレーションはそれから良い笑顔で「頑張ってください！」と言い残して帰っていった。
そして前のバンドがいなくなったところで暢気にしている暇など残されていない。入れ替わるようにステージに出ると、大急ぎで各自のセッティングをスタッフと共に始める。
がらんとしたホールの中央部には長机が並べてあり、そこには六人の審査員がいた。厳めしいオーラを放っている者もいれば、にやにやと好奇の光を湛えた瞳でこちらを見詰める者もいる。ＤＪレイジは遠くからでも分かる白い歯をきらめかせていた。
まずはセッティングということで、挨拶もそこそこに、そちらへ取りかかった。それぞれのパートの立ち位置はあらかじめ伝えてあるので、それぞれによって細かい指定がなされるはずだったのだが。
「あ、あれっ！　セッティングって何からすればいいんだっけ！？」
「あわ、あわわわ」
「どどどうしよ夏音くん！　ギターってどうやって音出すんだっけ。これは何だっけそれはどこにここはどこ……あれ、私って何だっけ」

「その疑問は哲学的すぎてわからないけど。とりあえずギターをケースから出すことから始めてみてはどうかな？」
「あ、そうだね！」
パニック状態なのは唯だけではなかった。ムギはスタンドを立てる前にキーボードを片手で肩にかついで「あれ？　あれ？」と置き場所を求めて首をひねっている。傍から見ればどう見てもガテン系の人間である。同じくして律はハイハットを自分の頭くらいの位置まで上げて「高すぎるっ！」と自分に突っ込んでいた。
そんな彼女達の様子を半眼で眺めていた夏音はふとした違和感に自分の手元に視線を向けた。
「ねえ澪。流石にこれはジョークだよね？」
「え！　何が！？」
上擦った声で悲鳴のように叫び返してきた澪は夏音のギターから伸びるシールドを自身のベースにインサートしていた。
「……」
楽器同士の直列。
この状態からどんな奇跡を起こせるのだというのか。
「わーわーわー！　ご、ごめん！　間違った！」
「こんなミラクルな間違え……まあ面白いけど。こーのおっちょこちょいさんめっ！」
自分の失態に気付いた澪がさーっと顔を青くするので、緊張を和らげるように言っただけの一言に再び「ご、ごめん」と謝る。
夏音は楽器同士で繋がるという滅多に起こらない珍事に、内心でステージに笑い転げたい衝動を抑えて「気にしないで」とかろうじて答えた。
ブフォッ！　という音が遠くから聞こえたと思ったら数人の審査

員が腹を抱えて大爆笑していた。
遠慮のない笑い声は容赦なく彼女達の耳に入る。ますます強張る皆に夏音は大きく息を吐くと、手を叩いて彼女達の注目を集めた。
「オーケィ。みんなイイ感じのつかみだよ。絶対気に入られたね。とりあえず落ち着いて。いつも通りにやって」
夏音の普段と変わらない透き通る声は彼女達の心を落ち着かせるまではいかずとも、やるべきことに意識を向けるくらいには効果的だった。
ぎこちなく頷いてそれぞれがセッティングを進めて行く。
その様子を見て安心の微笑を浮かべた夏音はこれだけで五分は過ぎたかもしれないとかすかな焦りを覚えていた。
夏音にとってはセッティングの時間がこれだけというあり得ない状況下なのだ。バンドでこんなに手早く満足いく音を作ることなど不可能。運営側は審査対象を所詮はアマチュアバンドとしてみなしている。プロのように時間をかけて音作りをさせる余裕を与える気はないのだ。
音響も会場の癖も把握できていない現状で頼りになるのは夏音の長年プロとして培ってきた勘のみ。
どのような会場で音がどう抜けていくかを思い出し、音を作っていくしかない。このライブハウスのＰＡを信頼することはできないので、それを見越してステージ上の音を確定しなくてはならない。
夏音のセッティングが終わりマーシャルから放たれる大音量の音が遠くへ抜けていく感覚を捉える。偶然にも夏音の音に続くように唯、澪、ムギの手元で生まれた音がアンプから飛びだした。
スタンドの位置などを調整していた律もドコドコシャンシャンと一通り叩き終えてから大きく頷いた。
「Ｙａ！！　とりあえず大まかなセッティングは終了、と。ドラムのチューニングをどうにかしたいけど……仕方ないか」
律もそれに合わせているようで、このライブハウスの音に合わせていくしかないようである。

それから数分の間にバンド内の音を調整していった。
「唯。ちょっとミッド切りすぎ。もうちょっと上げてよ」
「どれくらい？」
唯が首を傾げるのに対し、夏音は手を出して微妙なひねりを加えて唯に示す。
「こーのくらい」
「らじゃー」
誰が見てもあり得ない会話だが、成り立っていた。現に、次の瞬間唯が出した音に満足したらしい夏音が大きく頷いた。
「大丈夫ですかー？」
ホールの一番後ろにあるミキサー卓の男性がマイクを使ってこちらに呼びかけてきた。
「はい。外出してください」
夏音がヴォーカルマイクを通して返した瞬間、ノイズが大きな空間に広がっていくのがわかった。
「時間無いんで1コーラスくらい何か弾いてもらえますか？　ちょっと大雑把になって申し訳ないんだけど」
本当に申し訳なさそうな声なので、夏音も許そうと思う。彼らもアマチュアバンドの音作りに対して途轍もない瞬発力をもって聴ける音に仕立てなければならないのだ。
心中察する、と言いたいところだがそれでも夏音は彼らにそれなりの仕事をしてもらわねばならない。
「じゃあ、そうだね……前にやった６０、ｓｍｉｎｄ。ギターソロから。ドラムのフィルから入ろう。それでブレイクして四人のハモりね。前にやったアレンジで」
「フィルからかぁー。ちょっと待って」
いきなりの大役の任命に尻込みする律だった。彼女にとっては、以前にやった中で最も大好きになった曲の一つである。
「まあ、シンプルでいいよ。カウントでもかまわないし」
ＭＲ．ＢＩＧの名曲。Ｇｒｅｅｎ　Ｔｉｎｔｅｄ　６０、ｓｍ

ｉｎｄ。ソロ終わりにサビのメロディを四声で綺麗にハモるのだが、全員のマイク音量の調節を計ってもらうのにピッタリである。キーボードを加えたアレンジながらも整然とした音並びなのでＰＡ側もやりやすいと夏音が踏んでの選曲だった。

ギターソロから1コーラスが終わると、夏音はサングラスの奥で瞳を曇らせていた。

音が堅すぎるだけではない。夏音をのぞく誰一人としてしっかりと声を出せている者がいない。コーラスが目立つ分、その調子の悪さは取り繕いようもないくらい際立ってしまっていた。流石にこれはまずすぎると踏んだ夏音は努めて明るく周りに声をかける。

「みんなーもっとリラックスしてよ」

いつものように怒るような真似はしない。そんなことをしても彼女達はさらに強張ってしまうだろう。

一様に頷くが、あまり夏音の言葉が効を奏した様子は見られない。そもそもこの齢でこれほどの大ステージで演奏するチャンスなどないのだ。スタジオや学校祭のライブ環境とは比べものにならないだだっ広い空間でバカでかい音を出すのに躊躇が生じている。

「あ、それとドラムをもっと上げて下さい。それと高い音が少し痛いからカットしてもかまいません」

ＰＡに指示を送り、後ろを振り返った夏音は自分にすがるように向けられた幾つもの視線を肌に感じた。

そこから伝わる恐怖。音を鳴らすことに恐怖を抱いている。

審査員は既に最初から自分達を値踏みしているだろう。このやり取りも含め、どんな評価になるかは定かではない。だが、そんな評価は大した問題ではないのだ。実際の演奏を評価させればいい。

「……じゃ、やりますか」

それでも今の夏音には彼女達へかける言葉が見つからなかった。言葉だけでは彼女達には届かないと思ったのだ。一曲終わる頃には慣れるだろうと楽天的に考え、前を向いた。

バンドの準備が整った頃合いを見て、審査員が名前だけの自己紹

介をする。一応の流れはあるようで、こちらもメンバーの名前を順に言っていく。一曲終わる度に審査員から質問があるかもしれない、ということを説明された。

「ガールズバンドなんだねー。今回ガールズバンドが君たちだけだから、なんか華やいでいいねー！」

「……じゃ、お願いします」

開始を促され、そこかしこで唾を飲み込む音がする。

スティックの乾いた音。

２カウント。

直後に発生したひどく不細工なアンサンブルにステージの上は凍り付いた。

色彩が失われた音符の交錯は不格好きわまりなく、それぞれのメロディーはバラバラの方角へ飛び散った。

最初の八小節で全員の表情に絶望の色が浮かび上がる。

このトリビュートという曲はデモ音源として軽音部が一次選考を通過したものだ。

イントロにディレイを噛ませた夏音のリードギターとムギの全てを包み込むようなオルガンの音が壮大な世界観から展開が始まり、サイドの唯は単音カッティングでコード進行に沿ってリズムのエッジを立たせる役目に徹し、ボトムを支える澪のベースは律のオープンハイのタイミングに合わせて弦を飛んでニュアンスを出す。

それぞれの旋律が噛み合えば美しい音楽が生まれるはずだった。

現時点では本来の美しさはナリを潜めてしまっている。

律は小節のつなぎでリズムを崩し、唯は鳴らしてはいけない音をノイズまじりに弾いてしまう。曲の骨格はかろうじて澪と夏音でもっていたものの、リズムセクションが崩れかけているのは明白だっ

た。

全てが揃った上で初めて際立つムギの壮麗な音色は本来の魅力の半分も出せていない。

イントロが大事な曲であるにも関わらず、踏み出すべき最初の一歩を踏み損ねてしまったのだ。

一歩目を踏み出すことに失敗したら最後、二歩目はさらによろける、三歩目で持ち直そうとした時には既に倒れる寸前なのだ。

夏音は内心で舌打ちする。彼は今ここで持ち直すために必要なものを知っていた。

それは経験。それなりに場数を踏んだバンドなら曲の途中からでも調子を上げていくこともあるが、軽音部の場合はそうもいかない。絶望的にライブの経験が少ないことは致命的なハンディとなって彼女達に襲いかかることになる。

曲の途中で心を切り替える余裕が生まれてこないのである。

一曲目が終わりに近づいた頃、夏音の脳裏には深海でもがく軽音部の姿が映し出された。

地上と違って当たり前に呼吸することができない。全方位から余すところなく圧迫してくる水圧は自由に体を動かすことを許さない。そして底へ沈めば沈むほどその圧力は増していくのだ。

ギターのフィードバックが消えゆき、ボリュームペダルを0にした瞬間、形として見えない何かも一緒にするりと消えていった。

誰も言葉にしない。言葉にする必要はなかった。

一曲が終わっただけで全員が汗だくである。

マイクを持った審査員が順に何らかの感想を語っている。最早誰の耳にも留まらないその言葉は何度か彼女達を通り抜け、やがて次の曲を促される。

その後、クマさんのイントロはさらにボロボロだった。澪はスラップで不協和音を奏で、攻撃的な重低音はちぐはぐにもつれあう。

曲が進むにつれ、誰もが一人ぼっちになっていった。リズムの根

幹を成すドラムは必死に他の音を探るが、どの音も遠くに聞こえる。
澪は先ほどからチラチラと律の方を振り返り、しきりにムギや唯に何かを訴えるように視線を向ける。
マイクに向かう夏音、位置が固定されているムギをのぞいたフロントの二人が既にステージの前方ではなく、後ろに体を向けてしまっている状態だった。
それでも互いのメッセージは伝わらない。走り気味になったドラムがついにＢＰＭを一・五倍ほどの速度にしてしまう。ツッコミ気味に進む律に何とかして気付かせようと澪が視線を送りながら後ろ気味のルートを弾くが、意味がない。
彼女達の耳には、モニターから出てくる音は街中を歩いている時にどこか遠くのスピーカーから聞こえるラジオみたいに他人事のような面をしている。中音の確認をしっかりしなかったことがここに祟った。
ドラムの動きに合わせ、かろうじてブレイクのタイミングや拍の頭だけは揃う。それ以外はボロボロの演奏としか言いようがなかった。
足が地面にしっかりと立っているはずなのに、宙に浮かんだような頼りない感覚に陥る。嗅覚、聴覚、視覚がだんだんと遠のいていき、ステージを照らす強烈な照明の中に溶けていった。
夏音はここにきて全てを後悔しかけていた。ただ前だけを見据える夏音の視界。審査員の冷たい眼が遠くで光ったような気がした。
彼にとってはそんな視線を向けられることが何より耐えられない。体の奥底から沸き上がる感情に顔が熱くなる。
どろり、と心を覆い尽くす黒い感情がせめて歌にこめられていなければいい、と願う。
皆、半端な気持ちでこのイベントに参戦したつもりはない。それに向けての練習に気を緩めたつもりもない。本来の目的は軽音部のステップアップであり、大勢の客を前にして演奏することに慣れてもらうことで、優勝は二の次三の次だったはずだ。

それがいつの間にか優勝などという分不相応な目標へと切り替わっていた。今、この瞬間も優勝などと大それた口が叩けるだろうか。身の程知らずで空疎な目標は本来の目的すら叶うことなく敗北感だけを生み出してしまっているではないか。

夏音の中に、曲に対する質問をぶつけてくる審査員に対する苛立ちが募ってくる。

誰が曲を作ったのか。バンド結成の理由。

今は、そんなことはどうでもいいのだ。

そんな質問はたった今、自分達が行った演奏の前には何の意味も持たない。

後ろを振り返れば、揃って青ざめた表情で俯く少女達の姿がある。その内に渦巻く感情は手に取るように分かった。困惑、不甲斐なさ、怒り。

その誰もが夏音に対して目線で必死に訴えてくる。

『どうにかしてくれ』と。

夏音はそっと目を閉じる。その眼差しに込められた想いは言葉にならなくともありありと分かる。

彼女達はプロのミュージシャンであるカノン・マクレーンを見詰めている。

ならば夏音は応えねばならない。高いところから言葉をぶつけてくる審査員の度肝を抜いて強烈な印象を叩き込まなくてはならない。鼻を明かしてやるのだ。

「じゃ、次に一曲やってもらって最後になります」

審査員の言葉に誰かがはっとなる。たった三曲で終わり。セッティングの時間も含めて時間は余っているはずである。

やはりそこから導かれる答えは、自分達は見限られたということ。これ以上聴く必要はない、そういう評価が下されたということだ。

軽音部の間に絶望が広がる。今までの演奏を否定したくても、どうしようもなくこれで終わり。

律、澪、唯、ムギの四人は諦めの表情を携えて最後の曲を始める

準備をした。もたもたとチューニングを合わせ、居心地が悪そうに身を揺する。

ただ一人、夏音だけは違った。その瞳に何か言いしれぬ光を宿らせて毅然と前を向く。

「あ、ちょっと待ってくれないか。僕から最後に質問がある」

演奏に向かう前に審査員の一人がマイクを通してそれを制止してきた。演奏への士気を高めていた夏音はかろうじて舌打ちを我慢して「どうぞ」と言った。

「君たちは何のために音楽をやっているんだい？」

その質問を投げかけるのは先ほど田口が触れていた一番左に座っているという審査員だった。厄介というより、正解のない問いかけだけに質問の意図を探ってしまう。

何のために。人によって様々な理由が返っていくのだろう。

夏音はそんなことに時間を割かれるのがもったいないとすら感じた。

そんなのは考えるまでもない。

「そこにあるから」

一言、マイクに通すと夏音は律に曲を促した。

ドラムのフィルインから最後の曲が始まる。三曲目ともなると、多少は落ち着きを取り戻していた。もうダメだという宣告を受けたと思い込んで、吹っ切れつつあったのかもしれない。

イントロから1コーラスが終わるまで、今日の演奏の中では一番と言うべき出来だった。音を外すこともなく、ドラムがリズムを崩すこともない。それぞれの持ち味も少しずつ出てきていた。

これで終わりというのが惜しいくらいだった。最初からこれだけ弾けていれば良かったという悔しさが彼女達の頭を巡った。

次に訪れる夏音のソロが終わるとサビを二回しして曲が終わる。

だから、ここで自分達の闘いは終わるのだと少女達は諦めに近い想いを抱いていた。

ソロを取る夏音がこの曲で使う予定にないエフェクターを踏む瞬

間までは。

唐突に全身を襲った邪悪な音に彼女達の体は感電したようにびくりと反応した。驚いてその原因となる男を見る。

鮮烈な光を纏ったように前に躍り出た夏音は極限まで歪んだ音色を持ってその場の注目を奪った。

その圧倒的な存在感が急速に膨張していく。

十六小節で終わるはずのソロだった。しかし出だしの音が鳴った時点で夏音のソロがそれだけで収拾がつくはずがなかった。

凄まじい速度で動く左手は既に目で追うことすらできない。機関銃のごとく放たれる音の連射が終わったと思うと、すかさずあえぐようなピッキング・ハーモニクスが会場にエロティックに鳴り響く。

空気をじぐざぐに切り裂いた破壊的なサウンドは手をかざせば切り裂かれそうなほどの威力をもってホール内を飛び交った。

その音の影響は同じステージの上で演奏している他のメンバーにも表れた。

ソロの裏でバッキングをする唯のギターは同じように勢いを増したドラムにどんぴしゃりと絡み合い、ベースはボトムを支えながら次々と装飾音を放り込み始めた。遙か上空を行くギターとそれを支える他の楽器の間、ちょうど中間の場所でキーボードは大きくうねる。

全身の動きを使った大胆不敵なグリッサンドは絶妙なツボを押さえて、バンドという一つの生き物の発する咆哮となった。

夏音はモニターの上にその細い脚を乗っけて悪魔のようなソロをかき鳴らしながら長い髪を宙に翻す。

飛散する白い光、音の奔流が一分の隙も許さずに空間を埋め尽くしていく。

最早全てアドリブだった。原曲の形をかろうじて保っているのはコード進行に忠実なベースラインとサイドギターの音と何かが乗り移ったようにキレを増した律のドラム。

この瞬間の軽音部を目の当たりにした者は、先ほどまで気の抜けた演奏をしていた人間と同じ存在だとはにわかに信じられないだろ

う。

一人の男がスイッチを押した瞬間、まるで別の生き物へと変貌してしまったのだ。

気が付けば審査員の見る目が変わっていた。純粋に驚きを露わにする者、面白そうに笑む者、興味深そうに姿勢を正して凝視する者。少なくとも彼らの中で出来上がりつつあった評価を揺さぶってしまう程の衝撃だったらしい。

いつ終わるのか予想がつかない夏音のソロは収束に向かうどころかどんどん熱を帯びて肥大していった。

ワウを踏みながらカッティングだけで一つのグルーヴを作る夏音に対し、今度はベースがスラップを入れる。今や誰のソロなのかすら分からなくなるほどそれぞれの演奏力がパワーを増していた。

唯がチョーキングをまじえた三連符でフレーズを歌わせると、素早く反応した澪の拍が四拍三連の和音で重ねる。拍に独特のスペースが生まれ、そこに戦車のようなドラムが入り込む。

ポリリズムで進む演奏は収拾がつくのかすら怪しい域にまで達している。

ふと互いの視線が交差する。一瞬だけすれ違うほどの短い視線の邂逅で全員が違いの意思を把握した。

夏音のギターが轟音のフィードバックで全てを押し潰そうと膨れあがる。空間に満ちる音圧に紛れて他の音も一緒に高まっていく。

その高まりが極限に達したその瞬間、夏音が腕を羽ばたくように腕を広げた。

ピタリと止む。

彼女達は宙に浮かべた空白を演奏する。

宙高く舞った空白は次に圧倒的な質量を持って会場に落下した。

光と熱を撒き散らして地面に落下した音の勢いが夏音の歌声によってまとめられる。

その歌声が指揮を執り、曲の果てへと怒濤の進軍を。粉塵を巻き起こし、誰にも止められない勢いをもって。

その日、軽音部の戦う時間は終わった。

「何て言うか……まあ、最後のはよかった、よな」

帰りの車内は来る時の数倍は空気が重かった。心身ともに満身創痍になった一同はぐったりとしながら自分達の住む街への帰り道の中にあった。

先ほど来た時とは逆に飛んでいく風景をぼーっと見送り、空々しく廻るエンジンの音に身を委ねていた。誰も言葉を発することもなく、精神はへとへとのはずなのに、それでも眠ることもできずにただ沈黙を保っていた。

そんな空気の中にぽつりともたらされた律の言葉にすぐ反応する者はいない。少し遅れてからムギが苦し紛れに「そうねー」と同意した。会話は淀みの中を漂うように流れていかない。

殊更、いつもは明るく会話の中心になる人間が一言も言葉を発さないので空気は暗くなるばかりだった。その人間はハンドルを握り、ぼんやりとした表情でひたすら前を向いている。運転しているのだから当然のことに思えたが、この場合はそれとも少し違うように思えた。

示し合わせたわけでもないのに、四人の少女は夏音の顔色を窺っていた。誰もが彼の様子を気にかけ、下手に口を開けないようにしていた。

演奏を通じて伝わってきた、純粋な怒り。

今日、彼に向けられた視線は今まで彼が浴びてきた類のものではなかった。彼を見上げ、讃えて止まない眼差しではなかった。

無様な演奏を晒してしまったのはバンドという一つの単位。一つの記号。夏音という個人が一人だけ際立っていても、意味がないのだ。

バンドは揃って評価される。つまり、低い評価をされたのなら不

甲斐ない演奏をしてしまった自分達にある、と彼女達は考えているのだ。

誰がどう聞いても、今日の演奏中で失敗がなかったのは夏音だけだったのだから。失敗がなかったどころか、惚れ惚れするほど卓越したギター捌きだったといえよう。周りがそれに合わせることができなかっただけで。

「ま、最後の曲はね」

何と一度沈み欠けた会話の尾を掴んだのは意外にも夏音だった。

「みんな緊張しすぎなんだよねー。仕方ないけど。あんな大きいステージなんて普通のアマチュアバンドが立つこともないのに、たった三回の校内ライブしか経験したことない人間が堂々としてられるはずないよね」

その口調には怒りや苛立ちといったものは含まれていない。いつも通りハキハキと聞こえる癖にどこか気の抜けたような声。

「夏音くんは怒ってないの？」

唯がずっと気にしていた内容を尋ねる。

「怒って？　何で怒るの？」

「だって……私、ダメダメだったし」

「確かにダメダメだったけどね」

「うぅっ」

「結果が全てなのは動かせない事実だよ。どの世界でも言えることだけど、いつでも万全のコンディションを出せるのは一流の証拠だ。それでも残念ながら調子が悪い日もある。プロだって同じことだよ。正直、今日の演奏は絶対にベストとは言えないよね。でも、今までの練習を思い出してみれば、もっともっと良い演奏ができたことだってある。俺達は自分達で最高だ！　って思える演奏を確実に持ってはいるんだ。そして、その最高の演奏をあの空間で出せなかったというだけの話だよ」

その言葉が示すようにまさしく今日の自分達を鑑みた場合、ベストの実力を出せなかったことは言うまでもない。

自分達はもっとやれたはず。それも間違いない。後からそう思っても結果が全てというのも夏音の言う通りなのだ。

それでも、釈然としないものがある。喉にひっかかり、ありのままの結果を飲み下せない理由が。

「でも……悔しい。こんなの」

震える声で搾り出すように澪が言う。後部座席の三人がはっと息を飲み、顔を上げた。

「あれだけやったのに……練習だっていっぱいしたのに！」

ボリュームは大きくなかったのに、悲痛な叫びは異常に車内に響いた。

手がボロボロになるまで楽器を弾き、何時間もスタジオにこもって汗にまみれた。ティータイムの回数は減り、自分達の可能性を信じて今日という日に向けて練習の日々だった。

頑張った全ての時間があの一瞬で無駄になったような気がして、一同の胸にはやりきれなさがくっついて離れない。

澪の言葉は皆の心中を代弁したものだった。

言葉にしても悔しさが増すだけ、と抑えていたものが澪の一言で崩れる。

「私だって……もっとやれたはずなのに！」

律が自分の膝に拳を叩きつけて歯を食いしばった。

「自分の体じゃないみたいだった。スティックが今にもすっ飛んでいきそうになるわ、すぐに息があがるわ……何だったんだ……アレは」

「私も……今日はみんなが遠くにいた感じ。だんだん自分の音も聞こえなくなって、こわかった」

唯も表情を曇らせて遠い目をする。あのステージで感じた独りぼっちのどうしようもない感覚を思い出して、身震いした。

「ステージには魔物がいる、とは言うけど」

仲間が次々に悔しさを口にするのを聞いて、夏音が口を挟む。

「それは結局のところ、理由にすらならない」

ぴしりと言い切った。

「ステージの上では……どれだけ自分を保てるのかが鍵になる。自分が自分であることを忘れなかったら見えもしない魔物なんかには負けない。自分以外の何物のせいにもしてはいけない。今日、みんなは自分に負けたんだよ」

いつだって立花夏音の言葉は正しく彼女達の心に入っていく。

たった一つしか年齢が離れていないにも関わらず、その言葉は同年代の他の誰かが吐くより確かな重みと熱がある。借り物の言葉はそれを受け取る者を素通りしがちである。ただの言葉に説得力が付随して初めてそれを聞く者はすんなりと飲み下すことができるのだ。

歩んできた人生が違う、というだけの単純な理由ではない。少なくとも、平凡な日常を生きてきた少女達とは比べものにならない、深い経験と共にある言葉。

「まあ、いい経験だったと思うしかないね！　お寺にでも行って精神修行でもしてみる？」

ハハハと笑い事のようにまとめようとする夏音の言葉にも少女達の顔は晴れない。

「自分に、負けた……」

ぽつりと助手席の澪が呟いたのを最後に、それぞれが家に送り届けられるまで車内の会話はなくなった。

最終選考の日から一週間と数日の時が流れた。軽音部は今までの日常を取り戻しつつあった。

万が一ということもあるかもしれないので、練習は欠かしてはいない。とはいえ、今までのようなしゃかりきな勢いはない。

顔を上げて前だけを見据え、みなぎる自信を追い風に驀進するようなエネルギーはなかった。

平常運転と臨時急行の狭間にいるような形で軽音部の活動は続い

ている。爆メロについては、まるで参加していたことが夢だったかのように話題に出ない。

彼女達の中では全て過ぎたこと、という扱いになりつつあった。あれだけ無様な演奏を見せつけてしまったのだ。選考に通るはずがないというのが共通の見解で、誰もそれを疑うこともなかった。

「なー澪。お前バッキングページ聴いてる？」

「いや……最近はちょっと、な」

掃除当番で遅れた夏音以外のメンバーが揃った部室。菓子を囲んでお茶、といういつもの風景に身を置いていた澪はふいに律の口から出た単語に顔を引き攣らせた。

ＦＭ局の花形番組であるバッキングページはこの二人の中では共通の話題としてよく会話にのぼる。流行のチャートから、かなりマニアックな音楽情報まで網羅しているこの番組の大ファンである二人は毎回欠かさずに番組をチェックして翌日になるとどちらかが「昨日のページさ」と話し始めるのだ。

しかし最近となっては暗黙の了解のように話題に出すことが憚られた。

何故なら、爆メロを主催している番組である。どうしても苦い思い出とセットになってしまう。

そして当然のことながら番組では爆メロの情報を流す。さらには最終審査の一環として、デモ音源をランダムに流して読者からの反応を見るのだ。

「実はさ。私らの音源、けっこー流れてんだよね」

「え、そうなのか？」

思わず読んでいた雑誌を取り落としそうになる澪。驚愕を露わに幼なじみを見詰めると、まさに今その情報を流した当人も困惑した様子で頷く。

「うん。少なくとも三回は耳にしたかな」

「三回って……待てよ。週三でＯＰとＥＤで流すだろ……選考終わってから七回は放送したから……多すぎないか！？」

悲鳴に近い大声を上げて澪は頭を抱えてしまった。
「ねえねえ。私達の音源がどうとかって何の話してるの？」
隣で栗鼠のようにクッキーを詰め込んでいた唯が気になる会話を始めた二人に訊ねる。
「うーんと。爆メロ主催の番組で最終選考に残ったバンドの音源を流すんだよ。それで視聴者からの反応も審査に含めるってー話なんだケド……」
「それでそれで？」
「やっぱり視聴者の反応というのは素早いもので。一応、平等に流されるはずなんだけど視聴者次第では流す回数が変わったりとか」
仕組みを理解していない唯に親切に説明する律だったが、語っている最中に自分でもおかしいなと思ったのか徐々に首を傾げていった。
「だからより多く流れたバンドはそれだけ視聴者の期待が……ってアレ？」
カチリ、と何かがハマった。
「ってことは私達、期待されてる？」
それを言葉にしたのは唯だった。瞳からキラキラと眩い光を放ち、前のめりになって律の顔を覗き込む唯に律は思わず身を引いた。
「そ、そんなばかな……いや、でも……」
「どったのりっちゃん」
「ＦＭで自分達の曲が流れるのもおかしな感覚というか……なんつーかいつも聴いてる番組が私らの曲流しちゃってるよスゲーって感動もんで……ぶっちゃけ、自分でもうわっこれよくない！？って不覚にも思っちゃったりして」
「へぇーーっ！　私も聴いてみたーい！」
「と思うよな？　感動のあまりテープに録画しちゃったよ」
「りっちゃんさすが！」
すかさず鞄から一本のテープを取り出すあたり、用意周到である。
「ねえラジオって録画できるの？」

先ほどから会話に参加していなかったムギが机に置かれたテープを物珍しそうに眺める。
「オイオイ……ラジオ聴いたことないのかー？」
「お店で流れるのくらいかしら」
「いや、あれは有線……まあテレビ番組と同じだよ。コンポとかで番組を流してそれを録画するだけ」
「へー。すごいのねー」
「いや、なんもすごいことはないんだけど……ま、まあとりあえず聴いてみよーぜー」
部室にある古いラジカセを取り出してセットする。
一同がじっと息を凝らして見詰める中、律が仰々しい手振りで再生ボタンを押す。
『ハイ、というワケでー今夜もこれでお別れの時間というワケでー！　父さん……僕は……今日もこの曲を流そうと思うワケで……』
声を聞いただけで人物像が思い浮かんでくるというのも珍しい。ＤＪレイジの白い歯のきらめきが一同の頭の中に映し出されたところで、これが番組の終了時を録画したことが分かる。
「もしかしてーって思って慌てて録画ボタン押したんだよなー。そしたらどんぴしゃりで私らの曲だったのさ」
それから二言三言だけＤＪレイジが戯けたことを言った後に、聞き覚えのあるイントロが流れる。
「あっ！」
ペニー・マーラーのステージ上ではボロボロだった曲は本来の美しい旋律となってスピーカーから響いてくる。
しばらく一同は自分達の曲に聴き入った。
間違いなく、自分達が演奏した曲。しかし、ラジオから流れるその曲はどこか自分の手を離れた別の物のように思える。
曲が終わりＣＭが入ると、律はラジカセの停止ボタンを押した。
示し合わせたわけでもないのに、ほぅ、と嘆息が揃う。
「これ、イイ」

「うん」
重大事項を発表するような口ぶりで澪が囁き、互いに確認するように頷き合う。
「何て言うか自分で言うのもホント変な話だけど……自分達が弾いてるのかなって思っちゃうね」
うっとりと耳を傾けていた唯が照れくさそうに笑う。
「なんか不思議な感じ……どこか他の上手いバンドの人達の曲に聞こえるのね」
頬に手をあてたムギが嬉しさと戸惑いが混じった表情で言う。
「今さらだけど……やっぱり悔しいな。多分これを聴いた人はこの曲を作ったバンドはどんなだろうってそこそこ気になってくれるよな」
誰にも知られていない自分達という存在が生み出した曲。自分達の手を離れたところで、顔も知らない誰かの耳に入り、形として伝わっている。
だが、今となってはどうしようもならない。そんな言葉が後に続くように思われた澪の言葉にその場がしんと静まりかえる。
「いや！　そこそこなんてもんじゃない……私なら絶対！　ガッツリ気に入ってる！」
顔を上げた律は拳を握って澪を見る。
「律……」
ぶるぶると拳を振るわせる律を見た澪が悲しげに瞳を震わせる。
「でも……」
「でもじゃない！」
言いかけた澪の台詞を遮るように律が声を張り上げた。
澪の言わんとすることは言葉にしなくても分かる。今は自分達の曲を褒めようが、傷の舐め愛のような体裁にしかならない。
「いいもんはいい！　だろ！？」
引き攣った声は弱々しく、同意を求める彼女の言葉は迷子の子供みたいに宙を漂う。

「そのとーーり！！！」
高らかに叫んで部室に入ってきた人物へ視線が飛んだ。
「そのとーーり！！！」
リフレインと共に大またで部室を横切ってきた夏音は脇に抱えていた封筒をバンと机の上に叩きつけた。
「これ……何？」
全員の視線が集まった封筒は一見すると何の変哲もない茶封筒なのに、言いしれぬオーラを放っていた。
一斉に自分に突き刺さった視線に、夏音は曖昧な笑みを浮かべた。

「えぇーーーっ！！？　本選出場！！！！？」
と叫んだ四人の少女の絶叫が部室を揺らした。耳を塞いだ夏音は微苦笑を浮かべて大きく頷いた。
「嘘……これは嘘だ…夢だ……悪夢だ！」
「いや悪夢じゃーないだろ」
混乱してあらぬ事を口走った澪に冷静に突っ込んだ律は、それをキッカケに落ち着きを取り戻した。
「で、でもちょっとおかしいだろ？　だって、自分で言うのはアレだけど……アレだったじゃん！？」
中高年のような体で疑問を投げつける律に対して夏音は静かに頷いた。
「俺もびっくり仰天オドロキ桃の木だったんだけどさ。受かっちゃったー」
シンプルにまとめられた。
「いや、そんなばかなっ！？」
「まあ、この話には悲しいオチがあるんだけどね」
「上げて落とすなー！」
話の順序が恐ろしく間違っていることに律が激怒する。
「うん……ていうかこれは俺が独自に調べなきゃ分からなかったこ

となんだけど。実は俺達は一度落ちたみたいなんだ」
「は？」
衝撃的すぎる発言にその場の空気が固まった。今、この男は何を申し奉ったというのか。
「だから、落ちたんだって」
さもありなん、と肩をすくめる夏音。当然だろ？　と言わんばかりのジェスチャーに怒りをすり抜けてパニックに陥った彼女達は口をパクパクとさせた。
「ほぇーー」
頭の回路がショートしかかった唯が呆けた表情のまま気の抜けた声を出した。
「落ちたのに、何で？」
「そ、そうだ。落ちたのに何でじゃー！？」
興奮冷めやらぬ様子で立ち上がった律が夏音に詰め寄った。夏音はひらりと律を躱すと、彼女が座っていた椅子にぽふんと腰を下ろした。
「ツテのツテから仕入れた情報だよ。あの日、俺達は自分達が思ったほど低い評価をつけられてはいなかったらしい」
それがいけ好かないとばかりに短く鼻を鳴らした。誰の反応もなく、ちゃんとついてきているか不安になった夏音は彼女達の様子を確認してから続けた。
「それもギリギリ落選する程度のものだった。ま、要するに落ちたんだ。なら何で俺達が勝ち上がれたのかってことだけど。ギリギリのところで引っ掛かってた俺達の上にはこれまたギリギリで合格したバンドがいたらしいんだ。まーまーまーそのバンドはギリギリ合格とは露も知らずに大喜び。だがナンテコッター。しかし不幸は起こったー。なんとバンドのギターの子がバイト先で右腕複雑骨折してしまったのだー。悲しみに暮れるボーイズ。ギターを替えることも救済案として出たがー……ここから熱い部分。残りのメンバーはそれを二つ返事で断った！　『アイツの代わりのギターなんてこ

の世にゃいねえんです！』ってね。泣けるね。まあ、それでもって出場バンドが一つ減りました、となった時にそういえばギリギリのところに上手い具合に引っ掛かってた奴らがいたな、と……それがギリギリな俺達ってわけ」

淡々と語られた事実に揃って絶句であった。

「てことはお情け合格！？　棚ぼたラッキーじゃん！」

肩を怒らせた律が息を荒げる。

「そゆこと」

切り返す夏音もどこか苛立たしげである。

ストレートに実力が認められたわけではなくて、ちょうど良かったから声がかかったのだと言われたようなものである。

しかし、他の者が示した反応は意外なものだった。

「で、でも……それでも本選に出ることを許されたってことだろ？」

複雑な表情の澪はどう反応していいのか迷っているようだが、それでも結果を純粋に受け取るような発言をした。

「確かに納得いかないけど……私達以外に出られないバンドだってあるんだし」

自分達以外を含めて残っていたバンドは十四組。その内、本選の枠は五バンドなので、ほぼ三分の二は落選する計算になる。

そのどれもが箸にも棒にもかからないようなバンドではないだろう。そんな中で選ばれたという幸運を無碍にするのもどうかと澪は考えていた。

「それに……審査員の人達だって私達の演奏全部を認めてくれたんじゃないと思う。やっぱり最後の演奏……私達の見せたわずかな片鱗に期待してくれたんだったら、それに答えてみたいって気持ちもある……」

言い切ってから頬を染める澪に誰もが口を広げたままフリーズした。

「い、いつになく澪が前向き……」

「どうしたんだ澪!?　キャラが違う気がするんだけど。これが俗に言うイメチェンってやつ?」
「違う!　それだけ悔しかったんだよ!」
あまりに好き勝手に言われて怒鳴った澪はふと真剣な眼差しで封筒を睨んだ。
「みんなはどうなんだ?」
そう澪が問うた瞬間、沈黙が落ちる隙間もなく反応したのは唯だった。
「出たい!　私、もう一度あのステージでやりたい!　リヴァイバルしたい!」
「リベンジな」
「唯ちゃんの言う通り。私もリヴァースしたい!」
「もうリしか合ってないって」
連続でボケ通した唯とムギにいちいち突っ込んでいた律も、ぼりぼりと頭をかくとぼそりと言い添えた。
「私も……やれるなら、やってみたい……かな」
あの時、ああであればという後悔はその後の人生につきまとってくる。大なり小なり、どんな問題でも挽回できるチャンスがあるならばそこにしがみつきたいのが人間というものである。
「……Ｆｉｎｅ」
全員の意志が固まりつつあるのを見て、夏音が怖いほどに張り詰めた声をその場に落とした。
「俺はね……実は今回のこと、無かったことにしようかとも思ったんだ」
その口からなされた告白に一同の顔が驚きに固まった。
「悩んで、悩んで……放課後まで悩んでこれを持ってきた。やっぱりみんなに決めてもらわないとだめだって」
封筒に目を落とす。少しだけ皺が寄った開封済みの茶封筒。
「みんなが出たいっていうなら、一つだけ俺の言葉を頭に入れて欲しいんだ。ううん、入れるだけじゃないや。叩き込んで釘でも打っ

て留めておいて欲しい」
　数拍置いてふっと息を吸った夏音は一人一人の顔を見回して口を開いた。
「今度、やるからには本気で。半端な覚悟で挑まないで欲しい。緊張したからなんて言い訳であんな演奏しかできないバンドとしてあのステージに上がることは許されない。優勝とかはこの際、どうでもいいんだ。ただ中途半端だけは許さない」
　今までで一番厳しい口調にその場にいた者はぐっと腹に力を込め直した。そうしなければ夏音の体から滲み出る迫力に負けそうになる。
「俺は……あんな……な想いはしたくない」
　俯いた夏音が搾り出すように出した言葉は一部が彼女達の耳に入らずに消えていった。それから彼はぱっと顔を上げてから笑顔を見せた。
「さっき。聴いてたのは本当に素敵な曲だっただろ？」
「え？　あ、ああトリビュート……あんな曲だっけって感動した」
「そうだね。あんな素敵な曲なのに……あのステージの上では可哀想なことをした」
　心の底から悲しそうに額に手をあてた夏音にその場の視線が吸い寄せられる。磨き抜かれた大理石のような白い肌に、今にも雫が伝いそうな気がした。
「か、夏音くん？」
「なーに唯？」
　慌てて夏音の顔を覗き込んだ唯はきょとんとした表情で見詰められてほっとした。
「あ、いや……泣いてるのかと思って」
　唯の言葉にぱちぱちと目を瞬かせる夏音。
「変な唯だな。とにかく本選に出場すると決めた以上、緊張なんかに負けないほどの特訓を行います！」
　びしりと言い放った夏音の発言に少女達の背筋にぞわりと冷たい

ものが走った。
「妥協はないです。本番になったらあのフロアを埋め尽くすほどの人が入るんだからね。プレッシャーも比べものにならないし、途中で投げ出すこともできない。ひょっとしてブーイングが来るかもしれない。客がしらけきってしまったりするかも。現実は甘くないし、プレイヤーにとっては世界で一番残酷な体験を味わうかも。それでも最高の演奏をやり抜ける覚悟は……その時の自分を裏切らない覚悟はある？」
鋭い言葉が重くそれぞれの胸に突き刺さる。
あのステージで彼女達が肌に感じた恐怖が蘇りそうになる。言葉にしてみれば何とも他愛無い「緊張」という言葉。実際に味わったソレは未だかつてないほど巨大な壁として立ち塞がった。
立花夏音はもう負けを許さないと言っているのだ。
当日になって再び同じような惨状を招いてしまったら、今ある軽音部という形すら別のものになってしまいそうな気配がするのだ。
容易に頷くのを躊躇ってしまうだけの理由がそこにある。
もともと任意で参加するイベント。さらに一度は落ちた。
これから失うかもしれないものを賭けてまで決めねばならない覚悟というのはいったいどんなものだというのか。
のるかそるかの世界とは無縁な少女達は、ここにきて自分達が重大な決断を迫られていることに動揺していた。
前を見れば、自分達を真っ直ぐに見詰める瞳。青く燃えるサファイアの色は揺るがずにそこにある。彼は、いつだって頼もしくそこにあったのだ。
「やります」
厳かな響きで肯定をしたのはムギだった。
彼女はいつも軽音部の中では重大な決め事に自ら進んで関わることはない。好奇心が旺盛なので、アレをやりたいコレをやりたいという願望は真っ先に手を挙げて口にするが、何らかの事柄を決議する時は律や夏音、澪といった者が出した意見や決断に従うように動

いているのだ。
そのように積極的に場を引っ張っていくよりは大人しく後に従ってきた彼女が、この場で何より大事な意思を表した。
太い眉をくっと凛々しく引き締めて夏音を見据える。
「私、たぶんこの機会を諦めちゃったら次はないと思うの。高校生になってからやっぱり私は普通の人よりやったことがないことばかりで、世の中には私の知らないことがたくさんあって。もっと早くやっておけばよかった。なんてもったいなかったんだろうって気付かされる。だからこれを逃したら二度と経験できないなら、未来で後悔したくない」
色々と言い表せない感情が言葉の端から伝わる。お嬢様として何不自由ない生活の代わりにどこか一般庶民の感覚と隔たりがあった彼女が、何をするでも初めての体験に頬をほころばせていた姿が思い浮かぶ。
「たしかに……こんな機会、普通に生きてたらないもんな」
「バンドだってやらない人の方が圧倒的に多いし」
律と澪が共感するように頷くと、長年の付き合いのたまものなのか、声を揃えた「私も！」と答えた。
「唯は？」
残る一人に静かに問いかけた夏音と目を合わせて唯はぱちっと一つ瞬きをする。
「私もやりまっす！」
その一言に緊張していた空気がほっと柔らかくなった。全員の覚悟を受け取った夏音は、じっと身動がずに彼女達を見詰めていたが、やがてゆるやかに目を細めた。
「じゃ、やろっか」
その秀麗な顔にできた笑い皺を見た一同はきっと自分達なら上手くいくと思った。

出場を決意した軽音部はその日を境に再び爆メロに向けて猛練習を再開した。

火室へあるだけの石炭をくべて前へ前へとひた走る蒸気機関車のように彼女達はひらすら練習へ熱を入れていった。泣き言を言わずに練習についてくる彼女達に、夏音もますます厳しい声を加えていく。

それぞれがより高いレベルへと意識を向け、夏音の叱咤にも全力で応えようとする中、本番の日が間近に迫ってきていた。

学校ではいつの間にか卒業式が終わり、学校もあと二週間で春休みへと突入するが、そんなことさえ軽音部には瑣末事でしかなかった。

その目に映るのは自分達が上るステージのみ。

しかし熱くなりすぎた動力炉は一度も冷めることなく、彼女達を乗せた記者は暴走寸前だった。

「何回同じことやるの。違うって言ってるじゃん」

「だから何が違うんだよ!?」

「そこはもっと拍を伸ばすように叩いてくれないと台無しなんだよ!」

「そんなんずっと前から一生懸命やっとるわ！　これが私の精一杯だ！」

「へぇ……それで精一杯か」

「そうだよ。限界。努力云々とかじゃなくて私の技術の限界！　情けないし、申し訳ないけどね！　お前の話す次元のニュアンスなんてまだ無理だよ……」

「俺は律の限界なんて知らないよ。曲の話をしてるんだよ。曲が可哀想だと思わないのってこと」

辛辣な口調で続く叱責に律がついに言葉を失った。

学校が午前授業ばかりになってから、午後はひたすら練習だった。決まったセットリストを全て通してから一曲ずつじっくり確認していく。

本選に出ることを決めてから、厳しさを増した夏音の言葉はナイフのような鋭さで全員に平等に傷を作った。

平等、というのは少し違うかもしれなかった。わずかだが、他より厳しく怒鳴られるのが律のドラムだった。他より一割増でダメ出しされる律は傍目にどんどん青ざめていった。

猛練習を開始した当初の彼女なら青くなるより顔を真っ赤にさせて夏音に対抗していたはずだった。怒りや悔しさをバネに何とかしてやろうという気概でこの口の減らない男の及第点を得てやる、という意志があった。

だが、ここ二日間の練習で彼女の気丈さは失われつつあった。つい焦燥にかられて単純なミスを連発している彼女はどつぼにはまっていく。

下らない間違いを犯す自分にも腹が立つ、といった様子の彼女はついには8ビートの刻みすら不安定になった。まるで見えない何かに怯えるように、彼女は自由を失っていった。

誰よりも間近に迫った大舞台を前に意気込み、そして誰よりも精神的に自分を追い詰めていたのは律であった。

「か、夏音くん！　休憩！　休憩しましょう？」

実は人一倍物事を悔やみ、責任を感じてしまう彼女が気丈さを削いでいく姿は他の者たちの心配の種であった。

二人のやり取りを見ていられなかったムギが慌てて口を挟むが、すっと自分へと向けられた青い瞳に射竦められてしまった。いつもは夏の青空のような爽やかな色の瞳は触れたらやけどしそうなくらいに冷たい氷のようだった。

「休憩はしない」

ムギから視線を外した夏音は短く言った。

「休憩で何とかなるとは思えない」

しゅん、とうなだれるムギに気付かずに夏音は律の瞳を優しくのぞき込んだ。状況が違えば、見惚れるような柔和な瞳だった。

「ねえ律。だいぶ前に律は俺が今求めてるようなドラムを叩いたことがあるんだ。別に息が続かないくらい速く叩けって言ってるんじゃないよ。表現をして欲しいんだ。曲を理解して、呼吸するくらい当たり前にやって欲しいだけなんだ。感覚で身につけてくれないと本番で出来ないよ？」

貼り付けたような笑顔で淡々と話す様は事務的で突き放したような印象を与える。それに対して律は夏音の瞳をじっと見詰めていた。彼女の瞳には闘志の炎も無ければ、悔恨の悲しみも宿っていない。ただ、そこには哀れみがあった。

その瞳は目の前に映る美貌の青年を哀れんでいた。夏音は自分に向けられるその感情に驚愕してたじろいだ。思わず逃げるように足を退いて、呆然と律の瞳から逃れられなかった。

「曲を理解しろ……って？」

居然としていた律がおもむろに口を開いた。彼女が発した短い声は慎み深く、厳かに響く。

「曲を理解するってさ」

「そうだよ。理解しなければそれを表すことはできないだろう？」

律から滲み出る迫力に気圧された夏音だったが、腹に力を入れて答えた。自分の主張に間違いはない、だからそれを彼女に伝える。

「私らがやってんのってクラシックかなんか？」

律は恨みを孕んだ眼差しで夏音を睨み付けた。

「クラシックとは違う。確かにクラシックの理念は他の音楽にも通じるよ。ていうか律、クラシックの難しさを分かってないでしょ」

「そんなん知らないよ。私がやりたいのはバンドだもん」

「そうだよ。バンドだ。けど、バンドだって同じだよ。ガムシャラに弾けばいいってもんじゃない。戦争や社会に怒りを表現するアナーキストが集まるバンドがニマニマ笑いながら今日のセサミストリートが楽しみだなんて思って演奏するか？　自分達の音楽に向き合

ってないと何も伝えられないよ」
「いちいち変な例え持ってこなくてもわかるよ！　伝わるよ！　でも私がやりたいのはロックだってこと！　もっと単純明快で！　小難しいことなんか考えなくても爆発できる音楽！」
　本音でぶつかってくる律に夏音は冷静に切り返す。
「頭で考えろって意味じゃない。表現者は頭で難しいこと考えないよ。感性の問題だ」
「なら私の感性が合わないってことだろ！」
「そんな風に言ってない！　律は素晴らしい感性を持っているだろ！？　それをここで発揮してもらいたいんだよ！　いいか？　たしかに小難しいことなんて考える必要はない！　ただお互いを感じてればこんな風にテンポを崩すドラムになんかならないんだ！　ノッてる時の律はすごく良いドラム叩くのにもったいないよ」
「そんな気休め言われても嬉しくない。どうせ私は下手だからな。自分でもわかってるよ。お前は死ぬほど上手いドラマーとやってきたんだろうし、私となんかじゃ比べようもないだろ？　それなのに口だけで褒めたりするなよ」
「口だけじゃない！　心の底から良いと思う時があるよ！　だから俺はいつだってその律が見たいんだよ！」
「お前のためにか？」
「なんだって？」
「お前の音楽のために？　誰の表現？　私達は何を表現しようとしてるんだ？　いつから自分が表現者なんて高尚な者になったのか私は知らないよ。要するにお前は私が下手だから！　こないだみたいに惨めな思いをしたくないんだろ！　自分に恥さえかかさなければいいんだろ！？」
「そんなことは言ってない！！」
　激しくなっていく意見の激突に口を挟める者はいなかった。ただ事態を目撃しているだけしかできなかった他の者は次に律が発した言葉で何かが壊れていくような音を耳にした。

「分かるんだよ！　演奏中にお前が思ってること！　すっごく苛々してることも。自分が思ったようにやってくれない素人にうんざりしてる瞬間も！　自分が悪いんだって納得するのにも限界があるんだよ！」

律が投げ飛ばしたスティックが誰もいない床に落ちた。木と木がぶつかり合う甲高い音がしてから、夏音が息を呑む音が空虚に響いた。

夕陽が射し込む部室は普段なら温かい色に満ちているはずなのに、そこから色を取っぱらってしまったように虚ろだった。

震えていたムギがついに嗚咽を漏らし始めた時、誰もが言葉をどこかに忘れていたように黙っていた。唯はおろおろと周りの顔を窺って何と声をかけようかと迷い、澪は歯を食いしばって表しようもない感情を持てあましていた。

一方、スティックを放り投げた律は自分が放ってしまった発言にはっとなった。蒼白になった顔を機械のように動かし、前を見上げた。見てすぐに後悔した。

夏音は限界まで目を丸くして固まっていた。まるで信じられないものを見詰めるように愕然としていて、他の感情はひっこんでしまったように、驚きしか表れていない。

言葉が部室から失われてから随分時が経ったように思われた。実際にはわずか数秒の事でも、彼女達には一生のように感じられた。

驚きの表情で固まっていた夏音の時間もまた流れ出した。

まん丸になっていた目が徐々に細くなり、長い睫毛が影を落とす。それから微笑を浮かべたように顔を歪めて、平静な口調で言った。

「そう、か……そう……そうだよね」

「あ、」

律が声を出そうとしたところで、喉がつっかかった。声が震え出さないように腹に力を込めて彼女は再び口を開いた。

「……ご、ごめん……つい熱くなりすぎちゃったな。いや、私のせいなのは確かなんだ……前に恥かかせちゃったのもホントのことだし……て、ていうかこんなこと言うつもりじゃ……」

彼女はいつも自分がしている軽妙な態度を取り戻そうとしたが、失敗した。にかっと歯を見せて笑おうにも、ぎこちなく頬が引き攣るだけで笑顔には程遠い。

「て、ていうかできてねー癖に何言ってんだって話だよな。なんか八つ当たりみたいで私ダサくね？　はは……ナーバスになってんのかな。ほ、ほら私ってば力だけはあり余ってるから細かいニュアンスとか苦手だからさー。夏音の言う通り何とかしなくちゃって感じっつーか」

律はこの場に穿ってしまった穴を何とかしようとしている。そう感じ取った他の三人が硬直を解いて一斉にフォローを入れるために動いた。

「そうだぞ律ー。お前は無駄に力が強いから音が大きくなるんだ」

「そ、そうかー？　いやーハハハ。ちょっと昼に食い過ぎたせいかも！」

「り、りっちゃん今日のお弁当三段だったんでしょー？　逆に私は力入らなくなるからそれくらいにしようかなー」

「お前はこれ以上、憂ちゃんの負担を増やすのかよ！」

ふと流れ出したいつもの軽音部の空気……にはならなかった。どう考えても律の発言は取り繕う事のできるものではなかった。彼女が開けた穴は些か大きすぎたのだ。

「ごめん」

耳朶を心地よく震わす鈴のような声が会話を打ち切る。皆、動きを止めて夏音を見た。

「今日はこれで終わりにしよう」

「夏音くん！　私まだできるよ？　私が一番下手なんだから練習しないとー」

唯が明るい調子で夏音に近づく。と、その調子にシールドを足に

ひっかけて前のめりになった。夏音に近寄る流れで引っかかったものだから、唯は夏音に突っ込む形となる。つい振り上げた腕が宙をもがくように彷徨い、倒れゆく本体を何とかしようと動く。

動いた先に夏音の頭があった。

「へぶっ!?」

思い切り夏音の頭にチョップをかました唯はすんなりと足をついてバランスを取った。自分の手刀が目の前の男の子にめり込んだ姿勢のまま、唯は思った。私ってやつは本当にもう……。

「か、夏音……？」

あまりの光景に顔を引き攣らせた澪がそっと夏音に声をかけた。すると、彼はすすっと軽やかに横に移動すると今まで頭があった場所に唯のチョップが取り残された。

そのまま頭をさすりながら夏音はギターをしまい始める。誰も声をかける事のないまま、さっさとケースにギターを収納した夏音はベンチに置いてあった学生鞄をひょいと肩にかけると「それじゃ、また」と部室を出て行った。

膝をがっくりと床についた唯が自らの手を見詰めて「このバカモンがぁ……」と呟きながらうるうると涙を溜める中、重苦しい沈黙がいつまでも部室に佇んでいた。

第十八話（後）（後書き）

※盛大に投稿が遅くなって申し訳ございません。私生活を言い訳にしたくないですが、全くパソコンに触れませんでした。作品自体も、何というか先は見えているはずなのに書き直しまくったり……とりあえず、ここら辺ですごく重い展開になってしまいました。

レコーディングの時にもこんな風な諍いがありましたが、あれは序の口でした。

律が爆発してしまうシーンに至るまでの描写が少し甘くなったかもしれません。

次のお話もすごく長いので、お付き合いしていただければ幸いです。

第十九話（挿絵あり）

陽はまだ高くない。既に冬と呼べるほどの寒さは残っていないが、まだ春の訪れを感じることはできない。

七海はいつだって春がやってくる世界のざわめきを逃すことはない。人によって個人差もあろうが、季節が移ろう瞬間ほど手に取るようにわかるものはないと七海は思っている。

世界が明確に違うのだ。

昼間に日光をたっぷりと浴びた感想した土の香が鼻をくすぐると、叩きつけるように強く吹く風が髪を舞い上がらせる。路傍に草木が茂りだし、花の彩りが目に入る。耳は、冬を越えたばかりの少しだけ湿気を纏った空気を震わす大通りの車の音を捉える。

そして五感の全てがあらゆる生命が芽生える気配を捉えて「また一年が始まるんだ」と胸が高鳴る。

七海はその瞬間に訪れる妙にくすぐったい感覚が好きだった。こうして自分はまた一つ季節を超えて新たな季節を進んでいくのが嬉しかったりする。

冬には冬の良さがあるが、あの寒さを超えて嬉しくないはずがない。それでいて今になって冬が寒かったと思う感じも嫌いじゃない。

ああ春だった夏だった秋だった。そして冬だったなと思うのはいつだって冬が過ぎてから。当然のことだけど、おかしな矛盾。喉元過ぎれば何とやらというやつかもしれないが、真冬に真冬だと感じていた記憶はない。冬に外で遊んでいる時は冬だって事を本当は忘れているに違いない。冬だけど、その時に冬以外の寒さを思い出すことはないから。

難しい事を考えているようで、そうでもない。七海は、こういう風にぼーっとしながらとりとめない思考を楽しみながらのんびり歩くのが癖になってしまった。

何はともあれ、そんな他愛もない思考回路へフェードインしてしまったのはこの春でもなく冬でもない狭間の季節の夕空のせいだった。

生徒会の仕事を終えて学校を出たのが五時を過ぎたあたり。仕事、といっても仲間内で駄弁っていただけだが。

真新しいコンバースの靴を履いて校舎を出ると、まだ西の空が薄明るい光を引き摺っていることに意識がいった。少し前まで、五時になると真っ暗だったはずなのだ。

そういえば、いつの間にか冬の間ずっと手放すことのなかったPコートを着てこなかった。季節の移ろいに気付いていないようで、しっかりと対応している自分が何だか周到なような気もしたし、無意識に流されているだけのような気もした。

そんな風に考えているうちに、あんな哲学的な内容に頭を委ねるハメになる。どこかの純文学の主人公みたいに気取った感じは恥ずかしい。

モブキャラの自分には似合わないだろうから。

MP3から伸びるイヤホンは外の音をほとんど遮断している。七海は普段からあまり音楽を聴きながら歩いたりしないが、今日はそんな気分だった。

耳に流れてくるのはクラムボンの「残暑」。この曲を選んだのは全くの偶然だったが、詩の始まりの部分が先ほど七海が考えていた事に何となく一致していた気がした。

原田郁子の特徴的な声と一緒にずくずくと大通りを歩いていく。このヴォーカルをどう言い表すべきか七海はふさわしい言葉を持ち合わせていない。

ケモノと魔法という彼女のソロアルバムを聴いてから好きになった女性ヴォーカリストだ。激しいわけではないが、やはりどこかエモーショナルなヴォーカルはそっと優しく、眠れぬ夜に捉えられてしまった自分を殺してくれるような魅力にあふれていた。

同じクラスで軽音部に所属する秋山澪がクラムボン好きだと小耳

に挟んで、彼女とちらほら会話を交わすきっかけになったのもこのバンドだ。彼女はこのバンドのベーシストをリスペクトしているそうで、自分とは違った入り口や聴き方に思わず唸ったものだ。

七海の自宅は学校から徒歩で三十分ほどの住宅街にある。このご時世に二階建ての一軒家を購入できるくらいの両親を持ったことを幸運と思うものの、その家というのはびっくりするくらい何の変哲もない近代住宅の様相を呈している。一言で表すと、普通の家。

別に彼はそのことに不満を抱いたことはないし、むしろ自分の家以外を安住の地と思うには躊躇いがある。

それでも、学校から自宅に帰るのに必ず通らねばならない高級住宅街の一軒一軒を眺めていると悲しくなる。

複雑な悲しさだ。どう足掻いても、こんな家に新たに住み移ることのできない両親の限界とか、そんな豪邸に住む者達との間に存在する壁とかを考えた時に訪れる些細な感覚。

壁というほど露骨ではないにしろ、今にも手で触れられそうな薄い膜が自分と彼らを隔てているような気がするのだ。

それでもこの町並み自体は嫌いじゃなかった。高級住宅街と銘打っているが、古い家屋も転々と散在している。その微妙なバランスを保っている姿がどうしようもなく個性的に見えて気に入ってすらいる。

そういえば、と知り合いが数人、ここに住んでいることを思い出す。

（ブルジョワって何かねー）

そんなことを考えながら、大通りを大きく外れてしばらく歩くと、やや丘陵状になっている道にそれる。そこからは別世界。七海は三階建てとか巨大な門をぼーっと通り過ぎて、とある角を曲がる。この角を曲がると七海がほっとする風景が待っているのだ。

ただの公園だが、梅や桜の木がいくつも植えてあり、この時期だ

と早咲きの梅が咲き誇っている。近所の子供達の遊び場であり、休日の昼間は子供を遊びに連れてきた奥様達の井戸端会議が開かれている光景がよく見られる。

春には町内会の花見も行われ、ブルジョワジーの人々も近所のイベントなんてものを楽しむのだなぁと些細な共通点を見つけてはほっとしてしまう。

この土地は少し高い位置に存在していて、この町を一望とまではいかないが軽く見下ろせる。夜には遠くの市街地の夜景が見えるし、ちょうどこの時間だと夕陽が綺麗で何ともノスタルジックな気持ちに浸れるので七海のお気に入りだ。

中学生の時、ポケットに手をつっこみ暮れなずむ町並みを見下ろして黄昏れるというひとり青春ごっこをやったことがある。当時好きな女の子に目撃されて死にたくなった。

でも、今日は違った。そこにはいつもと違う光景が広がっていた。

この場所に訪れると、急に景色が開ける。高度的には周りの家と変わらないはずなのに、どこかこの土地だけぼっこりせり上がっている印象を受ける。七海は息を漏らして咲き誇る梅の花に目を奪われるはずだった……だったのに、別の物に視界を占拠されてしまった。

誰もいない公園の一点にぽつんと存在している芸術が。頭上に咲き誇る梅にも負けずに、誰もが目を奪われる鮮やかな一輪の花のようにその人は存在していた。

夕陽が溢れる中、公園のベンチに孤独に腰掛ける高校生の姿はドラマや漫画の世界だけの話だと思っていたが、絵になる人間だけは別なのかと微妙な気持ちにさせられた。

「……さて、どうしようかな」

七海は二つの選択肢の間で足踏みをする。今すぐUターンを決めて元来た道を戻るべきか、はたまた彼に近づいて話しかけるべきか。

ふと顔を上げればそこには絵画のような美しい光景があるが、七海としてはこんなの自分に対処できるものではないと思うのだ。第

六感的なものによって。

それ以前に、立花夏音がどうしてここにいるのだ。

＞ｉ２６６６６―３０２９＜

美貌の同級生が自分の通学路の中に立ち塞がることなど今までなかった。本人は腰掛けているが、七海の足を止めていることには違いはなかった。

七海は彼を嫌いなわけではない。ただ、会う度に何かとスキンシップが激しくて自分のペースがかき乱される。悪意はないだろうが、どうせ自分のことをからかっているのだろうと若干の苦手意識があるのだ。

（いや、別に嫌いじゃないんだけど。嫌いじゃ）

最近では教室で彼と二人で声を交わすだけでにやにやとした視線が飛ばされることがある。そういった周囲のからかいもあるし、それ以前に柔らかすぎるのだ。

彼に抱きつかれると、まずその細さにぎょっとするし続いてどこもかしこもふにっと柔らかい感触にどぎまぎしてしまう。あの柔らかさは七海の苦手分野だ。

とどめにふわりと感じる甘い匂い。こうあれこれ沸いてくる感情に煩悶としてしまうのだ。

あれは女子特有の匂いじゃなかったのかと世界一強く反発したい。女の子の異性を射止めるためのフェロモン的な何かじゃないのか。

実は男装しておりましたー、といつか言われるのではないかと七海は警戒を緩めない。むしろ、そう言われた方が納得できるから恐ろしい。

普段は底抜けに明るい彼が今や憂い顔で公園のベンチに佇んでいる。これを見て、やはり何かあったのだろうなと理解するのに苦労

はしなかった。
そして、彼が何かあるとすれば大抵は軽音部くらいしか想像できない。
彼を素通りする事もできたが、無意識のうちに七海の足は彼に向けて歩き出していた。じゃりじゃり、と公園の砂利を踏みしめて近づく。夕陽を背にした七海の長い影が彼の前に肉薄する。七海が近づいても、彼が顔を上げることはない。自分に近づく誰かに気が付いているのか、あるいは気付いていても相手をする気はないということか。
どこを見るともなく、心ここにあらずといった様子の彼を近くで眺めて七海ははっと息を呑んだ。この距離で見ると、改めてその細部が否応なく目に入る。
（本当に綺麗だな……）
フラジャイル。七海は現実に壊れそうな美しさを初めて目の当たりにした。その瞬間の美しさは今にもここに留まっていられないような危うさを秘めていて、手を伸ばせば逃れる蜃気楼を思わせる。
あまりに世界との境界線が曖昧で、ふと油断した時に今にもこの夕陽の中に溶けていってしまいそうな繊細さ。
「夏音……くん」
意を決したワケではない。あまりにも儚い彼を見ていて、放っておけるはずがなかった。彼はゆったりとした動作で顔をあげた。惚けたような表情で七海の姿を捉えた彼の瞳にふといつもの光が宿った。
「七海？」
長い睫毛をぱちぱちと瞬かせ、きょとんとした表情になる。
「どうしてここにいるの？」
七海は彼のいつもと変わらない声の調子にほっとした。立花夏音という存在にきちんとした輪郭が取り戻ったような気がした。
「ここ、僕の通学路なんだ」
「へー！　そうなんだ」

「君こそ、どうしたの。部活は終わったのかい？」
「部活は……今日はもうおしまい」
部活という言葉に触れた瞬間、眉を落として顔を逸らした夏音の反応を見て七海は確信した。
「部活で何かあったの？」
取り繕う事もない。七海はストレートに訊いてみた。
「……べつに」
絶対にべつに、じゃない。ぷいっ、とそっぽを向くという分かり易すぎる反応に七海は苦笑した。火を見るより明らか、というかこの男は壊滅的に隠し事に向いていない。
「ふーん。あんまり喧嘩する噂とか聞かないけどなー。軽音部はすごく仲良しだって評判だよ」
「そりゃあもう仲良しだよ。喧嘩なんて滅多にしないし……お菓子が絡んだ時とか、すごいけど」
それ完全に女子じゃん、と七海は呻いた。
「そういえば、君はこのあたりに住んでるの？」
「うん、そこの道のぼってすぐのとこ」
つまり、この高級住宅街の住人だということだ。今さら目の前の男のスペックが上がったところで、驚きはしない七海であった。ただ、何とも言えない悔しさがこみ上げそうになるだけだ。
「ん、どうしたの七海？」
「い、いや何でもないよ！　別に持てる者との彼我の距離を嘆いていただけで……」
「？？？　よくわからないけど」
「そんな事より！　喧嘩じゃないなら、何かトラブルかな？　何か困っているなら話してみるのもいいんじゃないかな。一応、お隣のよしみで」
「……ふーん。どうしよっかなー」
「あれ何か急に態度が偉そうになった気がするよ」
不敵な笑みを浮かべて七海を見下ろす夏音。見上げながら見下ろ

すという器用な真似をする。
「教えて欲しい？　そんなに教えて欲しいなら今すぐ何か面白いことやって」
「いきなり何様になったんだよ！？　しかもその無茶ぶり！」
七海にとって無茶ぶりは生徒会でこりごりである。
「ふふ、冗談だよ」
微笑を浮かべた夏音がべしべしと自分の横を叩いた。座れ、ということなのだろう。七海はそっけない態度を演出しながら彼の横に腰掛けた。少し距離を離して。
「……」
「……」
ずずっ。
隣の男はいきなり七海と彼にできた距離を詰めてきた。
「なっ！？」
わざわざ距離を空けたのに、何故近くなる。ふと漂ってきた甘い匂いに悲鳴をあげそうになった。
「ははははっ！　何でそんな遠くに座るの！」
「あ、あたり前だろっ！」
「何であたり前なの？」
「男としてのマナーだ！」
「ほう……それは守らないとね」
急に神妙な顔をした彼がざざっと元の位置に戻る。からかわれているのだと思うし、割と自覚的にやっている節が彼には見られる。
それと同時にどこまで本気なのか分からないところが厄介だ。七海は背中に変な汗がつたうのを感じながら、ふぅと息を漏らした。
「で、やっぱり軽音部かい？」
埒があかないので、率直に話を戻す。しばらく曖昧な笑みを浮かべていた夏音は足下の砂をざりざりといじりながら口を開いた。
「なんかね……嫌われちゃったかも」
「……君が？」

「うん」
「ど、どうして」
「たぶん俺がめちゃくちゃ言ったから。みんなを責め立てることばっかり言っちゃったから……それだけじゃない。自分では気付かないうちにみんなにひどい態度を取ってたのかもしれない」
その言葉だけを聞いたら彼が悪いようにも聞こえるが、七海は慎重に頭を働かせた。相談を受ける相手は早とちりをしてはいけない。まずは冷静に情報を集めることが大切なのだ。
「どういった事が起こって君がそうしたのか聞かせてくれる？　僕には理由もなしに君がそんなことをする人間には思えないよ」
「……俺が伝えたい事はたぶん伝わらないよ。だから、七海に話してもきっとわからないもの」
「でも話すだけ話してみるのはどうかな」
彼がほのかに拒絶を漂わせたことはすぐに理解できた。それでも七海は穏やかな態度を崩さずないまま、しっかりと食らいついた。
自分がこれから彼のために紡ぐだろう言葉が根本的な救いになるとは思えない。
七海は人並みに相談事を持ちかけられることが多いし、大抵の悩みには適当な答えを用意することができる。その自信がある。
だから、この時の七海は自分には彼の背負っているものを少しだけでも降ろしてやる役目があるのだと信じて疑わなかった。
「んー……七海はさ」
七海に向かい合うように座り直した夏音は真剣な表情で瞳をのぞきこんできた。絹糸のような髪がさらりと風にはためき、時折その瞳を隠すがそれでも揺るぎない　眼圧は七海を緊張の谷へ突き落とす。
「そこだと自分ではいられない場所に、ずっといたいと思う？」
正直な反応として、七海はこの質問に面食らってしまった。
字面を追うと、思春期の少年少女らしい茫漠な悩みのようである。膨張しすぎた自己意識が苛ませる現状否定。しかし、七海はどれも

が違うと確信した。
彼はそんな益体のない自己形成の通過儀礼に悩むような人には思えない。彼がそう悩んでいるのならば、真に彼を追い立てている問題なのだろう。
七海は慎重に言葉を紡いだ。
「そこにいると、自分じゃなくなるの？」
「どうだろう。そうとも限らないんだろうけど、そうとも言えるかな。でも必要を満たさないといけないのに、それが得られないなら……どうする？」
「……なるほどね」
全然、まったくもって、これっぽっちも「なるほど」じゃなかったが、七海はとりあえず彼の言葉を受け取り、理解して、吟味するようなフリをした。こういう場合は自らの思考を探り、自身の哲学から搾り出されるような答えを出すべきなのだろう。
だが、七海はそれをできない。そんな問題を意識したことなんてないからだ。
それらしい悩みを主題にした物語はいくつもある。その登場人物達が得た答えをこの場所で出すことは簡単だ。けれども、それは七海の答えにならない。
例え気の利いた言葉を与えることができなくとも、借り物の言葉で誤魔化すべきではない。
それが狭まった思考の中で僅かに残されたプライドだった。
「その……」
まるで纏まっていない思考の端っこを捕まえながらかろうじて七海は口を開いた。少し声がかすれてしまい、咳払いをする。
「その場所で得られるものじゃ、だめなのかい？」
「それが難しいー……んだよー」
少し揺れた青い瞳を隠すように目を閉じた夏音が何とも言えない笑みを浮かべた。
「いらないものが、一つもないから」

再び開かれた瞳が七海を映す。背後から風が強く吹き、七海の髪を逆立てる。それでもしっかりと開いた瞳が閉じることはなかった。

自分を、みている。

七海は彼の瞳に映る自分の顔がたいそう間抜けになっているだろうと思った。吸い込まれそうになる青は濃い朱色と混じり、世界を収めている。その中に、自分がいる。

いらないものじゃない、自分がそこにいるのだろうかと思った。

「それは大切？」

「うん、とってもね」

「たぶんその大切なものにとっても、君は大切だと思うよ」

言葉が滑らかに口から出ていった。七海は言ってしまってから、少しだけ恥ずかしくなった。柄にもないくさい台詞だ。不思議と後悔はなかった。自分の言葉を受け取ってくれた夏音が嬉しそうに笑った顔を見ていると、どうでもよくなった。

「へへ、アリガト」

すると彼は「さて」とベンチから立ち上がった。夕陽に照らされた顔を何故か隠すように大げさに振り向いて時計を見た。

「アァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！」

「へ？」

時が止まったかと思った。それくらいの大絶叫。終末を目にした予言者でもこんな叫びはあげまい。

「やってもうたーーっ！！　もう始まるじゃん！　予約してないのに！」

「な、何がっ！？　どうして？　どうしたの？」

思わず七海も立ち上がり、焦る。何が世界に起こったというのか。モブキャラである自分が主役級のくさい台詞を吐いたことが原因だったら土下座も辞さない。世界に対して。

「って……予約？」

「始まるんだよっ！　魔法少女★羅王が！」

「何そのいかめしいタイトル！？」
「こうしちゃいられないっ！　帰るっ！　じゃーね！」
少し前まであった空気の余韻は欠片も残さずに夏音は七海の視界から消えた。恐ろしい速さだった。立つ鳥後を濁さず。
「ンだよそりゃーよーーーーーっ！！！」
七海は暮れなずむ公園の中心で高々に叫んだ。
あ、これ青春っぽいかもと心の隅で思ったことは内緒である。

教員五年目は新米をようやく抜け出せたくらいの時期……だと思っていた。公務員は定時であがれる等という都市伝説を信じていたのは遙か昔のことだった。
こと教師という職業だと、非常に不安定な勤務時間になるのは致し方ない。とはいえ、部活動の顧問を担っている教員はそれこそ生徒達が下校するまで残っている（中にはすぐに帰ってしまう者もいる）ので、七時をまわることなどよくある話だ。
さわ子は現在、二つの部活動の顧問を掛け持ちしていたので殊更に責任も二倍だ。
はっきり言って「つれー」と零したい。
いや、叫びたい。
この職員室のど真ん中で「働かせすぎだろーよ！」と思いのたけを高らかにぶちまけられたらどれだけ爽快なことだろうか。
現実には、ムリ。二十代半ばを過ぎても新米扱いされる山中さわ子は、公務員にもかかわらずひたすらワーカーホリックの道を突き進んでいる。
下の人員が入ってこないからだ。桜高は今年も新卒採用はなかった。去年も、一昨年も。転勤で出入りする者はいても、大学出のきらっきらした若手が来ないものだから、いつまで経っても底辺にい

るハメになる。
いまだ居座る定年ギリギリ世代が恨めしいばかりだ。自分の学生時代の教師など、とっくに隠居していてもおかしくないというのに。
さわ子が顧問を担っている二つの部活の一つは吹奏楽部という。全員が本当に高校生かというくらいにしっかりしているので、基本的に放置していてもかまわない素晴らしい生徒達だ。
さわ子は彼女達に対しては少しだけ申し訳ない気分になってしまう。
音楽教師として生計を立てているだけでなく、もともと音楽知識は人並み以上にあったさわ子であったが、音大を出ているわけではない。ブラバンを率いる指導者として全国を目指すなどという役割は荷が重い。
さわ子が卒業したのは都内にある、かろうじてマンモスではない教育大。高校三年に意中の人がそこへ行くことを知り、必死に勉強した。
もともとクラシックギターやピアノをやっていたのも手伝って、音楽課程に合格することができた。わりとギリギリで。バッハの平均律を課題に出されるとは思いもしなかったから。
だが、教育大の音楽課程といっても馬鹿にできない。音大に比べたら個人のレッスン回数も少ないし、音楽に触れる濃さも違う。
音楽家ではなく音楽教師を輩出するための場所なので、国家試験の勉強や教育課程に時間を割かれることがしばしばだ。
とはいえ、さわ子の人生にとって非常に重要な時間を過ごしたことは間違いない。詳しくは割愛するが、少なくとも音楽教師としてこうして母校に凱旋できるくらいには成長した訳だ。
ハ音記号を使いこなすまではいかないが、軽音部時代とソルフェージュ能力を比べたら雲泥の差だ。
そんな彼女でも吹奏楽を指導する力量はない。というより、必要がない。定期的に外部の人間を呼んで指導を任せているので、あくまで彼女はお目付役としての任をこなすだけであった。

部活終了前に顧問として反省会に顔を出すだけ。問題ない。ただ、こんなんでスマンと心で謝るだけだ。

問題ありなのは、もう一方の部活動。

軽音楽部。楽が抜けて呼ばれる事が多いからほんの少しだけ略して軽音部。その名の通り音楽をやる部活のはずだが、桜高の軽音部はその活動の主旨以外の方面に力が入っている。

活動内容のメインがお茶会とはこれいかに。教師としては捨て置けない問題。ゆゆしき問題にちがいない。

そうはいっても。彼女達との関わり合いは十も年下の若輩どもに弱みを握られ、顧問にさせられたという苦々しいスタートだったが、さわ子は軽音部が嫌いではない。というより、嫌えるはずもない。好き嫌い以前に、軽音部には並々ならぬ思いがあるのだ。

なんと言ってもさわ子自身が桜高軽音部ＯＢであった。

世間的には（自主的に）秘めた暗黒の時代であるが、自分の青春をかけたかけがえのない居場所だった。さわ子を含めた五人の仲間と共に真剣に音楽に打ち込んだ日々は今も近い場所にある。

さわ子の時代は、まさに音楽に命をかけているような勢いでバリバリ演奏をしていた。当時のＶ系の流れは、どちらかというと体育会系ノリだった。

さわ子の場合はＶ系というか、メタルだったが。メタルにＶ系の装いを取り入れていったバンドは幾らでもいる。ライブに行けば、ことごとく体育会系だった。懐かしき音楽シーン。

とりあえず部室内のギターバトルは当たり前。魂の解放によって、演奏の度に毎日号泣することもあった。

それだけ真剣だったのだ。過激さの裏に甘酸っぱい青春の光もあった。さわ子達も時には部活を休んで遊びにいくこともあったが、それも限度があるというもの。

現在はどうだろう。後輩達は何かあれば、すぐティータイム。ふわふわ、ぽわぽわとゆるい空間に浸って日々を過ごしている。

世代の差、だろうかとさわ子はふと考える。

今時の若い娘っ子どもはこういうのが主流なのかと目を疑ってしまう。やっている音楽もよく分からないものが増えたし、いわゆる「ゆるふわ」とかが時代の最前線なのかもしれない。

例えば、ゆるふわパーマ。かけてみっか、と二十代半ばの音楽教師はキラリと目を光らせた。

「ま、ないわね」

断念。

しかし彼女達のスタンスには問題があるとはいえ、否定できないナニカがあった。そのナニカははっきりと形にできないが、悪いものではない。だから頭から否定するのではなく、さわ子も彼女達のお茶会に参加してみることにした。

すると、どうだろう。

ミイラ取りがミイラになってしまった。

日々の教師生活。自らが創りあげてしまった清楚な美人教師という仮面を保つためにすり減らす気力。緊張感に苛まれて知らずうちに肩肘貼っていた自分を癒してくれる最高のリラクゼーション空間にさわ子はどうしようもなくやられてしまった。

今では、軽音部のティータイムがないと生きていけないと断言できる。女の子も皆、可愛いので着飾りたい願望もすくすく膨らんでいる。

一人だけ男子生徒がいるが、その生徒の場合は男子生徒として数えるのに抵抗がある。

あんな可愛らしい男が男のはずがない。という名目のもと、フリッフリのゴスロリの衣装を着せたことがある。それ以来、さわ子はすっかり警戒されてしまったようだが、教師といえど強すぎる煩悩にあらがいきれない時もあるのだ。

許せ、と言っても歯牙にもかけられなかった。次に期待しよう。

というより、もう大好きだった。軽音部。

さわ子が桜高に赴任することになり、いざ母校に帰ってみたら、

思い出の部活は誰にも引き継がれていなかった。一人の部員もいない、廃部寸前の状態の軽音部を見た時は胸をしめつけるような気分だった。

自分が何よりも深く触れた物の形が失われようとしているのを黙って見過ごすのは酷だった。初めはそれとなく生徒に関心を与えるような話題を会話の中に差し挟んだりしていたが、それも効果はなかった。

興味を持つ生徒がいても、五人いなければ成り立たない部活を再起させるにはあと僅かといったところで人が足りなかったり。

部活紹介冊子には何年も前に書かれたきりのページが重版されているだけ。そろそろ、それも無くすべきかという話も出たことがある。もちろん、強く反対したさわ子によってその場は治まった。

やがて諦観が心を覆い始めた。もしかしたら高校生がバンドをやるような時代ではないのかもしれない、と。

バンドの時代ではないのかもしれない。高校生がバンドに興味を持つような時代は終わり、軽音部という看板はいつの頃からかとっくに命が尽きていたのかもしれない。

そんな風に考え、それならばいつまでも亡骸を晒すより、土に還ってくれた方がいい。軽音部に感謝を捧げ、一生その思いを忘れないことが供養になるやもしれない。

後ろ向きな考えに落ち着こうとする時期が訪れようとしていた。

部のことはもう考えまい。自分の中に一つの決着をつけようとしていた中、毎年のように現れる新入生が職員室を訪れた。

『軽音部の顧問ってどなたですかー？』

その瞬間のさわ子の喜びはここ数年来感じたことがないものだった。たった二人だけで部活を始めようとする生徒に「五人いなければいけない」と伝えるのは辛かった。それでもＯＢとして、軽音部を愛する者の一人として何より強い気持ちで「頑張ってね。軽音部

！」とエールを送る。軽音部に入りたいと思った瞬間から、もう軽音部なのだと。

軽音部は復活した。彼女達は五人そろって軽音部になった。

と熱い想いを滾らせていたさわ子だったが、いざ廃部の危機がなくなったと分かれば、手のひらを返したように彼女達との距離を置いた。

何しろこれを機にあのブラックさわ子時代が公になってしまうという事態は避けねばならないからだ。軽音部復活と同時にそのリスクは高まることも忘れてはいなかった。ズルイ大人のリスクヘッジ。極力関わらないように。陰ながら軽音部を応援することに決め、彼女達の行く末を遠くから見詰めていこうとした結果、だいぶ放置した軽音部が大きく様変わりしていくのに気付かなかったのだ。

久しぶりに部室に踏み入れてみればそこらに溢れる高級機材。バンド時代、ライブハウスでも触ったことのないようなアンプ。

いったいこの子たちは何なのだ、と目眩を覚えた瞬間であった。

その後、一つの波乱を経てさわ子が晴れて軽音部の顧問になったことによってその原因を知ることになった。

その者の名は立花夏音。それまでもさわ子は彼のことをよく知らなかった。一人の生徒として、一人の生徒としての彼は帰国子女で成績は古典と体育をのぞいて優秀。とりわけ音楽の授業ではさわ子を脅かすくらいの知識を披露することもあり、軽音部の実質上のリーダーとして皆をひっぱっていることくらい。

二学期の終わり頃。愛しの恋人と過ごす予定のクリスマス直前の浮ついた気持ちを持て余していた時期だった。そんな冬休み直前の桜高にとある客人が訪れた。目が眩みそうなブロンドヘアーの外人美女と流行りのチョイ悪風の男性。

さわ子は目にしていないが、黒人の青年もいたそうだ。彼らが職員室を訪れた時、ぶったまげた。

アルヴィ・マクレーン。クレイジー・ジョー。

音楽をある程度嚙っている人で知らない者はいないプロのミュージシャンがひょっこり目の前に現れた。

初めこそ気が付かなかったが、すぐに脳内メモリーから引っ張られてきた人物に相違なく、そんな彼らがちょうど入り口付近に座っていた英語教師にフランクな口調で話しかけた一言に魂が離脱しかけた。

その第一声が。

「カノンがいつもお世話になっておりまーす」

とんでもない。

誰がどのカノンをお世話したというのか。さわ子は直球ど真ん中で思い当たる生徒の顔が脳裏によぎって、しばし呆然とした。

それに対応した英語教師は突然現れた異様な二人組に気圧された様子だったが、しばらくして「ああ、立花くんの……」と気付いた様子で歓談を始めた。

知らないということはある意味で幸せなことだとさわ子は息を呑んでそれを見守っていたのだが。

次にどこから聞きつけたのか、立花夫妻の訪問を知った校長が校長室からすっ飛んできた。

その勢いに職員室中の教師が目をまん丸にして吃驚したことは言うまでもない。

あの校長が息せききって校長室を飛び出してくるなんて。ＰＴＡの会長が来た時も直前まで芋羊羹を頬張っていたくらいの男である。これはよほどの異常事態だと誰もが息を呑んで見守った。

職員室中の視線が集まる中、校長の一言目の台詞が「ニューアルバム拝聴しました！」だったのは笑えない。

聞くところによると、校長はアルヴィ・マクレーンの大のファン。いい年こいて、と思わなくもないがそこは武士の情けでスルー。

とにかく彼らは立花夏音の両親であり、彼が入学する前に校長に特別な挨拶をしていたのだという。以前に在籍していた学校で問題

があり、くれぐれも注意を促す目的だったらしい。
寝耳に水だった。しかし、この話を聞いた時にまずひっかかる問題は幾つもあった。とりあえず二人のプロミュージシャンの息子として生まれた彼が平凡な人間である筈がなかったのだと納得。
続いての問題は、カノン・マクレーンに関する情報がさわ子の耳に入るのが初めてではないということだ。
そこまで古くない記憶を隅から隅まで探り出す。
『あの夫婦、たしか息子もプロなんだよねー』
これである。かつて苦楽を共にしたバンド仲間の一人がそんなことを言っていたシーンが畳みかけるように脳裏にババババッと閃いた。飲み会の席などでよく音楽の話になるが、その中であがった話題だった気がする。
そう。プロの子はプロ。
カノン・マクレーンという名でアメリカ全土ならず世界に名を馳せているベーシストである。
その場で意識を手放しそうになったさわ子であった。知り合いにメジャーデビューした者達がいないわけではないが、まさか教え子にプロミュージシャンが出現するとは思いもよらなかったのだ。
いつかそういう生徒が現れる可能性はあったが、それはさわ子がその子達を見送ってからの話だと捉えていた。
既に、プロとは。
かつてさわ子が昇ることのなかった高みにいる者が幾つも年下の現役バリバリの生徒だとは。
だが、その場でさわ子を占めた感情は嫉妬ではなかった。ひたすら疑問だったのだ。
何故、彼が日本で普通の高校生をやっているのか。さわ子は事態が収束するのを見計らって、彼にそっと問いかけることになった。
まず彼は全てを隠していたことを謝罪した。自分の立場を明らかにすることで余計な混乱を招くことになるだろうと懸念したとのことだった。

さわ子としては謝罪の言葉が欲しかったわけでもないし、そもそも謝られる筋合いもない。

彼女は教師としての立場からではなく、山中さわ子という一個人による純粋な好奇心から問うているのだと正直に話した。彼はその疑問に対する答えを話さなくても良いし、さわ子が知る義務などないのだから。

彼は全てを話してくれた。包み隠さず、時にはジョークをまじえてその年の子供にとっては凄惨といってもおかしくない過去を。

彼の抱えた懊悩を、さわ子は唇を噛みしめながら最後まで聞いた。今さらさわ子にできることはなかったが、それでも彼を襲ったという男は想像の中で何度もボコボコにした。何度も。彼をいじめた高校生達には教育的指導を。

すべて妄想の中で、だが。

全てを聞き終わり、さわ子は彼をそっと抱きしめようとした。

スルッとさわ子の腕から逃げ出した彼はにっこりと一言。

「なんか怖いのでハグは遠慮するね」

本気で泣きたくなった。因果応報とは言うが、あんまりだった。

その瞬間だけは気まずい思いもしたが、さわ子はこれから自分が彼を全力でバックアップすることを誓った。教師として、大人として。彼を脅かすものからかばう、と。

滅多にない厳粛な態度で向かってくるさわ子に彼は目を剥いて驚いていたが「ありがとう」と笑顔を向けてきた。

熱血教師・山中さわ子の誕生である。

という話になれば格好がついたのだが。

これといった非常事態もなく、諍い事の一つも起こらない平和な毎日に気抜けしてしまった。

もっとこう、青春ドラマのごとく熱い展開があるのかとほのかな

期待がなかったと言うと嘘になる。
それにしても平和すぎるだろう、と。自分が教師として金メッキのごとく輝くイベントがあるかもしれないと気合いを入れていた自分が間抜けみたいだった。しかし熱が冷めてきたらそんな不謹慎な心づもりに赤面する思いで、いざという時に頼れる存在として落ち着くことにした。

そんな中、さわ子を良い意味で唸らせることがあった。
どうやら彼女達が最近になってやっと本格的に軽音部の本分を思い出したらしいのだ。
ある時期からお茶の時間も惜しいとばかりに練習する彼女達の姿を見て、さわ子は感心しきりだった。
どうやら軽音部として、学外のライブイベントに参加することになったらしい。難関と名高いオーディションを勝ち抜いてイベント本選に出場すると聞かされた時には自分で言うのも癪だが、なんとも間抜けな表情のまま固まってしまった。
実際に彼女達の楽器演奏の技術は決して低くはない。同い年の子供達に比べると、断然上手いくらいだ。
さわ子が顧問になる以前の様子は分からないが、それ以降の成長は目を瞠るものがある。これが若さか、と圧倒されてしまったくらいだ。とはいえ、さわ子も高校時代にギターのテクニックをめきめきと伸ばしていったクチなので、他人事ではない。
この時期の成長率というものは数値では計り知れない無限大の可能性を秘めているのだ。まさに雨後の筍みたいにニョキニョキと大きくなるので、目が離せない。男子でなくとも、三日離れればどれだけ変わっていてもおかしくない年なのだ。

いつの間に、ここまで。

ここに来て、顧問らしいことをしてやれていないのが悔しくなっ

た。彼女達は自分の力で羽化しようとしている。

さわ子の力を借りずとも、力強く羽ばたこうとしているのだ。

それが切なくもあり、嬉しくもあった。教師としては教え子たちの自立を喜ばないはずがない。まだ自立と呼べるかは甚だ怪しいが、それでも大きな進歩だ。

さわ子は今がとても大切な時期だと知っている。一年で固まりつつある、部活としての形、バンドとしての形がこの先どうなっていくかはこの時間にかかっていると言えよう。

バンドがダメになる。俗に言う“ポシャる”原因は様々だ。

その内の一つとして、ガムシャラ期の失敗というのがある。

バンドの士気があがる一方で、各々の意見が飛び交うようになる。あそこはこうした方がいい、とかお前のリフじゃつまらない、など。熱くなって議論することは良いことだが、それもさじ加減が重要なのだ。

頭に血が上りすぎて、ちょっとしたきっかけでバンドの破綻につながることは稀ではない。要するにバンド内の個性が上手い具合につながらないと、バンドは終わる。

ひとえにこのガムシャラ期を自分達の成長につなげることができたバンドが生き残っていくということだ。

所詮は高校生の部活だろうと甘く見てはならない。

軽音部というのは運動部とは違って特殊な性質を持っているのだ。絶対的なルールに従って勝ち負けの出る世界ではない。全ての仕切りが取っ払われた状態で自分という存在を放っていく。決められた方向だけではない。放射状に、どこにでも、どこまでも。

言うなれば結果の善し悪しは自分達で決めるのだ。百人が認めてくれて成功だと喜ぶか、たったそれだけかと悔しがるかの違い。プロを目指すかアマチュアに甘んじるかの違い

故に、彼女達は自分達にどこまでも甘くなれるし厳しくもなれる。

幼さのせいでどこかで折り合いをつけることができずに、メンバーの仲が悪くなる可能性だってあるのだ。

さわ子はあの仲良し達に限ってその心配は特にないだろうと考えているが、万が一のこともある。メンバーが多いサッカー部などだと替えがきくこともあるだろうが、彼女達はギリギリのところで持っている。一人やめた時点で部として存続することを許されないのだ。

しかし、そんな時の為にこそ自分という存在がいる。

さわ子は彼女達の人生の先輩として、その辺をコントロールしていかなくてはならない。

それでも、懸念していた問題がこうも早い段階で訪れるとは思わなかった。

「えっと……ここ、軽音部で間違いないわよね？」

さわ子が部室に足を踏み入れての第一声は傍から聞けば滑稽であった。

音楽室へ向かう階段を上り、部室の扉を開けて入った先が軽音部の他にあるはずもない。ましてや顧問が発する疑問としてはどうかしている。

それでもさわ子は目に飛び込んできた風景が自分のよく知る軽音部とはにわかに信じられなかった。

入った瞬間、ほんわかと香る紅茶の残り香。少女達の賑やかな話し声。扉を開けると、彼女が求める学校砂漠のオアシスとしての空間。もしくは最近では鬼気迫る様子で演奏を繰り広げる彼女達の姿があるはずだったのだ。

その一切が重苦しい空気の中に見つけることは叶わなかった。

続いて彼女が心に浮かべた感想は「お葬式？」だった。

部室には通夜のような雰囲気が横たわっていた。現在時刻は六時に差し掛かろうとしている。外からの明かりはほとんどないようなもので、それでも明かりをつけずにいつもの机に座り込んでいる少女達は不気味ですらあった。

机に座っているのに、いつものように心惹かれるお菓子とお茶を取り囲んでいる様子はない。申し訳なさそうにそれぞれの前に置かれたティーカップから湯気が立つこともない。

どよーん。と暗雲を頭上に背負っている幻覚が見えたくらいだ。彼女達に何があったのだろうかと訊ねるのも憚られるような雰囲気であった。

それでもさわ子は訊かなくてはならない。

「あなた達、いったい何があったの？」

電気を点けて近づいてきたさわ子が声をかけるまで部室に誰か入ってきたことにも気が付かなかったようだ。ハッと顔をあげた彼女達が一斉にさわ子の方を見上げた。

「あ、さわちゃん。今日はもうお菓子ないよ？」

それに対する第一声を発した唯の言葉にさわ子の足の力が抜けそうになった。あれだけ重苦しい空気の中、よくもそこまで暢気な考えが出るものだ。

そもそも常にお菓子を目当てに部室に来ると思われていることに悲しくなる。

「あのねー。べつにお茶しに来たわけじゃないわよ。もう遅い時間だから声をかけにきただけ」

「あ、そっか。もうそんな時間……って六時！？」

さわ子の言葉に携帯の時計を確認した律がぎょっと目を剥いた。それに続くように「どれだけこの状態だったんだろ」「あ、憂に連絡いれてないや」「紅茶も冷め切っちゃいましたね」などの反応が一挙に起こる。

そんな彼女達に呆れたような眼差しを送ったさわ子は、苦々しい表情で眉間をおさえた。そして気になる最大の疑問を投げかける。

「ねえ夏音くんはどうしたの？」

一気に押し黙る彼女達の反応を見て、さわ子は天を仰ぎたくなった。

ああやはり、と。半ば確信的になっていた考えが完全な形となっ

てきた。
「……やっぱり何かあったのねー」
さわ子は腕を組んだ状態で今一度うなだれる彼女達を見渡した。普段の快活な少女達の姿は影を潜めている。このままだとこちらのペースが崩れてしまいそうだ。
「何がったのか話してごらんなさい？」
さわ子は柔らかい口調で率直に問い訊ねてみた。しかし、それぞれが何かを言いたげにしているのだが、なかなか言葉が出てこない。言いあぐねているというより、彼女達も整理がついていないのかもしれない。
それでもおずおずと口を開いた澪が語ったのはこういうことである。
練習に燃えていた軽音部だが、事ある毎に厳しい檄を飛ばす夏音と言い争いになってしまった。殊更に注意されることで半ばノイローゼと化していた律が言ってしまった一言で夏音が傷つき、部室を飛び出していってしまった。
簡潔に表せば、そういうことらしい。
事態はそう簡単なものだとは思えないが。所々言い淀む澪。どこか奥歯に物がひっかかったような物言いに、それが全貌ではないだろうとさわ子は勘づいていた。
とりあえず話を聞き終わり、さわ子はふぅと軽く息をつく。
自身の予感が見事に的中してしまったことに苦虫を噛みつぶすような想いだった。彼女が懸念していた事態、おそらくそれを起こしてしまうのは立花夏音であると予測していたのだ。
普通に考えてみれば、それも然りである。彼は自分達とは次元を逸するプロとしての音楽家である。音に対して思うところは素人の計り知れるものではないだろう。
つまり彼が素人の中でもさらに高校生バンドの中に混じるというのだから満足な結果が出るはずがない。
さわ子は彼が遊び半分で部に所属していると解釈していた。新た

にできた仲間達を一緒に過ごすことが目的で、音楽に関してはお遊びの域を出ないものだと。

高校生たちのぎこちなく微笑ましい同好会の監督的ポジションでいるものだとばかり思っていた。

それがどうやら話が変わってきたらしい。

第一にプロだと発覚してから少しだけ遠慮がなくなったようにも思える。以前までやや控えめだった音へのこだわりが、プロとしての彼の境界線を越えてこちら側にまで伸ばしてきたような印象を覚えた。

それが僅かなものだとしても、彼女達にとってはそうではなかったということだ。

営利目的でもない、純粋な音楽のイベントに出場する。ギャラも発生しなければノルマもない。けれども大勢の客の前で演奏をするという環境は彼をそれなりに奮い立たせたのだろう。

それはプロとしての矜持。バンドマスターとして、恥ずかしい演奏があってはならない。だから納得のいくものを創りあげるまで妥協をしない。

立派な考えに思えるが、それについてくる人間がいなければ意味がないのだ。

彼の理想に沿って追随できる人間はここにはいない。おそらく全盛期の腕をもつさわ子でも到底無理な話だ。

さわ子は彼がひどく窮屈な思いをしていたのではないかという可能性を疑わずにはいられなかった。不安で仕方がないのだ。

まだ若いうちにプロとして、カノン・マクレーンとしてのアウトプットが停滞してしまうのは今後のキャリアにも影響が出てしまうだろうし、ストレスにもなる。

ミュージシャンとしての活動はそこそこに行っているらしいが、彼のホームグラウンドはやはり遠く海を隔てたアメリカなのだ。

彼のフラストレーションがいつ爆発してもおかしくない状態だったのだろう。

ついにこのような事態へと直結してしまった。それが早かったか遅かったかの違いだ。

「で、彼が出ていってからずっとここにいたわけね？」

さらなる沈黙が答えである。

「ねえ本番はいつだっけ？」

「今週の……土曜」

さわ子はカレンダーを確認して眉を顰めた。それは、つまり五日後である。

「……どうやら出場は無理かしらね」

「……それは、何とかするよ」

仏頂面の律がくぐもった声を出す。その時、ばっと顔を上げた澪が睨むように彼女を見詰めた。

「何とかってこのままじゃ何とかならないだろ！？」

気色ばんだ様子の澪に唯が不安げに何かを言いそうにしている。

「何だよ。私のせいだから何とかするって言ってんじゃんか！」

負けじと澪を睨み返す律の声は心なしか震えていた。

「そうな風に言ってないだろ！　もうお前だけの問題じゃないんだ。私らの……軽音部の問題だろ？」

「だから何とかするって」

「もう時間がないんだからな……」

「わかってるよそんなの」

トーンを落とした状態で会話する二人の間には剣呑な雰囲気が流れ始める。さわ子は「これも若さかな」と苦笑しながらそんな二人に割って入った。

「はいはい教師の前で堂々と喧嘩しないの。とりあえず肝心の夏音くんがいないんだからここでくさっていても仕方ないでしょ。もう下校時刻になるからとりあえず帰りなさい」

教師に帰れと言われて渋る年齢でもない。それに彼女達は誰かがそう言ってくれないとじっとその場を動くことはできなかっただろ

う。

素直に帰り支度を始めた彼女達を見て、さわ子はとりあえずほっとすると同時にこれからの対策に頭をひねらせていた。

彼女は、この大きな波の向こうに可愛い後輩たちを無事に越えさせなくてはならないのだ。

翌日の登校は軽音部の一同にとって鬼門と化していた。なんと言っても昨日の今日でまず顔を合わせなければならないのだ。

お互いに会ったらどんな顔をすればいいのか。どう切り出すべきか。

非常に気まずい思いをすることは確定しているようなもので、誰もが頭を抱えて登校するハメになった。

夏音と同じクラスの澪と律の二人は一緒に登校する傍ら、常に周囲の生徒達の間に視線を飛ばしていた。昨日の帰り際に起こった諍いの残り香など微塵も感じさせていないのは長年の付き合いのたまものである。二人は生徒達の中に夏音の姿を見つけようとしたが、ついに登校の最中に見つけることはなかった。

それでも学校に着いて言葉少ないまま教室に入ると当然のように彼はいた。

自分の机の周りに集まるクラスの男子生徒といつものように談笑する姿にどちらともなくほっと息をついた。万が一でも学校に来ないかもしれないという不安もあったのだ。

教室に入った二人に挨拶してくるクラスメート達にぎこちなく応えながら、二人はこれからが本番だと気を引き締めた。

律を先頭にして、そっと後ろから彼に近づく。周りの男子が歩み寄ってくる彼女達の姿に気が付き、夏音に促した。

ゆっくりと振り向いた夏音はごく自然な笑みを浮かべながら「オ

ハヨウ！」と挨拶をしてきた。
そのあまりの落ち着いた態度に、二人は思いがけず拍子抜けしてしまった。
「あ、おはよ……あの、さ。夏音……部活でのことなんだけど……」
いつもと変わらない態度のおかげで少しだけ肩の力が抜けた律は自然に用件を切り出すことができた。
とはいえ顔がやや引き攣ってしまうのは致し方ない。いつも飄々としている彼女も当たり前のように繊細な女の子の一面を持っているのだ。自分が原因のような形で起こったトラブルに責任を感じないわけがない。
ましてや自分が傷つけてしまったかもしれない相手との翌日対面を何事もなかったかのように振る舞えるほど面の皮が厚くない。
しかし、勇気を出した律を夏音は裏切る。
「あっごめんね！　俺、今日は仕事の方があるから早く学校を出ないといけないんだ！」
両手を合わせて可愛く片目を閉じる様子に周りの男子たちが、おぉーと息を呑む。同時に「でも仕事ってなんだー？」と首を傾げるが、そんなものは眼中にない律は唖然として呟いた。
「え？」
「だからちょっと今日は部活……ごめんね！」
「そ、そっか。それなら、仕方ないな」
何とかそれだけ言葉を搾り出すと、律はふらふらと引き下がった。それから後ろで悄然としている澪を押しやって自分の席に向かった。
席につくと再び男子生徒と会話に華を咲かせる夏音を窺った。夏音を見詰める律の瞳は細かく揺れ、光を乱反射させている。
彼女は頭に思考を鈍らせる麻酔でも打ったかのようにあらゆる思考がまとまらなかった。
幾つもの感情を平行させて走らせているような奇妙な感覚が彼女を縦に横に揺さぶっている。
現実を上手く認識できない。ぐわんぐわんと視界が揺れている気

がして頭を抑える。
朝の淡い喧噪にまぎれた生徒の息遣い、どうでもいい会話が遠慮なく耳に入ってくる。それでも、どこにいたって確実に届く夏音の透き通る声だけが痛みとなって彼女を苛ます。
昨日の朝とはまるっきり違う教室の風景に感じられた。一日ずれただけで夏音との間に見えない壁ができたような。薄い膜が直接触れることを遮ってしまうような明白な拒絶。
彼女はふとカチューシャで留めている髪を下ろした。ばさりとうっとうしいくらいに長い前髪が彼女の顔を覆い隠す。横に分けないと前が見えなくて、もともと彼女は前髪を下ろした状態が好きではかったのだが、今は好都合だった。
目の前の風景を隠してくれる。どんな表情をしているものだか分からない自分の顔も周りから塞いでくれる。
律はたった一瞬でも様変わりしてしまうこの世界が恐ろしくなった。自覚してしまえば、それは急加速して変貌した様を律に見せつけてくる。
昨日までの風景はどこに行ってしまったのだろうか。朝、教室でとりとめもない内容の会話をしたり、戯れたり、借りていたＣＤの感想を真剣に述べてみたり。
そんな世界がもう遠くに感じられるのだ。
どこで間違えて、どこからやり直せるのか検討もつかないことばかりが頭をめぐる。あのとき、こうしていたら。「たられば」で始まる様々な結果が駆け巡り、そしてそんな妄想は容赦なく立ち聳える現実から律を楽にしてくれた。
澪とは口をきかずにそれぞれの席について、灰色の一日が教室に入ってきた担任の声によって始まりを告げた。

七海は遅ればせながら生徒会室から教室に帰ると、まずは目当ての人物を確認した。

彼は、そこにいた。普通にいた。というよりあまりにも普通すぎて七海は「はぁ？」としゃくり上げるように声に出して驚いてしまった。

おそるおそる近づき、自分の座席の椅子をひいてカバンを横に机の横に置くと口々に挨拶が飛ぶ。

「昨日は間に合ったの？」

若干渋い顔で七海が横にいた夏音に尋ねた。昨日、七海に対して行った仕打ちに対しての弁明を聞きたいわけではない。おそらく、あまり気にされていないだろうから。

「あぁー。超ギリギリ！　間一髪で間に合ったんだけど、見終わってから靴を脱いでいないことに気が付いたよ」

「欧米か！」

すかさず横に突っ立っていた男子生徒が突っ込んだ。乾いた笑いがその場に起こるが七海の機嫌はぐっと急降下した。そのネタは古い上に、勝手に話の腰を折るなと睨み付けた。

「それはよかったね」

とりあえずこんな風に周りを有象無象のクラスメート達に囲われた状態で真面目な話など切り出せそうもない。教室で話すような話題でもないだろうし、落ち着いたらもう一度昨日の続きを持ちかけてみようと七海は思った。

一時間目の授業の教科書とノートを机の中に入れ、片手で頬杖をついてぼんやりとする。今日は何だか友人達と馬鹿話をする気分になれなかった。

いつもなら夏音と七海を中心に男子が集まって、男男男で姦しいのだが、どうも昨日の事を引き摺っているのかもしれない。もしくは最近、七海自身に起こったことが原因だったかもしれないが、それは別の話であった。

ちらりと横に顔を向ける。いつも通りに美しい人間がいる風景だ

が、何故か七海の視線は彼を通り抜けて向こう側にいる女子生徒を捉えた。

（田井中さん？）

のはずである。七海の目がおかしくなければ。どういうわけか彼女のトレードマークともなっているカチューシャを外した状態で、そんな彼女は実は長かった前髪に顔を覆われていた。暗がりでいきなり出くわしたらプチホラー級である。

イメチェンだろうか。急にそんな挑戦心に満ちた行動をする理由があるのかもしれないが、それにしても様子がおかしい。七海は普段から他人をよく観察する癖があるので、その人の僅かな変化も違和感として引っ掛かってしまうというスゴイのかよく分からない特技を持っていた。

そんな七海のアイビジョンを通して映る彼女は明らかに違和感の塊でしかなかった。誰が見てもカチューシャを外したその状態こそ違和感しかなかったが、それとは違う。何というか佇まいというか雰囲気のようなものが。

暗い。彼女の周囲だけどんより真っ暗。彼女の周りにだけ分厚い雲が差し掛かっているのではないかというくらいに暗いのだ。

七海にとって彼女のイメージは明朗快活、元気いっぱい太陽のような性格だった。クラスの男子の数人が彼女に懸想している者いるくらい、人を惹き付けるような人柄だったはずだ。

しかし、今の彼女を見て同じ印象を抱くことはできない。

さらに視線をずらして見れば同じ部活の秋山澪の姿が目に入ってくる。予想通りこちらも大差が無いご様子だ。

同じようにくら～い表情、というより今にも死にそうな具合である。女子の数人が心配して声をかけていくのにも気付かないほどに落ち込んでいることがわかる。

「ふぅ」

七海はこらえきれなかった溜め息を浅くついた。
どうやら事態の収拾は簡単につくものではないのかもしれない。七海が直接割り込んでどうにかするつもりはなかったが、昨日の相談を受けた流れから放ってもおけない。
昨日の場合、自分から首を突っ込んだような形だったが、気になって仕方がないのだ。これはもはや七海の性分のようなものだ。
それにしても隣で平常時と変わらぬ様子で笑う男こそが一番の違和感の正体であった。
昨日はあんなに落ち込んでいたのにも関わらず、この有り様はどうしたものだろう。
そんな彼とは対照的に沈み込んでいる彼女達の姿をあわせて眺めると、何とも気味の悪い風景である。
仮に、彼が吹っ切れたのだとしても。その場合、羅王が原因なのだろうか。題名を聞いたところで全貌どころか概略もつかめない魔法少女アニメによってあれだけ儚く消えそうだった魂が現世に留まったというのであれば笑い話だ。ただそう思いたくとも、七海の第六感的なナニカが絶対にそうではないと告げている。
とりあえず、七海はタイミングを見計らって彼に話し掛けてみようと思った。

それが放課後まで延長してしまったのは七海の失態ではない。既に時刻は放課後、といっても午前授業なので、時刻は正午をまわったばかりだった。
今日の彼は一日中、一所に落ち着いていなかった。七海が二人きりで話す時間を作ろうとするのを分かっていてあえて避けるかのようにひらりひらりと七海を躱していくのであった。
明らかに避けられているのかも、と七海が確信を持った時には放課後だったのだ。
普段、どちらかというと追いかけられる側の七海が追いかける側

にまわるのは珍しかった。
「夏音くん！　ちょっと待って！」
「……はーい。待つよ七海のためならば！」
放課後、簡単な掃除が終わって真っ先に帰宅しようとした彼を捕まえることができたのは玄関前の昇降口であった。
逃してなるものか、と階段の上から数段飛ばしで駆け下りて叫んだ。勢いよく振り返った夏音はものすごい形相で向かってくる七海にいつものおどけた口調で応えた。
「昨日のことなんだけどさ！」
「あー七海。昨日のことは忘れてくれないかな？」
氷水をぶっかけられたような衝撃だった。笑顔のまま夏音の口調は未だ七海に対して向けたことのない厳しさを含んでいた。七海はやられた、と顔を歪めた。
初手で拒絶されたら、その後にしつこく食い下がるのは至難の業だ。それでもあきらめの悪さはこの一年でたっぷりと磨いてきた七海はそこを気力で乗り切った。
「いやだ！」
「へ？」
夏音は七海の返しにきょとんとした。
「え、と七海……？　あれ、七海ってこんな押しの強い子だったっけ」
「まあまあ夏音くん。生徒会室にでも寄っていきなよ。軽音部には劣るけどお茶とかお菓子とかあるんだよ」
「い、いやそれは遠慮するかな。俺もちょっと急いでるっていうか」
「いや！　いやいやいや！　お時間はとらせないからさ！」
何だか悪徳セールスの営業マンのような体裁になってしまった七海である。ぎこちなく相手を警戒させない笑みとやらを試しても三流詐欺師にしか見えない。
普段とは打って変わった様子の七海の様子にどん引いた夏音はじりじりと七海から距離を取りつつ、引き攣った笑みを漏らす。対す

る七海は「まあまあまあ」と揉み手で笑顔。
傍から見ればうら若き乙女に迫る変質者、の図でしかなかった。
「七海、なんだか怖いよ？　というより一歩間違えたら色々アウトな臭いがぷんぷんと……」
「そうかな？　それより何で少しずつ後ろに下がっているのかな？」
「い、いや。七海が迫ってくるから」
「何だよそれ。いつもは君の方から近づいてくるじゃないか」
「わかった。下がらないから！　その笑顔で迫ってくるのやめて！」
「少し傷ついた気がするけど、わかったよ」
七海的にふるふると震える美少女（のような男）に恐怖の眼差しを向けられるのは堪える。その場で足を止めた七海は咳払いをしてから本題を切り出した。
「ねえ。僕は部外者だよ」
「Ｈｕｈ？」
「でもああいうの見たら放っておけないんだ。昨日、君からあんな話を聞かされて何事もなかったみたいに過ごすことなんてできない」
「……」
「だから、僕に手助けさせてもらえないかな？」
「七海が助ける？」
「うん」
ぱっちりした瞳をさらに見開いて七海を見据える夏音は花が咲いたように微笑んだ。
「助けるって何を？」
七海は内心で「ああ……」と呻いた。目の前の友人の頑固さときたらワールドクラスである。彼は頑なに拒むのだ。個人の問題に踏み入れられるのを。
「僕は君にとって友達かい？」
「もちろん」
当たり前だと首肯する夏音に七海は続ける。
「じゃあ君の悩みを話すに足らない程度の存在かな？」

「七海……」
眉間をおさえて溜め息をついた夏音はやれやれ、といった様子でまるで年下の子供を見るような目つきで七海を映した。
「あのね。そういうことじゃないの。これは俺のかなり複雑きわまりない個人的な問題なんだ。一朝一夕で誰かに理解できるものじゃない。それこそ即理解された時なんかは逆に落ち込むよ。あれ、俺の悩みってこんなに単純だったのってね」
「君個人の問題だっていうのかい。軽音部のみんなを巻き込んでいるのに？」
「それは……それも含めて、だね」
「今日一日の彼女達の様子は見ていられなかったよ僕は。君はどう思った？」
「律と澪が？」
「何、わかってなかったの？」
心から何のことかわからないといった表情を見て七海は、ここにきて初めて彼に対する苛立ちを覚えた。
「明らかに落ち込んでたろう！　そりゃひどいものだったよ。あまりにひどいから心配した女の子も何人かいたっていうのに」
彼女達の様子を勘違いしたのか『重いの？』とか『あれ持ってきてる？』という会話が聞こえてきたことはあえて言わない。女子比率が多いクラスの繊細な話題である。
「……ぼーっとしてたから、わからなかったよ」
「自分しか見えてないね、君も」
七海の言葉にむっときたらしい夏音が声を尖らせて反発してくる。
「もしかしたら体調が悪かったのかもしれないじゃん」
「二人揃って同じ症状？　軽音部で風邪でも流行ってるのかな？」
顔が整っている者が怒るととんでもない迫力がある。ましてや眼圧がとんでもない相手の一睨みに対して平静でいられるほど肝が据わっている人間は多くない。
七海はそんな瞳にひるむことはなかった。彼の生徒会で過ごした

一年間はそれはもう特濃で恐ろしい日々だったのだから。すぐに腕力を行使する暴力副会長、微笑みながら他人を威圧する会長、ひたすら目つきが悪い先輩。

彼女達に揉まれまくった七海は夏音の瞳を真っ正面から睨み返せるくらいの胆力がついていた。

「ＯＫ．　Ｙｏｕ　ｗｉｎ」

両手をひらひらと振って降参のポーズをとった夏音は頭をがしがしとかきながら、力無い視線を七海に向けてきた。

「俺が悪いんだよ。あの子たちには迷惑かけてる自覚もある。ただちょっと整理が必要なんだ。ごちゃごちゃなんだよ。だから今はそっとしてくれないかな？」

困ったように笑い。強張った表情の中に揺れる瞳を七海は捉えた。

「ありがとうね七海。本当に嬉しいし大好きだよ」

「だ、だいしゅ……プシュー」

強烈な情報が耳に入った途端、七海の回路の一つがショートしてしまう。ふとした拍子にさらっと小っ恥ずかしい台詞を紛れ込ませるのは反則である。流石アメリカ、恐るべしアメリカ、と七海がややずれた感心の仕方をしていると彼は続けた。

「でも、今はちょっとね……本当にごめんね」

「夏音くん……」

「あ、急いでるのは本当だから行くね。また明日ね！」

去り際にこちらに手を振って彼は矢のような速さで学校を飛びだしていった。取り残された七海はそれを呆然と見送り、しばらくぼーっとしていた。

「ふぅ……」

「ふぅ、じゃねーのよ」

「！？」

耳元に底知れず獰猛な声が囁かれたと思った瞬間、七海の身体は勢いよく後ろに引っ張られた。

世界がひっくり返った。

「え！　え！？　なになになに！？」

そのままわけも分からず恐慌状態に陥った七海はなんと恐るべき怪力を持つ何者かによって猛スピードで運ばれていた。運ぶというより、引き摺られている……という表現すらも生ぬるい。七海は制服の襟をつかまれたまま宙を舞っているのだ。

天翔る龍の閃きのごとく走り抜ける速度のせいで空を漂う凧のように、時折ホバリングを繰り返して移動しているのだ、人間が。

というかもはやこの世の物理法則に逆らっている気がした。

直進だったのが、ふとコーナリングの際に向こう側の壁に激突間近で切り返し、景色がびゅんびゅんと飛び去っていく。

ジェットコースターの方が百倍ましというくらいのスリルに七海は終始パニック状態で叫び続けた。

視界の端にちらちらとクロワッサンらしきナニカが見えていたのだが、七海はそれが何なのかも理解できないまま、自分を拉致した人物が動きを止めるのをひたすら待った。

ガラッ、バタン。

どこかの教室に入って、即行でドアを閉められた音。

誘拐犯の暴走特急はここに来て止まってくれたようで、七海はばんっと床に投げ置かれた。硬い床とマジでキスする五秒前だった。

このような仕打ちには慣れ親しんだものだが、もしかして自分のよく知る生徒会元副会長の仕業かと思って自然と体が震え上がった。

あの先輩の恐怖政治は去ったはずなのだ。というより最近は初期の頃より暴力をふるわれる回数も歴然と減って、ここまで無慈悲な扱いは久しぶりであった。

訳が分からずに頭に思い浮かんだ人物の名前を呟いた。

「こ、香坂先輩？」

「とりゃあっ！」

「あふんっ！」

おそるおそる顔を上げた七海の視界に飛び込んできたのは見事なクロワッサン……ではなく、縦に巻かれたゴージャスヘアーを持つ少女だった。ハテナが七海の頭に飛び交う隙すら与えず、その少女は七海を引き摺り上げ、壁際に追い詰めた。

「グルルルル」

「だ、誰っ！？」

猛獣のようなうなり声をあげて七海にメンチ切っている人物に見覚えがなかった。一見、普通の少女なのだがその瞳の奥に爛々と輝く物騒な光は軽めに言ってヤバい。チラリと見える鋭そうな犬歯が怪しげに光っている。

ここで喰われるのか、と七海は早すぎる人生の幕引きにそっと目を閉じた。

「山田七海……」

「へ？」

自分がまだ無事であることより、どうしてこの凶暴な少女が自分の名前を知っているのだろうという疑問が浮かんだ。

「あなたに聞きたいことがあるのだけど……」

「は、はい！」

「その前に誰とか言ったわね。私の名前は堂島めぐみ……そして立花夏音ファンクラブの会長。これが何を意味するかもうわかるわね？」

「え、何がですか！？」

だいぶ一方的だが会話が挟まれたことで七海にも多少の余裕が生まれた。視線を下に送ると、リボンの色が緑だ。

つまりこの少女が一つ先輩だということである。

七海は生徒会や一部の生徒以外に先輩の知り合いはいない。どこかで接点があっただろうかと首を傾げる。襟元を掴み上げられているので、気持ちだけ。

「あなたについての報告は逐一受けてるわ。ふふふ……山田七海。恐れ多くも夏音さんに馴れ馴れしくもべたべたと……その所行、

万死に値する」
　べたべたとひっついてくるのは向こうなんですけどー！？　という叫びはさらにぐいっと力を込められた腕に封じ込められる。
「それにさっきのは何？　告白？　告白してたの？　それでフラれてたの？　ざまーみやがりなさいよ！」
「ち、ちが……誤解です！」
「五回！？　五回目なの！？　何てしつこい男！　いや、その決してへこたれない精神は称賛に値するかもしれないけど……」
　全く名誉ではない褒められ方をしているが、七海としては何も言い返すことができない。言葉を発するために必要な酸素の供給が今にもストップしそうなのだ。
　思えばこの状況。山田七海、人生初の上級生による恐喝である。まさか桜高に来てこんな目に遭うとは思ってもみなかった。
「と、とりあえず離してくらひゃい……」
「……仕方ないわね」
　不承不承としながら七海を拘束する力が緩められた。肺が酸素を求めて「ブッハァーッ」と大きく呼吸を促す。へなへなと床に落ち込んだ七海を見下ろす堂島めぐみは腕を組み、じっと睨み付けてくる。
　息が整ったところで七海は彼女の全貌を初めて眺めることになった。
　まず目に入るのは見事な縦ロール。トルコあたりを発祥とする小麦の食べ物に似ている。しかし、七海は彼女の体格の小ささに驚いた。
　明らかに七海より小柄な彼女が、先ほどまで恐るべき力で七海を引っ張っていた人間とは信じられなかった。そして襲い来る既視感。生徒会にもその細腕からよくぞその怪力が出るものだと感心する人間がいる。
　桜高には不思議な人外生物がたくさんいるのだな、と七海は思わず感心してしまった。

「ど、堂島先輩と言いましたか。いったいぜんたい、どうして僕がここに呼び出されたのでしょうか？」
「あぁん？」
言葉から態度までしゃくり上げるその仕草はどこぞのヤンキーさながらだった。ぱっと見てお嬢様風なのに、外見を裏切りすぎな中身に七海の心臓がばくばくと跳ね上がる。
「……ふぅ、まあいいわ。ここにあなたを呼び出したのは他でもない夏音さんのことよ」
「ぼ、僕は彼とは友達以上になったこともなるつもりもありませんよ！？」
「シャラーーーーーーーー」
数秒待つ。
「ーーーーーーーーップ！！」
Ｓｈｏｕｔ　ｉｔ　ｕｐ. 訳せば、だまれてめー。もちろん七海は口をつぐんだ。下手に喋って地雷原のごとく存在する逆鱗に触れてはならないと考えたのだ。
「そうじゃなくて。あなた曲がりなりにも夏音さんの従僕でしょう？」
「従僕じゃねーよ！」
「似たようなものじゃない。あなたがそれなりに親しい関係だということは割れてるのよ。それで聞きたいことっていうのは、昨日から今日まで夏音さんの様子がおかしいじゃない？　何があったのかきりきり吐きなさい」
「様子がおかしいって……耳が早いというか、よく分かりましたね」
彼にとってナニカがあったのは昨日の放課後。それから今日は普通に登校して普通に授業を受けていたはずだ。その間に感じ取れるような彼の異変に彼女は気付いたというのだろうか。
ファンクラブ会長の名はダテじゃないということか。
「当然よ。極力だけど私たちは夏音さんを視界に収めてそれを報告する義務を負っているの。昨日の放課後、明らかに尋常じゃない様

子の夏音さんを目撃した子がいたのよ」
「はあ、なるほど」
一歩間違えればストーカー行為だが。それも組織単位の犯行。
「それで後を尾けた子が公園で二人きりのあなたと夏音さんをしっかりその曇りなき眼に収めたというのよ！」
バーン、と指を突きつけてくるめぐみに七海は呆然と立ち尽くした。心なしかどや顔で犯人を追い詰める名探偵のような雰囲気すら漂っている。
「と言われても、たまたま通学路が一緒なだけですよ。帰宅途中に彼を見かけたからちょっと話してたんです」
「あなたの弁明は必要じゃないの。ナウ必要なのは、そう。夏音さんがどんなゆゆしき問題を抱えているか、よ」
そう言って彼女はご自慢の（定かではないが）縦ロールをばさりと後ろに翻した。意外に柔らかそうな感触だろうか、ふぁさりと舞い上がってからやはり貫禄のクロワッサンへと形を戻す。形状記憶でもついているに違いない。
「本当はあなたが絡んでいて諸悪の根源であるあなたを倒せばいいと思ってたんだけど……そうじゃないみたいだし」
「しょ、諸悪の根源て……」
ラスボスみたいで格好良いと一瞬思ったことはおくびにも出さず、七海は途方にくれた声を出す。モブキャラがラスボスに昇格などありえない話である。
彼の問題を話してよいものか逡巡したが、七海は結局かいつまんで話すことにした。
「あのですね。僕だっていち友人として彼の悩みを聞いて共有したいと思ってるんですよ。ついさっき本人からそっとしておいてと言われましたが」
簡単にまとめた彼と軽音部の皆とのトラブルをめぐみに打ち明け、さらに自分の彼に対するスタンスをしっかり付け加えた。
「あなたじゃ役が足りないのよ」

返す刀でバッサリだ。何ともコンプレックスを刺激する男お言葉。その台詞を真顔で言われたくなかった。そちらこそ夏音くんのなんなのさー、と不満を口にしかけたが決してそのまま口に出す失態はない。

お口にチャック、こそ生きる術だと七海は学んでいる。たいてい黙っているうちに相手が勝手に話を進めていくのだから。

「かといって私も他人のことは言えないけど」

「え、意外に理性があるんだ」

「何か言った？」

「いいえ」

「はぁ」

ふいに彼女の七海を睨む瞳から力が消えていく。それまで彼女を包んでいた闘気がみるみると萎んでいくのを七海はぼんやりと眺めていた。

次第にしゅーんと縮こまっためぐみの眦に涙がじわりと溜まっていく。これには七海もぎょっとした。

「え、ちょっと先輩！？」

「私なんてただのファンだし……？　夏音さんの悩みを解消してあげるなんておこがましいよね？」

おこがましいなんて言葉を使う人間に限ってひどく面倒くさいものだが。しかし七海は堂島めぐみメンドーと彼女を放置することはなかった。

「そ、そんなことないですよ！　彼は自分を心配してくれることを嫌に思う人じゃないでしょう？」

「そうだけど……そーお？」

涙に濡れた瞳で七海を見上げた彼女は何かの小動物みたいだった。そうしていると十分に可愛い部類に入るのに、もったいないと七海は冷静に彼女を評価していた。しかしこうなると彼の周りには粒ぞろいの残念なべっぴんが招き集められているのではないかと疑ってしまう。

「そうです！」
「思えば私って夏音さんとじっくりと普段付き合いしたことなんてないのよね」
「はあ、さようで」
「ええ。というか自分から線引きしてるんだけどね。いちファンとして、近すぎず遠すぎずの距離で迷惑にならないように応援していこうって決めてるから」
「良心的ですね。いよっファンの鑑！」
「ふ、ふん。まあね！」
鼻を鳴らしてふんぞり返るめぐみはこれを機にぐんと調子を持ち直したようだった。七海の必殺・ヨイショ攻撃にあっさりと乗った彼女は、何かを決意したような表情で大きく頷いた。
「でも、それって本当に夏音さんを理解していることにならないのよね。その人が上っ面だけうまくいっている姿だけ応援するなんておかしい」
「うん？　え、ええそうです……よね？」
何を言っているかわからないが、イエスマン七海と化して調子を合わせた。力強い指示を得た彼女はますます自信を滾らせ、ぐっと小さな握り拳を天高く掲げた。
「ィヨーシ！　夏音さんに直接アタックしてみる！！」
「その通り……ってエエー！？」
「だって私、夏音さんの力になりたいもん」
「いや……もん、じゃなくって。さっき僕の言ったこと聞いてました？　彼は放っておいて欲しいと言ったんですよ。変に踏みいったことすると嫌われちゃいますよ？」
嫌な流れに傾いてきたと肌で感じた七海は急いで方向転換を促す。だが、勢いづいた人間はすっかり流れに乗ってしまっていた。
「それでも！　それでも……私のエゴでも、迷惑でもいいの。人を助けるのに資格なんて必要ないじゃない。だって決まって助けてくれる誰かなんて現実にはいないのよ。人を助けるのはその場にいる

人、よ。付き合いの長さとか好き合ってるとかいがみ合ってるとか関係ないの！」

　嫌われるという言葉に反応して腰が引けたとしても、彼女は屈強な覚悟をもってその決意を果たそうとするのであった。

「助けたいと思った人が助けていいの！　誰に助けられても同じなんだからいいでしょ！」

　ここに来て、七海は初めてこの先輩がすごい人なんじゃないかと感心した。とんでもない出遭いのせいでどん底の評価を下していたのだが、彼女の言葉によってちょっぴり評価点が上昇した。雀の涙ほどだが。

「あの……先輩のそれは素晴らしい考えだとは思いますが、それも人によりけりだと思いますよ。僕だって力になれるならなりたい。けど、どうにも彼は人に踏み入れて欲しくないようで」

「昔の人はこう言ったわ。泣かぬなら　泣かせてみせよう　ホトトギス」

「はぁ」

　それが何だというのか。

「そして偉大な人はこの言葉を遺した。迷わず行けよ、行けばわかるさ」

「猪木生きてますから！」

「つまり私が言いたいのは、相手がどう思っていようと無理矢理にでも心を開いてしまいましょうってこと」

「すげー暴力的な解釈！？　意外にえげつねーこと考えますね。本当にファンクラブ会長なんですか」

「文句ばかりね。それだけ言うならあなたも案を出してみなさいよ」

「あれ、僕っていつの間にか頭数に含まれてます？」

「当然じゃない」

「だから僕はもう触らぬ神にたたりなし、のスタンスでいこうかと……」

「あのね、後輩」

また呼び方が変わったが、七海はふいに真剣味を帯びた先輩の声に打たれたように黙る。

「だから言ってんじゃない。大切なのは相手の反応にびくついていちいち顔色窺うのではないの。結局、それって自分を守ってるってことよ。相手のことを思いやってるならば時には自分が傷ついてでも……それこそ嫌われても踏み込むことも必要なのよ」

七海は静かに語る彼女にうっかり感服してしまいそうになった。もちろん穴だらけだったり突っ込む隙はたくさんあると思うのに、何だかこの場合は彼女が正しいように思えたのだ。

それに加えて傷つくことを怖れる、という部分は七海の心を浅く傷つけた。七海は彼から話を引き出すのに多少の粘りを見せたが、そこから先へ踏み入れる勇気がなかった。自分のことを揶揄されているような気がして、彼女の言葉に何も言い返すことはできなかった。

「私、あの人のことになると見境なくなるし。無自覚に迷惑かけてる時もあるかもしれないけど、この想いの強さなら誰にも負けない！　だからできることは全てやりたい」

「どうしてそこまで彼にのめり込むんですか？」

彼女の執着は異常といってもいい。真面目、というよりも愚直ともいえる彼女の性質はその対象が何であれ、決めたことにひた走るエネルギーを持っていた。

しかし赤の他人にそこまで献身的な態度を貫けるような人の気持ちは七海にとっては測りかねるものだ。七海も他人のために行動をすることはあるが、自分を捨ててまで相手に尽くそうとする気持ちは理解しがたい。

ましてや好意を寄せる相手に拒絶されるリスクを負うなど考えられなかった。

「どうしてと言われたら夏音さんを大切に想ってるからとしか答えられないわね」

「そうじゃなくて。だって彼と特別仲が良いわけでもないでしょ？　どちらかというと先輩は一方的じゃないですか！　こんなこと言

いたくないですけど、世の中ギブアンドテイクってこともあるでしょ。先輩が彼からどれだけの物を得られるというんですか！」

七海は少しだけムキになっていた。敬虔なクリスチャンでもあるまいし、理由なき自己犠牲精神なんてもので彼に踏み込もうとする人間を認めることができなかった。

生意気ともとれる後輩の辛辣な言葉に怒るか思われたが、七海の予想は外れた。彼女は目をつり上げるどころか、目を細めて笑っていたのだ。

「私が貰ったもの……？　あるわよ。とっても大きなもの」

まるで初恋の人を思い浮かべるようなうっとりとした顔つきに七海は一瞬だけ見惚れた。彼女はうっとりとしたまま、続ける。

「あの人に助けてもらった私はいつか必ずあの人を助けなければならないの」

「え？」

何だか壮大なスケールな予感。何だか物語のような過去がありそうで、七海はちょっぴりドキッと胸を高鳴らせた。

「まあ、詳しいことは話さないけど。とにかく！　いくわよ後輩！」

割愛のもとにすっぱり会話を切った彼女はドアに手をかけて七海を振り返った。

「ってどこにですか？」

「決まってるじゃない。夏音さんの元へよ！」

「いや、彼は用事があるとかでどこにいるかもわからないんですけど」

「でも家には必ず帰るでしょ！？」

「つ、つまり？」

「張り込みのいろはってやつを教えてやるよ、新入り」

「えーーー！！？」

そう言って彼女はどこぞの班長のようにくっと片頬をあげる。

「ていうかもっと何か考えましょうよ！？」

「そうは言っても私、小難しい作戦とか苦手だし」

あれだけ自信満々だったわりに、ノープラン。先行きが思いやられるな、と深い溜め息をついた七海は、すでに自分が逃れられないことが確定していることに胃が痛むのを感じた。

「胃薬が欲しい」

「なーに保健室寄ってく？」

放課後になって部室に集まる。各自が掃除や日直の仕事などを終えてちらほらと部室に現れるとまずカバンをベンチに置く。それから部室の奥に並べた机の所定位置に腰掛けて芳醇な香り漂う紅茶が淹れられるのを待つ。

そんな風に自然と決まった流れで軽音部の部活動は始まっていく。部室にいち早く到着するのはたいていムギだったが、それも日によってまちまちである。運悪くどの清掃区域より時間を食ってしまう校舎裏などに割り当てられた日などは適度に駄弁って時間を潰す。やがてムギがいそいそと現れ、かいがいしくお茶の用意をし始めるのが決まり切った流れであった。

今日の場合、誰が示し合わせたわけでもなく、全員が同じタイミングで部室に集まっていた。いや、全員というには一人だけ足りない。

お茶の用意は滞りなく済み、いつもの軽音部の日常が始まる用意は整っている。

それでも軽音部は始まらない。たった一人だけ足りないだけなのに、大切なパーツが抜け落ちてしまったような印象が拭いきれないことに一同は驚愕した。

風邪や、諸事情によって部員が揃わないことなどざらにあった。それにも関わらず、今日の部活の雰囲気はこれまでに味わったことのない空虚感に満たされてしまっている。

時折、紅茶をすする音が白々しく響く。たったそれだけが響く沈黙がその場にあった。

沈黙ほど軽音部に似つかわしくないものはなかった。いつも誰かが話題を出し、それが連鎖的に広がって収拾がつかなくなるくらいに盛り上がるのが当たり前。喋り足りなくて、ついつい練習の時間を削ってまでお喋りに華を咲かせるほどの活気に満ち溢れていた。

「ね、ねえ。練習しようよ！　今日たくさん練習して夏音くん明日になったら驚かせちゃお！」

その空気に耐えかねた唯がわざとらしいくらい明るい調子で言った。誰かが話し出すことを怖れていたかのようにびくりと反応したのは皆一緒だったようだ。億劫な様子で唯を眺めた律がものぐさに言い放つ。

「一日頑張ったってあいつを満足させられるわけないだろー？」

苛立ちが滲んだ言葉に唯が表情を曇らせる。それを見たムギが慌ててその会話を繋げようと口を開いた。

「で、でも。やれるだけやってみない？　仮にも本選に出られることになったんだし、いけるとこまで行ってみたいと思うな」

「ムギはそう言うけどなー。確かに私だって本選に出ることになってスゴイと思ったよ。それなりに実力つけたんだなって自分を褒めたくなったけどさ。あいつはそんなもんじゃ満足できないんだろ？　たぶん、今やってることだってお遊戯みたいな感覚なんだと思うぜ」

そこが問題だった。どれだけ練習したとしても、プロの耳を満足させられるくらいに仕上げることは不可能というのが彼女達の共通認識だった。

「でも……今回のことはそういうことじゃないと思う」

先ほどから否定を繰り返す律をじっと見据えた澪が慎重に言葉を選ぶように続けた。

「たぶん……夏音はいつだって私達に無理はさせてない……させないように気を遣ってたんじゃないかな」

「それどういうことだよ？」
「……本当にわかんないのか？」
澪は胡乱な目つきで訊いてきた律に厳しい目線で切り返した。
「練習して、少しずつ腕を磨いてきた人なら気が付いてもおかしくないはずだぞ」
「無理ったって……相当な無茶を強いられた記憶があるんだけど」
いくら思い返しても律にとって夏音の要求は決して楽なものではなかった。繊細な表現の仕方だとか、慣れないリズムパターンに四苦八苦してばかりいたのだ。
「コレができたら、次はコレに挑戦する。みんなそうやって楽器は上達してきたと思うんだ。私は夏音からずっとレッスンを受けてきたから、よくわかる。あ、あいつは私のことをよく考えて、くれて……ちょっと無茶するくらいの……いや、わりと無理めで地獄を見たとしても頑張ればこなせるようなメニューを作ってくれたんだ」
とつとつと述懐する澪の言葉に全員が黙って耳を傾けていた。
「だ、だってさ。音楽の世界にはもっともっと……私達が想像つかないくらい難しいことなんていくらでもあるのに、そういうのをやれなんて言わないだろ……いつだって私達が頑張って手を伸ばせば届く所にあるものばかりだっただろ？」
悲鳴にも似た彼女の心の叫びは痛いほどストレートに彼女達の心に入っていった。空間に溶けてからそれはとても深い部分に到達して彼女達にとある事実を再認識させた。
立花夏音は卓越したバンマスとしての能力を十二分に発揮していたのは事実なのだ。全員がプロで固められたバンドを引っ張るのと、自分以外が素人であるバンドを形にしていくのはどちらが難しいことかなど考えずとも導き出される答えだ。
その都度、誰かがつっかかれば納得いくまで繰り返させる。それで身についた時には次のステップへと繋げる。
この一年、軽音部は立花夏音に育てられてきたのだ。夏音主導の活動は決して楽なものではなかったが、彼女達は必死についていっ

た。

何のためにそこまで辛い思いをしたのか。

できなかったことができるようになる喜び、自身の成長のための努力。それ以上に夏音という可能性に挑む戦いでもあったのだ。

彼は自分達の可能性を存分に引き出してくれる。それと同時に自分達の持つ可能性が膨らめば膨らむほど、彼が与えてくれる未知の世界への鍵を手にとりたかったからこそ、彼女達はがむしゃらに夏音の要求に応えようと努力したはずだった。

来るなら、来い。どんなものでも寄越してみるがいい。自分達はそれを乗り越えてみせる、という暗黙の部分で行われていた静かな戦い。

負けはなかった。

彼女達はかろうじて勝ち続けてきた。歯を食いしばり、少しでも彼が立つ場所へと近づくために。

「私らは自分達で始めた自分との根比べに負けたんだ」

重苦しい響きをもってその言葉は少女達を襲った。

「ちがう……それなら、きっと私だけが負けたんだ」

「りっちゃん……」

沈黙を打ち破るようにもたらされた律の自嘲を受け取ったムギが心悲しげに瞳を揺らした。

「みんなは投げ出さなかった。私だけが、負けたんだ……たぶん自分に」

「律」

「いい、何も言うな。わかってるよ……誰が悪いとか、問題じゃないって。でもな……私は言っちゃいけない言葉をあいつの顔に吐き捨てちゃったんだ」

感情が爆発するのを抑えきることができなかった。熱くなっていた、というのはただの言い訳にしかならない。

「別に軽音部の曲はなんにも嫌いな音楽じゃない。上手くキまった時はすっげー気持ち良くなるし、小手先の技とかも使いようによっ

ては必要なんだって知ることもできた。それでも私が頭ひねって考えたフレーズとかを否定されたり、曲の完成形のビジョンが違いすぎたりしてさ。そんな時、面と向かって言えないじゃん……プロなんだから……ってな」

最後の言葉を共感できない者はいない。彼女達が曲に対して意見する時は、たいてい夏音の味付けが加えられる。夜中までかけて考えたわずか1フレーズでさえ、違うものへと変容してしまうのを目の当たりにして、自分を認めてくれていないのだと受け取ってしまうこともしばしばあった。

それでも真っ向から夏音に意見をできる者はいなかったのだ。プロと知る前から彼の圧倒的な音楽の才能を前にして、彼が黒と言ったものを自分の意見で白と塗り替える勇気は彼女達にはなかった。

「それに……なんか勝手にひがみ入ってた」

少し開けた窓から生ぬるい風が吹き込んできた。

「向こうはお高くとまったこともないのに、いつだって真剣なだけ。なんかスゴイ劣等感ばかりだった。最低だ、私」

低く呻くような呟きが響き、そこで言葉を無くした律は視線を落としてうなだれる。

「あのね。たぶん、ね」

と唯が弱々しくも張り詰めた声を鎮まった会話に落とした。

「そういうの……ちゃんと話さなかったからじゃないかな」

そして唯は自分が言った言葉をその場で反芻して、何か見えていなかったものから霧が取り除かれていくような感覚を得た。

「……うん、やっぱりそうだよ。私達、ちゃんと夏音くんに言わなかったよ」

何を、とまでは言うまでもなく一同は理解できた。

「これ好きじゃない、とか。ここはこうしたい、とか……夏音くんに伝えなかった」

「でも、あいつは……あいつのアイディアを否定するなんてできっこなかっただろ」

「ううん、りっちゃん。たぶん夏音くんは言って欲しかったんじゃないかな？　夏音くんいつもバンド楽しいって言ってた。ここにしかない音がある、って」
「本当に楽しいって？」
「うん。ていうかいつも言ってると思うけど夏音くん」
「そうだったっけ？」
記憶を引っ張り出すように視線をうろつかせて律が眉根を寄せる。
「そういえば、上手く言った時は『アヒャヒャヒャたーのしー』とか叫んでた気も……」
「夏音そんなだったか？」
疑問を浮かべてからふとその様を想像した澪はぷっと噴き出した。向かいあった律もつられて笑いを堪えるような表情をした。
「つまり……私達が勝手に壁を作ってたってことか」
覆い隠されていた答えをひも解くように、だんだんと自分達の問題の原因が見えてきた。その答えは誰もが以前から知っていたような気がした。
プロだから。その言葉は呪いのような響きを持つ。彼女達にとっても、立花夏音にとっても。
その一言だけで解消する物もあれば、その一言が壁となってしまうのだ。まさに軽音部をアチラとコチラで分けてしまう程の力をもって、立ちはだかってしまう。
腕を組んで大きく息をついた澪は軽音部の中で一番初めに夏音の秘密を打ち明けられた時のことを思い出した。出会って間もなくの時だった。夏音は澪に秘密を打ち明けた際にこう言った。
自分を立花夏音として見て欲しい。遠ざけないで欲しい、と。
今になってその言葉が、その裏にある想いに気付いてしまったことが痛々しいほどに自分を責めてくる。
誰よりも夏音と触れあっていたにも関わらずそのことを見出してやれなかったことに澪は苦々しい思いに顔を顰めた。唇をぐっと強く噛みしめて悔やんでも、後の祭りなのだ。

「いや……後の祭りなんかにさせない」
「は？　祭りがどうしたって？」
唐突に突拍子のない単語を口にした澪にきょとんとする律。
「まだ遅くない。何を全て終わってしまった風に片付けようとしてたんだ」
何かを悟ってしまったように淡い微笑みを浮かべ始めた澪を一同は怪訝な表情で見守っていた。彼女達の心配をよそに澪はガタンッと力強く椅子を引いて立ち上がった。
「みんな。誰が悪いとか、そういうのばかり話しても仕方ない。夏音に会いに行こう！」
「行くって……あいつ今日、仕事だって言ってなかったか？」
「そんなこと関係ない！　無理矢理にでも時間をつくってもらう！」
「み、澪ちゃん？」
いつになく勇ましい態度の澪にムギが不安を覚えて声をかける。ぎらぎらと力強い光を備えた澪は非常に頼もしく見えるのだが、どこか無鉄砲な匂いもぷんぷんとするのだ。
「澪～急にどした～？　最初に言ったことはともかくお前らしくないぞ」
「はぁ！？　私らしさって何ですかねー。知りませんよそんなの！」
口調もどこかおかしいし、と律は内心に募り始めた不安を力づくで散らしながら幼なじみを宥めた。
「わかったわかった。お前の言いたいことはよーくわかったから。とりあえず落ち着け、な？」
「これが落ち着いていられれいでか！」
ついでにハンッと鼻をすすれば完全な江戸っ子である。とりあえず律は時たまに暴走特急を化してしまう幼なじみがこうなったら最後、ゴールまで突っ走ることを十分に理解していた。
そんな彼女を阻止することは、あまり成功したことがない。
「あ、あのなー澪？　夏音に話すのはもちろん私も賛成……ってか私が率先して言わないといけないくらいなんだけどさ。あいつは仕

事だろ？　もう仕事場に出かけたかもしれない。それが都内のプライベートスタジオとかだったらどうするんだ？」
「そ、そうか……そういう可能性は高いんだよな……ど、どうしよう」
　見る見ると青ざめて頭を抱えた澪を落ち着けようとムギが声を上げた。
「澪ちゃんひとまず落ち着こ？　どちらにしてもすぐに夏音くんに会うことはできないと思うの」
「で、でも！　のんびりしてたらなんかアレだろ！」
「うん。とりあえずメールか何かで時間をとってもらうようにしましょう？」
「あ……その手があったか」
　冷静なムギの指摘に手をぽんと打つと澪は顔を赤らめていそいそと携帯を取り出した。
「え、と……なんて打とう。話があるから今日会えるかな……いや、これだと何か恥ずかしい……今会いに行きます……じゃなくて、えーとえっと」
　その場の誰もが顔を赤くしたり青くしたりと忙しい澪を苦笑して見守っていたが、その内ムギがくすりと音を立てると、それが火を点けたように優しい笑いが広がっていく。それと同時に皆がほっと息をついた。
　ここに来て、やっといつもの軽音部らしい空気が戻ってきたのだ。こういう調子がないと軽音部ではない。
　事態が解決したわけでもなければ、根本的な問題はこれから取り組むのだが、それでも先ほどまであった居心地の悪い空気は消えつつあった。
「澪ちゃん。メールの内容はお茶しながらでも考えましょ？」
「で、でも電波の届かない場所に行かれたら気付かれないかもしれないだろ？」
「さっき学校終わったばかりよ？　焦って変な文章を送っても困ら

せちゃうかも」
「そうだよ澪ちゃん！　とりあえず、お茶だよ！」
唯のにっこり頬をゆるめての一言に澪の気持ちは凪いでいく。彼女の無邪気な笑顔は人を落ち着かせる効果でもあるのだろうか、と苦笑して澪はゆっくりと席に腰を下ろした。
「そうだな」
ふぅと胸をおさえて落ち着きを取り戻した澪はムギに笑いかけて言った。
「いつもの、お願い」
心得た、と力強く頷いたムギは抑えていられない笑顔を貼り付けたまま急いでお茶の準備に取りかかった。
「それにしても会ったらまず何て言おうかねー」
「律の土下座からでいいんじゃないか？」
「夏音くんに土下座するの初めてじゃないしね！」
あながち本気の目をしている二人に律の頬が引き攣った。

第十九話（挿絵あり）（後書き）

感想、お待ちしておりまーす。

第二十話（挿絵あり）

目にも鮮やかな薄桃色が穏やかな風に揺られている。満開の梅が咲き誇る公園に一組の制服姿の高校生がいた。ベンチに腰掛けた少年少女の姿は後ろから眺めてみるとまるで初々しいカップルのようで、お互いが絶妙な距離を保ったままベンチの端っこに座り合っているところなど、いじらしくも微笑ましい。

しかし、正面から彼らを見た時に同じような感想を抱ける者はいないだろう。

一人は黒縁の眼鏡をかけた真面目そうな少年で、先ほどから眼鏡の奥で揺れる瞳を頼りなさげに瞬かせている。時折、公園の風景に目をとめてほぅ、と目許を緩めるがちらりと真横にスライドさせた瞬間にやるせなく溜め息をつく。

少なくとも、いかようにして自分が懸想する相手の気を惹けるかということで悩んでいるようには見えない。

一方の少女は現実では珍しい縦巻の特大カールを風にたなびかせながら、時の戦国武将のような佇まいで背筋をびしっと伸ばしていた。少女の瞳には何が映っているのか、少なくとも眼前に広がる公園の美しい風景など目に入っていない。じっと正面を見据え、たまにふんすっと鼻息を荒げている。

ふと公園に訪れた者はそんな彼らの姿を見て、いったいどんな関係だろうと首を傾げては、少女の尋常ならぬ威圧感に押されてすぐに公園を後にしていた。

彼らの醸し出す異様なプレッシャーがことごとく他者を阻んでいるのである。そんな重苦しい空間の中で、ふいに軽快な電子音が鳴り響いた。少女は音の発生源である少年の方にすっと視線を向けると、少年は慌ててポケットから携帯を取り出した。そして、しばら

く画面を眺めてから少女に言った。
「夏音くん。もう帰ってくるそうです」
「そう……いよいよね」
少女はそれだけ呟くとすっとベンチから立ち上がった。その瞬間、一陣の風が吹いて少女の服をはためかす。
これから出陣である、とでも言わんばかりの雰囲気を醸し出しつつ少女はとてとてと数歩前に歩み出る。それからじっとその様子を眺める少年に振り向くと、射貫くような視線をぶつけてから厳かな口調で、
「今からあなたを殴るわ」
「ってハイ!!?　何で!?」
「そして私を殴りなさい」
「いやいやいや！　一昔前の青春ドラマじゃないんだから！　ていうかその意図がまったくわかりません！」
少女のとんでもない発言に少年も思わず立ち上がった。情けないくらい声が上擦っているが、急に殴ると言われて平常でいられる者は少ないだろう。
「知れたことよ。気合いを入れる他にあるまい」
きっと目を眇めて厳粛な態度を崩さないまま、少女は短く言い切った。
「何でそんな見た目で超体育会系なんですか！　嫌ですよ！」
そんな理由で殴られるなど、まっぴらご免である。七海の強い反発を受けて少女の眉が厳しくつり上がる。
「何よ情けない。とある偉人はね、そうやって信者達に渇を入れてきたのよ。そして頬をぶたれた後にこう答えるの……ありがとうございます、と」
「あの……さっきから思ったんですけど、猪木大好きですよね」
その割に故人扱いしているが。
「まあ、あなたがあまりにへにゃんとしてるから見かねたんじゃない」

「すみません。謝りますから、殴らない方向で」
「……ふん。へにゃ××野郎ね」
仕方ねーな、とヤレヤレなポーズを取られて少年は言葉を失いかけたが、何とか心が折れる前に踏みとどまった。
「あの堂島先輩。僕はあなたがいることを夏音くんには言ってないんですが、やっぱりなんか騙すような感じで心が痛みますよ」
縦ロールをばさりと翻した少女、堂島めぐみは自分が立花夏音に話があるにも関わらず、初対面の後輩である七海に連絡をとらせた。
何でもファンクラブの者が彼に連絡する日にちは決められているので、それ以外のコンタクトは許されていないのだという。どれだけ嫌がられているのだ。
「仕方がないじゃない。あなたの方が友人というポジションで近しいんだから警戒されないでしょ」
「いちおー警戒されるかもって自覚はあるんですね」
めぐみはそれに答えず、再び大股でベンチに歩むとドカッと腰を下ろした。
七海はその動作を見守ってしばらく立ち竦んでいたが、やがて自身も腰を下ろした。
それから先ほどと変わらない状況に舞い戻ってしまった。先ほどと違う点は、横にいる先輩が憧れの人物ともうすぐ会えるおかげでウキウキとしていることだ。
その横に仏頂面で佇む七海の頭の中はこんな一言で占めていた。
今日は厄日である、と。
何を隠そう、初対面の人物から傍若無人の振る舞いを受けたのは初めてではない。
否応なく一人の少女の顔が頭に思い浮かんでしまう。つい先日、涙と共に桜高を旅立っていった女の先輩。
彼女の存在はいつでも七海の心に重くのしかかってくる。外面だけは最上級のもので、それだけでなく成績優秀、眉目秀麗な上に仕事もできた。面倒見もよく誰にでも頼られ、好かれるような理想の

先輩。一方でひたすら烈しい気質を七海に隠さず、どちらかというと七海にとってはとてつもなくおっかない先輩の筆頭であった。

七海は、彼女のおかげで相当打たれ強くなったと自負している。彼女との日常的なコミュニケーションはたいてい痛みを伴ったが、それでも彼女が七海に与えてくれたものは悪いものばかりではない。

一年という短い間にも色々あった。語り尽くせないほど特濃の、色々が。

彼女が卒業式の日に自分に声をかけなかったことは七海の心の中に鈍い澱のような形となってしつこく残留している。

取り払うことはできない、鈍い痛みが彼を苛ませていた。

良くも悪くも強烈な人だったのだ。忘れることなどできないし、あの代の生徒会の先輩達がいなくなることは人並み以上に七海を悲しませた。

今の七海に残っているのは漠然とした寂寥感。次第に暖かさを増す春の日差しと共に気分も落ち着いてくるかと思われたが、まだ七海の心を温めきるまでには至っていない。

そんな中、現れた一人の少女が七海を現在進行形で悩ませていたりする。堂島めぐみはどことなく似ている気がしたのだ。姿形ではなく、この破天荒な一面が。そして、その奔放さが全て七海に対してはちゃめちゃな結果で働くという部分すらも。

あの先輩が去ってすぐにこれはない、と七海は独りごちる。

せっかく自分を叩きのめしてしまうような人間がいなくなったというのに、平穏な日々は自分に訪れないのだろうかと涙がほろりである。

しかし、同時に沸き上がってくる気持ちを心の奥底に封じ込めるのに必死でもあった。

「ちくしょー」

内心の一言が表の世界に漏れているとは知らず、七海は歯を食いしばっていた。隣でそんな七海の様子を横目で見ているめぐみには気付かず、ひたすらどこを見るともなく考え事をしていたのだが。

「ねえ、後輩」
「へ？　何ですか」
「あんたも悩みがあるなら聞いてあげようか」
「は……と、とつぜんなんですか！　僕に悩みなんて……ていうか今は夏音くんの悩みでしょう？」
「それは、そうだけど……」
釈然としない様子で引き下がった彼女との間に沈黙が流れていく。
「風が……だんだん強くなってきましたね」
「そうね。春が近づいている証拠だわ」
「今年は桜の開花が遅いようですが」
「ええ。なかなか卒業式と同時に、とはいかないわね。先輩が嘆いてたわー」
「先輩にも、先輩がいるんですか？」
言ってから頓珍漢な質問になってしまったことは自覚したが、七海としてはこの堂島めぐみから先輩、という言葉が出るとは思わなかったのだ。何となく。
「私にもいるに決まってるじゃない。それに私、部活にも入ってるから」
「へえ、そうなんですか。どちらの部活に？」
「バトン部と文芸部よ。文芸部の方はあんまり参加できてないけどね」
「へー、バトン……似合いそうです。なんかこう……くるくるした感じが。バトン部は綾部部長でしたよね。うちの先輩が仲良くてたまに生徒会室に来てましたね。あと文芸部……木村先輩とは何回かお話したかなあ」
「ああ生徒会だものね。あの人、変わってるでしょ？」
あなたには言われたくないでしょう、という言葉は呑み込んで七海は頷く。
「木村文子。初見でよく文字って読まれるんだーって言ってたような」

「そう。文芸部にはぴったりだって。ペンネームは木村文字っていうのよ」

そう言ってめぐみはおかしそうに体を震わせた。

「文芸部ってことは先輩も物語とか書くんですか？」

「私の場合は詩作とかが中心ね。小説も好きだけど、詩の方がより私らしさを出せるっていうか性に合ってる気がする」

「へえー。僕は創作の才能がないから憧れますね」

「そう？　やってみればわからないわよ。意外に楽しいかも」

「そんなものですかね」

「そんなものよ」

もしかしなくても、七海とめぐみは出会ってから初めて日常会話というものを行っていた。初対面から数時間、長い道のりである。

数時間前までこんなとりとめのない会話を彼女と交わすことになるとは想像できなかったので、七海は小さな感動を覚えた。七海の周りは突拍子のない性格の人ばかりだが、どの人達もこういう普通な一面があるということを知る度、不思議な気持ちになる。どんなに風変わりな人だって結局は同じ人間なのだ。

思えば中学の頃までは人と深く付き合ったことがなかったのだと気付かされる。高校に入り、一年を過ごして少しだけわかった人間というもの。以前まで、美人は美人という生き物で、人気者は人気者という生き物なのだと思っていた。

それが今になってよくわかる。自分のような何の取り柄もないような地味な人間と根本的には変わらないのだと。

風がまた強く吹き、制服の隙間に入り込んできた。肌寒かった風はいつの間にか温かい温度を孕んで心地良いものになっていた。

これからこの公園を訪れる人物との間に何が起こるのか。不安は少しだけあるが、いつの間にか七海の心は少しだけ落ち着きが取り戻っていた。

と思っていた頃が懐かしかった七海である。

それから時間が幾分か進んだ。

状況を整理したいと思っても思考が追いつかない。

現在、目の前では堂島めぐみに襟元を締め上げられて青ざめている立花夏音の姿がある。彼を締め上げている張本人はというと、瞳を固く閉じて興奮気味に息を荒立たせている。彼女も自分がやっている行動を理解していない様子で、とにかく勢いの赴くままに憧れの人に恐喝体勢をとっているようである。

＞ｉ２９６８２―３０２９＜

どうして、こうなった。

七海はそっと瞳を閉じ、目の前で繰り広げられる光景を視界から追いやった。

なんとか落ち着いてあっちこっちにぶっ飛んでいる記憶を手づかみでたぐり寄せてみた。

あれからしばらくして、立花夏音は公園に現れた。滅多にお目にかかれない私服姿の彼はどう考えても女物の洋服に包まれていたが、そこは力を振り絞ってスルーした。似合っているから、いいやと自分を最大限に妥協させた。

今は洋服の問題ではない。

プライベートスタイルのまま、しぶしぶといった様子で現れた彼はまずベンチに座る七海の姿に目を止めた。そして当然のごとく、七海の隣で仁王立ちしている少女の方へ視線をずらす。

瞬間、決まった彼のＵターンはそれはもう華麗なものであった。

おそらく脊髄のみを介した反射的な動きだったのであろう。
ズバッと公園からエスケープを試みた彼は俊足といっても誇張ではない速度を出した。そういえば体育の短距離走だとクラストップだったのを思い出した七海は、その時点で会話もままならずに話合いは終わってしまったのだと確信した。
その後、カール・ルイスを彷彿とさせる綺麗なフォームで公園を駆け抜けていくめぐみが一瞬で彼にいともたやすく追いついてしまうまで、少なくともそう思っていた。
彼女が夏音にタッチした瞬間、「ギャーーーー」と叫んでピタリと足を止めた彼が恐る恐る振り向いて捕捉者を見詰める表情には恐怖以外の何も存在しておらず、慌てて二人に近づいた七海はさらにめぐみがとった行動に仰天するのであった。
「か、夏音さん逃げないでください！」
彼女としては心から逃げて欲しくなかったのだろう。だから彼の逃走を防ぐために彼をがっしり掴むことは間違いではない。
ただ、その掴み方がどうして彼の首を締め上げることになるのだと七海は疑問を放たずにはいられなかった。
「何故っ！？」
最早、ミラクルである。友人を慮る以前に魂の底からわき上がった叫びは悲しきかな、無視された。
それからしばらく会話も何もなく、七海が短い回想をしている間、ガッチリと彼をホールドした手を緩めないまま時が経つ。
「……ハッ！　私ったら！」
急に純真無垢な少女のような声をあげためぐみは自分の手がしでかした粗相に心底驚いた様子だった。慌てて手を離し、夏音を解放するや彼から飛び退いた。
「夏音さんごめんなさい！　つい！」
つい、では済まない気がするが、七海はザ・恐喝スタイルから解き放たれた夏音がすぐに逃げ出すのではないかと彼の行動を見守った。しかし彼のとった行動は七海の斜め上のさらに大気圏を越えた

あたりに突っ込んでいった。
　表情を無くした彼は油の切れたカラクリ人形のようなぎこちなさでふらふらと立ち上がると、おもむろに尻ポケットから財布を取り出した。
「す、すいません……これで勘弁してください」
　そして財布を両手で献上するように差し出し、頭を下げる。
「えぇーーっ！！？」
　いっそ潔いくらいの逃げの姿勢。立ち向かうどころか全力で後ろ向きに向かっていく夏音の対応に七海は驚愕を露わにした。
　そしてその姿がどういうわけかやけにサマになっていることに愕然とする。
「やめてください！　そういう冗談はいくら私でもきついです！」
「いや。わりと堂に入った姿でしたが先輩」
　まず、冗談には見えなかった。今日一日の彼女がとった行動にセットでついてきそうなシーンではないか。七海はいつ彼女から財布出せ、と言われるかドキドキだった。
　逃げる相手を捕まえて首を締め上げるという行動を無意識でやってのける人材としては、割と慣れてんじゃないの？　とか言ったら流石にブチギレられそうだったので七海は口を噤んだ。
「今日は私が彼に頼んで夏音さんを呼び出してもらったんです」
　七海の方を指さして述懐しためぐみはさらに続ける。
「私……夏音さんが抱える悩み、わかってあげられると思います」
　言い切った。どこからその自信が湧いてくるのだろうかと七海は呆れたが、彼女の言葉はどこまでも本気だった。自分の発言を何一つ疑っていない者だけが出せる言葉の強さがある。
　顔を上げて財布をしまった夏音は、七海の方にちらりと視線を向けてから彼女をじっと見詰めた。
　怒っている風でもなければ、悲しむ様子もない。ただ、ひたすら彼女に対する感情を持て余しているようなに困惑したまま口を半開きにしている。

やがてそっと瞼を閉じて、息をついた。
「めぐみちゃん……そんな大事じゃないから大丈夫だよ」
その言葉のどこまで嘘なのか、七海には判別がつかない。自信をもって彼を判断できるほど七海は彼を理解しているわけではない。
ただ、何となく。
彼がこの場を逃れようとしていることはわかった。つまり、七海がわかることを彼女が看破できないはずもなかった。
「嘘です。大丈夫じゃない人ほど大丈夫って言います」
「……」
「お節介だと思いますよね。たかがファンクラブの会長が……たかが凡愚が何を言ってんだろって」
卑屈すぎだろ、と七海は心に思った。
「そんなことはないよ！　決して、誓ってそんなことはない。俺は誰の言葉だろうと自分を想ってくれる言葉に優先順位はつけないよ」
少しだけ語気を強めた夏音が否定の言葉を返す。めぐみはあくまで真摯な態度を貫く彼に予想外そうに微笑んだが、すぐにぎゅっと表情を引き締めた。
「私は……ずっと考えてました。私があなたの大切なものになれることはないだろうけど、私の大切な気持ちを受け取ってくれる方法を」
「大切な気持ち？」
「たぶん、あなたが真剣に耳を傾ける言葉を持つ人には私はなれないんだと思います。悲しいけど、それでもいい。一方通行でも、いい」
要領を得ない言葉を紡ぐ彼女の言葉にも夏音は真剣に耳を傾けていた。真っ直ぐに視線を彼女に向け、その言葉を体に入れようとしている。
七海はめぐみの言葉を聞いてそうではないんじゃないか、と思う。こんな風に、彼はめぐみに対して真剣だというのに。それともめぐみが言っている真剣な言葉とは別の意味を持っているというのか。

「悩んでいてもあなたが腹を割って話せる人は、ここにはいないでしょう？」

「……そんなこと……」

ない、と続けようとした彼の言葉はそのままにしていたらどう続いていたか定かではない。それでもめぐみは彼の言葉に被せるように強く言い放った。

「あるでしょう？　だって、あなたは遠くから来たんですもの。遠すぎて、遠すぎて……こんな場所にいて誰が味方なんですか？」

「君はさっきから何を言ってるの？」

「この後輩から」

と再び七海を指さし、

「夏音さんと軽音部で起こったことはだいたい聞きました。何が起こったのか、この後輩はよく分かってないみたいだけど、私にはわかります」

単刀直入にそう続けためぐみは視線を揺らがせることなく、彼を見据えている。それに対して夏音は表情の選択に窮しているようで、感情の狭間を行ったり来たりしているような印象を放つ。

「みんな、わかんないよ……きっとわかんないんだ」

どこか危うげな響きを含みながら夏音は震える唇を動かして言葉を紡いでいく。

「時々、とても辛くなる。ここじゃない場所に逃げたくなる」

「あなたの言う逃げ場所は……逃げるための場所なんですか？」

「……そうであってはならないんだろうけど……結局、今はそうなっちゃうんだろうね。すっかり逃げ癖がついちゃったみたいだ」

自嘲するように微苦笑してから夏音はふっと空を見上げる。太陽は雲に隠れているのに、眩しそうに目を眇めた。そして彼の瞳と同じ色の空をすぐに視界から追いやり、再びめぐみの顔に視線を戻す。

「ま、すっかり自己嫌悪なわけですよ。実際ね」

「今のあなたはそんな風に笑うしかないんですね」

「人間って本当に困ったらたいていこんな表情になるんだよ」

「私は……あまり好きじゃありません。夏音さんにはいつも素敵な笑顔でいて欲しいから」
偽物くさい笑顔を貼り付ける夏音とは反対にめぐみの表情は曇っていた。彼女は心から悲しそうにうるんだ瞳を夏音に向ける。
それから意を決したように彼女は自身のとっておきの言葉を出した。
「カノン・マクレーンさん」
「え……なん、で？」
限界まで瞳が見開かれた状態で固まった夏音は、得体の知れない物を見るような目つきでめぐみを凝視した。
「……知ってますよ……知ってましたよ、私」
静かな口調で告白するめぐみは辛そうに笑った。
「知ってたに決まってるじゃないですか」
今度はからっとした口調で、それに似つかわしい笑顔で。
「う、うそ……君が、知ってたのに……どうして？」
「だってあなたが隠そうとしてるのに、私がそれを明らかにするはずないですよ」
「え……ていうか……えっ！？　マジで知ってた感じで！？　いつから！？」
「えっと……あれは私が小学生の時だから七年前ですね」
「超前じゃん！」と悲鳴まじりに叫ぶ夏音。
「それはもう。私はこの学校では誰よりも早くから夏音さんのファンだったわけですね！」
それが彼女の誇りなのだと言うように胸を張るめぐみ。そんな彼女をまじまじと見詰めていた夏音はショックが抜けきらない様子である。
「ちょっと……ちょっと整理を」
夏音は眉間を押さえながら、呟き始めた。
「いや、待てよ……彼女は知っていてファンクラブに……でも、あれ、何かわかんないや……Ｏｈ　ｍｙ…」

それから頭を抱えて英語まじりの独り言を続ける。明らかに小パニック状態に陥っていた。

「あのー夏音さん。これには事情がいくつかあってですね」

「な、ならそれを話しなさいよ！」

「は、はい！」

なんだか自棄になっている節が見られる夏音がそう言うと、めぐみは慌ててその事情という物を語り始めた。

「ちょ、ちょっと長くなっても？」

「いいから！」

堂島めぐみの両親は互いに一流企業の第一線で活躍する働き人である。働き人、と言えば聞こえはいいが、それが純粋に社会人という言葉を指して終わるものではなかった。

典型的な仕事人間の父親だけでなく、女身一つでコネを使わずにゼロから現場たたき上げで現在までの地位を築いた母親もそれは見事な仕事中毒を患っていたのである。

めぐみは母親がどんな過去をもって、そうなったのかは知らない。それでも、めぐみの目には何かに取り憑かれたように仕事に向かう両親の中でも、母親の姿はとりわけ異常に映った。めぐみは時折、仕事に依存する自分の母親はそれに縋り付かなければ死んでしまうのではと思う時がある。

実際、彼女は彼女が産まれてからも、すぐに子育てをベビーシッターに預けて遅れを取り戻すかのように働きづめだったらしく、さらに父親は家庭をまわすことに興味がない。幼少時に家族で団欒した記憶はほとんどない。

絵に描いたように冷え切った家庭環境である。夫婦は互いに仕事と婚姻を結んだかのように振る舞い、一人娘にかける愛情との比率を数値に表したら世にも残酷な値が明らかになるだろう。愛が皆無かと言えば、そうでもないが感じられる温もりは極々わずかなもの

である。

彼女は幼稚舎で出来た友達と互いの家で遊んだ記憶もなく、母親よりも遙かに年上の家政婦しか話し相手がいない幼少期を過ごした。それからエスカレーター式であがった小学校も似たようなもので、家に友達を招くことは原則的に禁じられていた。

両親はめぐみが朝起きる前に出社して、夜は彼女が就寝してから自宅に帰るので、平気で一週間ほど顔を合わせないというのも稀ではなかった。両親のどちらかが家にいる間のみ、めぐみは友達と遊ぶことを許されていたが、そんな状態で彼女が友達の家に遊びに行くことは数えられるほどだった。

このように唯一の肉親との繋がりすら希薄な生活に、幼い彼女の心が冷え切ってしまうのも無理はなかった。彼女は滅多に笑わない子供になり、次第に心を閉ざしていくようになる。

あまり笑わない不気味な子供。いつの間にかそんなレッテルを貼られていることも知らず、彼女は与えられた籠の中で順調に育っていた。

彼女の世界は学校、自宅、そして週のほとんどを埋め尽くす習い事だけで、それもいつの間にか両親に始めさせられたものだった。

英会話、茶道、華道にピアノ、フルートに水泳、合気道。深窓のお嬢様の道を地で突っ走るようなお稽古リストである。そこに両親のこだわりがあったのかは分からない。

彼女にとっては強制的に始めたものであったが、それでもただ一人でいるよりかは何倍も輝いている時間であった。茶道と華道はあまり性に合わなかったが、思い切りプールで泳ぐのは気持ちが良かったし、足の裏が擦りむけてボロボロになっても優しくも厳しい道場の先生や気の良い門下生と一緒にいられる合気道は彼女の救いとなった。

ピアノやフルートは音楽の世界に没頭するというより、次々と難しい曲を弾きこなしていくだけの作業に思えてあまり好きになれなかった。

決められた時間以外のテレビを観ることは許されず、流行の音楽シーンはまるで彼女の耳に入ってこない。当然、クラスメートが話すアーティストの話についていけない筈もなかった。

めぐみにとって音楽は好きになったり嫌いになったりするものではなく、与えられたノルマをこなしていくだけの作業の一環でしかなかったのである。前より早く指を動かせるように、難しいリズムを完璧にする。

失敗したら怒られる。怒られないように弾く。

ピアノの先生は外国の音楽用語を連呼してはめぐみを責めることもあり、少なくとも楽しいとは到底感じられないものだった。

世界が色づいて見えることはなかった。

物心がついてからめぐみにとって世界は常に色彩を欠いたモノトーンが支配していた。

生まれた時からそこにある世界を人はどう受け取るのだろうか。それ以外の世界を知らない子供はそれを当然のものだと認識するに違いない。だがめぐみは同い年の子よりは遙かに本を読む子だったので、自然と思考も進んでいく。

彼女は今、自分が享受している世界は何なのか。何故、自分は自分として生まれたのか。クラスの子たちが話すエピソードを皆が当たり前のように共有しているのは何故か。

誰も答えてくれない疑問に取り憑かれた。

常に考えても彼女は答えを出すことはない。答えは出ずとも、今の状態が正解であるはずがないということだけは分かった。

そんな生活を送る中でも、一家が揃って出かける機会はあった。年に一度、家族で海外にバカンスへ行くのが堂島家では習わしとなっていて、その時間だけは両親が仕事に出て行くこともなく、形だけでも団欒を味わうことができた。

ある年。めぐみの人生を大きく変えるその年はアメリカの西海岸

を巡る旅だった。

西海岸を北から南へ列車を使う度。オレゴンの田舎からカリフォルニアまで海岸沿いに向かい、ロサンゼルスへと辿り着くと、そこで有名なコンサートホールで行われるコンサートを観に行く予定であった。

コンサート自体は全くもって興味がなかったのだが、めぐみにとって予想外だったのは、それがクラシックのコンサートではなかったことだ。

クリストファー・スループ・ビッグバンド。ベース界の巨匠がビッグバンドを引き連れて演奏を行うのだ、とめぐみの父親が隠しきれない興奮を滲ませて語るのが不思議で仕方がなかった。

自分の父が音楽にそこまで興味があるとは知らなかったし、めぐみにはクラシック以外の音楽を禁じているくせに自分ばかりズルイと思ったりもした。それ以前に父親が子供みたいにはしゃぐ様子が珍しく、同じように楽しみだと首肯した母もいつもと違った様子であったことに小さく驚愕した。

後に分かったことだが、この二人は音楽の趣味がよく合うらしい。それが交際のきっかけにもなったほどだそうだ。

そんなことを露ほど知らずにめぐみも次第にこれから観に行くコンサートに強く惹かれていった。

あの両親がそれほどまでに夢中になる音楽家とは、いったいどんなものか。

コンサート当日。クラシックやオペラを観に行くわけではないとしても、最低限のドレスコードはある。めぐみは普段、滅多にできないおめかしを施されて会場に連れられていった。

ドロシー・チャンドラー・パビリオン。ロサンゼルス・ミュージックセンターの中にあるアカデミー賞授与式に使われたこともある歌劇場である。

会場は三千以上の座席が備わっている広壮な造りで、少しでも手を離したら迷いそうだった。めぐみは母親と手をつなぎながら、ぞ

ろぞろと会場に呑み込まれていく観衆に圧倒されていた。
周りにいる客は言わずもがな、外国人。こんな所で一人になってしまった暁には、二度と日本には帰れないかもしれないと考えためぐみは、しっかりと母親の手を握り直した。
入場する客の流れも落ち着き、開演まであと三十分ほどのことだった。会場に圧倒されてソワソワしていた彼女は自分が自然と下腹部に力を入れたままだということに気が付いた。人間として誰もが催す生理現象だ。ここで我慢したりすれば、開演後ずっと地獄を見るハメになる。挙げ句粗相をしてしまったらたまらない。
それで素直にトイレに行きたいと母親について来てもらったのはいいものの、彼女の母親はとんでもなかった。
化粧室の鏡の前でじっとめぐみを待っていた彼女だが、ふと携帯の着信音がトイレに鳴り響いたと思うと「あ、いけない。電源切ってなかったわ……はい、私だけど」電話に出た。
用を足す最中だっためぐみはこれに愕然とした。電話に出たまではいいが、個室の外にはうろうろと歩き回る母親の話し声がそろそろと遠のいていくのだ。
「え、お母さん……お母さん!?」
トイレの中からいくら叫んでも母親の応えはない。用を足し終えた彼女は急いで個室から出たが、母親の姿はそこにはなかった。
「お母さん?」
最低限のマナーとして手をちゃっと洗うと、めぐみはトイレから出て母親の姿を探した。しかしどれだけ辺りを見渡してみても見覚えのある人の姿はない。
この時、実は背の高い外国人ばかりで見えなくなっていただけで、めぐみの母親はすぐ近くにいたのだが、そんなことはこの時のめぐみに分かるはずもない。
迷子になるまい、と決意していた矢先の出来事だった。軽くパニックになった彼女はそのままふらふらと母親の姿を求めて歩き出した。

おそらく人生初の迷子に恐慌状態の彼女は泣くわけでもなく、ただひたすらに「怒られるどうしよう」と嘆いていた。先ほどから自分に突き刺さる肌と瞳の色が違う人々が怖かったこともある。

無意識のうちに足早に会場内を歩き、気が付けば人気のない場所にいた。

「ここ、どこだろ……」

先ほどまで関係者と思しき人間や観客の姿があったのだが、歩いている内にすっかり奥行った場所へやって来てしまったらしい。

とりあえず母親はこの場にいないだろうと思い、来た道を戻ろうとした時だった。

「Ｈｅｙ」

その時、めぐみの耳朶に触れた声は不思議と彼女の中にすっと入り込んだ。両親のものではない。この異国の地で自分に声をかけてくる人間に安心感を抱けるはずがないのに、どうしてかそのどこか幼く、甘い声の主は悪い人ではないと感じた。

顔を上げると、そこにはめぐみが今まで見たことのない綺麗な生き物がいた。まるで物語に登場する妖精だとかお姫様なんです、と言われた方が納得できるくらいその美しさが浮き世離れしている。めぐみは思わず口を半開きにして惚けてしまった。

「ふぁ……」

「Ｗｈａｔ、ｓ　ｙｏｕ　ｕｐ　ｔｏ？」

だが、その生き物は妖精ではないらしい。可愛らしく小首を傾げてフランクな笑みを浮かべながら何かを尋ねてきている。その容姿にぼーっとしてしまったためぐみには何を言われたのかすっかり理解できなかった。

彼女、のはずだが。思わず言葉をなくしてしまうくらいの美少女なのに、燕尾服を着ている。襟元を飾るちょこんとした蝶ネクタイが微笑ましい。こんなに美しいのだから自分のようにスカートを履けばいいのに、とめぐみは暢気に考えた。

めぐみが何も喋らないでいることに少しむっとした様子の彼女は

しばらくじーっとめぐみの顔を見詰めると、自信なさげに声を出した。
「Ｕｈ……Ｊａｐａｎｅｓｅ？」
「イ、イエス！」
英語を習っているとはいえ、土壇場でネイティブと会話できる度量はめぐみにはなかった。だが、彼女が疑問系で話した言葉くらいは理解できる。
「あー日本人！！」
すると、どうだろう。なんと明らかに外国人の子供から流暢な日本語が飛び出してきた。と思った途端、彼女はぱぁっと瞳を輝かせ、めぐみに体を寄せてきた。
「こんなところで日本人に会うなんて！」
唐突に距離を縮められたことにびくっとしながら、めぐみは言葉が通じることに安堵した。
「え、えっと……日本語うまいね？」
「Ｄａｄｙが日本人だからね！」
「そ、そうなの」
「君は一人なの？」
「うん……お母さんがはぐれちゃって」
「迷子だね！」
太陽のように輝かしい笑顔で馬鹿にされた気がした。めぐみは事実、そうなのだから腹を立てることもなく頷いた。
「元来た場所わからない？」
「ううん。来た道を戻ればいいから」
「君のＭｏｍも探しているかもね。アナウンスでもかけてもらう？」
「いらない。たぶん席に戻ってるかも。お父さんは席にいるから何とかなるかもしれないし」
「ふーん……ねえ君、すっごくつまんない顔してるねー」
「……っ」
無垢な響きをもったその疑問にめぐみは言葉を失ってしまった。

白色人種に比べれば日本人は平坦な顔をしているだろうが、そんなにストレートに訊かれてもどう答えろと言うのだろうか。自分の顔に特別コンプレックスはないが、この時ばかりは自分の顔を覆い隠したくなった。

「余計なお世話よ」

「あれ、怒った？　怒らせること言ったかな……」

しらをきるか、この……とめぐみの顔がさっと赤らむ。頬をかいて苦笑いをする彼女はしばらくむっと押し黙るめぐみの肩をぽんっと叩いた。

「ごめんね！　何か悪いことしたみたいだから、お詫びをさせてよ！」

「お詫び……何するの？」

「今日、俺も演奏するんだ」

「え……？」

めぐみは我が耳を疑った。目の前の少女がこれから開始される演奏に参加するというのだろうか。何千人もがお金を払って観にくるコンサート。めぐみの両親でさえワクワクと胸を躍らせている（ように見える）このプロのコンサートに自分とそう年が変わらないような少女が出演するなどとはにわかに信じがたいことであった。

「嘘よ。今日のコンサートはすっごーい人たちが出るんだってお父さんが言ってたもん」

「嘘じゃないよ。俺だってプロだもの」

「あなたが？　子供なのに」

めぐみは疑りの目を不躾に彼女にぶつけた。めぐみの中では、プロの人達は皆大人の人、というのが常識だったのだ。

「子供でもプロになれるんですー」

未だに自分の言葉を信じないめぐみに彼女は口を尖らせて目を眇めた。

「オーケィ。だったらお詫びもかねてリクエストを聞いてあげる！」

「リクエスト？」

「うん。俺のソロがあるからその時に君の好きな曲をやってあげる。あ、知ってる曲じゃないと無理だけど」

堂々と俺のソロ、などと虚勢を張る彼女に対してめぐみはふん、と鼻をならした。あくまで出演者などと言うのであれば思い切り無理難題を押しつけてみようと意地悪く考えた。

「……おにび」

「Ｗｈａｔ？　Ｏｎｉ…？」

「鬼火！　リストよ。全く期待してないけどできるものならやってみてよ」

こんな綺麗な子に何て意地悪を言っているのだろう、と言ったそばから自己嫌悪をするめぐみだったが、一度発してしまった言葉は飲み込めない。

ぽかんとしているその少女を放って席に戻ろうとめぐみが踵を返すと、後ろから慌てたような声が追いかけてきた。

「ちょっと待って！　君はそのオニビっていうのがいいんだね！？　好きな曲なの？」

途方に暮れているだろうと踏んでいたのだが、意外にへこたれていない。その外見に加えて根性まで据わっているなんてとんでもない。

めぐみはそっと首だけ動かして振り返ると、

「リストは好き。弾けないけど、先生が前に弾いてたのが格好よかったの。超絶技巧練習曲第五番。変ロ長調……あなたも聴いてみるといいよ」

手短にそれだけ言うとめぐみは歩幅を大きくしてその場を去った。去り際に「え、へんろちょーちょーってなに！？　なーにー！？」という叫びが聞こえた。放っておいた。

席に戻る前にトイレの前を通りがかると、母親が電話越しにガミガミと怒鳴っている姿があったので一安心して先に座席についた。

開演まであと僅かの時間しかない。場内はオペラやクラシック会場のような静寂が保たれているわけではなく、開演間近の興奮のせ

いでかなりざわめいていた。
めぐみはふと目を閉じ、網膜に焼き付いて離れないあの鮮烈な「色」を思い返していた。輝けるブロンドに夏の碧空のような澄んだ瞳。おまけに何故か男っぽい口調。
家族もさぞかし美形なのだろう。そんな周囲に取り囲まれていたら自分の顔がつまらないというのも無理はない。
彼女がもしも……万が一にでも本当にステージに上がるとして、自分のリクエストした曲を弾けるはずがない。そもそも、彼女が何の楽器をやっているのかも知らないのだ。
本人もそこを最初に言っておくべきだと思った。
めぐみがそんな風に思索に耽っていると、会場の照明が一気に暗くなる。会場中に爆発したような歓声と拍手が沸き上がると、いつの間にかほとんどの人間が立ち上がって一点を見詰めていた。

ステージが始まる。

一言で言えば、圧巻だった。
ドラムのカウントの後に続く重厚なブラスの音が壮大なステージの幕開けを会場に知らしめた。その時点でめぐみはあらゆる感情がごちゃまぜになって皮膚が粟立つのを止めることができなかった。とんでもない音圧。ほとばしる何か、目では捉えられない熱を持った何かが大気中を暴れていた。
生でエレキギターの音を聴くのも初めてで、次々に始まるトランペットやサックスのソロに会場は序盤からヒートアップする。
初めて直に触れる音に圧倒される中で、めぐみには決して耳に離れない音があることに気が付いた。
ステージの上を縦横無尽に歩き回りながらベースを弾く男。びしっとした白いスーツに身を包まれた壮年の黒人男性こそがクリストファー・スループなのだと本能的に理解させられた。
これほどまでに大人数のプレイヤーの中で決して埋もれることは

なく、演奏を支える重低音。変幻自在な音は時に最前線に飛び出てきて好きなように様々な楽器と絡んでは、他の楽器を際立たせるような裏方にまわる。

巨匠。こんな言葉が頭に浮かんだ。オーケストラの指揮者のようにタクトを振っているわけではないが、彼がこの音楽家達をまとめているのだ。

とりあえず彼が何をやっているのかめぐみに分かったところはそんな所である。後はもう見識の遙か上をぶっ飛ぶようなプレイでめぐみの心を震わし続けるのであった。

気が付けば、万雷の拍手と共に演者達がステージの奥に下がっていくところであった。結局、演者の中にあの少女の姿を見ることはなかった。やはりハッタリだったのかと肩を落としたところで、この演奏が終わってしまうことは残念で仕方がなかった。

「もう終わりなの……」

誰に尋ねるともなく呟いた一言にめぐみの父親が反応した。

「いや、ファーストステージが終わったのさ。セカンドまで少し休憩なんだ」

次いでにベースの人がクリストファーなのかと訊いたら、そうだと答えてくれた。

それから今のうちにトイレに行く、と席を離れた父親を見送ったところでめぐみは気持ちの奥深くに疼いている小さな感覚が気にかかった。

淡く、くすぐったいそれが何であるのかめぐみには分かる。次のステージで彼女が出てくるのではないか、と期待しているのだ。

「でも本当かな」

人のことを言えないが、あんな子供が今の演奏の中に入っていけるなど到底信じられなかった。

それでも、と彼女は自分の胸をそっと押さえる。

「あの子の演奏、聴いてみたいな」

純粋なる好奇心。自分とそう変わらない年の子供が奏でる音はい

ったいどんなものだろうか。
めぐみの周りには彼女と同じようにピアノを習っている子が多くいる。お嬢様学校なのだから、当然のことだ。めぐみより遙かに卓越した技術を持っている人などざらにいる。それを鼻にかけたりしなければ、純粋にスゴイと思えるのだが。
何となく。
先ほどの少女はそんな子たちとは違うような気がした。種類が違うというか、生きている世界が違うというか。
おそらく彼女は自分の抱える瑣末な悩みとは無縁なのだろう。勝手な憶測でしかないが、自分と違う生き物なのだということくらいは先ほどの一瞬の邂逅だけでわかる。
彼女は、こんなつまらない世界には似合わない。
ステージの上にいたらどれだけ輝ける光を放つのだろうか。それが見たい、強くそう思ってしまうのだった。
セカンドステージは少しだけ編成が変わっていた。休憩中にカーテンの向こうで何やら物が移動したりする音がしていたので、おそらくスタッフが機材を替えたりして動いていたのだろう。
変わったのはホーンセクションの人数だったり、またギタリスト自体が別人になっていたり、細かい所ではアルトサックス奏者がピッコロに持ち替えていたりした。
それでも、ベースだけは何があっても変わらない。そう思っていた矢先のことだ。
「Ｌａｄｉｅｅｅｅｅｅｅｓ　ａｎｄ　Ｇｅｎｔｌｅｍｅｅｅｅｅｅｅｅｎ！！　Ｈｅｒｅ　ｃｏｍｅｓ　ｍｙ　ｌｉｔｔｌｅ－ｌｉｔｔｌｅ．．．．．．．ｐｒｅｔｔｙ……ｂａｓｓ　ｍａｅｓｔｒｏ！！」
クリストファーがマイクの前に立ち、会場中に響き渡るような低音ボイスである一点を指し示した。
「Ｍｒ．Ｋａｎｏｎ　ＭｃＬｅａｎ！！」
またもや会場が沸き立った。瞬間湯沸かし器のように一瞬で沸騰

して落ち着いてを繰り返していた会場だったが、この時は一際目立って歓声が飛んでいた気がした。

人々の歓声の間を縫って現れたのは、

「あ、あの子……」

先ほどの少女だった。

彼女が抱えている楽器を最初はギターだと思ったのだが、弦の太さを見る限りベースらしい。弦が六つあるベースを抱えた彼女は満面の笑みで観客に手を振りながら、悠々とクリストファーの方へ歩み寄って握手してからハグをした。

そこで二言くらい言葉を交わした後に、彼女はアンプに近づいて少しだけつまみをいじってからステージの中央にクリストファーと並び立つ。

会場が鎮まると同時にキーボード奏者がブルージーなピアノを叩き始めた。八小節後に全ての楽器がそれに参加する。

ベースが二本になって何が変わるのだろう、と一瞬でも侮っていた者は次の瞬間に顎を外したのではないかとめぐみは確信する。

自分もその中の一人になりかけたので、聴衆の声なきどよめきはしっかりと理解できた。

ベースのスライドが甲高く伸びた瞬間、二人のベーシストの速弾きが始まった。

指が五本で足りるのか、というくらいの速さ。隙間のない音の洪水が客席に押し寄せる。

クリストファーの包み込むような大らかさと根底にある芯の太い音に対して彼女の音はどこまでも自由でフラットな、それでいて心臓にどくんと響いてくる真っ直ぐな音だった。華麗なステップで舞う踊り子のようにメロディの中をくるくると回って魅了する。

一方が音階を駆け上がるとそのすぐ側でつかず離れずの状態でハーモニーを創る。そうかと思えば、対旋律で駆け下りてきたりと信じられない技巧の数々が繰り広げられていた。

正直、桁違いだった。

クラスの子、なんて考えていた時期が馬鹿馬鹿しい。次元が違いすぎて、比べようもない。

彼女はその存在をベースの音に溶かして世界に放射しているのだ。

その時、ふと目に飛び込んできたものをめぐみは錯覚かと思った。瞬きを繰り返し、目をこすってみる。

また、きた。

視界の中に、というより視界の奥に不思議な現象が起こった。音が色になって見えるのだ。

それは極彩色だったり、柔らかいクリーム色だったりする。それでも一番強く主張してくるのは眩くもずっと見ていたくなる黄金色の鮮烈だった。

二人の速弾きは終わり、彼女のソロが切なくも軽やかに流れていた。

まるで夕陽に浮かぶ小麦畑に連れてこられたような郷愁と根源的な慈愛が絡み合った情景がめぐみの奥底に入り込んできた。

色褪せた世界に瞬く間に色が塗られていく。

いつの間にか頬が少しだけ濡れていることにも気付かずに、伝い落ちていく涙をそのままにしてめぐみはステージに捉えられていた。

距離だとかを破って空間を突き抜けた音はめぐみの心の琴線を強烈にかき鳴らした。

それからジャズのスタンダードだと紹介された曲が幾つか過ぎていくと、ふと彼女がスタンドマイクの前に立った。

「Ｉ　ｄｅｄｉｃａｔｅ　ｔｈｉｓ　ｐｌａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ」

この曲を君に捧げる。ハッキリと理解できた英語にはっとした。

彼女が言う君とは自分のことだ。

彼女は会場の中にいるめぐみを探すように辺りを見渡すと続けて、

「笑ってごらんよ」

日本語で、はっきりと言った。次の瞬間、彼女にスポットライトが絞られて宙に浮かんだ姿がゆらりと陽炎のように揺らいだ。

一つの音が生まれた瞬間、この場所に宇宙が生まれていた。

今度こそ、めぐみは悲鳴を漏らしていた。

これはピアノ曲の中でも難易度が高い練習曲で、題名に超絶技巧と名がつく通りにとんでもない技巧が詰まっている。それをベースで弾いてしまう人間がこの世にいるとは思わなかった。

神の速度で音が次々に生まれ、音と音の境界線がなくなってしまっている。重音のトリルが聞こえてきたような気がして、めぐみは気絶しそうになった。

ベースであの演奏が可能なのか。裏で機械が弾いているのではないかと疑っても、目が、耳が、肌がそれを否定する。間違いなく。永久に続くような音の連続はこちらに呼吸することを忘れさせ、彼女の音に引きずり込んでくる。

凄まじい音が急に止むと、ゆったりとした美しい旋律へと変わる。どうやら原曲通りに弾いているわけではなく、大まかな音をなぞってほとんど彼女の即興らしい。

「やっぱり……」

また瞼の裏に現れる色の奔流がその正体をめぐみに悟らせた。

それは彼女の魂の色。ソウルと呼ばれる不可視のエネルギー。人から人へ空間を通じて伝わる魂の力なのだ。

力を振り絞って周りを見渡してみると、口をぽかんと開けた状態の人ばかりだった。両隣の両親までもが手のひらで口を覆い、目を押し開いて硬直していた。

皆の魂を捉えてしまうような力がどうしてあの細腕から生まれるのだろう。楽器から彼女の力に共鳴してどこまでも増大していくかのようだ。

滲んでいく。深いところまで。

彼女は奇妙な高揚感に包まれて、息が上気していくのを止められなかった。

（なんだろうこのキモチ）

おそらく忘れかけていた。めぐみがこうなる前は、僅かでもあったはずなのに、なくしていたものが手に触れた。

確実にそれは上昇してどんどん高まっていく。
めぐみの奥深くまで浸透してきた不思議な力はやがて彼女の固く閉じられていた何かをこじあけた。
音の力は重力を増したように身体を押さえつけてくるのに、ナニカが。
せり上がってくる。
めぐみは自分の心の中にうずくまっている黒い物の存在に気付いた。今、彼女の中に入り込んできた音の力がそれを真っ白に染めていく。
めぐみの中の何かが羽を広げ、飛翔するように力強い羽ばたきを起こす。この身の内に、立ち昇る感覚が全身から今まさに抜けだそうとしていた。
それからの現実としての感覚を彼女は覚えていない。
既に彼女の精神は歴史あるコンサートホールの中になどいなかった。
彼女は光輝く大空へと駆け上っていた。大空には全ての色が渦を巻いて彼女を待ち構えていた。
やがて彼女はその色に溶け合い、調和して世界に広がっていく。ここにない景色の中を光の速さで飛び交い、この世の美しいすべてのものを体中で感じていた。
魂が肉体を飛び出して、世界を旅する。
それを可能にしているのは音楽の力だ。これがある限り、どこまでも行ける。
そんな体験をする者がどれだけいるだろう。めぐみは生まれて初めて出すような大声で叫んだ。力の限り、この自由を、そこに在る世界の美しさに感謝して、その身に滾る歓喜の尽くす限りを咆哮に乗せて。
横を見ると、黄金色の魂がいた。
そうか、と彼女は納得する。彼女がこの場所へ連れてきてくれたのだと。

自分とは比にならないほど巨大な魂の塊と共に流星のように世界を巡る。このままこの星を飛び出すこともできるのではないかと思えた。

それでもめぐみはこの時間は有限のものだと理解していた。二つの魂はコンサート会場の上空に差し掛かり、そのまま勢いよく天井を突き抜けて会場に着地した。

どすん、と軽い衝撃を覚えてめぐみが自身の肉体に戻ったのだと理解した瞬間、鳴り止んだ神の音楽の残響を仰ぎ見た瞬刻の後、火山が大噴火したような地響きが会場を覆い尽くした。

めぐみがこれほどの大喝采を見たことは後にも先にもない、といったくらいの拍手だった。総ての人間が立ち上がり、小さく美しい音楽の女神を讃えていた。

めぐみは隣で呆然と座る両親の間からすっくと立ち、手が腫れるくらいの拍手を送った。瞳からあふれ出す涙が顔をぐちゃぐちゃにして、嗚咽を止めることはできなかった。

公演が終わった後も涙が止まらないめぐみを訝しんだ両親が「どこか痛いのか？」と尋ねてくる一方で、めぐみはこの人達は何をピントはずれなことを言っているのだと驚いた。

あんなものを見た後で、平然としていられる理由があるだろうか。

「ほら、ハンカチ」

三枚目のハンカチを母親から手渡された彼女はそれを使って盛大に鼻をかみ、「うわ汚いっ」と悲鳴をあげた母親を無視して、会場の外の風景に目をやった。

「あ……」

つい先ほどまで彼女が自由に飛び回っていた空にかかる虹が目に飛び込んできた。

「あら、雨なんか降ったかしら」

「さあ、公演最中ににわか雨でも降ったんじゃないか？　まあ今は止んでるしちょうど良かったな」

両親はそんな暢気な会話を交わしていたが、めぐみはその美しさ

に心を奪われていた。
虹だけではない。この会場に入る前と、世界がまるっきり違うのだ。
どう違うのか、具体的な部分を挙げることはできない。それでも彼女はこの短い間に世界が変貌を遂げたことを感じていた。
「きれい……！」
それまで、どこか色彩を欠いた堂島めぐみの世界に色がついていた。
虹を綺麗だと思った記憶はなかった。それでも彼女の眼前に大きくその姿を見せつける虹は今まで見たどんな風景より綺麗だと思えた。
どうだ。やっと私のすばらしさに気付いたか。
そんな声が聞こえた気がした。

世界が塗り替えられた衝撃の日から、めぐみの態度は急変した。まるで生まれ変わったように触れる全てのものが真新しく映り、彼女は自分が見過ごしていたあらゆるものにもう一度触れてみようとした。
とりあえず今やっている習い事に全力で向かってみることにした。といっても、やはり茶道も華道も全力で向かうには性に合わなかった。
急に笑うようになった娘がえらく活動的になったことに首を傾げていた両親だったが、特に憂慮すべきこともないかと最初は何も言うことはなかった。それがある日突然、「お茶もお花もやりたくない！！　やめる！」と猛烈な勢いで抗議をしてきた時点で不審に変わった。
もしやこれが反抗期か！？　と人生初の娘による不服申し立てに狼狽えた。
実を言うと娘に習わせている習い事のうち、水泳と合気道こそお互いが得意とする分野だから娘にも習わせたいという一心だったが、

その他のピアノ、フルート、茶道、華道はこれといった理由もなくできないよりかは、まあできた方がいいよな、という程度の夫婦の曖昧な基準によるものだった。

後から聞かされためぐみは「なんじゃそりゃっ！？」と憤慨するが、とにかく習い事の種類自体に固執していたわけではない両親は不承不承ながらめぐみが茶と華の道を捨てることを許可した。

めぐみは茶道と華道の稽古をやめ、それまでに培った微々たる作法なども綺麗さっぱり忘れ去って次々と興味が沸いた事柄に飛びついた。

音楽関連についてはあの強烈な体験によって自身も続けたい意志があったので、ピアノだけは続けることにして、フルートもやめた。

野球、バスケット、サッカーというオーソドックスな球技から、バレエやダンスといった広範囲に渡って体験して、自分に合ったものは続け、合わないものは一週間ほどで足を引いた。

ジャンルを問わず種々な事柄に手を出すめぐみは夢中で何でもやりたがった。自分に足りなかった何かを補うように。ぽっかりと自分に空いていた穴を埋めるように世界にあふれるありとあらゆる事柄を求めていった。

中でも一番大きい決断は高校入学だった。エスカレーターで上がれるお嬢様学校の道をバッサリとかなぐり捨て、彼女は普通の私立校に行くことにした。

両親の反対を全力で抑え、家からも近いしかろうじて女子校だからという理由で選んだのが桜高であった。その一年後に共学化されるとも知らず。

めぐみは普通の学校に行ってみたかった。周りにおハイソな少女が溢れる学校ではなく、自分に足りなかった普通をもたらしてくれる環境。

今やバトン部のエース、文芸部の準幽霊部員、立花夏音ファンクラブの会長という目まぐるしい充実した生活を送るに至る。

「とまあ、嘘のようなホントの話」
あっさりとした口調で締めためぐみは彼女が話した思い出に浸るように遠い目で微笑んでいる。その正面には大きく口を開けたまま夏音が固まっていた。
放心状態の夏音を見てくすりと笑った彼女はその出来事以来、どれだけ夏音の熱烈なファンになったかを話した。
「後からあなたが男だと知って死にたくなったのはまあ、いいとして。まずあなたの大ファンになった私はCDもポスターも全部買ったし、参加したセッションとか他のミュージシャンとの共演したやつも全部部屋にあります。あれから二回だけ日本でやったライブも行きました」
どうやら正真正銘のファンに間違いないようである。
「ただ、活動休止することを知った時は心臓が止まりそうになりました……あなたがこの世からいなくなるわけではないけど、もうあの音を聴けないのかって思うと胸が張り裂けそうで。まさか自分高校に通ってるなんて思いもよりませんでしたけど。学年も下でしたし」
「それ、は……まあ、様々な事情が折り重なった結果このように……」
めぐみはどこか言い淀む夏音に満面の笑みを向けると首を振った。
「ま、別にいいんですけど！　これはー逃すわけにはいかねえってもんでファンクラブ創っちゃいましたし。世間には見せないカノン・マクレーンの姿を間近で拝めるなんてファンだったら気絶ものですよ」
垂涎、というより少し涎が出ている彼女は瞬時に袖で拭うと再びにこやかに目を細める。
「髪の気も真っ黒になってましたし、あまり下級生とすれ違うこともないですから学校祭のあの日まで気付かなかったんです。気付けなかった自分が腹立たしかったですが、とりあえず卒業までは近く

にいられるからいいやーって」
「その……めぐみちゃん」
「はい？」
深刻な表情をした夏音がめぐみに頭を下げた。
「ごめん。今まで思い出せなくて……そんな会話を交わしたっていうのに……大事なことを忘れてた」
めぐみは束の間、憧れの人物のつむじを呆然と眺めていたが、ふっと頬を和らげた。
「それは、いいんです。ていうか頭を上げてください。あなたに頭下げられるのは心苦しいんです」
ゆったり顔を上げた夏音は改めて彼女の顔をまじまじと眺めた。
「そのこと自体は思い出したよ」
そう言って遠い目をする。
「あの時、変ロ長調が何かわからなくて、楽屋でてんやわんや……」
幼き日の夏音はめぐみを見送った後、楽屋で「へんろちょーちょーってなにー！？　なんなのー！？」と大騒ぎをした。事情を聞いた大人達の中で曲名から「B♭メジャーのことじゃないか？」と助言してくれた者がいて、たまたま持っていたウォークマンの中に入っていた曲を聴いて曲の骨子を頭に叩き込んだのである。かくして何とか原曲に近い即興を披露できたというわけだ。夏音はあの時、超絶無茶ぶりに応えた自分を褒め称えたい気分になった。
「まあ今まで見事に気付かなかったというか……記憶の中の君とどうも違いすぎるっていうか……うーん……昔はなかったはずだよなー……くるくる」
視線は立派すぎる彼女の渦巻く髪へ吸い寄せられる。
「え？」
「い、いや何でもない！」
誤魔化すように手を振った夏音に首を傾げためぐみだったが、話を元に戻した。
「とにかくですね！　あなたはあの時、素晴らしい音楽を私に捧げ

てくれたんです。まだ何事においても価値のない私に。世界に色をつけてくれた。このことを他人に聞かせてもその重大性を理解してくれないけど、それはとても尊くかけがえのない贈り物だったんです」

夏音がはっと息を呑む。

「あなたがこんな場所に来たとしても音楽を続けるってことはとても良いことだと思ったんです。どんな時だってこの人は音に囲まれて生きるんだろうなって納得しました。だから軽音部の子たちも一緒に応援することもやぶさかではないと思いましたし、結局のところあなたにとってそこが楽しい場所なら、どこにいてもかまわないんです」

ひときわ強く吹いた風が三人の間を通り抜ける。夏音の絹糸のような細い髪はいとも簡単に風に舞い上がる。めぐみはひと時その光景に目を奪われたが、そっと目を伏せて続きを話し出した。

「でも、本当ならどこまでも羽ばたいていけるあなたの音楽は最早そこにはありませんでした。私は……あの時、私を連れていってくれたあの自由な音をもう一度聴きたかった。学校祭の時はとっても楽しそうだったし、それはそれで納得できるものがあったけど、今のあなたは気が付けば地上に近いところに繋ぎ止められてしまったような……幾つもの鎖があなたに巻き付いてる感じがしてならないんです」

夏音の目尻がぴくっとひくつく。

「その正体がなんなのか、誰よりも夏音さんが分かってると思いましたが」

厳しい口調と化しためぐみの言葉に夏音は耳を塞ぎたくなった。もしくはそこから先を紡ごうとする彼女の唇を押さえつけたい衝動にとらわれた。

しかし、どちらも叶わずに彼女は口を開いた。

「あの子たちはあなたの自由を奪っている。そうじゃないですか？」

「ち、ちが……っ！」

堪えようのない震えを押し殺そうとして失敗した。彼女の言動に明らかに動揺を隠せなかった夏音は何かにすがるように手を動かした。

結局、何もつかめずに力無く降ろされた手をめぐみはじっと見詰めた。

「あなたがそれでいいって割り切るなら私も何も言いません。でも、夏音さん苦しそうなんだもん！　あなたと同じ土俵に立つ人達ならあなたを苦しめることなんてしないで、自由な音楽をやらせてくれる！　ねえ、夏音さん。迷うことなんてないんですよ。本来いた場所にはあなたを待ってる人が大勢います。こんな狭い場所に閉じこもる必要なんてないじゃないですか」

めぐみにとってはかつてのカノン・マクレーンの姿は目に焼き付き、魂を焦がすほどに強烈であった。あり続けた、といっていい。これまで彼女の心の中から決して離れることはなかったのだから。憧れ、という言葉を越えた崇拝に近い感情がめぐみの中で生まれ、なおかつ自分の世界を塗り変えてしまった人間と現在の姿があまりにもかけ離れていることは何事にも耐え難かったのだ。

自分がカノン・マクレーンという存在を勝手に捉えて、それを押しつけるつもりはない。めぐみは自分が見たいものしか見ない、というような愚かな選択はしない。

彼女が問いたいのは、夏音の本音だった。彼が本当に望んでその場に留まっているのか。その一点を考えた時に、在りし日にめぐみが心を奪われた夏音の輝きが萎んでいるように思えるのは、実際に夏音の音楽が死にかけているのではないかと危惧したのである。

「狭くなんて……彼女達は彼女達なりに頑張ってる」

無難な答えが口をついて出たが、これは自分がしっくりくる答えではないと夏音は知っていた。

軽音部の皆が懸命に努力をしていることは事実である。部が始まった当初、それこそ聞くに耐えがたいくらいひどいものだった演奏も、確実に洗練されてきているのが分かる。この一年で自分が口う

るさく彼女達の演奏に渇を入れてきた結果だけではない。相応の努力が紡いできた軌跡を夏音はずっと見守ってきたのだ。丁寧に育ててきた花が芽吹き、成長する喜びに近いものさえあった。

自分の正体を明らかにした後でも、その成長に揺るぎはなかった。夏音の目に映る彼女達は、まだ何物でもない自分達を受け入れて、それぞれがやれることに打ち込んでいる。

何物か、そうではないか。

そこの境界とやらがまさに夏音を苛ませているのだ。

「だからといってあなたが同じ歩幅で、一緒についていく義務なんかないはずです。既にあなたは向こう側の人間なんですよ。あの子達と肩を並べて歩く必要がどこにあるんですか？　私はそれを夏音さんの口から聞きたい」

ここに来て、彼女は核心の中の核心に触れた。

彼女には、長年カノン・マクレーンを見詰め続けていた堂島めぐみには、既に夏音が抱える懊悩など見破られているのだろう。

夏音は彼女がここまで自分の悩みを理解してくれるとは、むしろそんな人間がこんな近くに存在するとは思ってもいなかった。

だから、突きつけられる。ストレートに。自分自身さえ、考えあぐねている問題を。

ここで自分の問題と突っぱねてお茶を濁すことは許されないことは夏音には分かっていた。

逃げられない。逃げてはいけない。

堂島めぐみは自分の無二のファンだ。彼女の意見は自分が見ないように覆っていた所からやって来た現実なのだから。

夏音は唾を飲み込み、毅然として顔を上げた。

「……向こう側とか、そんなのは関係ない。だって……だって」

この問題に必要なのは、じっくり考える時間なんかではない。どれだけ時間を使って考えても、答えを出す瞬間は刹那に過ぎる。

「これは、俺が決めた道だから」

一度、言葉にしてしまえば後は坂道を下るように勢いがつく。

「君が言うように俺が元いた場所に戻れば、楽なんだろうね。けれど、まだ俺はそれを選ぶつもりはないよ」

真剣な眼差しでじっと夏音を見詰めるめぐみの肩が少し震える。

「いったい俺と彼女達の間には何があるんだろうってずっと考えてた。だって俺も周りもまるでそこに深い溝でもあるかのように振る舞うんだから。それはおかしいことだって思うけど、お互いの暗黙の了解みたいに、存在すらしない溝を意識しなくちゃならなかった。溝なんて本当はないのに、どんどん悪い方向に物事が流れていっちゃって……優柔不断な俺は見事に流されかけてたってわけ。

とどのつまり、俺はただワガママをこいてただけなんだって、今なら分かるよ。自分の見たい世界を彼女達に強要してばかりいた。それが正解とは限らないのに、ほらなんで君たちにはこの風景が見えないんだ!?　ってね。彼女達とでなければ見えない景色もあるのに、その大切さも最初は分かってたはずなのにいつの間にか無視してしまってたんだ」

下手な演奏と合わせるシンプルなセッションも良く分からない躍動感に満ちていた。単純に楽しいことを享受してめちゃくちゃに音をかき鳴らすのが愉快でたまらなかった。それがいつしか、失われていったのである。

「俺の傲慢は自分でも気付かないうちに膨らんでいった。そういえば今になって思い出したんだけど。知り合いの知り合いに、ミュージシャンの第一線で活躍していた人がいたんだけど、その人は貧しい国の、それも楽器が手に入らないような場所にギター一本で旅立っていったよ。音楽なんかまるで習ったこともない子供たちと毎日楽しく歌ってるって……つまり、そういうことだよね」

めぐみはどこかおぼろげだった夏音の瞳の中の光が徐々に強まっていくのを見て微かに瞠目した。どこか精細を欠いたような、わずかに濁った光に澄んだ色が戻ってきている。

「Ｗｅｌｌ．やっぱり俺が見せてあげられる世界を彼女達と共有できたらいいなとは思うよ。でも、それはいつか遠くの話だった。い

つか、できたらなってお話。焦るあまり今の彼女達の最高を置いてけぼりにしてまで追い求めるものじゃない。だから……」

そこで一端言葉を切った夏音はこの場で初めて心からの笑顔を見せた。

「俺はもう少しここで音楽を続けてみようかと思う」

言い切った後に夏音はめぐみの顔をじっと見た。

少し悲しげだが、どこか満足そうに微笑む顔を。

「そうですか。夏音さんがそう言うなら、私はそれでいいです」

「他人に言われてみてやっと気持ちが固まった気がするよ。君のおかげだ。ありがとう」

「そう考えたら私、ひどいことしか言ってない気がするんですけど……」

男女問わず見惚れてしまいそうなほど端麗な笑顔を真っ直ぐに向けられてたじろぐ。平常運転時ならば目をハートにして、抱きつきたい衝動を必死で抑えているところだが、ここまで真っ直ぐな感情を向けられては邪な気持ちも自重してしまうというものだった。

「もう一度、カノン・マクレーンが世界の舞台に戻った時は必ず君を招待するって誓う」

バヒューーーーーーーーーーンとめぐみの体に稲妻のような衝撃が走った。その瞬間の衝撃はめぐみの心臓を貫き、後に残されたのはふらふらとその場に倒れ伏す彼女の姿。

「アカンす……そんな嬉しいこと……幸せ死しますぅ……」

冷静と情熱の間で悶える彼女に温かい視線を送っていた夏音は地べたに倒れた彼女に手を差し出した。顔を赤らめためぐみがそっとその手を取ると、一気に引き上げられた。

「夏音さん……」

少し視線を上にやって夏音の瞳を覗き込んだめぐみは、その瞳の中にあるものを確認するようにじっと見詰めると、満足そうに頷いた。

「頑張ってくださいね」

その時、強く吹いた風がその言葉を遠くまで運んでいった。この短い時間の中で、夏音の中の堂島めぐみという人間へ対する認識は大きく変わった。それまでは、どこか彼女が自分に向けられる好意に違和感を持っていたのだが、その正体がようやく分かったのだ。彼女は随分と昔から自分のことを知っていて、にわかに芽生えた好奇心や憧憬なんかより強い感情を向けてくれていたのだ。そのことを多少なりとも「重い」と受け止めていた自分を恥じるばかりであった。

辺りは陽が傾いて暗くなり始めていた。風がびゅうびゅうと吹き、髪を巻き上げる。話すべきことは話したので、いつまでも立ち話をしているのにふさわしい環境ではない。

夏音はもう一度、彼女達にお礼を言ってからその場を後にした。

「……で、後半から完全に空気だった後輩。いつまで固まってるの？」

夏音が立ち去った後、しばらく余韻に浸っていためぐみは先ほどから隣にいるものの、一言も会話に加わらなかった七海に顔を向けた。

「……もう何て言ったらいいんでしょう。僕、必要ありましたか？」

何とも言えない複雑な心境をどう表してよいのか検討もつかないまま、七海は久しぶりに声を発した。夏音が登場した辺りから声を出すどころか、自分の存在すら限りなく薄くなっていたので、誰かの注目を浴びる準備がすっかりなくなっていた。

「……たぶん」

「妙な優しさ出さないでください！」

先刻までの不遜な態度をとられるわけでもなく、なんだか気の毒そうに目を逸らしためぐみに七海の心が抉れた。

「ていうか何か言ってる意味がよくわかんなかったし！　分かんな

かったけど、中途半端に何となく分からされてしまったのでより複雑ですよ！　夏音くんが、え？　プロ？　すごい人なんですか？　すごい人だっていうのは前から分かってはいましたけども！」

目の前で取り乱す七海に面倒くさそうに溜め息をついためぐみはぽりぽりと頬を掻いた。

「あー……あんたはね。こう……もう、ググりなさい」

夏音に向ける愛情のひとかけらでも自分に向けて欲しいと思った七海であった。

第二十話（挿絵あり）（後書き）

長らくお待たせして申し訳ございませんでした。一週間以内にもう一話アップしたいです。

第二十一話

澪はつい先ほどまで見事なまでのオレンジ色が埋め尽くしていた空を見上げた。春の訪れを感じさせる強風は陽が落ちるにつれて冷気を孕み始め、すっかり肌寒くなってしまっている。

「すっかり暗くなっちゃったじゃないか」

傍目にも弾力のある淡桃色の唇を尖らせて低い声でぼやく。西の空には残光が残るばかりで、ちょうど自分達の真上に向かうにつれてオレンジから濃紺へのグラデーションも見頃を過ぎてしまったようだ。

自分の、正確には自分達、の計画が頓挫しかけていることに彼女は苛立っていた。周りを同じような速度で歩く少女達ばかりを責めるわけにはいかないが、揃いも揃ってやらかしてしまった失敗に対する気持ちはやり切れない。

（あーもう、お粗末すぎる！）

正直、煮えたぎる怒りを緩和させるために彼女の心境をあえてコミカルに表すならば「トホホ」と言ったところである。

いや、トホホで済むならば問題はない。それもこれも、これからの彼女達の行動にかかっているのだ。

歩みが自然と速くなりつつあるのに気付いて澪はそっと溜め息をついた。いつの間にか仲間たちを追い抜いて随分前を独走中だったようだ。

「おい澪〜。ここで焦っても仕方がないだろー？」

「そうだよ澪ちゃん。まだ家に帰ってないんなら早くついても遅くついても一緒だよ」

間延びした声を出す二人を振り返った澪の顔はよく見えない。俯き気味なのと、街灯の頼りない光が影を作ってしまっているのだ。

「でも……なんか、気持ち的に仕方がないだろ」
こつこつとローファーがアスファルトを蹴る音が狭い住宅街の街路に響く。その音が自分の前で止まる。
「そういえばムギはこんな時間だけど平気なのか？」
自分のために立ち止まった彼女達に対して気まずくなったので、まさに今気が付いたと言うように訊いた。
「うん、家の人には電話したから大丈夫」
「そっか」
その会話をきっかけに一同は再び歩き出す。青白い街灯が次の街灯へと自分達の橋渡しをする。去年の暮れにこの辺りで変質者が出没する事件が増え、その対策として青色灯が導入されたのだ。科学的根拠が明確ではないものの、青白い光は犯罪抑止効果があるという話を信じて自治体が取り入れたらしいのだが、実際に奏功しているかは怪しい。青白いとは言え、いささか青すぎるように思える。正直、不気味な雰囲気と言えなくもない。
四人でいるとはいえ、高校生の少女だけでいることに不安が消えることはない。今までもこういう道を軽音部で歩いたことはあったが、その時はここまでの不安というものは無かったはずである。
澪は渦中の人物は見た目はアレでも、案外しっかりと男の役割を果たしていたのではないかと今ならば思える。
男性としての頼もしさを期待するには今ひとつだと思っていたのに、いなくなってみて分かることがここにもあるものだとますます気分が落ち込んでいった。
「澪。ほんとに大丈夫か？」
隣に並んできた律が眉を潜めて澪に声をかける。
「あ、ああ。ちょっと考え事をしていて……この道、こんなに不気味だったっけ」
「不気味？　そうか？」
「なんか青白くて……うぅ」
自分で言っといて、体がぶるりと震えた澪は無意識に幼なじみの

腕を掴んでいた。
「お、澪しゃん。コワイんでちゅねー。大丈夫でしゅねーよーよちよち」
しまった、と思った時には遅い。常日頃から澪をからかうためにセンサーを張り巡らせている律にうっかりボロを見せてしまったからには、しばしの辱めを受けるハメになるのだ。
「ち、違うからな！　私はこの青白灯が本当に犯罪抑止につながるかを検証していてだな！」
「えー？　こんな光で犯罪がなくなるかよって」
それは、あまりにもみもふたもない言い草である。少しくらいは効果があるはずだが、何とも言えないので澪は答えるのを控えた。
「あーあー。それにしても、何か今日の私ら間抜けすぎて泣けるわ……」
「ほんとだねー」
とぼとぼと歩く律が零した自嘲に同意する唯が苦笑を浮かべた。
澪は口に出さないまま、まったくだと本日何度目になるか分からない溜め息を漏らした。
夏音と重大な話をする計画を立てるべく、ひとまずティータイムと洒落込んだ彼女達はどこか浮ついた気分になっていた。
全員が揃ったわけではないものの、自分達が一丸となって何かに向かう時の勢い、無敵感に似た頼もしさが彼女達をどこまでもポジティブにさせていたのだ。きっと何とかなる、してみせるという気持ちが強くなり、次第に落ち着きがなくなった唯が「私は少しでも時間をかけてギターに触らなくちゃ！」とギターを弾き始めると、後は「私も！」となったわけである。しまいにはヴォーカルとリードギターを抜かした状態でバンドの合奏練習に熱が入ってしまったのだ。
ぐんと集中力を増した彼女達は今までにないほどカッチリ合う演奏に手応えを感じつつ、夏音について行けるだけの力を！　と燃えた。

気が付けば、夏音にメールを送ることも忘れて時計の長針が何周もしていた。短縮授業で、下校時刻が早まっていなかったら日が暮れてからも止まらなかっただろう。

青ざめるのを通り過ぎて真っ白になった一同は電光石火の動きで楽器を片付け、校舎を飛び出してきたのである。

急いで考えた文面で夏音にコンタクトを取ろうとしたが、一向に返信がない。一か八かで夏音の自宅へ向かうことになったが、家に帰っているのかさえも分からないままなのだ。一行は行き当たりばったりの行動に不安を抱えたまま、夏音の家に向かっている最中であった。

夏音に会って一同が話すべきことは決まっていた。まず、自分達の行為が夏音を傷つけたことを謝らなくてはならない。それから自分達はこの五人で音楽をやりたいのだと言うつもりである。

そのために、腹を割って話す必要がある。お互いの腹に隠していた些細な気持ちも、彼女達が抱えるなけなしのプライドも、全て明らかにしてしまわなくては先に進めないと少女達の意見は一致した。

全てをさらけ出して、その先にどんな答えが待っているかは分からない。この先が正念場なのだ。

「み、澪が押せよ。押し慣れてるんだろ？」

夏音の自宅前の玄関。誰がチャイムを押すかで誰もが迷いあぐねていると、そんな無責任なことを律が言った。

「それは関係ないだろ！」

「いいから、そのチャイムを押すのは君しかいない」

渋い声をつくって律がキメ顔で眉間に皺を寄せる。

「こ、こら。人の手を勝手に……っ！」

ピンポーン。

「む、ムギ？」
「そういえば私、このピンポンってやったことがなかったのー」
琴吹紬、勇者である。
「あら？　あなたたちはたしかー」
その瞬間、インターホンから聞き覚えのある甘い声が聞こえてきた。

「Ｈｅｙ，ｇｉｒｌｓ！！　カノンのお友達ねー。ちょうどよかったわ！　今、ベリーパイを焼いてるところなの！」
と見事すぎるほど台詞の中にアメリカを感じさせる言葉で出迎えてくれたのは夏音の母、アルヴィだった。律を除けば一度だけ会っただけの美貌の人物に一同は思わず息を呑んだ。
それから返事をする間もなく、ほぼ強引に自宅の中に招き入れられ、リビングに通されてしまった。抵抗も反論も許されないまま、ソファに座らされた一同はこの強引さはどこか自身の息子に通じている気がすると確かに感じる。
このメンバーの中では唯一この家に通い慣れている澪は、夏音以外の家人がこの空間で動いているのを見たことがない。キッチンの方で何やら賑やかな音を立てているのが夏音の母親というのがどこか滑稽にすら感じた。何となくだが、この家に夏音以外の人間が住んでいるというのが違和感を生じさせるのである。
（滅多に帰らないって聞いたけど……）
キッチンという空間をそこにいるだけで華やかに彩ってしまう秀麗な女性。夏音を成熟させてみればこんな美女になるだろうといった予測を現実に体現している彼女が調理器具を手にする様はどこか手慣れたものがあった。
考えてみれば、何の不思議もない話ではある。滅多に帰らない、といってもここが家なのだ。彼女が帰ってくるのも当たり前だし、母親が料理をする光景は自然のものであっておかしくはない。

ソファで固まる一同は借りてきた猫のように大人しい。所在なさげに室内を見回したり、もじもじと手を弄んでいたりする。どちらかというと天真爛漫というか恐れを知らなそうな彼女達も流石に友達の母親、というのに加えて外国人な上にプロミュージシャンの美女と同じ空間というシチュエーションは得意でないらしい。一つ目ならまだしも、それ以外が特殊すぎるというのもあるだろう。

「お待たせー。熱々だから気をつけて食べてねー」

お茶と一緒にほくほくとした出来立てのベリーパイを運んできたアルヴィに律が「あ、どうも」と頭を下げる。

ニコニコと嬉しそうに笑うアルヴィはとても友好的な眼差しを少女達に向け、可愛らしく手を合わせた。

「私、ベリーパイだけは自信あるの。日本の子たちの口に合うか分からないけど、どうぞ召し上がってちょうだい」

妖精のごとく麗らかな美女にこうも言われたら、手をつけないはずがない。丁寧に切り分けられたパイが全員に行き渡ったところで、誰知れず唾を呑み込んだ。焼きたてのパイは見目も良く、ほんのりと甘い匂いを漂わせている。昼間からノンストップで練習を続けて何も口にしていなかったこともあって、今まで忘れていたように腹の虫が空腹を訴えるのも無理がなかった。

「い、いただきまーすっ！」

軽音部の食欲といっても過言ではない唯が真っ先に手をつけたのを皮切りに全員がベリーパイを口に運ぶ。

「……んっ」

「……」

「……っ……むぅ……」

「……ぶふぉっ……ぐふぁっ！？」

「どうかしらー？」

誰一人として、感想を発する者はいなかった。否、発することができる者は存在しなかった。

無垢な瞳でこちらを見つめてくるアルヴィから全力で目を逸らし、

一同はアイコンタクトを交わし合う。
（ど、どうも何も……コレ……コレっ！　ナニっ！？）
（いやいやいやいや。そんなはずはない！　得意料理って言ってたもの！　全力で自信作って言ってたもの！）
（これ、食べ物なのかしら。食べて良い物としてこの世にカテゴライズしていいのかしら）
（外国の人的にはこれが普通……なはずないよね。ベリーパイってベリーがこうベリーだと思ってたんだけどー）
（全然ベリってないっつーか中何入ってんのコレ！？　さっきからニョリっていう食感がひっついて離れないんだけど！　未だかつてない食感なんだけど新しいけど食感に含めてよいかわかんない物質かもだけどっ！？）
（ていうか澪ちゃん。さっきから女の子としてアウトな顔してるけどダイジョーブ？　限界まで頬袋使ったハムスターでももっと可愛い体裁を残してるよっ！）
（コレハ試練ナリコレハ試練……コレヲ越エナクチャ夏音クンに辿リ着ケナインダヨキット……）
（唯ー！？　なんか解脱寸前の人みたいな顔色だよ！？）
極限状態にて交わされるアイコンタクトの応酬は時に実際の言葉を凌駕して互いに伝わった。
「久々に帰ったから多めに作ってみたんだけど……よかったらおかわりもあるの」
「「「「っ！！！？」」」」
死刑宣告に近い言葉が彼女達に襲いかかってきた。
最早、彼女達の頭に警報に近いレベルでこの一言が浮かび上がる。
『夏音に会う前に死ぬわけにいかない』
冗談抜きに夏音の顔を見る前に旅立ちを迎えそうな現状は傍目にはよく分からない彼女達の内面の闘いであった。
表面上はニコニコと。脂汗を滴らせながら、かろうじて愛想笑いを浮かべることに成功した一同は人生最大の気力を振り絞って口に

含んだ未現物質を嚥下した。
　未だかつて通過したことのない物質に、喉が、食道が、胃が随所で全力の抵抗をしたが何とかそれを抑えた。これを飲み下せば何か別の世界に行ける気さえ、した。
「た、大変おいしゅーございました」
　何とか気力を振り絞って言い切ったのは琴吹紬という一人の猛者。少女達は揃って尊敬の眼差しを彼女に向けた。
「あら、よかったー！　もしかして今時の子はこういうの好きじゃないかもってドキドキだったの！」
　ペロリと可愛らしく舌を出すアルヴィの姿はとんでもない攻撃力を放ったが、次に発した一言にその場の気温が一気に下がった。
「だってカノンたらせっかく作っても手をつけてくれないんだもの。意地でも食べさせたいって思うじゃない？　だから隙あらばこうして作ってテーブルに置いておくの。あ、聞いてちょうだいひどいのよ！？　テーブルに他のお料理が並んでいてもパイから遠ざけるようにして食べるの！　まるで私のパイが今にでも襲いかかってくるみたいに振る舞うのよ！」
　今、まさに襲いかかられている少女達は自分達の誰よりも早くこの物質の脅威に晒されて生きてきたのだと思うと、涙が出てきそうだった。
　何とか一皿を平らげた彼女達は第二波が来たら、確実にやられてしまうと悟った。
「あのっ！　私達、夏音に会いにきたんです！」
　息も絶え絶えだった律が強引に声を張り上げて本題を切り出す。あのまま彼女のペースに乗せられる、といった事態を回避できた一同はほっと息をついた。
「あ、そうよね。あの子なら帰ってからずっとスタジオに籠もりっきりだから覗いてみてちょうだい。それと今日は私が夕飯を作るから何がいいか訊いてきてくれたら嬉しいわ」

このまま彼女に夕飯を作らせる選択が正しいのかは置いといて、真っ先にソレは夏音に伝えた方が良いだろうと思われた。お茶とパイをご馳走になった礼を言って一同は、各々で食器を片付けてからリビングを後にした。廊下に出て、スタジオへと続く階段を下りていくと、スタジオの防音扉にはめ込まれた窓から明かりが漏れていた。

中を覗くと、軽音部では使ったことのない六弦のベースをスタンドに置いて何かの機械を操作している夏音の姿が見られた。しばらくタブレット型の機械のディスプレイをなぞったりしていたが、ベースを肩にかつぐと手元のボリュームを回した。微かなノイズがスタジオ内に満ちたのが、外にいる彼女達にも伝わってきた。

夏音の指が弦の上を滑るように動き、響いてくる音は荘厳な光を纏って壁一枚を隔てた少女達の耳に入ってくる。指板の上で忙しなく動く指には目もくれず、じっと目の前のタブレットを見詰める夏音はどこか鬼気迫る様子である。

じっと耳を澄ませてみれば、小節が進むごとに何かしら音の変化があるのが分かる。ブルースでもなくジャズでもない。その曲調はあまり耳に馴染まない、いわば軽音部では聴かないタイプのベースライン。夏音の即興なのか、もしくは既存の曲なのかまでは分からない。

演奏に夢中になっていた一同だったが、ふとムギが何かに気付いた様子で声を上げた。

「これ、ショパン」

「ショパン？」

「うん。ショパンのエチュードだと思う」

ショパンのエチュードと言えば、難易度も高い。右手も左手も忙しなく動くスピード感のある難曲に違いないが、それを弾いているのだという。

「やっぱり、すごいね」

唯が溜め息と共にそんな感想を漏らす。
「そういえば夏音が言ってたんだけど、練習に色んな曲の初見をやるんだって」
澪が言った。
「楽譜の存在する曲ならクラシックでもそれこそＪ―ＰＯＰでも。クラシックが多くなるみたいだけど、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス。弦楽器だけじゃなくて、ファゴットとかトロンボーン、フルートって具合に何でも初見で弾く練習をするんだって言ってた」
「それ、ホント？　クラシックなんて楽器ごとに表記も変わっちゃうし、ハ音記号とかも読めるってことになるし、すごいことなのよ！」
「何て言うか……ここまでくると、あいつってどこまでやっちゃうんだろって感じ」
呆然と律が言うと、全員が静かに頷いた。世の中には楽譜が読めないプロミュージシャンだっているというのに、クラシックの世界にまで足を入れるとは。本当に節操なしと良い意味でも悪い意味でも評価されていた理由が分かるというものだった。
「あ、終わった」
時間にしてみれば、三分も無かったところで演奏が中断された。一同が意を決して扉を開けようかとした瞬間、また重低音が飛び出してきた。
「あ、またショパン」
反応したムギが言うには、ショパンのエチュードは名の通り練習曲であり、一曲ごとが短い。何番から弾き始めたのかまでは分からないが、夏音がこの勢いで弾き通してしまうつもりなら相当の時間がかかるだろうとのことだ。
「どうしよう……すごく集中しているから邪魔するのも悪いし……」
「次の曲が終わった瞬間にばーんって入るしかないかなー？」
過激な意見を出した唯だったが、現実として曲と曲の間の僅かな

インターバルを狙う他に突入のタイミングはなさそうだった。
あのままの様子で行くとなると、夏音が「よし休憩！」と言い出すのは遙か先のはずである。

「もういーよー？」

「フギャッ！」

色気のない叫び声を発したのは律である。完全に無防備なところを背後から自分達以外の人間（明らかに）の声がしたので文字通り飛び上がったのであった。

もちろんこの家の中でそんな甘く魅力的な声の持ち主はアルヴィ・マクレーンを置いて他にいない。

「ア、アルヴィさん！　驚かさないでくださいよ！」

「ふふ、ごめんねー」

淑やかな笑いの中に少しだけ悪戯が成功した悪ガキのような含みがあった。意外にお茶目さんのようである。

「あの子、放っておいたらこのまま何時間も弾き倒しちゃうから、無理矢理にでも止めるくらいでちょうどいいの」

「へ、へえー。すごい集中力ですね」

「ええ。あの子がファーストグレイドの時からずっとそんな感じよ。放っておけば一日何時間だってベースを弾いていられるんですもの」

その言葉に一同は軽く息を呑んだ。

「プロフェッショナルってことはそういうことだったりするのよ。誰もがあの子ほど顕著じゃないにしても、ミュージシャンが下手くそだったら話にならないでしょ？」

「でも、学生をやって……ていうか、いっつも私らと遅くまで部活やってるのに練習する時間もとって、ってなると無茶じゃないですか？」

「だって、それがあの子の選んでいる道だもの。仕方ないわ」

皆、事も無げに言い放ったアルヴィの顔を思わずじっと見詰めた。

基本的に彼女達とは較べようもない親子関係なのだとしても、その言い方には少しドライな雰囲気があった。

「それでも、そんな無理しすぎたら倒れちゃうよ……」

唯が顔を曇らせて言った。彼女としては、毎朝ふらふらになって学校にやってくる夏音の姿を見ているだけにいっそう不安になった。実際には朝が弱いのが一番の理由なのだが。ただでさえ華奢な体つきで、薄倖の美少女然としている夏音がいつか倒れてしまうのでは、と心配なのだ。

一方、音楽業界について夏音の口からよく聞かされていた澪は別の捉え方をしていた。

アルヴィは同じ仕事をしている立場として、個人の事情が斟酌されるような世界ではないことを知っているのだ。夏音の場合は既に最大級の緩和措置が執られていることもあって、少しでも状況に甘んじるようなことがあれば、その世界から転げ落ちてしまうハメになる。そう、転げ落ちるのは夏音自身なのである。

その責任を全て自分で背負うことによって夏音はプロを名乗っている。夏音が辛いと言ったら親がどちらかを辞めさせるように動くこともなく、そっと見守るだけだ。

彼女が息子を溺愛していることは一度親子の様子を見ただけで理解できるはずだ。それでも彼女は息子が音楽と学業の両立を図った結果、倒れることになっても「仕方ない」と割り切ってしまうのだろう。

澪は、子供の自己責任を容認し続ける器量があるということは、実はすごいことではないかと思うのだ。

（私だったら、自分の子供が無理しすぎてたら止めちゃうだろうな）

あえて手を出さない、というのも難しい話だなと澪は心に思った。

「それでも、あの子が好きでやってるんですからねー。でも、ちょっとやりすぎな部分は目に余るのよ。その辺の境界を自分で分かってないからやきもきしちゃう。基本的にあの子、どこまでもマゾだと思うし」

どエラい一言が最後にくっついたが。彼女も心配には違いないのである。

「ということで。夕飯も遅れちゃうし、なんか勝手に作っちゃうことにしたって伝えてちょうだい。ということで頑張ってきてねー」

「え、ちょっと何を……きゃっ！」

のほほんとした声の割にガッシリ力強い腕に抱えられた少女達は一瞬の内にスタジオの中に押し込まれていた。重い防音扉を開け、四人の少女を力ずくでスタジオに放り込む。恐ろしい早業であった。

「いてて……」

「お、重いよー」

雪崩れ込んだので三人の下敷きになった唯が悲鳴を上げる。

「そ、そんなに重かった!?　ごめんなさい！」

その悲鳴の内容がある少女のデリケートな部分にダメージを与えていたりした。

「ていうか、何やってんの君たち？」

いつの間にか音が止んでいた。少女達がおそるおそる顔を上げると、突如スタジオ内に突入してきた四人を見詰める夏音がいた。ぽっちりとした瞳を押し広げて驚愕を露わにしている夏音に気まずく笑い合う一同はそそくさと立ち上がった。

「こ、こんばんはー」

わざとらしく埃を払うような動作と共に精一杯の愛想笑いを浮かべる。白々しいにも程があったが、夏音はそんなことには気付かずに彼女達の来訪に純粋に驚いてしまっているようだ。

「えっと……いらっしゃい？」

首を傾げて暢気に返した夏音も十分に混乱していた。

「い、いらっしゃいましたが……あの、その」

何か言葉を紡がねばならないと考えた唯がとんでもない一言をその空間にぶっ放した。

「夏音くんの腹を割にきました！」

刹那の沈黙。

「ばっ！　違うだろアホぅ！」
律に後ろ頭をひっぱたかれた唯が「あぅ～」と床に沈む。図らずも前に出てしまった律は、何故だか自分が代表して何かを言わなければならない気がした。
「あの、だな。げ、元気してたー？」
思わず、背後に立つ澪の膝がかくんと折れそうになる。
「昼間、学校で会ったばっかだろ！？」
「ちょっ、うるさい！　ただの掴みなんだからぎゃーぎゃーリアクションすんなよ！」
「のっけから不自然の塊でしかないだろ！」
「二人とも落ち着きなよー」
「なんかお前には言われたくないな唯っ」
さらに、そんな騒々しい三人をまあまあと宥めすかすムギも含めて奇妙な空間ができあがっていた。突如現れた少女達をぽかんと眺めていた夏音など、完全に置いてけぼりをくらっている。
「あのー」
半ば呆けていた夏音がかろうじて搾り出した声が少女達の間に割って入る。
ピタリ、と止む四人の挙動。ベースを置き、ゆらりと立ち上がる夏音に唾を呑み込む音が響く。
四人は横一列に並び、立花夏音と対峙する。
最早、夏音の表情には少女達が現れたことに対する驚きはない。端整な顔立ちを引き締め、じっと少女達を見据える。
少女達の戯れの気配も狭いスタジオの外へ逃げていった。四対の瞳と交錯する視線。互いの間に走る沈黙はじょじょに高まり、すっと瞳を閉じた双方の人間は、微かに息を吸い込み、そして。
「ごめんなさいでしたー！！」
「すいませんっしたーー！！」

世界に奇跡が起こった。
まったくの同時だった。
それは、土下座という。どちら側の人間の頭が先に床についたかは定かではない。いずれの無駄も省かれた一糸乱れぬ振る舞い、その挙措。一寸の隙も入り込む余地すら与えられぬ謝罪の表れ。
世界で一番美しい土下座の形がそこにできあがっていた。この場で、頭を上げている者は一人としていない。一対四。扇形に広がった五人の形が全てを物語っていた。
最初の一声以降に音が立つことはない。
まさしく沈黙の中にも、美あり。
語らず、表す。
ゲザリスト、またはゲザーが認める、渾身の土下座であった。その佇まいに哲学すら感じるほどの。
幾ばくの時が経ったかは分からない。この光景を目撃した外国人が「クレイジージャパン！」と叫んでもおかしくない事態だったが、彼らの胸には確かに熱いものがこみ上げていた。
迫り上がる高揚感を抑え、双方はゆっくりと顔を上げた。その所作の一つまでが磨き上げられた伝統のようである。
そのまま正座スタイルに移行した彼らは再び互いの顔を見つめ合った。
「楽器……持ってきたの？」
夏音が口を開いた。
無言でうなずいた少女達は顔を合わせ、照れくさそうに微笑んだ。
「久しぶりにセッション、いっとく？」

「ルールは一つ」
楽器の準備を整えた皆に夏音は人差し指を立てた。
「楽しむこと！」

それは、近頃の軽音部に足りなかったものだ。お茶ばかりの活動の中で、ごく稀に始まるセッションはグダグダになりながらも笑い合って楽しんでいた。いつしか、そんな風に音のやり取りを楽しむ機会はなくなり、ひたすら目視できない先のことばかり考えるようになったのだ。

「あのね、夏音くん」

唯がジャッとGのコードを鳴らした。その瞬間、何かが全員の頭に閃く。ただのGの音なのに、誰でも使うコードの一つに過ぎないのに、唯の言わんとすることが何となく理解できたのだ。

それは、おそらく今日会ったばかりの者達では感じることができなかっただろう。一年にも満たない付き合いでも、彼らは自分の仲間が持ち構えている音を感覚的に把握していたのだ。

その場にいた者は言葉にできない勘に等しい感覚が正しかったことをすぐ知ることになる。

カウントもない状態で唯がピックを持つ手を大きく振り下ろしたのだ。聞き覚えのあるリフが飛び出てくる。

ああ、分かっていた。その場に立つ者が浮かべたのはそんな表情だった。

このリフが出てくると知っていたと言えるほどの確信。全員がくすりと笑い、入部当初はまるで初心者だった唯が奏でる音楽を心ゆくまで噛みしめた。

スモーク・オン・ザ・ウォーター。

軽音部で最初に演奏した曲。Gmのゆったりとしたリフを弾いている者は半年前なんかと比べようもない滑らかな演奏をするようになった。

律と澪が顔を合わせ、うなずくとベースとドラムが軽やかに唯に寄り添う。ムギがうずうずと待ちきれない様子で残り二小節を待つ。やがて鍵盤に手が置かれ、渾身のロングトーン。彼女がこの半年で揃えた多彩なオルガンサウンドの一つは圧倒的な存在感を放った。

夏音は演奏に入るのを忘れて呆けていた。彼の瞳に映る光がゆら

ゆらと揺れる。
（いつの間に……）
彼女達の音がどれほどの成長を遂げたかをまざまざと見せつけられた。先制のパンチのようなものだった。
（楽しそう！）
驚愕してから、夏音は胸に沸き上がってくる興奮に目を輝かせた。既に環をつくり出している彼女達の演奏は魅惑のエネルギーに満ちていた。
早く。早く自分もそこに加わりたい。そう思った夏音はストラトのネックをそっと握った。だが、夏音はいざ自分もと思ってもなかなか動き出せなかった。
既にイントロと呼べるような時間は過ぎたのだが、演奏に入っていけない。どう入ろうか、と悩んでいるのではない。この中に、自分が入ってよいのかという考えが頭に浮かんでしまったのだ。
数多の怪物ミュージシャンとセッションしてきた夏音が、彼らを遙かに下回る高校生の演奏に尻込みしている。
演奏が始まる前に自分で楽しもうなどと言っておきながら、自分の音が彼女達に与えてこの環がどうなるか怖れている。
夏音の額にじわりと汗が滲む。既に同じフレーズがループされ、本来なら1コーラスが終わっていてもおかしくない時間が経った。
そこで、いつまでも演奏に加わらない男にしびれを切らした律が挑発的なフィルを入れる。鋭く重く破裂したクラッシュの音が夏音の耳に衝撃を与える。
彼女のフィルに合わせるようにフレーズを動かした他の少女達によって、反射的に夏音はピックを振り切った。この男ともあろう者が、分かり易いほどのタイミングに入らないはずがなかった。
ヤレヤレ、といった様子でくすりと微苦笑を浮かべた律が周りに目を配る。顔を向け合った少女達が目を細めてうなずく。
唯は自分と重なり合うコードを奏でる夏音に弾けるような笑顔を

見せた。半年前、彼女は演奏に遅れないように必死についていった。それが今や、先に曲をリードしていたのは自分で、後から入ってきた夏音を迎え入れるような形をとっているのが嬉しくてたまらないのだ。

それでも、数小節進むだけで実力差は明らかになる。全体のノリを汲み取り、さらには先に演奏していた唯の音価に合わせているのだ。

それぞれの音が混ざり合う。強力な個性を放つ人間達が音楽で結びつき、一つになる。その美しさがそこにあった。

五人が一つになった演奏の中で、誰もが感極まっていた。

これこそ軽音部の音だ。この一体感、光と音が溢れる躍動感は生きている音楽である。

「お先っ！」

実際には誰の耳にも聞こえなかったが、おそらくそう言っただろう唯が足下のブースターを踏み入れる。一気にハイフレットへと向かった左手が素早く動き回る。随所にチョーキングを絡ませ、時折弦を飛んで入れるトリルなど、少なくともギターを始めて一年以内の初心者とは思えない技巧を駆使している。

唯が、一人目のソロをとったのだ。バッキングに回った夏音は完全に意表をつかれたように目を丸くしていた。

あの唯が、積極的にソロを弾くというのだ。他の三人も同じことを思っていた。自分達の上をパワフルかつトリッキーなソロで飛び行く唯の姿は鮮烈に焼き付いた。

その姿が、少女達の心に火を点けた。

唯のソロが終わる前に視線の探り合いが起こる。微笑を浮かべながら殺気に近いオーラを放ちだした少女達にすっかり蚊帳の外に放り出された夏音は頬を引き攣らせた。

音の端々からストレートに伝わってくるけんか腰の態度。唯の演奏はどうやら彼女達のハートを熱く燃えたぎらせてしまったらしい。

ソロが終わり、演奏が進む。次に、すかさず飛び出てきたのはム

ギだった。激しく歪んだ音色で前に出てきたかと思えば、フランジャーのエフェクターを踏み、とんでもない音で暴れまわる。そうかと思えば飛び道具を収め、速弾きを始めた。ムギは滅多に速弾きをしないため、この光景はかなり珍しいものだ。実際にピアノの方では、ショパンやリストを弾きこなしてしまう彼女が持つポテンシャルは半端なものではない。

最後にお茶目にDビームを使った彼女は満足気に頷いてソロを終えた。その瞬間、全力で指板に掌を叩きつけた澪がその存在を前に押し出していく。引っ込み思案の彼女のイメージを根こそぎ塗り替えんばかりの行為。指板を叩いて和音を出すテクニックを彼女に教えたのは夏音だったが、まさか彼女が実践でやるとは思ってなかったりした。目を丸くした夏音の方をちらりと見た澪は涼しげな顔で立て続けに力強いピッキングを続ける。

ミドルとハイをブーストしたサウンドに二つほどエフェクトを加える。激しい歪みを味方につけた彼女はジョン・エントウィッスルばりのプレイが展開されていく。得意のペンタトニックを多用したフレーズが次々に飛び出してくるが、途中に夏音も驚くような方向に展開していったりするのだ。

ぐおん！　とうなるグリッサンド。時折、混ざるライトハンド奏法。彼女が和音を使用するポイントなどは、夏音から影響を受けていることが多い。こうして形になっているところを目の当たりにした彼女の師匠は、ずっと目を押し広げっぱなしだった。

澪が律に目配せをすると、ドラムのプレイが変化する。ベースとドラムで巧みに飛び交うグルーヴのうねりは、彼女達の息がぴったりな証拠。

考えてみれば、ドラムのソロということで律だけが延々と単独で叩いている場面は来ない。自分を理解するベース・プレイヤーのもとで律のプレイは徐々に熱を帯びていく。澪のプレイに合わせ、律の手数がどんどん増えていく。ベースがたまに空ける空白を利用して律の手足が忙しなく動き回る。

その後、普段の律なら考えられないほど複雑なフィルインをかましたことによって、最後に一人だけ残されたソロ・プレイヤーへとその場が託された。

その場にいる全員の視線が集まるその者は、にやっと笑って足下のスイッチを踏み込んだ。

音の無い空間にぺたりと座り込んだ五人は激しく上気した呼吸を整えながら、満足そうに笑っていた。夏音がギターを抱えながらスタジオの床に身を投げ出すと、それを見た澪もおずおずと同じように寝転がる。ヨイショ、と声を上げてそれに倣った唯や「私もー」と楽しそうに横になるムギも一緒になってスタジオの天井を見上げる形となった。

よろよろとドラムセットから離れた律が腰に手をあてて、そんな仲間達を見下ろしていると「ぷっ」と噴き出して倒れ込んだ。

「冷たーい」

「だなー」

輪になって横たわった一同は、それからしばらくは無言で息を整えた。冷房の効いたスタジオは熱を持った体を冷ましていく。ずっしりと重い疲労感を打ち消すほどの安らかな気持ちがそれぞれを満たしていた。

「びっくりしたよ」

ふいに夏音が口を開く。

「みんながあれだけ弾けるようになっていたなんて」

正直な告白。夏音は軽音部の者を誰一人として「上手い」とは思っていなかった。この程度まで弾ける、という認識はあったものの、夏音の中で彼女達がベストプレイヤーの枠に納まることは一切なかったのだ。

「上手になったんだね……演っていてあんなに興奮したのは久しぶり。ていうか、負けてたまるかコンニャローって思ったのが久々だったよ」

一回し目のソロを弾く夏音の目には、ぎらぎらとした光が宿っていた。その時、彼は確かに「負けていられない」と思っていた。技術的には圧倒的に彼女達を凌駕しているのだが、次々にソロを弾き倒していく仲間達の姿に圧倒されてしまったのだ。それは気持ちの面でも。彼女達は演奏を心から楽しもうという気概が溢れていただけでなく、自分の持てる力を出し切って、夏音に泡を吹かそうという心算があった。

初っぱなから全力で向かった唯の先制パンチは夏音に予想以上の衝撃を与えていたのだ。彼女に触発されるように烈しいソロを見せた他の者も同じである。

少女四人の演奏を聴いた夏音はまさに負けず嫌いの精神で超絶ソロでお返しした。普段はやらないようなテクニックやパフォーマンスをふんだんに盛り込み、途中でチューニングを変えてしまったりと、プロとしての面目躍如を果たしたといえよう。

「アンジェロ・ラッシュをされた時は本気で笑い出しそうになったよ」

実際にソレを生で見たのが初めてだった律は噴き出すのをこらえたドラムに向かわなければならなかったため、その瞬間の彼女のバスドラは怪しいリズムになってしまった。

「超どや顔すぎてねらってんのかと思ったわ」

思い出し笑いで死にそうになっている律に夏音は苦笑する。

「いや、あんなの滅多にやらないんだけど。死ぬほどテンション上がりすぎた時とかにやるとウケるからさ……」

「でも、やっぱり夏音くんはすごいやー」

「何だよ唯。改まってさ」

「だって後半なんか何やってるかわかんなかったもん」

「あぁ、わかるなーそれ。もう合わせるのとか放棄して好きにやっ

てくれって感じになるよな」
「いやいや。俺は唯が一番すごいと思うよ。これに関してはマジです」
「そっかなー、いやーそれほどのものでもー」
分かりやすく照れる唯に笑いが起きるが、真剣な表情になった夏音は感慨深い溜め息をついた。
「いやホントに。ギターに初めて触ってから一年も経っていないのに、よくぞここまでって感じ……センスあるよ」
「確かに唯はある意味天才ってやつかもな」
「り、りっちゃんまでー。おだてても何も出やしないよー？」
がばっと身を起こして照れまくる唯は、くすくすと笑う仲間達に頬を膨らませて抗議の声を上げた。
「それならムギちゃんのがカッコよかったよ！　ダダダダダーンって」
「ムギもすっごくアグレッシブだったなあ。ああいうの普段からやればいいのに」
「えー、そうかしら？」
「澪ちゃんもなんていうか、今日は輝いてる澪ちゃんだった！」
普段は輝いていないのか、というツッコミも忘れて澪は顔を赤くする。
「あ、ありがとう……そんな、まだまだケド」
「唯の言う通りだね。澪はこの一年で信じられないくらい成長したって分かる演奏だった。律と一緒に弾いてた時なんか、すっごくエキサイティングだったよ」
「あぁ、うぅ……」
お師匠に直々に褒められた澪は、今度こそ顔をゆでだこのように真っ赤に染めて手で覆った。
「はーあ。楽しかった」
夏音が呟いた言葉は全員の気持ちを表していた。
楽しかった。軽音部にとって音楽をやった後、こう思えたのは久

しぶりのことだったのだ。
「うん、楽しかった」
「またやりたいな」
誰もがこう言い合って、終われば良いと思った。そして、何度でもこのやり取りを繰り返していければ良いのだ。
「俺は間違ってた。間違いだらけだった」
ふいに語り出した夏音の口調が今までと変わったことに皆が気付く。
「すっごく傲慢だった。楽しまなければ音楽をやる意味もないってのに、俺自身がつまんなくさせちゃってた。俺が作る音楽が一番だ、俺のアイディアやアレンジが最適なんだって信じて疑わなかったんだ。今まで作った曲だって本当はみんなの意見を取り入れてたら違ったものになったんだろうね。それが良い物かは別だけど……みんな本当はもっとこうしたいって音楽があったんじゃないかな」
「そんなことないよ！」
すかさず声を上げた唯は、その言い方にやや怒りを混じらせていた。
「私、今の軽音部の曲が好きだもん。コレ以外って言われてもよくわかんないし、夏音くんが言ってること間違ってると思う！」
「私もそう思う！　私が持ち込んだフレーズでも、いつも夏音くんが手を加えて変わっていくのが好きだもん！　ああ、こういう風にした方がいいのかって感心させられっぱなしで。でも、悔しかったりしたから、夏音くんにそのまま採用して貰えるようなメロディーをいっぱい考えたりしたの。ほら、トリビュートの時のメロディって夏音くん褒めてくれたから嬉しかった。だから、コレでいいんだって自信が持てるの」
いつになく早口のムギに夏音が目をぱちくりさせた。
本当に良いものは、良いとする。夏音はそうやってそれぞれの音楽を結わいていく。時に厳しく、曲の雰囲気にそぐわなかったりするものは容赦なく排除する。

議論に澪が口を挟む。
「多分、これでいいんだと思う。夏音は自分が口を出したからって悩んでるみたいだけど、結果的にはそれが私達にとって現状になって受け入れてるじゃない。それに、夏音はよく音楽に正解はないって口癖みたいに言うだろ？　その通りに考えたら、失敗もないんじゃない？　私は少なくとも自分達の曲が好きだ。失敗した、なんて思ってないし思ってもそのままにしたくない」
「つーか、今イチって曲はもう演奏してないじゃん私ら。ダメって思った曲はきちんとそういう風に意見を通してきただろ？　私らだって機械や人形じゃないんだ。オリジナルの曲で本当に嫌だ！　って思ったことくらい口にするよ。口にして、本気でぶつかり合ったことなんてないし、結局はみんな納得ずくってことだよ」
　律の言葉にさもありなん、と同意した一同だった。それから律はぽりぽりと頬をかき、言葉を続ける。
「でも、まあ……こうは言ったけど、たしかに何もかも遠慮無しに意見を言えていたわけでもないな。うん……きれい事抜きに言っちゃえば、けっこー不満に思ってたかも。大まかな意見は一緒だと思うけど、やっぱり細かい部分とかだと自分の意見を通しづらい雰囲気はあった」
　心からの本音を述懐する律に、夏音は眉尻を下げる。
「そういう些細なところとか、募りに募ってこうなっちゃったんだろうな一。そういうの、私的に『らしくない』しさ。ストレスになってたのは正直なところ」
「律。それについては本当にごめん、俺は――」
「だーかーら。もういいんだってば！　私の方がガキだったってこと。それを言うならみんな勝手に自分の意見を抑えてたのが悪いんだからさ！」
「りっちゃんの言う通りだね。私なんか一番下手だし、下っ端？って感じだし。夏音くんだけじゃなくてみんなに注意されたこともハイハイって聞くけど、こんな私でもちょっとくらいは意見があっ

たりしたもん。ここはこうした方がいいんじゃないかな、とかすごく弾きづらいなーとか、なかなか言い出せなくて……」

「唯……」

「いつも夏音くんはプロですごいんだから！　って納得してたんだー。でも、それって本当はよくないことなんだよね……」

俯いた唯にうなずいたのはムギである。

「知らない内に壁を作ってたのね。私、そういう見えない壁にはいつも敏感だったのに……」

そう言って彼女は悔しげに手を強く握りしめた。ムギに引き継いで、澪が口を開いた。

「そういうのもちゃんと話し合っていかないとな。私も音楽に正解はないって夏音が口すっぱくして言ってたのに、自分の口にすることが失敗にならないかばっかり気にしてた……そういうのもやめにしないと。だからさ、夏音。結局、私達はこれからってことじゃないか？」

「澪の言うとーり！　なんか一通りの懺悔みたいになっちゃったけどさ。みんな軽音部のことでひとしきり悩んだんだ。だから、さ」

一瞬、口をつぐんだ律の代わりにムギがその言葉を発した。

「仲直りしましょう？」

その途端、夏音は足をじたばたさせた。

「でもでも！　やっぱりみんな俺のせいで窮屈な思いしてたんだ！　きっと、アイツのワンマンにはいい加減つきあえねーって影で思ってたんでしょ！？」

「ていっ」

「……」

「Ｏｈ！！」

夏音の間近にいた澪と律が同時に夏音の顔にチョップを入れた。

「いひゃいっ！」

つい舌を噛んでしまい涙目になる夏音だったが、そんなのはおかまいなしにチョップを入れた張本人達は頬を怒りに染めていた。

「このアホっ！　面倒くさっ！　どこまで自虐に走ろうとするんだよ。本当にマゾなのもいい加減にしろっつの」
「私がそんな風に思うような人間だと思われてたのがムカついた」
「だ、だって……っ」
鼻声になった夏音は思わず体を起こした。
「同年代の友達、あまり居たことないんだ！」
しんと静まりかえったスタジオで、どうしたものかと視線を交わす一同の中、肩をすくめた律が口を開く。
「じゃ、私らで学べばいーじゃん？」
どこか呆れたような、それでいて優しい声だった。
「……ぐすっ」
夏音の鼻をすする音が大きくなる。
「あれー夏音くん泣いてる？」
「おまっ、そこは空気読めよ！」
「えーー？　りっちゃんに言われたくなーい！」
「オマエな……私のは緻密な計算あってこそのだな」
「それより、私達って何か夏音に伝えないといけないことがあった気がしたんだけど……」
「ごめんなさいも言ったし、何かあったかしら？」
「あー？　なんかあったっけ。忘れるくらいならどうでもいーだろ？」
「いや、なんか重要な……」
「あ、夏音くんのお母さんが伝えてねって言ってたやつじゃない？」
「……そ、そういえば」
彼女達の会話を心地良く聞いていた夏音は、その単語の中に登場した母親の名前に嫌な予感がした。
「母さんが、どうしたって？」
「あー、いや、なんだ……今日の夕飯は何か勝手に作っておくからーっていう伝言をな」

視線を泳がせる律の言葉が言い終わらない内に、夏音は跳ね起きてスタジオを飛び出ていった。あんなに機敏な動きはなかなか見られないほどだった。

「……夏音が料理上手なのって、そういうことだったのかな」

「それは分からないけど……いつまでもお邪魔してたら、その……」

一度、言葉を区切った澪は息を大きく吸い込み、

「私達も夕飯にお呼ばれする可能性が、あるんだけど……」

一瞬で顔が青ざめた少女達の行動は神速のものだった。今までにないくらいの手際で楽器を片付け、帰り支度を済ませると玄関先まで急いだのであった。

最低限の別れの挨拶だけそこそこに、脱兎のごとく家から出て行った少女達を恨めしげに見送った夏音は小さく息をついた。

隣に立って少女達に手を振っていたアルヴィはそんな息子の肩に手を置いて微笑む。

「Ｓｕｃｈ　ａ　ｎｉｃｅ　ｆｏｒ　ｙｏｕ（よかったわね）」

「Ｗｈａｔ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｍｅａｎ？（何が？）」

「Ｎｏｔｈｉｎｇ（さあねー）」

したり顔で微笑むアルヴィにバツの悪い思いを覚えた夏音は、そっと彼女の手をどかして家の中に入っていった。

「さて、作ったものは食べないとね」

その際、彼の足取りと同じくらい重い一言を呟いた。

第二十一話（後書き）

今回、割と短めですね。仲直り回、終了です。そこまで落ちきらなかった上に、仲直りもなんだかなーと思われるかもしれません。

最良の仲直りの形、というのも定まったものはないと思いますので、結局はこういう感じでいいのかなーと……首を傾げながら書き上げました。

第二十二話

放課後、特に示し合わせたわけでもないが、全員が廊下を歩いている途中に合流した。鍵を取っていざ部室へと向かったが、既に先客がいることに気付いた一同は怪訝な表情を浮かべた。

その答えは扉を開けてみて、すぐに理解させられることに。

「夏音くん……あなたを待っていたわ……いや、オマエをマッテイタ！！！」

「……」

部室に入った軽音部一行を待ち構えていたのは我らが顧問、山中さわ子。美人で優しい評判高い女教師。その本人は見た目にそぐわぬフライングVを携えて、今まさに部室に入ってきた夏音を見据えている。

「……どうしちゃったんだろう、この人」

全員分の意見である。ぽかんとした表情で首を傾げた夏音は、じっと鋭い視線を向けられる覚えがなかったので、顧問に尋ねた。

「いったいどうしたんですか？」

頭とか、諸々含めて。

「ふふ……あなたは今とても重大な分岐点に立っているはず。自分の抱える悩み、葛藤の日々。わかる……とても、わかるのよ。けれど、私はあなたがいつまでも悩んでるこの現状が見てられないの！

そう、顧問としてあなたにしてあげられることがないか考えたわ。そんなの一つしかないじゃない……本当の音楽を……この魂のぶつかり合いの中で思い出させてあげるの。さあ！　ギターを出しなさい！　こちとら多少は腕が錆び付いたってその辺のちゃらいギター弾きより劣ったつもりはないわよ！」

びしっとピックを挟んだ指を夏音に向けるさわ子。
「あなたの魂を解放させてあげるわ！」
本人としては最高に格好よくキメたつもりなのだろうが、真正面に立つ少年少女達は胡乱気に見詰め返すばかりだった。
「やれやれ。完全に自分の世界に酔いしれてるみたいだね。なんだか俺が原因みたいだけど」
肩をすくめて、前に歩み出た夏音はギターケースからストラトを取り出す。
「面倒くさいけど、付き合ってみるかな」
にっと笑う夏音にさわ子の眼がきらりと光った。

「……今日もお茶がうまい」
しばらくして後、軽音部はいつもの安穏とした空気に満ち足りていた。ケーキと紅茶を囲んで優雅なティータイム。姦しくどうでもいい会話に華を咲かせている。昨日までの殺伐とした空気はどこかへ吹き飛び、以前までの軽音部が戻ったといえよう。
「わかってはいたの……わかってはいたのよ……」
ただ一人、ギターを抱えてうずくまる女教師だけがこの空間に闇を落としていた。
「プロとはいえ、生徒にこてんぱんにされるなんて……不甲斐なくて泣きそう……」
嗚咽を漏らし続ける彼女はどう見ても既に泣いていたが、誰もそこに突っ込まない。むしろ、九割五分ほど自分達のティータイムに夢中で、残りなけなしの同情の念によってさわ子の方をちらりと見るくらいだ。それも、ひどく面倒くさそうに。
「さーわちゃん。元気だしなよー。さわちゃんは勝てるとかの前に、色々と方向性が間違ってるんだよ。もう、人としてっていうか」
心ない律の一言に、さらに激しく泣き伏せるさわ子にいい加減に「めんどくせー」と思い始めた一同だった。

結局、突如として始まったギターバトル（さわ子いわく、魂の解放）は、序盤からメーターふりきりのさわ子の速弾きから始まり、返す夏音の超絶技巧との掛け合いがしばらく続いた。泣きのチョーキングまで入れ、さらに全力の表情まで使ってギターを弾くさわ子の瞳から一筋の涙が流れたあたりからさわ子の劣勢は始まる。徐々に凄みを増す夏音は早く勝負をつけたかったのか、実力を惜しげなく披露。

最終的に指が吊ってギターが弾けなくなったさわ子はその場に崩れ落ちることになった。

「先生もやるね。ブランクあるとは全然思えなかったや！　たまに部活でも弾いたらいいんじゃないかな」

爽やかな笑顔で声を掛けられた後、決定的な一言。

「あ、それと俺達はちゃんと仲直りもしたし。今日も平常運行なんで、ヨロシク！」

勝手に事態を解決されていたのである。夜通し悩んだあげく、このような手段に出たさわ子は、まるで立場がなかったわけだ。

「まあ、心中察しはするけど……」

気の毒そうに眉を寄せた澪が背を丸めてうずくまるさわ子を見る。十も年下の生徒の前でこの体たらくは、あんまりである。

「さわちゃんカッコよかったよ！　ケーキあるからおいでー？」

いたわりの声をかけてくれる唯に泣き濡れた瞳を向けたさわ子は、唯一の優しさに導かれるようにテーブルに座った。その際、既にさっとお茶の用意を済ませていたムギは流石である。

「……このために生きてきたと言っても過言ではないわ」

しみじみと茶をすすりながら深い息をつく姿は、まだ若い少女達には直視しがたいものがあった。一回りほど老けたような状態の彼

女は、仮にも桜高の美人教師で通っているのだが。
「ま、よく考えたら自分達だけで片をつけるのがイチバンなのよねー」
今しがたまで晒していた醜態を綺麗さっぱりぶん投げたさわ子は、打って変わって教師の顔をした。
「いちおー顧問としてあなた達の予定とかは把握しておきたいんだけど、結局はどうすることにしたの？」
この問いに顔を見合わせた面々である。
「出ることにしたよ」
代表して夏音が答えた。
「出ないっていう選択肢もあったんだけど、せっかくだしね」
「そのコンテストってテレビとかは入らないの？」
「そうだよ。だからこそ俺が安心して出られるっていうのもあるんだ」
「ま、何かの間違いでファイナル進出なんてことになっちゃったけど。こんなチャンスはなかなかないだろうからなー」
コンテストに出場することは誰にでもできるが、最終舞台まで辿り着けるものは一握りなのである。課程がどうであれ、やれるところまでやってみたいという挑戦心が彼女達の心を占めていたのだ。
「優勝とかは正直無理だろうけど、そういうことじゃないんだ」
夏音の言葉にしたり顔で頷き合う少女達にさわ子は「ふーん」と目を眇めた。この子供達は何かを乗り越えて、絆をより深めたのだろうとすぐに分かったのだ。満面笑みを湛えてから、すぐに表情を引き締める。
さわ子は本当ならば心の底から喜んでやりたいが、教師としての自分が課程の段階で手放しで喜ぶのも何か違うと思ったのである。さわ子が満面の笑みで彼女達を迎えるのは全てが終わった後でなくてはならない。さんざん浮かれたあげく、散々な結果になった時に自分も一緒に落ち込みそうだからというのもある。
微笑程度に留め、何だか「わかり合っている」雰囲気を出す生徒

達に改めて言った。
「何にしても後悔が無いようになさい？　学生のうちって全てに全力で向かっていける時期なのよねー。うらやましいわあ……」
嘆くさわ子の言葉は誰も聞いていなかったが。少しぴくりとこめかみが脈打ったが、さわ子は大人の余裕をもって彼女達に尋ねる。
「当日は私も応援に行くつもりだけど、チケットとかはないの？」
「営利目的のイベントじゃないから入場無料だよ。ただ1ドリンク代だけかかるけど」
「そう。じゃ、これから練習しなくちゃね！　私、もう行くわ。頑張って！」
いつの間にか平らげてしまったケーキと紅茶の礼を言って、さわ子は職員室に戻っていった。
「ある意味、すごい人だよな」
色々と強烈な顧問が去っていった後の扉を見詰め、律が苦笑混じりに呟いた。そして、そのまま思い出したように夏音に訊ねた。
「そういえば昨日、夏音はその……夕飯を食べたのか？」
「……ああ」
その一言にぎっしりと説得力が詰まっていた。誰もが気の毒そうに見詰めるので、座りが悪くなった夏音が大袈裟な、と手を振る。
「大丈夫。生まれてから何度も口にしてきたんだから。それより、よくぞみんなこそ平気だったね。初心者は大抵トイレに直行するんだけど」
心の底から驚嘆を示す夏音に、昨夜の記憶がよみがえってしまった面々が胃を押さえる。げっそりと視線を泳がせる反応を見て、夏音は心得た様子で頷いていた。
「ご愁傷さま、てやつだね」
簡単に言ってくれる、と恨みのこもった視線をそこで向けた澪だったが、筋違いかと思い直したのか代わりに小さく溜め息をついた。
「完璧な人間なんてそうそういないってことか」
「え、何か言った？」

「な、なんでもない！」
仮にも身内をバカにするような発言をされたら気を悪くさせたかも、と澪は反省した。
「ま、いいか。さてお茶も飲み終わったし練習しようか？」
反対の声は誰一人あがらなかった。

『ハーイ、それじゃあ最後に意気込みをお願いＣＨＡ～』
『う、あ、ハイ！　んっと……緊張はすごいですが、精一杯頑張りましゅ！』
『オーケィ。明日、あの場所で会おうぜ！　クレイジーコンビネーションのＲＩＴＳＵでしたー！』
通話が切れたことを確認してから、肺の中の酸素を吐き切る勢いで息をついた律にすかさず叫声が叩きつけられる。
「すごーいりっちゃん！　ラジオに出演しちゃったよ！　芸能人だよ！」
興奮冷めやらぬ様子でぴょんぴょんとはねる唯の横では、手を握りしめて同じように頬を上気させたムギがきらきらと瞳を輝かせている。
「お疲れさま」
特に大した運動をしたわけでもないのに、びっしょりと汗を掻いた律に澪からタオルが差し伸べられる。
「サンキュー……うぅ、最後かんじゃった……もうだめだー！　全国ネットで笑いものだー！！」
ウギャーと頭を抱えて床で悶えまくる律の耳に、プッと噴き出す音が引っ掛かる。
「笑うな夏音！」
「だ、だって律の声、ラジオからきこえるんだもん！　あーヤバイ

！　何あの声っ！？　つくりすぎだろー」
　終いには腹を抱えて転げ落ちそうになる。自分を馬鹿にする男をきつく睨んだ律は恨みがましい声で唸った。
「つーか何で私だよー！　お前の方がラジオとか喋り慣れてそうだろう！？」
「いーや。俺、ラジオは全然出たことないんだ」
「んなことどーでもいいわっ！　つまりお前の方がメディア慣れしてんじゃんって話だろ！」
「そんなことないよ？　俺、テレビとかの前だと緊張するし。『あ、あ、あ、あ、あの、オァ、スゥーッハァ。スゥーーッ、ブフォッ！　ソ、ソ、ソ、ソソーデスネ！？』みたいな感じになるもん」
「嘘つけっ！　めっちゃフレンドリーに喋りまくってる動画観たわっ！」
　有名人は誤魔化しがきかない。
「でも、この部の部長は律なんだからさ。そこが妥当だと思うけどな」
「へっ！　そういう時だけ部長部長ってな」
「例えば唯に喋らせてみなよ。何喋るかわかんなくて恐ろしすぎるだろ？」
　公共の放送にはいささかデンジャラスすぎる会話を提供しそうである。
「夏音くんひどい……」
「まあ確かにな」
　そりゃそうだと激しく同意する律に、さらにショックを受けた唯は膝を抱えていじけ始める。
「澪なんかひどいと思うよ。放送事故になること間違いなし」
「それもそうか」
　これにも思い当たる節がありまくりなので、容易に想像できた。
　思わず抗議の声を上げた澪は無視される。
「ムギはまあ、いいと思うけど……」

「けど？」
「なんか、違う気がする」
「結局、私一択しかねーじゃねーか！」
おまけに、最後のは理由にすらなっていない。
「まあまあそんな怒りなさんなよー。いい経験じゃないか」
律は怒りのあまり身を起こすと、がばっと立ち上がった。
「明日、私がどんな目で見られるかわかってんのかよ！？　『あ、ラジオで噛んでた女だ』だぞ！？」
「いや、別に誰も思わないでしょそんなの。微笑ましく捉えられたと思うけどな」
「そうよりっちゃん。緊張のあまり噛んじゃった女子高生！　バッチリだと思う！」
横でニコニコと会話をうかがっていたムギが言う。
「ば、ばっちりってなんだー？」
律は、日頃からよく考えが読めないムギにたじろいだ。
「大丈夫！」
「いや、自信満々におされても……」
心の底から言っているだろうムギに弱ってしまった律。これには、抗いたい気持ちも萎えてしまった。
「別に終わったからいーんだけどさ……」
爆メロ前日にラジオに生放送するという話が襲来した時、一同は誰が電話に出るかでもめにもめた。たらい回しした結果、部長ということで律に白羽の矢が立ってしまったのである。彼女は電話がかかってくる寸前まで抵抗していたのだが、受話器越しに聞こえる喋る自分の声がすぐ側のラジオから流れるのを聞いて腹をくくるしかなかったようだ。頭は真っ白になって何を喋ったか、ほとんどぶっ飛んでしまっている。
「いよいよ明日、か」
ぽつりと噛みしめるように呟いた澪の言葉に皆が口をつぐむ。今日、夏音の家に皆が集まったのは、律のラジオトークを聞くためだ

けではない。機材や明日の流れについての最終確認であった。主催側との打ち合わせ内容を確認し、間違いがないようにチェックする。明日はスタジオリハを行った後に夏音の車で会場に向かうので、全員が夏音の自宅に泊まることになっている。

爆メロに出場することが決まって以来、誰しもがこの日を迎えることの実感を得られないでいた。どこか非現実のものとして、ふわふわとした感覚を抱えたまま進んできたのだ。

夏音がポテトチップスの袋を持ち、残りわずかな欠片を口に押し込んだ。その緊張感のない行為に澪は呆れた眼差しを向ける。

「何か言うことはないのか？」

「言うことって……俺が？」

ふいに向けられた鋭い視線を不思議に思い、ぽかんとする夏音。

「え、と。明日は楽しもうね？」

「何で疑問系だよ！」

まるで締まらない言葉に律が憤慨した。先ほどから自分が怒られるような覚えはないので、不服そうに夏音が口を尖らせた。

「だって何言ったらいいのかわかんないし！」

「こう、何かあるあるだろー？　みんなを奮い立たせるような熱い言葉がさー」

「意味わかんない。いくぜオラーとか？」

とことん気合いを入れるには不向きな人材であった。

「そういうのを仰々しくやったことってあまり無いなあ。あ、でも必ず言うことはあるかな」

改めて至近距離で注目されていることを意識した夏音は気恥ずかしそうに笑った。すっと立ち上がり、両手を広げる。

「楽しもう」

その瞬間、少女達の頭の中にこの一年の光景がフラッシュバックする。音楽をやろうとする時、この唯一の男はいつだってその一言を口にする。

「あ……」

ムギがふいに漏らした声に、はっと息を呑む音が響く。
「私、なんか感極まっちゃって……おかしいね」
彼女は大きな瞳に涙を溜めていた。頬を伝う一筋の痕が、一同の目を引いた。
「ムギ……」
「あ、ごめんね！　別に悲しいとかじゃないの！　私、この一年で今までにないくらいいっぱい濃い体験をしてきて……そういうのとか、一気にきちゃって……」
笑いながら泣く彼女の横で、同じように鼻をすする者がいた。
「み、澪ちゃんも？」
目を赤くして涙を零す澪に気付いた唯が驚いた声を出した。
「いや……私、もらい泣きすごくて」
「あー、澪は昔からもらい泣きの女王だからなー。もらわなくても率先して泣いてるくらいだし」
横で好き勝手言っている幼なじみを無視して、澪は鼻をかんだ。
「でも、ムギの気持ちもわかるんだ。私もこの一年で色々……」
そう言いかけて、夏音の方をちらりと見る。
「……っ」
数秒のち、頬が赤くなった。
「え？　ナ、ナニ！？」
澪の反応に狼狽えた夏音。すかさず、からかいの声がかかった。
「おやー二人は何か特別な思い出でもあんのかなー？　いや、あるんだっけ。何せ二人だけの放課後レッスン……やらしー」
「そんなんじゃないって！」
「そーいうのじゃない！」
同時に声を上げる。くつくつと笑う律はどこふく風である。既に機嫌を取り戻した彼女は、これをもってささやかな反撃とした。
一瞬、静まりかえった雰囲気はすぐに朗らかなものへと変わった。本人の意志は別として、律がこのように部のムードメーカーになっていることは間違いない。

「ま、各々感じ入るところもあるワケだと思うけど」
脱力したように腰を下ろした夏音だったが、仕切り直すように話し始めた。
「たぶん言葉なんかじゃ表せないよね。俺もこの一年は衝撃の連続だった」
日本にやって来て、滑り出しこそ失敗してしまった。心の奥深くまで残るような傷ではないが、二度と学校に通いたくないとまで思わせるような体験もした。けれども、再出発は生まれて初めて体験することの連続だった。
彼にとって桜高に入学してからの出来事は、とても言葉でまとめられるようなものではないのだ。
「あ、そうだ。どうせなら、その気持ちを本番でぶつけるために思い出語りでもしようか？」
「いいよ、そんな。それに思い出語るにはまだ早すぎだろー？」
「それもそっか」
苦笑で返された夏音は、もう一度心でそれもそうだと繰り返した。
振り返るには、まだ早い。軽音部は、まだまだこれからなのだ。
「やっぱ仰々しくやっても意味ない！　今日は前夜祭ってことで騒がないと！」
その為に、お菓子もジュースもたくさん用意したのだ。夏音の言葉に、全員が笑顔でそれに応えた。

前回、夏音の家に泊まった時と同じように少女達には客室が開放された。深夜に差し掛かるあたりまで前夜祭と称したパーティは続いた。交代で風呂に入り、途中からパジャマパーティと化して団欒のひとときを過ごす。ゲームをやったり、他愛無いおしゃべりに華を咲かせているうちにあっという間に時間は過ぎていった。
夏音は皆が客室に下がると、リビングに降りた。これから彼女達

はさらなる女子トークを繰り広げるのかもしれないが、流石に夏音もその輪に加わることは遠慮せざるを得ない。

何をする気も起きず、ただぼんやりとソファに寝転がって天井を見上げる。自分の同級生、部活の仲間。そんなものが一つ屋根の下にいることが不思議に思えた。

アメリカにいた頃は、家に友達を上げたりするような機会はなかった。学校が終わるとすぐに大人達に混ざって音楽に浸るような生活。流行のカートゥーンの話題についていけなく、多くの友達ができることはなかった。

幼い頃からそのような生活を送っているせいで、どこか早熟な少年だった夏音は、同年代の子供達と合わないことがしばしばあった。皆が口にする話題だったり、彼らの好む遊びなどに違和感を覚えて仕方がなかったのである。

どこそこから出るおもちゃを買って貰った。パパに野球に連れていってもらった。他にも、その年頃の少年少女がこぞって自慢したがるような事柄に熱烈に興味を示すこともなかったので、自然と接点も消えていく。幼い子供達は、自分と同じものに興味を持つ仲間を欲しがるのである。自分が先んじて手に入れたゲームを羨んで欲しいし、自分が受けたその恩恵をめぐんでやって交流を深めることが重要視されるのだ。

夏音は週に一度もスニッカーズを食べずにいても平気だし、親がおもちゃを買ってくれなくて癇癪を起こすこともない。人並みに興味を覚えなかったわけではないが、夢中になることはなく。そうやって他の子供達が揃って手に入れていく「当たり前」を横目に生きてきた。

この一年、夏音は自分が受け取り損ねていた物をたくさん得た。誰もが当たり前に享受していた物の存在を知り、同じように触れていったのだ。

自分が普通の子供ではないことを充分に承知していた夏音は、今こうやって普通に慣れ親しもうとしている自分に驚いている。

大切な友達ができた。
一緒に学び、遊び、目標に向かい、たまに旅行に行ったりするような存在。彼女達は自分が長らく触れてきたもの、自分の一部と化しているくらい自然な「音楽」という物に熱い眼差しを向けている。
彼女達の考えることが理解できないことも多々あったが、共に音楽を味わうその瞬間には、これとないほどの絆を感じるようにもなった。
明日、否、既に時刻は本日。短いながらも彼女達と培ってきたものが試されることになる。
自分も含めて、彼女達は初めて観衆という存在からのジャッジを受けるのだ。文化祭の客とは桁外れな次元。彼らの視線の正体を知ることになる。一生、その視線を味あわない者もいる。だが、彼女達は違う。
何にしても楽ませてやろうと夏音は心に決めていた。あのステージで、同じ体験をさせることは自分が許さない。彼女達を楽しませること。一緒に弾けることができなければ、自分の音楽家としての生命が潰えるだろう、と思うくらいに真剣であった。
何気なく投げ出していた足を抱える。誰も居ない家は慣れる以前に、当たり前の日常であった。
気配だけ、ひっそりと感じる。目に見えないし、音も聞こえないのに、同じ家に誰かが居ることが伝わる。温もりのような、不可視なものを感じている。
その感覚がどこかしっくり来て、夏音は自宅なのに普段以上にくつろいでいた。
その時。二階から誰かが降りてくる音がした。
おや、と顔を上げる前に夏音は目を閉じながらその人物を推測する。
「唯？」
「え、何でわかったの？」
夏音くんエスパー？　と首を傾げながら一気に階段をかけ下りて

くる唯。そのまん丸に開かれた瞳がおかしくて、夏音はくつくつと笑った。

「わりと当てずっぽうだったけどね」

本当は確信に近いものもあったが。細かい違いだが、足音にも個性はある。律の場合はスタスタと規則正しくも、少し大雑把な感じ。澪の場合は注意深く、少し重い感じ（体重のことではなく）。ムギはあまり足音を感じさせない。唯の場合は気が抜けたようにバラバラな歩き方をする。

「みんなはまだ寝てないの？」

「さっきまでお話してたんだけど、もう寝ちゃったよ」

「唯は眠れないの？　水でも飲む？」

「私、いっつももう少し起きてるから眠れなくって……」

真っ先に眠ってしまいそうな彼女が一番宵っ張りなのは意外である。気恥ずかしそうに答えた彼女は別のソファに腰を下ろした。

「だから寝坊ばっかするんじゃないの？」

「えへへ～憂にもよく怒られてるんだー」

「苦労するなぁ」

しっかり者の妹君の顔を思い浮かべて気の毒そうに言う。

「夏音くんこそまだ寝ないの？」

「んー。俺もなんか寝れなくてさ」

「へー、一緒だねー」

含みはないとしても、皮肉のようになってしまった。言外に人のこと言えないだろうと指摘されたようで夏音はむっとした。しかし、すぐにそんな気持ちは霧散してしまう。

「なんか騒いだ後ってやけに静かになるだろう？　そういうのが、少しね……落ち着かないんだ」

祭りの後の静寂に似ている。どこか閑散とした空気がそれまでそこに存在していたエネルギーの残滓を消し去ろうとしている気がするのだ。

「んー。何となく分かるかも」

「そうだろー？」

例えば、それは素晴らしいコンサート。客とまさしく一体となり、最高の夜を過ごした時などは体のどこかが切なくなるものだ。

「夏音くん、緊張とかしてる？」

「緊張？　そんな馬鹿な――――」

一生に付そうとした瞬間、夏音は言葉を詰まらせた。唯の何の気なしの一言が夏音の心に予想外の衝撃を与えたのだ。

「緊張……もしかして、緊張してるかも」

これには夏音自身が驚愕していた。前日から眠れなくなってしまうほど思い詰めるような経験は久しい。自分でも気付いていなかったことを言い当ててしまった唯を思わず見詰めてしまう。

彼女はにたにたと笑んでいた。

「なにさ？」

「いやー夏音くんでも緊張するんだなーって」

「俺でも緊張くらいはするさ」

いや、少し前に緊張なんて大したことないと偉そうに言っていた。その分、気まずいのだ。

「やっぱり俺にとってもこのライブは特別なんだよ。今までに経験がないと言ってもいい」

夏音にとってプロの舞台とは異なり「何者でもない自分」として人前で演奏すると、何とも言えない感覚に包まれるのだ。カノン・マクレーンという肩書きが取っ払われた状態で、自分の演奏がどのように評価されるかが気にならないと言えば嘘になる。自分の力を過大に評価することもないが、ライブハウスでの審査の時点で自分を含めた演奏で落とされたことは、夏音に微かな焦りをもたらしていた。

自分の築いてきた物は、実はカノン・マクレーンというブランドを育てていただけで、その実力だけを抜き出せば大した物とは扱われないのかもしれないという不安である。

例えば姿を見せないで演奏したとすれば、それを聴いた者は自分

の演奏を評価してくれるのか。
　あのライブハウスで演奏した日から自身の評価の軸がぶれてきて、焦りが沸々と大きくなった。だからこそ、夏音は軽音部にいる自分が不安になってしまったのだ。
「でもね。緊張はしてるけど、どちらかというと楽しみのほうが大きいと思うよ」
　緊張すれども、それに押し潰されることはない。緊張は夏音にとって明確な敵にはならないのだ。
「ワクワクしすぎて、どうにかなっちゃいそうだ。誰も知らないこのメンバーで思い切り純粋な音楽をぶつけてやるんだ。どう評価されても、それは悪いことにはならないって確信もある。そうだな……どちらかというと、興奮しているのかもしれないね」
「やっぱり夏音くんは余裕だね！　でも、私も少し楽しみ！」
「楽しみは少しなの？」
　夏音が意地悪く笑う。
「うーん……楽しみだけど……うん、やっぱり楽しみかな？」
「きっと楽しいはずさ」
「そだねー」
　唯は目を細めて言った。
「夏音くんが言うんだから間違いないよ」
　夏音はその笑顔を受けて顔を逸らしかけた。少女達が自分に置いている信頼が時折、こうやって自分を見据えてくる。
「俺が言わなくても、きっとそうなるさ……唯もみんなも」
「夏音くん……？」
　夏音は姿勢を正してじっと唯に向き直った。
「唯。ギターは楽しい？」
「うん！」
　訊くまでもない質問に、答えるまでもない答え。唯は当たり前だといった風に強く頷いた。
「なら楽しいことをしに行くんだ。楽しくないはずがない」

両手を広げ、大袈裟に肩をすくめる夏音。そんな動作が外見と相まってとてもしっくりとしている。

「それもそっかー」

頬をだらしなく緩ませ、納得する唯。その単純さに思わず夏音は声を立てて笑った。

「さて！　明日起きれなくなっちゃうからもうおねんねだ！」

「はーい」

おやすみと言い残して唯が客室に消えた後、深夜に良い年の男女が二人きりというシチュエーションにすら何も感じていなかった自分に、いい加減男としての自覚はどこに去ってしまったものかと悩んだ夏音であった。

第二十二話（後書き）

投稿遅れました上に、激短くてすみません。

感想お待ちしております。

オリジナルキャラクター設定（前書き）

中途半端なオリキャラ設定を書き直しました。

オリジナルキャラクター設定

＞ｉ２４０５４―３０２９＜

立花夏音（立花・Ｍ・夏音）

１７歳。

父親がセッションドラマー。母親がジャズシンガー。さらに音楽一家として業界で知らぬ者はいないスループ一家に囲まれ、幼少期から音楽に満ち溢れた環境で育つ。

アメリカでプロのミュージシャンとして華々しい活躍をしていたところ、とある事がきっかけで日本に訪れることになる。

はじめに入学した日本の高校で今は存在すら伝説とされる「ヤンキー」という古代種に可愛がられてしまった（いかがわしい意味ではなく）ことにより、引きこもりコースへ人生が転落。

一年の引きこもり生活を経てから、男子が少ないだろうという理由からなんとか共学化初年度の桜ヶ丘高等学校に通うことになった。

カノン・マクレーン（Ｋａｎｏｎ　ＭｃＬｅａｎ）という名で音楽活動をしていた。某女性アイドルの解散宣言のごとく「ちょっと普通の男の子になりまーす！」という理由で音楽活動を控えて音楽シーンから消えたことで、ファンは「マジでっ！？」と困惑したという。実は死ぬほどどうでもいい内容のブログを定期的に更新していたりするので、消息は消えていないことだけは確認できる。

元々、ブロンドなのだが現在は眉毛、睫毛も黒く染めている。い

ったい身体のどこまでカラー剤を使用したかは彼のみぞ知る……。

＞ｉ３１７５６―３０２９＜

山田七海

１６歳。

夏音と同じクラスであり、桜高の生徒会書記を務める少年。自らをモブキャラ、と自虐的に言い表すほどコンプレックスにまみれた男である。

とにかく自分が地味で冴えないと信じて疑わず（実際、その通り）、いわゆる「何か持っている」人への憧れを心の底に抱いている。高校入学以来、そんな人間達が周りに続々と登場することで様々な騒動に巻き込まれていくのだが、既にその活躍ぷりはラノベの主人公クラス。

コンプレックスが消えることはないが、根が真面目な上に意外に一本気通っている面があり、周囲からの信頼は厚い。そのことに無自覚であったりするあたり、天然も混じっている。

日々、生徒会の女先輩達にしばかれ、もとい可愛がられて書記という役職を越えた責任や仕事を与えられる。その辣腕ぶりや仕事への没頭ぷりを見てワーカーホリックと言われることもしばしば。

立花夏音が苦手。

＞i31757—3029＜

堂島めぐみ

17歳。

桜高の二年生。立花夏音ファンクラブの会長をつとめる。誰もが目を瞠る縦ロールを備えている。本人の苗字と相まって影では堂島ロールなどと呼ばれている（ことは本人は知らない）。

幼い頃は家庭環境のせいで感情の少ない少女だったが、家族旅行で観に行ったコンサートにてカノン・マクレーンの音に触れることになる。夏音の演奏を聴き終わった後にそれまでの世界が塗り変わるくらいの衝撃を受けた。それ以降、カノン・マクレーンを信奉するようになる。

夏音が活動休止宣言をしたことにより、ショックで三日ほど寝込んだのだが、学校祭の軽音部ライブにて本人がヴォーカルをしている姿を見て卒倒しかけた。

自分が正体を知っていることを隠し、立花夏音ファンクラブを設立することを決意。夏音の気をひくために、ちょっとしたアピールを企んだが、それが見事に逆効果を奏したことは彼女の予想外だったようだ。

文芸部とバトン部を掛け持ちしている。バトン部での実力はエースの名を冠するほど。

＞i31759—3029＜

マーク・スループ

２２歳。

スループ一家の末っ子。クリストファーの息子であり、五男。

現在、Ｓｉｌｎｅｔ　Ｓｉｓｔｅｒｓのギタリストとして名を上げていっている実力派ギタリスト。

スループ一家の中でも、特に才能に恵まれていると言われる。

その若さで大御所バンドの中でも特に注目度の高いギターに抜擢されるだけあり、メディアの注目の的。

Ｓｉｌｅｎｔ　Ｓｉｓｔｅｒｓの他にも様々なミュージシャンのレコーディングに参加したり、不定期に行われるフュージョンバンド等と活動の幅は広い。

小さい頃から、年が近いという理由で夏音の面倒を見させられる。

夏音とは兄弟同然に育ち、実際に彼のことを弟だと思っている。

彼の性格を表すのは器用貧乏。天才肌に違いないのだが、末っ子ちゃんとして扱われる上に真面目を通り越して堅物な性根もあって、苦労人の影を見せる。

夏音に関しては常に肝を冷やしてばかりで、つい怒鳴り散らしてしまうので夏音に怖れられるという不本意な結果に。

あなや。

オリジナルキャラクター設定（後書き）

また増えます。

第二十三話

床がびりびりと震えるほどの振動を身体に感じながら最後の音を振り切った。

「うん！　いい感じだな！」

曲の締めに控えめなグリス。澪の手癖である。そして、ぴたりと音を止めた澪が白い歯を見せて言った一言に夏音が素直に頷く。

「今までの中で一番演奏が締まってた」

「あーこれがそのまま本番だったらなー」

タムにもたれかかった律が楽しげに笑う。苦笑混じりの表情を見る限り、真にそう思っているのだろう。

「りっちゃん弱気―」

「うるさーい」

「あ、そうだ。ところで本番は律のデコは出す感じなのかな」

「んー。衣装とかは特に決めてなくても、ちょっとくらいは体裁を整えておきたいかもな」

顎に手を当てて悩む澪。

「そこの二人チョイ待てーぃ！　私のデコについて方針を決めようとすんな！」

「……いや、でも。うーんカチューシャデコ出しって逆にアリなのかな」

「えー？　りっちゃんはこの感じが可愛いんだよ！」

「でも私、りっちゃんが髪下ろしたのも可愛くて良いと思うわー」

「え、何か真剣に話し合いに突入したんだけど。やだ何これこわい」

本人を無視した、デコ出し議論はしばらく続く。

このように、軽音部の一大イベント当日はゆるやかな雰囲気で始まった。

軽音部ことＣｒａｚｙ　Ｃｏｍｂｉｎａｔｉｏｎ。夏音の独断によってついたバンド名だが、既に公式ＨＰの上にも名前が載ってしまっている。バンド紹介のページに思い切り偽名を使っているヴォーカルであったり、勝手にプログレと紹介されていたりとツッコミどころ満載だったが、さらにそのＨＰにはこう書いてあるのだ。

一バンド目、と。

これを知った時、ほとんどの者が身震いした。何しろ、トップバッターとは荷が重い役割を担う。イベントを見に来た客がはじめに今回の爆メロの質を感じ取るのである。

あまりに肩すかしを食わせるような内容の演奏をしてしまえば、主催側にも同じ土俵に立つバンドにも申し訳ないような気がするのである。

最初と最後に演奏するバンドは色んな意味で客の注目を浴びる役目にある。どうせなら二番か三番がよかったと分かりやすく項垂れた澪に夏音は言った。

「でも一番には一番の利点があるんだよ」

正直、自分達がいわゆる「おこぼれ通過」したと思っている夏音はこの出順は妥当だと捉えていた。審査側の期待値があるとすれば、その期待値が高いバンドほど後ろに持ってくるのは当然の選択である。

そもそも、本気で優勝にこだわっているわけではないので、出順に執着する必要は全くないのだ。

「逆リハだから転換の時が楽だよね！」

ずこーっと崩れ落ちる音が複数。

「んなこたわかってるわ！　もっと経験豊富な人間としてのアレが

あるだろ！」
「んー。なんだろう……後のライブをゆっくり観れること？」
「発言内容が地味すぎる……」
「うるさいなー。でも、お客さんもスタッフもみんな序盤だから元気いっぱいだよ！」
「はぁ……」
「いやいや何その溜め息！？　これは真面目な話だから！　ああいうイベントってオープニングのテンションがすごいだろう。何バンドも立ちっぱなしで見ているうちに疲れてくるじゃん？　そうなったらお客さんのテンションも少し落ちるわけで。それに歴代の優勝バンドでプロになった人達がオープニングアクトをやるっていう話だよ。おそらく、俺達が演奏する前に彼らが充分に会場を温めてくれると思うから、むしろやりやすいんじゃない？」
　爆メロでは、毎年恒例でオープニングアクトをプロのバンドが勤めることになっているらしい。これもどこぞの大会からのパクリという噂もあるそうだが。
「あ、モノクロボンボヤージュだっけ？」
「違う。モノラルボンバーイェイだ」
　唯と律が私のが合ってると主張し始める。
「二人とも違う！　モノグロット・ボンバストだ！」
「バンド名、意味わかんないね」
「ねー」
　見事に間違えた二名は顔を見合わせてバンド名を批難する。
「意味はわかるけど、語呂が悪いね。明らかに辞書引いて決めましたーって感じのバンド名。だっさ」
　日本人が英語を使うとこうなる場合が多い。
　さらっと毒を吐いた夏音は、おもむろに席を立ってキッチンに向かった。スタジオリハも済み、既に朝食も摂った。後は出発の時間まで自由だが、食器を洗って片付けなくてはならない。
　意外にマメな性格である。

「あ、夏音―。私やっちゃうよ」
すぐに後を追いかけてきた律が袖をまくって流し台の前に立つ。それからスポンジに水をふくませ、洗剤を数滴垂らす。しっかり泡立てた後、水に浸けていた食器を洗い始めた。
夏音が遠慮する暇もないくらいに自然な動作で、驚くほど手際がよい。これは普段からやり慣れている証拠であり、家庭では家事を担うこともある彼女のことを知っていた夏音だったが、やはり先入観というものは恐ろしい。平常時の彼女のイメージに慣れているせいか、せっせとてきぱき家事をこなす律というのはとても違和感がある。
「ん？　何ぼーっと見てんの？」
「あ、いや。何というか……ご、ご苦労さんです」
「え？　あ、……はい」
律はぽかんと目を見開いたまま、曖昧な返事をした。何か失敗したような気がした夏音は居たたまれなくなった。完全に自分のせいだと分かっていたが、よろしくと律に一声残してその場を離れた。
リビングに戻り、そこでテレビを見ながらくつろいでいる他の面々は本番当日の緊張の影が見られない。先ほどスタジオリハをやった効果もあるのかもしれないが、テレビで流れるニュースにとぼけた反応を示す唯や冷静に突っ込む澪。そんな二人をにこにこと見守るムギ。肩の力が抜けており、平常運行といった様子だ。
キッチンでは律が皿を洗っている。
夏音は深く息を吐いて微笑んだ。きっと大丈夫。今日は良い一日になる。そんな確信を得て、三人の会話に混じった。

「ではではみなさま。出発しますが、よろしいですか！」
「おー！」
「出発進行ー！」
機材も積み終わり、準備万端となったところで気合いを入れて車

を走らせる。以前と同じ道を快調に飛ばして自分達の曲を流した。
澄み切った青空が気持ち良く、窓を全開にしてスピードを出すと風が車内に激しく入り込んだ。
途中で唯がせっかくセットした髪がぐしゃぐしゃになったと喚き、律が「カチューシャにすればいいんだ」と鼻で笑った。
「りっちゃんは本番で髪を下ろさなくちゃだめなのです」
「お前さっきこの髪型が可愛いって言ってただろーが！」
突如として始まったデコ会話に夏音が加わる。
「おっ。じゃあ律はデコを封印する方向で」
「方向とかっ！　お前は！　私の何なんだっつの」
「でも髪下ろしてドラム叩くと格好いいと思うけどな。こう……ふとした時に髪が翻って荒々しい感じとか」
澪が真面目な口調で言うと、ムギが手を叩いて喜ぶ。
「わーっ。荒ぶるりっちゃんも格好いいかも！」
「いやー。ぶっちゃけ髪がチクチク刺さってうざったい」
それに前が見えなくなるし、と呟く。
「澪の言う通り律はもっと上半身を振り乱しちゃいなよ。かっけーよ。やっちゃいなよ」
「ナオみたいでいいかもな。似合わないけど」
「澪は賛成なのか反対なのかどっちなんですかー？」
いつもデコ一つに対して仲間からの一斉射撃が行われる律はいい加減に辟易した様子で押し黙った。しかし、その手はカチューシャのあたりを弄くっている。
「でもうちらのバンドって夏音くらいしか動く人がいないよな」
「なら澪が動けばいいじゃん」
「わ、私はそういう感じのじゃないからっ」
即座に夏音から指摘され、墓穴を掘ったと後悔した澪は慌てて否定する。
「逆にさ。俺はヴォーカルだけど動けるところで動いてるのに、みんなが大人しいと浮いちゃうんだよ。こればかりは慣れだから言わ

ないでおいたけど」
「んー。動くって言われても……どうすればいいのかわかんないよ」
そう言って困ったように眉を寄せる唯などは、演奏中は楽しそうに体を揺らすことはあるが激しく動き回ることはない。あくまで自然に体が動くだけで、パフォーマンスやスタイルとしての動きというのは意識していないのだ。
「フロントの二人がステージの上で大人しいのもステージ映えしないからさ。いつかそういうのも気を遣って欲しいと思ってたんだよね、実は」
「むーー。よくわからないなー」
匙を投げた唯の隣でムギがおずおずと口を開いた。
「わ、私も動いた方がいいですか？」
「ムギは……そうだなー。動くに越したことはないけど。わざわざ動く必要もないというか……非常に難しい問題なんだよ」
「夏音くんは有名な人でこういう人の動きがいい！　っていうのはないの？」
「例えば……キース・エマーソンとか？」
極端な例を出したか、と夏音は思い直した。
「俺、日本のＪポップも少しは知ってるんだけどさ。昔の小室哲哉とか、すっごい動いてるよね」
「小室さん？」
「え、小室知らないのかムギ！？」
夏音でさえ知っているのに、と驚愕の声を上げた律に首を傾げるムギ。
「はぁー。これがジェネレーションギャップってやつかぁー」
「同い年だろ。そもそもお前も世代からちょっとズレてるんじゃないか？」
「澪だって知ってるだろ？　ていうか知らない人って珍しいくらいだって」
「ごめんなさい……私、勉強不足で」

「ほら！　ムギがしょんぼりしちゃっただろう！」
肩を落としてしょげたムギを見て澪が目を吊り上げる。
「わ、悪かったよー怒鳴って。あんまりびっくりしちゃったからさー」
「俺は日本にいなかったから律の気持ちはよく分からないけど、知っておいた方がいい人だと思うよ」
周りの反応を受けて相当ショックだったのか、ムギは何度もこくこくと首を振った。
「いきなり今日やれって言うのも無理だから、今後は意識していけばいいさ」
無難にまとめた夏音に一同は素直に頷いたのであった。

ライブハウスには午後一時を少し過ぎたところで到着した。以前と同じように駐車場に車を停め、機材を積んだ荷車を押しながらペニーマーラーの裏口に入る。一度来た場所なので、行くべき場所まではすいすいと進んでいけた。ステージの裏まで行くと、ちょうど前のバンドのリハーサルが行われていた。そこに控えていたスタッフが機材を持って現れた軽音部の面々に気付き、先頭に構えていた夏音に顔を寄せる。下心があるわけではなく、あまりに音がうるさいのでこうして耳元で叫ばないと声が聞き取りづらいのである。
「おはようございます！　今このバンド始まったばっかなんですよね。リハ終わるまでかなり時間あると思うんで、機材だけ下ろして控え室行っててください！」
なんと前のバンドはリハを始めたばかりだったらしい。このように車で来ると時間の調整が難しい。道の混み具合も分からない上、余裕を持って到着しようと心懸けていたので、予定の集合時間よりだいぶ早く到着してしまったようだ。
夏音が同じことを彼女達に伝えると、一同は以前も控え室として使われていた会議室へと向かった。

控え室にはバンドの世話をするスタッフが一名だけいるだけで、他のバンドの姿はない。何とも贅沢なことに、今回は五バンド分の控え室があるらしい。ちなみに、この会議室は正式な控え室ではなく、軽音部は四つある控え室に割り当てる時に抽選で外れてしまったそうだ。

「ふぃー。なんか前の時を思い出して胃が痛くなってきた」

椅子に腰を下ろしたところで律が強張った笑みを浮かべて言った。

「確かにあんまり良い思い出じゃないもんねー」

と言う割には落ち着き払った様子の唯。

「あーきんちょーしてきた」

「なんか白々しい響きを感じたわけだけど」

やはり、その発言の割にはこれとして緊張した素振りもない唯に夏音は首を傾げる。

「えーそんなことないよー？　手とか震えて、もう。ほら……」

ばーんと広げて見せた両手に異変は見られない。

「……そう？」

「ほんとほんと！　もーやだなー。本番どうしよー」

ここまで来れば、誰しもがおかしいと思った。確かに前回ここに訪れた時の唯は誰もが分かるほどガチガチに固まっていた。それは他の面々も同様であったが、今の彼女は余裕すら感じるほどに気楽な笑みを湛えている。

「熱でもあんのか唯ー？」

訝しげに眉を顰めた律が唯の額に手をあてようとする。その手をひらりと避けた唯がけらけら笑った。

「そんなことないよ。もーりっちゃん無礼者ー！」

語彙もどこかおかしい。同じようなことを思ったのか、一同はいよいよ不気味そうに唯を凝視した。

「なんか気持ちわるい！」

歯に物着せぬ物言いは夏音の特権のようなものである。その表情には気味が悪いとありありと浮かんでいる。

「へへ。夏音くんも言うねー」
「いや、言うねーじゃないから！　さっきまでこんなんじゃなかったのにどうした！？」
愕然とした律が頭を抱えて叫んだ。
「りっちゃんは元気良いのがとりえだよね」
「あぁん！？」
「ヤバイ。唯が本格的に不思議の世界の住人に。ここに来て、この急激な路線変更はいったい！？」
「いや、路線的には真っ直ぐだと思うけど……何段階も飛んでしまったような？」
取り乱しかけた夏音へ冷静に応える澪だったが、自身も首をひねって唯をじっと見詰めた。
「ムギ。今日の朝って何か変な物食べたか？」
「普通だったと思うけど……」
「おいっ！　人が作った物にケチつけないでくれ！」
憤慨する夏音。まず疑われるのが自分の提供した物というのがカチンと来たようだ。
「みんな何言ってんの？　変なの」
「変なのはお前だーーっ！！！」
急に難しい顔をして話合いを始めた周りを不思議に思ったらしい。唯は多くのツッコミを気にした様子もなく、ふんふんと鼻歌をすさび始めた。
奇天烈な鼻歌の旋律だけが響く控え室。
頭が沸いてしまったのだろうか。軽音部きってのリードギター（という名のサイドギター）の態度の急変に残された者は厳しい表情を作った。目を見合わせてこのメルヘン少女の対処を試みたのである。
（なんかヤバくない？）
（ヤバイも何も……っていうか、お前らこっち来い！）
軽音部お得意のアイコンタクトをもどかしく思ったのか、律が唯を除くメンバーを隅の方まで引っ張っていった。

「なんかよく分かんねーけどさ。このまま本番を迎えるのだけはまずい気がする」
「うん。私も律の言葉に全面的賛成だ」
「澪ちゃんはさっき変な食べ物が原因じゃないかって言ってたわよね？　なんだかいつもの唯ちゃんが割り増しになった感じが……」
ムギの言葉を聞いて、皆が唯の方に視線を向ける。
割り増し唯。確かに、周囲に飛んでいる少女漫画的なふわふわはいつもの数倍の量である。自分ワールドの扉をオープンしているのもいつものことだが、未だかつて無いほどその扉が全開になっているのだ。
「嫌な予感がこう、ひしひしと」
弱々しく呟いた夏音の声が、一同の不安をいっそう掻き立てる。
「と、とにかく。唯がどれだけまともなのか確かめないと！」
びしっと指を立てた律が鬼気迫る形相で言った。それもそうだ、と一同はそろって言い出しっぺの律に行くように促した。何で自分が、と唇を尖らせた律だったが、このままでは拉致があかない上にリハの時間が迫っていることもあって唯に近づいていった。
「なぁー唯ー？　リハ前に本番の流れとか確認しておかないかー」
「うん、いいよりっちゃん。どんとこいだよー」
「えっと、一曲目は何だっけ」
「とりびゅーでしょ？」
「そ、そうだな。MCはどこに挟むんだっけ！？」
「二曲目が終わってチューニング変えるからそこでやるんだよね？」
「そ、その通りだ。ううむ……そうなんだけど……」
「なんだかりっちゃんおかしいよ？　緊張してるなら飴ちゃんあるよ」
「い、いやそうではない。そうではないんだ……が……」
存外、まともな受け答えをする唯に対して逆に律が狼狽えてしまった。助けを求める視線に返ってくる気配はない。薄情者、と内心で吐き捨てた律は孤軍奮闘を決意する。

「そうだな、唯。リハとはいえ、しっかりやるに越したことはない。だから、ギターのチェックでもしとけ」
「あ、うん。そだねー」
素直に頷いた唯はケースを置いた場所までのそのそと歩いて行った。
「おいっ。超まともじゃん!?」
「うん。ていうより今の会話だけ抜き取れば本当にバンドの人みたい……」
「みたい、もなにもバンドやってるんだけど!」
散々な評価も受けながら、すごすご戻ってきた律は怪訝な表情を崩さない。
「でもなーんかチガウ。違和感の塊しかねー」
「確かにそんな印象を受けたね」
うーん、と長々とうなった面々はそれからしばらく、愛おしげにボディを撫で撫でする唯を揃って眺めていた。

その後、曲のフレーズを幾度もチェックする唯を見守るように固唾を呑んでいた四人であった。控え室が良く分からない緊張と生温さが混ざり合う空気に包まれていた中、「はい次準備よろしくお願いします」と言って現れたスタッフの言葉に、澪はびくりと肩を跳ね上げさせた。
「ほ、ほ、ほ、本番だな!」
「いや、まだリハだけど」
緊張するから、と人という漢字を飲み下しまくっていた澪。足取りはどこか危なげだが、よく見ればそれは他も同じようなものであった。ふにゃふにゃとまるでタコのようにぐねぐねと歩いていて、傍から見れば滑稽な集団である。
楽しもう。そんな風に気概を示してみたとして、言葉ではどうと言えようが、緊張を完全に消し去るのは誰とて難しい。

先頭をすたすたと歩く夏音でさえ、じんわりとお腹のあたりが引き締まるような感覚を覚えている。後続の軟体生物たちほどのレベルではないが。

ステージに向かう際、前のバンドとすれ違うようなことはなかった。既に捌け終えていた前のバンドは反対側の出口から出て行ったらしく、会場の注目は完全に軽音部に絞られていた。

聞くところによると、このようなコンテストにおいて、これだけ入念なリハーサルを用意してくれる所はないらしい。破格の扱い、とまで評価されるだけあって大抵の出場バンドは本番で自分達の鳴らす音に満足して演奏に集中できるそうだ。

これも全て主催側のはからいによるものである。他のように贅沢な賞金、賞品を用意することもできない上、規模も小さい。せめてバンドが全力で力を出せるようにと、自分達でかけられる手間は目一杯かけてやろう、ということだ。

一時間使えるリハーサル。逆リハなので、自分達が最後である。周りに構えているスタッフはテキパキと動き続けている。贅沢なことに、各パートの者に対して最低一人は面倒を見てくれるスタッフがいる。皆が持ち込んだ機材を所定の位置にセッティングし、しきりにＰＡとインカムで連絡を取り合っている。

前回のようなドタバタコントが発生することはなかったが、互いを見渡すような余裕もなかった。

それぞれが自分のセッティングに勤しみ、自分についてくれているスタッフと必要なだけの会話をこなしているだけだった。

やはり最初に音を出すのはドラムである。律の手探りのセッティングがステージの上に響き渡る。

律のドコドコとバスドラを蹴る音の後ろからベースの重低音が現れた。澪は弦楽器隊の中で一番機材の少ない。チューナー、ディストーション、コーラス、イコライザー二つ。チューナーの前には限界まで改造したＡ／Ｂボックスを置き、音痩せ対策としている。

アンプのゲインとマスターを上げる。イコライザーをいじり、自

分の音を確かめていく。スタジオでのセッティングは、こんなにも広いライブハウスでは通用しない。実際にこのステージの上で響く音を聴き、他の楽器と合わせていく必要があるのだ。

澪が音を出し始めたのと同時くらいに、ムギのオルガンが飛び出てくる。

ギター組は足下のセッティングに手間取るので、一番遅い。

夏音は着実に、肩の力が抜けた状態でテキパキとセッティングをこなしていく。ギターに弦の滑りを良くするスムーサーを吹きかけると、夏音のストラトがギラリと眩い光の音を出した。どこまでも伸びていきそうなサスティーンに思わず目を向けるスタッフが数人いた。艶やかな音がマーシャルのスピーカーから滑り出してくると、夏音が微調整を加え、エフェクトの具合を確かめていく。

この時点で、四名のセッティングはバンドとしての微調整といった具合まで進んだ。彼女達はお互いが顔を見合わす余裕もできたところで、ようやく先ほどまで抱いていた不安が形になって現れたような予感を覚えていた

唯のギターがいつまでも聞こえてこないのだ。

自分のセッティングから意識を離した途端、その異常事態に気付くことになる。皆、何かのトラブルかと唯の方を見るが、彼女はシールドを既にアンプに挿した状態で、肩から提げたレスポールにそっと手をやったまま直立していた。

どこを見るでもなく。ぼーっと中空に目を向けて、佇んでいる。他の誰にも見えない何かに目を奪われているかのように。

「唯！」

夏音が唯に近づき、肩を叩く。心ここにあらずといった彼女はゆっくりと夏音の方を向いた。

「スタッフの人が困ってるよ。みんなセッティング終わって、あとは唯だけだよ？」

「あ……あーごめんごめん。今やるねー」

ふにゃんと笑った唯に夏音はホッと息をついた。その瞬間の唯は

いつもの唯のように見えたのだ。
夏音は他の者を安心させるように振り返って肩をすくめる。それに対して一同は、すぐに唯がアンプのセッティングを始めたのを見て、不安を隠すようにぎこちなく笑うのであった。

リハーサルはどこのバンドも同じ流れだ。それぞれの音量を調節して、確かめていく。学校祭で一度経験していただけに、一同はＰＡの指示に従って淡々とこなしていく。
夏音はこのライブハウスのスピーカーを高評価していたので、安心して外音をＰＡに任せることができた。夏音は自分のギターはスピーカーが歪まないギリギリの音量を保つようにお願いして幾つかのエフェクトのかかり具合を調整して終わった。
やはり最後に音を合わせる唯の時は少しだけ全員の心に不安が奔ったが、音合わせは難なく終了した。
「じゃ、曲でやろっか」
ステージの中央に立つ夏音が後ろを振り向く。まるで指揮者のように注目が集まったところで、彼は周りを見渡した。
「トリビュートから。１コーラス」
全員がその言葉にうなずく。リハーサルで確認しておくべきことも事前に話し合っている。何をすべきかあらかじめ頭に入っているならば、それに集中することができる。
１コーラスを終えた時点で律がモニターの要望をＰＡに伝えた。ベースの音量がどうも大きすぎたらしい。
その後、一曲を通したあたりで中音も万全の状態に整えられた。後は照明効果などの確認もあるので、構成を見せるだけである。
変拍子が目白押しの曲などはしっかりと照明と合わされば相乗効果を得られるが、細かい打ち合わせもしていないので、基本的にスタッフにお任せだ。
「じゃあ本番と同じように始めようか」

「うわー入るトコロしくりそー」
緊張が度を超えたのかはないが、むしろ楽しげに笑いながら律が言う。そんな律に小さく笑いを返してそれぞれが楽器を構える。曲の最初はギター二人のフィードバックが空間を包み込むように広がっていくところから始まる。ディレイ、リバーブを通してふくよかに巨大化していく音の波が最高潮にまで達するまで、そのままアンビエントが続く。良い感じになったところで律のバスドラが鼓動する。和音で鳴らすベースとドラムがそこで密かにビートを作り上げておき、一斉にブレイク。ドラムのフィルインからイントロのフレーズが始まるという構成である。
夏音はギターとアンプの最適な位置に陣取り、弦をそっと撫でるように音を押し広げていった。
その時、夏音は妙な気配を感じた。スピーカーから自分の音が流れた瞬間に身体中に奔った奇妙な違和感。
それは数秒のこと。自分の音しか流れていないことは明確だった。
驚いて唯の方を見ると、彼女は膝をついてステージにうずくまっていた。
「唯っ!?」
ボリュームを切った夏音はすぐさま唯に駆けよった。不協和音が流れないように、しっかりとネックを握り込んでいるが、どう見ても尋常じゃない様子が分かる。
「唯、大丈夫？　さっきからおかしかったけど、具合悪いの？」
「ご、ごめんねー。ちょっと目眩しちゃって……」
トラブルかと察したのか、ステージの上の照明が全て点けられた。明るみで確認した唯は熱に浮かされたようにうなっている。
「立てる？　とりあえずギターを置こう。まずは落ち着いて、深呼吸して、落ち着いていこう」
「お前が落ち着け」
すぐに駆けよってきた澪が冷静に突っ込む。こういう事態には女性の方が強いのかもしれない。

「唯、いつからだ？」
「ん、と……起きてから？」
目の前で始まった会話に夏音はついどぎまぎしてしまった。
「そ、そんなストレートな話はちょっと……男子の前でさ」
「はぁ？　夏音こそ何を言ってるんだ？」
もじもじと視線をさまよわせる夏音。盛大に眉を顰めた澪が少し語気を荒げて夏音を見詰める。
「え、だって、つまり……女の子の、そういう日の話では」
「違う！　いつから具合が悪かったか聞いてるんだバカ！」
流石に余裕のない状態で澪の口も悪くなる。勝手に勘違いをしていた夏音は顔から火が出る勢いで赤面した。
「申し訳ない……」
しゅんと肩を落とした夏音を放って、澪が唯の肩に手をやる。
「どうして言わなかったんだ？」
「だって、今日が本番だし心配かけると思って……」
「こうしてギリギリになって倒れる方が問題だろう！」
厳しい口調の澪は、ふと溜め息をつくと打って変わって気遣わしげな表情になる。
「熱はあるのか？」
「んーちょっと熱っぽいくらい」
そう言って笑った唯額に手をあてた。
「……」
「澪、どうなの？」
「すごい熱だ。こんなのちょっとどころじゃないだろ！」
澪の言葉に夏音は頭を抱えた。よりによってこのタイミングでこういったトラブルが起こるとは想定していなかったのだ。
「お、おいおい。マジでヤバイんじゃないのか？」
「私、薬持ってきてるよ？」
律とムギがハラハラした様子で唯に声をかける。スタッフも集まってきており、既にリハーサルを続行する空気ではなかった。

夏音は、自分達に与えられた時間がこうしている間にも減っていくのを感じていた。いつまでも迷っていても仕方がない。バンマスとして、即座の決断が必要だと判断した。

「よし。とりあえず唯はギター置いて。律、水とって」

夏音が出した指示にすぐに反応した律はアンプの上に置いてあった唯の水を手にとった。

「ほら唯。とりあえずこれ飲め」

その間にスタッフがギターを受け取ってスタンドに置く。ステージ上にはスタッフが集まってきており、切迫した空気が流れ始める。

「ちょっといいですか？」

スタッフの一人に声をかけられた夏音はそのままステージの袖に移動した。

「えーと。見た感じだとギターの娘、すぐに始められないみたいなんで。リハ終わりから本番までは多少の余裕があるので、このままリハを延長するって形でやりましょう」

「あー、そうしてもらえますか。本当にすいません」

「ただ、こういうのもアレなんですけど……どこかでその……判断していただく必要があってですね」

歯切れが悪いスタッフの口調に夏音は心得たように頷いた。

「うん、わかります。出場辞退も考えないと、ですね」

ハッキリと言葉にした夏音にスタッフは残念そうに眉を落とした。

「最悪、そうするしかないんですが。あとオープニングのモノグロさんのリハもあるんで、あんまり長いこと延ばすこともできないんです。三十分空けて様子を見ましょう」

「わかりました。よろしくお願いします」

話が終わり、ステージに戻った夏音は唯を囲むようにしゃがみ込むメンバーに近づいた。

「とりあえず控え室に戻ろう」

不安に満ちた表情の少女達は、こくりと頷いた。

ムギが持っていた熱冷ましの薬を飲んだ唯は控え室のソファに横になっている。すぐ側に付き添っているムギは心配そうに唯の手を握っている。一方、他の者は部屋の隅に肩を寄せ合っていた。

「唯がいないなら出場は辞退。これは変わらない」

重々しく夏音が口を開く。

「それは分かるけど、でも……」

珍しく真剣な面持ちだった律が眉間に皺を寄せる。悔しげに歯噛みする彼女は夏音の意見が正しいとは理解できるものの、気持ちの上では千載一遇のチャンスを目の前で逃すこと割り切れないといった様子だった。

「私は夏音の言ったように、全員で出られないくらいなら出るべきじゃないと想う」

夏音と律。その二人の合間に座る澪は腕を組みながら毅然と言い放った。

「仮に四人だけで演奏できる曲を選んでも、そういうことじゃないだろ」

律が合わさった拳の上に顎を乗せた状態で深く息をつく。彼女も言われるまでもなく、理解はしているのだ。それでも、心の底から腹におさめることへの抵抗が残ってしまうのは誰も責めることはできない。

「厳しいことを言うようだけど、唯がある程度回復したとしても出場は微妙なところだね。俺は前にも言ったと思うけど、ボロボロな演奏を見せることは避けたい」

三人はちらりと唯の方へ視線を向けた。浅い呼吸を繰り返す唯は誰が見ても軽い症状ではない。今回は、唯としても今までとは気合いの入り方が違った。ライブのことを慮ってついに倒れるまで不調を隠そうとしたくらいだ。だが、皆に迷惑をかけまい、としていたにも関わらず唯は演奏に向かうことができなかった。

気合いや想いでどうにかなる問題ではない。

「俺はともかく、みんなにはこういう機会がなかなかない。この一回がどうしようもなく大事なのは分かるし、それは俺も同じだけどね。今日のステージは俺達だけが満足すれば良いものではないんだ。俺達だけを見に来たお客さんばかりではないにしろ、ゼロじゃない。そういう人達を裏切ることになるのは間違いないよ」

夏音の言葉は二人にとって目から鱗だった。自分が自分のバンドのことしか考えていない中、目の前の男は客のことを考えている。それも自然に。この立花夏音という人間にとってステージとは、観客という存在が必ずセットになっているのである。

魅せることを生業にしていた者の視点。彼女達には馴染みがない考え方であった。

「そっか。そうだよな。ラジオを聴いてちょっとでも好きになってくれた人達がいるんだよな」

以前、自分が大好きな番組で自分達の曲が流れた時のことを思い返す律。

「私は……また、来たいな」

澪がぽつりと言った。

「来年、また来れるように」

語尾が震える。それでも力強い口調に夏音と律がゆっくりと首を縦に振る。

「ちょっとーーーぉ!!　何でもう終わりみたいな感じなのさ、みんな!」

「えぇっ!?」

三人の輪の中に大声を上げて割り込んできたのは、他でもない。まさしく議題の中心となっていた唯だった。

「唯、寝てろよ!」

「大丈夫!　ムギちゃんの薬のおかげで良くなったもん!」

「うわー超回復ってやつ?」

「ていうかムギの薬が何だったのかが気になるところなんだが……」

「ふ、ふつうの熱冷ましだけど」

とは言いつつも、自分でも不安に思ったのかパッケージを確認するムギ。薬局でも買える市販薬だ。

「ふんす！　気合い入れてくよー！」

片手を腰に、残された手は中指と薬指で作るピースサイン。いつもの唯が戻ってきた。誰もが不審そうに唯を見詰める。だが、もの問いたげにしていたのも束の間。律が唯の頭をばんと叩いた。

「き、気合い入れてくじゃねーっつの！　お前のことでこっちはなあ！」

そう続けようとした時である。

ふらり、と腰から力が抜けていくように。唯は、床に手をついて倒れた。

「お前……やっぱダメなんじゃ……」

どう見ても虚勢である。やせ我慢して元気になったように見えたのも一瞬のこと。やはり、ハッキリ聞こえるほど荒い呼吸をする唯はとてもではないがステージに立つことなどできそうになかった。

「ま、待って……大丈夫、だから。私、絶対にやれるから」

熱で潤んだ瞳を力の限り見開いて上目遣いになる。話すだけでも辛そうな体で、必死に想いを振り絞るように紡ぐ。

「ゆい……」

誰一人として、その瞳から目を逸らすことはできなかった。こんなに真摯な言葉を紡ぐ唯を見たことはなかった。根気という言葉からかけ離れた存在の彼女が、こんなにも必死に食らい付くような、人を気圧すほどの執念をこめた光を瞳に宿したことはなかった。

彼女の気持ちを振り払える者はいなかった。かといって、ギリギリまで伸ばされた手を即座に取ることができる者もいなかった。

「でも、お前がそんな状態じゃ……」

律が困惑した声で呟く。彼女は本心では、やってやりたいと叫びたいのだ。それでも自分の判断だけでどうにかなる問題ではない。この場合は全員一致が不可欠である。

だから彼女は同じように迷いあぐねているだろう仲間の顔を窺う。

互いが互いの視線を感じ取り、顔を見合わせる。
「今日はね？　憂も、和ちゃんも、来るんだあ。二人に、私が出会った新しいものを見せたい。何やってもぱっとしなかった私がこれだけ本気になったものを見せたい……」
彼女の瞳から涙が零れる。震えながら床についた手を握りしめる唯を黙って見詰めていた者達の中で、夏音がそっと膝をつく。視線を唯に合わせて、頭に手を乗せる。
「やれるのかい？」
「やれる……っ」
「当然だけど、へろへろなギターなんか弾いたら本番中でもステージを降りるよ」
「大丈夫！　みんなで最後まで演奏できるようにする！」
夏音は目を閉じて、考える。空気を伝ってくる唯の意志の強さ。いつの間に、このような屈強な精神が彼女の中で育まれてきたのだろうか。
もしかしたら、ただの火事場のなんとやらかもしれない。
それでも。
「じゃ、やるよ」
夏音は賭けてみることにした。ごちゃごちゃと巡らせていた思考は一瞬で吹き飛び、ただ目の前の少女の可能性や、この一年で自分が味わってきた全てが答えを用意したのである。
ぺしんっ、と良い音を立てて唯のおでこをはたく。
「こんな大事な時に体調崩す唯はどうしよーもない馬鹿だね」
それは満面の笑みで言うことではない、と唯は心で呟く。
「まー俺もたいがい馬鹿なんだけど。雰囲気に流されやすいっていうか……一緒に恥を掻くのも悪くない、とか思えるほどにはこのバンドにイカれてるみたい」
「が、がのんぐぅん……」
ボロボロと涙を流す唯。よもや鼻水もかくや、と駄々漏れで乙女としての体は銀河の彼方に消えている。

「ま、本名も顔もバレてないからいーんだけどね」
「そ、そういうことですか！？」
ぐしゃぐしゃになった顔で頬を膨らます唯。ひどい顔である。すると、他の三人からこらえきれなかったように笑いが起きた。
「あーもう。この集まりはなんだろうなー。シリアスなのと間が抜けたのが代わる代わるくるからなー！」
眦に涙を浮かべた律がそれを拭いながら笑み零れた。
「そうそう。どこか軽音部っぽさを外さないんだよな」
「でも、私こういうのが大好き」
その場が一気に朗らかな雰囲気に包まれる。心外だとばかりに頬を膨らませ続けていた唯もやがてつられるように笑い、夏音はニヤニヤと悪戯っぽく眉を上げる。
「さて、と。いつまでも待たせるわけにはいかないからね。行こうか」
「おー！　とっととリハ終わらせよーぜ！」

三十分と経たずに戻ってきた一行をスタッフは何も言わずに受け入れてくれた。否、表情にはありありと書かれていた。
やれるのか、と。
彼らとしても不様なバンドを相手どるつもりはない。この高校生の集団は、お金を払って演奏していただくような身分ではないのだ。
「行けます。バッチリです」
口を開き、明朗に響く唯の声。それから遅れたことへの謝罪を済ませた後、軽音部はリハーサルを開始した。

「あとは本番なんだね……」

あの後、リハーサルは無事に終了した。時間がおしていることもあり、三曲だけ確認することにしたのである。軽音部の機材はステージの少し後方へずらし、彼女達は控え室に撤収した。

どっしりとソファに腰を下ろした唯が嘆息まじりに言った言葉に皆、不思議な心持ちを抱いた。

「そうみたい……だな」

首を傾げる澪。その横でそれを真似たように同じ向きに首を傾けた律が呟く。

「ぜんっぜんそんな実感がないんだけど」

夏音はそんな彼女達を見渡して、楽しげな声を出す。

「みんなびっくりするくらい肩の力が抜けてるよ。なんか頼もしいくらいだ」

「そ、そうなのか？　そう言われれば、なんかそんな気も……」

「あっ！　そうだよ！　澪が緊張のきの字も見せてないなんて異常事態だって！」

「澪ちゃん。すっごく楽しそうにベース弾いてたもの」

リハーサルの澪は、良い具合に力が抜けた演奏をしていた。彼女が緊張した時に現れる硬いプレイは見る影もなかった。

互いの音が行き渡り、ドラムとのコンビネーションも普段以上に冴えていた。

「もうやるしかないってとこまで来たから、逆に腹が据わったのかな。律も走ったりしなかったからやりやすかったな」

「それってアレだね！　火事場の馬鹿力ってやつだね！？」

「いや、それとはちょっと違うから」

賑やかな雰囲気はいつもの軽音部そのものだった。やはりソファに横たわる唯は具合が悪そうだったが、こうして会話に加われるくらいにはしっかりしている。演奏の方も、ぼーっとしているようで、しっかりと周りの音を捉えていた。

「本番まで少し時間があるから、気分転換に外の空気でも吸いたいね」

一同がしばらくのんびりと体を休めていると、夏音がそんな提案をした。二つ返事で応えたメンバーは揃って控え室を後にした。

屋上でもあればいいね、と零した唯の一言の後に、それらしき階段を発見した律が先導して登っていくと、本当に屋上につながっていた。

「勝手にこんな所に入って怒られないか？」

「澪ちんは心配性だなー。屋上に上って怒る奴がどこにいるよ」

友人の心配を素早くはねのけた律が扉に手をかける。あっさりと開いた扉の隙間から、オレンジの光が溢れる。

おそるおそるその光を押し広げ、完全に開け放った扉の向こう側には広大な夕焼けの空が待ち構えていた。

「うわー」

誰となく漏らした言葉は誰の声だったのか。その場にいた全員が同じことを心に浮かべた。

都会の片隅にぽつりと建つライブハウスの上に、このような景色が用意されているなどとは誰も想像すらしていなかった。

視界の端には高層ビルが建ち並ぶのに。どこまでもここから見渡せるような。

吸い込まれるような風景に圧倒されながら、何気なく端っこまで足を進める。

「し、下見てみろよ」

はっと息を呑んだ律の言葉に従って、フェンス越しに眼下の景色に目を落とした一同が目にしたもの。

オープン前だというのに、入り口付近にまばらに集まってきている観客の姿であった。

「あ、あれ全部お客さんなの？」

目下の光景に震える声を上げたムギ。その隣では、言葉もなく呆然とする澪が口を戦慄かせていた。

「す、すごい……あの人達、私達を観にきてるんだよね？」

唯の言葉にごくりと唾を呑み込む音が返る。実際に目にするまで、

どこか壁一枚向こうにあったような存在が、こうして目に見える形で現れたのだ。彼女達の心が大きく揺さぶられたのは言うまでもなかった。

「私達、とは言うけど。俺達だけを観にきたわけじゃないと思うよ。むしろ、俺達なんか興味ないって人もたくさんいるかもね」

そこで、さらなる現実を知る男が口を開く。

「びっくりして、呑まれないでね。いいかな？　あそこにいる人達はこれから俺達の演奏を耳にすることになる。ジャッジを下す存在だ。それでも忘れないで欲しい」

もったいつけたように言葉を途切れさせる夏音。

「俺達は音楽をやりにきただけだよ。楽しんで、楽しませて、終わればそれでいいんだ。この一年で俺達がやってきたこと以上のことはやらなくていい。俺達がここに持ってきたものは……」

夏音は隣にいる澪と律の手を強く握った。はっとした二人は少し躊躇った後、余った自分の手をその先へと繋げる。

「これだけ」

視線は下ではなく、上へ向ける。

「これだけあれば、充分じゃないか」

一つに繋がった手は互いの温もりに触れていた。その暖かさが凝り固まった緊張を解きほぐしていく。

少女達はその言葉がまるで魔法のように感じた。自分達の中心にいる人物が、いつも自分達にもたらしてくれる物を思い出して、確かに感じる温もりを離さないようにぎゅっと握り直した。

「すごいねー」

「何が？」

「一年があっという間に過ぎちゃった」

「そうだなー。もうすぐ二年になるんだもんなー」

「二年になれば律もちゃんとしてくれるといいんだけどな」

「澪のヘタレも治ればいいこと」

「……」

「い、痛い痛い！　無言で俺の手をぐっと握りしめるな！！　俺が痛いからってお隣に伝わらないから！」
「澪ちゃんは今のままでいてね」
「ムギ、それはどういう意味合いが……」
「澪ちゃん度が下がったら悲しむ人が増えると思う」
「それって今の私が１００％なのか！？　もう私の人生、ここが最高潮なの！？」
「あームギちゃんの言うことわかる！　澪ちゃんは、こう……ちょっとくらいアレな感じがおいしいんだよね！」
「心が苦しくなってきた……」
「褒められてるんだよ。どっちにしろ澪がいじられキャラから脱することはできないんだしさ……痛いってば！」
「二年って言えばさ。もうすぐ後輩とかできちゃうわけだろ？　想像できねー」
「あぅっ後輩……しょうがないなぁ、私が一から教えて……」
「妄想が駄々漏れてきてるよ唯」
「私、後輩って初めてだからドキドキする！」
「コーハイ……不思議な響き。アニメでしか聞いたことない」
「夏音、お前ってやつは……」
「でも、何だかんだでもう次の一年が始まるんだよなー」
「そだねー」
「そう考えるとあっという間だったけど……これからあと二年なんて想像つかないな」
「たぶん、それもあっという間じゃないかな」
「かもしれない」
「ま、その前に後から入ってくるコーハイ達に自慢できるようにしないとね」
「ハー……そろそろ本番かー」
改めて下を見ると、外に並ぶ客の数が徐々に増えてきていた。そ

こに並ぶ人々は、今日この場所で生まれるニューカマーを目撃しに来ている。これから先、いつまでも自分達を音楽に引っ張ってくれる可能性を信じている。

「あ、憂がもう着いたって！」

「マジで？　ちょっと早くない？」

「でも、もうすぐオープンだぞ」

「げっ、もうそんな時間か！」

のんびりとした空気を仕舞い、心は準備を整え始める。少し後ずさって少女達を眺める夏音は微笑んでそれを見守っていた。

「なーにニタニタしてんだよ夏音？」

「Ｎｏｔｈｉｎｇ．ちょっと嬉しいだけ」

「何が？」

「よく分かんないけど、早くみんなと音を合わせたくて仕方がないんだ」

夏音は自分でもよく理解できないうずきを抑えるのに必死だった。その気持ちの動力源だけは知っていた。

「俺、仲良くなったのがみんなでよかった」

「はぁ！？　な、な、なに急に！　外人かっって……いや、外人かっ！」

「そんな白昼堂々と……恥ずかしい奴」

極端に反応した律と澪は心なしか顔が赤い。他の二人はぽかんとした表情で固まっていたが、すぐに顔をほころばせた。

「私だってみんな大好きだよ！」

「私もー！」

えへへ、と笑い合う三人を目をひくつかせながら見ていた律は呆れた顔で「感性が違いすぎる」と零した。

「言いたい時に言わないとね。減るもんじゃなし」

「そう割り切れるか！」

「わかってる。律は実は誰よりもウブなんだもんね」

「殴るっ」

「つーことで、これからもよろしくってこと！」
「こちらこそー！」
叫びつつ、がーっと襲いかかる律をひらりと躱す夏音の鬼ごっこを笑いながら見守っていた一同は、しばらくしてから屋上を後にして下に降りた。

「プロの演奏をこんな所で聴くの初めて」
「まー聴く機会なんてないよな」
会場の熱気はステージ袖にいても充分以上に伝わる。幾重にも折り重なる眩いスポットライト。客が踊り、跳ね、振動する空間。洗練されたサウンド、パフォーマンスはあまりライブというものに訪れることがない少女達には衝撃の連続だった。できるならば、客席からこの演奏を味わいたいと思うが、なんと言っても彼らのいる場所にこの後すぐに立つことになるのである。
今さらながら、信じがたいという感覚が彼女達を埋め尽くす。
「て、ていうかこんな後にやるなんて……絶対に見劣りするに決まってる」
青い顔で震える澪は完全に雰囲気に呑み込まれているようだった。意外なことに他の者は彼女ほど極端に緊張している様子はない。
「意外に平静じゃないか律？」
「ん？　まあ、ここまで来たらもうやるっきゃないっていうか……逆に吹っ切れた感じかな」
「それは頼もしいね」
「夏音からしたら、この演奏はどうなんだ？」
「んー……アメリカのライブハウスに行った時、アマチュアでやってたバンドの方が数倍上手かったよ」
「ってことは、そんなに上手くない？」
「ライブ慣れしてるんだろうけど……本人達が思ってるほどやれてなさそうだね。ほら、あのベースなんてドラムの方ちらちら確認し

てるだろ？　あんまりモニターから音取れてないんだと思う」
　暴れまわるギターとは対照的に、ベースは動きたくても動けていないような印象を受ける。普段の彼らがどんなライブをするかは分からないが、夏音の目には、彼らが自分達で満足できるようなステージができているようには見えなかった。
「プロなら、どんな状態でも自分のパフォーマンスをできないとね」
　そう言い切った夏音を、少女達は「流石プロ」と言わんばかりに見詰めるのであった。
「なんか……夏音の言うこと聞いてたらそんなものかも、って思ってしまう自分がコワイ」
「澪って意外に単純？」
「ここにもっとすごい人物がいて、その本人が大したことないって言うんだ。別にいいだろ？」
「それ、なんとなくわかるわ」
　何ともよく分からない信頼を置かれているな、と夏音は苦笑した。
「ていうか夏音くん。ずっとそのサングラスつけてるの？」
「え、なんかおかしい？」
「いや、暗くない？」
「すっごく暗い。転換の時に転ばないか心配だよ」
　それでも自分の正体がバレたくないという一心で、むしろ暗い部分の方が多いこの空間で演奏をするというのだ。そもそも、この男は目を瞑っていても楽器の一つや二つなど弾いてのけてしまうのだから、深刻に心配する必要もない。
「ねえ唯ちゃん、ほんとに大丈夫か？」
　先ほどからふらふらと危なっかしい唯をずっと心配していたムギが声をかける。先ほどから眉を落として不安げだったのは、目前に迫ったステージより、こちらの方が原因だったらしい。
「んーちょっとぼーっとするけどダイジョブ！　たぶん」
「おいおいー。すっげー不安になる一言をつけくわえんなー」
「ステージでも、りっちゃんのおでこが輝いてたら私はいける！」

「口だけは達者でいやがって！」
「あぅ」
「何だ。いつも通りじゃん」
ふふ、と笑いが零れた夏音であったが、内心では万が一の事態のことに考えを巡らせていた。
（ヤバそうになったら、帰る）
夏音は例え全曲できなくとも、そこでステージを降りるつもりだった。演奏が許容できるレベルを越えてしまえば、おしまいである。それは事前に話合いで決めてある。
リハーサルの時は、まともにできていたが、体調のことばかりは本人次第なのだ。
それでも、不安はなかった。仮に用意していた曲を披露できなくとも、それでもいいと皆が思えたのだ。
その代わり、全力。力を抜かず、全力で楽しむ。
ずっと掲げ続けてきた誓いだけを忘れずにいよう、と。
「なんか、もうそろそろ終わりっぽい」
ステージに目を向けた律の一言で、各々が小さく反応する。息を呑む澪、胸の前で手をくんだムギ、気合いを入れるように息を荒くする。
一同は自然と円陣を組んだ。
「俺が何を言うかもうわかってると思うけど」
「楽しもう、でしょ？」
「そのとーり。客の顔は見なくていいよ。俺達がこれからするのは、究極のマスターベーションさ」
「お、おまっ！　お前そんな顔して何を口走ってるんだ！？」
「りっちゃん、マスターなんとかって？」
「分かってしまう自分が汚く思えてきた……」
この大事な瞬間にとんでもない単語を放り投げてきた夏音にその場は騒然となる。主に、常識に近い位置にいる律と澪の両名が慌てる。

「言葉の選択には気をつけないとね」
「しれっと言うな！」
「とにかく。最高の演奏は俺達が楽しまないとできないのさ。早く演奏して、他のバンドの演奏聴いて、とっとと帰ろう。帰ったら焼肉だ！」
「うおぉーー！！　肉！」
肉の言葉に反応した唯が息を荒くする。
「何、そのスポーツ少年団の監督が試合に勝ったら焼肉だ、とか言って子供を奮起させるみたいな感じ」
「終わったら打ち上げしないと！　何のためにライブすると思ってんのりっちゃん！？」
「言っとくが打ち上げのためではないからな！」
円陣を組んでから随分と時間が経っている。ぎゃーぎゃーとまとまらない高校生達をにやにやと見守っているスタッフの視線がそろそろ生暖かくなってきた。
「ゴホンッ。ここは部長の私が締めないとな」
不肖、田井中律が、と咳払いをする。
「けいおんぶー」
わずかな溜め。
「ファイトー！」
「え？　あ、ふぁ、ふぁいとー！」
「おー」
「イェー！！」

「……」

「何でこんなに締まらなすぎるんだ！？」

全員の心が一致した。

★　★

最高潮に達した歓声と拍手を後に、モノグロのメンバーはステージ袖に帰ってくる。彼らはこれからすぐに出番を迎えることになる少女達に近づき、激励の言葉を送った。

少女達はぎこちなく笑い、周りのスタッフが慌ただしく動き始めた雰囲気に押され、ステージへと向かっていった。

転換の為に薄暗いステージの上。薄い幕が張られ、彼女達の姿は観客には見えない。もうすぐ、目が眩みそうなほどの光を浴び、未だかつて味わったことのない数の視線に曝されることになる。

それまで、幕の向こうにうごめく人の気配。熱を帯びた観客の呼吸だけが伝わってくるのだ。

既にステージから捌けた者達は、自分達がかつてその身で味わった感覚を全身で思い出していた。

今も鮮明に蘇るあの緊張感。今は自分達の物ではない。

彼らは、やがて自分達の後続となるかもしれない少女達を見詰める。

そつなくセッティングをする姿はそつがない。これから彼女達を襲う出来事に、興奮を覚える。

今日、ここでどんな化学反応が見られるのか。

それを間近で味わえる贅沢に身を震わせながら、ステージの脇で待つ。

準備を整えた少女達の合図によって、アナウンスが場内に響き渡る。歓声が膨れあがり、爆発の瞬間を待っている。

幕がステージを横切り、ステージと観客を隔てている壁を取り払う。

ヴォーカルの少女が後ろを向いて何かを言うために口を動かした。

次の瞬間、照明は暗く、幻想的な色合いが重なり合う。

歓声の隙間から、微かな音が縫うように現れると、会場はしんと

なる。美しい音の壁が幾重もの波となって会場全体に広がっていく。心臓の鼓動のようにバスドラが刻み始め、キーボードがそれらを丸ごと包み込むようなオルガンを奏でる。

目立たぬように支えるベースが、いつの間にかそこにいる。

中央に立つ人間のシルエットが腕を大きく広げる。まるで、そこから飛び立ってしまいそうな動作。

もったいぶったようなドラムのフィルが突き抜けてくる。気配が変わる。

くる。

そこで生まれた爆音と同時に、少女達の姿は全て光の嵐に呑まれていった。

第二十三話（後書き）

遅くなりました。変なところで終わってすみません。
次回へと続きます。

第二十四話

少女は一人、見知らぬ土地に立たされていた。
右を見て左を見て、眉を寄せて溜め息をつく。
既に街灯が灯り始め、顔を上げると西の空は茜色の残光を留めている。既に夕刻。
果たして自分は目的地まで辿り着けるのかと、そろそろ真剣に不安を覚える段階になってきた。辿り着けたとして、オープンの時間はとっくに過ぎてしまっている。
「はいコレ！」と友人から渡された地図はあまりに大雑把で地図の役割を果たしていなかった。その場で破り捨てたい衝動が起こったが、ゴミのポイ捨てはよくないと思いとどまる。
事がこうも上手く進まないと、いい加減に帰りたくなってくる。物事が滞ると苛々してしまうのは短所だが、それでも最後までやってみようとするのは少女の長所であった。
途方に暮れていても仕方がないので、少女はとりあえず歩き出す。少女の歩みに合わせて、ゆらゆらと二つに分けた髪が揺れる。解けば、同性によく羨まれる長い黒髪。背丈がない分、実際の長さはそうでなくても腰までゆったりと流れるロングヘアーになってしまうのだ。
友人が徒歩で十五分と言っていたのを思い出す。少女は自分換算で、それは二十五分くらいだろうと捉えている。歩幅が他人より狭いので、誰かの言う徒歩〇分の一・五倍から二倍の時間がかかってしまうのだ。
要するに、他人より「ちょっとだけ」控えめな身体なのが原因である。あくまで、そう。「ミニマム」だとか「3／4スケール」等

と影で呼ばれていたりなどしない。
常々、世の基準は不便であると少女は嘆く。
歩いている内に、見るからに堅気ではない風貌の方々が同じ方向へと歩いていくのが見えたので、そちらについていく。天に反り立つ赤いモヒカンの人間が向かう先など、知れている。
それに、この辺りでイベント施設といえば限られているので、おそらく彼らも同じ目的地に向かっているのだろうと確信した。
一つの不安が消えたところで、少女はそもそもの目的について考えてみた。
ライブハウス、と呼ばれるものに足を運ぶ機会は滅多にない。その時点で、物珍しさもあって今日このような運びになっているのだが。とはいえ、今日自分がそのライブハウスで目にするのはプロのバンドではない。
十代の少年少女によるアマチュアバンドの演奏なのだ。いずれはプロになる器だとして、洗練された音楽を提供できるとは思えない。
少女は、昔から両親の影響であらゆる音楽に触れてきた。主にジャズ、ファンク、フュージョンなどを好んで聴くが、本当に良いと思える音楽に対してはジャンルを問わずに触れてきた。
逆に最近のポップスなどには疎く、クラスメートと初対面で話が合うことなどはない。その例外として、今回のイベントに誘ってくれた友達がいる。
去年のことだ。ふと昼休みの放送で流れたジョン・コルトレーンの「ｓａｙ　ｉｔ」に反応した自分に「知ってんの？」と話しかけられたのがきっかけ。
ＣＤをバリバリ食べてしまうくらい音楽が好きな彼女とは会話が弾み、三年生になってクラスが別れてからも、時折ＣＤの貸し借りなどを続ける仲である。
少女自身が楽器をやっており、高校に入学したら楽器を演奏する部活に入りたいと話していた折に、外のバンドなどに興味はないのかと尋ねられた。

少女は、ロックバンドは演奏する上ではあまり馴染みがないし、学校以外の活動はなんだか面倒くさそうなので今のところ興味はないと答えた。すると、その友人はバンと机を叩き「もったいない！」と悲鳴をあげた。

ぽかんと口を空けたままの少女に、「爆メロ」と呼ばれるイベントを強引に押しつけてきたのだ。

いわく。これを見て、十代の少年少女の熱いロック魂を体感してみよ、と。

そこにかける青春を感じ、高校に入学した暁には参考にしてみるといいというのだ。

正直、半信半疑であった。どうせ荒削りの才能、などともてはやされるバンドが増えるだけだろうと侮ってすらいた。

もちろん、なかには目を瞠ってしまうような技術を持った人間もいるかもしれない。口や頭では何とでも捉えることはできる。やはり何としても直に目にしてみるのもいいかと思ったのである。

そして、着いてしまった。

こんな大きいライブハウスなど、お目にかかるのも初めて。少女は誰が見ても明らかなくらい驚きの表情を隠さなかった。

しばらく、そのままでいると中年の夫婦らしき人間に「お嬢ちゃんのお母さんかお父さんはどこかな？　はぐれたんだねーだいじょうぶだよー」と声をかけられた。

とんだ屈辱を味わった。

言わずもがな、誤解を解いてライブハウスの中へと逃げ込む。

既に、オープンの時間は過ぎている。それどころか、スタートの時間すら。スケジュールを確認すると、開始時刻は三十分前に過ぎていた。

どうりで入り口付近の客の姿が少ないと思ったのだ。恐ろしい風貌の若者が至るところにたむろしているのを別とすれば、売店などもがらがらであった。

少女はワンドリンク代を払い、束になったパンフレットを受け取って中に進んだ。オープニングにはプロのバンドが来るらしいが、間に合わないかもしれない。
それでも、既に会場の中から漏れてくる音が少女の胸を高鳴らせる。

そっと防音の扉に手をかける。

扉が開かれた時、少女は鼓膜を震わせる轟音に思考が奪われた。
会場は暗い。ステージはまだ遠い。目の前には立ちはだかる観客の背中。
だが、この空間を隙間なく埋めているのは人ではない。
音。振動。空気が震えている。
振動、というものがここまで影響があるとは思ってもいなかった。
少女が今まで味わってきたものとは違う。
バスドラの一発がお腹に響く。床がびりびりと揺れている。
前に立つ客に阻まれステージの上を視認できないが、音を聴けば分かる。二本のギターが放つ音圧が膨れあがっていくのを。
こみあがってくる。
この音を生み出している者たちが示唆するところを、少女は感じ取っていた。
（くる！）
気が付けば、少女はその姿を目に収めようと人の壁を押し分けて歩いていた。その瞬間だった。
全ての視界を強烈な光が押し潰していた。光だけではない。
世界が変わっていた。
迫り来る音の壁と光の大洪水。
身体に電流が奔る。放たれた圧が、少女の全身に襲いかかっていた。体が後ろに押し戻されてしまいそうな錯覚。
鼓膜が痛いくらいに震え続けている。なのに、心地良い。世にも美しい旋律が爆音といっていいくらいの音量でこの場に、あるのだ。

少女は、自分の中の何かが真っ白になっていくのを感じた。
（何コレ、何コレ！？）
無我夢中でその感覚の正体を探った。体ごと投げ出されてしまったような。音を、捕まえようともがく。無重力の中を漂うような、どうしようもない浮遊感。
全ての楽器が調和し、その中を一際鮮烈な音が駆け抜けていく。生であんなに美しいギターの音色を聴くのは初めてだった。
（それにしても、何で……っこんなに、背高い人ばっかりなのー！？）
一行に進まないことに苛立ちを覚える。この場合、周りが成人男性ばかりだったのはあくまで原因の一つであった。少女は人の波をかき分けていくには、些かパワーが足りなすぎたのだ。
諦めた。前に進むより、この音楽を味わうことが先決である。そう割り切って少女は目を閉じた。
やがて現れた歌声が耳に入った瞬間、少女は泣きそうになった。何て、伝わるのだろうか。
繊細で、でも力強くて、聴く者が決して逃げることができない声。ストレートに語りかけてくる歌声は、今にも壊れそうなくらいの妙なる響きを持っていた。
この曲は、何か想像を超えるほど大きなものを歌っているような気がしたのだ。
あまりにインパクトが強すぎたのか、少女がある程度の冷静さを取り戻すのにはバンドが二曲目を終了させるまでの時間が必要だった。
（はっ！　もう二曲終わったの？）
時間が一瞬で飛び去っていく。二曲目はＭＣを挟まず、とんでもない音が飛び出してきた記憶がある。一瞬、ベースの音だと気が付かずに、圧倒されていた。あんなにエグい歪みが効いたスラップは頭をガツンと叩くような衝撃だった。
拍手と歓声が全方向から押し寄せる。

この会場にいる人も、圧倒されたに違いない。少女は少し遅れてから、拍手を重ねた。

次の曲にいくまでにここでＭＣが入るのだろうと思った少女は、会場が少しざわめき始めたのに眉を顰めた。

（どうかしたのかな？）

ＭＣが入るでもなく、演奏が始まる様子もない。

何かのトラブルだろうかと疑ったが、いかんせんステージの様子を見ることができない。少し恥ずかしかったが、ぴょんぴょんと跳ねるようにつま先立ちをしたが、意味がなかった。身長１５０センチの世界は、容赦がない。

「ギターの子、なんかヤバそうじゃない？」

そんな会話が横にいる二人組から聞こえてきた。

（ギターの人がどうかしたのかな）

機材のトラブルか。もしくは、体調的な問題だろうか。

中途半端な情報が入ってきたので、余計に気になる。そういえば、ギターの人の機材などが大変気になるなと思った。

「ごめんなさい！　あと一曲で終わりでーす！」

あの声。間違いなくヴォーカルの人の声で、そんな言葉が与えた衝撃は計り知れなかった。

（え！　もう終わりなの！？）

三曲しかやらないことになる。このイベントは、バンド同士で争うような形だったはずだ。持ち時間を残して立ち去ることがどれだけマイナスになるか、分かったものではない。

会場中から「えーー！？」と不満を訴える声が響く。

「本当にごめんなさい！　あと一曲、全力でやるから！　楽しんで！」

甘く響く声は非常に申し訳なさげだったが、あまりに快活な調子なので、会場の人間は大きな拍手でそれに応えた。

少女は、意を決した。あと一曲で終わるならば、あのステージの上に立つ人達の姿を何としてでも確認しなくては。

逆転の発想をすればいい。この身の機動性を発揮するならば、人と人との僅かな隙間を縫っていけばよいのだ。

自分だからこそ、できる。少女は素早く行動した。中腰で、身をかがめてみたら、進むことこの上なく、先ほどまでの努力は何だったのだろうかと泣きそうになった。すいすいと進み、少女は急にもわっとした空気に包まれたことに驚いた。

気が付けば、だいぶ前方までやってきたらしい。前と後ろでここまで熱気に差があるとは予想していなかった。それに、何だか前の方の人が放つ空気がコワイ。

目がぎらぎらしているというか、皆汗だくで輝かしい笑顔を放ってはいるものの。

そう。例えるなら、準備運動が済んだアスリートのような。

「Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｏｎｇ　ｉｓ……Ｓｃｈｏｏｌ　Ｄａｙｓ！！！」

４カウント。

少女の身体は吹っ飛んだ。

（な、な、んなっ！！？）

何が起こったか分からなかった。四方八方に押されまくり、意識が飛びそうになる。

少女は、モッシュという言葉を単語としては知っていた。まさか、自分がそれを体験するとは思ってもみなかったので、詳しく知る機会はなかったのだ。

ライブハウスの前方は、戦場であると。

スクールデイズと名のついた曲は、いったいどんな学校生活だと問いただしたくなるほど激しい一曲だった。

世紀末覇者が集う学校だろうか。もしくは、古式ゆかしいヤンキーが跋扈する不良学校かもしれない。

もみくちゃにされながら、ぼんやりとそんなことを考えていた少女はこれでは音を聴くどころではないとしゃかりきになった。

少女の魂に火がついた瞬間である。

（絶対に見てやる！）

その姿を拝むまで死ぬものか。

鬼気迫るオーラを纏った少女は向かってくる力に抵抗することを、まずやめた。力で向かっても勝ち目はない。

押してくる瞬間、ひく。相手の力を利用する合気道の要領で少女は自分にぶつかってくる魑魅魍魎をいなし続けた。

たまに肘が背中に入って呻いたりしたが、「ウキャー！！」と気合いを発して意識を保った。

先ほどから誰かの足が顔の横を通り抜けていることに戦々恐々としていた少女は、幾人もの男の人達がボロボロになりながら人の上を泳いでいることに目をつけた。

（これが、ダイヴ！）

本能で理解した。

そして、あんなに重そうな男性が乗れるならば、とアドレナリンが爆発する。

きっと目を眇めた少女。燦然と輝く瞳がたまたまそばにいた男を捕らえた。

目があった瞬間、二人は分かり合った。その男性は分かっている、とばかりに頷き、少女に向かって両手を組んで差し出した。

正しいダイヴの仕方など知る由もなかった少女は、その両手に微塵の迷いもなく足をかけた。

少女は飛んだ。比喩ではなく、本当に飛んだ。

少女が軽すぎたのか。男性の力加減が間違っていたのか、それは定かではない。

とにかく、少女は飛んだ。

その刹那、多くの観客が逆光によってシルエットと化した小さな少女が尋常じゃないくらい飛び上がったのを目撃する。あまりに綺麗なシルエットだったので、自然と視線がそちらに吸い寄せられる。

一方、自分が注目を浴びていることなど頭にない少女は予想外に高く舞い上がったことに悲鳴を上げていた。

「ニャーーーーー！！？」

人の上に落ちる。下で自分を支えてくれる人達がいることに安心し、少女はやっとステージの方を仰ぎ見た。

ちょうどステージの奥に設置されたライトがこちらを照らしており、ステージ上の人物の姿は確認できない。

それでも、少女は次第に人の上を流れていく身体をよじってステージの方を向こうとする。

照明が向きを変えつつあるその時、

「……あ……」

正面に立つ人物の姿を一瞬だけ、捉えた。宙に翻る長い髪が目に飛び込む。しかし、その後すぐに少女は頭から地面に墜落した。

その後のことはあまり記憶にない。頭から床に落ちた少女はかろうじてそばにいた人によって救出され、ふらふらになりながらも安全地帯へと連れていかれた。少女を気遣ってくれた人にお礼を言うと、その人は大きく頷いてからまた戦場へと特攻していった。なんとも勇ましい後ろ姿だった。

いつの間にか演奏が終わり、万雷の拍手。口笛に、誰かの叫ぶ声。壁際にもたれて何とか立ち上がってステージを見ると、既に白いカーテンのようなものがステージを隠してしまっていた。

それから全てのバンドが終わるまで少女は壁際で演奏に耳を傾けていた。全てのバンドの演奏を聴いて思ったことは、一つ。

自分の知らない世界が、こうまで凄まじいものだったとは思わなかった。正直、彼女は十代の人間の実力を過小評価していた。まさに青天の霹靂である。

上には上がいる。世界は広い。

どのバンドが優勝してもおかしくはなかった。一番衝撃を受けたのは、初めのバンドだったが、結局優勝したのはトリのバンドだった。

3ピースで、ジャンルはよく分からなかったが、新しい何かを開拓しようとしている姿勢が曲の端々から伝わってきた。

少女自身は、大人たちに混じって演奏することもあった。しかし、自分と年が近い人間の演奏を間近で知る機会はなかった。

自分の基準で、タカをくくっていた。

まさに脳髄をガツンと叩かれたようなショック。

会場を出て、駅までの道をふらふらと歩きながら、少女は胸に宿った微かな気持ちを抱いていた。

「ギター弾かなきゃ」

今すぐ、家に帰ってギターに触れたかった。いても立ってもいられない。

まだまだ、自分はやらねばならない。

歩きながら、ふと携帯を取り出す。電話をかけるのは、少女を爆メロに誘った友人である。

『もしもしー。あ、行ってきたのー?』

「うん。すごかった……私、本当に今日来てよかった」

『あー、そう? ならよかったさ。誘っておいて行けなくてごめんねー。急なブッキング入っちゃってさ。速報で優勝バンドチェックしてたんだけど、やっぱねーって感じ』

彼女はバンドをやっている。急に先輩バンドの穴埋めをしなくてはならなかったらしい。

「どれもすごかったけど……私は一番目のバンドが好きだったな」

『一バンド目? なんだっけクレイジーなんとか?』

「うん、そんな名前。途中でメンバーの体調が悪くなっちゃって、リタイアみたいな形になってたけど」

『うわー。それ、かわいそーだねー』

「それでね……私、高校に入ったら絶対にバンドやりたい!」

『おっ。さっそく影響されちゃったわけだ』

「それは、だって……」

あんなのを見せつけられたら、誰でも影響されるに決まっている。

「とにかく！　私、全然今のままじゃだめだと思う！　ギターももっといっぱい練習しないと！」
『気合い十分だね。バンドは楽しいよー。うちのギターやんない？　ちょうど二本にしたかったんだよねー』
「うん、それはいい！」
『即答拒否？！』
「だって、あんなにたくさん音楽聴いてるのに、メロコアなんだもん。メロコアはちょっと……」
『メロコア馬鹿にすんなー！　やっか、オラー！』
電話口で憤慨している友人にくすりと笑ってから、少女はあらたまった口調になる。
「誘ってくれてありがとね。本当に行ってよかった」
『あ、いやいやそれほどでも……ってごめん！　トラブル！　切るわ！』
電話の向こうで何やら騒がしくなったと思いきや、唐突に切られた。一瞬、「ビニーーーール！！」という怒号が聞こえた気がするが、気のせいだろうか。
鞄に携帯をしまい、少女は顔を上げた。
「よーーし！」
そのまま、小走りで家路を急ぐ。
胸が躍る感覚がやけにくすぐったく、少女は新たな目標ができた喜びを抱えたまま、今日の練習に向けて気合いを入れるのであった。

第二十五話

どうしようもなく、ぼけーっとしている。
軽音楽部。その部室はついこの間まで満ちていた緊張感などとうに見る影もなく、脱力系オーラが充満する空間と化していた。
イージーゴーイングと言うには聞こえは良いが、そろそろまずいなとその住人の一人、立花夏音は思い始めていた。
簡易ソファーに寝そべって雑誌を顔の上に乗せたまま。
まあ、極論を言えばのんべんだらりと過ごすのも悪くないのだ。カチャカチャと茶器が立てる音に部活仲間達の姦しい話し声をＢＧＭにして、微睡む最高のひと時。
改めて自分を棚に置いてしまうことになるが、流石にこのままではいけないということは夏音にも分かっているのだ。
あの日。あの爆メロのステージに立った日から、今日まで。
二週間と経っていないにも関わらず、色々とあった。色々、の打ち明けを思い出すだに、なんと運の悪いことかと嘆くばかりである。
結果から言うと、軽音部が爆メロで優勝することはなかった。あの時、唯が二曲目を終えるあたりで限界が来てしまい、三曲やっただけでステージを降りることになったのだ。
ステージから控え室に戻るまで、興奮が収まらなかった。たった今まで、千人以上の観客の視線が自分達へと注がれていたのだ。そして、彼らを沸かせていたという事実はまさにその身に刻まれていた。自分達の演奏で、観客との一体感を生み出したことがまざまざと脳裏に蘇る。彼女達にとっては、あの場所で起こった全てが初体験で、ステージが終わった直後は誰もが興奮に打ち震えていたのだ。
しかし、控え室に入ってからすぐのことだ。

「ごめんね……ごめんねぇ」
床に崩れ落ち、歯を食いしばりながら涙を零す唯の姿があった。
自分のせいで、と悔し涙を流す唯を責める者は誰一人としていなかった。むしろ、その状態で三曲やり通したことを称賛さえした。正直、軽音部の演奏は想像の何倍も良いものだったのである。
夏音が掴んだ感触として、この結果は相応のものだったと思われる。優勝したバンドは堂々としたステージング、演奏力も含めて光るものが多かった。仮に軽音部が全曲をやり通せたとして、優勝することは難しかっただろう。
唯が自分を責める必要はないし、楽しかったのだからいいだろうと諫め続けるうちに、彼女は何も言わなくなった。理性の上では、納得したのだろう。
ライブが終わってからすぐに彼女を病院に連れて行き、診断を受けさせたのはライブを観に来ていたさわ子であった。軽音部のステージを観ていた彼女はすぐに一同に連絡してきて、事情を知った彼女は「アナタ達が会場を離れるわけにはいかないでしょ」と車を出してくれたのだ。久しぶりに教師らしい一面を見せた瞬間だった。
どうやら唯はただの風邪ではなく、インフルエンザを患っていたらしい。病院で熱を測った時には四十度近い高熱だったことが判明して、あのまま無理をしていたらと考えると、自分達は正しい判断をしたのだと思えた。
万が一、億が一の可能性を考慮して優勝した場合のことを考えて結果発表まで残った一同だったが、優勝バンドの発表があった瞬間、そそくさと荷物をまとめて帰る準備を済ませた。その一方で一同は唯の妹である憂に事情を話し、取り乱して泣き喚く彼女を宥めなくてはならなかったりした。
当然のことだが、当日打ち上げなどできるはずもなく、唯が元気になったら皆でぱーっと盛り上がろうということにして、その日は全員が大人しく家に帰った。

夏音が高熱を出して倒れたのはその翌日のことである。

まさかと思って病院へ駆け込んだら、案の定インフルエンザだった。よく考えてみれば、唯とずっと一緒にいたのだからウイルスが体内に入っていても不思議ではない。

幸いインフルエンザに罹ったのは夏音だけであったが、軽音部に襲いかかった不幸はこれだけに留まらなかった。

うっかり階段から落ちた律が左手首を捻挫、腰を強かに打って絶対の安静を余儀なくされる。次いで、自宅で料理に挑戦していた澪が熱湯の沸き立つ鍋を零し、両手に火傷を負った。

ムギに関しては、更新したばかりの定期を落としたくらいだった。それもすぐに見つかったので大事ない。

ちなみに彼女は、皆に降りかかる不幸ラッシュに動転したのか「風邪ってどうやってひくのかな」などとち狂ったような発言が多かった。

さらに仕上げとばかりに、全回復したはずの唯はようやく病床から抜け出せたことではしゃいでいたのか。

転んで、突き指した。

間抜けの極みである。過保護な妹によって、必要以上の日数をベッドの上から動けなかったからといって、スキップでこけるとは。

このように最後に至っては、完全に自己責任だが。とはいえ、いったいこの事態はなんとしたものかと誰もが慄然としていた。

誰か、どこぞの神のご神体に無体を働いたのではないかと。一番疑わしき人物がその祟りの被害に遭ったのではないかという話が上がったが、本人は全力で否定した。

「じ、神社は近くにあるけど！　そんなはずは……っ！　いや、小さい時は……でも！」

あまりに必死に否定するので、「お前がする悪事なんてたかが知れているから大丈夫」と安心させた。

そして待ち望んだ打ち上げは一週間以上経った後に行われた。何となく満身創痍の様相を呈した一同は互いの不幸を思い切り鼻で笑い

合った。開き直ったともいえる。
その夜は大いに盛り上がった。憂、さわ子、和、そして何とめぐみを呼んで全員で騒いだのである。ちなみに夏音は七海を呼ぼうと目論んだが、断固拒否された。
他にはこれといったエピソードもなかった。ただ単に、楽しかったくらいである。
要するに問題はその後だ。これほどにまで問題が積み重なったのに、まだ問題があるというのか。
それは積み重なったが故に現在進行形で起こっている事態である。

それぞれの理由によって、一同は楽器に触れる時間が短くなってしまった。今まで爆メロに向けて過酷な強化練習を行っていただけに、元の生活に戻った途端に練習時間が短くなることは仕方がない。それに加えて、それぞれが楽器を弾くことができない怪我をしてしまったのだ。
夏音は練習をすることが当たり前なので、病床で暇な時間も練習に費やしていた。ムギに至っては、よく分からない。
澪、律、唯の三名。火傷、捻挫、突き指。楽器を弾かない時間がぽっかりと現れたこと。今までとのギャップ。
その間、彼女達は何をやっていたのか。
何もやっていなかった。
夏音は、ここ最近で彼女達に襲いかかった病気の名にひっそりこう名付けた。

『燃え尽き症候群』

それまで精力的に向かっていた目に見える目標が無くなったことで、何となくモチベーションを下げてしまう現象が、軽音部に起こってしまったのだ。

特に怪我をした三人は、楽器に触れることができない期間があったため、その影響が如実に現れている。

久しぶりに楽器を手にした者が共通して感じるのは、自身の腕がなまっているということだ。楽器は一日弾かなければ、三日分は腕が後退するという論がある。与太話ではあるが、実際にそれくらい衰えを自覚することがある。

弾けたはずのフレーズに詰まってしまう。指や体が上手く動かない。もちろん個人差があって少しくらい楽器を弾かなくても問題ないという者もいるが、一日弾かないだけでも腕がなまってしまうと気を張る者も多い。

長年弾いていなかったわけではないので、再び弾いているうちに何ともなくなるのだが、久しぶりに楽器を弾いた瞬間。そのギャップに驚いて、敬遠してしまう人間もいるのである。

三人の中でも、ドラムの律はそのギャップに最も衝撃を受けていた。ちょっとしたフィルでもたついてしまい、曲の最中でスタミナが尽きる。ずっと安静にしていただけに、体力が落ちてしまったのだ。

澪は久しぶりに弦に触れ、水ぶくれができたことにショックを受けていた。さらにピッキングに歯切れがなくなり、思い通りに動かない左手に苛々するばかり。

唯に至っては、アンプを通してギターを弾くのも久しぶりといったレベルであった。

そのような状態の時、楽器から遠ざかっていく者もいるくらいである。それを危惧した夏音が絶対に個人練習をするように言いつけてはいるのだが。

練習のモチベーションが上がらない上、軽音部が決断したあることによってこの緩やかな空気が加速してしまった。

爆メロが終わった後、軽音部ことＣｒａｚｙ　Ｃｏｍｂｉｎａｔｉｏｎは人々の噂となった。三曲だけで去ったガールズバンド。ネットで検索してもＨＰを持っておらず、今までライブハウスに出演

したこともない。あまりに情報がないので、彼女達を捜し求めるスレッドが某掲示板に立ったが、その行方は杳として知れず。

謎のガールズバンドとして、一部の人々の中で有名になっていた。

何より、どこぞのレーベルの人間がバンドの所在を探しているという噂がまことしやかに囁かれていたのだ。

その流れを知った一同の反応は、意外なものだった。

「すごいけど……なにか恐ろしい」

夏音を除いた四人の意見である。彼女達は突然、自分達が求められることに困惑を露わにしたのだ。

以前は、優勝だの有名になるだのと騒いでいただけに、夏音にとってはその反応は意表を突くものだった。

しかし、よくよく考えてみれば、彼女達の心理を理解できるようになった。

彼女達は尻込みしているのだ。何者でもなかった自分達が急に知らない人間に期待を寄せられること。自分達も知らない人達が一方的に自分達を求めることへの気後れより、その期待というものがあまりに未知のものだったのだ。

本当にプロを目指しているのであれば、「何を甘えたことを！」と怒るところだが、夏音はあえてそうしなかった。

口では武道館などと吹いてはいるが、彼女達のスタンスはそばにいる彼が一番分かっていたのだ。

彼女達は、それを「いつか」のことにしておきたいのだ。どう言い訳したところで、甘いとしか言いようがないのだが、ただ覚悟がなかっただけの彼女達を責めることのできる者はいない。

その権利をどうするのも彼女達の自由なのだ。例え、この先いつか彼女達が本気でプロを目指すことになり、このことを後悔する日が来たとしても。

その選択の責任を負うのは彼女達自身であるのだから。

「外でバンドやるのもいいけど、もう少し落ち着いてからでいいんじゃないかな」

夏音は狼狽える彼女達に、救いの選択肢を用意した。
いわば、保留。先送りにすることである。
夏音の提案に彼女達はすぐに賛成した。興味がないわけではないが、まだ軽音部として部活動をやっていたい、と。
それに学年が上がり、後輩が入ってくる可能性もある。そちらを先決にして、落ち着いてから改めて考えてみるのもいいのではないか、と。
夏音は意気揚々と後輩についての話題で盛り上がる彼女達を静かな瞳で見守っていた。
何故なら、彼は舵を切る人間ではない。決まった道を進むために先導することはある。ただ、船の航海を助けるために尽力することはあっても、彼が行き先を決めることはないのだ。
本当に大事なことは、彼女達に決断させてきた。
彼は自分の影響力。自分ができることをよく知っていたから。
そもそもレーベルだのという話が現実的なものになれば、夏音が一緒にバンドをやるわけにはいかない。

そんな風に過ごしているうちに、入学式が目前という話らしい。

ところで、ムギのお茶入れスキルが跳ね上がっている。彼女が淹れる紅茶の薫り高いことこの上なく。鼻腔をつく芳醇な香りについうっとり。
日によって茶葉を変え、それに合わせた茶菓子を用意する。この茶菓子もまた格別な味なのだ。舌がとろけるような絶妙な味わい。
紅茶とのコラボレーションに軽音部一同はよりいっそうティータイムの虜となっていたのだ。
このマッタリ加速については、確実にムギに非があると夏音は信じている。桜高のティーインストラクターは日々、腕を増しているのだから。

「あー。この一杯のために生きているといってもいいわー」
入学式の準備などで忙しいらしいさわ子が部室に居座って一時間は経っている。基本的に長くても三十分ほどで部室を去る彼女にとっては長居しすぎなくらいであった。
「さわちゃん仕事にもどんなくていいのかー？」
顧問が長い根を張りつつあることを察知したのか、律がそんな言葉を口にする。
「いいのいいのー。私、ずっと仕事してんのよー？　ちょっとくらい休憩したっていいじゃない。男の先生なんてすーぐにタバコ休憩って冗談じゃないわよ！」
「うわー。コリャだいぶたまってんねー」
触らぬ神にたたりなし、と思ったのか。律は、このまま居酒屋の親父よろしくくだを巻きかねないさわ子を放っておくことにしたらしい。
「つーか入学式も明日かよー。もう春休みも終わりかー」
律の言葉に雑誌を読みふけっていた澪が顔を上げる。
「そもそも、学校始まる前に来ているのに。何をするでもなくダラダラしすぎだろう」
爆メロ以降、春休みに一度も軽音部で練習をしていない。今後のことを話すために、と学校が始まる数日前に集まろうと言い出したのは澪だった。
気が抜けているのは澪も一緒だったが、根がまじめな彼女は今後の軽音部の方針に気を揉んでいたらしい。
「んー。話合いしてんじゃん」
「昨日もただ駄弁って終わっただけだろうが」
「いやー。つってもさー。一年生はすぐにオリエンテーションとかで合宿行くじゃん？　まだ新歓ライブまで余裕あるしょ」
「部長がそんなだらけてどうするんだ！」
「まあまあ澪ちゃん落ち着きなさい」
「先生も何も言わないのがおかしいんですよ！」

藪から蛇が出てきた。火の粉が自分に飛んできたところで、さわ子は席を立った。

「さー仕事もどらなくっちゃ！」

電光石火の動きで部室を去っていった。

「見ろよ。あの見事なまでの逃げっぷり」

「大人って色々あるんだと思う……ってことにしておこう」

そう口にする澪は苦笑が様になっているあたり、大人への階段を順調に登っているようだ。

雑誌をひょいと上げた隙間からその一連の様子を眺めていた夏音はゆっくりと体を起こした。そのまま立ち上がると自分の席に座り、大皿に載ったクッキーを一つつまんだ。

「新歓ライブなんだけどさ」

おもむろに口を開いた夏音に視線が集まる。

「やる気は……あるんだよね？」

瞬時に視線が移動する気配がした。夏音は誰と目を合わせるわけでもなく、ぼんやりと机の上に目を向けた。

「も、もちろんやるに決まってるだろ。このまま後輩が入ってこなきゃ軽音部が廃部になっちまう！」

律が話した内容は、一年の時には意識することがあまりなかったことだ。重要な案件に違いないのだが、なまじ自分達だけで成り立っていたので、思考の外に放り投げていたのだ。

「和ちゃんが言ってたんだけど、運動部とかは既に部活に参加してる子もいるんだって」

「マジ？　まだ入学もしてないのにすげーなー」

「推薦で来た子たちじゃないかしら？」

「あーなるほど。まあ、入ることが決まってるなら何も悪いことじゃないしな」

他の部活動との差がありありと分かるような話である。何となくバツが悪くなったので、全員が同じタイミングで茶をすする。

また沈黙。

「と、とにかくさ！　新歓ライブもばーっと盛り上げて新入生がつーんと入れちゃおうぜ！」
　我らが部長が無責任な発言をかました。
「はぁー。そう上手くいったら苦労しないだろ。うちは人気ある部活じゃないんだから」
　澪が溜め息まじりに言う。
「え。人気ないの？」
　改めて言われれば、驚愕の事実である。夏音は思わず目を丸くして澪を見詰める。
「音楽とかはみんな好きだけど、自分で演奏するとなったらな……そもそも、人気があるんだったら廃部寸前になってるはずないと思うし」
「そりゃそうだな」
　澪の言葉にうんうんと頷く律。自分がその廃部寸前の部活を救ったのだと思っているのかもしれない。
「そんなものなの？」
「そりゃあね。楽器弾く自分って想像できないし、楽器を買ったりとかで気軽にできるってイメージがないだろう」
「なら新入生にはレンタルさせればいいんじゃないかな？」
「誰が楽器貸すんだ……ってまさか？」
「はーい俺俺！　貸すほどうちにある！」
　びしっと手を突き上げて主張する夏音だったが、それに対して猛烈に反応したのはそれまでぼーっと話を聞いていた人物だった。
「ちょっと待って！　私の時は誰も貸してくれる気なんてなかったと思います！　不公平だよ！」
　そういえば、そうだったなと全員が思い返す。全員でアルバイトしてまで、購入を薦めた記憶がある。
「だって……これから入ってくるのは後輩だし？」
「それなら夏音くんより私一つ後輩じゃん！　一つ下！　一つ上！」
　自分、年下。ユー年上。普段、あまり誰も触れようとしない部分

にずばずば踏み込んだ唯に呆れた眼差しが突き刺さる。
「お前なーこの馬鹿たれ」
流石にフォローの言葉が出なかった律は唯を軽く睨み、それからおそるおそる夏音の顔を窺った。
「と、年上だけど？　だ、だから何、だけど？　なにそれなら唯は俺が年上だったからって敬ってくれるのだけど？」
予想以上に地雷だったらしい。
それから日本は儒教の精神によって云々かんたらと語り出した夏音に唯は速攻で頭を深々と下げた。
「ごめんなさい！　もう言いません！」
狼狽えた夏音の肩にそっと手をやった律の目にはありったけの優しさが浮かんでいた。
すかさず紅茶のおかわりを注ぎにムギが横につき、澪がそっと茶菓子の皿を夏音の方へと寄せる。見事な連携プレイである。
「まーまー。このタルトもなかなかいけるから、さ」
さ、と言って洋なしのタルトを手掴んだ律がそれを夏音の口に突っ込む。
「ゴフッ……」
一瞬咽せかけたが、大人しく咀嚼する夏音を皆が見詰める。その間、無表情でもぐもぐし続けていた夏音はごくりと嚥下すると、紅茶を一口流し込む。
「んまーーーい！！」
顔を輝かせる夏音に一同はほっと息をついた。そして多くの者が天然の恐ろしさを実感していた。
気を取り直すように、澪が真面目な表情を作った。
「やっぱり楽器は自分で買わなくちゃいけないと思う。楽器ってさ、毎日自分で弾いて一緒に成長していくものじゃないかな」
澪の言葉に皆が「おぉー」と感心する。澪は顔を赤らめて俯いたが、夏音はその言葉に全面的に同意だった。
「そうだね。弾きこんでこそ、その楽器のことがわかってくる。そ

れに弾き続けてれば鳴りもよくなるしね」
　ものによるけど、と付け加える。恥ずかしがっていた澪も夏音の意見には顔を上げて頷いた。この軽音部の面々の中で、夏音に次いで楽器と向き合っている彼女は楽器選びについてはそれなりの意見を持っている。
「その人の選ぶ楽器にもよるけど。やっぱりギターは木だからな。毎日の手入れによってはダメにもなるし、逆にきちんとしていれば持ち主に応えてくれるように鳴ってくれるものだから」
澪は初めに買ったベースを使い続けているので、よりいっそう実感があるはずだ。彼女の使用するフェンダージャパン製のＪＢ６２は、これくらいの価格帯のものにしてみれば、作りがしっかりしている。ＵＳＡ製とどちらが良いかというのは使い手の好みにもよるが、メイドオブジャパンの名は伊達ではなく、細かい仕上げなどをとってもコストパフォーマンスが良い。中級者以上であったり、パッシヴのベースを初めて使ってみる場合などにぴったりである。
加えて、購入してから数年の間欠かさずに弾き続けられた彼女のベースは、購入時と比べて格段に鳴るようになっている。
　このように、愛着をもって所有楽器を弾くことは軽んじるべきではないことなのだ。僅かな鳴りも、ずっと触り続けているからこそ、気がつける。
　それが他人から借り受けた物と、正真正銘自分の物とではどちらが愛着を込めることができるかなど決まりきっている問題なのだ。
「鳴りかー。あまり気にしたことなかったや」
　ぼんやりと話を伺っていた唯がぽつりと漏らす。
「唯はまだまだだよ」
「うぅ……言い返せない」
「まあ、もう一度みんなでバイトすればいいんじゃね？」
　律が気軽に放った一言で、それもそうだねーと楽器についての話題は終わった。その時、ムギが机の下でぎゅっと拳を握り込んだことには誰も気が付かなかった。

入学式の当日において在校生は休みである。
保護者も大勢訪れて校内が慌ただしいだろうというよく分からない理由で軽音部は休みとなった。
だからこそ、急な仕事を頼まれても夏音は二つ返事で快諾することができた。昨日、ジョンを通して急なレコーディングが入ったのである。ところが、もし仮に今日が登校日だったとしても夏音はこの仕事を断ることはなかっただろう。
依頼者の名は、ポール・アクロイド。夏音が以前、在籍していたＳｉｌｅｎｔ　Ｓｉｓｔｅｒｓのヴォーカルその人である。
親日家の彼はしょっちゅう日本を訪れているが、レコーディングも日本で行うとは夏音にとっては意外な出来事であった。聞くところによると、今回の彼のソロアルバムを製作するにあたって、絶妙にマッチするプロデューサーが日本にいたらしい。そのプロデューサーは業界では著名であり、その仕事ぶりや音の好みを知るだに、「彼にやってもらいたい」と人づてで仕事を依頼したという。
レコーディングは順調に進んでいたが、トラックダウン直前でポールとそのプロデューサーの意見が対立した。
問題となったのは一曲。その曲のベースがどうしても気に入らないからやり直したい。ポールがそう言うと、プロデューサーはミックスでどうにかすると返す。
だが、そこでポールは「この曲はベースの生々しい質感が大事なんだ。エフェクトでどうにかなる問題じゃない」と断固拒否。
プロデューサーはそこまで言うならば録り直そうとしたが、その曲を担当したベーシストはどこぞのアーティストのツアーに同伴していってしまったらしい。代わりのベーシストを探そうとしたところ、夏音が日本にいることを小耳に挟んでいたポールがジョンを通じて連絡を入れてきたのだ。

プレイ・バックを聴き終えて、夏音は「すっげースンナリいけた」と手応えを感じた。コンソール内でベースを録っている最中は周りに人が集まりすぎて視線が煩わしかったが、そこはプロの精神でカバー。ヘッドフォンから流れるポールの歌声に引っ張られるように、すぐに集中することができた。

背後のソファに座っていたポールが「Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！！」と呟き、満面の笑みで夏音を見詰めた。

「君に連絡がつけることができて本当に幸運だったよ」

琥珀色の瞳が好意的な光を湛えて夏音を見詰めている。

「こっちこそ、わざわざ俺を選んでくれるなんて光栄なことだね。久しぶりにポールと仕事ができるって聞いて大興奮だったよ！」

そう言って立ち上がった夏音は久しぶりに会った友人と握手を交わした。がっしりと握り替えしてくる手に懐かしさを覚える。

同じバンドをやっていた同士とはいえ、父と子くらいに年が離れた二人である。今日、数年ぶりに夏音と再会したポールは髪の気が真っ黒になった夏音を見て「誰だかわからなかった！」と腹を抱えて笑った。そのままハグして持ち上げようとして驚いた様子で「大きくなったな」と頭をぐしゃぐしゃにした。その様子は知らない者が見たら親子の交流のように見えたことだろう。

二人は再会の喜びを分かち合うのもそこそこにして、ミーティングを始めた。様々な意見を交換した後、すぐにレコーディングに移ったのであった。

「今日は慌ただしかったからゆっくり話したいな。この後は時間あるのかい？」

「もちろん。俺は学生だからね。まだ春休みなんだ」

「本当に日本のハイスクールに通っているんだって？　聞きたいことは山ほどあるから今日は逃がさないよ。ドラムのタクヤから東京の良い店を聞いたからね」

ポールは都内の高級ホテルに泊まっているという。何回も日本に来ているが、その都度違ったホテルに泊まるのが好きらしい。日本のホテルの質は世界でもトップレベルらしく、いつ来ても最高だと言う。

「旅館は？　日本の畳部屋も最高だよ？」

「ああ、前に温泉に行った時に体験済みだよ。あそこで呑むサケが実にうまいんだ」

酒豪で知られるポールは日本酒もいける口らしい。夏音は既にワインやビールをたらふく飲み干し続けている彼の様子を見て相変わらずだと嬉しくなった。夏音は運ばれてくる料理に舌鼓を打ちながら、懐かしい友人と会話に華を咲かせていた。

「それで、君は本当にその部活でギターを弾いてるって？」

「そうだよ。俺もまさか自分が日本の学校で音楽をやるなんて思いもしてなかったよ」

「友達はたくさんできたのかい？」

「あー。少数精鋭の頼もしい仲間が、ね」

「そうか……それはよかった」

何とも言えない表情で柔和な空気を醸し出すポール。何を考えているかは手に取るようにわかる。

昔から夏音は同年代の友達を作ることが壊滅的に下手だった。特にポールとＳｉｌｅｎｔ　Ｓｉｓｔｅｒｓを始めてからは学業も含めて友達と交流する機会が激減したことから、ポールは気に病んでいた節がある。ポールの息子は夏音の三つ下で、息子と同じような年の夏音についてはメンバーから外れてからも気に掛けていたらしい。

「僕は君を加入させたことには一切後悔していないんだけどね。ごく普通の楽しみも覚えて欲しいとは思っていたんだ。友達と湖に行ったりだとか、集まってスーパーボールを観たりだとか。ああやって僕たちがガキの頃やってたことは馬鹿なことも含めてとても大切

なものだと思っているからね」
「俺も後悔なんて微塵も感じたことないさ。それにその心配は無用だよ。俺はちゃんと友達もいるし、学校生活も順調だよ」
夏音が心からそう言っているのだということが分かると、ポールは頬をゆるませた。すると、隣でウイスキー片手にニヤニヤと話を聞いていた男が舌っ足らずな英語で話に入ってきた。
「まさかカノン・マクレーンが日本で高校生やってるって冗談だろって思ったね、俺は」
スタジオミュージシャンで至る所でドラムを叩いているこの男こそがこの店を紹介したタクヤである。テクニカルで歌心があるドラムを叩くこの男は夏音と初顔合わせだったが、ポールを通してすぐに打ち解けた。夏音は彼を知らなかったが、向こうはカノン・マクレーンをよく知っていたらしい。
「マジで可愛すぎてションベン漏れるかと思ったぜ。うっぷ」
「飲み過ぎじゃないかタクヤ？」
かく言う自分も常人の数倍もの酒量を入れているのだが、ポールが眉を潜めた。
「ちょっと失礼」
顔がほんのり赤いタクヤはもう一度口から粗相を漏らした挙げ句、トイレに立った。夏音はそんな彼に苦笑してポールと面白そうに目を見合わせた。
「ああいう大人になるんじゃないぞ」
「心配なく。うちの家系はみんな酒に弱いんだから」
両親とも家系的には酒豪らしいのだが、譲二もアルヴィもてんで酒に弱い。昔、それで大失敗をおかしたという共通経験があるらしく、家でも滅多に酒は飲まない。たまに嗜む程度に呑むことはあるが、譲二などはすぐにべろんべろんになってしまうので妻の目が常に光っている。
「ジョージとアルヴィともしばらく会ってない。今はどこにいるんだ？」

「たしか昨日はイギリスにいるって言ってたよ」
どこに出没してもおかしくない両親である。
「相変わらずのようだな」
懐かしそうに目を細めるポール。
「ところでタクヤが帰ってくる前に耳に入れておいて欲しいことがある」
途端に真面目なトーンに落とされた口調に夏音は背を伸ばした。
「なに？」
「今すぐっていうわけではないんだが……またベースが抜けるかもしれない」
その一言が夏音に与えた衝撃は計り知れない。うっかり「へ？」と間抜けな声を出してしまったくらいだ。
「僕は君の今の生活をよくは知らない。だが、先ほどのベースを聴いて改めて思ったよ。今のバンドに必要な音は君が全て持っているとね」
「そ、それって……ちょっと待って。今の……なんだっけ名前」
「バーバ」
「そう、バーバ・オーブリー。彼はどうするの？」
「別にクビにするってことじゃない。ただ、もともと彼は長くやってくれるわけじゃないってことは承知していた。彼には彼のやりたい音楽があって、それを引き留めるつもりはない」
「つまり、その後釜に俺を？」
「そうなるな。いや、後釜って意味じゃ彼の方が君の後輩だよ」
「でも……」
「いや、すぐに答えを出してもらうつもりはない。ただあらかじめそういう意思が僕達にあるのだろ知っておいてもらいたくてね」
「マークはそんなこと一言も……」
「久しぶりの再会にこんな話は無粋だとでも思ったのかもしれない。そもそも、僕だって考えの一つにぼんやりと会ったくらいなんだ。この二年ほどで君がどんな風になっているか明確に知らなかったし

ね」

「それで今日の俺を見て、この話を出してもいいと？」

「その通りだ。技術は言うまでもなかった。けど、そうじゃない。君は実にユニークな音を出すようになった。それが何なのかまではつかめないが、もっと人を惹き付けるような……そういうものが強くなったと思う」

思いもよらぬべた褒めの嵐に夏音はたじろいだ。尊敬するミュージシャンにここまで言われると謙遜の心が生まれてしまう。かつてポール率いるバンドでプレイしていた時、夏音はしょっちゅう他のメンバーから演奏面での注意を受けていた。まともに褒められたり、ベストアクトだと評価を受けることなどごく稀だった。

「ありがとう。俺はまだまだだけど、そう言ってくれると自信になるよ」

こういう控えめな感想を言ってしまうあたり、日本に長くいるんだなと実感する。手放しで喜ぶことに抵抗が芽生えてしまうのだ。

いや待てよ、と思い返す。思えば、自分が尊敬するミュージシャンは皆控えめな受け答えをしていた気がする。誰かの格言でこんな言葉があった。

ステージの上では自分が誰よりも上手いと思え。ステージの下では自分が誰よりも下手だと思え。

そう考えると、自分の態度は間違っていないと夏音は思い直して気が楽になった。

「ちゃんと考えておくよ」

「そう言ってくれると思ったよ。ずっと日本にいる気はないんだろう？」

何気ない一言だったと思われる。しかし、夏音はその疑問にすぐ答えることはできなかった。心臓を刃で斬りつけられたような、鋭い一言だった。

夏音がしばし何も言えずにいると、ポールは何かを察したようだった。追加の注文を頼み、夏音にデザートを勧めてきた。夏音は日

本語が読めないポールの分もケーキを頼み、気まずい気持ちのまま黙っていた。

「タクヤはずいぶんと長いトイレだな。日本のレストランのトイレはシャワーもついているのかな」

そんなジョークに愛想笑いを浮かべてまた、夏音はこんな表情が身についてしまった自分、すぐに気の利いた返しをできない自分を不思議に思った。

「おそるべき日本……」

ぽつりと日本語で呟いた夏音に「Ｗｈａｔ？」と首を傾げたポールに何でもないと答えた。

自分でも気付かないうちに随分とこちらの習慣が身に染みこんでしまったようだ。それとも自分に混ざる日本人の血のせいかしらと夏音も首をひねった。

だいぶげっそりとしたタクヤが席に戻ってきて、そろって不思議そうな顔つきで佇む二人を見て彼もきょとんとしていた。

★　★

「いたっ」

よく見ると左手中指の内側に水ぶくれができていた。

「やっぱりこうなるか……」

澪はつい最近克服したばかりの痛みに顔をしかめた。澪はスラップ時に基本的に人差し指のみを使ってプルをする。しかし、色んな教則動画や身近なプロの人の演奏を見ているうちに一本だけでは実現できないような表現に感化されてしまい、こうして中指でプルをする練習をしていたのだ。

「早めに潰さないと……ヒィっ！！？」

自分で想像しておいて悲鳴をあげるあたり、とんだヘタレであると自覚せざるを得ない。自らの経験上、分かっているのだ。この水

ぶくれは放っておくとやがて硬くなり、何かに触れるだけで痛むようになる。そうなれば、この部分を使って弦を弾くことなどとうていできはしない。久しぶりにベースを弾いてできた水ぶくれがやっと治ったばかりで、その辛さは卑近なものである。

対処法としては、まだ水ぶくれが柔らかいうちに針などを使って破いてしまう必要があるのだが。

分かってはいるのだ。

「けど……ムリ」

ヘタレオブザクイーン。と律に言われたことがある。よく考えればそれはヘタレの女王ではなくて、女王のヘタレではないかと思うがどっちでもいい。

幼なじみの言葉はしゃくに障るが、こうしてヘタレを曝してしまう以上、仕方がないのかもしれない。

「こういう時、夏音はどうするのかな」

ふと頭に浮かんだその人物ならば、素敵で痛くない対処法を教えてくれるかもしれない。澪は携帯を手に取り、電話をかけた。

『もしもし』

そこでハローと言わないあたり、彼奴も日本に馴染んできているのだろう。

「あ、夏音。ちょっと聞きたいことがあって」

『ベースのこと？　何？』

「水ぶくれができた時ってどうすればいいんだろう？」

『潰しなよ』

「潰す以外で」

『切る？』

「痛くない方法で！」

『そんなこと言われても……昔水ぶくれできた時は……とにかく弾きまくっていつの間にか潰れてたかなー』

おそろしく参考にならない。

「チッ」

『え、いま舌打ちした？　まさか澪が自分から電話しておいて舌打ちなんてするはずが』

「あ、ごめん。ちょっと電池なくなりそうだから！　自分で何とかするからありがとうさようなら！」

通話を切った。最低だ、と思う。

しかし、自分には時間がない。

せっかくパソコンがあるんだからと同じような悩みを持つ人を検索してみた。

【なんとかなるさ】

判を押したようにこんな一言ばかりだった。どの人も、必死に尋ねてくる相手に対して「あるあるー。あるよねー」とか「弾いてるうちに何とかなるから。いつか硬くなるまでがんばれ」「ベーシストの宿命じゃね？」などと言うばかり。

そんなのは百も承知なのだ。もうすぐ新歓ライブもあるというのに、こんな状態でその日を迎えるなど考えられない。

澪は深い溜め息をつくと、ベースをスタンドに立てかけ、しばらく呆けていた。

すると、天啓だろうか。最も単純で合理的な答えが降ってきた。

「中指でスラップしなきゃいいだけだ」

普通に弾く分には特別必要のない部分だ。ピッキングの角度に気を遣えば、何とかなる。

それでも釈然としない。胸の内にもやもやしたものがわだかまってくる。

爆メロという特別な体験をした後。数日間は気が抜けたように練習から遠ざかり、我に帰って練習をしようとした途端に腕にやけどを負ってしまった。

それでも、何とか持ち直してきたのだ。自分達のバンドが話題になっていると耳に挟み、心に再び火が灯った。

あまりに自信のない自分。今すぐその期待を背負ってバンドの世界に飛び込むことへの躊躇など、臆している証拠である。

こんな自分がいつ自信というものを掴むことができるかなど想像がつかない。とりあえず、ひたすら練習する以外に方法が思いつかない。

しかし、とまたもや立ち止まりそうになる。

所詮はその繰り返しになってしまうのではないか。澪の知る立花夏音という人間は、自分より遥かに上手いくせに、練習量においても澪を凌いでいる。

そのうえで自分はまだまだ、と口にするのだ。澪はそんな存在を身近にして、どうしようもならない気持ちになってしまう。

一歩一歩登った先に自分の求めるものがあるのだろうか。

近頃はそんなことを考える時間が多かった。考えているうちに階段を下っているような気すらした。

だから、彼女は新たな力を手に入れようともがこうとするのだ。上を睨めつけるように。ガムシャラにやろうとした瞬間、この現状である。

「はぁ」

とりあえず、傷を負ったばかりの中指には休んでいてもらおう。ベースでできることは無限にあり、自分が試みたことはごく一部の表現方法でしかないのだ。

気持ちを切り替えて、次に。

心の中ではっきりとそう呟いてみる。そうすることで、奮起しなければいけない。

自分は、まだまだなのだ。夏音がまだまだなら、自分なんかまだまだまだまだなのだ。

これから後輩が入ってくるかもしれない。その中にベースを弾く子がいて、もしかして自分より腕があるかもしれない。

先輩である自分が後れをとるわけにはいかないのだ。

そう考えたからこそ、新たな武器が欲しかった。それでも、やるべきことはたくさん残されている。

澪はぱしんと頬を叩いて気合いを入れ直した。

自分の愛機を引き寄せると、その慣れ親しんだ重みが実に頼もしい。メトロノームのクリックを再開させ、弦を弾いた。

★　　★

「よいっしょ……っと！」
「姉ちゃんおっさんくせー」
「うっせー」
生意気な弟に短く応える。最近まで腰を痛めていたので、立つ時に声を出すのが癖になってしまった。
もう痛みはないのだが、今でも痛みが襲ってきそうで怖い。腰や膝を痛めた者は分かるだろうが、体重を支える部分が痛いと何をするにも堪える。立ち上がるという動作にも通常時の何倍も時間をかけてゆっくりとこなす必要がある。
特に腰という部位は人間において非常に重要だ。座っているだけでしんどいので、どうにか楽な姿勢を探して動くのも億劫になってしまう。
ならばドラマーにとってはどうなのか。
大事なんてものではない。腰はドラムの基点になる。始めたばかりの人で、上半身だけで叩いているような者が多いが、ドラムは全身を使う楽器だ。使わない部分はないし、ある意味ではアスリートのように自分の身体を管理する必要がある。腰を痛めやすいドラマーはそういった管理を怠っている可能性があるくらいだ。
律はドラムを叩く前に簡単なストレッチをするくらいだが、プロドラマーのように人より長くドラムを叩くような職業の者は職業病といっていいくらい腰痛持ちが多く、しっかりと身体に気を遣って徹底したストレッチを行うドラマーも少なくない。
全く無頓着な人間が多いのも事実だが。

そもそも、ここ最近はあまりに腰が痛くて椅子に座るのも辛かったのだ。
おまけに手首を捻挫してしまい、スティックも持てなかった。そんなこんなの理由で律はまともな練習をしていなかった。
昨日は久しぶりにドラムを叩いた。まだ誰も来ていない部室で、ただ一人だけで。部室にドラムセットを置いている上、学校にもしばらく行っていなかったので、ドラムを叩くのもしばらくぶりという始末である。
見事に身体がついてこなかった。重みのないバスドラ、自分の根本的な部分がふにゃりとなってしまったような気がした。
長く叩いていられなかった。ブランクがあるのだから、それこそ目一杯叩いて空白の期間で落ちこんだ腕を取り戻すべきなのは理解している。
ただ、気力が湧かないのだ。
目の前には新歓ライブがあり、人の前でこのドラムを披露しなくてはならない。このままではいけない。
ところが、如何せんやる気がでない。甘ったれているなと自分でも思う。
（合わせるの不安だなぁ）
まだ一度もバンドで合わせていない。鈍りきった音を鳴らすことへの不安もあるが、気持ちの面での変化がそのまま露見してしまわないか。腑抜けた自分を曝すことが怖くてたまらないのだ。
とはいえ、そろそろ本気でバンドの練習を再開しなくてはならない。新歓ライブまでは一週間とない。ここで四の五の言っている暇はなく、状況がそれを許さないのだ。
弟の聡がゲームに夢中になって時折「うわぁ！」「よっ」と呻くのを横目に律はパソコンを起動させた。特にすることがない時はネットの海に潜り込む。
何気なくお気に入りを探り始めると目に付く某動画サイトのリンク。クリックして飛ぶと、やや画質が悪いながらも楽器を手に持つ

人間が画面に映し出される。カノン・マクレーンのコンサート映像だ。

「ちょー金髪じゃん」

その人物は今や同じ部活で黒い髪をなびかせてギターを弾いているが。何も考えずに動画を見ていると、その人物の六弦ベースからドラムの音が飛びだした。シンセを使っているのだが、何度見ても気持ち悪いと思う。

「ばっかだなー」

とハッキリ口にしてしまう。彼が弾き出すリズムのパターンをドラムで再現してみろ、と言われても律には不可能だった。

別の楽器を得手としているのに、これはない。悔しいとかの次元を越えて、無力感に打ちひしがれる。

しかし、そんな動画をお気に入りに入れている理由もある。

しばらくして「きちんとした」ベース音に戻した動画のカノンは、ドラムと二人きりでセッションを始める。

ドラマーの方は、誰もが知っているジャズドラマー。変態的なテクニックの持ち主で、律も好きである。

中盤に律が気に入っているパートが訪れる。曲の中でも一際ドラムとベースがフレーズ的に絡む部分で、グルーヴ感が半端ない。

「はぁ」

つい、うっとりして息が漏れる。

これはどれほど遠い世界なのだろうか。こんなグルーヴの中に居たら、どんな気持ちになれるのだろうか。

同じフレーズを叩くことは、できるだろう。そこまで難しいテクニックを要するものではない。

無論、この動画の通りに再現することは不可能だ。細かい部分に入るゴーストノートや、そもそものノリが違う。

どれだけ、やればいいのだろう。道のりは果てしなく長く、目に見えるものは何もない。

音楽なんてそんなものかもしれない。気が付けば手の中にあり、

後ろを振り返れば明確な道筋が。自分が来た道に徴が点々と浮かんであるだけ。

これから手に入れることができるものは、どんなものだろうか。ふと気が付けば憧れのキース・ムーンのようなドラミングが可能になっていたりするのだろうか。

そもそもツーバスなんか今の律にはできない。実際に夏音からは手を出すなら貸すと言われたことがある。現在あるオリジナルの中にもツーバスができたらな、というシーンが幾つかあった。

動画を閉じ、律は比較的良心的な値段とサービスを提供することで有名なオンライン楽器屋のサイトを開いた。

★　★

あの光の中にもう一度立つことはあるのだろうか。今も瞳を閉じれば脳裏に焼き付くあの強烈な光。体に刻み込まれたあの音の振動。身が竦みそうなくらい浴びた視線の数。記憶のほとんどが朧気に揺れていて、今でも夢幻だったのではないかと思うほどだ。

それでも、終わった後の悔しさだけはハッキリと覚えている。ステージから控えた後はしばらく私のせいで、と自分を責め続けていた。

興奮しきった皆が心から唯を励ましてくれたことに救われたことも。その時に遅れてやってきた高鳴りが唯をぼろぼろと涙させたことも、記憶の中にちゃんとある。

また、あそこへ行きたい。そう心に願い病院に連れていかれたのだった。

それにしても、ある一つの問題がしつこい油汚れみたいに唯の頭から離れない。

どうにも世に言う突き指とは名前だけで過小評価されている、ということだ。

部活の仲間たちに「突き指しちゃったよ～」と言った時のことだ。きっと自分の怪我を心配してお見舞いの言葉が飛び出してくるかと思いきや、「なんだとこの馬鹿」「ドジっ娘もほどほどにな」などというありがたくもない言葉を頂いてしまった。友の友情を疑わざるを得ない扱いであった。自分はギタリストなのに。

指の腱が伸びて云々と説明すればよかったと後悔した。

多くの人が想像する突き指は関節が内出血で青くなり、腫れてしまうような軽度のものだろう。別名、捻挫と言うがこの時点でその名を聞いた人が想像する怪我の度合いが違う。

実際に唯はこの捻挫をしてしまった。靱帯も少し伸びてしまったそうだ。医者は、唯がギターをやっていると知ると「絶対にしっかり治した方がいい」と念を押してきた。

過去に言うことを聞かないで中途半端に治療を受けた男性は、靱帯が元通りにならずに指を曲げると、関節から先が変な方向に曲がるようになってしまったという。おかげで、ギターをやっていたその男性は「速弾きができなくなったー」と頭を抱えたらしい。

その話を聞かされた唯は青くなって絶対の安静を心に誓ったのであった。せっかく病床から抜け出せたと思えば、またもやギターがおあずけのようだった。

とはいえ、怪我をしたのは左手の中指。いたって健康そのものの右手と、余った左手の指でどうにかできないかと悩んだ末、小指と薬指だけを動かす地味な練習に励んだ。つい中指も動いてしまうので、激痛が走ったが、それをこなしていく内にそこそこスムーズに動くようになった。

いざ、捻挫が治ってしまうと驚きだ。運指が段違いに上達していた。

それも小指と薬指だけ。それぱかりやっていたから当然のことなのだが。

人差し指と中指は急遽出張ってきた新米たちに取り残されてしまったのだ。ぐぬぬ、と悔しげに固い動きを繰り返す二本の指はすっかり鈍ってしまったようだ。

「んー。なんかバランスが悪くて……」

コードはかろうじて押さえられるのだが、やはり釈然としない。苦手だって小指と薬指の運指が上達したことで、今までにできなかったテクニカルなフレーズに手を出したいところだったのだが、世はままならないものだ。

一歩進んだと思いきや、二歩下がったのかそもそも進んだのかも記憶に危ういくらいだ。

唯は自分の進歩を褒めてくれる人物に何と申し開きをするか頭をひねった。

実は、彼にはこの二週間あまりを無為に過ごすことだけは許さないと言われてしまったのであった。

つまり、何かしらの上達を見せなければ彼は怒ってしまうに違いない。それは活火山のごとく怒るだろう。音楽が絡むと、彼は鬼のごとく恐怖を与えてくるのだ。

鬼コーチ。そんな単語が浮かんでぷっと噴き出すが、本人はあくまで真面目なのだから、冗談抜きに笑うことはできない。

唯は、あの眼力で人を殺せるのではないかと疑っていた。

「どうしよ……どしよ……」

居間のソファに倒れ込んだ唯に、顔色が優れないと憂が声をかけてきた。何でもないとやんわりと答え、夕飯の支度に追い返す。

近頃は連続で体調を崩したり怪我したりと心配ばかりかけている。やや過保護気味になっている妹は、唯が咳とくしゃみをコンボするだけで張り付いて看病を開始してしまう。

本日、入学式を終えて高校生になったばかりの妹。自分と同じ制服に身を包み、来週からは中学の時みたいに一緒に登校することになる。

唯は両親と一緒に入学式に出席した。父兄という立場で去年の自

分達と同じようにドキドキ胸を躍らしているだろう後輩達の姿を見ると、不思議な気持ちになった。

彼ら彼女らと同じ場所にいたのだ。あっという間に一年が経ち、学年が上がる。

中学の時はもう少し時間がゆったりと過ぎていた気がするのに、この差は何だろうか。

思い当たるのは、やはり部活動に身を置いていることだ。それも一年前の自分が想像もしなかった軽音部。未知の分野に戸惑うことも多かったが、思いがけずのめり込んでしまっていた。

憂はまだ何かの部活をやるとかいう予定はないようで、来週から友達に付き添って部活動見学をするのだという。

その中で特別気に入ったものがあれば考えるが、平沢家の家事を取り仕切る彼女は時間を長く拘束されるような活動は難しいかもと言った。

軽音部などがぴったりだと思うのだ。妹には自分と同じように素晴らしい音楽の時間を味わってもらいたい、姉として。

後輩が増えることにも繋がるし、友達を誘ってわいわいと部活をやるのも楽しいかもしれないと唯は考えた。

そう思って何度か誘っても「うん、考えとくね！」の一言で済まされてしまう。もしかして、全く興味が無いのかもしれない。その割には、よく唯が語る軽音部での出来事をうんうんと頷いて聞き入ってくれるのだけど。

「後輩かー」

次の新歓ライブでこの部活に入りたいと思わせるようなモノを見せなくてはならない。何にしろ、この先の軽音部の存続がかかっているのだ。

練習しなくては、と思ったが吉日。否、即行動の人、平沢唯はがばっとソファから立ち上がると、どたどたと自分の部屋に駆け上がっていった。

鈍りきった人差し指と中指に渇を入れなければならない。その前

に瞳をもう一度そっと閉じてみる。
あのステージでの興奮がほんのりと体に広がった気がする。もうすぐ夕飯だということはとうに頭の中から消えていた。

★　★

「お嬢様。こちらでよろしいですか？」
「うん。ありがとう」
彼らは琴吹家の経営する会社の社員。今日はムギが前から購入しようとしていた機材を運び入れてくれたのだ。
ムギは新しく加わった自分の仲間に近づき、そっと木目の表面を撫でる。
「でも、これ学校に運ぶのは難しいかも」
そもそも、使いどころが難しい。何とか手に入れたこの一品こそ、レスリースピーカー「１４７」である。
ムギはハモンドオルガンの音が大好きだ。楽曲の中でも主に使用するサウンドであり、様々なミュージシャンに愛されている。
ムギはまだ自身をシンセサイザー使いとしての経験が十分ではない、と捉えていた。同じ部には自分より遙かにシンセに精通した人物がいる。ある時、彼女は自分がこの分野に一番特化していなくては、と思ったのだ。
その第一歩として、シミュレートされた物ではなく、本物のロータリーサウンドを耳に覚えさせておきたいと父を通じて手に入れようとしたのである。
他にも、自分が知らなかった小室哲哉なる人物を調べてみた。この人物が参加したアーティスト、手がけたものを全て確認して、衝撃を受けた。これほどの人間を何故知らなかったのか。あの時、自分が何も考えずに「知らない」と放った一言がどれだけ恥ずかしい

ことだったのかを思い知らされた。
何と無知なことか。ムギは何かに取り憑かれたようにあらゆるキーボーディストを調べ、その楽曲はもちろんのこと。使用機材やそのバックグラウンドにある音楽など、自分が取り入れるべきものを徹底的に探した。
今さら遅いのだが、レスリースピーカーは今すぐ必要だったのかと言われると疑問が浮かんでしまう。現在の段階で、ムギが購入を検討している機材は幾つかあった。
幾らでも欲しくなってしまう気持ちにブレーキをかけるのは至難の業だ。欲しければ、叶ってしまう身分を容易く利用してはならない。身近なプロの少年は以前こう言っていた。
『俺達は自分に必要なものを探しだし、活用していく。機材はコレクトするものじゃない』
ただ鑑賞するためのものではない、ということを言いたかったのだろう。その気持ちをムギはようやく理解した。
あまりに多くの機材を手に入れた後、それを使いこなせなければ意味がないのだ。宝の持ち腐れであり、次第に無用の長物と化してしまう。
既に増えていく機材を持て余し気味のムギは、ここらでストップしなければならないと何とかブレーキを踏むことができた。
このスピーカーを最後に、ムギは手元に集まった物とじっくり対話していくことになる。
自分次第で軽音部に新たな音が加わる。皆が求めるものに近づいていける。
そのことを考えると、わくわくが止まらない。
最近ではソフトシンセによる新たな音源を試行錯誤していたりする。持ち運びが大変になるが、自分の音楽が良くなるならそれも厭わないという姿勢だ。
「わー！　この音おかしい」
ムギは新しいおもちゃを与えられた子供みたいに昼夜問わず、の

めり込んだ。自分の知らない音使いを動画などから学んでから、すぐに真似てみる。

クラシック畑から出てきた自分が知らないフレーズ、例えばファンクやジャズを聴いてみたりもした。

爆メロが終わってからの二週間。これはムギの人生にとって一番音楽に真面目に向き合った瞬間だったかもしれない。自ら、ここまで積極的になったことは初めてだった。

本物のレスリースピーカーの揺らぎが心地良く耳に響く。ムギは鍵盤から手を離して、ふうと溜め息をついた。

「みんなどうしてるのかな」

この二週間、無事だったのは自分だけだった。

自分を除く全員が、何らかの怪我や病気をしてしまうという異常な事態の中、のけ者にされたような気がしてしまう。

「風邪くらいなら、いつでも歓迎なのに」

どこかズレた発言をぽつりと独りごちて、ベッドに倒れ込んだ。

明日は、やっと待ち望んだ練習だ。あのステージ以降、一度も合わせていない皆との演奏。

心が弾み、ベッドの上に投げ出した足をぱふぱふと動かす。

「夏音くんびっくりするかしら」

急に二段に積まれたキーボード。目の前にはマックのノートパソコン。プチ要塞を築くキーボーディストに目を丸くするかもしれない。

むしろ「やっとここまで来たか……」と偉そうに微笑むかもしれない。他の皆の反応も楽しみだ。

もう一人のギタリストは飛び跳ねて驚きを表現してくれるだろう。物静かなベーシストは手放しに褒めてくれるかもしれない。部長兼ドラマーは何と言うか想像がつかない。

「楽しみだなあー」

今年はどんな一年になるのだろうか。勉強は少しだけ難しくなる

かもしれない。その前にクラス替えがあるし、もしかして軽音部の皆が一緒のクラスになる可能性だってある。

心配することなんて何一つない。視線の先はスッキリしている。

ムギは自分にできることを、ただやるだけだ。

眠る前に明日のお菓子とお茶をどうするか決めなくてはならない。

ムギは執事と相談するべく、のろのろと部屋を出た。

第二十五話（後書き）

すっごい中途半端なところで終わったような気がします。ここで第一章的な部分が終わってすぐに二年目、って感じにしたいです。

次の本編は完全に二年生になってからの話です。その前に幕間で一話ほどいれたいですね。

やりすぎＨＴＴになりそうで不安です。

ご感想、お待ちしております。

「男と女」（前書き）

二年目を始める前に一年生の時の軽音部の様子などを掌編で書きたいと思いました。

まだ本編は更新できませんが、時間つぶしにでもどうぞ。

ちなみに時系列はバラバラです。

「男と女」

「あの噂マジだったっぽいぜ」
「うそー！？」
いつものティータイムの最中、律と唯が声を潜めて何かを囁き合っている。クスクスと笑い合う二人が非常に気になったので夏音はその会話に何気なく加わった。
「ねえ何の話？」
「いやー実はねぇー」
にやけ面の唯が嬉しそうに反応してきた。
「うへへ。一組のうしおちゃんとうちのクラスの順平くんがね……なんと付き合っているそうなのです！！」
「な……なんだって！？」
二組の斉藤順平なら、夏音も知っている。中学ではバスケットをやって体を鍛え、さらに当時はエースだったというスポーツ少年の順平は、好青年らしいサッパリとした性格の持ち主だ。クラスにおいて比較的初期の段階から夏音にも友好的に接してくれていた人物である。
今や二組の男子は皆友達のようなものであり（断言はできない）彼とはよく話す。しかし、夏音にとってこの場合問題なのは、友人にとってのそんな重要な話を一切知らなかったことである。
「つーか何で夏音が知らないんだよ？　結構仲良さげじゃんか」
ちょうど思い浮かべていた事をぐさりと律に突かれてしまった。しかし、夏音にもささやかなプライドはある。精一杯の強がりでこう言い返した。
「そういうのはプライベートな問題だから、友達だからと言ってかならず明かす必要はないと思わないか？」
「あら～？　仲間外れの匂いがぷんぷんしゅるんでちゅけどー」

憎たらしい顔をするものである。夏音は、目の前で思い切り自分を馬鹿にする女に殺意を覚えた。

「そんなことないもんね！」

「そうかなー？　だってこの情報って何を隠そう馬場っちから入手したんだけどなー」

お前か、馬場。と夏音から低い呻き声が漏れる。二組の男子・馬場やすしもまた夏音の友達のはずであった。

「や、やすしは順平と……そう、アレだ……マブダチだからね！」

「え？　その時一緒にいた男子の奴らもみんな知ってたけど？」

決定打である。律は笑いを堪えるように夏音を見ている。その顔には「知らないのはお前だけみたいだな」と書かれてある。

「……ソウカ」

しゅんと肩を落とした夏音が紅茶をすする音すら虚しい響きがした。

「ちょっとりっちゃん言い過ぎだよー。夏音くんウソだよウソ！　たしかに馬場くんから教えてもらったけど、本当は慶子ちゃんから聞いちゃったんだ」

「……そうなの？」

「うん！　たぶん男の子は馬場くんくらいしか知らないんじゃないかな？」

「チッ」

唯の言葉を聞くほどに明るい表情を取り戻していく夏音を見て、律が舌打ちをした。

「まったく律は。性格悪いって言われるぞ？」

そう言って話に参入してきた澪もやはり女の子だったらしい。あまり上がることのない恋愛話に耳をダンボにしていたに違いない。手元の雑誌のページは全く進んでいなかった。

幼なじみに窘められたものの、律はこれといって反省する素振りはない。おどけたように「ごめんちゃーい」と言った。

「そんなあなたに制裁！」

夏音は律が食べようとしていたタルトに素早く手を伸ばすと、彼女が抵抗する間もなくかっさらっていった。
「ああッ！？」
少し遅れて反応した律だったが、時すでに遅し。一口でいくには少し大きすぎるように思えたタルトは夏音の口にすっぽり詰まっていた。
もぐもぐと咀嚼する夏音は勝ち誇った様子で律を見返す。
「ゆ、許さんっ！」
立ち上がった律はまだ咀嚼を続ける夏音の背後に回り、その首を絞めるように腕を絡めた。
怒りのチョークスリーパーが決まると、夏音は口の中の物を吐き出しそうになる。何より呼吸ができないので、たまったものではない。
「りっちゃん新しいのあるから！」
夏音を救ったのはムギの一声であった。箱からもう一つタルトを取り出したムギに律は素早くそちらに飛びつく。
「ゴホッウボェッ」
ぐちゃぐちゃになったタルトを衆目の前に出すわけにはいかない。夏音は口の中の物を紅茶で流し込んで咽せた。
「さいあく」
冷め切った澪の一言は意外に効いた。
「それでそれで？」
その場を見事に収めたムギがきらきらとした瞳で話の続きを望んだ。お嬢様もしっかりと気になっていたらしい。
「こないだ手をつないでデートしてんのを目撃したんだってさ！」
「きゃー！」
と唯とムギが悲鳴を上げる。
「それってラブラブってやつですかね琴吹さん？」
「そのようね平沢さん」
真面目ぶった口調で戯れる二人は興奮しきっている。

「でもそういう話ってあまり今までなかったよなー」
律の感想に確かにと頷く。共学化したとはいえ、桜高は男子生徒の数が少ない。他の高校のように浮いた話というのがなかったのだ。
「なるほどねー。青春って感じだねえ」
男女の付き合い、というものは青春を構成する上で重要なファクターであるに違いない。自分はそういうものに縁遠いと思っていた夏音も他人の恋愛話には興味がある。
「付き合う、かー。中学の時は結構まわりにカップルいたよね」
「唯ちゃんは男の子と付き合ったことってある？」
「ない！」
「威張ることじゃないけどなー」
「そう言うりっちゃんはどうなのさ！？　そこんとこよろしく！」
一気に注目を浴びた律は少しぎょっとした様子で、慌てたように否定した。
「ないない！　中学ん時って今以上に男子も友達って感じだったし」
「律はこれでも結構モテてたんだぞ」
澪が出した新事実にその場が一気に色めき立つ。夏音は思わず姿勢を正して、律の方を向く。
「それは真かな？」
「余計なこと言うなよ澪！」
少し顔を赤らめた律が澪に抗議する。その時、ムギと唯、夏音の三名の瞳からきらりんと怪しげな光が放たれた。
「ほほーう。りっちゃんがモテてたとな？」
「これはゆゆしき事態ね」
「神妙に語るがいいさ律！」
眉間に皺を寄せて自分を見詰めてくる三人に、律は怯んだ。
「そんなことないって！　ほんとに！　誰かとそういう感じになったこともないってば！」
「りっちゃん……本当のことを言うのです。おいちゃん、本当のこと言ってくれないと困るんだよー。おいちゃんを早く帰らせてくれ

よ、なー？」
　取り調べのつもりだろうか。律の真横に立ち机に手を置いた唯。心なしかドラマで見るような取り調べ室の頼りないデスクライトの光が見えるようだった。
「私、やってません！」
「証言があるんだ！　ここで言い逃れようとしてもいつか分かることだぞ？　ん？　腹減ったか？　何か取ってやろうか？」
「ハイ！　カツ丼！　私、カツ丼がいいです！」
　ムギが挙手して訴える。
「いや、何でムギが頼むんだよ」
「えへー。一度、やってみたくて」
　ムギのボケによって取り調べ室の空気が一瞬で霧散してしまった。何故か途中までノリノリだった律は観念したように思い切り溜め息を吐いてから苦々しげに語り出した。
「別に本当に何でもないんだって。何か一回だけ告白？　みたいなのされただけ」
　だけ、と言うのが言い終わらないうちに「うそーー！？」という大声で唯とムギが律に向かって身を乗り出した。
「告白されたのりっちゃん！？　すごーい！」
「その男の子って格好よかった？　年上？　年下？　何て言われて告白されたの！？」
　大盛り上がりである。バツが悪そうにする律は嫌そうにそれらに答えた。
「いや、普通に。付き合ってみないかって言われたけど」
　ムギは頬に手を当てて「まあー」と。唯は「うほおー」とよく分からない感嘆を漏らす。
　じっとそれらを聞いていた夏音もショックだった。せっかく律に告白する男の子がいたというのに……
「律……もったいないことを」
「どういう意味だよー！？」

夏音はさっと目を逸らした。まさかこの先、もう無いんじゃないかとは言えなかった。

「ふん。律のこと全然知りもしないのに、何となく告白しただけって感じだったよ。好きになった理由が可愛いし元気だから、だって。そんな理由で付き合うなんて馬鹿みたい」

それまでムスっと黙っていた澪がぺらぺらと口を開きだした。

「澪ちゃん……」

ムギが何故か嬉しそうに横にいる澪を見る。

「な、なにその目は！　私は別に！　親友が変な男にひっかからないかなって心配なだけで！」

「澪しゃん……」

ニヤニヤして澪を見詰める唯の視線に堪えきれなくなったのか、澪は手元の雑誌で顔を隠してしまった。

「い、いやー。澪に心配されんでも普通に断ったしなー」

先ほどより、今の方が百倍恥ずかしいと言わんばかりにオロオロする律だった。

「り、律は男にも気安すぎるんだ。だから変な男に告白されちゃうんだからね！」

雑誌の影から続ける澪だった。

「なんだかお父さんみたいね澪ちゃん」

「つーか澪にソッチ方面で心配される律ってのが最高に面白いだけど」

好き放題言われてぷるぷると腕が震える澪。今、隠されたその顔は羞恥によって真っ赤に染まっているにちがいない。

「わ、私の話はもーこれでおしまい！　そうだ夏音！　お前こそ何かないのか？」

自分にお鉢が回ってくるとは、と夏音は軽く後悔した。今まで律を面白く責め立てていただけに、復讐を誓う彼女の瞳は爛々と輝いている。

女子とは怖い、と思うのはこういう時だ。

「ひ・み・つ」
「で許されると思ってないよな？」
即答してきた律は根に持つタイプに違いない。
「ねえ、どう思う？　俺が……女の子と二人並んでる姿を想像してみてよ。どこでもいい、ショッピングモールでも、クリスマスの街でもいい。女の子と手を繋いで歩く俺の姿を、想像してみてよ」
懇々と話す夏音の言う通り、一同は想像してみた。
しかし、脳裏に描かれたその風景はどう見ても……。
「……ごめん、夏音」

仲が良い女の子同士が二人歩いているようにしか見えないや、と言うだけの勇気は誰も持ち合わせていなかった。

「校則の問題」

その日の練習は、唯の使用するギターアンプのヒューズが飛んだことで終了した。ちょうど予備がなかった為、どうすることもできなかったのだ。茶菓子も底をついたので、外で寄り道していくのもいいかとオープンしたばかりのファミレスに行くことになった。少し遠いので、ひとまず帰宅して着替えた夏音の車で行くことになった。

「あ、先生奇遇ですね」

「何やってるのあなた達？」

デザートメニューが豊富と噂に聞いていた通りだった。一同は満足して店を出ると、夏音の車に乗り込もうとした。見覚えのある軽自動車があるなと夏音が思っていたら、運転席のドアがちょうど開いて我らが軽音部の顧問が現れたのだ。

「あれ？　先生まだ学校じゃ……」

「ぎくっ」

浮かんだ疑問を口にするムギに、あからさまに動揺してみせるさわ子。皆、声に出して「ぎく」と言う人を初めて見た。

「なんかあやしい」

この場合、唯のその言葉が的を射ていたのだろう。生徒に訝しげな視線を向けられたさわ子は「失礼ね！」と逆ギレした。

「こういう所は生徒がたくさん訪れるでしょ？　先生方はそういう所を見回りにくる必要があるの！　そこで素行の悪い生徒を発見したら注意したり、タバコなんか吸ってたら補導しなくちゃいけないの！　ついでにお茶でもしてサボろうとなんか思ってないんだからね！」

「見事なくらい語るに落ちるってのを体現してるよねこの人」
本音が明らかになってしまったところで、開き直ったのかさわ子は「あなた達こそ寄り道して！」と教師の顔を出してきた。大人の強かさを垣間見た。
「別に寄り道がダメなんて校則ないじゃん～」
「そうだそうだー」
怒られることへの理不尽に抗議の声が上がる。
「口答えしないの。校則では禁止してなくても、こういうのはあまり認められることじゃないのよ。あなた達はあくまで桜高の生徒で、学校外で起こったトラブルは全て学校側に連絡がくるんですからね！」
正論をかざしているが、この教師。つい今までサボろうとしていたことを完全に忘れているに違いない。
「じゃあ勤務時間中にサボってる教師を見つけた時はどこに連絡すればいいんですかー？」
痛いところを巧みについた律に、「ぬっ」と反論の余地すらなかったさわ子は新たにこの生徒達を注意できる要素がないかを必死に探った。実際、それは探すまでもなく目の前にあったのだ。
「待ちなさい。堂々としすぎて気付かなかったけど……何で車で来てんのよ!?」
もっともな指摘である。
流石にそこをスルーしてくれないかな、と願っていた軽音部の一同の内心は穏やかではなかった。
「誰の車？　誰かのご両親と一緒なの？」
「あ、えーとお父さんが来てて……今ちょっとトイレに」
目が泳ぎまくりの唯が答える。
「そう？　じゃあ挨拶しないといけないわね」
「か、かなりお腹痛そうだったから当分戻ってこないと思うかなー」
「そう？　って嘘おっしゃい！　夏音くんの手元にあるソレはなによ！」

さわ子が指さした先には車のキーと思われる物を片手にぶら下げる夏音の姿が。
「まさか私の部活の生徒が法律違反だなんて……」
顔面蒼白のさわ子の目の前に夏音は免許証を掲げた。
「あら、これ本物？」
「その法律とやらをもう少し勉強した方がいいんじゃないですか先生？　俺は十七歳だし、日本でも運転できるようにちゃんと手続きは済ませてあります」
「もしかして、これあなたの車？」
目の前のハイエースを指すさわ子。
「そうですけど？」
それが何か？　と悪びれない夏音。
「くっ、ねたまし……じゃなくて！　うちの校則わかってるの？　生徒は原付でも免許を取ってはいけないの。受験が早めに終わった子とかが毎年こっそりと教習所に通ったりするけど、基本的に在学期間中の運転は認められてないわ。特例はあるけど、あなたの場合はそれから外れてるの」
「よく分かったけど……でも俺が免許取ったのって向こうですよ？　特に法律に抵触したわけでもなし。正当な権利を誰かにどうこう言われる筋合いはないです」
すらすらと出てくる反論にさわ子は困ったように笑った。
「確かに免許取るな、とは言っても法律的に認められている権利を強制的にどうこうする権利はないけどね。あなたは向こうで取ったわけだし、すごく難しい問題ではあるけど……とにかく立ち話も難よね、中入らない？」
話が長くなると思ったのだろう。さわ子は今出てきたばかりの軽音部をもう一度ファミレスの中に押し込んだ。
お茶くらいオゴるというさわ子の言葉を聞いても、表情が晴れる者はいなかった。今まで頼りにしていた夏音の車が今後使えなくなる可能性が高いのと、もしかして自分達はとてもいけないことをや

っていたのかもしれないという後ろめたさが沸き上がってきたのだ。
「一応、あなた達には説明しておくわね。桜高で自動車免許取得が認められるのは、三年生の二学期期末テスト後に進路が確定している子だけ。就職する子なんかは免許が必要になる場合があるから、そういうのが特例ってこと。ちなみに教習所に通うのも届けが必要ね。それで実際に運転していいのは卒業式が終わった後。しかも三月が終わるまでに事故とか起こしちゃったら卒業取り消しもありえるわ」
「そ、そんなに厳しいの？」
「そうよ。高校生の運転ほど危険なものはないの。いい？　世の中の交通事故を起こしているのはきちんと法律的にも認められて免許を取った大人なの。大人でさえ、そうなの」
　大人が子供に常に勝っているとは限らない。夏音はそう反論しようとしたが、さわ子の話すことも一理あるので、言葉を変えることにした。
「俺は別に卒業できなくてもいいんだけどねー」
「そういうことを言ってるんじゃないの！　もし人を殺めてしまったら？　それでなくても一生残る傷とか作っちゃったら？　責任取れるの？」
「俺、運転は気をつけてるもん」
「運転してたら気をつけてもダメな時だってあるわ」
「それは俺だって分かりますけど。それなら大人になった瞬間、運転が許されるっておかしくないですか？」
「運転することを許されるわけじゃないの。その人が責任を取るってことを認められるってことなの。今あなたが事故を起こしても家族に迷惑がかかるでしょ？」
「それは自転車にも言えることです。自転車で事故を起こしても損害賠償を命じられます」
「そうなんだけど……けど……ああ難しい。生徒指導むずかしいー」
　頭を抱えられてしまった。

「とにかく！　ダメなものはダメ！　これでいいじゃない！」
「よくあるかい！」
「もー分からない子ね！　そこまで突っぱねるならいいわよ。これを職員会議の議題にして、学校側からしーっかりとした処分を下してもらうことになるけどね！」
「それって脅迫……」
いい大人が、と夏音は目を眇めた。
「はあ……分かりましたよ。緊急時以外の運転は控えます」
「控えるじゃなくて乗っちゃだめ」
「はーいはい。乗りません」
「あなたテキトーにこの場をごまかせばいいやって思ってない？」
「じゃあ何に誓えばいいんですか？　俺の部屋にある秘蔵のアニメコレクションにでも誓えばいいの？」
「そ、それはあなたにとっての何なのか気になるけど……そうね、私としても自分の可愛い部活の生徒だもの。大事にするのもしのびないわね」
少し考え込むさわ子の言葉を待つ一同。緊張がはしり、如何なる処断を用意されるか不安になる時間だ。
「大変失礼いたします。お客様、本日お車でいらっしゃいましたか？」
「え？　あ、ハイ」
その静寂を破ったのは店のウェイトレスだった。さわ子はきょとんとした表情でウェイトレスの言葉に頷く。
「お車のナンバーは〇〇―〇〇でしょうか？」
「はい、私の車です」
「恐れ入りますが、お客様。エンジンがかかったままの状態だと他のお客様からお知らせいただいているのですが」
「え！　嘘ー！？」
その瞬間、さわ子は自分の荷物を探る。ポケットの中にもなく、ほんのり青ざめたさわ子は瞬時に店の外に駆けだしていった。その

一連の流れをぽかんとした表情で見守っていた少女達は互いの顔を見合う。
「なんだか一見すると食い逃げみたいだね」
「食い逃げ教師、つかまる！　なんつって」
などと暢気に談笑しているうちに、さわ子が帰ってくるのがやけに遅いことに夏音は気が付いた。
「ちょっと様子見てくるね」
「あ、あたしも行くー」
面白いことが起こりそうだと律が後をついてくる。流石に全員が同時に店を出るのはまずい気がしたので、他の三人は残ることになった。
「なんかトラブルかな」
「どうだろう。エンジン切ってくるだけなのに……ね、っていうか何やってんのあの人」
店を出て目に飛び込んできたのは、車の前で膝をついているさわ子の姿だった。ぺたりと地面に力無く膝をつくさわ子の姿は絶望に満ちていた。何しろ尋常じゃない様子におそるおそる近づいた二人はそっとさわ子に声をかけた。
「ど、どったのさわちゃん？」
「……インキー……」
「え？　陰気？」
「インキーしちゃったよどうしよー！！？」
夏音の腕にしがみつきわんわんと喚くさわ子。夏音は「いんき？」と最初はよく分からなかったが、よく考えて「ｋｅｙがｉｎ」と置き換えて理解した。
つまり。
「鍵締まっちゃってるんですか、これ？」
律が試しに運転席のドアに手をかけたが、ロックされているようだ。
「どうしてこういうことに？」

「私……リモコンの電池なくなったから車出る時は中のロック締めて出るようにしてたの。いちいち鍵穴に挿すの面倒くさいし……わかるでしょ？」
「あなたが極度の面倒くさがり屋だってことは分かったけど」
「うぅ、言わないでぇ……」
「しかも……え？　馬鹿じゃないですかコレ！　ＯＮにしてるけどＳＴＡＲＴさせてないじゃないですか！」
「え、どゆこと？」
セルモーターが回る音が聞こえないことを訝しんだ夏音は運転席を覗き込んだ瞬間に驚愕のあまり大声を出した。律が首を傾げる。
「とにかく、このままじゃバッテリー上がってしまう可能性があるんだよ」
「それはまずいな」
「エンジン切ろうと思ったのよ。ただ、あなた達の姿に気付いたものだからそのまま降りちゃって……それでいつもの癖で車内でロックをば……」
しくしくと説明するさわ子に夏音は溜め息をついた。
「スペアはないんですか？」
「……家に置いてあるわ」
「じゃあ、取りにいくしかないですね。俺の車で行きましょう」
「ちょっ。それはダメよ！　さっきまで何の話していたか忘れたの？　ここで私が生徒の車に乗っちゃったりしたら……」
「じゃあ先生が運転すればいいんじゃないですか？」
「そ、それは保険の問題が……いいわＪＡＦ呼ぶから！」
「先生、会員なんですか？」
「違うけど……」
「あれ会員じゃないととんでもないお金取られますよね。それより素直に俺の車に乗った方がいいんじゃないですかー？　大丈夫、安全運転に努めますから」
夏音は鬼の首をとったかのように誇らしげな顔をしている。目の

前に餌をちらつかせ、さわ子を惑わす言葉を繰り出す夏音に、さわ子は逡巡する。
「どうするのさわ子……ここでハイなんて言っちゃえば教師としての立場が……威厳が！」
「あ、威厳とかはもう無いと思います」
「でもバッテリー上がったら大変だし……友達はたぶんすぐ来てくれる人なんていないだろうし……先生方に頼むのはもっての他」
「先生！　こうしている間にバッテリーあがりますよ！　早く！　早く早く！　Ｈｕｒｒｙ！！」
深く考えさせてはいけない。夏音は追い立てるようにさわ子を急かした。人間とは不思議なもので、大声で急かすだけで冷静さを欠いてしまう。
結局、問答の末にさわ子が選んでのは生徒の運転する車の助手席にすっぽり納まる道だった。結局、夏音の提案を呑むことになったが決断するまでに死ぬほど悩んでいたのは、本人の名誉のために記しておく。

「くう……何でこんな良い車に乗ってるのよ。私なんてローン組んでも軽で精一杯だってのに……これが格差ってやつなのね」
「変な納得の仕方をしないで欲しいです」
車内には運転する夏音と隣に座るさわ子しかいない。軽音部の皆は、すぐに戻るからとファミレスで待機してもらうことになった。律や唯などは車に同行したがったが、今回は事が一刻を争うものなので、遠慮してもらった。
「どうです？　安全運転でしょ」
「まあ、たしかに運転は上手いけれど……」
それはさわ子も認めるところであった。夏音は単純な運転技術だけではなく、運転する上での判断能力に非常に優れているといってよかった。
実際に車を運転する上で一番重要な要素が判断能力だったりする。

どれだけ技術があっても、判断能力が乏しい人は些細な判断ミスで事故を起こしてしまう。
さわ子が見た限りでは、そういった心配を感じることのない運転である。
「あっ、そこの信号左ね。こっちの方が近いの」
夏音はカーナビが示す道筋を行くと少し遠回りになるから、と言うさわ子の指示に従う。
「アメリカでは、の話ですけど」
「ん？」
「どこに行くにも車が必要だったりするんです。州によっても違うけど、車の運転はやっぱりできた方がいい。だから学校で授業に組み込まれたりもするんですよ。俺は自分で運転する必要があまりない環境にいたけど、まあ取っておけって言われて取ったんです」
急に語り出した夏音の話にさわ子は静かに耳を傾けていた。視線は前を向いたまま、夏音の運転に身を委ねながら。
「コレさえあれば、一人でどこにでも行ける気がするんです。それにみんなと一緒にどこかに行くのは好きです」
「……そう。あ、二つ目を右ね」
そのことに関してさわ子はコメントすることはなかった。もしかすると、「アメリカと日本では違う」なんてことを考えたかもしれないが。
さわ子の住むアパートから鍵を取ってファミレスに引き返す間は特に会話もなかった。夏音は安全運転に努め、少しでも評価が高まるように気を遣いながら、皆の待つファミレスへと車を走らせた。
「よかったー。バッテリーなんとか持ったー。これ中古だからバッテリーも危ないかもって感じだったから……」
エンジンを切った瞬間、安堵したのかさわ子は満面の笑みを浮かべて振り返った。
「まったく。さわちゃんは怒る時もいまいちしまらないよなー」

「うぅ……言い返せないのが情けない」
偉そうに言う律を澪がこっそり窘めた。
「おい、仮にも先生なんだからほどほどにしろよ。それにさわ子先生次第で夏音の車が……」
あ、と声に出した律。忘れていたのか、と夏音は少々恨みがましい視線を送った。
「そうそう。夏音くんの車についてなんだけど」
「はい」
「……本当は教師として、っていうか大人としてダメなんだけど。たまーーーーに乗るくらいなら、私は何も言わないことにするわ」
「本当っ！？」
何故か唯が喜びの声を上げた。夏音は何となく、さわ子がそんな風に言ってくるような予感がしていた。
助手席に乗ったさわ子が自分の運転をしっかりと見ているのは気付いていた。生徒の運転する車に乗ることが彼女にとってどれだけ恐ろしいことなのかは想像に難くない。夏音が事故でも起こして巻き添えを食らったらそれでおしまいだ。怪我を負うかもしれないし、人生が終わってしまうかもしれない。
万が一怪我で済んだとしても、そのシチュエーションが明らかになったら彼女の教師生命も終わりになるかもしれなかった。
危ない橋を渡ったさわ子は、自分の運転を見て判断しようとしたのではないかと夏音は考えた。
山中さわ子という人間の人間性を過大評価しているつもりはないが、いくらお金がかかるとしても、こんなシチュエーションでもない限り、さわ子は業者を呼ぶのではないだろうか。
何の理由もなく、夏音の車に乗ることはなかったのでは。
本当に切羽詰まっていたというのもあるだろうが、彼女は夏音達のことを考えてもっと踏み込んだ上で判断をしようとしたのかもしれない。
（買いかぶりすぎかな？）

「さわちゃん太い腹ー！」
調子づいた律の褒め言葉が勘に障ったのか「それ褒め言葉と同時に貶してるの！？」と笑顔で律の肩に手を置いた。デスデビルモードのさわ子には、流石の律も大人しく謝った。
「ただ、言わせてもらうけど。他の先生にバレたり、もし貴方がこれで事故なんか起こしても私は一切かばわないわよ。全て自分の責任で、ね」
「そこら辺はしっかりと分かってますよ。任せてください」
「でも、ほどほどにしなさいよ。学生なんだから自分の足で行けるところは楽しようと思わないで歩いていきなさい。交通機関を使うのも立派な社会勉強なんだからね」
「はーい」
皆、素直に返事をした。さわ子の言葉は十分に理解できるものだ。ようやく教師と生徒の関係らしいやり取りができた気がする。
「じゃ、気をつけて帰るのよ。今日はもう寄り道しないようになさい」
さわ子は見回りするには時間がかかりすぎたと言って、これから学校に帰るらしい。皆、手を振ってさわ子を見送ると自分達も帰ることにした。
「あっ」
「どうした唯？」
「先生オゴってくれるって言ったのに！　結局、お会計したの私たちじゃん！　ていうか先生の分も払ったよ！」
色々と慌ただしかっただけに、さわ子も忘れていたのだろう。
「……立て替えた分、俺で持つよ。いくら？」
「四千円」
「高っ！？　何でお茶だけじゃん飲んでたの！」
「えーとレシートにはこう書いてるよ。ベンティアドショットヘーゼルナッツバニラレイラアーモンドキャラメルエキストラホイップキャラメルソースウィズモカソースランバチップチョコレートクリ

ームフラペチーノデラックスオーバーザレインボウ、先生こんなの頼んでたんだね。１４５８円だって」

「……あの人は」

結局、夏音が払うことになった。後日、平謝りしてきたさわ子からのお金を夏音は頑として受け取らなかったという。

「校則の問題」（後書き）

ちょっと無理があるかなーと思った次第です。大人としては、やっぱりそこは見逃さないかなーって。

でも、さわ子だったらという淡い期待をよせて書き上げてしまいました。

車なかったら普通に不便ですものね。

第一話『私たち二年生！』（前書き）

このお話から軽音部は二年生となります。これから第二章として捉えてください。

そして今までサブタイトルはシンプルに「〇話」といった感じでしたが、きちんとサブタイトルをつけてみようと思います。

時間が空いた時に今までのやつもまとめて変えますので、よろしくお願いします。

第一話『私たち二年生！』

始業式の当日、学校は大変な賑わいであった。部活動に所属していない生徒は実に一ヶ月ぶりの登校となり、そうでない生徒も春休みをまたいで再会する顔ぶれを見て気分が高揚しているようだ。

日本の高校は教室が固定され、クラスという概念が大きい。アメリカのようにどんな授業でも教室を移動して受けるものではなく、授業を受けるために教室を渡り歩くといった風景はあまり見られない。授業の組み合わせによっては一日の全ての授業を教室で受けることもあるくらいだ。

授業と授業の合間は次の教室へ移動する時間ではなく、休み時間と銘打たれて次の授業に向けての休憩する時間である。座席も固定され、生徒は固定された教室の中でさらに固定された空間に自分を置くのだ。

例えば、両隣に座る人間が生理的に受け付けることができない輩だったら？　はたまた、教室内に誰一人として知り合いがいなかったら？

それを苦痛という。

一年間もその状態が続くのかと思えば、ぞっとするものがある。

シャイな心根を抱えた日本の生徒諸君はこの新学期という門をくぐり抜ける時、否応なくそんな懸念を持っているであろう。一方で期待に心が躍っている者、やはりその一方で胸がざわつく者も等しくいる。

自分の、これから一年間を左右するかもしれない運命の采配をその目で確認するために、多くの生徒はとある場所に集まっていた。

下駄箱をくぐり抜けると、生徒の海。

「また一緒だねー！」「赤井先生が担任かぁ～」「友よー！」などという言葉がそこいらで聞こえる中。

ただ一人、声にならない悲鳴を上げたまま夏音はふらふらと人の波に揉まれて後退していた。やっと開けた場所に辿り着いた時には膝をついて崩れ落ちた。

「Ｗｈａｔ、ｓ　ｔｈｅ　ｆｕｃｋ……」

ぼそぼそと口をついて出た驚愕を表す一言は誰の耳にも届かず。ぽん、と肩に手を置かれた彼は「ほっといてくれ」と慰めてくれた誰かに内心呟いた。

「その気持ち……ワカル」

おや、と顔を上げると悲痛な表情を浮かべて自分を見下ろしているのは見慣れた顔だった。

「澪も？」

「……私、一組」

「俺……俺……三組」

孤独な二人はがっちりと互いの手を握りしめて頷いた。

「……っ」

頷き合ったところで、別に何の言葉もなかったのだが。何かシンパシーを感じたことは間違いないので、両者は仲間がいたことを素直に喜んだ。

「寂しくなったらいつでも遊びにきてもいいんだよ！　うるうる…」

胡散臭い効果音を口で言いながら澪の肩に手を回した存在がいた。

「私は小学生か！」

手を振り払った澪は偽りの涙を浮かべて口許をにやつかせている幼なじみを睨む。

「律こそ私と離れて大丈夫か？　もう宿題見せてやれないぞー？」

精一杯の強がりを見せた澪を応援する気持ちで夏音も大いに頷いてやった。

「へっへーん！」

澪のささやかな反撃は相手に微塵も効いていなかった。得意気に鼻を鳴らした律はムギの手を取り、偉そうな口調で言い放つ。

「こっちにはムギがいるもんねー！」

確かに、それは随分と頼もしいことである。夏音は「ぐぬぬ」と悔しげに唸る澪を不憫に思ったので、反撃の一手を打つことにした。

「そっちがそうならもう律には英語の宿題手伝ってあげなーい！」

「んなっ！　夏音は関係ないだろー！？」

「お友達がたくさん近くにいるんだからそちらさんを頼りにしたらどうだい！　えー！？」

「ガキかっ！」

ご尤もな反論である。だが、どちらもレベル的には変わりがなかった。

「みなさーん！　おはようございます！」

低次元な争いが繰り広げられる中に爽やかな挨拶を引っ提げて登場したのは唯の妹の憂であった。

「あはっ！　似合ってる似合ってる！」

にこやかに着慣れない制服に身を包む憂をそう評価した律の言葉に夏音も同感だった。

「初々しいわね」

微笑ましそうに憂を見詰めるムギからも同じような言葉が出ると、

「そ、そうかな」と俯いて頬を染める憂は可愛らしかった。

「憂だけに初々しい、か……ふ、ふふ」と呟いた夏音の言葉は華麗にスルーされた。

ＨＲの予鈴がなったところで憂とは別れることになった。学年が上がると教室も変わるので、一同もうっかり間違いそうになりながら教室へ向かう。

「あれ、二組って二階だっけ？」

「そうだっけ。ま、いかにも上級生って感じだよなー！」

高らかに笑いながら階段を一歩一歩踏み上がる律はさらに余計な一言を残していった。

「じゃなー。一階・一組と三組のお二人さーん」

こちらを見ないで背中越しに手をひらひら。無駄に気取っているその仕草に夏音はいらっとしたのだが、それよりも背後の澪が纏った怒りの気配に戦慄した。律のからかいに対してすぐに激昂してしまう彼女にしては、重く、暗い怒りのようだ。

「……夏音……」

「はい」

「一階の私たちも教室へ向かうぞ」

「はい」

無理をして笑っているのが分かるが、非常に恐ろしい。夏音は今日の部活は荒れるかもしれないと思わず唾を呑み込んだ。

それに、いつか彼女達も気付いて羨むだろう。一階の方が楽であると。

澪と別れてから夏音は新しい教室へ足を踏み入れた。間取りは一

緒でも、やはり全く別の部屋に思えて仕方がない。
わいわいと騒がしい中、座席表を確認してから自分の席へ向かうとちらちらと視線を感じた。
この類の視線は慣れっこだった。いつだって、どこでだって自分に纏わり付くこの視線。
気にしていても無意味だし、ほとんどが他愛もない好奇の目であることが多いのだ。
夏音は現在、ぽつんと特に何もせずに佇んでいる。耳に入ってくるのは新しいクラスメート達が話す声。

「まーたお前と同じクラスかよー！」「んだよー。こっちの台詞だっつの」

「ねーねー担任やばくない？」「え、誰だっけ」「後藤だよ後藤ー。ごっちーん！」「マジー！？」

「なんか一組の人ばっかよね」「ねー」

「えーとねー。あたしぃーヨシくんとぉ一緒でよかったぁ！」「僕もだよみゆきちゃん！」

ヨシくん死ね、と思いながら夏音はそれらの会話に何となく耳を向けていた。というかそれ以外にすることがない。
知っている顔が全くといって、いないのだ。一年生の時は同じクラスの人間とは仲良くやっていたと思われる。学校外で遊ぶような仲になったのは軽音部の人間くらいだが、校内で会うと挨拶を交わすこともあり、教室で他愛無い話をすることはあった。
だから、一人でも知り合いがいれば救われると思っていたのだ。
しかし、いくら周りを見渡しても知っている顔はいない。
これが、孤独か。また友達を作るところから始めなくてはならな

いのか。思い描いていた一年がほんの少しばかり暗く色彩を落としたように感じた。
頬杖をついてぼうっとすることしばらく。
「あれ、君も同じクラスだったんだね」
耳慣れた声。飄々としていながら、どこかすっと耳に入ってくるこの声の主は。
「な、な、な、」
「な？」
「七海――――――

飛んだ机を綺麗に並べ直した。幸い、というか当然のごとくその座席は無人だった。

「俺、みんなと離れちゃったんだ」

「軽音部の？　へー」

それが大問題であるかのように語る夏音に七海は短く応える。七海にとっては、そのことがどう現状につながるかの釈明を求めたいところであろう。

「七海がいなかったら友達誰もいないよ」

「これから作るんだよ。そういう時は」

「ハードルたけー」

「何で変なところでヘタレなのかな君は。一度なつくとうざったいくらいなのに」

夏音は七海の言葉にきょとんとして目を瞬かせた。

「そういう七海はずいぶんと辛辣な口になったねー。何かあったの？」

夏音は純粋に疑問として七海に問うたのだが、痛いところを押されたように七海は顔をしかめた。

「ま、色々とね……この一年は色々ありすぎたし。それに僕もいつまでも弱腰じゃだめだと思って。こんなんじゃもうじき入ってくる

後輩になめられちゃうからね」

「後輩？　生徒会の？」

「そう。今年こそは男子をたくさん入れるんだ。どんな子が入ってくるか分からないけど、ぜっっったいになめられるわけにはいかない」

一大決心をしたようにきゅっと口を引き締めた七海は以前より精悍さが増している気がする。あくまで気がするだけだが。

そういえば、七海は生徒会で相当の苦労を強いられていると聞く。自分の一年が色々あったように彼にも色々と成長を促すようなものがあったのだろうか。

七海といえば、春休みに入る前の個人的ないざこざに巻き込んだ一件があった。完全にアウトサイダーの七海は夏音に寄り添ってくれようとしたのだが、結果的には彼の好意は思わぬことが原因で台無しになってしまったりした。

最終的に事情を全て説明することになり、夏音に関して軽音部の面々が持つものとほぼ変わらないだけの情報を七海は受け取ることになった。

それを踏まえた上で、こうして変わらない付き合いを続けてくれている。夏音はそんな些細なことが嬉しくてたまらなかった。

「七海ー。同じクラスで本当によかったー」

「わかった。わかったからべたべたしないでくれ」

何故か絡みつこうと動く夏音の手を流し、七海は変わり者の友人を呆れた目つきで見る。

「こう……学年が上がったんだから落ち着きとか持ってほしいね」

年下の友人から言われる台詞じゃないな、と少しだけ落ち込んだ夏音だったがすぐに気を取り直した。

「まあ、何にせよだよ！　一年よろしくね！」

満面の笑みを向ける夏音から目を逸らした七海はぼそりと「こちらこそ」と呟いた。

昼休みになるとメールで示し合わせて全員が軽音部の部室に集まった。新しくできた友達の話や担任がどうのこうのと盛り上がった。

「あぁ～もう！　新入生の子たちが初々しくて可愛いよー」

そう言って身悶える唯は無類の可愛いもの好きである。可愛い、と思う対象の範囲が広すぎて他人を置いていくこともあるが、今回は割とまともに共感することができた。

「そうねー。どこかオドオドしてて、上級生とすれ違う時にちょっとだけ緊張してるのがわかるの」

「向こうにとっちゃ高校の先輩だもんなー。私らもあんな感じだったのかもな」

「確かに。中学の時もそう思ったけど、先輩方ってやけに大人って感じがして少し怖かった気がする」

「ふーん。そんなものなんだ？」

それぞれの話を聞いても夏音には少し理解しがたかった。アニメやマンガから学んだ「先輩・後輩」という言葉。日本でどのように使われている言葉かを知識として学んだはいいが、それを自分の持つ概念とそっくりそのまま置き換えることはできなかった。

アメリカの学校でも年上の存在はそこまで気安いものではなかったが、日本ほど上下の関係というものが意識されることはなかった。どちらかというと年上にとって年下はからかいの対象であったりして、小学校の時などはスクールバスなどで意地悪をされることなどはあった。今となっては懐かしい思い出で、所詮は子供のやることだと納得している。

「そっか。夏音は先輩後輩っていうのあんまわかんないんだ？」

律が感心したように夏音を見る。

「わからなくはないけど、みんなとは捉え方が違うかな。学年が一つ違うだけで道を譲ったりとか、何でも言うこと聞かなきゃ、みたいなのは信じられないもの」

「んー、そういう極端なのはあまり無いと思うけど。ここ元女子高だし」

「でも男の子の上下関係ってなんか厳しそー。先輩ちゃーっす！焼きそばパン買ってきましたー！　みたいな？」

「んなベッタベタな」

唯のとぼけた発言にその場が笑いに包まれる中、ただ一人夏音だけは青い顔をして震えていた。

「……三分ルール……焼きそばがダメならかつロールでも可……」

膝を抱えてぶるぶると揺れている夏音に驚愕の眼差しを向ける一同。

「え、と……なんかヤバイ過去を思い出させちゃった？」

夏音の空白の過去に何があったのか。その詳細まで知らされてなかった一同は夏音の様子から壮絶なものを感じて、各々のおかずを一品ずつ与えるのであった。

しばらくして夏音が回復してから、話題は真面目な方へと転換した。

「つーか新歓ライブどうしよっか……」

滅多に使われないホワイトボードの前に立った律が口火を切る。

「構成は爆メロと同じでいいんじゃないの？」

せっかく、あれだけ練習を積んだのだ。完成度の高いものを見せてやりたいという気持ちから唯が提案した。

「そのことなんだけども」

異論を挟んだのは夏音である。

「音圧命の曲は本番のセッティングじゃ迫力が足りないと思うんだ。

高出力のアンプはあっても、どでかいスピーカーの準備までは手が回らない」

毎度のごとく、校内で行うライブはスピードが求められる。与えられる時間は少なく、僅かな時間の中を素早く準備に動く必要がある。全員が全力で動き回ってやっと、である。

「それで考えたんだ。今回はヴォーカル俺じゃなくていいかな？」

「はぁっ！？」

夏音の発言に驚きの声が上がる。当然の反応だと覚悟していた夏音は先を続けた。

「今回は新入生を楽しませるっていう目的もあるんだし、８ビートの観客が乗りやすい曲を中心にした方がいいと思うんだ」

四つで割れない拍が連続するような曲だと観客が疲れてしまう。そういう音楽に慣れない者が大半を占めであろうことが予想されるので、その主張はあながち外れていない。

「俺達のライブの目的。そして聴いてくれる人達の目線を思い出してよ。あまり音楽を深く知らないような子もいるだろうね。楽器演奏にどこか難しいイメージを持っている子だってたくさんいるはずだよ。ただ格好良いなーって圧倒させるだけじゃだめなんだ」

あくまでも、歓迎するためのライブ。そして、興味を持ってもらうためのライブである。自分もあの輪の中に入りたい、そう思わせなくてはならないのだ。

「セットリストをほぼ一新させよう。個人的にはクマは残そうかなと思うんだけど、どうだろう」

「ちょ、ちょっと待て。言いたいことは分かるけど、肝心のヴォーカルを代えるってのはどういうことだよ？」

「澪か唯。どっちかにやってもらいたいと考えてる」

指名された二人はたまらず驚愕の叫び声を上げた。

「む、む、無理ー！」

脊髄反射のごとく素早さで拒絶を表したのは澪であった。その脳裏には去年の学祭のトラウマがまざまざと蘇っていることだろう。すぐにガクブルし始めた澪であったが、一方の唯は口を大きく開けたまま固まっていた。

「わたし？　なじぇ？」

「唯は最初ギター弾きながら歌えなかったよね」

「ほぇ」

「でも特訓で歌えるようになった。今や唯のコーラスは欠かせないくらいだし、これを機会にメインで歌ってもいいんじゃないかと……せっかくだし」

「せっかくって何じゃらーーーっ！？」

少し遅めのパニックが訪れた。頭を抱えておろおろする唯と同じ

ように震える澪。
　両者の反応を見た律が困惑した様子で夏音に訊ねた。
「二人ともこんなんだし、無理じゃないか？」
「んー。無理かなーいけると思うんだけどな」
「私もそれは急すぎるかなって思うかな。新歓まで時間が少ないし、そういう案も面白いと思うけど、今回は今まで通り夏音くんが歌うようにするのではどうかしら？」
「ムギっていう手もあるんだけど？」
「えぇー！？」
「まー冗談はさておき。爆メロでやったような曲はどれも俺が中心になって作った曲がほとんどじゃない？　でも、俺が今回のライブにぴったりだなって思うような明るくてノリノリな曲ってほとんど俺のアイディアじゃないんだよね」
　軽音部で最初に作った曲、ふわふわ時間含めてムギが提案したアイディアが元になっている曲は少なくない。
「曲自体があまり難しくないから、少し練習すれば本番に出せると思うんだ。それに、せっかくなんて言ったけど二人に歌ってもらいたいって前から思ってたのは本当」
　その言葉と真剣な面差しに泡食っていた澪と唯が顔を引き締めた。

「二人って全然違うタイプの声質なのに、絶妙に噛み合うんだよ。この二人でツインヴォーカルってアリかなって考えてたんだ」

「それ……本気なのか？」

訊くまでもないと分かっていても、澪は確認のために夏音に訊ねた。

「もちろん冗談では言わない。考えておいて欲しいって言うには時間が少ないから、できれば今答えが欲しい」

「私は……私はヴォーカルっていう柄じゃないと思う」

人一倍臆病で、アガリ症であることを自覚している澪。歌は、バンドの全てと言って差し支えない。誰もが歌を聴き、歌う者に視線を送る。

目立つことが好きな者ならいざ知らず、自分のような消極的な人間にはつとまらないだろうと澪は考えていた。

「今のままでバランスが取れてるんだから、いいんじゃないのか？」

伏し目がちに視線を送ってくる澪に夏音は少し表情を曇らせた。くっと眉間に皺が寄るが、すぐにそれを崩した。

「唯はどうなんだい？」

何か真剣に考え込むように腕を組む唯に矛先を変えた。唯は夏音に話を振られても、しばらくじっと黙ったままだった。やがて、それを辛抱強く待っていた夏音に答えを出した。

「私、やりたいっす！」

力強い眼差しだった。ふんすっと息を放つと、唯は自分の決意を語り出した。

「私歌うの大好きだし、ほんとはヴォーカルもやってみたかったんだよ。でも夏音くんがいるのにやりたいなんて言えなくってさ。なんか諦めかけてたし、そんな希望からどんどん離れていっちゃってる気がしてたもん。ていうかコーラスでもいいから歌ってるからいいや、って思ってたくらいだし」

すらすらと語られる唯の言葉は意外や意外と誰もが目を丸くして聞き入った。

「えへへ……夏音くんに褒められるとなんかやれるかもって思ったけん」

照れ隠しなのか語尾がおかしかったが、どうやら唯はやる気十分らしい。夏音は顔を輝かせて唯を見詰めた。

「唯！」

一つの決断をした唯に夏音は尊敬の念を抱いた。なかなか思い切ることができない人が多いだろうに、彼女はこうもすんなりと自分の意見を受け入れてくれた。そして彼女の言葉に自分への信頼を感じ、誇らしくも思った。

「ありがとう……恩に着る！」

「どえらい語彙が出たなー」

思わずがくんとこけそうになった律だった。

「あたぼうよってやんでい！」

二人は何かと波長が合う二人だったりする。感激する夏音が今にでも唯の手を取ってくるくると踊り出しそうな勢いだった。

一方、話がどんどん先に進んでいく中を取り残されたような気持ちでいたのが澪だった。

唯は夏音の期待に応えると言った。澪は逃げようとした。

こうも重大なことをさらりと決断してしまう唯の度胸は純粋にスゴイと思わざるを得ない。喜びの輪ができあがっている中に、自分はいないと澪は感じていた。

「さー。唯は承諾してくれた。後は澪なんだけども」

一歩退いた位置から気まずげに見守っていた澪は「へっ？」と間の抜けた声を出した。テンションゲージを収め、一転して冷静な口調で話を戻した夏音は作戦を変えることにした。

「こうしよう澪。とりあえず……とりあえずだよ？　もしものために澪もヴォーカルの練習をしておこう。いつでもヴォーカルができるように。唯の喉が潰れるかもしれない。ついでに俺もなんか歌えなくなるかもしれないね？　そういう時のためにもう一人歌える人がいればいいし。それに澪の心が整った時まで待つからさ、ヴォーカルをやってくれないだろうか」

「と、とりあえず？　新歓では歌わなくていいのか？」

「もちろん。とりあえず、だからね。とりま、ね」

夏音には最近覚えたばかりの日本語を使いたがる傾向があったりする。

「とりま！？」

「うん、とりま」

「と、とりまか。とりまなら……」

とりあえず。その魔法の言葉の響きにぐらりときた澪であった。後回し、というコマンドは誰しもが魅力的な選択肢の一つとして懐に抱えているものである。

夏音はその弱い部分を巧妙につっつくことにしたのだ。

現に澪の内心は揺れまくっていた。

唯があれだけ度胸を見せた後で、自分が頑なに否定し続けるのは空気が読めていないような気がする。だが、「ハイじゃあ次からお願い」というのも素直に諾と言い難いものがある。

ただし。ちょっとずつ慣れていった上で「いつか」歌うことくらいあってもいいのではないか、そんな風に思い始めてしまっていた。

「そ、それなら……そこまで言うなら、や、やってみるのもやぶさかじゃない……かな」

いつの間にか肯定の言葉が自分の口から出ていることにも気付かず。

澪は結局、まんまと夏音の提案を呑み込んでしまったのだ。

「じゃあ決定ー！！！　そういえばドラムとキーボードのお二人さ

んはなんか意見はありますか！」

「いや……私は特にないけど」

「澪ちゃんと唯ちゃんのツイン……最大の絡み所に現れる私のコーラス……ありかも」

ぼそぼそと呟くムギの隣でそれらを耳に入れてしまった律は「ムギ……」とがっくりうなだれた。

「じゃあ早速今日から練習だね！」

「おーっ！！」

「でも、何か忘れてない？」

「何だっけ」

「何かあった気がするんだけど……ってあーっ！」

澪が唐突に叫び声をあげた。

「新入生勧誘のチラシ配りっ！！」

「……あっ」

「うわー。人でいっぱいだー」

部室を飛び出して一同が訪れたのは一年生の教室が並ぶ廊下。既

に上級生の姿が至るところに見られ、勧誘活動が行われて大盛況である。

「やっぱり大きい部活は手際が違うのねー」

ムギが感心したように漏らすと、律はその言葉にカチンときたようだ。

「軽音部だからってなめられてたまるか！　澪！　チラシは！？」

「い、いちおー作ってきたけど」

澪が自信なさげに差し出したチラシを律は奪い取るように手に取った。

「……すっげーフツー。地味。なんもそそられない」

ずばずばとストレートな感想に澪は白目を剥いてショックを表した。最近、こういうリアクションがズバ抜けてきているな、と夏音は思った。

「澪に頼んだ責任は律にあるんだからそう言わないの」

おまけにフォローにまわった言葉も遠回しに澪を傷つけた。

「なんかパンチがないっていうか……セールスポイントが全然ない！」

「でも軽音部のセールスポイントって……」

一同、首を傾げて唸る。

「即答できないあたりが悲しいね」「ねー」

「いやいや！　お茶とお菓子はおかわり自由！　素敵なスイーツライフを共に！」

「音楽はどこいったんだよー！？」

「プロのミュージシャンの演奏をＢＧＭに素敵なティータイムをいかが、とか？」

「何でティータイムがメインだよ！　ていうか俺がセールスポイントの一つってのも何だか照れるなあ……いやあっへへへ」

「気持ちわりーなこいつ。ただの例えだよ例え！　正直、私にもよくわかんねーんだわセールスポイント！」

部長が堂々と言う台詞ではなかった。軽音部に入るメリットは、と問われるとどう答えようもないのは事実だったりする。

音楽が好きなら、自分でたくさんＣＤを集めればいい話だ。楽器が身につく、というのも微妙だったりする。実際に楽器は自分の努力次第だったりセンスということもあるので、途中で匙を投げる者も多い。

それらはどの部活にも言えることかもしれないが、一番の問題はバンドということへのイメージだろう。

「バンドってあまり人気がないのかな？」

夏音がふとした疑問を口にすると、澪が難しい顔をする。

「んー。あまり自分でやるものっていうイメージはないかも。私だってベースやってたけど、最初は文芸部に入ろうとしたくらいだし」

「それは初耳だけど。でも、そうか……楽器経験者でさえ、学校の部活でバンドっていう風にはならないものか」

「私はバンドも面白そうだなーって思ったけど」

「ムギは合唱部に入ろうとしてたもんなー。そういえば、唯は何で入ろうとしたんだっけ？」

「わ、私は……その……軽い音楽だから、私にもラクショーかなーと……はい、ナメきってました完全に」

「はは！　唯らしいわそりゃ」

場が和んだところで、夏音はハッとして思い出した。

「ていうかこんな所で突っ立って話してる場合じゃないね。早く配らないと！」

「あ、夏音くんダメだ」

「何がダメだって？」

「あと一分で授業始まる」

唯の言葉に辺りを見渡すと、既に部活勧誘の人々は姿を消していた。

「とりあえず明日は絶対にやろう」

とりあえず、は後悔をも薄めてくれる魔法の言葉だった。

第一話『私たち二年生！』（後書き）

ちょっと新章から行間などを変えてみました。実験的なもので、こちらの方が読みづらいと思ったら方は教えていただけますでしょうか？

前の方がいいという意見が多いなら、戻します。

あと、どんなことでもいいので感想いただけたら嬉しいです。

第二話『ドンマイ』（挿絵あり）

「あ、メール。唯からだ」

律の携帯からメール着信音が響いたと思えば、他の三人も一斉に自分の携帯を手に取った。送信者はいずれも平沢唯。一斉送信で送ったらしい。

「なになに。『ねぼうしましたちょっとおくれます』……寝坊しましたちょっと遅れます？」

「焦ってるのが丸わかり。多分走りながら打ったんじゃないか？」

「ったく。唯はしょーがねーなー」

パタンと携帯を閉じた律が溜め息をつく。せっかく早朝に集まって練習することにしたのに、ぱっと始まることがないのが軽音部らしい。

昨日の放課後はチラシを配ろうと思って一年生の教室前に向かったのだが、肝心の一年生はとっとと目当ての部活動の見学に行ってしまったらしく。

チラシも配っていない軽音部の見学に誰か訪れることもなかった。

しかし、編成を大きく変えたことでもっと練習時間が必要だったので、ちょうど良かったかもしれない。それから放課後はずっと練習して終わった。

唯のヴォーカルは可もなく不可もなく、といった具合であった。

歌は下手ではなかったが、夏音からしてみれば発声の仕方や細かいアーティキュレーションの付け方など課題は山積みに思われた。

しかし、夏音は唯の声が持つ個性を大きく買っている。耳を素通りするようなつまらないヴォーカルとは違い、聴いた後も耳にずっと残っているような、それでいて全く不快ではない歌声だ。これはヴォーカリストが求めたところで努力で得られるようなものではない。さらにかなり高い音域まで歌えるだけでなく、普段の彼女からは想像がつかないくらい滑舌もいい。

ギターを弾きながら歌う際の不慣れな感じは仕方ないとして、これからヴォーカルをやっていく上で磨かれていけば、化ける可能性が大いに秘められていた。

一方、澪は「唯が歌う」ことによる環境の変化をかなり意識しているように見えた。コーラスを合わせる相手が変わるというのもあるが、自分にも渡された選択肢の先を一足早く進んでいく唯に焦りを覚えているのかもしれない。

どちらにしろ、良い傾向だと夏音は認識していた。

とはいえ「イケるかも」という感想はあくまで長い目で見た時のものでしかない。これを今すぐ出せる完成度ではなく、さらに練習が必要だったのだ。

新歓ライブまで時間がないため、最低限必要な練習時間を確保するために朝練を決行したのだが。

「ゆーいーまだかなーゆーいまだかなーゆいかなー」

ぶつぶつと呟いていた夏音だったが、次第に童謡風に抑揚がつけられて歌と化している。

「おい……夏音めっちゃキてるよ……これ、今日は唯地獄だろうなー」

ぶつぶつと足を踏み鳴らしながら唯を待つ夏音に背筋を何かが駆け抜けた気がした律であった。
その十分後、遅れて部室にやってきた唯は「っごめんなさい！」と扉を開けた瞬間に土下座をかました。
美しく無駄のない速攻に誰もがつい許してしまったという。

「いや～朝っぱらの学校って不思議な感じだね～」

「朝っぱらって良い意味で使うっけ？」

練習が終わり、ＨＲまで時間が余ったので恒例のティータイムを過ごしている。

「でも、なんか分かるなソレ。しんと静まりかえった廊下に射し込む朝の光……」

「おお！　詩人だね澪ちゃん！」

「何でそういうのを歌詞に応用できないんだろうね」

「何か言ったか夏音」

夏音はジャムを塗りたくったマドレーヌにかぶりついて聞かないフリをした。夏音の心は至極穏やかだった。
確かに朝から活動するのは気分もさっぱりして非常に爽やかである。練習の最中には少し血圧が上がったが、そのおかげか眠気など微塵の欠片もなく吹っ飛んでしまった。

「そういや、なんか運動部はもう一年生っぽい子が朝練に来てたみたいだなー」

「一年生か～。何人くらい入ってくれるかな～？」

「案外ゼロだったりして……」

「え、そんなのいや！　私、先輩って言われてみたいもの！」

「せ、先輩……」

夏音はその響きに身悶えた。もし、直接そんな風に呼ばれたらと考えると万感の思いに死んでしまうかもと思った。

「せんせー夏音くんがなんだかエロイこと考えてまーす」

ふるふる震えている夏音を見咎めた律がからかう。

「えー夏音くんいったい何を考えたの！？」

「いや唯。マジレスされると困る」

夏音は唯が眩しすぎて直視できなかった。

「夏音くんも男の子なのね～」

「律、お前がこの場を何とかしろよ」

勝手に誤解を始めたムギに夏音はお手上げとばかりに両手を上げて律を睨む。そんな夏音を律はどこふく風で無視した。

「後輩、かあ」

そんな戯れに参加せず、澪はふと呟いた。

「後輩ってどんな感じなんだろう」

「あー。澪は中学で部活やってなかったし、初めての後輩かー。つーか私もだけど」

「実のところ俺も後輩ってよくわかんないんだよね」

「きっと可愛いのよ～」

「私、先輩でいいのかな……」

「その前に勧誘活動しないと入る子も入らんけどなー」

「じゃあ昼休み、だね」

「いったん部室に集合しましょう」

かくして昼休みは訪れる。

「やっぱりインパクトがないよなーこのチラシじゃ」

「だから何度も言うな！」

部室に集合して配るチラシを確認する。確かに律が心配するようにチラシ自体のインパクトは小さい。しかし、必要なことは書いてある。要は受け取ってもらえるか否かの問題なのだ。

「インパクトがないならつけるまでよ！」

インパクト云々の議論に一石を投じてきたのは、予想外の人物であった。

「さわちゃん先生！」

この後、一同は秘策があるというさわ子の言葉を鵜呑みにしたことを後悔することになる。

「おい……これのどこが秘策だよ」

そのくぐもった声は豚の着ぐるみから発せられた。ただの豚ではない。デフォルメされた着ぐるみのくせに、顔のパーツがどれも微妙なのだ。普通、デフォルメするならば可愛い仕様となるはずなのだが、この着ぐるみは子供の落書きをそのまま着ぐるみにしてしまったような不細工さ加減を呈している。

同じような着ぐるみがあと四体も並んでいることの不気味さといったら、通り行く新入生達だけではなく全ての人間が自然と避けていくのが見える。

「そんで何で私が豚なんだよ！？」

「だって余ってたんだからしょうがないじゃないか」

「夏音。お前に至っては版権とかって問題ないのか！　つーか何で持ってるんだよあの人！？」

心なしか豚面が憤っているような気がしてくる。夏音に渡された着ぐるみは某球団マスコットにそっくりなのだ。人によっては「バク転してー」と声をかけてくる可能性があるくらい似ている。

「えー可愛いと思うけどなー」

真っ赤なトサカがついていることから鶏と思しき着ぐるみが言った。言わずもがな中身は唯である。完全にグロテスクな装いをいとも感嘆に可愛いと言ってしまう彼女の感性を律は疑った。

「くそー。何で犬のやつが使えないんだよ」

「破れちゃって縫合待ちだそうだ」

「馬面がよ～く似合ってますことよ秋山さん」

真面目に答えてあげた澪（ｉｎ馬）に当たる律。相当気が立っているらしい。

「みんなよく似合ってますニャー」

「ムギ……」

ベストと思われる猫の着ぐるみはムギである。本人がノリノリなので、とやかく言う者はいなかった。

各々言いたいことはあったが、喋っている余裕はなかった。他の部より出遅れているだけに、こうした活動が新部員獲得につながっているのだ。不承不承ながら、チラシ配りを開始することにした。

「け、軽音部でーす」

「明日新歓ライブがありまーす。是非来てくださいニャー」

「バンド楽しいよー……って俺のやつって鳴き声どんなの？」

「興味のある人は放課後に音楽準備室に来てください……ブ、ブヒー」

「美味しいお菓子もいっぱいあるよーコケー！」

こんな具合にぬるりと始まった勧誘活動だったが、どう考えても道行く人に不審者を見詰める目で見られていた。

「ね、ねえ澪ちゃん？」

「な、なにっ！？」

突然、隣の不気味な鶏に話しかけられて澪の肩が跳ね上がる。自分も相当不気味だということは置いといて、本人達でさえこの有り様だった。

「これって逆効果なんじゃ……」

言われるまでもなく、誰もが気が付いていた。

「私も思っていた……ずっとね」

むしろ、始まる前から。

「ちょっとお前ら！　恥ずかしがんなよ声小さいぞ！」

豚の着ぐるみが澪と唯に怒鳴る。

「このままじゃダメだな。もっとアクティブにいかないとチラシ受け取ってもらえないぞ！　ほら、全員散った散ったー！」

この状態でスタンドプレーに移行しろという律の言葉はだいぶ無茶であるように思えた。羞恥心とかいう段階を越えてやけくそになっているのかもしれない。

律の指示通り、一同はバラバラに動くことにした。

★　　★

「楽器弾けるようになりたくないですかコケー！？」

「毎日のティータイムで満たされませんかニャ！？」

「音楽好きな人は是非見学にヒヒンー！」

「明日のライブに来てくださーいド〇ラ！」

少女は友人との昼休みの散策を楽しんでいた。桜高の校舎は珍しい木造建築で、全体のレイアウトは観賞用にしても美しい。特に校務員の仕事が素晴らしく、庭師ではないかというくらい校庭のデザインが凝っている。外でお昼を食べる生徒の姿もちらほらとあり、その中を散歩するだけでも気晴らしになりそうだ。

「……何アレ」

そんな心穏やかな時間をぶち破ってきたのは、得体の知れない着ぐるみ達の姿だった。どの着ぐるみも可愛いさとはかけ離れており、夢に出てきそうなくらい歪な形成は醜怪きわまりない。

「なんか軽音部って言ってるよ？」

一緒に歩いていた友人の一言に少女は目を丸くした。

「え？　アレが！？」

この学校の音楽をやる部活動の一つが、アレ。やはり普通のセンスとは違うのだろうか。あのような勧誘の仕方はいわゆるロックなのだろうかと本気で頭を悩ませたところで、少女はぎょっとする。着ぐるみの一つと目が合ってしまったのだ。無機質な豚の瞳が自分を真っ直ぐ見詰めている。

（ちょ……何なのアレ。何でこっち見てるの何で見てるの！？　あの瞳は何なの何が宿ってるの何考えてるの！？）

少女はパニックを起こしていた。あの目は尋常ではない。あり得ない垂れ方をした目は何かよからぬことを考えているに違いないと

思った。

「い、いこうよ」

友人の声が少女を少し落ち着かせてくれた。

「う、うん」

しかし、視線を外すことができない。野生の熊に出くわしたら、一目散に逃げてはいけないとテレビで観たことがある。一度合ってしまった目を逸らすことなく、ゆっくりと後退していかなければならないのだ。

それと同じで、この瞬間に視線を外して退散しようとしたら何が起こるのか。

考えるだけで恐ろしかった。

「ちょっと！　どうしたの？」

友人は急かすように少女の腕を取って引っ張った。少女は友人の短慮な行動に舌を打ちそうになった。

彼女はまるで理解していない。ここで自分が取る行動如何によって、無事に昼休みを終えることができるか懸かっているのだ。

額から汗が流れ落ちる。

（何てプレッシャー）

あの無機質な瞳は今も尚こちらを見据えている。逃すつもりはないらしい。蛇に睨まれた蛙の気持ちを少女は味わっていた。

「そんなに気になるならチラシ貰ってくればいいじゃない」

友人の言葉など、既に耳には入らない。
動く。そう予感が走った瞬間のことだ。
豚がこちらに歩みを進めたのだ。

「!?」

走るわけでもなく、ゆったり歩くわけでもない。小走りのような速度でこちらを目がけて足を進めている。

「うわっ。なんかこっち来るよ?」

「お、落ち着いて! 大丈夫だから私に任せて」

「何を任せればいいの?」

動揺のあまり口が震えてしまった。少女は自身の足の震えを感じていた。
今すぐ逃げ出したい。しかし、一生懸命走っても追いつかれてしまったら……。
豚は着実にこちらに向かっている。
どうするべきか。
進むべきか退くべきか。

「あのー。ちょっとごめんねー軽音部なんですけど、もし興味があったら――」

「きゃあああぁぁあぁあああぁぁあああぁぁあああぁ!!!」

＞ｉ３６７０２―３０２９＜

それまでの内心の葛藤など全て吹き飛んだ。

迫り上がる恐怖は一瞬で少女の心を塗りつぶし、少女が取った行動は一目散に逃げることだった。

「ちょっ逃げることないじゃん！」

「どうしたのりっちゃーん！？」

「なんか逃げられた！　追うぞ唯！」

「ガッテーン！！」

豚が追いかけてくる。背後のプレッシャーに負けて、ちらりと振り返る。

「って増えてるーーーっ！！？」

増援部隊だろうか。これまたグロテスクな鶏が自分を追いかけてくるではないか。あの勇ましさは雄鳥だろうか。何故かどうでもいいことまで思考がまわる。

「カノーーーン！！　その子引き留めて！」

豚が叫ぶ。さらなる増援かとぞっとした瞬間、

「ＯＫ！！　Ｃｏｍｅ　ｏｎ！！！」

八頭身二足歩行のコアラっぽい何かが少女の正面に両手を広げて

待ち構えていた。

「イヤー！」

少女はふいに目の前に現れた生物を避けることができなかった。勢いのままに両手を突き出して、突っ込む。

「Ｏｕｃｈ！！」

まるで外国人のようなリアクションでそのコアラっぽい何かが転倒する。勢いで少女も転びそうになったが、何とか踏ん張って足を動かした。

必死に逃げる少女は友人を置いてけぼりにしたことも忘れ、何とかそのまま校舎まで逃げ切ることができた。

ローファーを脱ぎ、上履きを持ったまま昇降口まで走ったところで少女は崩れ落ちた。呼吸は乱れ、ハァハァと荒い息を吐く。

どうやら豚と鶏、そしてコアラっぽい何かは追ってこない。

背後から友人の悲鳴が。

「梓のアホーッ」と聞こえた気がしたが、必死だった少女にはどうしようもなかった。

「ごめんね……」

後でジュースでもオゴろうと決める。

汗でＹシャツがべっとりと肌につく。その不快な感覚に冷静になってきた。

「何で私、あんなに逃げたんだろ」

それほどまでにあの着ぐるみがインパクトがあったことは間違い

ないが。

「バカらし……」

それから遅れて少女を追いかけてきた友人は明らかに怒った様子で手に持っていたチラシを少女の顔に貼り付けた。

「だ、大丈夫だった？　何かされなかった？」

「されるか！　ていうか私を置いてくとか意味不明！　着ぐるみはあんなだったけど、普通の人達だったよ」

「ご、ごめん！　ちょっと自分でも魔がさしたというか……ごめんね」

「別にいいよもー気にしてないし。明日ライブだってさ。行ってみれば？　高校ではバンドもやってみたいんでしょ？」

「うん」

友人の言葉に少女は素直に頷く。

少女は――中野梓は、心に決めていたことがあった。高校に入ったら何か音楽の部活に入りたいと。

ジャズは自分のルーツとなる音楽だからジャズ研も魅力なのだが、もう一つの選択肢との間で揺れている。

それが軽音部。バンドをやる部活。

梓は、とりあえず明日のライブを観てみることにした。

★　★

息も絶え絶えになった着ぐるみ一行は音楽準備室まで引き上げてきていた。全員が肩で息をしており、着ぐるみの頭部を外した状態で床に座り込んでいる。

顔から噴き出る滝のような汗のせいで頭に巻いたタオルはびしょびしょ。全員のを絞ったらバケツ一杯になりそうだ。

「つ、つらいばかりであまり受け取ってもらえなかったね」

そう言って水を一気に飲み干した唯の言葉に一同はそろって頷く。

「着ぐるみで走るとか、まじ地獄だー」

「お前たちが追いかけるから逃げたんだろう」

「あ、でもお友達っぽい子にはチラシ渡せたからよかったね」

先ほど、澪は律と唯が急に走り出したと思いきや、女の子を追いかける光景を見て絶句した。その光景は変質者と逃げる少女、にしか見えなかったのだ。

絶叫しながら逃げる女の子の先にはとどめとばかりに一級不審人物にしか見えない夏音が待ち構えていたものだから、夏音がその子に突き飛ばされて腰を打ったとしてもそれは自業自得でしかない。

「いてて……」

今も腰をさすっている夏音は汗まみれでもその美しさが壊れるようなことはなかった。この男に不様という言葉が似合う日は来ない

のだろうかと澪はついでに悔しい気持ちになった。

「でもバイトみたいで楽しかったー」

唯一、涼しげな顔で佇んでいるムギが事も無げに言い放った。汗一つかいていないあたり、他の者にとって彼女の人間としてのスペックの底はますます知られざるものとなった。

「ムギちゃんバイト好きだねー」

「えへへ」

昼休みも残りあとわずかとなったので、急いで制服に着替える。

「これはもう二度と使わないな」

陰干し状態の着ぐるみを眺めて律が言った言葉を否定する者はいなかった。

「とにかく気持ちを切り替えて明日のライブで取り戻すしかない！」

「律……！」

「いい事いうじゃないか！」

夏音と澪は部長による部長らしいその言葉にうっかり感動してしまった。

「あのー……こんな服も作ってみたんだけどー」

そろりと現れた顧問に誰もが（ムギを除く）ブチギレ寸前で何とか拳を収めたという。

「一年生くるかなー」

「インパクトはあったけど……ねえ」

放課後になって部室に集まった一同は、部活見学に訪れるかもしれない新入生を待っていた。歓迎の意を示そうとホワイトボードには「ようこそ軽音部へ！」から始まる多彩な落書きがいつもの三割増しほどで埋め尽くしている。

「それよか……ベースアンプの調子が悪いんだよね」

「ウソっ!?　ギターに続いてまた!?」

ソファに寝そべっていた律が跳ね起きた。

先日、アンプのヒューズが飛んだばかりだ。そちらはすぐに直ったが、ベースアンプはギターアンプに比べて滅多に壊れることはない分、不足の事態への用意が疎かになったりする。

「どうにかなりそうか？」

「んー。見てみないとわかんないや。時間も無いしぱっぱと見ようかね」

夏音は準備室と音楽室をつなぐ部屋に道具を取りに行った。

「マジかよー。明日本番なのにトラブル続きだな」

律の顔に不安が現れる。

「大丈夫だよりっちゃん。もし直らなかったら小さいアンプでやればいいんだし」

「ま、それもそっか」

それ以上考えるのをやめにしたらしい。再び寝そべる律に、のんびり紅茶をすすり始める唯。

「ってダラダラしすぎだー！！」

急に立ち上がった澪が一喝を入れた。ずっと黙ったまま紅茶を飲んでいたのに唐突に大声を上げた澪にビクっとなった唯が激しく咽せる。

「いつ一年生が来てもおかしくないんだからもっとしゃんとしなさい！」

律が面倒くさそうに返す。

「えー来たらするよ」

「第一印象が最悪だったら入ってくれないかもしれないぞ」

腰が重たい幼なじみにさらに興奮した澪が何か言い募ろうとした

時、部室の扉がバンと音を立てて開かれた。

「澪ちゃんの言う通りよ！」

いつもこんなタイミングで現れる我らが顧問だった。

「びっっっくりしたー。一年生かと思ったじゃんまぎらわしい！」

寝そべっていた律も流石に一年生が来たらそんな姿ではいられないと思ったのだろうか。扉が開いた瞬間、さっとソファに座り直していた。

「さっきは私の計算ミスだったと認めるわ。私の目から見ても粒ぞろいの精鋭が揃ってるというのに顔を隠すなんて……今回はあなた達の容姿を活かしていこうと思うの」

真剣な表情で部室の中央に歩み出たさわ子は持ってきた紙袋からある物を取り出した。

「じゃーん！　これで完璧よ！」

自信満々に出されたのはメイド服。それも生半可な作りではなく、細部にわたってデティールが凝っている。この顧問はしょっちゅうお手製の服を軽音部のメンバーに着せたがるという特殊な趣向の持ち主だった。

おそらく自信作を彼女達に着せる機会を虎視眈々と狙っていたのだろう。

「うわ～！　かわい～！」

唯が吸い寄せられるようにメイド服を手に取る。

「確かに凝ってるけど……」

「これ先生が手作りしたんですか？」

「まあねー。久々の大作で腕がなったわ」

「すごーい」

尊敬の眼差しを向けるムギと唯の反応にさわ子は身をよじって喜んだ。

「ああさわ子……褒められて伸びる子」

自分で言っていれば世話はない、と律は思った。喜ぶ二人とは裏腹に律は自分がこういう女の子らしい格好が似合うと思っていなかった。

去年の学校祭の時もそうだったが、場の流れ的に仕方なかった時はあっても、彼女にとって自ら進んで着たいと思うようなものではないのだ。

「そ、そ、そんなの無理だよ！」

しかし、自分以上に拒否するだろう存在がいたことを思い出した。律は獲物を狙う目つきになったさわ子を止めようか迷ったが、放置しておくのが一番面白いだろうとあえて静観の姿勢を取ることにした。

「ふふふふ～澪ちゃん。何を隠そう、これはあなたの為の衣装だと

言っても過言ではないのよ！　メイド服が似合う女の子はいねがー！？」

軽く理性が飛んでいるのだろう。さわ子は顧問という立場もぶっ飛ばして、自分の欲望を叶えようと澪に襲いかかった。

「イヤーーーーーッ！！」

軽音部ではよく聞く澪の悲鳴であるが、今回ばかりは一段と凄まじい。一連の流れの中、ベースアンプのチェックに勤しんでいた夏音はここで初めて顔を上げた。

そして、メイド服を抱えて喜ぶ唯とムギ。メイド服片手に澪に襲いかかるさわ子の姿を確認して迷惑そうな顔をした。

「また何やってんだか」

自分は絶対に着ない、と心に誓って作業を進める。

「これも相当長く使ってるからなー……っと。もしかして～……コーンがまずいことになってるのかも」

問題となっているキャビネットは一発大口径十八インチの物だ。リコーンするとなれば、道具が足りない。

まだ何とも言えないが、リコーンする必要が出てきたならば、どのみち今日中にどうにかなる問題ではない。今日は下校するまでいつ新入生が訪ねてくるか分からないので、ずっと部室にいる必要があるのだ。

幸い、出力は小さいもののベースアンプの代わりはある。

「夏音くん。これ可愛くない！？」

作業中の夏音に唯が遠慮もなく話しかけた。顔を上げた夏音の目の前にメイド服を自分の身体に合わせて立つ唯の姿があった。

「そうだね。いいと思うよ」

忙しい夏音は非常に素っ気ない。

「一年生が来たらこれでおもてなそうかねー。ふふふー」

夏音は常に前向きな唯の性格は嫌いじゃない。ただ、人の邪魔さえしなければ。

「そうだね。おもてなしにはメイド服がぴったり。あの子もこの子もメイドさんにやられてハッピーだろうさ」

「じゃあ私、着替えてくるね！」

そう言って唯はムギと律を引き連れて物置と化した連絡通路に去っていった。

「じゃーん！」

と言って再び夏音の前に現れた三人を見て、夏音は思わず手元のドライバーを落としてしまった。

「Ｈｏｌｙ　ｓｈｉｔ……」

夏音にとって予想外だったのは、今まで自分がメイド属性では全く無いなどと思いこんでいたこと。そして、自分と一緒に部活をやる少女達が実は器量に恵まれていることに気付かされたことだ。

「素晴らしい！」

つい口に出てしまうほど、やられてしまったのだ。

「メイドってこんなに良いものだったんだなあ。ああさらば今までのバカな俺。欺瞞に満ちた俺は今日でおさらば」

「何言ってんだお前？」

しかも難しい言葉知ってんなー、と若干ヒキ気味の律が怪訝そうに夏音を見る。しっかりポーズを取っていた程度にはノリノリだったみたいだが。

「で、澪はどこだ？」

「今頃どこかで死闘を演じてるんじゃない？」

着替えにいったのは律と唯とムギの三人だけで、肝心の澪はさわ子と揉み合う内に部室の外へ出て行ってしまったようだ。

「よーしこれで新入部員獲得に一歩近づいたぞー！」

「おーっ！」

「おぉー」

夏音は何気なくその様子を見ていて何か違和感を覚えた。

「あ、ツッコミ役がいない」

いつもボケが飽和してしまう寸前の軽音部であった。

★　★

「すみませーん」

しばらくしてから、部室の扉から顔を覗かせた者がいた。あまりに誰も来ないのでだらだらムードになりかけていた部室に緊張が走った。

「あ、憂ちゃん！」

顔見知りだったことから肩の力を抜いた律が、嬉しそうに身体を起こす。憂は律をはじめ、軽音部の皆に可愛がられている。

このデキル妹の鑑のような存在なくして唯が軽音部にかけただろう迷惑は想像するのも恐ろしい。

「いらっしゃいませ～」

律に続いて気が抜けたような声で出迎えたのは実妹の訪問に大喜びの唯だ。

「お、お姉ちゃん！？」

そして妹はメイド姿でばっちりめかし込んで目の前に現れた姉にぎょっとして肩を跳ね上がらせた。

「律さんも紬さんまで！？」

軽音部の見学にやって来たのにメイド服姿の人間がいるとは予想だにしていなかっただろう。普通の人間だったら目を疑って、そのままUターンをきめてもおかしくないくらいの有り様だ。

「さー入って入って！　歓迎するよーん！」

戸惑いを隠せない憂に満面の笑顔で応対する律。ムギはすぐにお茶の準備に取りかかっていた。

「ほらこっち～」

唯は妹の手を引っ張って中へ招こうとしたが、そこで後ろに誰かが控えているのに気が付いた。

「あれま。憂の友達も来てくれたんだね！」

「は、はあどうも……」

未だに目を白黒させているのは憂の友人らしい。扉を開けただけで異次元に迷い込んでしまった人のように困惑した様子だ。頭がついていっていないようだが、唯はお構いなしに二人もろとも強引に中へ引っ張っていく。

二人を椅子に座らせると、唯はムギがお茶の準備が終えるまで少し時間がかかるということでニコニコと二人に話しかけた。

「いやー。クリスマス以来さわちゃん先生みんなに服着せるの癖になっちゃったみたいでさー」

「そ、そうなんだあ」

クリスマスと聞いて即座に頭をよぎった光景に「あの先生なら、まあやりかねない」と憂は納得していた。そして、隣にいる友人がもじもじと落ち着かない様子でいることに気付いた。

「あ、えっと。私のお姉ちゃんで、唯です」

とりあえず自分との関係も分からない状態では話が進まないだろうと考えた憂。友人が見学したいというのを聞いて付き添いで来ていただけなので、友人に積極的に関わってもらおうと思った。

「平沢唯です！」

「あ、これが話に出る憂のお姉ちゃんなんだ！」

「お姉ちゃん。こちら、私の友達の純ちゃんだよ」

「鈴木純です」

憂に言われて頭を下げる純を見て、唯はつい顔をほころばせた。

「純ちゃんかあ。可愛いなぁ……」

「は？」

「いや、あのね……あ、ちょっと待ってて。いまお茶持ってくるから」

唯はちらりとムギの方へ視線を向けてお茶の準備が整ったのを確認した。

「これ持ってけばいいんだよね」

「暑いから気をつけてね」

二人分のティーカップの中にはなみなみ赤琥珀色の液体が注がれている。

「うぉあっち！」

少し傾けただけで跳ねた紅茶が指にかかり、思わず悲鳴を上げた。

「大丈夫？」

いつものことなので軽く心配の声をかけただけのムギだったが、家では姉に給仕というものを一切させたことがない憂は一瞬で顔を青くした。

「お、お姉ちゃん！？」

憂はまるで我が子の初めてのお手伝いを見守るような心境で姉が危なっかしくトレーを運ぶのを見守った。

聞いているだけで不安になる茶器のこすれる音。ガタガタと響く音がだんだんと大きくなっているような気がして、終いにはどうなるかが想像できてしまう。

「お、おお……」

同じくして隣の純も固唾を飲んでいた。

「あ、あ、ああ……っ！」

憂の我慢の限界が超えた。

「もーお姉ちゃんは座ってて。あとは私がやるから」

本能の妹スキルが発動してしまったようだ。何故か憂が座っていた場所に座らされた唯は今の立場が自分でもよく分かってないのか「そ、そお？」と困惑気味だった。にへらと笑う唯にくすりと微笑む憂。

これで姉の面目がどうやって保たれているのか、軽音部の中でも平沢姉妹に関する最大の謎だった。

「ゆ、唯オマエ……」

それら一連の流れを眺めていた律は呆れ果てた。まさか、ここまで唯が使えないとは思ってもいなかったのである。

夏音は先ほどからアンプのチェックに余念がないし、澪は消息不明である。このまま唯に任せていたのでは、見学が成り立つはずがないと悟った律はゆっくりと腰を上げた。

「あ、律さん。純ちゃん、この人は律さんっていうの」

憂の紹介にあずかった律は、緊張した表情で自分を見詰める新入生を見下ろした。

「どうもー。部長の田井中律です！」

部長、を強調しつつ反応を待つ。律の予想通り、部長という言葉に大きく反応を示した純に律は大変気をよくした。

部長という肩書きのすばらしさを再確認していると、部室の扉をすごい勢いで開けて入ってきた者がいた。

今日は勢いよく扉を開けるのが流行っているな、などと暢気なことを頭に浮かべた律は訪問者の顔を見て若干顔を引き攣らせた。

「ちょっと律！」

「げ、のどか……」

大股で近づいてくる和の勢いに律は嫌な予感を覚えた。こんな顔をしている彼女は確実に生徒会役員の仕事で来ているのだ。そもそも、生徒会の用事でもないと部室に来ることもないが。

「講堂の仕様申請書また出してないでしょ！？　明日ライブできなくなっちゃうわよ？」

「そ、そうだったー！」

「まったく……何度言えばわかるの？　何故か先生達に文句言われるのは私達なんだからね。特に七海くんなんてーーー」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

ごめんなさいラッシュは恥も外聞もかなぐり捨てるべし。少し前まで後輩の前で格好つけていた律の姿は微塵も残っていなかった。

一方、突然のことで訳が分からないと顔に書いてある純を見かねて憂は新たに紹介すべき人物に注目を促す。

「この人が琴吹紬さん。綺麗でしょー」

「はじめましてー。騒がしくてごめんねー？」

やっとまともな人が現れたかとほっと安堵の息をついた純だった。

「優しそうな人だね」

つい嬉しくなって隣にいる憂に耳打ちする。和と律がぎゃーぎゃーと揉める姿を見て何やら顔を赤らめている気がするが、気にしない。

「そしてあちらにいるのが立花夏音さん！」

部室に二人が訪れても一切言葉を発することのなかった夏音に注目する純。

「あ、あの夏音さーん？」

紹介されたというのにアンプの前に座り込んで作業に没頭していた夏音はようやく自分が呼ばれていることに気が付いた。

立ち上がり、振り返った夏音を見た純は思わず息を呑んだ。

「う、うあうあ……」

その口からは言葉になっていない呻きが漏れてしまっている。
初めて夏音を前にする人はこのような反応をすることがある。西洋人にしか見えないだけでなく、滅多にお目にかかれないような超一級の美貌に尻込みしてしまうのだ。
そして、その実態を知るにつれて免疫ができ、耐性が強くなっていくのが一般的な流れである。

「あ、ごめんね。作業に集中しちゃってて」

「に、日本語しゃべった!?」

おまけにどう見ても日本人には見えないという特徴から、「ただ日本語を喋る」だけで驚かれてしまうことがある。

「じゅ、純ちゃん失礼だよー」

憂は夏音がそういった反応を取られることを好ましく思わないだろうと友人をたしなめた。

「はは！　別にいいよ慣れてるし。軽音部へようこそ二人とも。ここに来たってことは音楽に興味があるんだよね?」

「あ、はいっ！　高校では音楽の部をやろっかなーって思ってまして」

「そうか！　じゃ、今すぐ入ろうか！」

「えぇーっ!?」

平然とした顔で必要なプロセスをいきなり数段階吹っ飛ばされた

夏音に驚愕する純だった。

「夏音くん。それは早いんじゃないかしら」

ムギが注意するように夏音に言った。すぐに出された助け船にほっと胸を撫で下ろす純。

「まずこの子に似合うあだ名をつけましょう？」

「そうか。まずは親しみをこめて呼び合うべきだよね」

「そ、それも違うと……」

敵艦隊が増えただけだった。憂は皆まで言うことができなかった純を不憫に思った。何しろ個性的な人達だとは知っていたものの、こうして複数人を固まって相手するとなると対処しがたいものがある。

ムギと夏音。二人とも片親が外国人のダブル。ムギは日本人寄りの顔立ちをしているが、それでも目鼻立ちはくっきりとしている。おまけに二人とも趣が違うものの、透き通った青い瞳なのだ。

こうして二人並んで立った時の迫力は侮れない。

「あれ、澪はどこ行ったの？」

ムギとの不可解な会話を中断して部屋を見渡した夏音が疑問を口にした。

「あー澪なら拉致られたままだな。それにしても遅いな」

いつの間にか和の叱責をなんとか逃れた律が腕を組んで言った。

少し息が荒く、髪が乱れている。

「あ、あのー。それはあちらの方でしょうか……？」

「ん？」

純がためらいがちに指し示した方には部室の扉から半分だけ顔を覗かせた澪がいた。警戒を露わにこちらを窺う様子は臆病な野生動物にしか見えない。

「最後にあの人が秋山澪さん。とっても恥ずかしがり屋なの」

彼女も例に漏れず、メイド服に身を包んでいるのが分かる。注目を浴びてなお出てこない理由を説明された純はぽかんと澪を見詰める。

「どうしたんだよ澪。そんなとこにいないで早く入ってこいよ？」

律に促されるも、澪はぶんぶんと首を振った。

「いや。絶対に笑うもん」

「笑わないって」

「だってそこにいる奴がにやついてる」

「くぉら夏音！」

口許を緩めていた夏音に責めるような眼差しを向ける律。夏音は「おっと」とおどけたように口許を覆った。

「笑いませんよ。似合ってますし！」

すかさずフォローを入れた憂の言葉に澪の表情が少し明るくなる。

「ほ、ほんと……？」

他意のない純粋な言葉におそるおそる部室へ足を踏み入れる澪。

気恥ずかしそうにはにかむ美少女メイドの姿に純と憂は思わず「可愛いっ！」と叫んだ。

「やっぱり一番似合ってるよねー澪ちゃん」

唯がどこか羨ましげに呟く。

「だろー？　私は常々思ってたんだよ。メイド服は澪のために生まれてきたってね。そう思うだろう二人とも」

何故か誇らしげに言う律に憂と純は曖昧な笑みで応えた。

「そういえばさわ子先生は？」

「私をこんなにして満足したら職員室に帰っていった」

さわ子の名前を出しただけで青ざめる澪。相当、ひどい目に遭ったのだろう。

「さ、て、と！　全員揃ったことだし二人のために演奏しようぜ！」

和は生徒会で忙しいらしく、早々に部室を立ち去った。明日のラ

イブ場所が確保できたところで、お茶にしようというわけにはいかなかった。
せっかく軽音部の見学に来たのに演奏が聴けないのでは見学の意味がない。律の言葉に皆頷くと、それぞれが自分の楽器を取り出す。

「うわーかっこいいかも！」

部室に来て初めて軽音部らしいところを目撃した純が期待に瞳を輝かせる。

「澪、今日のところはこっちのアンプ使ってよ」

夏音はスピーカーを取り外した状態のアンプを示してから、もう一つのアンプをぽんと叩いた。普段使っているものより小型だが、この部屋の広さを考えれば十分使えるものだ。

「みんなも今日はボリューム抑えめでね」

出力に差が出る以上、ベースが出せる音量も限界がある。ドラムは仕方ないが、簡単に音量を調節できるギターとキーボードの二人にその辺りのことを気にかけるよう要求した。
それから夏音も自身のストラトを取り出して機材を迅速にセッティングし始めた。

「んー。澪ちゃんこれストラップが肩に……」

「うん……私も」

メイド服を着込んだ弦楽器の二人は肩の装飾が邪魔なようだ。

「裾がジャマー」

律も長い裾がペダルを踏むのに差し障って苛立たしげに呟く。あまりに煩わしいのか、皆口々に文句を言い始めた。キーボードのムギは特に影響もないようで、その輪の中に入れないことにしゅんとした様子である。

一人だけ普段の制服姿の夏音はぱっぱと用意を終えて音出そうとする。他の者が誰一人としてセッティングが捗っていないのを見て、核心をつく一言を繰り出した。

「邪魔なら脱げば？」

「やっぱりジャージのが動きやすいなー」

晴れやかな表情でバスドラを踏む律。結局、全員がジャージに着替えてしまい途轍もなくダサくなった。

「つーか何で夏音まで着替えてんだよ？」

ちゃっかりジャージに着替えていた夏音は弱々しく言い返した。

「だって一人だけ格好が違ったら仲間外れみたいだから」

「さっきまで一人だけ制服だったじゃん」

「それとこれとは別」

男心もなかなか難しいものである。

今回はマイクのセッティングはしない。「歌は明日のお楽しみってことでここは一つ」と唯が歌うことを拒否したのだ。妹の前だからかもしれないが、往生際が悪い。

他の人間がその案を受け入れたのは、明日のライブで同じ曲を演奏するので唯の言うことも一理あったからである。

全員が視線を上げると、演奏する前の空気になる。少しだけ張り詰めた雰囲気に見学の二人はごくりと息を呑んだ。

「それでは一曲……スクールデイズ」

律が構え、カウント。狙い澄ましたベースのグリッサンドが一足先に前に飛び出た。全ての音が絡み合って速度を増していく迫力に互いの血管が暴れ出そうとする。

しかし、二番に入ってサビが始まる前に事件が起こった。

不安そうな顔の唯が救いを求めるように周りを見渡したかと思えば、見事なまでにコードを間違えたのだ。

その瞬間、律の表情が驚きに満ちて、そのまま混乱してしまったのだ。唯が進行を間違えたことで律はそれにつられてしまった。

「こ、この曲歌がないとわかんなくなるよ～」

唯の悲鳴が加わった演奏はさらなる混乱に陥っていった。

軌道修正しようと澪が律と顔を合わせると、律はベースの音に集中した。その一刹那、目前に迫ったブレイクの存在が頭から消えた律。

計算された空白に入り乱れる不協和音。個々の音がバラバラに響いた時の不様さと言ったら、ない。

既に演奏は崩壊寸前だった。

夏音がリードのフレーズを諦め、音量を上げたままヴォーカルの

メロディラインに切り替えたことで元に戻ったのはいいが、まともな演奏に戻ったのは曲が終わる寸前だった。

「×××××××××××××！！！！！！！！！」

曲が終わった瞬間、夏音がブチギレた。表記できないような言葉（英語）で怒声を上げる夏音にこの世の終わりみたいな表情の一同。普段ならこのまま夏音の叱責が飛び続けるところだが、ふとしたタイミングで冷静さを取り戻した夏音はハッとした表情で固まった。そして、おそるおそる後ろを振り返る。

どん引きした表情と怯えた表情が入り交じったままの二人の見学者の姿があった。

「や、やっちまったー」

この状況の半分ほどは確実に自分のせいであると自覚した夏音は力無い声で呟いた。

その後、気まずい空気が流れる中で「か、かっこよかったです！」と声をかけてくれた二人はできた人間であった。

「こ、これはまだ本気じゃなくて……私達の３％くらいの実力なのだよ！」

と苦し紛れを放った唯だったが、どう考えても負け惜しみにしか聞こえなかった。

何に負けたのかよく分からないまま惨敗した気分で肩を落とした一同は力無く見学の二人を見送った。

そして現在、唯、律、夏音の三人は地べたに崩れ落ちていた。中でも床に土下寝の体勢で突っ伏していた唯が「うぅ～」とうなり声をあげた。

「格好もださければ演奏もぼろぼろ……もう生きていけないよ～」

「生きろー」

演奏を崩した原因である唯が泣きっ面で嘆く言葉にとりあえずテンプレートの返しをした律も相当落ち込んでいた。

彼女はドラマーとして、バッキングの人間がミスした程度で慌てふためいたことが悔しくてたまらないのだ。

「歌が無いとダメって唯……お前が歌う曲なのにそれでどうするんだよ」

「うぅ、ごめんなせー……面目ねえ」

澪の辛辣な言葉に床にもう一度突っ伏す唯。ごつんと額が床に当たる音が虚しく響いた。

「絶対怖がられた……ああ、怖い先輩ってイメージが着いちゃったらどうしよう」

演奏面で失敗はなかった夏音だったが、こちらはこちらで落ち込んでいた。あの時、純と憂の怯えた表情が忘れられないのだ。

「もーいやー。全ていやー。もーずっと俺達だけでよくない？」

「どれだけ投げやりになってるんだよ！　お前がしっかりしないで

どうするんだ！」

基本的に失敗のなかった澪は先ほどから意気消沈している三人を叱咤していた。澪がこのような役回りになることは少ない。普段は誰よりも落ち込みやすい性格なので、まるで立場が逆転していた。

「練習の時はちゃんとできていたんだからきっと大丈夫よ」

気遣うように声をかけるムギ。彼女は皆のためにお茶を淹れ直して机の上にティーカップを並べた。

「とりあえずお茶しよ？」

その一言が魔法をかけたかのようにムクリと身を起こした三人はすたすたと座席に座った。

「ま、なんとかなるっしょ！　かんぱーい！！」

「今日のうちらドンマーイ！」

「明日がんばろー」

各々、表情が一転して明るいものに。

「切り替え早っ！」

置いてけぼりをくらった澪は「まったく……」と少しふてくされながら同じく席に着いた。

明日は本番である。今日の分の失敗は明日取り返せばいい。

軽音部はこの一年の間でずいぶんとポジティブさが増していた。

第二話『ドンマイ』（挿絵あり）（後書き）

誤字脱字、なんかおかしな文章発見したらよろしくお願いします。

そして、感想をいただけたらそれだけでモチベーションにつながりますので、よろしくお願いします。

他の方と違うことじゃなくても良いのです。批判、批評、辛口コメント大歓迎です。

第三話『新歓ライブ！』（挿絵あり）（前書き）

ＰＶ４９１，９１９アクセス　ユニーク３５，７７６人　いきました！　皆さんのおかげですありがとうございます。

ランキングに乗るような作品じゃなく、毎日毎日ちょっとずつ増えていくのが本当に嬉しいです。

お気に入りも一日二件ずつって感じで、本当に嬉死にしそうです。

第三話『新歓ライブ！』（挿絵あり）

そっと朝陽が射し込む室内には幾つもの音と匂いが溢れている。テレビから流れるニュースキャスターの威勢の良い声。コーヒーの匂い。食器が擦れ合ってカチャカチャと立てる音。パタパタと誰かの足音。新聞をめくる音。話し声。

（父さんたち帰ってきたのかな）

夏音はそっと瞼を開いた。白くぼやけた視界には、空気中に舞う埃が窓から射し込む光に透かされている様子が映り込んだ。

頭が半分しか起動していない状態でそれらをぼんやりと眺めていた夏音は、手元にあった枕をぎゅっと引き寄せて顔を埋めた。

眠すぎて起きる気にもなれない。自分が何でこんな場所にいるのか分からないが、昨夜はリビングで寝てしまったのかもしれない。全てがどうでもよく、妥協してそう結論づけた。

そうは言っても、色々とおかしな点があった。

いや、ありすぎた。

一瞬、意識が覚醒しかけた夏音の五感が得た情報はのんびりと集合して一カ所に集まろうとする。眠たがりの主人の脳みそ目がけて、それは衝撃を伴って、断片的な情報が集合する。

「ってええーーーーっ!?　Ｗｈｅｒｅ　ａｍ　Ｉ!!?」

絶叫。

文字通りがばっと飛び起きた夏音は一体ここはどこかと慌てた。自分の周りを見渡すと、そこには夏音の知らない人が二人。

唐突に叫び声をあげた夏音を笑顔で見詰めてくる女性。その柔和な顔つきはどこかで見たような気がするのだ。おや、と夏音が首を

傾げると向こうも同じ角度に首を傾けた。
するとスタートに遅れた記憶がやっと追いついてきた。
昨日は放課後いっぱいまで練習して皆で一緒に帰った。いつもの場所で唯とムギは別の方向へ帰るのでそこで別れるはずだったのだが、その日の帰りにスーパーで買い物をする予定だった夏音はそちらの道を選ぶことにしたのだ。近所のスーパーより、そちらの方が安い。日本に来て、より安く物を買うことの心地よさを覚えた夏音は、日本語の復習ために買って以来ずっと購読している新聞に挟まってくるチラシのチェックにも余念がない。
そこまでは、いい。
ムギと駅で別れてから唯と二人でのろのろと歩いて、スーパーの前で別れようとした時に唯が「私も行く～」と言ってついてきた。特売品を得てほくほく顔でスーパーから出て、今度こそお別れと思った時である。

「あの！　ヴォーカルの特訓に少しばかし付き合ってくれやしませんか！」

と頭を下げてきたのだ、あの唯が。「あ、これお礼ね」と言って買ったばかりの飴を手渡してきたのをつい受け取ってしまった夏音には断る理由がなかった。
かくして夏音は平沢家の敷居をまたぐことになった。
そこまで思い出したとこで夏音はゆっくりと見知らぬ大人の顔を眺める。
特に女性の方。誰かに似ていると思えば、平沢姉妹にそっくりではないか。

「あら起きたの？　おはようー」

笑顔で夏音を見詰めてくる女性は自分がここにいることを特に気

にした様子はない。それどころか親しげな笑顔を向けてくるので、かえって冷静になった夏音はひとまず頭を下げた。

「おはようございます」

「ふふ、寝癖すごいわよ。あなたもご飯食べてくでしょ？」

「はい？」

「ごめんね。外国の子が普段どんなもの食べるかわかんなくってこんなのしかないけど」

そう言ったテーブルの上に並べられたのはご飯と味噌汁、焼き魚に漬け物と豪勢である。

「すごいなー。朝からこんなに食べることってないかも」

起きたばかりの夏音は大抵意識が朦朧としているので、まともに朝食を口にすることは滅多にない。

いらっしゃいな、と言う女性に招かれて言われるままにテーブルに座る夏音。そこで隣に新聞を広げた男性に意識を向けた。

コーヒーを食パンといったシンプルな朝食を前に熱心に記事を読んでいるこの男性はおそらく――。

「ん、ああ君は……。グッモーニン」

夏音に気付いた彼は朗らかな笑みを浮かべて朝の挨拶をしてきた。何故か英語で。

「あ、はい。おはようございます」

「よく眠れたかい？」

「起きた時に前後不覚に陥るくらいには」

「ははははっ。そうかそうか。あ、冷める前に食べちゃいなさい」

ほくほくと湯気が立つご飯を前に、夏音は腹をくくった。

「いただきます」

両手を合わせて言ってから丁寧に魚の骨を取る。すると女性が「行儀いいのねー」と感心したように頷いた。日本のどこでこれをやっても多くの日本人は同じような反応をする。

和食大好きな夏音にとっては箸を使うことも朝飯前だ。

「ところで……」

「はい？」

「あなた、どちら様？」

「説明くらいしておいてよ」

「あはは！　ごめんごめん～すっかり忘れてたよ～」

にへらと悪びれもせずに笑う唯に夏音は苦笑すると共にため息をついた。
現在、夏音は平沢家からの登校という世にも珍しい体験をしている。
しかし、謎に包まれていた唯の両親との対面自体がレアであり、ドタバタしていたが今日は良いことがあるのかもしれない。

「ていうかまったく意識失った記憶がないなあ」

「練習終わってご飯食べて、また練習した後に憂と三人でテレビ観てたら、いつの間にか夏音くん寝ちゃったんだよ」

「起こしてくれればよかったのに」

「すっごく気持ちよさそうに寝てたからなんか悪くて」

起きた時、枕と毛布がかけられていた。実際に泊まるとなったとしても、女の子の部屋に泊まるわけにはいかなかったので、夏音にとってはリビングがちょうどよかった。

「あー。そういえば俺、唯のお父さんとお母さんに会っちゃったんだ！」

仲間内ではおしどり夫婦として未だにラブラブ夫婦だと噂の唯の両親だ。いたって普通の方々だったが、この子にしてこの親あり、といった感じで確実に家族共通の独特の雰囲気を持っていた。
特に唯の母親は天然そのもので、それは平沢家の長女に濃く遺伝したに違いない。

「みんなに自慢しよーっと」

「ええー？　自慢することなんてないのに」

唯の両親は共働きで家を空けることが多いそうだ。だから自然と憂が家事をやることになっており、家庭が成り立っているようなものだ。

家を空ける両親という点で夏音は自分と同じ境遇だと思ったが、何故だかシンパシーは全く感じられなかった。

そして、自分の後ろで仲良く歩く唯と憂の姿を見て何となくその理由を知った。

「すっごい人だねー」

「人でいっぱい……」

「そりゃあ新入生歓迎会だからなー」

口だけでなく手も動かしながら機材のセッティングに勤しむ一同。自分のセッティングが終わったムギがドラムセットの組み立てを手伝いながら緊張する澪に微笑む。

「いつも通りやればいいだけ」

「で、で、で、で、で、も」

「ナイススクラッチ」

どもる澪に夏音がぼそりと呟いた。夏音は軽音部のライブでは初めて上手でギターを弾くことになる。それとは逆に今まで上手にい

た唯はステージの中央に立っていた。
ヴォーカルマイクの前で呆けたように突っ立っている唯。下手に立つ澪はマイクの高さを何度も調整して、そわそわと落ち着かない。

「そういえばさっき百円拾ったんだよーいいでしょ！」

再び口を開いたかと思えば、唯は緊張のきの字も見当たらなかった。

「初めてのヴォーカルだってのに変わらないなー」

呆れたように律が笑う。これはこれで頼もしいので、自然と一緒にいる自分の肩の力も抜けてしまう。
律はフロアタムの上に置いたセットリストを記した紙を再度確認した。

「ふわふわタイム。クマさんＭＣ挟んでのスクールデイズ。カレーのちライス……一貫性のないタイトルだなー」

「澪のセンスが際立ってるね」

こそこそとからかわれていることにも気付かないで澪はそわそわしている。部員の中で緊張した様子なのは彼女だけだ。

「おーい澪。そんなに緊張すんなよ」

「す、するものはしちゃうんだもん！」

「爆メロん時と比べたらどうってことないだろー」

あの人という人で埋め尽くされた客席から放たれる視線の嵐。あれを一度経験してしまえば大抵の人間は耐性がついてしまうだろう。

「うおー。なんだか私わくわくしてきたよ！」

「おらもわくわくすっぞ！」

「あ、それ知ってる～！」

律の声真似にきゃっきゃと笑うムギ。昨日の練習で土壇場のアレンジを加えたいと提案するくらいムギには余裕が見られた。

夏音は春休みが終わってからムギが「秘密兵器があるのー」と嬉しそうに零していたのをふと思い出した。何か新しく機材でも買ったのかと予測していたのだが、これといっていつもと変わらぬ機材のままだ。

アレンジの幅が広がったのは確かだが、何のことを示していたのだろうかと気になったので後で聞こうと心に決めた。

「あなた達、準備はいい？」

舞台袖から現れたさわ子が腕を組んで偉そうに一同に声をかけた。

「さわちゃん先生」

つい先ほどまで衣装がどうのこうのと軽音部と揉めていたさわ子は、最終的に制服でライブするという皆の主張に不満顔だったのだが。

「さっきは色々とあったけど、みんなには一つ言っておくわね」

真剣な口調に思わず耳を傾ける五人。

「制服も意外とイイ！！！！」

イイ、イイ、イー、イー……とリバーブがかかる。講堂内は音が響きやすいので、おそらく幕の向こうの新入生達の間にも響き渡ったことだろう。一瞬静まりかえった後、ざわめきが一段と強くなった。

「早く舞台袖にスッ込んでてください」

そう笑顔で言った律は額に青筋が浮いていた。

『次は軽音楽部によるクラブ紹介と演奏です』

放送部によるアナウンスが終わる。

「あ、出番だ」

そそくさとドラムの前に座った律。ガッツポーズを決めて気合い十分のムギ。がたがた震える澪は平常運転である。

「みんなー」

幕が上がる寸前、夏音は声を潜めつつ言った。

「楽しもう！」

その言葉で笑顔になった彼女達は無言で頷いた。

★　　★

「え、もう決めちゃったの！」

「ごめんね。ジャズ研にすっごい格好良い先輩がいてさ」

教室の前方で交わされたそんな会話は自然と梓の耳に入ってきた。特に気になる単語が出てきたので、そのまま教科書を鞄に仕舞う作業を止めてしまう。

どうやら同じクラスの鈴木純はジャズ研に入部することを決めたらしい。梓としてはジャズ研の中にそこまで惹かれるような人はいなかった。

それに言葉は悪いが、吹奏楽の延長上みたいな人ばかりで、梓が慣れ親しんできたジャズとはニュアンスが違う。あの部活だったら、ジャズに関してはおそらく自分の方が造詣が深い気がする。少なくともカッティングの名手は、と聞かれて十人以上ぱっと出てくるような人はいなさそうだった。

残る選択肢は一つしかなかった。昨日、ジャズ研のミニ演奏つき説明会を終えて拍子抜けしていた梓は軽音部の部室へと自然に足を運んでいた。明日のライブを見てからにしようと思っていた場所だが、もやもやとした心がそこに行くのだと呟いたのだ。

音楽準備室を部室がわりに使っているという軽音部。梓がその部室の前にいくと、中から楽器演奏の音が聞こえてきた。

個々の技術は悪くないように思えたが、演奏がばらばら。はめ込み窓から部室を覗くと、例の鈴木純と平沢憂がいた。
二人とも困ったような顔つきで、苦笑ともおぼつかない笑みを貼り付けていた。

「なんか困ってない？」

梓の頭の上から同じく部室を覗いていた友人の言葉に頷いた。

「うーん。あまり真面目にやってる部活じゃないのかな」

こちらもまた拍子抜け、といった感じでがっくり肩を落とした梓はそのまま部室に入ることなく階段を下りていったのだ。

「じゃーね」

「う、うんまたねー」

二人の話は終わったらしい。どこか寂しげな様子の平沢を不思議に思いながらも梓は教室を出ようとした。

「あ、あの！」

背後から声をかけられ、振り返る。梓は特に今まで話したことのない平沢憂に声をかけられたことに驚いた。

「こ、この後もし暇だったら新入生歓迎会行きませんか？」

「え？」

「うちのお姉ちゃんが軽音部でライブやってるの。よかったら、どうかなって」

なんと、あの軽音部のメンバーの妹だったらしい。梓は昨日、彼女が軽音部の部室にいた理由を察した。

「うん。私もちょうど行こうかなって思ってたんだ」

「憂でいーよ」

「あ、じゃあ私も梓で」

梓は高校に入って初めて新しい友達ができた。平沢憂は前から人当たりが良さそうな子だなと思ってはいたが、まさにその通りだった。相手に緊張を強いるようなことはなく、初めて話すというのにすっかり打ち解けてしまっている。

講堂までの道すがら、梓は軽音部にいるという姉のことを尋ねた。

「憂のお姉ちゃんはパートどこなの？」

「ギターだよ」

「へ～！　ギターなんだ！」

そのことに少し興奮を覚えた梓は、ふと昨日の放課後を思い出した。とちりまくっていたギターが一本あった。

はめ込み窓からは演奏している人が見えなかったので、一体どちらの人だろうかと考えた。

聴いた限りではもう一人のギターはしっかりしていた。かといってそれを憂に訊くわけにもいかない。

どちらにせよ、これから観にいくのだ。自分の目と耳で確かめようと思った。

講堂の前には新入生歓迎会と銘打った看板があった。中からずんずんと演奏の音が漏れている。

「うわー。結構いっぱいいるねー」

扉を開けた憂に続いて梓も中に入る。憂の言うようにこの場に集まっているのが全員新入生ならば、一学年まるごと揃っているのではないかという人の多さだった。

梓は人を観に来たんじゃないやとハッとして耳を演奏に集中させようとしたが、ちょうど曲が終わる瞬間だった。

（あれ、どこかで聴いたことがあるような……）

曲の最後の1フレーズに聞き覚えがある。記憶の底からむくむくと蘇るのは、何故か猛烈な興奮の記憶と痛み。何かを思い出しそうになるのだが、あと一歩のところで引っ込んでしまった。

「うわー。お姉ちゃんヴォーカルなんだー」

隣で感激した様子の憂の言葉に梓はヴォーカルの人を注目した。遠目だが、ギターを構えたその少女はどことなく憂の姉であると分かった。

そこかしこで新入生の子が「かっこいー」とか「すごいねー」と囁き合っている。

「キャー！　秋山さーん！！！」

「こっち向いて立花さーん！」

何だアレは。梓は客席の前方に陣取っている集団からあがる黄色い声に目を白黒させた。全員が法被を着て、うちわやらを振り回して舞台上の人間に喝采を浴びせている。

一昔前のアイドルのおっかけのような。二つの派閥があるのか、異なる法被を着たグループ同士の押し合いに殺気が混じっている気がする。

とにかく熱気がすごい。周りとの温度差が視覚化しているレベルだ。

「次の曲で最後です！　カレーのちライス！！」

「1・2・1・2・3・4！！」

何だその曲名はと突っ込む間もなく曲が始まった。アップテンポの曲、キーボードのフレーズがたまらなく格好良い。ぶりぶりなベースが前に出すぎている気がするが、これは音響の問題のような気がした。

歌詞の意味は全くといって頭に入ってこなかったが、ヴォーカルのふわふわした声は何故か脳みそにがつんと響く。

コーラスワークが秀逸で、リードギターを弾く人はあれだけ忙しなく手が動くのにきっちりとヴォーカルに合わせている。

それにしても、精一杯背伸びをしないとそれらのことを確認できないのは煩わしい。ライブ会場というのは前に行かないと演者が見えないものなのだろうか。自分の身長がうらめしいばかりだった。

おまけにギターソロが始まってしまった。どんなエフェクターを使っているのか確認したい気もする。

（ワウの使い方が格好良いなー！）

「前に行く？」

ぷるぷる震えながらつま先立ちをする梓に耳打ちしてきた憂の気遣いに梓は恥ずかしくなった。

「だ、だいじょうぶ！」

その提案に乗るにはプライドが邪魔をする。

アウトロのキーボードのソロは圧巻であった。オルガンのサウンドが暴れまわるように躍り出ると、他の楽器を押しのけて駆け回った。

梓が驚いたのはソロだというのに、キーボードを弾く少女はぴょんぴょんと跳ねて楽しそうなのだ。普通、あんなソロ・フレーズを奏でる時は格好つけたりするものではないか。

心底、楽しそうに弾くのだ。

梓がぼーっと観ているうちに、いつの間にか曲は終わっていた。

「ありがとうございましたー！」

皆が拍手を送る中、頭を下げた演奏者達の姿は降りてきた幕の向こうに消えた。

「すごかったー！　お姉ちゃん格好よかったなあー」

それから憂は興奮しっぱなしだった。講堂を出て一緒に帰ることになって、その帰り道中ずっと自分の姉を褒めちぎっているのだ。

彼女の姉というのはギターヴォーカルをやっていた人らしい。裏にまわったバッキングは豪快そのもので、曲に勢いをつけていた。

肝心の歌も上手で、確かにあれなら自慢の姉と言ってもいいかもしれないと梓は思った。

「梓ちゃんはどうだった！？」

「えっと……一曲しか聴けなかったけど、すごかった！」

梓の正直な感想だった。あの時の興奮には足りないが、それでも生でバンド演奏する場にいただけでもわくわくしてしまった。

「私、軽音部に入部しようかな」

「ほんと！？　それがいーよ！」

自分のことのように喜ぶ憂に微笑み返すと、梓は早速明日の放課後に部室へ行ってみようと思った。

★　★

「お疲れ様ー！」

カチャリと五つのティーカップが重なる。部室に戻った軽音部一同はライブも終わってやっとひと息ついたところだった。

「ふへー。ステージの上でギターと一緒に歌うのって思ったより疲れるね」

初めて人前でメインヴォーカルを務めた唯はへとへとに疲れ切っていた。今にも椅子から滑り落ちそうで、そんな唯を他の仲間は微

笑ましく見詰めた。

「初めてなのに堂々としてたよ。頑張ったね、唯」

惜しげのない褒め言葉に唯は頬をだらしなく緩めた。

「そうかなー。私、やれたかな？」

「一瞬、澪に助けられてたけどなー」

律がからかうような目を澪に向ける。その視線を受けて澪がむきになって言い返す。

「あれは唯が歌詞忘れたから仕方なかっただろ！」

二曲目の途中で完全に歌詞を頭からすっ飛ばした唯の代わりに咄嗟に歌ったのは澪だった。あの時は夏音もマイクの前から離れていたので、澪がすかさず歌わなかったら事故になっていた。

「でも澪ちゃんもとても上手だったよ。練習してたの？」

称賛の眼差しを向けるムギの言葉に目を逸らす澪。その頬にほんのり朱がさしたのを見て、一同はクスクスと笑いを漏らす。

「な、なによ」

「いやぁー。影で努力した澪しゃんは偉いなーと思って」

直球できた律に今度こそ顔を真っ赤に染めた澪だった。負けず嫌いの彼女はヴォーカルを拒否する一方でもしもの時のことを考えて

いたのだろう。その準備が即実を結ぶとは思ってもいなかっただろうが。

「あそこの英語むずかしいんだよねー。澪ちゃんいなかったら今頃笑ってられなかったよ～」

てへ、と舌を出した唯に、

「お前は少し反省せんかい！」

こつんとそんな唯の頭を小突いた律だった。

「新入生の子は来てくれるかしら？」

「大丈夫！　来るに決まってる！　だって私ら格好よかったもん！」

その自信がどこから沸き上がるのか分からないが、律の言葉は何となく説得力があった。理由はなくても「そうかも」と思わされる力がある。

力強く頷き返した一同は、新たに自分たちと歩む仲間がきっと現れると信じて待つことにした。

「来なーいじゃーん」

あれだけ自信満々だった律は一時間ほど経った時点でやる気を失っていた。

「お前らもほどほどにしとけばー」

そう言って律が向けた視線の先には部室の扉の前に陣取って新入生を待ち構える澪、唯、夏音の三名の姿があった。
少しだけ開かれた扉から外を覗き続けて小一時間ほどが経過した。期待を裏切るかのように見学者の一人も訪れることはなかった。

「おっかしいなあ。一人も来ないなんてありえない」

心底不思議だとばかりに唸る夏音。顎に手をあてて悩む夏音の下には唯がいた。

「せっかくライブ盛り上がったのに～。あ、やっぱり私が失敗したからかなあ？」

「大丈夫。唯以外も失敗してたから」

「そっかー」

何気ない会話の中でそんな二人の背後にいた澪はびくりと反応した。他意は含まれていないだろうが、自分のことを言われた気がしたのだ。
気を取り直して、彼女もこの現状に至る理由を頭の中で探した。

「部員が少ないってのも原因なのかも……」

「むしろ人が少ない方がよくない？　団体戦とかあるわけじゃないんだからさー」

「そうだよ。レギュラー確実だよ！」

人数が増えすぎたらバンドを増やせばいい。どんな人数になろう

と、やっていけるのが軽音部というものだ。
「むぅ～」と三人同時に低い声で唸る。相変わらず視線は外に向けられており、実際階段を上った先に、じっと扉の隙間から覗く三対の瞳と遭遇した者は不幸だ。

「そんなに睨んでたら来る者も来ないんじゃ……？」

至極まっとうな指摘をしたのはムギだ。とっくに飽きてしまった律の前にお茶を置いた彼女は茶菓子が入っている箱を開けて、扉の前の三人に声をかけた。

「お茶入りましたよ～」

すっとその声の元に集まってくる三人にムギはくすりと笑った。お茶という単語には素早く反応するのだ。

「ふぅ……私達の熱いロック魂はいまの子たちには通じなかったんだね……」

「ぶふっ！」

お茶をすすった唯が俯げに呟くと、それを耳にした周りはつい噴き出した。

「わー。唯ちゃんかっこいー」

「そう受け取ってあげるのはムギくらいだよ」

そう言ってハンカチで零したお茶を拭き取る律。他に噴き出してしまった者も同じで、うんうんと頷いた。

誰より唯が言うには無理があるように思われる。

「ひどいなーみんな。私のロッケンローを見くびってるよ」

口を尖らせてぶつぶつと変な声を出す唯にひとしきり笑い終わった夏音は「最高のジョークだ」と笑顔でばっさり斬った。それからポケットに手を入れて何かを取り出そうとした夏音だったが、

「あ、携帯アンプの上だ」

立ち上がり、ギターアンプの上に置いたままの携帯を取りに行く。その時だ。

ゆっくりと扉が開き、その向こうから少女が姿を現したのは。

「あのー」

突然のことに目をぱちくりさせて固まる夏音。

少女は偶然、扉の近くにいた夏音に小さな声で尋ねた。

「入部希望なんですけど」

＞ｉ３６７９３－３０２９＜

第四話『新入部員！』

「入部希望なんですけど」

どれほど扉が開かれるのを待ち焦がれていたことだろうか。それがやっと。おっかなびっくりといった様子で現れたのは人目で新入生とわかる新品の制服に包まれた少女であった。

その少女の第一印象は「小さい」だった。腰くらいまで長く伸ばした髪を二つに縛っているこの髪型はツインテールと呼ばれる。

小学生と言われても違和感がないくらい幼く見える顔立ちは緊張で強張っていて、あどけなさが占めていた。

これは何と言う生き物だろう。夏音は後輩というのは、かくも幼く見えるものだろうかと衝撃に狼狽えていた。ただでさえ幼く見える日本人の中でも、この少女はとびっきり幼く見える。まるでトールキンの小説に出てくるホビットのようだと思った。

じっと見詰める夏音の視線にたじろいだ少女は、堪えかねるように俯いた。その仕草や様子は夏音の胸の直球ど真ん中に突き刺さった。

「愛でたい……」

つい、本音が零れた。

「は？」

少女の表情が一変、怪訝なものになる。

胡乱な目つきになった少女に慌てふためいた夏音は誤魔化すよう

に後ろを振り返り、部室の奥に向かって叫んだ。

「い、いや！　めでたい！　おーいみんな！　めでたいぞー！」

「めでたいのはお前の頭だろー……って！？　その子！？」

まったりとティータイムに没頭していた者たちは、ようやく訪問者の存在に気が付いたようだ。

「あ、どうも」

少女は自分が一斉に注目を浴びていることにおどつきながらも頭を下げた。

「か、か、か……」

感動のあまり言葉が上手く出てこない律は潤んだ瞳で少女の元へと近づいていく。

「か？」

謎の擬音らしきものを口にしながら、近づいてくる先輩の一人に少女はきょとんとした。その無垢な反応を目の当たりにした律は、予め用意していた言葉や態度など諸々を自ら捨て去ってしまった。

「確保～～～～～～っ！！！」

「キャーーッ！」

よりによって咄嗟に選んだ行動が奇声を発しながら抱きつくという変態さながらの所行だとは本人ですら思ってもいなかっただろう。もちろんハッと我にかえった律はすぐさま少女を解放した。

急にその小さな体を圧迫されて咽せる少女の肩にそのまま手を置いて、

「もしかして入部希望!?」

輝く瞳はまっすぐに少女に向けられる。

「けほっ。ハ、ハイいちおー」

勢いに呑まれて目を白黒させる少女。その応えに律はガッツポーズをした。

「うおーっしゃー！　やっと来たよー！　カノーン！」

「律！」

たまたまそばにいた夏音の名を呼んだ律。呼ばれた夏音も気持ちは一緒だった。

「イェー」

何故かしかめ面で低い声を出し、がっしりと腕をぶつける二人。軽音部で普段からたまに勃発するアメリカのストリート仕様のノリである。ちなみに少女は一瞬たりともついていけてない。

「ほら～こっちこっち！　座って！」

夏音と律がふざけている間に唯が少女の手を取って席に引っ張っていく。座席をすっとひく澪、椅子に放り込む唯、手早く新たなティーカップを用意してお茶を注ぎ終えたムギの連携によって少女は一瞬の内にもてなされる態勢となってしまった。

当惑したまま、いつの間にか周りを囲まれた少女は出されたお茶に手を出すことも許されないまま質問責めにあった。

「お名前は何ていうの？」
「あ、中野です」
「ほんとに高校生？」
「え、それはどういう――」
「パートは何やってんの？」
「あ、えっと――」
「好きな食べ物は！？」「中学どこ！？」「ちっちゃいネー」「あだ名つけていい！？」

こんな具合に矢継ぎ早に四方八方から繰り出される質問を捌くこともままならない状態だった。

「落ち着け、お前ら」

そう言ってくれた一人の先輩に、少女は心から感謝した。

お茶を飲んで落ち着いたところで、改めて少女の自己紹介を聞くことになった。

「えっと、一年二組の中野梓と言います」

少女の名は中野梓というらしい。外見とは裏腹に落ち着きのある声でしっかりと答えた。

「パートはギターを少し」
「おっ。ギタリストか！　よかったなー唯」

「よろしくお願いします。唯先輩」

そう言って丁寧にお辞儀した梓だったが、自分の言葉が予想すらしない威力を放ったとは気付かなかった。

「ふぉ～。せ、先輩……唯先輩！　唯先輩だって……」

梓はその「先輩」という響きに陶酔する唯の姿に何が起こったのか分からないといった様子だった。

「おーい帰ってこーい」

その純粋な反応に微苦笑を浮かべる律は絶対に後で自分も呼ばせようと心に誓った。

「そだ。ギター弾けるんだよね？　とりあえず何か弾いてみて」

そう言って自分のレスポールを梓に渡す唯。重そうにそれを受け取った梓はぎこちなくストラップを肩にかける。

「ふ、ふふ……」

その一見初々しい仕草を見て漏らした唯の忍び笑いは全く忍んでいなかった。そんな彼女に物言いたげな他の部員達の視線などに気付かず、唯は不気味な笑いを止めない。

「愛いの～くくっ」

他の者からしてみれば、梓の振る舞いは他人の――それも分かる人には高級だと分かる――ギターに対して慎重な扱いをしているよ

うに見えるのだが、唯にとっては違った見え方がしているらしい。

「あの、私まだ初心者なので下手ですけど」

少し緊張を見せる梓に唯はどーんと胸を叩いた。

「大丈夫！　私が教えてあげるから！」

どこからその自信が湧いてくるのだろうか。そう思った者は少なくなかったが、それよりもできたばかりの後輩にはしゃぐ唯の態度は共感できるものもあった。

「ほーう？　早くも先輩風吹かせてるな？」

茶化すような澪の言葉にも「えへへー」と締まらない笑顔を返した。

「ほんとだよ。いつから人に教えられるくらい上達したのかな」

夏音の場合も同様にひやかすつもりの発言だ。とはいえ、少なくともこの一年である程度の自信を持てるくらいには唯の腕は上達している。まだまだ初心者の域を出ないが、おそらくこの新入生の言う初心者という言葉にすっかり自分が上と思い込んでいるのだろう。

まだその実力の程が明らかになっていないというのに。

「そ、それじゃあ」と言ってギターのネックを握る梓。身体に見合った小さな手にはピックすら持て余されているように見える。

誰もがその様子を微笑ましく見守っていた。きっとその心にはお手並み拝見、といった言葉が浮かんでいるだろう。

そして、どんな演奏が飛び出てきても先輩としての大らかな心で受け止めよう。

そんな心づもりでいたのだが。

梓が持つピックが六本の弦を滑るように弾いた瞬間、鋭くキレのある音が鼓膜を殴りつけてきた。

続いてスティーブ・クロッパー、ナイル・ロジャースなどのカッティングの名手を彷彿させる歯切れの良いカッティングが怒濤のように続いていく。時にパーカッシヴに弦を叩きつけ、また撫でるように優しい音へとダイナミクスをつけている。

時間にして三十秒も弾かなかったと思われる。

梓が弾き終わり、その演奏に拍手を送ったのは夏音のみだった。

彼女は夏音から送られる拍手に照れたように頭を下げたが、他の先輩が揃って口を開いたまま固まっているのに気付いた。

「あ、あの……」

目を丸くしたまま表情一つ動かさない四人に、梓はだんだんと動転していく。

「すすすみません！　やっぱり聞き苦しかったですよね……」

沈黙に耐えられず、つい謝罪してしまう梓に澪は慌ててそれを否定した。

「あー、いや。そういうワケじゃなく！」

予想以上に上手すぎてびっくりした。そんな風に言うつもりだったのだが、隣でぎゅっと強く腕を組んだ唯がとんでもない発言をかましたのだ。

「ま、まだまだね！」

「ええーっ！？」

つい驚きの声があちこちで上がる。本気かこの女、と誰もが唯の顔を見ると、かなり無理して笑顔を作っているのは明らかだった。目が疲れないかというくらいに泳いでいる唯の内心など、直に聞かずとも明白である。

『ヤバイ、どうしよ』

実際、後でその通りの台詞を口にする唯だったが、その堂々としたダメ出しをくらった梓は気を悪くするどころかパァッと表情を輝かせた。

「うわー！　私、先輩のギターもすごいと思いました！　もう一度聴きたいです！」

それは憧れの人を見詰める時の目だ。疑うことを知らない真っ直ぐな瞳に晒された唯は「うっ」と声に出して怯んだ。ついでに二、三歩ほど後ろに退く。

「おい、唯。いつまで見栄はってんだ？」

流石にこれ以上は面子が保たないだろうと判断した律が唯に耳打ちする。どこかで溜め息をつく音が聞こえ、そちらを見ると夏音が肩をすくめていた。

「あ、あの……」

「はい？」

「ライブの時にぎっくり腰になったから……また今度ね」

苦しい言い訳だった。後に退けぬ状況にも関わらず強引に退いてしまう姿はむしろ潔かった。

一瞬、何を言われているか理解できなかったのか梓は「？」マークをまだ頭上に飛ばしていた。この場で唯にとって幸いだったのは、彼女の言葉を梓が理解する前に「もういいから。お前どいてろ」と冷たい言葉とセットで律に放り投げられ、別に注目を移されたことだ。

「そういうのだったら、こいつの方がぴったり。夏音なんか弾いてやれよ」

ぽんと夏音の肩に手を置く律。心得た、と頷いた夏音は梓から唯のレスポールを受け取ると、梓が弾いたようなものとは趣が違うテクニカルなフレーズを叩き出した。

「う、う……ま」

それからしばらくしてギターを弾き終えた時には、若干キメ顔で佇む夏音がいた。

梓は今見た物が信じられないといった表情で目をぱちくりさせる。

「どうだー？　うちのリードギターの実力は！　なんたって――」

「おい律。わかってて言うなよ」

自分のことでもないのに自慢気に言い切った律に澪が心配そうな顔をした。

「あー、そうか。ごめん、このことって今は言わない方がいいんだ

よな」

こそこそと言い合う二人によく分からないといった顔を向ける梓。しかし、彼女はそれどころではなかったようだ。

「せ、先輩すごすぎです……」

口をついて出た賞賛の言葉。心の底から沸き上がる凄いという感情が彼女を埋め尽くしていた。

「っせ、先輩……いま先輩って言われた！」

今まさに褒められた男は思わず口を覆った。ふらふらと膝をつきそうになるのをこらえ、机に手をつき息を整える。

「変態が割れるぞー？　気をつけないと」

マイガーと叫んで悶える夏音に素っ気ない言葉を投げかけた律は、気を取り直して梓に笑顔を向けた。

「あー、とにかく入部してくれるってことでいいんだよね？」

「はい！　新歓ライブのみなさんの演奏を聴いて感動しました！これからよろしくお願いします」

そう言って再び頭を下げる梓。あくまで礼儀正しい態度は好感を得るものであり、軽音部の人間はそんな後輩を眩しそうに見詰め、

「うぅ、眩しすぎて直視できません！」

一方でわめく唯に「こいつはダメだなあ」と呆れた。

頭を上げた梓は何か思い出したのか「あっ」と声を上げるとポケットから白封筒を取り出した。

「これ入部届です」

差し出された封筒には入部届と記されていた。

「うん！　確かに受け取ったから。明日っからよろしくね！」

「はい！　それじゃあ失礼します」

首尾一貫して礼儀正しく、梓は部室を後にしていった。姿が見えなくなっても手を振っていたムギが頬に手をあてて嬉しげに笑う。

「はぁ～。初めての後輩できちゃった～。可愛い～」

今にも蕩けそうな笑顔につられて皆うんうんと頷く。

「良い子そうだったな」

「よかったなー澪。おっかない男子部員とかが来なくて」

「別に私は興味を持ってくれたなら男の子でもいいよ……ガラが悪いのとかはやだけど」

「だーよなー。ま、この学校だったらいないっしょ」

「でも、せっかくだから男の子の後輩もいいかも～」

「あの……ワタクシという男子部員の存在を忘れておりませんか」

初めての後輩に皆、興奮してきゃいきゃい盛り上がっていた。その輪の中から外れた場所で呆然と立っていた存在が怖々と口を開く。

「ヤバイよ……私どうしよう！？」

「練習しとけ」

平沢唯の特訓の日々が明けようとしていた……かはこれからの本人次第である。

★　★

昨日の放課後、梓が帰った後のことだった。

「とりあえずお前に言っておくことはただ一つ！　自重しろ！」

びしっと指を突きつけられたのがしゃくに障ったので、夏音はその指をくいっとひねった。

「ほぇー？」

「いだっ！　暴力ふるいながら唯みたいな声出すな」

「暴力って……内側に曲げただけじゃん」

「オマエ握力強いんだよ」

大袈裟な、と思った夏音だったが続きを促した。

「つまりだな。私らはこの一年でお前の音楽に対してだけ急に悪魔のように厳しくなる姿にも慣れてる。ただ、昨日の今日で入ってきたばかりの後輩ちゃんにはきついものがある！」

「はあ……」

「むしろ、アウトだアウト。いきなりこわーい先輩に怒鳴られたら

すぐに退部しちゃう危険もある」
「な、なんだって!?」
「こわーい先輩いやー。もー無理ありえなーい。今日でやめまーすってなもんだ」

梓の声を真似ているのだろうが、全く似ていない。しかし、夏音にとってそんなロークオリティの声真似に突っ込む余裕すらなかった。

「こ……こわい先輩？」

つい最近のトラウマが蘇る。つい見学に来た後輩の前で普段通りの自分を見せてしまい、どん引きさせしまったのだ。あの時、自分を見詰める瞳の中にあった恐怖の色は今でも忘れることができない。

「ど、どうすれば？」
「だーかーら。自重。じちょー、この日本語わかる？　んー？」
「ジチョー。ジチョ、シマス」

律の完全になめた口もスルー。片言の外国人のような体になった夏音の顔はすっかり青ざめていた。

「いいか夏音。こういうのは最初が肝心だ。少しずーつ、だんだんと調子を上げていった方がいい。そうすれば、お前の本性を知っても耐性がつき始めてるから大丈夫なはずだ」
「そ、そうか。一級の暗殺者は幼少の頃から毒に耐性をつけるために、毎日の食事に少しずつ毒を――――って誰が毒やねんっ！？」
「お前……成長したなあ」

夏音のノリツッコミ。日々、日本を学ぶ夏音であった。珍しい物

を見たなあと目を丸くした律だったが、気を取り直して続けた。

「だから最初は私達が演奏をちょっとくらい失敗してもとやかく言わないように」

「わかったよ……せっかくできた後輩にやめてもらいたくないからね」

半分以上、自分のための言葉だった気がするが、素直に頷いた夏音であった。

確かに夏音は自分でも音楽に対しては厳しく当たる節があることを理解していた。そのことがきっかけで起こった軽音部での諍いも記憶に新しい。

（自重かあ。できるだけ気をつけたいけど、咄嗟の時だったら自信ないなあ）

それでも、やるしかないのだ。怖い先輩と思われないために。自分にとっての初めての存在をこんな所で失うわけにはいかないのである。

（とりあえず冷静にならなきゃ。何かあっても落ち着いて……）

昨日の出来事を思い出していた夏音は改めて気持ちを引き締めて部室の扉に手をかけた。

「これが落ち着いていられますかー！」

扉を開けると、そこは修羅場だった。
部室の中から響いた怒声に驚いて入ると、まだ耳慣れない声の持ち主が怒鳴っていた。何が起こったのか、夏音には全く把握できなかった。
ぽかんとした表情で、ひとまず状況を把握しようとした。
全員総立ちで後輩に怒られている、というこの状況は如何にして起こったのだろうか。そもそも、自分が怒ることを自重しようとした矢先に肝心の後輩が怒っているとは思いもしなかった。
皆、呆然とした顔つきで憤激すさまじく声を張り上げる小さな少女を見詰めている。
昨日入ったばかりである梓が怒っているらしい内容に耳を傾けると、何やら部室でティータイムを決め込むばかりの軽音部の姿勢に憤っているらしい。
「それだけは堪忍して～」
涙ながらに泣訴するのは顧問のさわ子であった。
「何で先生が言うんですかァッ！？」
怒り心頭はなかなか治まらないようだ。むしろ余計に火を点けただけのが顧問とはこれいかに。
「ま、まあとにかく落ち着い――」
「これが落ち着いていられますかーっ！」
再び、同じ台詞で怒鳴る梓。宥めようとする律の言葉にも噛みつく梓。
子猫が必死に毛を逆立てているように見える。

すると、その時。
背後から忍び寄った唯がぎゅっと後ろから抱きすくめて頭をイイコイイコしたのだ。それは幼子の癇癪を諫める母のような包み込み。

「そ、そんなことで治まるはずが」

澪は言いかけた言葉を引っ込めた。
猛牛のごとく怒り猛っていた梓は安らかな表情で怒りを治めていた。
それら一連の流れを見守っていた夏音は一件落着した様子にほっと胸を撫で下ろした。

「取り乱してすいませんでした……」

しゅんと落ち込む梓に誰もが気にしていないと慰めた。

「まあ梓が言うことにも一理あるよ」

場が上手く収まったところで、澪が皆に言い聞かせるように言った。

「私達ももっとやる気出していかないと！　わかりましたね！？」

ぽかんと後ろで突っ立っている教師より教師らしい言葉に一同は「はぁ～い」とやる気なさげに返した。
先が不安になる返事だった。

土日を挟んで三日後。再び、放課後の時間となった。
夏音はいつも通りのティータイムを楽しむ面々を尻目に、ソファにごろんと横になっていた。

「結局、いつもと変わらないじゃん」

それを咎める気はないが。それよりこの現状を目にした梓がまだ噴火しないかが心配であった。

「こんにちはー」

そんなことを考えていた途端、梓がやって来た。やいのやいのと騒いでいた者達は梓の声に明らかに「びくっ」と肩を跳ね上げた。
机の前にやって来て、じとっとした目で見詰められた唯を筆頭とする律とムギは慌てて楽器を取り出した。
夏音は彼女達がいつでも梓が来てもいいように楽器を後ろに控えさせておいたのを知っていた。その小賢しい策が全く意味を成さなかったのを見て、呆れた眼差しを向ける。
しかし、夏音以上に呆れているのは梓だろう。つい先週、言ったばかりなのにこの体たらくである。

「い、今から練習するところだったんだよ！　ほんとだよ！？」

誤魔化すには些か遅すぎたようだが、唯は普段では考えられないほどの迅速な動きでギターを肩に掛けた。

「ふんっ」

大きく鼻を鳴らして腕を振り上げた唯だったが――、

「あぁ～いや～」

音色だけでなく、本人ごとへろへろと床に崩れ落ちた。

「やっぱケーキ食べないと力が出ないよ～」

言い訳にしてもひどい、と梓は思っただろう。それでも夏音はその言葉が概ねその通りであることを知っていた。

ケーキ一つでギターの腕が上下するなど普通はありえないのだが。

一口、ムギが差し出したケーキを口に入れた唯はシュタッと立ち上がると猛然と弦をかき鳴らした。

技術だけではない、何か底からわき出る力がこもった迫力に満ちた演奏に梓は驚愕を隠せない。

「う、うまーいっ！」

全力で先輩の威厳を見せつけた唯は、にやりと微笑んだ。

「梓ちゃんも食べてみなよ。美味しいよ～」

部室でケーキを食べることを否定する梓に、ケーキを薦める。

それは悪魔の囁きだった。

「はい、あーん」

フォークに突き刺したケーキを梓の口許に近づける唯。たじろぐ梓の視線は目の前のケーキに釘付けであった。

「あ、でも……」

理性が邪魔をするのか、なかなか口を開かない。そんな梓にもう一押しとケーキを近づける唯だった。

「ほれ」

「……あむ」

仮にも先輩の差し出す物である。観念したのか、梓はケーキを口に入れる。

「お、おいしい」

「ん～？　なんだって～？」

ふと零れた言葉を聞き逃さなかった律がニヤニヤ笑いで梓をからかう。思わず素直な感想を口に出してしまった梓はぱっと顔を赤くして苦し紛れを吐いた。

「お、惜しいって言ったんです！」

「ふふ～ん」

結局、梓も甘い物が大好きな女の子だったと言うことだ。

これもまた、夏音が関わることなく一件落着した。

「な、何でもかんでも否定するのはよくないと思いまして！」

「へぇ～」

梓なりにこの超短期間で思い直すところもあったらしく、それらしい理由を説明したところでニヤニヤと聞く先輩組には全てお見通

しだった。
バツが悪そうな顔をする梓だったが、既に誰もそのことを気にしている者はいなかった。

「ねえ。梓ちゃんはいつからギター始めたの？」

頬杖をつく唯が気になっていたらしい質問を投げかけた。以前、その腕前を皆の前で披露していたことから梓の実力は全員の知るところである。
あのテクニックは一朝一夕で身につくものではなく、長年堅実にギターを続けていた証拠である。

「えっと。小四くらいからです。親がジャズバンドをやっていたのでその影響で」
「へぇー」
「全然初心者じゃないじゃん！」

夏音はその会話に思わずドキッとした。
ジャズをよく知っている人間ならば、自分を知っている確率がぐんと高くなるのだ。ずっと隠すつもりもないが、自分の素性を話すタイミングを決めかねていたところであった。
なし崩し的にバレるのは避けたい。どうせなら面白いタイミングで、と決めていた。

「あ、唯先輩がギター始めたきっかけって何ですか？」
「えっ」

思わぬ角度から責められた唯はぎょっとしてケーキを取りこぼした。皆、一様にはっとなって唯の顔を凝視する。何故ならこの場で知らない者はいないのだ。

唯が軽い音楽と書いて軽音部だから小難しいことはやらないだろうと思い込んで入部してきたということを。さらにはカスタネットが得意だったから入部したなどとは先輩のプライドが絶賛芽生え中の唯には口が裂けても言えないだろう。

「あ、えっと……あ、そうそう！　とにかく新入部員が入ってよかった！」

「なんか誤魔化した！？」

会話のねじ曲げ方には定評がある唯にしては強引な手段だった。方法を選んでいる余裕すらなかったのだろう。

「あ、そういえば」

切り替えが早いらしい梓はずっと黙ったままの夏音の方を真っ直ぐ見詰めてきた。

「そういえば、まだきちんとお名前うかがってなかったですよね？」

「え、そうだったの！？」

夏音は驚きに声を張り上げた唯に「つ、ついうっかりだぜ」と挙動不審になった。

夏音がミュージシャンとして活動する時の名前はカノン・マクレーン。いわば芸名のようなものだが、実際に夏音のフルネームの「Ｋａｎｏｎ・Ｍ・Ｔａｃｈｉｂａｎａ」のファミリーネームを省いただけだったりする。

読み方が同じという時点で気付かれる可能性はぐんと上がる。

「立花……と言いやす。よろしく」

「あ、下の名前は……」

当然の質問を返してくる梓に夏音はどうしたものかと慌ただしく視線を宙に漂わせていた。

「夏の音って書いて夏音って言うんだよ。良い名前だよね！」

夏音の代わりにあっさり答えてしまったのは唯だった。

「こ、こら唯！」

「へ？」

こら呼ばわりされる理由が見当たらなかった唯はきょとんとする。

「夏音先輩、ですか。すみませんもう何日も経ってるのに」

「そ、そうだね。いや、別に気にしてないよ」

梓が特にこれといって引っ掛かった様子がなくて安心した夏音だったが、

「あの、すいません。失礼ですけど、どこかで会ったことってありませんか？」

束の間の平穏だったようだ。じっと夏音の顔を覗き込む梓は何かを思い出すように首をひねっている。

「いやー？　会ったことないと思うよ？」

上擦った声はどうしようもなく動揺している証拠だったが、梓は諦めた様子はない。

「絶対にどこかで見た覚えが……」
「お、おいおい梓ー。それじゃ一昔前のナンパだぞー？　古風だなー」
意外なことにフォローを入れてきたのは律だった。夏音の意志を汲み取った彼女はからかうように声をかけてくれた。
「そ、そんなつもりじゃ！　あ、違いますからね夏音先輩！？」
そう言って顔の前でぶんぶんと手を振った梓を見た夏音は、何とか誤魔化せたことに胸を撫で下ろすと、功労者へとありったけの感謝の念を送った。
「あ、そうそう！　私、梓ちゃんにプレゼントもってきたんだった！」
唐突に話題を変えたさわ子がごそごそと懐を探る様子に梓は嬉しそうに顔をゆるめる。プレゼント、と聞いて悪い気がする者はいないだろう。ましてや部活動の顧問が入部のお祝いをくれることなど珍しい。
「ぱんぱかぱーん！」
百％のドヤ顔のさわ子が差し出した物を見た瞬間、梓の顔が引き攣る。
「こ、これなんですか？」
「何って……ネコ耳だけど？」
何を当然のことを、と言わんばかりにきょとんとするさわ子だっ

た。

「それは分かるんですけど、これをどうすれば？」

皆目見当が付かないといった梓であったが、瞬時に背後にまわったさわ子に心臓の鼓動が跳ね上がる。

「ひっ！？」

「ふっふっふっふ」

耳の近くで響く低い笑い声に戦々恐々として、助けを求める視線を彷徨わせたのだが、

「あ、大丈夫だよ。儀式みたいなもんだから」

あっけらかんと律に言い放たれ、愕然とした。

「何の儀式ですかーっ！？」

思わず叫んだ梓は肩に置かれたさわ子の手を振り払って逃げる。さわ子は過敏にネコ耳に拒否反応を示す梓にやれやれと肩をすくめた。

「もう恥ずかしがり屋さんねえ」

「あ、当たり前ですっ！　先輩方だって恥ずかしいですよね！？」

再び救いを求めて振り返った梓は、そこで改めて自分が未だかつて味わったことのない未知との遭遇を果たしているのだと理解した。

わいわいとネコ耳を交互につけ合って楽しんでいる上級生の姿は、日本にいながら異民族と接しているような錯覚すら覚える。

カルチャーショックに膝をつきそうになった梓は震える身体をぎ

ゅっと抱き締めて後ずさった。

「あ、あはは……私がおかしいの？」

あまりのショックにおかしいのは自分ではないのかと絶対的アウェーにおける逃避反応が出ている。するとネコ耳でひとしきり楽しんだ唯が梓に渦中のネコ耳を差し出した。

「はい。次、梓ちゃんの番だよ？」

迷いのない声だった。それが当たり前で、それ以外ないと言っているように聞こえるのだ。

梓は長い時間を使って逡巡したが、自分はこれからどう抗ってもこのネコ耳をつける運命にあるのだなと諦めた。

ゆっくりとソレを頭に持って行き、それでも躊躇う心を押さえつけてそっと頭に着地させた。

何の感情の所以かは分からないが、呻き声が止まらない。頭に載せた瞬間の予想外のフィット感に驚きもあったが、それ以上に羞恥心がかつてないぐらいに燃えさかって頬を赤くしている気がした。

「おぉーっ！　すごく似合ってるよ！」

「私の目に狂いはなかったわね」

瞳を爛々と輝かせて見詰めてくる先輩と顧問に梓はもじもじと俯く。気分は公開羞恥プレイである。

「軽音部へようこそ！」

律、ムギ、唯、さわ子の四人の口から初めて歓迎の言葉が飛び出た。

「ここで！？」

しかし、これも高校生になったことへの洗礼だろうかと心に浮かべた梓はいきなり自分に抱きついてきた唯にぎょっとした。

「うふ～っ！　梓ちゃん可愛い～っ！」

すりすりと身を寄せてくる唯に困惑のあまり動けなくなった梓だった。

「ねえ！　にゃー、って言ってみて！　にゃー！」

無茶ぶりを平然と口にしてくる律。先輩の言うことなので、梓は恥ずかしげにそれに応じると、

「あはーーーんっ！」

身悶える四人の姿に、この部活動に居てよいのかと真剣に検討を始めた自分がどこかにいたという。

「あだ名は“あずにゃん”で決定だね！」

「えぇー……？」

しかも、とんとん拍子にあだ名が決定されてしまった。この怒濤の急展開に梓の頭はとっくに活動を停止していた。

その後もあれよこれよと着せ替え人形にされていく梓を蚊帳の外から見守っていた夏音は心の底から初めてできた後輩を不憫に思っ

た。

澪はいつものごとく音楽雑誌を黙読しており、こういう騒ぎに参加することは少ない。場合によっては夏音も他の部員達と共にはしゃぐのだが、今回は事が事である。

我が身可愛ければ、コスプレに近づくことなかれ。夏音は郷に入りては郷に従えの精神で「なむ！」と合掌した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5169s/

けいおん！　放課後の仲間たち

2011年12月13日06時45分発行